Eudelcia -竜の棲む島-

カヘキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｕｄｅｌｃｉａ　－竜の棲む島－

【Ｎコード】
Ｎ７０８６Ｊ

【作者名】
カヘキ

【あらすじ】
ユーデルシア大陸。そこには人や魔物といったもののほかに、大陸の始まりより竜の存在があった。
”人ならざるもの”を狩ることを生業とする者、狩人。その中でも異彩を放つ二人組、ルイスとリディ。ずば抜けた力を持つ二人は、しかしそれぞれ秘密を秘めたまま共に旅を歩んでいく。そしてその旅の中で、二人は己に課せられた運命に出会い、向き合っていくこととなる。二人の運命、それは大陸のすべてを巻き込んで行くものだった。

基本シリアス、たまに恋愛の冒険奇譚です。

第一話　二人の狩人　（1）

第一話　二人の狩人（ハンター）　（1）

――どこかで何かが軋む音が、した。

険しい山肌、その崖の上で、それ（・・）はふっと顔をあげた。銀色の眼がすうと彼方を見据え、何かを捉えようとするかのように鋭く細められる。

「……。やはり、か」

痩躯が、誰しもめまいを覚えずにはいられない高度の場所で揺らぎなく立ち上がる。そのまま周囲を吹きすさぶ風にしばらく浴びて、次の瞬間、それは前触れなくふっと消え去った。

ここは、ユーデルシア大陸――。十三の国家に分かれ、お互い偶に戦を繰り返す、特に珍しくもない社会形態。しかし一つだけ、他大陸とは違う点がある。

この大陸には“竜”が棲んでいる。他大陸にはその姿の片鱗すらも見ることは叶わないのに、この大陸では、海に、川に、山に、森に、谷に、平野に……至る所に彼らは生き、しかし殊更に他の生き物を脅かすこともなく、強大な力を持つ長命な存在として君臨している。その数は多くはないが、決して絶えることなく、大陸が紡ぐ歴史と共に在る。

そしてその中の一つの国、イェーツの更に小さな村では、今ある異変に人々が悩まされていた。

――今より五十年程前のこと。この辺りは三日三晩、天変地異に晒されたという。曰く、近辺の縄張りを争って、この村の近くに聳える高い山の頂上で、当時の主であった竜と、外より飛来した竜とが、激しい争いを繰り広げたらしい。三日と三晩、空は荒れ、稲妻は閃き、地は震えた。村人たちが恐れ慄く中、四日目の朝、それらは唐突に止んだ。そしてそれまでの主は倒れ、新しく現れた竜が、山の頂に収まるようになったのだ――

「んで、それが最近暴れてるんだって」

どん、と音を立てて目の前に置かれた皿に、その卓に付いていた若者は目線を上げもせず、手を伸ばした。すでに彼の脇には空の皿が幾枚も積み上げられており、新たな皿を持ってきた少女は、うえ

ぇ、と顔を顰める。

「っとによく食べるね。気持ち悪くならないの？」

「お前が全然食わないんだよ。もっと食え」

少女の目線もなんのその、ひょいと若者が肉を少女の器に投げてよこし、少女は、「絶対ルイスがおかしい」とぼやいて、渋々肉を口に運んだ。

「だけど、それホントに竜かよ？　悪竜になって暴れる奴なんて、滅多にいないぜ？」

数分後、常人の三倍位の量を綺麗に平らげた若者は、その長い黒髪を掻き上げて言った。

質素な旅人の服を着てはいるが、黒曜石を溶かしこんだような艶のある黒い髪と、海の色よりも深い蒼色の瞳、大理石のように滑らかで白い肌に、すっと鼻梁の通った彫りの深い顔立ちは、百人中九十九人の女性がため息をつきそうな美貌を構成している。筋肉もしっかりとついた、成長をほぼ終えた体躯は細身ではあるが均整がとれ、黒い髪と相まって、しなやかな黒豹を思わせる。

現に、宿の給仕の少女がちらちらと熱い視線を送っているが、本人は気付いているものの相手にする気はさらさらない。そして、無造作ながらどこか気品を漂わせる仕草に、女達は一斉にぼっと顔を赤らめた。

対して、百人中一人の赤い短髪の少女は、気持ち悪げに皿の山を見やると、さぁ、と肩を竦めた。彼の容姿に微塵の興味も持っていないのが丸分かりである。

しかし、ぞんざいな仕草とは裏腹に、こちらも街を歩けば誰もが振り返りそうな美少女だ。炎のような鮮やかな赤い髪は繊細で、大きめの金の瞳は強い意志の光を宿している。雪のような白い肌は、けれど病弱さなど微塵も感じさせない不思議な強さを帯びていて、細く鍛えられた躰は、女性のまろやかさには欠けるものの、健康的なすらりとした細さを有している。

青年と同じように、食堂の若い男達の視線を一様に集めているが、こちらはさっぱり気づいていない。

「私も殆ど聞いたことない。もしかしたら蛇の化身か何かかもね」
「んなことねえよ、嬢ちゃん！ありゃあ確かに竜だぜ！」

少女の軽口に、同じ宿の食堂内にいた、村人らしき男が目を剥いた。通りすがりの旅人はうってつけの聞き役だ、勢い込んで言い募った。

「夜になると、世にも恐ろしい咆哮が聞こえんだ。偶に炎も見えるし、地震を起こしたりもしてる」
「ふうん」
「へー」

熱心に語る男とは裏腹に、青年も少女も不真面目に応える。信じていないのが丸わかりのその様子に、むっとした男が、二人に向かって言った。

「あんたら、旅人だろ？この村に一晩泊まってみろや。そうすりゃわかる」

少女は気のない様子で空の皿を弄んでいたが、眼を上げて向かいの青年を見た。

「だって。どうする？」
「そうだな…」
青年は数秒考えた後、軽く頷いた。
「別に急ぐ旅じゃないしな。泊ってみるか」
「了解」
そんなあっさりとした流れで、昼食のみのつもりで寄った小さな村に、二人は泊まることを決定したのである。

―――――――――――

「で、どう思う、実際」
夜、お互い風呂からあがった後、少女は髪をタオルで乾かしながら、青年の部屋にやってきていた。
青年は剣の手入れをしながら、少女の問いにあっさりと答える。
「咆哮ってのを聞いてみねえとな。万が一悪竜だったら…初めての竜狩りだな」
に、と笑みを零す青年に、緊張感ないな、とぼやいて、かく言う

本人も全く気負う様子もなく窓の外を見遣る。

「善竜殺したらまずいけど、話を聞く限りそれはないね。――その以前に、竜じゃない可能性も大分あるけど」

乾いたかな、と呟きを挟みながら少女がタオルを取った時、こんこんと部屋の戸が叩かれた。ちらと少女が青年を見たのを受け、青年は何食わぬ顔で、手入れをしていた剣の柄を手元に寄せて、頷いた。

少女はそれを確認し、声を上げる。

「どうぞ。鍵は開いてますよ」

ガチャ、と戸を開けたのは、十歳程の少年だった。そのいかにも恐る恐るの体に苦笑して、青年が剣を離す。少女は少年ににこりと笑いかけた。

「私達に何か用？君」

少年は少女をまじまじと見た。その顔には驚きが浮かんでいる。どうやら女性には珍しい短髪と、相反した綺麗な顔立ちに面食らったらしい。しかしその人懐っこい笑みに誘われて、おずおずと彼は部屋に入ってきた。

ドアを閉め、うろうろと視線を迷わせながら、数秒の躊躇いがちな沈黙の後に、彼は意を決したらしく、二人に問いかけた。

「あの…お兄さん達、狩人（ハンター）、だよね？」

その問いに二人は一瞬だけ顔を見合わせ、それから頷いた。途端

少年はパッと目を輝かせ、勢い込んで訊ねてくる。

「じゃあ、山の上の竜を倒しに行くの！？」

「悪いものだったらね」

少女の答えは半ばどうでもいいものだったらしい。少年は紅潮した頬に、子供らしい高い声で言った。

「オレ、リック！オレ将来、狩人になりたいんだ！あ、ねえ――どうやったらなれるの！？」

期待の籠った声に、二人は暫し沈黙して、おもむろに青年が訊ねた。

「お前――リック。お前は狩人（ハンター）をどういう仕事だと思ってる？」

「え？えーと、オレ達を殺そうとする、悪いモノをやっつけて、たくさんお金を貰う！」

「大体合ってるな」

青年は頷いて、喋りだした。その蒼い瞳は柔らかくリックを見つめている。弟かなんかに対する目っぽいな、という感想を少女は抱いた。

「俺達狩人の獲物は、概して“人ならざるもの”って言う」

「人、ならざるもの…？」

「ああ。自我を失って悪行しか働かなくなった悪竜や、動物の変異体である魔物、悪霊が実体化した悪魔などの事だ」

「ふ、ふーん…？」

目をくるくるさせるリックに少女が苦笑して、

「君達が怖がる化物の事だよ」

と添えてやる。呑み込めたらしいリックに、青年が続けた。

「生き物には、皆核と呼ばれる生命エネルギーの源がある。この核ってのは凄くてな、魔法の威力を高めるのにも使えるし、死にかけた人間を治癒することも、身体能力を飛躍的に向上させることも、魔法が使えない人間に魔法を行使させることも出来る」

「つまり、持ってると凄い強くなるってこと？うちの村のお医者様も一個持ってるよ。重い怪我でも、パッと治せるんだ」

リックの余りといえば余りな簡略化に、けれど少女はまあそうかな、と頷いた。

「核にもランクがあって、レベルによって出来ることは限られてくるけど。それだけの事が出来るから当然、核は高額で取引される。その医者がどのレベルのを持ってるかは知らないけど、貴重なものに違いはない」

「俺達はその核を売る側の人間さ。人ならざるものと渡り合い殺し合い、核を奪い、金に換え、命に代える」

淡々とした語調に反して、実はシビアな内容だ。少女が微かに眉を寄せる一方、リックは元気に言った。

「知ってる！核って売ったら、すごいお金になるんでしょ！？」

「まあな」

リックの目がきらきらと輝く。が、対照的に青年は表情を消した。

「だけどな、リック。この“人ならざるもの”ってのは、人間より何倍も強いんだ。“人ならざるもの”の中でも一番弱いって言われてる魔物でさえ、鋭い爪や牙、毒を持ってるし、中には火や氷を吐くものもいる。悪魔は魔術だって使うし、竜に至っちゃ未知数だ。…本来、人が敵う相手じゃないんだ」

「君のお父さんやお母さんは、化物をどう見てる？手に負えない、怖い、とんでもない相手だって見てるだろ？」

青年、少女に相次いで畳み掛けられ、リックはうーんと考え込んだ。

確かに村の近くに魔物が出ると、大人達は皆怯えて家に閉じ籠り、リック達子供を絶対外に出そうとしない。リック自身、漠然と怖いという気持ちはいつも持っている。

「…でも、お姉さん達はそれを狩れるんでしょ？」

狩人（ハンター）＝強いという図式が頭の中で出来上がっているので、リックは訊き返した。

だって、狩人が核を手に入れて売るから、世の中には核があるのだ。人間より遥に強い相手だというのなら、なぜ狩人は核を奪えるのだろう？

「ああ。だけどな、狩人ってのは常に死と隣り合わせなんだぜ」

青年の言葉に、弾かれたようにリックは彼を見た。蒼い眼は何処までも真剣だった。

「リック、お前みたいに狩人に憧れる奴は多い。が、実際皆儲かってるかっていうと、そうでもない。大抵、核一個獲るのに命からがらになって、武器防具に旅費に治療費とかかると、あっという間に金は消えちまう。お前みたいに、富を得ることを目標にして狩人になった結果、しのぎを削るような毎日を送った末に、五年ぐらい経つと、辞めちまう奴が殆どだ」

リックは息を呑む。狩人は皆強くて恰好よくて、お金に困らないのだと思っていた。が、今の話は、想像とあまりに違う。

「大体狩人は、五人くらいでパーティを組んでる。治療系の魔術士に、攻撃系の魔術士二人、肉弾戦系二人ってのがスタンダードだな。人数に多少の増減はあるが、それくらいが人ならざるものに対して安全に戦える数だ。核は確かに高価だ。だけど、一つを五人で分けるには、到底足りないんだよ――それこそ、ランクの高いものでない限りな」

淡々と紡ぐ青年に、リックは疑問を抱く。狩人が普通五人集ってようやく戦えるというのなら、二人の彼らは一体――？

「ま、そういう訳で志願者は多くても、実際定着するのは少ない。そこまで強いのは、そうそう居ないからな」

「じゃ、じゃあお兄さん達は強いの？それに、何で二人だけなの？他に仲間はいないの？」

「うん、強いよ。私とルイスは一人三役ぐらいは出来るからね」

二人はニヤッと笑って適当に答えただけで、碌な答えはリックに返してやらなかった。リックはこの時詳しく問い質さなかった事を後になって死ぬ程後悔するのだが、それはまた別の話。

「俺達の事は心配するな。なんなら核獲ってきたら、お前の村にやってもいいぜ？俺達金には困ってないし」
「それが本当にいて、善竜じゃ無かったらね」

――と、その時だった。まるで図ったかのように、夜の闇を切り裂いて、腹の底に響くような咆哮が聞こえてきたのは。

――グオオオオオオ……

「……」
「あれは、竜だな。しかも悪竜。善竜だったらあんな理性のない真似はしないな。――竜ってのは本来、凄まじく頭のいい生物だ。無暗に人を怯えさせることはしない」

窓の外を目を細めて青年が見、呟いた。

間違いない。焔も微かにだが、目に映った。
これは、…初めての、大物だ。

ちろ、と唇を舐めて青年は少年を振り向く。彼女も肩を竦めて彼を見返す。

「さて。リディ、こいつは本物だぜ」
「そうみたいだね」

二人の顔に恐れはない。そこには、一種の昂揚があった。

「それじゃ、さっさと寝るか。リック、固まってないで帰れ。うまくいったら竜の核、お前らにやるよ。あ、誰が獲ったかは組合に届けろよ。スコアになるからな」

「え、ちょ、待って…オ、オレも連れてって！！」

半ば茫然としていたリックは、思わず叫んでいた。興奮が湧き上がる。この目で、憧れの狩人の戦いを見られるかもしれない――！

が、少女が厳しい声で首を振った。

「駄目。危険だよ、君を危険に晒す訳にはいかない。相手は竜なんだから」

「邪魔しないよ！物陰に隠れてるから！ねえ、お願い！！」

「駄目だったら――」

「いいんじゃないか？」

言い募るリックに助け船を出したのは青年だった。困惑と期待と、対照的な顔を向けてくる二人に、青年は肩をすぼめる。

「俺達が気を配れば何とかなるだろ。――が、リック、約束しろ。俺達の指示には、必ず従え。動くなと言ったら絶対に動くな。逃げろと言ったら全力で俺達を置いて逃げろ。それが出来ないのなら連れていく事は出来ない。――守るか？」

それまでの気安げな口調が吹き飛ばされるような、厳格で威圧感さえ漂う空気に、リックはごくりと唾を呑む。俄かに緊張感が沸く。二人の真剣な顔つきに、どれだけ危険なのかも、何となくわかった気がする。それでも――リックは頷いた。

「わかった。絶対守る」

「――よし、わかった。リディ、いいな？」

「君、もう決めてるだろ…」

少女は呆れたように息を吐いて、リックに言った。

「明日の朝、日の出前に村の入り口においで。来なかったら置いてくからね」

「うん！オレ、早起きは得意だから大丈夫！」

「そう。じゃ、帰れ。ちゃんと寝ろよ」

「うん！――あ、待って」

帰りかけて、リックは二人を振り向いた。眉を上げる彼らに、くすりと笑う。

「二人の名前、教えて」

青年と少女は顔を見合わせて噴き出した。今更感は否めないが――確かに、名乗っていなかった。

「悪かった。――俺はルイス・キリグ。よろしくな」

「私はリディ・レリア。よろしく」

第一話　二人の狩人　（1）（後書き）

初めまして。カヘキと申します。小説を投稿するのはこれが初めてです。
のんびりと更新していきたいと思います。駄文ですが、お暇つぶしにでも読んでくださいませ。

第一話　二人の狩人（2）

第一話　二人の狩人（ハンター）（2）

翌早朝、リックが村の入り口に行くと、そこには既にルイスとリディの姿があった。まだ日の昇らない朝靄に包まれる薄暗い村で、リディの遠目にも鮮やかな赤い髪はいい目印になっていた。

「おはよう…二人とも、そのかっこうでだいじょうぶなの？」

ルイスもリディも、昨日見た服装と殆ど変っていない。見た所簡易な旅装だ。もしかしたら普段着といってもいいくらいかもしれない。

鎧でも付けるのかと思ってたけど、と言うと、ルイスはひょいと外套を開いて見せた。

「俺はつけてるぜ。ほら、鎖帷子」

旅装の下から現れた、一目で使いこまれていると解るそれに、リックは感嘆の声を上げる。次いでリディを見て、しかし真っ赤になって俯いた。

「…ん？どうかした？」

その様を何とはなしに見ていたリディは首を傾げ、ルイスがくく

っと笑いを漏らす。

「リック、こいつを女と考えるな。常識が壊れるぜ」
「ホント失礼な奴だね。一応生物学上は女だよ」
「一応とか、自分で言うか、お前…」
「……」

笑いが止まらないルイスを憮然と眺めてから放置し、リディはリックを向いた。

「私は鎧を着けないんだ。着けたら重いからね、こういうことが出来なくなる」

言うなり、リディは軽くリックから離れると、彼らの方へ走ってくる。そしてタンっと地面に手を付き、二回、三回と前転して、四回目で空に舞い上がり、くるくると身を丸めて三回程宙返りをした。

「わあ…っ」

リックの目が凄い、と輝いたその前で。
高度を下げたリディの膝はルイスの背に激突した。勿論、わざと。

「ぐげぇっ!?」
「ええっ!?」

蛙が潰れたような声をあげてルイスがかなり遠くまで転がり、リックが仰天して顎を落とす。

（ひ、ひどい）

彼が度肝を抜かれている内に、遠くでがばっと起き上ったルイスが叫んだ。

「何しやがんだ、リディ！」
「いつまでも笑ってるからだ、バカ。大体君はそれ位じゃ死なないから平気だよ」
「なんだその自信！人間転んでも当りどころが悪いと死ぬんだぞ！？」
「あー当たれ。そんで少しはその頭の形変えてこい。見える世界が大分まともになると思うよ」
「はあああああっ！？」

顔に擦り傷をこさえたルイスは、会話をしながらずんずんと二人の方に戻ってき、リディはため息を吐くとリックの手を引いて歩きだした。

「大体あれ位避けなよ。トロすぎ」
「…不意打ちしといてよく言うぜお前…」
「ね、ねえ！二人はどうしてペアを組んだの！？」

喧嘩になってはまずいとリックは強引に割り込む。二人はきょとんとして、同時にああ…と目を細めた。あれだけ言い合いをしていても、喧嘩をする気はサラサラないらしく、リックはほっとする。

――が、裏を返せばいつもこんな掛け合いをしているのかこの人達。リックのイメージの男女関係とは、５４０度程違うようだった。…しかしそんな二人がなぜ組んでいるのか。それには真実、興味があった。

リディが顎に手をあて、探るように首を巡らす。

「どうしてって…不可抗力だよね、あれ」
「だな。まあ納得したのは俺達だけど」
それだけに、がくっとリックは二人の答えに滑った。
「ふ、ふかこうりょくって…」
「ほんとは私もルイスもそれぞれ一人旅する予定だったんだけど。マスターが二人で組めって言うから」
「まあ今となっちゃ巡り合わせに感謝してるけどなぁ」
遠くを見るような眼で二人は語る。だがさっぱり要領を得ない話の流れに、リックは目を白黒させた。
「まあ、今思うと一人は確かに結構辛いよね。怪我したときとかヤバいし」
リディの言葉にルイスは頷いて、マスターのはさすがは年の功って思うぜ、と付け加えた。
「ええと…要するに、元々組むつもりはなかったけど、マスターって人に言われて組んだってこと？」
「そ。まあ、一人じゃ何かと辛いことも、二人でなら攻撃も魔術も治療も十分に出来るし、何より私を女扱いしないから気を使う必要ないし。私は気に入ってるよ、この相方」
「おー、嬉しいこと言ってくれるな。俺も基本女嫌いなんだけど、こいつ規格外だし。まあこれからもよろしくって奴だな」
明るく笑いあう二人の姿に、リックも自然と笑っていた。その三人の横合いから、柔らかな光が差し込む。

「…朝だ」

薄い白い光に目を細めるルイスの傍ら、ぴくっとリディが何かに反応した。

「そういえば、もうすぐ頂上…」

リックの呟きと、ほぼ同時。

咆哮と同時に、赤い炎が前方の木々をなぎ払って三人に襲いかかってきた。

「わあああああっ！？」

リックが悲鳴を上げる横で、鋭くルイスが叫んだ。

「――リディ！」

「もうやってるよ」

す、と黒い指抜きの長手袋に包まれた白い手が差し出される。

ふわ、と風が三人を包んで、次の瞬間押し寄せていた炎の波を三人の周りから押しのけた。

「ウェルエイシア、ありがとう」

炎が消えさるとリディが呟き、同時にふっと三人を包んでいた風の膜が消失する。ルイスの背にしがみついてギュッと目を瞑っていたリックは、恐る恐る目を開けて、絶句した。

後ろに延びていた森が、二股に分かれて焼け野原になっている。彼らの背後にあった木々達はそれまでと変わらず立っているが、左右の木々は炭化し、燻って煙を上げている。ぞっと背筋が泡立つ感覚に、リックは立ち竦んだ。

「…お出ましか」

ルイスが腰の長い剣を抜いて、炎で木々がなぎ倒され、開けた前方を睨む。

「リック、下がってて。いい、約束覚えてるよね？　ここから絶対に動くな。黙って見てて」

リディは周囲の生き残った木の横にリックを引っ張っていき、リックの周りに足で線を描いて、手をかざして何かを囁いた。途端、先程と同じようにふわりと半透明の風の膜がリックを包みこんだので、びっくりして彼は左右を見回す。

「風の結界を張った。この円から絶対に出ないで。出ない限りは安全だから。でも出たら死ぬ。私達も、そこまでは多分手を回せない」

その時、ざあ、と強い風が吹き抜けて、前方の視界が開けた先に、黒い小山のようなものが現れる。

細長い頸の先に鋭い牙をむく、蜥蜴に角が生えたような形状の頭部。大きくも堅固な体の背からは、蝙蝠の翼を数倍にしたような、膜の張った翼が生えている。

――竜、だ。

「安心して。必ず倒してきてやるから。――待ってて」

硬直するリックににっと笑ってみせて、リディは背部の腰に差していた二振りのサーベルを抜き放つと、くるりと背を向けてルイスに並んだ。

「リディ！！ルイス！！」

リックの絶叫に一瞬だけ二人は振り返り、それから呼吸を合わせて走り出した。

――――――――――――――――――――

優に青年達の身長の四倍はあろうかという黒い巨体の、赤い眼がぎょろりとこちらを向く。危険を察して、咄嗟に二人はばらばらの方向に逃げた。

ゴウッ！と音を立てて、その中間を炎が吹きすぎる。

「流石に…竜を見るのも相手にするのも初めてだっ！　こんな辺境でお目にかかるとは、なっ！」

ルイスが叫んで、素早く魔術を編んだ。

「斬り裂け、アイシィ！」

その声に応えて、彼の周囲に数本の氷の刃が生じる。間髪いれず竜に向かって飛び出したそれは、竜の鱗を数か所にわたって切り裂いた。

赤い血を各所から噴き出させて竜は吠え、怒りの目でルイスを見る。口腔から炎が吐き出され、ルイスは風魔術で結界を張って後退した。

なおもルイスに迫ろうとするその背を、小柄な影が駆け登る。銀色の光が閃いて、竜の後ろ首から血飛沫があがった。

――グオオオッ！

「かったっ…」

竜の怒り狂う咆哮を背に浴びながら、リディがルイスの脇に飛び降りる。本当は二人としては、今ので止めの筈だったのだが、鱗が硬すぎてとても斬れない。

「流石竜と言うべきかな。私の力じゃ斬れない。君でも鱗面じゃきついかも」

冷静にリディは言った。

「腹側は鱗が弱い。隙を突いて心臓を刺そうと思えばできないこともないかもしれないけど…」

「今は無理だろうな。アレじゃ」

視線の先には牙をむいて威嚇する竜。棘の生えた尾は太く、鞭のようにしなって地面を打ち、恐ろしく光る鉤爪がしきりに地面を掻

いている。

「竜相手じゃ私の十八番の炎は役立たずだしね。どうする？」
「遊撃しかないだろうな。俺とお前だけじゃ。もっと人数がいれば、正攻法でなんとかなるんだが」

撹乱して混乱させなければ急所への攻撃が出来ない。こういう時が、人数が少ないパーティの厄介な点である。

「人数集めてくれば良かったかな」
「そんなことも言ってられない…ぜっ！」

襲ってきた鉤爪を跳躍して避ける。二人共に風魔術を使って距離を取ろうとした、が、不意に竜が翼をはためかせた。巨大な質量が、空に浮かぶ。それによって生じた乱気流に、体勢が崩される。

「うわっ！」
「――っ、ぐっ！」

墜落する衝撃を風でぎりぎりで緩和したルイスは、同様に少し離れた場所に着地していたリディを確認し――愕然とした。

「リディ！！」
「――大丈夫」

リディの左肩からぼたぼたと血が滴っている。体勢を崩した際、あの棘付きの尾を避けきれずに食らったのだ。舞い上がった竜を見上げ、ルイスは唇を噛む。

「…飛ばれると、厄介だね」

同様に空を見上げて、リディが呟いた。

空には剣は届かないし、距離があるほど魔術の威力も弱まる。

目を細めた彼女は、ルイスを振り向いた。元々白い顔が、より一層白くなっている。それもそうだ。気丈に装っているが、あの傷はかなり深い。立っていられるのが不思議なくらいだ。

「この怪我じゃ、私は援護に回るしかない。隙を作るから、そこで心臓を刺して」

「…わかった」

ルイスは唇を噛んだまま頷いた。怪我が心配だが、このままでは治療も出来ない。一刻も早く竜を倒すことが先決だ。

「だけど、どうする？　あんなとこにいられちゃ、隙も何もないだろ」

「墜とすよ。空から」

リディがす、と目を眇めて、怪我をしていない方の手を空に差し上げる。

すると、晴れていたはずの空が俄かに曇った。――雲の間に、電撃が走る。竜が唸り声をあげて空を睨んだ。

リディが目を見開き、叫ぶ。

「撃ち墜とせ、サンディルナ！！」

リディが指を振りおろす、それに応えるように幾本もの雷撃が、竜に向かって落雷した。

圧倒的な光量と轟音が轟く。

――ギャアアアアアッ！

すさまじい悲鳴とともに、翼に穴を開け、表皮のあちこちを焦げ付かせた竜が、バタバタともがきながら墜ちてくる。ルイスは咄嗟にリディを抱き上げ、横に跳んだ。

ズズンッと地が揺れる。地面に墜ちて暴れる竜の尾が届かない場所まで下がって、ルイスはリディを降ろした。短く礼を言ってリディは少しよろめき、なんとか踏みとどまる。きつく肩を抑えている指の間からは、とめどなく赤い血が流れている。――長い時間はかけられない。

今竜は苦痛に悶え、こちらから注意を反らしている。ならば、強力な魔術を放つ時間もあるとルイスは踏んだ。

「――アイシィ」

ルイスの低いつぶやきに、水の精霊が答えてくるくると回り始める。先程の小手先調べとは比べ物にならない程緻密に練り上げられた魔力が、宙を奔る。その時になってようやく竜は我に返ったが、逃れる隙をルイスは与えなかった。

「――貫け！」

断固とした命令によって生まれた氷の刃は、恐ろしい勢いで竜に飛来し、その硬い鱗を貫いた。

雷に翼を破られた衝撃から立ち直りきってはいなかった竜は、体の至るところを氷に串刺しにされ、その痛みに絶叫する。

「悪いな。――今、楽にしてやる」

ルイスは風の力を借りて跳躍すると、一気に竜の胸まで迫る。
竜の腹側は背中側と比べて鱗が薄く、なんとか人間の力でも斬ることが出来そうだ。

心臓を正確に狙ったルイスの刃に、しかし悪足掻きのように竜の鉤爪が襲いかかった。

「ちっ…」

空中では体勢を変えられない。ルイスは避けきれないと判断すると、少し身を丸くして最小限の被害に抑えようとした。
しかしその鉤爪は、ルイスに届く寸前で弾かれる。

「な…、リディ！？」

ふらつきながらもリディが、動かせる右腕でもって、渾身の力で鉤爪を弾き飛ばしたのだ。白い肌を更に青ざめさせながら、リディは怒鳴った。

「…はやく、止めを刺せ！」

ルイスの意識は一瞬でリディから竜に戻った。再度風を固めて足場を作り、更に跳躍する。図ったように、リディの風が竜を仰け反らせた。

「――いっけえええええ！！」

気合いと共に、ルイスの剣が垂直に竜の胸に突き立つ。

一瞬の硬直の後、竜は今までで一番凄まじい咆哮を上げてのたうちまわった。

突き刺すと同時に剣を抜き、素早く着地してリディを抱き上げ、ルイスは竜から遥か後方に飛びのいた。

――グアアアアアア…

断末魔の声を残し、竜が崩れていく。“人ならざるもの”達は、こうして姿を塵に変えて消えていくのだ。

風に吹き飛ばされてその塵すらも失せた後、ようやく二人は安堵の息を吐きだした。

そして、それまで竜がいた所に、置き忘れられたように転がっていた丸い球体を見つけ、リディを抱いたまま近寄ったルイスが感嘆の声を上げる。

「――あ。紫だ紫」

「嘘。初めて見た！」

ルイスの胸を押して、目を輝かせたリディが地面に降りようとする。が、ルイスは、彼女を腕から降ろしはしたが彼女から手は離さず、無事な右肩を押して地面に横たえさせた。その僅かな衝撃にさえ、リディは顔を歪める。

「っつ…」

「ったく、そんな体で無理するな。ホラ、目閉じてろ」

呆れ、怒ったような顔のルイスにリディは何か言いたそうにし、けれど沈黙して大人しく目を閉じた。

ルイスが拾い上げた紫色の核から温かい光があふれ、リディの肩を包みこむ。リディの表情が目に見えて和らいでいき、顔色が良くなっていくのを見、ルイスはぽつりと言った。

「さっき。ありがとな」

リディは薄く眼を開いて軽く微笑むと、「気にしないで」と言って眠りに落ちていった。

四、五分で肩の治療は終わった。元々ルイスの治癒魔術だけでに治せた怪我だが、核によるスピードの底上げで、僅かな時間で痕も形も残さず綺麗に傷が消えた。

緩やかに目を閉じて胸を上下させるリディの顔を暫し見つめ、やがて溜息を吐いて彼女を抱き起そうと手を伸ばした時――

「ルイス――――！！」

甲高く響いた子供の大声に、ルイスはばっと振り向き、肩を落とした。そんなことだろうとは思ったが――。

「…リックお前、結界は――」

「音が止んだから出てきた！って、リディどうしたの！？けがしたの！？」

「あー…」

怪我は負っていないものの、ルイスだってそれなりの疲労がたまっている。一から説明するのも面倒なので、ひょいとリディを抱き上げると、すたすたと歩き出した。

「あっちょっと！？ねえルイスってば――」

「怪我はもう治した。心配ない」
「治した!?ってルイス、治療術も使えるの!?それって――」
「あー、もうお前黙れ…」
「やだ!ねえってば――」
「こっちは疲れてんだよ!察しろ!」

ぎゃあぎゃあと喚きながら山を下りていく三人。そのあとには、近隣を脅かす存在がいなくなったことを喜ぶかのように、生き残った木々の間から明るい日差しが差し込んでいた――。

――――――――――――――――

「もう行っちゃうの?」

翌朝。リディもルイスもすっかり回復して、出発する前に村の入り口に来ていた。

あの後、血まみれのルイスとリディを見て、宿屋の主であるリックの母親は悲鳴を上げ、次いでリックの無茶に目を吊り上げて怒った。そしてひとしきりリックを怒鳴りつけてがみがみ叱ると、唖然と見守っていたルイスには、息子を守り、脅威を取り除いた礼を丁寧に述べ、温かい食事と二人の介抱を提供してくれた。お陰でリディはもちろん、少なからず疲れていたルイスも、こうして完全に回復することが出来たのだった。

そして今、別れの朝である。

悲しそうに言ったリックに、苦笑してリディが頷く。

「もう竜も倒したからね。次の獲物を狩りに行くよ」

そう、二人は狩人はなのだ。各地を歩き回り、人に害をなす“人ならざるもの”を狩る旅人。この村にしても、たまたま寄っただけの異郷であるのだ。

「そんな顔すんなよ。生きてればまた会えることもあるさ」

俯いたリックの頭をわしわしと撫で、ルイスは綺麗な顔で笑うと、彼の手に袋を落とした。

「それ、やるよ。殺られた家畜とか、木の補修に使え」

リックは首をかしげて袋の口を開け――危うく倒れるとこだった。

袋の中に入っていたのは、昨日ルイスとリディが狩った竜の核だった。

「ちょ、ルイス!?こんなの受け取れ…」

「言ったろ、俺達は金に困ってないから。この近くだと…そうだな、リグリンの狩人協会にでも持ってけ。ああ、一緒に俺達の身分証明も入ってるから、忘れずに一緒に渡してくれよ。前にも言ったけど、スコアになるから」

ルイスは気さくに笑って、引いていた馬に飛び乗った。リディもそれに倣(なら)う。

「じゃあな、元気にしてろよ」
「お母さんを大事にしなよ」

駆け出していくその背に、リックは母を一度見てから、叫んだ。
リックの母は微笑んで息子と、そして去っていく二人の若者を見守る。

「ありがとう!!またね、ルイス、リディ――今度はオレが、会いに行くから!!」

息を吸い込み、あらん限りの大声で二人の背に叫ぶ。

「オレは、絶対に二人みたいな狩人になる!!」

朝の陽ざしに消えていく二人は、確かに手を挙げた、とリックは思った。

彼らの旅の始まりと共に、大陸は、変わり始める。

否、定められた運命に沿って、動き始める。

その渦中となる二人の若者は――まだ何も知らない。

己の役目を――原初に与えられた運命（さだめ）を彼らが知るのは、まだずっと先のことである。

第一話　二人の狩人　（2）（後書き）

とりあえず第一話終了です。
魔術とかそういう詳しい話は、おいおい作中で説明していくことになるかと。

第一話　後日談

第一話　二人の狩人（ハンター）　後日談

「うわー、でっかいな…」

イェーツ第２の都市、イスダルハリア。リックはその活気と威容に、半ば呆然と立ち尽くした。

辺境の小さな村で生まれ育ってきた彼には、想像もし得ない人の多さだ。綺麗に整えられた白い石畳の両脇には露店が並び、見たこともないような不可思議な品もたくさんある。

イェーツはその地理上、大陸の交通の要衝だ。大陸のほぼ中央に位置する為に、商人達はイェーツを通って各地に向かう。同じく中央部を占める大国アルフィーノほどではないが、商業国家として栄えている。

その第二の都市なのだから、大陸中の商品が取り揃えられていると言っても過言ではない。リックは年に一度の村の特産品を売る機会に、特別に連れてきて貰っていた。

「えーと…狩人協会は…」

一緒に来た村人と別れてから茫然と立ち尽くしていたリックは、気を取り直して歩き出した。キョロキョロと辺りに視線を巡らしていると、通りの一角に、一際人で賑わう建物を見つけた。看板に、

『狩人（ハンター）協会』と書いてある。

これか、と納得してリックはそこに足を向けた。

「こ、こんにちは…」

何だかよく解らない内にリックは列に並んでいて、暫くするとカウンターらしきものの前に来ていた。そこに座る男に恐る恐る声をかけると、男は怪訝そうに眉を上げた。

「あ？坊主、こんなとこになんの用だ？」

確かに、ここにはリックのような子供は他にいない。皆大抵屈強な体つきをした戦士のような人間や、魔術士達――当然、狩人ばかりだ。

「まさか狩人になりてぇ、とかじゃねぇよな？」

揶揄まじりの声に、周りからも笑い声が上がる。萎縮しそうな心を叱咤して、リックは懐から袋を取り出した。そこから更に紙を取り出してから、袋だけを渡す。

男は眉をひそめて、中を覗き込み――次の瞬間驚愕の叫び声を上げて仰け反った。

「レ、レベル６０の核っ！？」

ざわっ、と周りがどよめいた。一気に喧騒が包む中、リックは必死で声を張り上げた。

「ル、ルイス・キリグと、リディ・レリアの代理で来ました。換金してください」

「ルイス・キリグとリディ・レリアぁっ！？」

リックの後ろにいた剣士らしき男から、驚愕が上がる。喧騒は騒音と化し、誰が何を言っているのかもさっぱり聞き取れない。

（な、何でそんな驚くのかなぁ…？）

良く言えば純粋、悪く言えば無知なリックが首を傾げていると、カウンターの男がリックを覗き込んだ。

「おい坊主。これは、何の核だ？」

「イゴリア山の山頂にいた、竜の核」

その後周りから聞こえたのは、最早悲鳴だった。カウンターの男は絶句、後ろの剣士は呻き声を上げた。

「そんなに…凄いの？」

狩人でなく、また田舎者で子供のリックには相場など解らない。だが周りの様子から、段々あの二人は実は凄いひとたちだったんじゃないかと思い始める。

カウンターの主は、暫し沈黙し、それから据わった目でリックを

見据えた。

「いいか、坊主。核にランクがあるのは知ってるか？」
「あ、うん。ルイスが言ってた。高い低いがあるって」

「……。核のランクってのはな、レベル1からレベル１００まであって大まかに色で分けられてる。
レベル０は茶、レベル１０は白、２０は黄、３０は橙、４０は赤、５０は紫、６０は青、７０は緑。で、８０は黒、９０は銀、１００は金…と言われてる。核の色は、レベルが上がる程、次のランクの色が混じる。つまり、…例えばレベル１９だったら、限りなく黄色に近い白だな」
「へぇ…。じゃあ、言われてるって？色がわかってないの？」
「レベル７０以降は殆ど見た奴いないんだよ。レベル９０以降に至っちゃ、こりゃ大昔の書物にちらっと載ってるしかないっていう、最早伝説だ。多分最高位の竜かなんかなんだろうな」
「竜にも位階があるの？」
「あぁ。大体生きてる年月が長い程高い。竜ってのは、年を経る毎に巨大になり、炎の温度は高くなり、鱗が硬くなって強靭になっていくのさ。最高位は、これまた見た奴はいねぇが、人より遥か卓越した知性と知識、ダイアモンド並の鱗を持ってる、と伝えられてる」

リックはへぇと驚きと共に頷くばかりだった。新しい知識が面白い。考えてみれば、ルイス達が、屠った竜は自我を失っていたと言っていた。自我を失う程度の竜の位階は、大して高くないのだろう。

そう言うと、男は感心したように言った。

「坊主、頭良いな。魔術士向きか？」
「おいマスター、続き話してやれ」

後ろから声が飛ぶ。いつの間にか静まっていた周囲は、皆カウンターの男とリックの話を聞いていたらしい。

「あぁ。じゃ訊くが坊主。これ、何色だ?」

男が、リックの持ってきた核を示した。

「ちょっと緑っぽい…青」

「当たり。じゃ、これはレベル幾つに値するか、覚えてるか?」

「えと…ランクが高くなると色が混じるんだったよね…青は、６０で、緑は、７０だから…６４くらい?」

「上出来だ、坊主。魔力高かったら魔術士になれる頭の出来だな」

「よく解んないけど、ありがと。で、凄いの?その核」

男は核を取り上げて、ため息をついた。

「坊主、核はな、例えレベル１０でも重宝される。怪我の治療だって簡単だからだ。市場に出てくるのは精々がレベル３０までだが、それ位あれば大怪我の治療もできる。…レベル４０すら、なかなかお目にかかれないんだぜ?つぅか出たら王族とか神殿に持ってかれることが殆どだな。…そこを、レベル６０と来た」

リックの額にうっすら冷や汗が浮かんだ。…なんだか、嫌な予感がする。

「レベル５０以上ともなると魔物や悪魔じゃ限られてくるから、大抵は竜だ。恐らくは幼竜か下位竜だろう…別に大陸を見渡せば、そこまで珍しい話じゃあない。だがな、問題はこれを狩ったのが、二人ってことだ」

男の声が低くなる。周りからも頷きが返される。

「例え幼竜でも、狩るにゃ相当の人数と力が必要だ。通常二パーティ…十人程度でチームを組んで、竜には向かう。それを…」

ぷるぷると男が震えた。周りからもざわめきが上がる。

「二人で狩りやがっただとぉ!?んだそりゃ、人間か!?」

「つか本当にそいつらだけで殺ったのかよ?」

後ろからの疑念の声に、リックは声を荒げた。

「ホントだよ!目の前で見たんだから!…そうだ、これ!」

手に持ったまま忘れ去っていた紙を、リックはばんとカウンターに突き出す。別れ際に二人が身分証明だと言って、くれたあの紙だ。

「こりゃ、魔力押印か…」

紙の上ので銀色で踊る文字に目を走らせ、男が呟いた。待ってろ、と言うと、カウンターの下から取り出した銀の板を素早くなぞると、紙と核とを掲げた。

と、一瞬それらが金色に光り、銀の板は金色に変わっていた。

「…こりゃ、間違いねぇ。この核を狩ったのは、ルイス・キリグとリディ・レリアだ」

周りから呻きとも感嘆ともつかぬ声が上がる。

「…ったく、噂にたがわねー人外っぷりだな…」
「その板、どうなってるの？」
がしがしと頭を掻く男に、リックは興味津々で訊ねた。
「よくわからん。が、個人の魔力波長を協会側はこの銀板に打ち込める。その為に協会に、狩人は全員波長を登録してんだ。で、核は狩った相手の波長を覚えてるから、それと、あと本人の波長が一致すれば、無事認定。証明完了ってわけだ」
「しっかしなぁ、なんつかやっぱトップハンターってすげぇなぁ」
リックの横で、槍を背負った男が首を振った。その中に聞き捨てならない言葉を聞きつけて、リックは勢いよく振り向く。
「トップハンターって！？」
男は面食らったようにリックを見、ややあって懐から小さな手帳を取り出して、リックに広げて見せる。
「坊主、知らなかったのか？ルイス・キリグとリディ・レリアのコンビ、『自由時間（フリータイム）』は登録して二ヶ月なのにトップハンター…狩人の中でもトップクラスを稼ぐ奴らの仲間入りしてやがる、とんでもねぇ新人だぜ？」
ここに名前乗ってる奴らがトップクラスだ、と言う、男の指が示す先――紙面いっぱいにずらりと名前と稼いだらしい額が乗っていて――そこには確かにルイスとリディの名前があったのだった。
「えええええぇぇぅえっ！？」

響き渡った絶叫は通行人によると、通りの先まで響いていったらしい。

「だが…通常幼竜や下位竜の核は４０から５０なんだがな…」

リックの絶叫に伴う騒ぎのせいで、続いて呟かれた男の囁きは誰も耳にすることはなかった。

そして男もまた、日々の流れに直に忘れてしまうが――それは確かに、大陸の『変化』を示すものだったのである。

しかしその変容に、気付く者は、ここにはない。

ちなみに余談だが、リディとルイスがリックに渡した竜の核は神殿が買っていき、一般人が人生を五回繰り返したって手に入らない額がついた。リックはその金で家畜や被害にあった建物、木々の補修にあたったが、それでもなお余りある金に、リックの村の村人全員で使い道に頭を悩ませる羽目になった。

こうして狩人デビューして二カ月の新星、ルイス・キリグとリディ・レリアの名は、さらなる畏怖と呆れをもって、仲間の狩人内に浸透していったのである。

第一話　後日談（後書き）

ちょっと核についての説明を入れてみました。
要は魔物とか悪魔とか竜とかを倒すと、核が手に入るんですが、その核にもレベルがあるんですという話です。

第二話　陰謀の宴　（1）

第二話　陰謀の宴　（1）

大陸西部沿岸に位置する国、ビグナリオンの中部に位置する城下町、アイル。ビグナリオン国内で首都の次に活気溢れるこの街は、いつにもまして騒がしかった。――というのも。

『さあさあ、大食い選手権もいよいよ大詰め！！並み居る猛者達もそろそろ手が止まってくる頃！！優勝するのは誰だ――！？』

街の一角に設置されたステージと、その上のテーブル。テーブルの上には山と肉が積まれている。テーブルの前には幾人もの男達がずらりと並んでいて、彼らはいちように必死の形相で肉を口に詰め込んで行っている。

その醜悪ともいえる光景のうちの一か所を見つめ、赤い髪の少女――リディ・レリアはげんなりとため息を吐いた。

「理解できない…」

なぜあんな量の肉が、あの、男としては細めの体に次々と吸い込まれていくのか。周りの見るからに大食漢といった連中はともかく、質量保存法則的にどう考えてもおかしい。しかも周りの大食漢連中がだんだんと苦しそうになってペースが落ちていく中で、どうして

なおも平然と食べ続けているのか。

「気持ち悪…」

リディは半ば化け物を見るような目で、チームパートナーであり、現在進行形でステージ上で肉を底なしに食べ続けている青年、ルイス・キリグを見遣った。

イェーツ北部を出て、ルイスとリディは一路国境を越えてビグナリオンにやって来ていた。

途中遭遇した魔物をなぎ倒して核を狩りつつ、そろそろ手持ちの資金が切れるかなという頃合いに辿り着いたのがこの町だ。

まずは狩り溜めた核を換金しようと狩人協会を探している途中でぶち当たったのがこの催しである。自他共に認める超大食らいのルイスは一も二もなく参加し、適当につまみを買おうと思いつつ観戦していたリディはしかし、男達が暴飲暴食とばかりに肉を口に放り込んでいく光景にすっかり食欲を失って、こうして顔をしかめながら眺めている。

「あの兄ちゃん、すげー…」

隣の男から感嘆の声が上がる。視線の先は勿論というかなんとい

うかルイスである。それ以前に参加している中に、『兄ちゃん』と評せる年齢と容貌の人間はルイスぐらいしかいない。

（凄い！？どこが！？気持ち悪いだけだろ！！）

内心でリディは凄まじい勢いで毒づいていたのだが、そうこうする内にステージ上で、何かが倒れる派手な音がした。

『あ――っと！前回大会優勝、デイビッドが倒れたぁ――――！！ということで今回の優勝は、初参加飛び入りの、ルイス・キリグだぁ――――！！』

わあああ、と周囲から歓声が響く。主催者が高々と差し上げた手に引っ張られて立っているルイスは、未だもぐもぐと肉を咀嚼している。

優勝者が細身の美青年であることに場、主に女性陣が色めき立つが、当のルイスは頓着せずに賞金を受け取ると、ようやく肉を呑みこんですたすたとリディに歩み寄ってきた。女性陣は皆むっと、男性陣は興味津々でリディに視線を向け、一様に絶句する。

――それもそうだろう。目を瞠るような美少女が、ひどく嫌悪に満ちた表情で腕を組んで立っているのだから。

その少女が漂わせる雰囲気にただならぬものを感じて、物見高き観衆達は、そそくさとその場を後にしていく。

が、やっぱりルイスは気にせず賞金の袋を振って、にっと笑って見せる。

「金、卸さなくて済みそうだぜ」

「……」

リディはルイスを、お前を見てるとこっちが吐きそうだ、という目でありありと見てから、逸らす。

が、ふとその目が細まった。同時にルイスもピクリと反応し、剣の柄に手を遣る。

「ルイス・キリグにリディ・レリアか？」

ルイスの背後からにゅっと現れた男を、二人は感情を消した目で見遣った。喧噪のなかとはいえ、自分達が気配に直前まで気付けなかった。――徒者ではない。

そんな二人の警戒心に気づいて、男は苦笑して胸元から小さな銀のプレートを提げたチェーンを取り出した。――狩人である事の証明書、狩人証である。

「そう警戒しないでくれ。俺はジョン・イーデル。マリナリオ出身の狩人（ハンター）だ。あんた達に伝言を持ってきた」

――――――――――――――――――――――――――――――

「しっかし、よく食べんなあ、あんた。その細っこい体のどこに入

んだ？」

場所を移して、アイルの狩人協会近くの喫茶店。半ば呆れ、半ば感心したような口調でジョンが言った。ルイスが即答し、リディが吐き捨てる。

「胃だろ」

「考えない方がいい。見てると気分悪くなるよ」

あれだけ食べたというのにまだケーキをつまむルイスに、リディは最早目を向けることすらやめていた。

「……。聞いたぜ。あんた達、竜を狩ったんだってな」

微妙な面持ちになったジョンは、話題の転換を選んだ。

「ああ。死ぬかと思った」

さらりとリディは答えて、コーヒーを口に運ぶ。

実際、あの時の怪我は今までで一番ヤバい部類だった。一歩間違えたら本当に死んでいただろう。

「俺も結構な修羅場はくぐってきたつもりだったが、あそこまで必死に魔術に集中したのは久々だ」

ルイスも口許のチョコレートクリームを拭って同意した。そして無断でリディのコーヒーに手を伸ばし、一口飲む。そして咽せた。

「あっま！！リディ、お前なんてもん飲んでんだよ！？砂糖何個入れた！？」

涙目のルイスに対し、リディはきょとんとした顔で答えた。

「八個」

「それもうコーヒーじゃねえよ！よくこんなもん飲めんな！？気持ち悪くならないのか！？」

「はぁ！？私に言わせればそんだけ食って吐かない君の方が異常だよ！大体人のもの勝手に飲むなよ！行儀悪い！」

「お前相手に礼儀もクソもあるか！お前糖尿病になるぞ！？糖尿病って死ぬんだからな！？」

「君が高血圧で死ぬ方が先だ！」

「あーもういいから。落ち着け、な？お二人さん、周り見てみ」

ヒートアップしていく言い争いを、若干引き気味にジョンが止めた。双方見目が至極良いために、元々店内の視線を集めてはいたのだが、今の騒ぎで完全に集中している。

しかし二人はどうでも良さげに鼻を鳴らした。

「こいつのためだ。このままじゃ遠からず死ぬ」

「私も常々一言言ってやりたかったんだ。ちょうどいい機会なんだよ、邪魔しないで」

「いいから聞け。――仕事の話がしたい」

その一言で、すっと二人は表情を鎮めた。僅かな静止の後、姿勢を改めてジョンに向き直る。

「堅くならないでくれ。大したものじゃない。――あんたら、この街の領主の名前、知ってっか？」

「エアハルト公爵だろ」

迷わず言ったリディに、少しルイスは眉を上げた。ビグナリオン第二の都市とはいえ、治める者まで知っている者は珍しい。ジョンは頷いた。

「その公爵の娘がな、今度十三歳になるんで、三日後にお披露目パーティを開くんだとさ。――だが、ここで問題がひとつ」

くいとジョンは指を立てた。

「エアハルトは、ここビグナリオンの中でも有数の大貴族だ。隣のイグナディアとの戦でもかなりの軍事的貢献をしてる。当主も、その息子達もかなりの辣腕なんだそうだ」

ここまで来ると、大体の展開が読めてくる。だが二人はジョンに先を続けさせた。

「言ってみりゃ、イグナディアにとっちゃ目の上のたんこぶみたいなもんだ。実際のところ、かなり刺客を送りこまれてるらしい。そこに今回のパーティだ」

絶好のシチュエーションだろ?とジョンは唇を持ち上げる。

「んなもん開くなよ、って話だが、大事な娘の社交界デビューだ。ちょうど戦もない今、やらない訳にはいかねえんだろ。そこでエアハルト公爵は、狩人協会に少しの間の護衛の派遣を依頼してきた」

「で?俺達にそれをやれってのか?」

ルイスが露骨に顔をしかめる。ジョンは「話が早いな」と苦笑して、

「先方のご希望がな、『きちんと腕が立つと判っている者を十名程』ってのなんだ。ぶっちゃけそう都合良くはこの街に揃っちゃいない。他の街にも通達は出してっけど、上の奴らほど貴族嫌いの奴多いからな…、多分来ないと見ていいだろう」

「だろうな」

ルイスとリディも頷いた。貴族と言うのは総じて気位が高い。狩人などは野蛮な庶民がするものだ、と蔑んでいる人間も少なくない。勿論全てがそうという訳ではないが、相対的に見た結果、狩人はそういった理由で貴族を嫌う傾向にある。

「私だって嫌だよ、そんな仕事」

「俺も遠慮する」

きっぱりと言い切った二人に、ジョンは深々とため息を吐いた。

「…そう言うと思った。でもな、先方は五百エル出すって言ってんだが？」

「…五百エル？三日間で？」

「いや、一日でだ」

ルイスとリディは軽く眼を瞠った。普通の民衆の一日の平均的賃金が凡そ百エル程であることを考えると、破格の値と言っていい。まあ仕事仲介料として狩人協会に百エル程取られるだろうが、それでも十分と言える。

狩人協会は、核の売買と共に、こうした仕事の依頼を受け、狩人

達に依頼を仲介するということも行っている。いわば仕事ギルドのようなものでもあるのだ。

「…それだけの物件なら、志願者は山といるだろうに」
「言ったろ？『確かに腕が立つ者を』とのご依頼だ。エアハルトは協会のいいお得意先だし、金に釣られた如きの下手な奴は出せねえ。レベル４０の核を狩れること、が最低ラインなんだぜ」

それはまた大層レベルの高いラインだ。だが二人揃って瞑目すると、やはり首を振った。

「悪いけど、断る。金には困ってないし」
「右に同じく。面倒なことは嫌いだからな」
「かー、言うと思った…。そうだよなあ、お前らトップハンターだもんな、金欲しさにやるわきゃねーよなー…」

ぼやくジョンは、しかしにやりと笑って見せた。その笑みになぜか、ルイス達の背に悪寒が走る。

「が、残念だったな。こりゃ命令だ」

武骨な指がぴら、と紙を示す。そこにはこう書いてあった。

『ルイス・キリグ　並びに　リディ・レリア　殿

こたびのエアハルト家の依頼を、狩人協会は勅命として貴殿らに任ずる。可及的速やかにこれを受諾し、エアハルトの城へ赴くこと。

アイル狩人協会支部長　シラス・ダルク』

「……」
「……」

「この街に通じる関所潜った時点で、お前らが入領したことはわかってた。好物件を見逃す訳ないだろ？…従うな？」

柔らかい口調、しかし有無を言わせぬ調子のそれに、二人は沈黙した。

狩人協会の勅命。それには狩人協会に所属する以上、絶対に従わなければならない命令だ。従わなければ、否応なく除名処分となり、核で生計を立てる狩人として生きていく術を絶たれる。

――否やとは、言えなかった。

「…それだけ大貴族（エアハルト）は大事ってことか…」

ため息を吐いて、ルイスは紙を受け取った。さらさらと魔力を込めた指で紙をなぞり、銀色の軌跡で名前を記す。

通称魔力押印と言われるこの作業は、魔力を指先に灯して紙に刻み込むものだ。魔力は強弱の差はあるものの、万人が等しく持っている上、誰一人として同じ波長の者はいないため、個人の証明方法として一般的に広く使われている。

「面倒だけど、勅令と来たらしょうがないね…」

リディも嫌そうにしながら同じことをした。紙の下方に光る二列の銀色の文字を満足げに見て、ジョンは立ち上がった。

「よし。俺はこれを協会に持ってくから、お前達は先に城に行ってな。――ああ、衣食住は提供してくれっから、安心しろよ」

じゃあまた後でな、と手を振ってジョンは去って行った。

ルイスとリディは顔を見合わせ――そろって重いため息を吐いた。

第二話　陰謀の宴　（1）（後書き）

第二話。
気づいたらお気に入り登録してくださっている方がいらっしゃいました。ありがとうございます。これからもお暇つぶし代わりに読んでくださるとうれしいです。
あと気が向いた方がいらっしゃいましたら、文章評価などをしてくださると励みになります。駄文を少しでも改善するために頑張ります。

第二話　陰謀の宴（2）

第二話　陰謀の宴（2）

「では、君達があの新人にしてトップハンターの『自由時間（フリータイム）』かね？随分と若いのだな」

行った先の城で、名前を言って狩人証を見せると二人はすんなりと場内に通されたのだが、その先で対面したのは、なんとエアハルト公爵本人だった。

「狩人は若い者の方が多く占めております」

滑らかに膝を折り、ルイスは頭を下げた。リディも黙って跪（ひざまず）く。

それらに公爵は少々驚かされた。丁寧な言葉遣いといい所作といい、二人ともかなり洗練慣れたものに見えるのだ。

だがひとまずそれは押しやると、公爵は柔和に微笑んだ。

「そうだな。とりあえずまず部屋に案内させよう。――ルーク、ガディアス」

公爵の声に応えて、壁際に詰めていた騎士達の中から二人の騎士が進みでて、ルイスとリディに歩み寄り、

「っ！」
「！」

次の瞬間、ルイスもリディも剣を抜いていた。一瞬後、金属がかち合う鋭い音が鳴り響く。

二人は突如斬りかかってきた騎士に驚きを示しながらも、騎士達が打ち合わせた剣を外し、再び流れるように振るってきたので、表情を消してそれぞれ剣を振り上げた。

キンッ、と綺麗に重なった二音と共に、二振りの剣が宙を飛ぶ。剣を失って棒立ちになった二人の騎士の眉間に、ルイスもリディも容赦なく刃先を突き付けた。

「――どういうおつもりですか」

リディが横目で公爵を睨む。すると公爵はにっこり笑って、軽く手を叩き始めた。

「お見事。ルークとガディアスを難なく下すとは、トップハンターの名は伊達ではないな」

その様子に少しの間目を瞬かせたものの、顔を見合わせた二人は小さくため息を吐いて剣を引いた。

「試された、って訳ですか…」

視線の先にゆっくりと立ち上がる二人の騎士を据えながらも、剣を澄んだ音を立てて鞘に収める。その顔に怒りの色はなく、淡々としていた。

「おや、何も言わないのかい？　怒るかと思ったが」

「よくあることです。それにこのような高額物件ですから、仕方のない事でしょう」

リディは金色の瞳を細め、騎士から完全に視線を外して公爵に向き直った。

「しかし、このように腕の立つ方々がいらっしゃるのに、その上で狩人をお雇いになるのですか？　あまり必要性がないかと存じますが」

ルイスは内心で驚いていた。普段ぞんざいな口調の彼女が、こうも自然に敬語を使えるとは。が、リディも同じことを思っていたのを彼は知らない。

「いや、今度のパーティは規模が大きくてね。城門と関所と城内と手を裂くと、まだ国境に兵を置いているこの状況では人手不足が否めないんだよ。それに、魔術を使えて戦闘慣れしている狩人の実力は、とても魅力的だ」

「…成程」

頷いたリディに、公爵は言った。

「さあ、今度こそ部屋に案内させよう。そこに、この期間中に来てもらう服を用意したから、湯浴みでもして着替えて、また来てほしい。娘に紹介したい」

「承りました」

つまり、そのような薄汚れた格好で城内を歩かせる訳にはいかないということか。

ルイスもリディも内心でどんな格好にさせられるのだろうと想像して呻いたが、口に出すことはせず、一礼して公爵に背を向けた。

二時間程後、再び現れたルイスとリディに、公爵は驚きと感嘆の声を漏らした。

長旅の汚れを綺麗に洗い落し、髪を整え、騎士団の制服に身を包んだ二人は、貴族といっても差支えないほど美麗な姿を呈していた。綺麗な面立ちだとは分かっていたが、いっそ高貴ささえ感じさせる造作に、周りの部下達も驚きを隠せていない。

「――改めまして、自己紹介をさせていただきます。ルイス・キリグと申します。短い期間ではありますが、公爵閣下とご家族の方々を誠心誠意守らせていただきたいと思います」

「同じくリディ・レリアと申します。若輩の為、至らぬ点が多々あるかと存じますが、自らの役目はきちんと果たす所存です。よろしくお願いします」

そうして二人揃って丁寧な挨拶をして流麗な動作で膝を着いたのだから、満場が呆気にとられても誰も文句は言えないだろう。

公爵も無論その一人だったが、やがて首を振ると、近くの席に座っていた青年を立たせて言った。

「これは私の次男のエリオットだ。長男のヴィルヘルムは今所用で外に出ているから、あとで紹介しよう。エリオット、マリーとレティのところへ二人を案内してくれ」

「承知いたしました、父上」

エリオットと呼ばれた青年は父親に頭を下げると、二人に笑みを向けた。笑みは秀麗だが、どこか硬質なものを感じさせる。細身の体だが、どうやら武芸向きの者らしい。年は大体ルイスと同じくらいか。

「エリオット・イデル・ロウ・ビグナリオン・エアハルトだ。よろしく」

「よろしくお願いいたします」

気さくな調子に二人も彼に笑い返して、歩きだした彼の後に続いた。

「いや、驚いた。君達は本当に狩人か？　貴族といっても僕は驚かない」

公爵の妻とその娘のところに案内しつつ、エリオットは同行の二人に水を向ける。が、二人とも苦笑を浮かべるだけで、何も言わなかった。

エリオットは少々つまらなく思いながらも、その足は目的地に着いたことで止まる。

「――さ、ここだ。母と妹はおそらく今、紅茶を飲んでいるはずだ。ああ、母は王族出身だけど、気さくな人だから気にしなくていい」

げっ、と呻いたルイスを見て、エリオットは最後の言葉を付け加えたのが、あまり二人の顔は晴れなかった。

というより、先程のエリオットの紹介でミドルネームに国名が入っていたことから予想は付いていたが、止めを刺された気分だった。

「母上、エリオットです。最後の狩人をお連れしました」
「どうぞ入ってちょうだい」

柔らかな女性の声。扉の脇に控えていた騎士が扉を開け、エリオットとルイスとリディは中に入った。室内では、エリオットが言った通り二人の人物が紅茶を飲んでいた。

ウェーブがかった金色の髪を長く垂らした、とても美しい女性と、同じ色の、しかし肩までの長さの髪に澄んだ翠色の瞳を持つ、可愛らしい少女。

エリオットが二人に近づく中、ルイスとリディは迷わず少し進んだところで膝を着いた。女性が微笑む。

「あなた達が今回の狩人の方々の最後の人達ね。まあ、若いのね」

年に見合わない無邪気な声音だが、これだけの美人だと恐ろしい事に違和感を感じさせない。

「お初にお目にかかります。ルイス・キリグと申します」
「リディ・レリアです。公爵夫人に置かれましては、ご尊顔を拝し光栄です」

二人の言葉遣いは、やはりここでも驚きを呼んだようだ。少しの間があって、公爵夫人が怪訝そうに言葉を発した。

「あの、失礼だけれど…あなた達は狩人なのよね？」
「はい」
「恐れながら」

それ以上の問いは無遠慮だし、何より二人の雰囲気が拒んでいた。それを明敏に察した公爵夫人は、そう、と再び笑った。

「若いのにとてもしっかりした方達ね。…レティ、ご挨拶なさい」

金髪の美少女は、母の言葉にふわりと笑って頷いて、ルイスとリディに軽くお辞儀をした。

「レティシア・リィ・ビグナリオン・エアハルトと言います。どうぞよろしくお願いします」

ルイスもリディも、丁寧に頭を下げた。

「リィ」というのは王族に連なる女性の敬称だ。同じく王族に連

なる男性には「ロウ」がつく。王族の範囲に満たされるのは、現王の四親等まで。

この少女の母親、つまり隣の公爵夫人は現王の妹であり、この少女は現王の姪であるから、リィが付くのは当然である。

「私はレティとエリオット、ヴィルヘルムの母のマリーアリア・リィ・マルビレイヌ・エアハルトよ。長い名前は面倒だから、どうぞマリーと呼んでくださいな」

そしてこの場で最も身分の高い女性は、そう柔らかに微笑む。まだあどけなさを残すレティシアも、将来こんな女性になるのだろうかと考えつつ、リディは訊ねた。

「はい、マリー様。――私達は具体的にどのように？」

「パーティの時はまた違うと思うけれど…基本的にはそちらで分担してもらって、騎士団の方々と協力して護衛をお願いすると思うわ。詳しいことは夫が多分話すわ」

「承りました」

ルイスとリディは、話の潮時を悟って立ち上がり、礼をすると踵を返して部屋を出て行った。

結局マリーとレティが、一度も彼らの顔をしっかり見なかった事に気付いたのは、彼らが部屋を出て言ってしばらく後の事だった。

「あー、舌噛むかと思った」

公爵からローテーション表を受け取って、指示された持ち場に回りながらリディがぼやいた。ルイスがくくっと笑う。

「お前があんなお言葉遣いできるとは思わなかった」

「それはお互い様だろ」

「……。――で、お前はどう見る？この気配」

軽口をたたき合ってから、ルイスはそのままの口調でリディに言った。表情を変えず、リディは返す。

もし彼らを見ていた者がいるとしても、話題が不穏なものになったことに気づく者はいないだろう。

「誘魔香だね。微弱だけど。祓っとく？」

「やっぱそうか。…泳がせないか？ちゃんと守りさえすればいいんだから」

リディは横目でルイスを見遣る。ルイスの横顔はどこか楽しそうで、それはリディにも感染った。

「――だね。…どうも他の結界の気配もするし。大丈夫だろ。一応風に見張らせとく？」

「そうだな。――ウェーディ、頼む」

ルイスに応えて風の精霊が舞い上がり、どこかへと消える。それを見送ってから、二人はそれぞれの持ち場へと踵を返した。

第二話　陰謀の宴　（2）（後書き）

貴族はやたら名前が長いです。一般庶民は名前・名字ですが、貴族になると名前・母の実家名・名字になります。王族女性はさらに名前の後にリィ、王族男性は名前の後に王家特有の名前・ロウが付きます。

ほんとは次の話まで含める予定が、長くなりすぎたのでいったん切ります。

あ、あとｐｖアクセスが来ない間に１０００超えてました…。恐縮です。少しの間のお暇つぶしになっていただけていたら幸いです。

第二話　陰謀の宴　（3）

第二話　陰謀の宴　（3）

その夜、今回集められた十一人の狩人達は、特別に公爵家の面々と食事を共にすることになった。二名を除き、礼儀も何もあったものではないと家臣は反対したが、断行したあたり、当主一家の人柄が見える。

「よ、お二人さん。おお、着替えたらますます別嬪じゃねえか」

食卓に案内される際に合流したジョンが、二人を見て大げさに仰け反る。

彼も当然今回の参加メンバーで、しかも一パーティのトップだという。彼のパーティ四人と、もう一つ五人パーティ、そしてルイスとリディの二人がこの任務の構成メンバーだ。

大げさな口調の割に割合本気での褒め言葉は、しかし無情に一蹴された。

「男に別嬪言うな。気持ち悪い」

「君も同じ服だろ。ていうか、それに何か意味があるわけ？」

「……」

同じ服を着ていても、気品とか輝きとかそういうものが違うんだよと言おうと思ったジョンだったが、二人の余りの無関心さになんだか一気に脱力して、ただ肩を落として食卓を囲む広間に足を踏み入れた。

どうやら待ち人は彼ら三人だったようで、視線が一斉に三人に向く。軽く会釈をして謝罪の意を告げ、ルイス達はそれぞれ空いた席に座った。

上座に公爵一家の四人、一つは空席――おそらく長男ヴィルヘルムの席だろう――、下座に狩人（ハンター）と思しき人間達が座っている。狩人はリディ以外の全員が男だが、中にはまだ十三、四に見える子供もいる。

三人が席に着いたのを確認して、エアハルト公爵はにこやかに杯を上げた。

「諸君、こたびは私の無茶な要請に応じてくれて感謝する。謝礼は知っての通り弾むから、しっかり働いてくれたまえ」

笑い混じりの台詞に、狩人達は皆豪快に笑って杯を持ち上げる。見るからに子供の狩人やレティシアの杯の中身は、どうやらジュースのようだったが。

「では、乾杯」

軽く杯を振ってから、公爵がそれを飲み干す。唱和して皆、それに倣った。そのまま食事に移ろうとした面々を、しかし公爵は手を上げて抑えた。

「乾杯をしたのに悪いとは思うが、食事の前に一つ狩人諸君で自己紹介をしたらどうだね？　お互い名前も知らぬままでは不便だろう。麗しい華もいることだし」

冗談めかした言葉に、しかしリディは顔をしかめる。女扱いは嫌いなのだ。目敏くそれに気付いたジョンが、慌てたように声を上げた。

「そーですね。じゃ自己紹介と行きましょうか。俺はジョン・イーデル。剣士だ。狩人パーティ“ライジング”のリーダーをやってる」

面々が軽く目で頷いた後、彼の右隣に座っていた男が立ち上がった。

「私はマシュー・アストンといいます。“ライジング”の治療術師を担当しています」

長い銀髪に細い体つきは、いかにも医療系らしい雰囲気を醸し出している。マシューに続き、その隣の金髪に浅黒い肌の、ルイスとそう年の変わらなそうな青年が立つ。

「俺はヨセフ・フィッシャー。同じく“ライジング”の攻撃系魔術師やってる」

彼の後には、ジョンの左隣に座っていた、ジョンほどではないが筋肉質の男が立った。

「同じく“ライジング”所属の弓使い、エドガー・ムーアだ。よろしく」

「次はおれ達だな」

“ライジング”の紹介が終わったと見るや、ごつい体つきの、いかにも戦闘職といった風味の男が代わりに立ちあがった。

「おれはヘンリー・レイン。“ユートピア”のリーダーやってる剣士だ。よろしく頼まあ」

「僕はウリス・ユルスナール。治療術師です」

「アーサー・ヤンソンだ。槍使いだ」

ヘンリーに続いて、優しげな雰囲気の中年の男、それと対照的に武骨で硬質な雰囲気の男が軽く頭を下げる。彼らの後に、十三、四の二人の少年が同時に立ちあがり、片方が元気よく口を開く。

「オレ達は攻撃系魔術師だ！名前はオレがエリスで、こっちがニール。よろしくな！」

「――で、あんた達は？」

ヨセフが残るルイスとリディに視線を向ける。ルイスとリディは一瞬視線を交わすと、同時に立ちあがって名乗った。

「リディ・レリア」

「ルイス・キリグだ」

ぎょっと息を呑む声が二、三上がった。

“ライジング”からも発されたところをみると、ジョンは仲間に話していなかったらしい。エリスとニールが顔を輝かせて身を乗り出す。

「あんた達が“自由時間（フリータイム）”!?二人だけで竜を狩ったっていう!?すげ、本物!?」
「こら、エリス、ニール。行儀が悪いですよ」
ウリスのたしなめに、バツが悪そうな顔をして二人は席に座り直した。代わりにヘンリーが面映ゆそうにルイスとリディを眺める。
「ほう、てめえらがあの。本物か?」
ルイスとリディは直接答えず、二人揃ってジョンを見た。追ったヘンリーの目もそちらを向き、視線の一斉射撃を浴びたジョンが、ゲッと呻いてからぼそぼそと答える。
「…本物だよ。魔力押印も確認済みだぜ」
一同が納得したところで、唐突にヨセフがぽんと手を叩いた。
「あー、どっかで見た事あると思ったら、街の大食い大会出てた奴じゃん。あんたあんだけ食って気持ち悪くなんねえの?」
「ならない」
「見てる方が気持ち悪い」
ルイス、リディ両者の答えに数人が笑い、場が一気に和んだ。それを見たエアハルト公爵がにっこり笑って声を上げる。このあたり懐の深さを感じさせる人間だ。
「さて、では食事にするか。思う存分食べてくれたまえ」
威勢のよい食事の挨拶が狩人達から発され、それから普段のこの

部屋では考えられないような騒がしさで満たされた。
護衛の騎士の中には眉をひそめる者もいたが、公爵一家は自分達も遠慮なく笑いながら食卓を囲んでいた。

そんな中で他とは一線を画して行儀よく食事を口に運んでいたルイスは、ふと視線を感じて顔を上げた。
するとレティシアと目が合い、驚く前にとりあえず微笑んで見せる。と、レティシアはぼっと音を立てる勢いで頬を染め上げ、慌てて俯いて食事を再開した。

（…あれ）

ぽりぽりと頬を掻いたルイスを、くつくつと笑ってリディが肘で突いた。暇つぶしにいいものを見つけた。

「惚れられたなルイス」
「は？」
「あのお姫様、どう見ても君に気があるよ。どうする？」
「馬鹿も休み休み言え、馬鹿。どうもするわけないだろ」

ルイスは一蹴するが、リディはいい玩具を見つけたとばかりに至極楽しそうな表情を崩さず、しかし所作美しく葡萄酒を口に運ぶ。

「すんごい美少女。生粋のお嬢様そのもの」

その声音にどこか郷愁めいたものを感じてルイスはリディを見やりかけたが、寸前で押しとどめた。

まだ三カ月とはいえ、四六時中共にいればわかる。お互い生まれはそういう所なのだと。

狩人として生きている理由も似たようなものなのだろう。彼らはお互い何となく相手の来歴を察しながらも、訊ねる事は決してしない。そういった事は、自然と暗黙の了解となっていた。

だから、仄めかせるような言動を漏らしても、却って安心できていた。

「それこそ冗談だろ。気位高いお嬢様の相手なんざもうしたくねえよ」

なので鼻で笑ってそう返せば、リディもくすっと笑っておどけて見せる。

「あの子馴染みやすそうだけどなあ」

からかう調子で言ってから、不意につとリディは視線を動かした。その鋭さに、ルイスは表情を改め訊ねる。

「…どうした？」

「…なんか。今一瞬、妙な火の気配がした」

魔術には属性というものが存在する。風、水、火、雷、土の五つだ。この五つの属性のいくつかを、生まれながらに人は有している。

どれが宿っているかはそれこそ人によって違うが、通常、一人に

つき一つの属性で、たまに二つ持っている者がいる。が、三つの者は限られ、四つは体内バランスが崩壊するためあり得ないとされている。五つはそれこそ論外だ。

しかし魔力は誰もが持っているとはいえ、個人差が激しい。本当に『持っているだけ』の人間もいれば、それを行使できる人間もいる。行使できる人間が魔術師だ。

魔術師の素質を持って生れた人間は、五歳以降で力と属性に応じた精霊と契約する。

精霊とは、大気のどこにでも存在する、魔物などといった存在とは対極に位置する『人ならざるもの』だ。が、彼らを傷つけることはできないし、また人は己が契約した精霊しか視る事が出来ない。この精霊は契約した主の意志と命令と魔力量のコントロールに従って、魔術を発現する。

つまり魔術師が火を放ったように見えても、実際は魔術師に命じられた火の精霊が火を放っているのだ。精霊にも力の強弱があり、契約は個人の魔力量による。

また、この五属性に基づく魔術のほかに、治療魔術というものがある。が、これは完全に生来の素質に因るもので、この世に生まれた際に聖霊に憑かれた者のみが行使することが可能だ。

その為存在は希少で、この魔力を持っている人間は大抵医療関係に従事する。この力は『人ならざるもの』とは対極にある力で、治療の他に、五属性の結界よりも数段強力な結界を張ることが出来る。が、人や善竜は拒む事が出来ない。

そして人は、自分が持つ属性の気配には敏感に反応する。

「…火の気配？」

怪訝そうなルイスにリディは頷く。

「ああ。一瞬で消えたけど…何だったんだ？ちょっと見てくるかな…」

そうリディが立ち上がりかけた時だった。ドンッという衝撃が奔り、上部の壁にある窓が割れ、炎が入り込んできた。

驚愕の声が上がる前に、反射的にリディは叫んだ。

「ウェルエイシア！」

彼女の声に応えて風の膜が広間全体を包み込み、降り注ぐガラスを弾き飛ばして、炎も吹き飛ばす。

次いで外に広がっていると思しき炎を囲い込み、酸素の供給を断った。

「ルイス、水！」

「アイシィ！」

直線的な要請に、ルイスは瞬時に対応して外へ水魔術を放った。

一気に沈静化する外の気配に、リディはジョンを振り向いた。

「外見てくる。護衛は任せるよ」

言うなり、風を固めて作った足場を蹴って、割れた窓から外に飛び出して行ったリディを、室内の大半はあっけにとられて見送り、エドガーが「どんな身の軽さしてんだよ…」と呟いた。

「アースエイシア。地盤固めてこい」

おそらくは火の魔法を使った爆発だろうとリディの言動から察して、ルイスは自らの土精霊にそう指示してから、後ろを振り向いた。

「悪いけど誰か外行ってくれ。リディ一人じゃ追手もかけられない」

「あ、じゃあオレら行く！」

「…俺も行こう」

エリスとニールが飛び上がって手を挙げ、アーサーも頷いて開け放たれた扉から出ていく。

ルイスは蒼い眼を細めて、エアハルト公爵に向き直った。

「以前にこういった事は？」

「…流石にないな。地位柄、暗殺者はしょっちゅうだが、こうも派手なものは…」

「そうですか」

特に驚いた風もなくルイスは首肯し、もう一つ、と訊ねる。

「魔術師は雇っていらっしゃらないのですか」

「長男のヴィルヘルムがかなりの魔術師なので、二人しか雇っておらんな。ヴィルは外出中だが、魔術師は城内にいる」

長男、という事はもちろん王家の傍系。ならば強い魔力を持っているのだろう。

元々、この大陸は遥かな昔はただ一つの国によって治められていたという。今この大陸を支配する十三の国の王族は、皆系譜を辿れば、その国に存在した一つの一族に行きつくと言われている。

なんでもその一族は、凄まじい魔力と治療魔力を持つ一族で、それは長い時の流れの中でも失われず、現存する王族達はそれを引き継いで高い魔力を持っているらしい。彼らは高い魔力と、なぜか必然的に受け継がれている治療魔力、そして常人より優れた身体能力を持ち、戦闘に秀でている。

もちろん引き継いでいると言っても完全ではなく、戦闘能力の高い者もいれば、普通の人間かそれ以下の力しか持たない王族もいる。

エアハルト家の長男は、どうやら前者のようだ。

思考を巡らせていたルイスに、ヨセフが声をかけた。

「なあ、今後の為にお互いの属性教えとかねえ？魔術師五人いるから、多分担当分けられるし」
「…そうだな」

少し迷った後、ルイスは頷いた。余り自分達の能力は明かしたくないが、予測していたより事態は深刻らしい。
誰がどういった魔術を使うかを把握してしっかりとローテーションを組まないと、足元をすくわれることになりそうだ。

「俺は水、土、風だ。リディは火、風、雷」
「ふうん、俺は土と風…って、はァ！？」

ふんふんと頷きかけ、ヨセフはぎょっと声を上げた。

「何お前ら、二人とも三属性ずつ持ってんの！？嘘だろ！？」
「嘘じゃねえよ。こんなんで嘘ついてどうすんだよ」
「あり得ねえ！そんで剣も使えるって！？ふざけんなよ！お前ら人じゃねえ。人外生物！！」
「残念ながら紛う事なき人間だ」
「あー、と、エリスが水と風で、ニールが火と雷ですよ」

口論になりかかっている青年二人に、遠慮がちにウリスが口を挟んだ。

「…とりあえず全属性、余裕でいる訳だ」

ジョンが呟く。仮にもここにいるのは、狩人としても並みより上に位置する者達だから、二属性持ちはそこまで驚かない。が、流石に三属性は驚いた。

と、扉の外が俄かに騒がしくなる。

「父上、母上、エリオット、レティシア！」

一人の容姿端麗な青年と、追って二人の魔術師らしき人影が駆け込んでくる。魔術師の方は雇っているという二人だろう。

淡い金髪の青年が長男のヴィルヘルムであると、出で立ちからも台詞からも見て取れた。

「おお、ヴィル。王都はどうだった」

「いつも通りですよ、それより怪我は！？」

「焦るな、何もない。狩人殿達が守ってくれた」

公爵が手ぶりで示したルイス達を、ヴィルヘルムは振り向く。その瞳に安堵と感謝が一気に灯り、彼は一番近くにいたルイスの手を取って頭を下げた。

「ありがとう。途中で妙な魔物に襲われた時から嫌な予感はしていたけれど…家族を守ってくれて、感謝する」

「…いえ」

家族の無事に落ち着きを取り戻したらしいヴィルヘルムの代わりに、今度は別方向から慌てた声が上がる。

「兄上！今襲われたとおっしゃいましたか！？お怪我は！？」

「ないよ、エリオット。なぎ払ってやったからね」

賑やかな家族だ。ルイスはヴィルヘルムの手をそっと外すと、ジョンとヘンリーの方へ歩み寄った。なるべく軽い調子で声をかける。

「このあと、いいか？」
「いーぜ。酒呑み足んねーからな」
「情報交換と行こうじゃないか」

考えていた事は同じらしく、二人ともすぐに頷いた。と、不意に背から声がかけられる。

「あ、あの、ルイス様…」

様!?と目を見開いて体を反転させると、そこにはレティシアが立っていた。

「助けてくださって、ありがとうございました」
「…いえ。主に俺の相棒がしたことですから。御身がご無事で何よりです」

改まった口調で、騎士のごとく頭を下げたルイスに、レティシアは頬を染め、ジョンとヘンリーは目を丸くしたのち物凄い勢いで顔を背けた。笑っているのだ。

レティシアににこやかな笑みを向ける一方、心の内でジョン達を罵倒しながら、ルイスは公爵一家に向き直る。

「失礼とは存じますが、今後の打ち合わせなどをしたいので、しばらくの間席を外させて頂きたいと思います。結界は張っていきますし、数人は残りますので、ご安心ください。――攻撃系魔術師を呼んでくれ。確かめたい事がある」

後半は肩を震わせまくっている二人に向けて言い、ルイスは踵を

返して扉をくぐったところで、ばったりとリディに行きあった。

リディは相当びっくりした様子で壁に張り付いている。もっとも、張り付いている理由はびっくりしたからだけではないようだが。

「――何してんだ、お前」

「え!?なんでもないなんでもない。打ち合わせどこでする?」

焦っているのは丸分かりだが、ルイスは嘆息するだけに留めた。歩き出しながら短く問う。

「――見つからなかったのか?」

真面目な口調にリディも気を取り直して、ルイスに続いて歩きだした。

「ああ。どうも時限式だったみたいだ。痕跡まで吹っ飛んでた」

「お前の後に三人行かせたんだけど、どうした?」

「槍使いは周りを見に行った。双子は火精霊と何か確認してるみたいだよ」

喋っている間に、エリスとニールが廊下の反対側から歩いてきた。難しそうな顔をしていたが、ルイスとリディを目にするなりぱっと顔を輝かせて走り寄ってくる。

「あのさ…」

が、その頭を、ルイスとリディの後ろからぬっと出てきたヘンリーががしっと抱える。

「おうっリーダー！？」
「何すんだー！！」

じたばたと暴れる双子をあっさりと抱え上げ、ヘンリーは豪快に笑った。

「居酒屋行くぞてめえら。おい、後は頼んだぜえウリス」
「了解しました」

ウリスが軽く頭を下げる横を、ジョンとヨセフがやってくる。どうやら“ライジング”も話はまとまったようで、マシューらが広間の入り口で見送っているのが見えた。

「よし、行くか」

ルイスの言葉に頷きを返して、狩人七人は街へと向かった。

「術者どれくらいだと思う？」
「中位…じゃないかな。ファイアリィ…僕の火精霊に訊いたら、そんな感じだった」
「同感。時限式に出来ることからして、もしかしたら高位かもね」

ヨセフの問いに、ニール、リディが答えた。

精霊は魔術師の魔力によって強さが異なるが、大雑把に高位、中位、低位と分けられている。

あくまで個人の主観なので、人によって分類はばらばらだが、共通している意見は、世の中の魔術師は中位と低位を使役する者がほぼ同数、高位になるとぐっと数が減る、ということだ。

「誘魔香の匂いもしてたよなー？」

エリスがルイス、リディ、ヨセフに確認するように訊く。三人とも迷わず頷いた。

「あの屋敷全体からも薄く漂ってたけどな。あのヴィルヘルムって奴からが一番濃かったな。今日あいつが襲われたってのはそのせいだろう」

「あんまり濃いとある意味で酔っちまって気付かねーからなあ」

一番至近距離で接したルイスが言えば、ヨセフがうーんと伸びをして頭を掻く。

「…内部犯かなあ？」

「有り得るっちゃ有り得るけど…薄いな。城内は誘魔香の匂いが特別強いって場所はなかったし…魔術師以外にそんな芸当は無理だろう。あの雇われ魔術師はそんなこと出来るレベルじゃなさそうだし」

「そりゃそうだ…」
「…あのさ、水を差すようで悪ィけど、誘魔香ってナニ？」

考え込む面々に、話についていけていない非魔術師のジョンが口を挟んだ。その横では無言でヘンリーも酒を呑んでいる。顔はさっぱりちんぷんかんぷんといった風情だ。

「あー、文字通り魔物を誘き寄せる香の事だ。人間の血とか薬草で主に作られてる。微量の魔力が込められてるから、俺達魔術師は感じ取れるけど、流石に臭いじゃ人間の鼻くらいでは嗅ぎ取れねえからな。…ヴィルヘルム、あのままじゃ魔物の餌食だぞ」

ルイスの回答に蚊帳の外だった二人が内に入り込めた傍ら、リディがガシガシと自分の前髪を丸める。

「あの人は放っといても心配ない。だけどあの人と接触した家族が心配」
「結界でも張るか？それか封印」

ヨセフの提案を、バッサリとエリスが斬った。

「それじゃ泳がせてる意味ないじゃん」
「…まーな」

どうやら全員誘魔香の存在に気づいていて放置したらしい。人の悪い笑みがそれぞれに浮かぶ。
見ていたヘンリーは、嘆息する。どいつもこいつも、攻撃系魔術師とやらは性格が悪いようだ。

「魔物相手じゃほとんど騎士連中は役立たずだろうからなァ。分担

して護衛すっか」
「それが一番得策だな。じゃあ誰が誰やる？」
ジョンの提案に、リディが真っ先に手を挙げた。
「私はヴィル…ヘルム以外だったら誰でもいい。あの人だけは絶対止めて」
口早に言ったリディを、全員が不審そうな眼で見遣った。ニールが首を傾げて訊ねる。
「…知り合いなの？」
「…いや。ただ私は向こうを知ってるし、向こうも私を知ってる。…これ以上は訊かないでよ」
リディは苛立たしげに喉にジュースを流し込んだ。
最近分かった事だが、どうもリディは酒に弱いらしい。一杯や二杯なら平気のようだが、度数の高いものには手を出さない。自分がザルのルイスにしてみれば、ちょっと人生損している風に見える。
リディの表情に追及をやめ、ジョンは切り替えた。
「わーった。んじゃリディ、お前はエリオット殿だ。一人で平気だな？」
「ああ。ありがとう」
「んじゃ俺とマシューでヴィルヘルムの護衛をしよう」
ジョンが言い終えると、ヘンリーがビールを一気にあおってから言った。

「じゃ、おれとウリスで公爵閣下につくとすっかあ。まァ、つくっつったところで部屋の隅だろうがなァ」

本当の近辺には騎士団が張り付くだろう。雇われ者は、外部から届く殺気にのみ集中すればいい。

「マリーアリア様はヨセフ、お前とエドガーでやれ。いいな？」
「へいへい」
「じゃ、俺は巡回で――」
「いんや、巡回はエリスとニールとアーサーにやらせる。てめえはレティシア嬢ちゃんだ」
「――はあ！？」

あっさりと決定事項のように言われたセリフに、ルイスは思わずヘンリーに食って掛かる。

「なんでだよ！」

その様子にヘンリーは豪快に噴き出し、ジョンはにやにや笑い始め、ヨセフは人の悪そうな笑みを刷き、エリスとニールの双子は疑問符を浮かべ、リディはこらえきれないといったように肩を揺らして笑いだした。

「なんでってそら、アーサーは人付き合い悪ィし、エリスとニールは実力はともかくまだガキだ。礼儀もねーし。その点てめえは礼儀作法完璧だろうが？食事ちゃんと見てたんだぜえ」
「なら女のリディのがいいじゃねえか！俺がエリオット殿下やりゃいいだろ！」
「ちょっと、都合悪い時だけ私を女扱いするなよ」
「バッカてめえ、嬢ちゃんの為に決まってんだろーが」

リディが律儀に反論し、一方ヘンリーは止めとばかりにルイスを指さして大声で笑った。

「指さすな」

「細けえこた気にすんな。てめえもわかってんだろーが、譲ちゃんのお前を見たときのカオ！あれは惚れられてっぜ」

憮然としたルイスに、更にヨセフが追撃をかける。

「ま、観念すれば？精々逆タマでも狙え」

彼と、未だ状況把握が出来ていない双子を除いて全員が笑い転げている状況に、不機嫌面になったルイスはヤケのように酒を干すと、ガタンと立ち上がった。

「やってられるか。帰る」

自分の酒代をテーブルに置いて席を離れるルイスに、リディも肩を竦めて席を立った。

「君が帰るなら私も帰るよ。――じゃ、ローテーションはそういうことで。また明日ね」

愛想良くジョン達に手を振ってから、リディはルイスの隣に並ぶ。ほどなくして二人が店を出て行った後、残った狩人達は額を寄せあった。

「何あいつら、デキてんじゃねえの？」

ヨセフが言えば、ジョンがうーんと頭を抱えた。

「そうだと思ってたんだけどなあ。そんな雰囲気塵ほどもねえな」

「つーかてめえらあの空気でそんな事考えてたのかよ？脳みそ湧いてねえ？」

「ちょ、リーダー！…でもじゃあ、なんでわざわざ二人で旅してる訳？治療術師もいないでさ」

ニールのもっともな疑問に、全員ふむと考え込んだ。

ここにいる者達は、誰も二人が治療魔術をも扱える事を知らない。とすると結論は出ないのだが、けど、とエリスが別の事を口にした。

「ルイスもリディも、やたらと礼儀作法綺麗だよなあ」

「…だな」

「しかも無理矢理って感じじゃなくて、自然とやってるよね」

「ああ、そりゃお前ら、あいつらは多分」

ジョンはいったん言葉を切る。言っていいのか数瞬迷ったが、まあ世間話の域を超えないし、あの二人とてこれくらい推測されることは予測済みだろう。

「あいつらは多分、貴族出身者だ。何で今狩人なんかやってんのかは知らないがな」

第二話　陰謀の宴　（3）（後書き）

ようやく魔術についての説明を入れられました…。難しい仕組みではないですが。
主人公二人がどれだけ異質かは少し強調できたかと思います。…たぶん。

第二話　陰謀の宴（４）

第二話　陰謀の宴（４）

「…で、どうしたわけ」

居酒屋を出、しばらくは無言で歩いていたが、居酒屋から十分遠ざかったところでリディが訊いた。

ルイスが彼女を振り返る。黒い髪は闇に溶け込んでいるが、耳たぶから下がる青玉の耳飾りが灯りを反射して煌めいた。

「君があの程度でキレる訳もないだろ。――何かいたのか？」

横に並ぶ赤い髪に、ルイスは苦笑する。全く鋭い奴だ。

「…ついさっき、ウェーディが還ってきた。あと、あの店の中から妙な視線を感じた。もしかすると…ホントに厄介かもしれねえぞ」

リディはすっと目を細める。

精霊が『還ってきた』ということは、何らかの干渉を受け、その場から消されたという事だ。精霊に死は存在しないから、そういった場合には精霊は自らの主の元に戻ってくる。それに、消すことは容易くなく、それなりの実力者でないと不可能な事象だ。

「…本気でエアハルトを排除したいってこと？」
「ああ。…戦の気がないか、調べてみるか」

現時点でエアハルト公爵家の援助がなくなれば、ビグナリオンの戦力は大幅に下がる。それで得をするのは、言わずもがな。

「あー、めんどくさい事になったね…」
「仕事だ、諦めろ」

夜の街を足早に通り過ぎる二人は、口調こそ呑気なものだったが、視線は鋭く尖っていた。

翌日から、狩人達は取り決め通り公爵一家にそれぞれ護衛としてつき従った。

公爵家の騎士達としてはかなり面白くないようだが、公爵自身が雇った者達だ。文句は言えず、かといって不満を吐き出さずにいるのは耐えられず、必然的に殺気のこもった視線が狩人達に向けられる羽目になった。

が、そこは我が道を行く連中の集まりである狩人。気にも留めずに仕事をこなしていた。……一部を除き。

「まあ、オルディアンは森と水の国と聞き及んでいますが…本当に大きな森なのですね」
「ええ。あれほどの深い森は、感動を通り越して一種の畏れを抱きます」
ああ、疲れる。
表面上は隙のない笑顔を浮かべながら、ルイスは内心で毒づいていた。
目の前には金髪の美しい少女。遠目に見る分には目の保養だが、頬を赤く染めてもじもじと喋りかけられる方としては、ただの厄介である。
ため息を押し殺して、ルイスは目の前の紅茶を一口飲んだ。
たった二日の辛抱だし、我慢して部屋の隅でじっと護衛でもしていようと思っていたルイスが、なぜこんな状況に陥っているのか。
それはもちろん、目の前のご令嬢のせいである。
『大陸中を旅している狩人の方に、この国の外の事をお聴きしたいのです』
そんな台詞のせいで、ルイスは強制的にレティシアの真向かいに座らされ、大陸の国々の事を喋らされているのである。
「まあ、具体的にどういう森なのかはリディに訊いた方が早いでしょう。あいつはオルディアンの出身ですので」

「まあ、そうなんですか。今度お聴きしてみます。ところで、ルイス様はどちらのご出身なのですか？」

（さくっと流したなこのガキ…）

「俺はエーデルシアスです」

「エーデルシアスの方だったんですか！エーデルシアスのどちらに…？」

その問いにはルイスは薄く笑って答えなかった。そこまで言う義理はないし、あからさまな好奇心は迷惑なだけだ。

レティシアは拒絶の空気をしっかり感じ取って、苦しげに眉を寄せ、それからそっとテーブルの上に身を乗り出した。

「ルイス様、あの、私…」

「失礼いたします。レティシア様、エリオット様が――あ」

花でも軽く飛びかけていた雰囲気に罅（ヒビ）を入れたのは、リディ。開けてから部屋の状況に間の悪さを察したらしく、バツの悪そうな顔になると、半分扉の後ろに隠れた。

「失礼、お邪魔でしたか」

固まっていたレティシアが、ぱっと顔を赤らめて極端にルイスから身を遠ざける。

「いっ、いえっ、お兄様がなんて！？」

「……明日の夜お召しになるドレスと装飾品の最終確認をされたいと仰られています。お手数ですが、それらをお持ちになってエリオ

ット様のお部屋へいらしていただけませんか」
「わ、わかりましたわ！すぐに参ります！」

至極焦った様子でバタバタと立ち上がり、隅に控えていたメイド達とともにあれやこれやと持ち始めた少女に小さな笑みを向け、軽くルイスに肩を竦めると部屋の外に出て行った。

――――――――――――――――――――――――――――――

「エリオットって、センスいいんだな」

目の前で、ドレスを着たレティシアが装飾品の着脱を繰り返し、髪型の調整を行っているのを壁に寄り掛かって眺めながらルイスは呟いた。

「兄貴ってそういうのやるの好きな人多いよ。迷惑なことに」

その口調が心底迷惑がっているような口調なので、ルイスはからかうような目をリディに向ける。

「お前も被害者か？」
「レティシアは自分が被害者なんて思ってないだろうけどね」

にしても、とリディは足を組み換え笑いを混ぜる。

「さっきは悪かったね。良い雰囲気の所を邪魔して」
「お前もういい加減にしろ。むしろ感謝してるぐらいなんだ。騎士

連中の殺気が怖いのなんのって」
「それは死活問題だね」
「他人事だと思って…」
「だって他人事だし」

レティシア付きの騎士達は、主の命令だからこそ何も言わないものの、可愛い可愛いお嬢様が、見目はいいとはいえどことも知れぬ馬の骨に夢中のこの状況に、至極遺憾なご様子である。

下手な事をすれば命はないぞ、と無言の殺気がルイスを常に襲っていた。

リディもそれは察していたのだが、滅多にないルイスをからかえるチャンスだ。完全に客観的に楽しんでいた。

「……」

ふてくされて黙り込んだルイスに、リディは愉快そうな表情のまま、それまでと全く変わらぬ調子で言った。

「戦の火は…イグナディアじゃない。アーヴァリアンだ」
「……！」

ルイスは思わずリディの方を向きかけた首を根気で抑え、何でもないような雰囲気を作りながら、隣の囁き声に集中する。

「勿論イグナディアも噛んでるみたいだけど。けど今回の件に主だって動いてるのは、アーヴァリアンの宮廷魔術師の一人だ。国自体が絡んでいるかどうかは、ちょっと微妙だけど」
「お前…そんな情報、どこから」

仕掛けてきた方向まではいい。だが首謀者まで調べてくるとは、並大抵の情報ではない。

「大したことないよ。狩人協会に登録してる情報屋と…あとは私自身の伝手で」

リディは髪を掻きあげると、鋭い眼をルイスと合わせた。

「ルイス。これ、私達次第で簡単に戦になるよ」

しかも、大規模の。

低い声で淡々と言ったリディの眼を、ルイスはしっかりと見返した。

「…このこと、公爵は」

「私からは報告してない。ただ知っててもおかしくはないと思う。下手人はともかく。――ただ、あの二人は何も知らないようだけど」

リディがルイスから視線を外して、部屋の中央で笑顔を交わしている兄弟に向ける。彼らの笑顔は曇りなく、平和そのものだ。ルイスは瞑目し、仕方ねえな、と呟いた。

「他の連中には知らせるな。下手に広げる訳にはいかない」

「わかってる。公爵には？」

「一応報告しとけ。国境の警備も気を抜かせる訳にはいかねえからな」

ルイスは虚空を蒼い眼で睨み、断固とした声音で言った。

「――守り切るぞ」

翌、レティシアの御披露目パーティー当日。

「…以上です」

人払いされた公爵の私室で、リディは自分が掴んだ情報の全てを、ルイスに言われた通りエアハルト公爵に報告していた。

何故か護衛であるはずのジョンもマシューもいない。不審に思って問いかけたが、公爵は笑って答えなかった。

しかしその笑みが嘘の様な沈痛な空気が、室内には漂っている。

「……」

エアハルト公爵は卓に肘を乗せ、掌を組んで顔を俯かせている。

「ご存知でしたか？」

「…いや。また、イグナディアだろうと。まさか二国が共に我が国を…。しかし、アーヴァリアンの女王はそのような御方ではないと思っていたのだが…」

呟く公爵の声は重い。リディは気にせず、淡々と続けた。

「アーヴァリアンは魔術国家です。そこの宮廷魔術師ともなれば、かなりの実力を有しているかと思われます。ご子息に誘魔香をしこんだ事といい、昨日といい、厄介な相手には違いありません。またそれとは別に、イグナディア側もパーティーには刺客を送り込んできているでしょう。本音を申し上げれば、パーティーの中止をお薦め致しますが…」

「それはできぬ。既に何人もの招待客が今夜の準備をしている。今止めれば、我が家は顰蹙を買い、ひいてはビグナリオン王家の威光にまで影響が及んでしまう」

「…そうですか」

予想通りの返答に、リディは心の内で小さく溜め息を吐いた。

単純な安全面から見れば、限りなく愚か。それでも貴族には、特に王族に連なる者には、守らなければならない面子というものがある。

選択の余地は、最初から無かった。

「…わかりました。では、狩人の内四名程を城門に配置します。残りはパーティー会場の警備を担当します」

なので、予めジョン、ヘンリーとも話し合っていた事柄を述べる。

漂っている誘魔の香は、間違いなく魔物を引き寄せている。なんらかの引き金によって、魔物が襲ってくると見て間違いはない。

だから、ヘンリー、アーサー、エリス、マシューを城門で警戒させ、残りの狩人でパーティーに潜入してくるだろうイグナディアの刺客を排除する。そういう目論見だった。

「ですので騎士の方々と打ち合わせを――」
「いや、待ってくれ」

事務的に話を進めるリディに、公爵が待ったをかける。怪訝そうに見返したリディは、公爵の目に、打って変わって悪戯っぽい光を認め、嫌な予感が背筋を走る。

そして悲しきかな、嫌な予感というのは当たるものだ。

「パーティーで護衛に当たる狩人達にも、盛装して頂こう。君は勿論ドレスだ」
「……は！？」
「我が家は、仕えてくれる騎士達にも出会いのチャンスをという方針でね。警護をして貰う傍ら、パーティーを楽しんでも貰うのだよ」

なんだその方針は！

危うく叫びそうになりながら、リディは反論を試みる。

「そ、そんな事をすれば警備がザルになるのでは…？」
「安心したまえ、我が騎士達は優秀だ。美しい令嬢に一瞬目を奪われようとも、我が妻や娘から目移りなど決してせん」
「それ…っ」

ただの親バカじゃないのか――！！というリディの悲痛な叫びは、どこからともなく忍び寄ってきていたメイド達に羽交い締めにされながら、虚しく木霊した。

――どこかから悲痛な絶叫が聞こえた気がして、ヴィルヘルムは顔を上げた。

「…？」

「どうかしましたか」

彼の前には、どこか疲れた様子で男が佇んでいる。

名をヨセフという彼は、ヴィルヘルムとそう年が変わらないが、狩人だ。魔術師一辺倒のヴィルヘルムと違い、どこか隙の無い立ち姿をしている。

その彼は、つい先程彼のメイド達によって強制的に着替えさせられたせいで、普段からは考えられないような豪奢な服に身を包んでいた。元々が中性的な面立ちのおかげか、なかなかどうして似合っている。軽い感じの貴族にちゃんと見えていた。

「…今、女性の悲鳴が聞こえたような」

呟けば、ああ…とヨセフが部屋の隅にいたウリスと目を合わせ、がしがしと頭を掻きかけ、それが梳かされているのを思い出してかむず痒そうに手を下ろす。

「俺達の仲間でしょう。俺達と同じ目にあったんだと思いますよ」

若干、恨めしそうな目でヨセフは彼を見た。ウリスからも似たような視線が送られるが、ヴィルヘルムは苦笑する。

「我慢してくれないかな。君達だけ騎士の格好をしていたら、逆に目立ってしょうがないんだ」

「そりゃ、頭では解ってますけどね…」

なぜこんな服装を、という思いを隠さない二人に首を竦めつつ、ふと引っかかってヴィルヘルムは問いかける。

「狩人達に、女性などいたかな」

一昨日の夜はいなかったと思うのだが。昨日も見た記憶はない。

「ああ、ヴィルヘルム殿は会ってないかもしれませんねえ。一昨日は外にいましたし、リディさん」

のんびりとしたウリスの言葉に、しかしヴィルヘルムは書類を繰っていた手を止める。

「…リディ？」

「ええ、狩人史上異例の二人パーティー『自由時間（フリータイム）』の片割れですよ。エリオット殿の護衛についてる筈ですけどねえ」

拉致されたんですかねえ、とにこにこと笑うウリスを余所に、ヴィルヘルムは僅か目を細めて虚空を仰ぐ。

「…どうかしました？」

「…いや」

脳裏に翻るのは、幼い頃ほんの少しだけ時間を共にした少女。けれどその記憶は色鮮やかに、彼の心に今なお焼き付いている。

（まさか、ね）

ヴィルヘルムは微かに胸に湧き上がった想いを、首を振って振り払い、自らも盛装をする為に立ち上がった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「…ほう。やはり決行するのか、エアハルトよ」

暗い部屋の中で、男は唇を歪めた。覗き込む水盆に、刹那色が閃き、消える。

「狩人など、他愛もない」

どうやら泳がせてこちらの正体を探るつもりだったらしいが、愚かな事だ。中位程度の精霊で、自分の魔術に敵うものか。

「イグナディアが成功すればよし、しなければ…」

昏い笑みが浮かぶ。ぞっとするような気配が、周囲に満ちた。

「街ごと、滅びるがよい」

魔術師が嗤い、貴族が身をひきしめ、狩人が奔走する中で。
レティシアの御披露目パーティーは始まった。

第二話　陰謀の宴　（4）（後書き）

次が山場になるかと…
貴族の親なんてみんな親ばかです↑偏見

第二話　陰謀の宴（5）

第二話　陰謀の宴（5）

明るい広間。さんざめく人々の声。視界を彩る花やドレスの鮮やかさ。広間の端々に設置された白いテーブルの上に、豪華に盛りつけられた贅沢な食事。

（…疲れた）

“ライジング”の魔術師ヨセフは、開始一刻程で早くもうんざりしていた。

（まさか、今更こんなことにかりだされるとはね。俺には一生縁はないと思ってたけど）

「ヨセフ、ヴィルヘルム殿の誘魔香封印したか？」

壁に身を預けていた彼に近付いてきたのは、眉目秀麗な黒髪の青年。

こちらもヨセフに負けず劣らずうんざり顔ではあるのだが、どこか所作に気品が漂い、貴公子といった表現が正しい。自分とは大違いだ。

さすが貴族出身（仮）、と内心皮肉げに思いながらヨセフは頷く。

「ああ。さっきやっといた」

「ならいい…」

疲れた様子でヨセフの隣に並び、ルイスは物憂げに髪をかきあげた。雑な仕草であるにも関わらず絵になりそうなそれ。

（そういう仕草が注目を浴びる原因だってのバカ…）

遠くの方から陶然と彼を見つめる令嬢達を横目に見、ヨセフは短く息を吐く。

が、気付いた様子のないルイスはぶちぶちと毒づいていた。

「うざい、本気でうざい、断っても断ってもわいてくる…！だから女は嫌いなんだ」

「そう言うなって。ほら、レティシア嬢とかすげえ美少女じゃねえか。お前声かけられたんだろ？」

今宵の主役、レティシアは天使もかくやという美しさだった。

滑らかな金髪は綺麗に巻かれ、青い髪飾りがさらに美しく彩りを添えている。元々人形めいた顔立ちは、派手すぎない化粧でますます可愛らしくなり、淡いピンク色のふわっとしたドレスと共に、見る者全てを魅了するような美少女ぶりだ。

「冗談いうな。大体一介の狩人に声かけるなんて、何考えてんだあのお嬢様」

が、ルイスにはなんの影響も与えていないらしい。彼は本気で迷惑そうに眉を寄せていた。

「罪作りだなあったく。モテる男はいいねぇ」

どこからともなく現れたジョンが、からかう調子でルイスの肩を叩いた。むっとしたルイスが、よくない、と呻く。

「単純にモテる奴を羨む奴らにはわからねえんだ。避けても避けてもよってくるストーカーもどきに遭ってみろ。モテたいなんか思わなくなる」

秀麗な顔を歪めて吐き捨てるルイスがどこまでも本気なのを察し、それ以上のからかいをジョンは止める。これ以上殺気をまき散らされてもマズい。

「けど女嫌いなら、じゃなんでお前リディと組んでんの？あいつも女の端くれだろが」

ヨセフが首を傾げた。ルイスが蒼い目を呆れたように細めて答える。

「お前な。あいつとそこの令嬢比べてみろよ。無礼にあたるぞ」

「……」

「……」

無言でヨセフとジョンは近くのご令嬢を眺め、脳裏にリディを浮かべる。そして直ぐ様脳内から抹消した。

「…確かに」

「こりゃ侮辱だ」
「だろ。…そういや本人は？」

ルイスは会場を見回した。

そこここで貴族同士の挨拶が交わされ、そろそろダンスでも始まろうかという頃合いだが、一向にリディが現れる兆しがない。

「女は準備が大変なんだろ。午後悲鳴聞こえたし、抵抗してたら時間かかってんじゃね？」
「…成程」

自分と同じかもしくはそれ以上の目に遭っている相棒を思い、ルイスは目を遠くする。

そして彼と、同じような事を考えていた他二人も、思案に耽る余り周りが不意に静まり返ったのに気づかなかった。

「しかし大丈夫なのかねえ。確かにあいつは別嬪だが、どうもドレスが似合うとは」
「同感。想像出来ねえ」

「何が想像できないって？」

だからこそ響いた声にぎょっとして振り向き、そして絶句してしまった。

綺麗に編まれた、薔薇を思わせる緋色の髪に、真珠のように肌理細かい白い肌、芸術品の様に完璧に配置された顔のパーツ。細く均整のとれた体が纏うのは、薄紫の紗を重ねたようなシンプルなドレ

スだが、しなやかな体つきによく似合い、かつ髪と鮮烈な金色の瞳とを中和し、穏やかなコントラストを作り上げている。

「…リディ？」

周囲は言葉もなく彼女を見つめ、半信半疑、といった調子でかけられたルイスの声に、絶世の美少女ならぬリディは唇を歪めた。

「他に誰がいる。君達こそ人の事言えないだろ」

可憐に見える唇からは怨磋の念すら漂わす台詞が漏れる。それでようやく茫然自失から逃れたジョンが、参った…と口元を手で覆う。

「悪い。見くびっていた…。凄まじい別嬪さんだなリディ」

「黙れ。殺されたいのか」

最高に不機嫌に、この場においてレティシアに勝るとも劣らぬ美貌は、盛大に歪んだ。

「お前、剣は？」

「外された。ナイフは仕込んであるけどね」

緩やかなテンポの曲で踊る貴族達を眺めながら、ルイスとリディは小さい声で会話する。散々ジョンやヨセフにからかわれたあとなので、外面はともかく内面はすこぶる不機嫌である。

「いざとなったらそのへんの騎士のを借りるよ。――ったく、面倒な」

給仕から受け取った、口当たりのよいワインを口に含み、舌で転がすリディ。

化粧のせいか、いつもより睫毛が長く繊細に、唇が妙に赤く見える横顔から、無理矢理ルイスは視線を引き剥がした。

（見とれるなんて、俺らしくもない。相手はリディだぞ）

「その足で動けるのか？」

視線をリディの足に移す。細いながらもしなやかな筋肉に包まれたそれは、いつもの彼女からは考えられないような、華奢で踵の高い靴を履いている。

だがリディは肩を竦めた。

「それなりに慣れてるから平気だよ。ホントにやばかったら脱ぐし」

コンコン、とヒールで床を叩く。公爵家の私物なだけあって、上質の材質で出来ているようだから、無様に壊れると言うこともないだろう。

「…けど…」

そこでふと目を細めて、リディは周りに視線を散らす。

「鬱陶しいな…主に視線が」

先程からずっと、ちらちらと自分達を窺う視線を感じている。男も女も老いも若きも関係なく、壁際に佇むルイスとリディに視線を向けているのだ。

「さっきまでは目だけじゃなかったぜ…お前が来てから、だいぶ虫除けになったみたいだが」

リディが来るまで令嬢達のアプローチに遭い続けていたルイスがげんなりと言えば、リディはくすくすと笑う。

外面だけは取り繕おうという考えが根底にある為か、笑い方だけみれば非常に上品だ。

「ご愁傷様。…でも、その虫除けも続かないみたいだ」

時間を追うごとに、距離を詰めてくる者が増え始めている。

視線が、好奇心から熱を帯びたものへと変わりつつもあるのだ。

「狩人は野蛮って考えてるんじゃなかったのかよ…」

ルイスがぼやく。束の間の休息も終わりか、と背を浮かしかけた時、不意にリディが彼に訊ねた。

「ルイス。君、踊れる？」

「あ？ああ、一応」

なら、とリディは唇を吊り上げる。その目が猫のように笑んだ。

広間に流れる曲が終わりに近付いていく。それに伴ってそわそわと自分達を見出した貴族達を横目に、リディは見た目だけは完璧な淑女の微笑みで、ルイスを見上げた。

「虫避(おんな)けに、一曲どうだ？」

ルイスもフッと笑った。悪戯を思い付いた様な、意地の悪い笑み。それを貴公子然としたものにすり替えて、ルイスは流れるような動作でリディに向き合い、軽く身を屈めて片手を差し出した。

「いいぜ。お手をどうぞ？レディ」

エアハルト公爵家第一子、ヴィルヘルムは、人々のざわめきの間をすり抜けてダンスの一群に加わってきた二人組を見、目を見開いた。彼の横で、エリオットが小さく「お」と声を上げる。

ヴィルヘルムらのみならず、広間中の視線を集めている容姿端麗の男女は、視線など気にも留めずに優雅にお辞儀をしあい、曲の開始と共に滑るように足を踏み出した。

曲は、テンポの速いアレグロ・ワルツ。完璧に踊りこなすのは難しいと言われるそれを、しかし二人は難なくくるくると舞う。

「…踊れたのか、あの者達」

エリオットが感心したように呟く、さらにその横で、レティシアは顔を強ばらせていた。

どんな令嬢の誘いも、自分の誘いすらもあっさりと振っていた青年は、今目の前で軽やかに踊っている。彼の相手を務めているのは、彼と狩人のコンビを組んでいるという少女で、レティシアでは決して出来ないような軽やかな脚捌きで滑らかに踊っている。

ぎゅっと唇を噛み締めた。――悔しい。

生まれて初めて、妹が嫉妬という感情と戦っている傍ら、ヴィルヘルムは愕然と踊る二人を見つめていた。正確には、赤い髪の美しい少女を。

「…まさか…」

その呟きは小さく小さく、隣にいたエリオットにすら聞こえない音量で空気に溶ける。

刹那に目の奥に閃く、幼い頃の回想。

「…リディ、」

囁きをエリオットが意味を持って聞き取る前に、曲が終わりを迎

えた。二人はそれ以上踊る気はないようで、しかし息一つ乱さず優雅に礼をする。

「…素晴らしい」

公爵が感動した風に呟いた。が、その時。

「ぐぁっ！」

鋭い悲鳴が彼の背後から上がった。寸前に耳元で唸った飛翔音にもつられて後ろを見、公爵は絶句する。

彼のすぐ後ろで、貴族然とした男が掌をナイフに貫かれて悶えている。訳が解らず凍り付いた空気に、カツンという音が響いた。

「ジョン、ヨセフ、エドガー。入り口右の青い服と、左隅の緑、中央の紫」

「はいよ」

礼をした状態から、目にも止まらぬ速さで果物ナイフを投擲していたリディの指示に、狩人達はすぐに頷いて従った。僅か、もみ合うような音が響くが、間もなく静かになる。

ダンスを踊っていた時の可憐な美少女然とした姿はどこへやら、背筋が冷えるような冷笑を浮かべたリディが、自らが投擲した男に近づいていく。

「甘い。皆の注目が一か所に集まってれば容易いとでも思った？こんな罠にも気付かないなんて、暗殺者の名が泣くよ」

硬直している公爵一家をすり抜け、リディはナイフで貫かれた己

の右手を左手で掴む男を嗤った。

「きさま…」

睨み上げる男を、リディの隣に並んだルイスが、傲然と見下ろして詰問する。

「吐け。魔術師はどこだ?」

『魔術師はどこだ?』

「役立たず共が…」

男は水盆を見つめ、苦々しげに吐き捨てた。いくら武闘派の狩人達が相手とはいえ、かすり傷すら負わせられず捕まるとは、使えないにも程がある。

「仕方ない」

しかし苦々しげな口調とは裏腹な愉悦を口元に刻み、男は何事かを唱える。湧き上がった邪な気配に、彼は手を振って言った。

「――行け」

「…、くく…」
「――何がおかしい」
腕を抑えたまま低く笑い出した刺客に、リディが眉をひそめる。
「愚かな…、大人しく我らに殺されておけば良かったものを。この街ごと滅びる運命を、貴様らは選んだのだ」
静まり返った広間のあちこちから、息を呑む音が響く。
動揺する貴族達を余所に、狩人達はつと視線を鋭く尖らせる。
「エアハルトよ、自らの街と共に滅びるがいい。そしてビグナリオンごと倒れてしまえ」
半ば狂ったような怨磋の声が終わるとほぼ同時。硝子が砕け散る轟音と共に、広間に黒い影が飛び込んできた。
「っ！」
「ちっ」
ルイスとリディが咄嗟に飛び退いたそこに、次の瞬間巨大な異形が降り立つ。
そしてその場から動かなかった刺客の男は、土埃が収まった頃には物言わぬ骸と化していた。

悲鳴が上がり、皮きりに広間はパニックの渦に巻き込まれていく。幸い振ってきた硝子による被害はなかったらしいが、目の前に現れた異形に、普段戦いと無縁の者達が耐えられる訳もない。

阿鼻叫喚のもと、一気に大扉に人が押し寄せた。

そんな騒ぎを尻目に、狩人達は速やかに円陣を組んで異形を取り囲んだ。取り押さえていた刺客達は騎士に引き渡し、貴族達の退去を手伝うように指示する。

「…グリフォン、か」

貴族達に決して向かわせないように気を張り詰めさせる中、リディが呟いた。

獅子の体躯に鋭い角、猛禽類を思わせる長い爪と、異常に伸びた象牙のような牙。吐き出す呼気は鼻を塞ぎたくなる臭気を帯び、体皮は毒々しい緑色で、なによりぎらつく黄土色の眼が見る者を射竦ませる威力を持っている。

「騎士団。ここは俺達に任せて行け。公爵一家をお守りしろ。あと貴族達をこの城から出すな。出れば危険が増すと言え」

腰に差していた剣を抜きつつ、ジョンが言い放つ。茫然としていた騎士達は我に返り、慌てて残っていた公爵一家を取り囲み、後退する。

それを抑え、公爵が訊ねた。

「待て。危険が増す、とはどういう事だ？」
「…恐らく、間もなくこの街は魔物の襲来を受けるでしょう」
狩人以外、絶句した。グリフォンから目を反らさず、ウリスが言葉を紡ぐ。
「魔物を飼い慣らす方法は存在します。面倒な手順は必要ですが。この魔物は恐らく、敵方の魔術師に使役されています」
「この街自体から、幾らか誘魔香の気配がする。多分街の外には既に魔物が集まり始めてるだろうよ」
弓を構えつつエドガーが言った。ヨセフが精霊を喚びながら、彼の後ろに下がる。
「足止めにグリフォンだからな。それなり強力な野郎だろ。だが誘魔香の量から行くと、そうは集まらねーとは思うけどなぁ…決定力不足なのに、わざわざするか？」
「さっさと片付けて城門行こ。エリスが待ってる。おじさん達、早く逃げて？邪魔だから」
不審げなヨセフを流し、ニールが子供特有の単刀直入さで公爵を振り返った。しかしそれに反論できる余地はなく、騎士団を伴って公爵達は広間を出て行く。
その際、その一団をちらりと振り向いたリディは、ずっと彼女を見つめていたヴィルヘルムと目が合った。
「……」
「……」

物言いたげなヴィルヘルムにリディは肩を竦め、それからは一顧だにせずグリフォンに向き直った。

その背をしばらくヴィルヘルムは追っていたが、やがて首を振って思考を切り替え、襲い来る脅威に向けて、顔を険しくした。

第二話　陰謀の宴　（5）（後書き）

ようやく騒動。長かった…。
人が多いと、動かすの難しいですね…。

第二話　陰謀の宴　（6）

第二話　陰謀の宴　（6）

「さて、どうする？」

狩人だけになった広間で、グリフォンとじりじりと睨み合いをしながらジョンが言う。

「城門に向かいましょう。多分平気だとは思いますが、もしかしたら人間も攻めてくるかもしれませんしね」

ウリスが後退しながら答えた。彼は治療術士の為、戦闘能力は持たない。

そしてその台詞にルイスは少し苦笑する。

なんだ、皆裏の事情を悟っていたらしい。

「黒幕は…」

「私が探す」

エドガーの言葉を、リディが引き継いだ。ドレスの切り込みから長いナイフを引き抜き、淡々と喋る。

「幾つかアテがある。始末は私に任せて、皆魔物を駆逐して」

「わかった。任せるぜ」

ヨセフがあっさりと頷いた。リディの身体能力と魔力が対魔物戦で使えないのは痛いが、ルイスもいることだし、何より元凶を絶つのが最優先だ。

「じゃ、さっさとこいつ倒そうぜ」

彼らに囲まれるグリフォンは、低い唸り声を先程から上げ、威嚇し続けている。鋭い牙を打ち鳴らし、今にも飛びかからんばかりに狩人達を睨んでいる。

各々武器を構える中、不意のビリッという布を裂く音に、何人かがぎょっとして振り向いた。見れば、リディが躊躇う様子もなくドレスを中程から切り裂き、白い脚を剥き出しにしていた。

「…何してんだ？」

呆気に取られた風情のジョンに、リディは一言「動きにくいんだよ」と応え、つと目線を上げる。同時に、爪をカチカチとわななかせていたグリフォンが身を低くし、勢い良く跳躍した。

「！リディさん！」

グリフォンが跳躍した方向正面の少女に、思わずウリスが叫ぶ。剣士と聞いているとはいえ、あんな細腕で、武器はあんなナイフ一本、しかも着飾っている今彼女がたった一人でグリフォンに太刀打ち出来るとは思えなかった。

が、慌てて聖属性結界を張ろうとする彼を余所に、リディは流れ

るように足を踏み出した。

空を跳躍するグリフォンに対し、リディは重心を落として二歩前に進み、次いでタンッと軽く床を蹴る。華奢な靴を物ともせずに迫る躯を、グリフォンは予想だにしなかったのだろう。一瞬動きが鈍った。

そしてその一瞬は、リディ・レリア相手には致命的だった。

銀色の光が獣の喉元で一閃し、一拍後鮮やかな紅が噴き出した。

「すっげっ…」

ヨセフが空中での僅か五秒にも満たない攻撃に、畏怖を伴う呟きを漏らした。鮮烈な光景に、知らず血が沸き立つ。あの異形の前に躊躇いなく飛び出し、喉を掻き切るなど、並大抵の事ではない。

だがリディは着地すると、不満げにナイフの血を払った。

「斬りにくい。仕方ない、一回取りに行くか…」

その背後に倒れ伏す魔物はびくびくと痙攣し、――走った火の気配にニールとリディは目を見開いた。

「なっ…！」

獣の体躯が一瞬膨らんだかと思うと、それは刹那、破裂音と共に弾け飛んだ。

一瞬前にウリスが構築していた結界が、獣を内部から破裂せしめた魔術と、飛び散った血肉から狩人達を守る。しかし、爆散したの

はそれだけではなかった。飛散した魔力の臭いに、ジョン以外が顔を歪める。

「誘魔香っ…！」

「くそっ、やられた！」

これが狙いだったのだ。恐らく敵の魔術士は、この程度の魔物が瞬殺される事は見抜いていたのだろう。だから予め魔物の体内に誘魔香を仕込み、倒されると同時に発動する火の魔術を仕掛けたに違いない。

魔物一体にまるまる仕込まれた誘魔香の量は、想像を絶する。この分では何体の魔物がおびき寄せられるのか――狩人達の間に、戦慄が走った。が、鋭い声が鞭のようにその場を打つ。

「ぐずぐずしている暇はない。早急に外壁に向かうぞ。リディ、早く行け。黒幕を逃がしては元も子もない」

「――、わかった」

普段とは打って変わったジョンの冷静な指示に、一瞬躊躇したものの直ぐにリディは頷き、広間を飛び出していく。

残る狩人達に向け、彼は強い視線を向けた。

「ウリス殿、あんたは狩人協会に行ってくれ。この街にいる狩人をかき集めて欲しい。ヨセフ、ルイスは風魔術で先行しろ。俺とエドガー、あとニールも直ぐに向かうぞ」

「わかった」

「あ、待てよ！」

立ち直りの早かったルイスが素早く風魔術を編み、広間をあっという間に出て行く。少し遅れてヨセフも続き、ウリスも青ざめた顔ながら走っていった。

「ちょっとじっとしてろよ」
「うわっ！？」

ジョンは自らも走り出そうとしていたニールを肩に担ぎ上げると、エドガーと視線を一瞬だけ合わせ、駆け出した。

「レリア殿！」

仕事にあたって頭に叩き込んだ、城内の最短距離を辿ってリディが階段を駆け上がっていると、不意に声がかかると同時に何かが降ってきた。

「！？」

反射的に掴み取り、リディは驚く。着替えの間に預けておいた筈の愛剣と、簡素な靴。

一体誰が、と上を見上げ、彼女は目を丸くした。

「エリオット殿！？」
「早く行ってくれ！すぐに俺と兄上も援護に向かう。貴殿も頼む！」
階段の先の吹き抜けからの声にリディは即座に頷いて頭を下げると、素早く踵の高い今の靴を脱ぎ捨てて簡素な靴に足を突っ込み、一気に今まで駆け上がってきた階段を飛び降りた。

―――――――――――――――――――――――――

「くく…、かかりおったな」
男は満足げに昏い嗤いを浮かべた。
その眼に浮かぶのは嘲りと愉悦。単純で愚かな狩人達。街の外に急速に集まりつつある魔物の数は、数える事など考えつきもしない多さだ。いかな者でも、敵う訳がない。
例えビグナリオン王家が援軍を出そうとも、着く頃には全てが終わっている。
「フフ、陛下は私めの贈り物、喜んで下さるに違いない」
闇の中で嗤い続ける男の目には、うっすらと狂気すら滲んでいた。

「ヘンリー！魔物はどうだ！」

ルイスは歩哨壁に着地するなり、厳しい顔で外を見据えている男に訊ねた。ヘンリーは僅かに瞠目して振り向いたが、すぐに険しい顔に戻ると唸る。

「とんでもねえ。――見ろ」

促されてルイスと、そして追いついたヨセフが外を覗き込み――絶句した。

街の外に蠢く無数の塊。目にしたことないような大群は、全てが忌まわしい形を伴う魔物だ。

「連中、誘魔香をこの近辺にいくつもしかけてやがったらしい。普段ならそんなことすりゃあ狩人の誰かか街の人間が気付いたろうが…この人手だ。かき消されっちまったんだろう」

ヘンリーが苦々しげに吐き捨てる。予想していた以上に不味い事態だ。

「唯一救いは、この街が森を背にしてるってこった」

森にも多数の魔物は存在する。しかし森の魔物は縄張り意識が強く、自らの棲まいから離れる事は殆どなく、またたとえ同族の魔物であっても、縄張りに侵入されたならば容赦なく襲い掛かる。つまり、背後の森から襲われる危険は、まずない。

周囲にアーサー、エリスの姿を認めたヨセフが不審げに訊いた。

「マシューは」

「結界作るって言って街中に向かったぜ。なんでも要（かなめ）があった方が強力だとか」

「――成程」

大規模結界は、要がないと効果が薄い。勿論要なしでも張れるが、広範囲なだけその場その場にかけられる魔力が少なくなる。その為、何ヶ所かに魔力を通す材質の道具を設置し、薄くなりがちな部分を強化するのだ。

そんなやりとりをしている内に、マシュー本人が戻ってきた。線の細い顔は険しく、強張って見える。

「皆さん――ウリスさんは」

「狩人を集めに行った。もうしばらくしたら来ると思うけど」

「そうですか。結界を手伝って欲しかったのですが――仕方ありませんね」

この街を覆う結界を作ろうというならそれは、多大な魔力を必要とする。マシュー一人でやるとなると、要を作ったとはいえ負担はかなりのものになってしまうが、もう時間がない。

覚悟を決めたマシューが結界を構成しようとした時、あー、という呻きが別の人間が上がった。

呻き声の主、ルイスは頭をがしがしと掻き毟ると、しょうがない、とぼやいた。

「手伝ってやるよ。貴方一人じゃこの規模の結界は幾らなんでも厳しいだろ」

胡乱げな視線が彼に集まる。

「何言ってんだ、お前聖属性は…」

ヨセフの言葉に肩を竦め、ルイスは無言で掌の上にごく小さな聖属性結界を構築した。

皆、絶句する。

「――という訳だ。マシュー、作るぞ」

パン、と軽い音と共に手乗り結界を破砕させ、ルイスはにやりと笑ってみせた。

街の通りを走っていたリディは、頭上を覆った気配に足を止めな

いまま顔を上げた。

（聖属性結界…）

最初はマシューとウリスかと思ったが、慣れた気配を感じ取って顔をしかめる。

「あの馬鹿」

既に剣も魔術も使える事が露呈している。その上聖属性持ちという事まで明かして、必要以上の注目を浴びる気か。そう毒づきかけたが、すぐに首を振った。

今は、個人の事情にかかずらっていられる状況ではない。彼はそう判断したからこそ、今結界を張っているのだ。

そして、自分が今すべき事は一つ。

角を曲がり、一見何の変哲もない露店で急停止する。

街中にもたらされた警報で、人っ子一人いない通りでしかし、その露店にだけは人がいた。掛布の奥からゆっくりと顔を出す。

薄汚れた顔には、金歯が光っていて、ぼさぼさの白髪頭の男は、どう見ても胡散臭い。

男は、破れたドレス姿のリディに軽く目を見開いたが、すぐに顔をにたりと歪めた。

その人間に、リディは叩きつける様に言った。

「率直に言う。今すぐ情報を寄越せ。――魔術士は、どこだ」

不安と恐怖で異様な空気が漂う中で、しかしその男は一切負の感情など見せずに、にやりと笑う。

「いいでやすよ。ただ見たとこアンタは金を持っていないようでやすねィ。代わりに、アンタの情報売らして貰っていいですかィ？」

リディは痛烈に舌打ちした。全く抜け目の無い奴だ。しかし今、金の持ち合わせも時間もないのは事実。迷ったのは一瞬で、リディは瞬きすると頷いた。

「いいだろう。くれてやる。――どこだ」

その応えに、男は心底嬉しそうに笑った。

『神殿近くの、小さい空き家でさァ。ついでに忠告してさしあげやしょう。かなりの使い手やす。精々お気をつけなさると良い』

男に貰った情報を咀嚼しながら、リディは飛ぶように駆けた。

（――これが片付いたら、すぐにここを出ないと）

あの男は、とある情報組織の一員だ。情報組織の中でも裏の世界に通ずるもので、情報が深い分、タチが悪い。遠慮なく彼女の情報

を売るだろう。ルイスには悪いが、それ相応の価値はあった。

若干の後悔を振り切り、彼女は足を止める。

「――ここか」

目を閉じて感覚を研ぎ澄ます。…確かに、魔力の気配が存在している。情報屋の言う通り、かなりの使い手のようだ。感じ取れる魔力の強さが、並ではない。

リディは己の魔力を整えると、目を開いて空き家に足を踏み入れた。

――――――――――――――――――――

「これは困りましたねぇ」

目の前の光景に、しかし全く困った様子もなくのほほんと言ったのは、アイルの狩人協会支部長のシラスである。

過去、凄腕の魔術士として名を馳せたという彼は、外に広がる魔物の大軍に、驚きはしても畏れを抱いた様子はない。

「支部長、どうすんスか」

彼の背に、狩人の一人が声をかけた。

この場に集まった、つまりこの街にいた狩人の数は、リディを含め全部で２２名。狩人パーティ数にして、五つだ。本来なら、首都でもない街に五つものパーティがいるのは多い方だ。だがこの状況、千に及ぶ魔物に対しては、余りにも少なく感じられた。

「まぁ、なんとか倒すしかないでしょうねぇ。ワタシも久しぶりに魔術を使います」

まだ魔物と街の間には少し距離がある。街に来るまでに、少しでも多く数を減らしておきたい。

「んなら、早く…」
「その前に」

焦れたヘンリーを遮り、感情の読めない目でシラスはルイスを見据えた。

「アナタ、なんのつもりです？精霊に封印などかけて」

音のない衝撃が狩人達の間に走った。当のルイスは苦虫を噛み潰したような表情でシラスを見返す。

シラスは長い茶色の髪をくつくつと揺らした。

「ワタシの魔力探知を舐めないで下さいネ？見えなくとも、魔力は解る。アナタのそれが、隣の彼のものより弱いのは、おかしい」

隣の彼、とはヨセフの事だ。彼の水と風の精霊の内、水は精霊の

中でも強い力を持つ、上位精霊である。

それより弱いのは寧ろ大半の人間にとって当然なのだが、シラスの指摘にヨセフは目を剥いてルイスを見た。

「…わかったよ。別に出し惜しみとかじゃねえよ。こっちにも色々事情があるんだよ」

諦めてルイスは軽く両手を挙げ、精霊の名を喚んだ。

「アイシィ、ウェーディ、アースエイシア――封印を解いてやる」

スッ、と彼の横に精霊が顕現したのが魔術士達には解り――そして彼らは戦慄した。

姿が見えずとも感じる力。自らの精霊が畏れに震える。

「まさか…最上位…？」

漏れた呟きはエリスのもの。ルイスは肩を竦めると、眼下に蠢く魔物達に目を向けた。

「さて、シラスさん。そろそろ始めようか？俺が出したんだから、貴方も出すべきだろう」

「言いますねぇ」

シラスは笑った。同時に、彼の側にもルイスと同等並の精霊が現れる。

「血に誘われてやってきた哀れな魔物達。消えると良い」

いっそ優しささえ感じる声と共にしかし、突風が空を奔った。瞬時に数十の魔物が吹き飛ぶ。

「さぁ、狩人の皆さん。狩りの時間です」

振り向いたシラスは、にっこりと笑う。ジョンが頭を掻いて剣を抜いた。

「これだけの数だ。かなりの額が稼げるだろうな。景気良く狩ろうじゃないか」

彼の台詞に、唖然としていた狩人達に意志が戻る。
そして各々好戦的な光を目に浮かべ、得物を手に取った。

「さぁ、魔術師共、やりやがれ――！」

ヘンリーの大喝と共に、魔物達に魔術が雨霰（あめあられ）と降り注いだ。

第二話　陰謀の宴　（6）（後書き）

残酷描写がどこまでを示すのかがいまいちわかりません。でもこの程度な感じで、この作品は戦闘シーンを書いていくかと思います。

第二話　陰謀の宴（7）

第二話　陰謀の宴（7）

ギシ、と床板が軋む音に男は振り返った。今の今まで見ていた水盆は、フッと色を失う。ずっと狩人達を観察していた彼は、狩人の紅一点が消えているのも知っていた。

少々早すぎる感もするが、予想通りの出来事に男は嗤う。

「よくここがわかったな」

灯りを灯していない室内は暗く、互いの顔は見えない。けれど狩人は揺らぎもせずに立ち止まり、彼に向かい合った。

「アーヴァリアンの宮廷魔術士だね」

その言葉には少々驚かされた。よもや知られているとは思わなかったが…まぁ、大した問題でもない。

「よく知っているな。どこから訊いた？」

「答える義理はない。――なぜ、アーヴァリアンがビグナリオンを崩そうとする？あの国の女王は、他国を侵略するような性格じゃないと聞いたんだけど」

男は笑い声を上げた。狂気の混じるそれに、狩人は顔をしかめる。

「女王は何もご存知ない。しかし、私がこの国を差し上げればきっとお喜びになるだろう！ああクリスティアーナ陛下、貴女様の御前にもうすぐビグナリオンを差し上げましょうぞ」

彼の甲高く恍惚とした口調に、狩人の女は唇を歪めた。無言で腰の剣を抜く音がする。

「成程ね。トチ狂った変態の末路か。クリスティアーナ陛下もお気の毒に」

ぼそりと呟かれたそれは、男の耳には届かない。

しかし静かに室内に満ちる殺気に、笑いを収めて男は首を傾げた。

「ん？貴様、私と戦うつもりか」

「今更それ？私は君を殺すつもりで来たんだけど。平和な思考だ」

「ふ、愚かな。視ていたぞ。貴様の精霊はせいぜいが中位だろう。上位の私には敵うべくもない」

水盆で、彼女が風精霊を使役していたのは知っている。

でもそれだけだ。多少は剣を使うようだが、上位の水精霊に加えて土精霊も持つ自分が負ける要素はどこにもない、と男は疑っていなかった。

闇の中で女は僅か沈黙すると、哀れんだように嘆息した。

「これだから馬鹿は。――サンディルナ、おいで。封印を解除する」

すっと魔力が奔り、顕現したらしき雷の精霊――二属性持っていたのも驚きなのに――は、その存在だけで男を圧倒した。

「な――――!?」

バリバリと雷が宙を奔り、彼の水精霊を直撃する。

一瞬空気が引きつれた後、上位である筈の彼の精霊は呆気なく消えた。男は呆然と狩人を見た。コツ、と足を踏み出す音が響く。

「な、な、何者だお前は!?」

応えず、狩人は彼に近付いた。容赦のない殺気に男は怯え、泡を食って叫ぶ。

「ま、待て!!そうだお前、私と共にアーヴァリアンで仕えぬか!?その力ならば、確かな地位を――」

「そんなものに興味はない」

「く…そおおお!!」

絶叫と共に、土精霊が狩人に向かって飛び出す。が、狩人の前に立ちはだかった雷の精霊により、それはあっさりと消された。

その間にも足を進めていた狩人は、男の前で立ち止まると、剣を抜きはなって彼の首に突きつける。

「ひい…!」

「拘束する。アーヴァリアンにも問い合わせよう。大人しく観念しろ、変態」

冷厳に言い、狩人が男を引っ張って立たせようとすると、不意に男が狩人に体当たりする。不意打ちによろめいた狩人に、絶叫しながら男は袖口から取り出したナイフを突き出した。

「っ！」

「死ねえええええ！！」

咄嗟に狩人が左腕で身体を庇った時。どこからか小さなナイフが飛来し、男の肩を貫通した。

「っぐあああああっ！！」

凄まじい悲鳴と共に男がナイフを放り出して倒れ、床でのたうつ。がリディは、緊張を漲らせて後ろを振り返った。

「誰だ！」

鋭い誰何の声が空気を打つ。リディのそれに応えるかのように、ゆっくりと室内に気配が増えた。

「私はアーヴァリアンの者。その者を引き取りに来た」

姿は見えない。だが全く隙のない気配に、リディは剣を収める事はしない。

「引き渡す？冗談だろ。こいつはこの国を荒らしたんだ。その制裁は受けて貰う。それともまさかアーヴァリアンは本気でビグナリオンを討つつもりなの？」

「そのようなお心を陛下はお持ちでない。此度の事も憂いて私を遣わしたのだ」

「…貴方は誰」
「私はシルグレイ。アーヴァリアン王弟だ」
リディは驚愕した。まさか、という思いと、目の前から感じる魔力の気配とがせめぎ合い、数秒絶句する。その後、
「…失礼、致しました」
見えてはいないとわかっているものの、頭を下げる。頷く気配が返ってきた。
リディは、余りの痛みに気絶したらしい男を一瞥する。
「…けれど、公爵には伝えなければなりません。身柄を引き渡すかどうかは、雇われ者である私には判断できません」
「一理あるな」
「ですが今、街の外では私の仲間が戦っています。貴方がこの男を連れて行くなら、それを阻む術はありませんが…どうなさいますか」
半ば賭けのような問いだったが、アーヴァリアン王弟はそれを愉快に思ったらしい。軽い笑い声が聞こえた。
「面白いな。君、その男ではないが我が宮廷に仕えんか」
「ご遠慮させて頂きます」
冗談なのか本気なのかわからない声音を、しかしリディはばっさりと切る。そして踵を返した。
「その男はお好きに。お暇でしたらエアハルトの城までお運び下さい。放置して下さっても構いませんし、拉致しても構いませんので」

言いながらも、リディには男が宮廷魔術士を拉致することはないと半ば確信していた。ここで無用な軋轢を生むことを、彼はすまい。

そのままリディは出て行こうとしたのだが、笑い声と共に足音が彼女の後ろをついてきた。

「面白い。気に入った」
「…何ですか」

空き家の出口手前で足を止めて振り返る。
うっすらと外から差し込む街灯の光に、微かに二人の姿が照らされた。

薄闇の中で見詰めた男の顔に、リディは心の中で少しだけ感嘆する。

少し襟足の長い、さらりとした銀髪に、夜明けの空を思わせる紫水晶の瞳。鼻梁が高く、細面の顔立ちは、高貴さと自信にあふれて揺らぎがない。

リディより頭一つ以上大きい相手は、くつくつと肩を揺らした。

「どうせ暇人だ、魔物の掃討を手伝ってやる」
「…憂さ晴らしがしたいだけでしょう」
「ほう。随分とわかったような口を利くな？」

リディは口を噤んだ。無言で足を動かすのを再開する。

「返答なしか」

「所詮狩人ですので。この程度の無礼はご寛恕下さい」

皮肉で返し、つとリディは視線を上げた。伝わってくる振動、争いの音。

「…急ぐか」

同じ事を思ったらしい。リディと男は、同時に同じ魔術を使って地を蹴った。

――――――――――――――――

「――はあっ！！」

剣を振り下ろす。魔物の額を捉えた軌跡は、そのまま赤黒い血を引いて振り抜かれる。パン、と魔物が核を残して崩壊したあとも、白銀の軌跡は動作を止めない。弧を描いて背後に迫った魔物を両断した。

「キリねえなっ…！」

既に戦闘は白兵戦に突入していた。戦いの初めは、ルイス、ヨセフ、シラスを中心として大規模魔術が展開したが、魔物達が接近した時点で止めた。

魔術士達は人のいない所を狙って魔術を打ち込み、剣士達は何人

かで治療術師と固まり、ひたすら駆逐を続けている。ルイス、シラスは例外的に単独行動だが。

何匹目かも解らない魔物を切り捨て、ルイスは舌打ちした。どうせ人のいない箇所など山程ある。シラスのように空中に跳んで魔術を放ってやろうか――。

彼がそれを本気で実行に移す寸前、強烈な光の一閃が数メートル先を吹き飛ばしていった。

「なんだあ!?」

どこからか驚愕の悲鳴が聞こえたが、心当たりのあったルイスは唇をひくつかせて上を見上げる。

「あの野郎…」

（当たったらどうするつもりだバカリディ――！）

「…先行きます」

シルグレイが狩人の少女と街を走っていた時だ。

不意に少女が目を細めると、大きく屋根を踏み切って急加速した。

瞬く間に離れていく細い躯に、シルグレイは瞠目した。

（まさか、二属性とも最上位…！？）

王族である己を置いていくなど、並大抵の力ではない。

「――面白い！」

何度目かのその台詞を口にし、彼も速度を上げた。見る見るうちに外壁が近づいてくる。前を走る少女が、不意に雷魔術を放った。

「…おいおい」

凄まじい雷撃が外にたかる魔物を薙ぎ払う。のはいいのだが、あれは人間を巻き添えにしていやしないか。

と、彼の感覚が何かを捉える。この強烈な魔力。冷徹でいて、温かみのある氷のような気配。――覚えがある。

少女が、唖然とする歩哨壁を飛び越し、自分が薙ぎ払った事で一時的に生まれた空間に飛び降りていく。

そこで、彼女を待っていたように怒鳴りつけた青年を視線に捉えて、シルグレイは呆気に取られた。

「…あれは、まさか…ルイス？」

「当たったらどうするつもりだ！？死ぬぞ！！」
「ちゃんと当たらないように撃っただろ。ぐだぐだ言うなよ、鬱陶しい」
「お前な…！」

ルイスはどこ吹く風で彼の傍に降り立った少女に怒りを向けた。が、リディは全く悪いと思っていないらしく気にした様子もない。

ぶちっときて物申してやろうとしたが、背後から魔物が群れを成して襲いかかってきた為、舌打ちして迎撃する。リディも剣を抜くと、一息に迫った魔物の喉を貫いた。

「…こんなところで何をしているんだ、あいつは」

視線の先で暴れ回る二人。その内一方を眺めやって、シルグレイは呆れて息を吐く。全く、意味が解らない。

その時、少し離れた所から彼に驚愕の声がかかった。

「貴方は…！？」

シルグレイは振り向き、そこに目を見開いたエアハルト公爵家第一子、第二子を認めて軽く頭を下げる。

「此度は我が国の愚か者がご迷惑をおかけした。狩人殿の協力もあり、既に捕らえたが、公爵の沙汰も聞きたいと思う。その後は我が国に連れ帰り、女王陛下の裁きを受けさせたいと存じ上げる」

真っ先に我に返ったのはヴィルヘルムだった。丁寧にお辞儀をし、しっかりとした口調で述べる。

「わざわざご足労頂きありがとうございます、シルグレイ王弟殿下。色々お伺いしたい事はございますが、当面はこの魔物の駆逐が先。申し訳ありませんが、今しばらくお待ち頂けますか」

「元より原因は我らにあるからな。微力ながら協力させて貰おう」

笑いながらの返答に、ヴィルヘルムは僅かな間迷ったが、すぐに頷いた。

「ありがとうございます。――ライディア」

緑の目が戦場に向けられた、その先で落雷が起こる。歩哨壁の上に留まって魔術を撃ち、端から見ていたヨセフから、ひゅうっと口笛を吹かれる。

「ほう、最上位の雷精霊か。貴殿といい、あそこの二人といい、今日は強者に出会うものだ」

言いながら、シルグレイは精霊を喚ぶ。

「フィアル、焼け」

瞬間、黒髪の狩人が魔物達を薙ぎ払っている側に、火柱が上がった。

火柱は天を食らわんばかりの勢いで空に伸び、呑まれた魔物達は消し炭になっていく。

「さて、私も行くか」

唖然とする面々を余所に、シルグレイはエストックを抜いて跳躍し、数分前より明らかに少なくなった魔物の渦中に飛び込んでいった。

「…俺、なんか異世界迷い込んだかなあ」

桁違いの魔力に対してヨセフが現実逃避気味に呟いた台詞に、その場にいた狩人や騎士達は内心激しく同意したのだった。

側で上がった火柱。ルイスは呆気に取られてそれを見上げる。

威力はリディ並みだが、気配が違う。そしてその気配に彼は覚えがあった。

「ぼけっとするな、ルイス」

隙をついて彼に襲いかかろうとしていた魔物はしかし、さらに背後から突き出された突剣に心臓を貫かれて霧散する。

振り向きかけていたルイスは、闖入者を視界に捉えて目を丸めた。

「…シルグッ…！？」

「久しぶりだな」

飄々と肩を竦め、シルグレイは手を振った。側面にいた魔物が三匹消し飛ぶ。

「…相変わらずの魔力だな」

取り敢えず色々な疑問を押し込めてルイスが呟くと、シルグレイはにやりと笑う。

「セーブしている癖によく言う。魔術剣すら使わずに」

「魔術弓専門がいるからな。下手には使わねえよ」

視線を動かすと、少し右手を水の気配を纏った矢が切り裂いていった。件の魔術弓専門、エドガーのものである。

「つか、お前なんでここにいるんだ？」

「こっちの台詞…と言いたいが、答えてやろう。馬鹿な頭のネジが吹っ飛んだ変態宮廷魔術師が姉上に認められたいが為にビグナリオンを潰そうと画策したのを阻止しに来た」

「成程理解した。らしくないとは思ってたが、やっぱりそうか」

会話をしながらも二人は魔物を狩る手を止めない。二振りの剣が通った跡には、核がごろごろと転がっていく。

「お前の理由は後で訊くとして…、ルイス、あの赤い髪の女は何者だ?私達に全く引けを取っていないだろう」

「さあ。知らねえ」

「知らん、てお前な…」

呆れて半眼を向けてきたシルグレイに、ルイスは氷の刃で魔物を串刺しにしながら返した。

「俺達は今、狩人だ。狩人に過去は要らない。あいつが何者だろうと、俺が何者だろうと関係ないな」

「……」

シルグレイは押し黙った。言ってやろうと思うことは山のように浮かぶのだが、口に出す前に泡のように弾けて消える。

数秒無言のまま魔物を斬ってから、シルグレイはため息をついた。諦めた。

「…まあ、いいだろう。詳しい事は後だ」

それからはシルグレイもルイスも黙って戦いに身を投じ、ヴィルヘルムやエリオットの援護、各狩人の奮闘により、夜明けとほぼ時を同じくして戦闘は終了した。

第二話　陰謀の宴　（7）（後書き）

魔術弓、というのは簡単にいうと矢に魔術をかけて撃ちだす技術のことです。できる人はそうはいません。魔術剣も同様です。イメージとしては、ドラクエの魔法戦士とかの技の感じ…？火炎斬り的な…。

次で第二話は終わりです。後日談も入れますが。

第二話　陰謀の宴（８）

第二話　陰謀の宴（８）

翌日。

「うわ、いいのかなこんな貰っちゃって」
「仕事量に比せば妥当なとこだろ」
「だって１２００エルに合わせてこの核の量だよ。パンクするから他の街で換金してくれって言われちゃったけど、換金したら幾ら？ヤバいってこれ」
「それよか持ち運びが重い」
「…確かに」

むう、とリディは核が詰まった袋を睨んだ。

約束の給金５００エルを三日間、手数料で３００エルマイナス、しかし補って余りある核。まああれだけ魔物で溢れていたから当然ではあるが、公爵家の補修等で消えるだろうなと思っていた彼女にしてみれば予想以上だったらしい。が、

「主犯格の拘束に結界の構築、並びにアーヴァリアン王弟への適切な対応とすれば当然の額だろう」
「適切な対応とかしてないんだけど…」

結局アーヴァリアン王弟シルグレイは戦いに嬉々として参加し、狩人顔負けの数を屠り、主犯格の身柄の折衝をし（結局魔術士はアーヴァリアンに引き渡された）、丁寧な謝罪を述べるという、見る者を感嘆させる働きをしてのけた。

２３歳とまだ若い上に未婚、何より美麗な顔立ちも手伝って、アイルの娘達は大いに盛り上がり、うっとりしている始末である。

エアハルト公爵も、今回の件がイグナディアと、かの宮廷魔術師士人の独断であったことに大いに安堵し、ビグナリオン王家に伝えると共に、シルグレイに対し細やかな歓待をした。

ぴりぴりとはりつめていた空気は、事件の収束と共に一気に柔らかく華やかなものに戻りつつあった。

「さて、これからどうするか…」

ぽつんとルイスが呟いた時だった。軽いノックの音がして、ルイスとリディで占領していた一室に、ジョン以下“ライジング”が入ってきた。

「よう、お二人さん。疲れは残ってねえみてえだな」
「そっちこそ。お互い怪我もなくて良かったよ」

昨日の戦闘で、２２名の狩人の内１３名が負傷した。幸い重傷者は出なかったが、何度か危ない場面に遭った者は少なくない。

正直シラス、ヴィルヘルム、エリオット、シルグレイの助けがなければもっと戦いは長引き、重傷者も出ていたかもしれない。しか

し逆を言えばその状況で無傷の彼らは、ある意味一線を画していた。

「ヘンリー達は？」

「街じゃねえか？少し休ませて貰うとか言ってたぜ」

「そう。…で、なんの用？“ノナ”」

一瞬沈黙が部屋を包んだ。次の瞬間、ジョンの爆笑が響く。

「なんだよ、バレちまってたのか？」

「あの状況で傷を追わない腕と、四人パーティ、魔術弓使いと来たらね。名前も別に偽名じゃなかったし、わかりやすかったけど」

狩人に位階はない。だが、その時のトップ１０の実力を持つ者達だけは、称号を持っている。実力順に、“モノ”“ジィ”“トリン”“テトラル”“ペンタ”“ヘキサ”“ヘクタ”“オクタ”“ノナ”“デカル”というものだ。通称『十強』と称される彼らは、全狩人の憧れであり目標だ。

そして一度『十強』と呼ばれた者は、第一線を退いた後、各町の狩人協会長を務めることが通例となっている。現に、この町の協会長シラスも、元『十強』だ。

「俺は知らなかったけどな」

ぼそりとしたルイスの呟きを聞き咎め、マシューがリディに訊く。

「そう、それがお訊きしたかったんですよ、リディさん。あの魔術士の居場所にしても…誰も得られなかった情報を、あなたはどこでそれを知ったんです？」

部屋中の視線が彼女に集中した。しかしリディは軽く首を傾げる

と、くすっと笑う。

「情報は金に勝るって言うだろ？」

その口調から、誰もがリディはこれ以上喋る気はないと悟った。

ヨセフがはああ、と溜め息を吐く。

「ホント、訳わかんねーよなお前ら…」

「誉め言葉として受け取っとくよ」

にっこりと返すリディと、苦笑するルイス。見た目だけなら見目のいい、極めて普通な若者達だ。しかしそのどちらもが狩人最高峰といってもいい戦力を有している事に、“ノナ”はとても違和感を覚えた。

それを余所にリディは伸びをして立ち上がると、座ったままの相棒を見下ろす。

「次どこ行こっか」

「そうだな…」

思案を巡らせるのを見て、それまでの考えを取り敢えず追いやったジョンが声をかける。

「行くところが決まってねえなら、一緒にラーシャアルドに行かねえか？俺達は皆そこ出身なんだ」

「「ごめん、一緒には行けない」」

返事は二人同時で、彼らは一瞬驚いたようにお互いの目を見交わ

し、そして同時に苦笑いを浮かべた。

「諸事情でね。すぐにでも私達は発たないと」
「ラーシャアルドには行くぜ。…が、その前にファーデリアに寄るかな」
「ファーデリアってと…明後日から花祭だったっけか？」

エドガーの台詞にしかし、二人は「ああ…」と軽く目を見開く。

「そういやそうだっけな。リディ、それでいいか？」
「いいよ。私行ったことないし。ルイスはいいの？」
「俺も行ったことない。よし、決まりだな。公爵に暇告げてくるとするか」

行き先を決めるや否や、ルイスも立ち上がって核の袋を掴む。
部屋の戸口に向かいながら、彼らはジョン達に手を振った。

「じゃあね。マリナリオでまた会えたら」
「1ヶ月以内には行くぜ」
「あ、ああ。またな」

ぱたん、と扉が閉まる。半ば呆気に取られながら、“ノナ”は立ち尽くしていた。

「…ホントわっけわかんねー奴ら…」
「全くだ。報告書に書く内容は決まったな。『意味不明』だ」

エドガーの台詞に、面々は同意の嘆息を漏らした。

彼らの目的には、勿論エアハルト公爵家の護衛もあったが、“自（フリータイム）

由時間”の調査も含まれていた。能力未知数の、ずば抜けた強さを持つ二人組。明らかに怪しいのに身の上は杳として知れず、それでいて何かに追われている風情でもある。全く、本当に『意味不明』だった。

「でもまあ、お二人共剣士かつ魔術士かつ治療術士ってことがわかりましたから…」

「聞けば聞くだけ腹立つな。それで精霊は最上位ってなんだよ。王族じゃあるまいし」

ぶつぶつとぼやくヨセフに、あながち間違いでもないかもしれないとジョンは内心で思った。

ヴィルヘルムと知り合いらしいリディと、アーヴァリアン王弟と面識のあるらしいルイス。今現在は不可解な事象だか、彼らが王族であるとするなら納得は行く、が。

「有り得ない有り得ない。あいつら王族は有り得ない」

思わずぶんぶんと首を振りながら呟いてしまった。きょとんとしたヨセフの視線が彼に向く。

「んなこた解ってるよ。百歩譲ってルイスが王族だったとして、リディは有り得ねー。あれが王女だったら俺は泣くね」

本人達がいたら、どういう意味だと顔をひきつらせただろう。だがここにそれを否定する者はなく、暗い同意の元に話題は収束したのだった。

「――では、これで失礼致します」
「うむ…名残惜しいが、本当に世話になった。重ねて感謝する」
「本当にありがとう。またいつでもいらっしゃい。歓迎するわ」
「今度来たら、是非手合わせを願いたい」

公爵の部屋で、リディとルイスは暇を告げた。その場には公爵と公妃、エリオットしかいなかったのだが、その理由を二人は間もなく知る事となった。

「ふう…これで肩の凝る仕事も終わり。でも最後まで気持ちのいい貴族だったね」
「ああ。王家の血統だけあって力も強いし。思ったよりキツくなかった」

軽い話をしながら二人は城の出口に向かって廊下を曲がる。と、その足が止まった。

「…レティシア様。いかがなさったのですか、侍女も連れずに」

光の差し込む廊下には、レティシアが立っていた。陽の光を反射して輝く髪は、黄金のように美しい。

だがそれは、やはりルイスに感銘を与えるものではなかった。

「…ルイス様」

一言囁いた後黙り込んでしまった少女を見、リディは肩を竦めて踵を返した。

「先行ってる」

「…悪い」

軽い足音が遠ざかる。完全に足音が廊下の先に消えると、意を決したようにレティシアはルイスを見上げた。

「リディ」

廊下を進んでいたリディは、不意に横合いから呼び止められて足を止めた。

（やっぱり、駄目だったか）

このまま行けるなんて甘すぎるとは思ってたんだけど…まあ、ルイスがいなくてよかったかな。

そう内心で苦笑いしながら、リディは声の方を振り向き、頭を下げる。

「暇を公爵に告げてきました。これにて失礼したいと思います」

「――リディ！」

焦れったく、憤慨したように叫ぶ彼に、リディは内心の苦笑いを表に出した。名を呼ぶ。

「久しぶり、ヴィル」

「パーティーで見かけた時、心臓が止まるかと思ったよ。なんで君がこんな所にいるんだい」

「色々あったんだよ。…あそこにいたくなかっただけの話」

城の脇の木陰で小さく会話をする。二人を見咎める者はなく、静かな風だけが間を流れていく。

ヴィルヘルムはリディを見下ろし、微かに首を傾げた。

「…あの話かい？」

「…うん、そう。私はまだあんな事は考えたくないんだ。世界を見てみたいし、実力で生きてみたい。だから出て来たんだ」

「…そうか」

さわ、と木の枝が揺れる。吹きすぎる風に髪を靡かせて、リディは薄く微笑んだ。

「君の妹を見て、思ったんだ。…私はあそこの人間じゃないんだなって。私にあそこは合わない」

「そんな事はないよ。君はとても綺麗だった」

思わずヴィルヘルムが声を荒げると、リディは目を丸めてから呟いた。

「…誉め言葉として貰っとくね」

「誉め言葉以外の何物でもないよ」

僅かな沈黙を挟み、小さくヴィルヘルムが訊ねた。

「…なんで僕と会わないようにしてたんだい？」

ヴィルヘルムとしては、そのセリフを口にするのはかなりの勇気が要ったのだが、リディは身を縮こまらせて返す。

「…だって、バレたくなかったし。まだ帰りたくないんだ。私は今が一番楽しい。自分が何者かを忘れていられるから」

ヴィルヘルムはその台詞に、安堵と同時に複雑さを覚えた。

ややあって、しかし彼は苦笑する。

「言わないよ。僕は君の嫌がる事はしない」

「…本当？」
「本当。君は君の旅を続けなよ、しばらく。いずれ終わる旅なのかもしれないけど、楽しいんだったらそれが一番だ」
「…嫌な事言うね」
口を曲げてリディはヴィルヘルムを睨んだが、すぐに柔らかく笑った
「ありがとう。ヴィル」
ヴィルヘルムは赤面しかけ――すぐに苦い顔になった。
見るものを惹きつける彼女の笑顔は、しかし彼女や彼女と行を共にする青年にとっては、何も珍しくないのだ。
どうしようもなく――嫉妬の念が沸いた。
「じゃあ、私は行くよ。どこかで手紙は書くから。…その、言わないでね？」
「…言わないよ」
だがそんな醜い感情もすぐに霧散する。
彼女は彼女の道を行き、自分も自分の道を歩くだけだ。その道が交わるかは、まだ誰にも解らない。
なんか勝ち目なさそうだけどなあ、と苦い思いで狩人の青年を思い浮かべ、けれどあることを思いついてヴィルヘルムはリディに歩み寄る。

「……？」

「君の道行きが、幸いでありますように」

そっと身をかがめて、耳元に囁き、白い頬に口付ける。

身を離した彼女の顔は赤く染まり――なんて事は全くなかった。

「ありがとう。ヴィルも元気でね」

全く裏のない笑顔を見せ、リディも彼の頭を引き寄せて頬にキスした。そのまま手を振って、「またね」と言って駆けていった。

ヴィルヘルムは黙ってその背を見送り、頬に手を遣った。柔らかな感触は自らを高揚させたが、それだけに彼女が自分の事をなんとも思っていないのが突きつけられた気がして、僅か落ち込む。

だがすぐに切り替えると、目を上げて歩き出した。

（またね、リディ）

――――――――――――――――――――――――――――――

「…それじゃ、失礼、します」

「…お気を付けて」

ルイスは顔を伏せて駆け去っていくレティシアを見送り、小さく溜め息を吐いた。

「いいのか？折角かわいい娘なのに」

立っていた四阿（あずまや）の外からかけられた言葉に、ルイスは顔をしかめて振り向く。

「覗き見か。趣味の悪い」

「私はここで昼寝をしていたんだ。そこにお前達が来ただけのこと」

そう嘯（うそぶ）いて、四阿の中にひらりと男が降り立つ。

アーヴァリアン王弟は、もう建物に消えたレティシアの背を追って、肩を竦めた。

「しかしあの娘も見る目がないな。こんな無愛想男に。まったく我が従妹といい、理解できん」

「そういうことは俺じゃなくて女に言え。俺の知ったことか」

吐き捨てるルイスに、シルグレイは興味深げな目を向けた。

「正直驚いた。お前が女と旅をしているとはな」

自他共に認める女嫌いのルイスが、規格外とはいえ女と共に旅をしていると知った衝撃は計り知れない。思わず自分の頭を殴りたくなったぐらいだ。

「言っただろ。…あいつは俺をそういう目で見ない。ただ対等な相手として俺を見てくれる。…それが嬉しかったんだ」

とすん、と壁に背をつけてルイスが呟いた。シルグレイはそれに目を向け、くっと笑う。

（…対等が嬉しいという割には、不満げな色も見えるがな）

「…何だ」

「いや、なんでもないさ」

笑いを収めると、ふとシルグレイは真面目な顔になってルイスに向き直る。

「お前は、本当にあの娘の来歴を知らないのか？」

答えは簡潔だった。

「ああ。探る気もない」

どこまでも嘘の色合いのない口調に、シルグレイはしばしルイスを凝視し、それから肩の力を抜く。

それならそれで、いいのだろう。

「引き留めて悪かったな。あの娘を待たせているんだろう。行け」

「……」

「なんだ」

ルイスは拍子抜けしたようにシルグレイを見つめ、

「行かせてくれるのか」
と呟くように訊いた。
「阿呆。今のお前を無理矢理止めた所で私が返り討ちにされる事など見えている。それにお前の気持ちはよく解るからな。――精々足掻くがいいさ」
「足掻くって…」
ルイスは渋い顔になったが、結局はシルグレイに頭を下げることにした。
「感謝する。――またな」
「ああ。気が向いたらうちにも来い」
「そのうちな」
ルイスは蒼い目を笑ませて踵を返す。シルグレイはその背を見送り、口元に笑みを浮かべて、柔らかな風に再び目を閉じたのだった。

「急ごう。ファーデリアの花祭は3日あるけど、ここからだと最終日がギリギリだ」
「うん、そろそろ誰か来そうだし。急ぐに越した事はないね」

魔物の恐怖も去り、いつも通りの活気に溢れるアイルの街を、馬を引いた二人の男女が早足で通り抜けていく。

その一角で、彼らをふと見た男が首を傾げて呟いた。

「あれは…まさか？」

視線の先で、彼の顧客が雑踏に消えていく。しかし、彼女の隣を歩いていた青年、あれはもしかして。

「…つくづく、面白いお人でさぁなぁ」

くっくっと嗤う。

まっすぐな目をした、凄まじい実力を持つ少女。自分の情報を、事態の収束のために迷わず売った、馬鹿みたいに裏のない心。

「…あんたのそれに免じて、そいつの情報は売らんでおいてさしあげやすよ」

命の恩もあることですしねぇ。

男はもう一度嗤うと、露店の影に頭を引っ込めた。

アイルの街の外、遥かな草原を二頭の馬が駆けていく。騎乗する若い人影の一方が、快哉を叫んだ。

「さぁ、ファーデリアまで一気に行こうぜ！金はあるし、自由だし、やっぱり旅はいいな！」

「同感！…やっぱり私も君も、あそこが似合う人間じゃないよ」

自嘲めいた台詞に、ルイスはそうかもな、と返した。

「だけど似合うか似合わざるかに関わらず、俺達の根元はあそこ繋がってんだ。否定しても始まらないだろ」

リディは束の間黙り込んでから、そうだね、と顔を上げた。

「ぐだぐだ言ってても仕方ない。さっさと行こう！」

「だからそう言ってるだろうが！」

笑い声と軽口が、馬が地を蹴る音にかき消されていく。騒音が駆け去った後、緑の広がる平原は、穏やかな風に包まれていた。

第二話　陰謀の宴　（8）（後書き）

第二話終了です。…なんか、やたらと長くなってしまいました…。
ほのかに恋愛要素も忍ばせつつ…でも、とてもまだ「恋愛」ジャンルに登録できるようなシロモノではないですね（苦笑）
シルグレイさんは「いい男」設定です。ルイスとかはまだ子供成分が多々ある。
ちなみに『十強』の名前の由来は言うまでもなくギリシャ数字（ちょっと改変）。安易すぎてごめんなさい。

第二話　後日談（前書き）

ちょっと一人称に挑戦してみました。結構楽しかったです。（笑）

第二話　後日談

第二話　後日談

妹、レティシアの社交界デビューパーティーから約一ヶ月が経った。このひと月の間に妹も何度か夜会に出、様々な人と関わりを持つようになった――が。

「……」

「レティー…まだあの男の事を想っているのか」

窓辺に座って遠くを見、溜め息を吐く妹は、ひと月前から変わらず憂鬱そうなままだ。

原因は解っている。

ひと月前、件のパーティーの護衛に雇われた、狩人の男。戦いを生業とする狩人とは思えぬ優雅さと礼儀作法、なにより端整な顔立ちをした彼の男は、どうやら妹の恋心を完全に奪っていってしまったらしい。

「いい加減諦めろ。振られたんだろう?」

そう言うと、妹はキッとこちらを睨んできた。碧い目には水の膜が限界まで張られ、今にも零れ落ちそうだ。

ああ、兄上がここにいたら全く何をやっているんだと呆れられそうだ。生憎仕事をしていていないのだが。

「…お兄様の無神経」

…レティー、悪いがそんな潤んだ目で言われても迫力は皆無だぞ。

というか、この妹は兄から見ても随分と綺麗な顔立ちをしている。友人達が挙って褒め称えるのも解らないではない。なのに何故、よりによって、自分に靡(なび)かない男なんぞに惚れてしまったのか。なんとも女心は理解し難い。

「本当のことを言ったまでだろうが。きっぱりあっさりざっくり無理だと言われたんだろう？ここにいもしない男の事をいつまでもズルズル引き摺るな。未練がましい」

兄心から忠告のつもりで言ってやれば、妹の涙腺堤防はぽろりと決壊した。

堰を切ったように零れ落ちる雫に、さすがにたじろぐ。ていうか何故泣く。さっぱりわからない。

「お兄様の馬鹿っ！！そういう事、紳士は普通言わないわ！！」
「は！？そういう事って何だ！ていうかなんなんだ！いきなり泣くか！？」
「お兄様があんまり酷い事言うからよ！！」

絶叫に耳を塞ぐ。全く何なんだ。迷惑な事この上ない。今更ながら侍女を下がらせてしまった事を後悔する。

どうしようかと悩んでいると、ノックと共に兄上が入ってきた。

救世主登場。

「レティー、エリオット…なんの騒ぎかい？これは…皆おろおろしているよ」

「ウィルお兄様！！」

涙をぼろぼろ零しながらレティーは椅子をなぎ倒して立ち上がり、兄上に走って行って抱き付いた。

ああ馬鹿、兄上の御洋服がぐちゃぐちゃになってしまうだろうが！

「…レティー、どうしたんだい？」

当の兄上は気にしなかったようで、妹の頭を優しく撫でて、柔らかな声で訊ねている。あの真似は俺には出来ない。

「ウィル、お兄様っ…エリオット、お兄、様がっ、酷い事、言っ…」

泣きじゃくりながらの妹の言葉に、兄上は困った様に俺を見た。俺は顔をしかめて、今の会話を手短に再生する。すると兄上は、ああ…とかなり微妙な面持ちになった。

なんで兄上今ので解るんだ。俺には全然わからない。

「エリオット…それはすっぱり言い過ぎって奴だよ。レティーが傷付くだけだ」

とんとんとレティーの背を叩いて慰めながら、兄上は俺に言った。

「本当の事を言ってやった方が諦めがつくでしょう」

俺がそう返すと、兄上はあー、と天を仰いだ。駄目だなこれは、という呟きも聞こえてくる。何なんだ。

「大体あの男、同行の、何と言ったか…リディ・レリアでしたっけ？と良い仲なのではないですか。二人で踊っていましたし。横恋慕程非生産的な物はないと思いますが」

俺のこの言葉にレティーは一層肩を震わせ、何故か兄上まで刺された顔つきになった。…変な事言ったか、俺？

「まぁ仮にあいつがリディ・レリアと恋仲でなくて、その上実はどこぞの御曹司だとしてもだ。お前は狩人と婚姻は結べん」

はっきりと現実を突き付けてやれば、レティーは顔を歪めて涙を落とす速度を早め、兄上は限り無く微妙な顔つきになった。

「…兄上？」

「知らぬが仏とは有り難い言葉だね…」

うっすら青ざめさえして兄上は呟き、遠くを見つめるような目になった。

そんな兄上に俺が首を捻り、紅茶を啜る中、レティーがか細い声を発した。

「婚姻は、結べなくていいの…でも、せめて一夜、共に過ごして頂きたかったの」

冗談抜きに茶を吹いた。

げほごほと噎せる俺の傍ら、兄上はビシッと凍り付いている。ということは幻聴ではなかったらしい。なんということだ。まだ子供と思っていたのに、いつのまにそんな事を覚えたのだ。

我が妹の爆弾発言は、たっぷり五拍程部屋の空気を凍結させ、ようやく我に返ったらしい兄上の珍しい怒鳴り声で、解凍された。

「レティシア！！どこでそんな言葉を覚えてきたんだい！？言いなさい！！」

ああ、俺と全く同じ疑問を覚えたらしい、でもどこかズレている気がするのは気のせいだろうか。

「お兄様、私はもう１３です…」
「「まだ１３だ！！」」

兄上と二人息を揃えて怒鳴ってから、やれやれと俺は額を抑えた。

「レティー、その様な台詞は淑女が言うものではない」

レティーはしゅんとうなだれた。兄上も落ち着いたのか、疲れた声音で言う。

「とにかく。レティー、無理に忘れろとは言わないよ。でも、新しい出逢いもこれから沢山あるだろうから、ちゃんとパーティーにも積極的に出るんだよ」

兄上の言葉に、レティーも小さく頷いて、ようやく見えた収束に俺は息を吐いた。ああ、全く手のかかる妹を持ってしまったものだ。

僕は鼻を啜る妹と、溜め息を吐いた弟を見比べ、頭の痛みを覚えて目を閉じた。

あの後仕入れた幾つかの情報と、訪れた人間、それなりの考察の結果、ひと月前にここに彼女と共にいたあの狩人は、とんでもない人だと解った。無論これは僕しか知らない。訪れた人間たちにもしらを切った。彼女に言わないと約束したし、彼女の意に反する事はしたくない。

――それにしても、さっきのエリオットの言葉は刺さった。

ふっと苦笑が浮かぶ。…確かに、横恋慕としか言えないのかもしれない、今となっては。随分と前に出逢い、けれど鮮烈な印象がくっきり頭に残っていた少女。盛装した姿は、絶世の美少女と呼ばれるレティー以上に美しかった。

彼女が今ああしているのか正しいのかどうかは分からない。が、彼女はああして奔放に動いている方が似合う、と素直に思った。

――それに、あの人。

彼女と共にいた、女性顔負けの綺麗な面立ちの青年、あの時は知らなかったが――知らなければ良かったと思ってしまった。

彼女は知っているのだろうか。――多分知らないのだろう。彼も、

恐らく彼女の事を知らない。知っていたら、あの様に笑い合えないと思う。ただの仲間としての信頼関係は、築けないと思う。

それを考えると、今の所あの二人にそういった兆しはないように見えたけど…、まぁ、時間の問題なんだろうな。

少しだけ――ほんの少しだけ、彼等を羨ましく思う。軛（くびき）から逃れて思うままに生きる彼等を。

けれど、僕が選んだのは此処なのだ。だからせめて、貴女達へ祈りを送ろう。

どうか無事な旅を。また逢えるように願っています――と。

おまけ。

兄妹三人の会話から一週間程経ち、ビグナリオン王家主催の夜会に来ていたレティシアは、無意識にあのひとの面影を追ってしまう自分に気付いて、思わずうなだれた。

エリオットの言うことは、無神経で、馬鹿で、容赦ないが、事実だ。いつまでもこうしているのは、自分でも愚かだと解っている。あのひとは、自分など眼中にもなかった。あのひと自身も気付いていなかったけれど、あのひとの蒼い眼は、いつもたった一人を追っていた。

（――馬鹿、レティシア。お兄様の言う通りよ。新しい出逢いだって、きっとたくさんあるわ！）

「あの…」

「はいっ？」

気合いを入れ直した直後声を掛けられ、レティシアはびくっと肩を跳ねさせて振り向き――固まった。

そこにはレティシアとさほど変わらない年齢の少年が立っていた。整った顔に気遣いの表情を浮かべて、少年は口を開く。

「先程から、悲しそうなご様子でしたので…如何されたのですか」

レティシアは答えられなかった。ただひたすら、目を見開いて少年を凝視する。

薄墨色の、首の横で緩く結ばれた髪。蒼く澄んだ眼は、晴れ渡った空のよう。

――髪の色を除けば、今し方彼女が思い浮かべていた人に、そっくりだった。

「あの…？」

少年が戸惑ったように眉を寄せる。レティシアははっとして、裾を摘(つま)んでお辞儀した。

「申し訳ありません。少し、思い出していただけですの。…それよ

り、宜しければ一曲踊って頂けませんか？私、レティシアと申します」

ぽかん、としていた少年は、レティシアの名乗りから数秒後、ふっと微笑んで腰を優雅に折る。…そんな所作まであのひとに似ていて、レティシアの心臓は知らず高鳴った。

「僕は、エデルと言います。お手をどうぞ、レディ」

「…あれ？」

ひょいと一角を見たヴィルヘルムが間抜けな声を上げ、釣られたエリオットもそちらを見た。――見れば、レティシアが見知らぬ少年と踊っている。

――否。

エリオットは嫌な予感がした。あの少年が誰かは知っている。参加する時点で、このパーティーの参加者の顔と名前は覚えた。その中の一人に、彼は該当する。

しかし、しかしだ。少し前、そうひと月程前に、自分はあの顔を見た気がする。どこでだったか――考えて、エリオットは凍り付いた。

いやまさかそんなバカな。

しかし現実は無慈悲だった。そんなエリオットの葛藤に気付いたウィルヘルムが、憐れみの表情を浮かべて、彼に言ったのだ。

「彼は――」

――エリオットが白目を向いて倒れるまで、あと数秒。

第二話　後日談（後書き）

今回の話はギャグを目指しました。エリオットはあれです。鈍いです。このへんリディと気が合うかもしれません。

最後に出てきた少年は、…再登場は当分先ですが、予想通りかと思われます。

第二話はこれにて本当に終了です。お付き合いしてくださった方、ありがとうございました。三話はたぶんこれよりかなり短いと思います。

国紹介（前書き）

国名が頻出してきましたので、軽い説明を入れました。本当は地図も入れたかったんですけど、どうにもやりかたがわからなくて…文字だけで失礼します。ＶＳ　してるところは隣国同士です。

国紹介

国名
首都名
備考
王族

の順です。←

フェルミア
ユリアック
ＶＳ　ザイフィリア
極寒の土地　大陸最北

ザイフィリア
ネルダ
ＶＳ　フェルミア
不凍港所有

テーリア
クウィード
漁業が盛ん
サラディン（国王）、ローズマリア（王妹）

アーヴァリアン
ハイレイン

魔術国家
クリスティアーナ（王）、シルグレイ（王弟）

イグナディア
ウァリエン
ＶＳ　ビグナリオン
痩せた土地　大陸北西部

ビグナリオン
サリファス
ＶＳ　イグナディア
アマーリア（第一王女）

イェーツ
コロネ
中立国家　交通の要衝　大陸中央部

ゼノ
ダリス
ＶＳ　オルディアン
セレナエンデ（王女）　隔絶された土地　大陸南東部

オルディアン
リオーラ
ＶＳ　ゼノ

三大国家　豊かな森と水の都　大陸東部
ヴィンセント（王太子）

エーデルシアス
グリアン
三大国家　資源国家　強大な国家力　大陸北部
シルファーレイ（王太子）、ルイシアス（王子）、エデルフィオ（王子）

アルフィーノ）
カミール
三大国家　交通の要衝　商業国家　大陸中央部
ヘンドリック（王）

ファーデリア
ヴィレーヌ
小さいが豊かな土地　花の都
リューイガルシア（王子）、ミリアシューラ（王女）

ラーシャアルド
マリナリオ
温かく綺麗な海で観光名所　大陸南西部・最南端
アルフレイン（王子）

国紹介（後書き）

説明は、折に触れて付け足していくかもしれません。

第三話　花と雨　（1）

ユーデルシア大陸西南部に位置する国、ファーデリア。平坦な地形となだらかな丘陵、広い平野を持つ牧羊の国である。温暖な気候も手伝って自然は豊かで、四季それぞれに花が大地を彩り、のんびりと動物たちが草をはむ姿がそこかしこに見られる風景は、訪れる人々に安らぎを与え、大陸で最も平和な国として名高い。

「そのファーデリアの首都、ヴィレーヌで年に一度開かれる花祭、か。話には訊いてたけど、行くのは初めてだ」

「俺も」

首都ヴィレーヌは、花の都という別名を持っている。

その名の由来は、一年中街を花が彩る事からだけではなく、年に一度三日間、一年の幸いを喜んで『花祭』が催される事からしい。華やかで美しいと謳われるその祭りには、毎年大陸中から多くの観光客が訪れるという。

ルイスとリディもまた、それを目当てに馬を駆っていた。

「この分だと最終日の前の夕方位に着くな。どうする？少しペースを上げるか？」

馬の休息の為に寄った泉のほとりで、自らも喉を潤しながらルイスはリディに訊ねた。

「このままでいいんじゃない？最終日1日、ゆっくり朝から晩まで見られればいいよ」

「朝から晩までかよ」

「私、祭は好きなんだ」

ルイスの突っ込みにリディは楽しそうに目を細めた。

ルイスもふっと笑みを漏らす。

彼も祭は好きだった。ああも解放感に満ち溢れた場は、幼い頃から輝いて見えたものだ。どうしても行きたくて大人の目を盗んで出かけていたのは、そう昔でもない。

「――そういう風にしてると女に見えるぞ」

が、そんな郷愁とは裏腹にからかいの言葉を投げてみれば、憮然とした表情と声が返ってくる。

「どういう意味だよ」

「言葉通りだ」

くつくつと笑えば、リディは拗ねた顔をしたものの何も言い返さなかった。

言い返そうと思えば可能だが、彼女は口喧嘩でルイスに最終的に勝てた試しがない。

悔しいが彼の方が数段頭が回るのだ。藪をつついて蛇を出すのは得策ではない。

「――そういや花祭は、華やかさから恋人達の祭典とも言われてるらしいな」

ふと思い出したように続けられた台詞に、リディはきょとんとしたが、すぐににやりと笑って訊いてみる。

「何、意中の相手でもいるんだ？」

この辺まるで十代中盤の男子のノリだな、と半ば呆れながらルイスは言葉を投げ返す。

「馬鹿も休み休み言え。ただ単にそんな中に紛れ込んだら、俺達もうっかりすると恋人扱いされるかもなと思っただけだ」

リディは呆気にとられたらしい。ぽかんと口が開き、ついで盛大に笑い出した。

「なにそれ新手の冗談!?私と君が恋人!!うっわマスター聞いたらなんて言うだろうね！ひー、おかし！腹痛い！」

涙すら浮かべて笑い転げるリディを、今度はルイスが憮然と眺めた。

なんだか面白くない。

面白くないので、二人だけで狩人パーティーを組んでいる時点でそういう見識を持たれているという事は言わずに置いておく事にし

た。

リディは地面にうずくまって笑いのあまり痙攣していたが、不意にそれを止めて起き上がり、打って変わった真剣な目で頭上を見上げた。それはルイスも同様で、蒼い目を細めて空を見る。

「――何だ？」

一瞬、妙な気配を感じた気がしたのだ。どちらかだけならいざ知らず、二人共に反応したということは、ほぼ間違いなく何かがいたのだが――

「いねえな」

周囲のどこを探っても何も感じ取れない。ルイスが眉を寄せる一方、空を見上げたままだったリディが、緩く首を振ってルイスに肩を竦めてみせる。

「もしかしたら飛行種の魔物でもいたのかもね。でももういないし――気にせず行こう。別にわざわざ魔物を探し出して狩らなきゃいけない程、金には困ってないしさ？」

リディの言うとおり、この間の仕事で手に入った額は、これから先一年狩人として活動しなくても、楽に暮らせるだろう大金だった。その事ににっと笑い合って、二人は馬に跨りながら拳を突き上げる。

「祭の屋台でたらふく食ってやるぜ！」

「蜜菓子、ってのを買いまくる！」

花の祭というロマンチックなイベントから、恋人達の祭典と言わ

れるヴィレーヌの花祭。しかしそこに向かう二人の狩人は、どこまでも食欲に忠実だった。

――――――――――――――――――――――――――――――

「――ん？」

彼は視線を感じて下を見た。

ほんの一瞬だったが、赤と黒の頭をした二人の人間が、彼を見ていたようだと悟る。

「ほう。我の気配に気づくとは、なかなかの者らしいな」

唇に歪んだ笑みを浮かべて、久々に人間という存在にちょっかいをかけてやろうか、と身を翻しかけたが、ふと視界の隅で捉えた光景に、彼はにんまりと笑みを広げる。

「ヴィレーヌの花祭か。フフ、面白い事になりそうだ」

空を舞う、彼の何処までも黒い闇色の眼が妖しく光り、彼は背中に生えた翼をくるりとと回して、眼前の街へと方向を変えた。

その日の日没間際、ルイスとリディはヴィレーヌに着いた。
城壁をくぐり抜けた先に広がった光景に、リディが歓声を上げる。
「うわ、ホントに花ばっかり！」
「だな。掃除が大変そうだけど」
「…君ね」
が、夢をぶち壊す発言をしたルイスに半眼になり、無言でその脛を蹴り飛ばした。
「いてっ！」
悲鳴を上げるルイスを放置し、リディは改めて街を眺めた。
石造りの街並みは随所に花が飾られ、夕闇の中でも色鮮やかさを感じさせる。
通りには多くの露店が並び、たいそうな賑わいを見せている。あちこちで盛んな呼び込みや笑い声が響き、遠くの神殿から聞こえる鐘が、賑やかな騒ぎを彩っている。
通りには、家族連れもいるにはいるが、男女のペアで歩いている人々が目立つ。恋人達の祭典、というのは嘘ではなかったようだ。
「ルイス、宿探しに行こう。空いてるといいけど…」

「ああ。けどいいのか？ホントに露店とか見なくて」

脛の痛みから立ち直ったルイスの訊ねに、リディは肩を竦めて応じた。

「ここまでかなり急いだからね。疲れてるのが本音だよ」

「それについては全く同意だ。じゃ、探すか」

アイルから一路、ここまで走ってきたのだ。

途中、距離を計算せずに走れるだけ走った為、丁度よく街や村にたどりつけた回数は数える程しか無く、最後の方は幾らかペースを落としたとはいえ体はちゃんとした休息を求めて悲鳴を上げているのは確かだった。

そうして歩き出したはいいものの、宿を見つけられたのは、結局すっかり日も沈みきった頃だった。

「まさかどこもかしこもいっぱいとは…」

「空いてたのが奇跡だな…」

行く宿屋行く宿屋満室ばかりで、最終的に二人は少し町外れにある高級宿に落ち着いた。

相部屋だが、入れただけでも僥倖だった為、またもとよりルイスとリディがそんな事を気にする訳もない。

「…疲れた。ご飯食べて寝よう」

「賛成だ」

案内された部屋で、半ばぐったりとベッドに埋もれていた二人だったが、体に鞭打って起き上がり、女将さんにご飯の提供を頼みに部屋を出たのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ファーデリア城、とある一室。

「に、兄様、ホントに行くの…？」

小さい影が２つ、ごそごそと何か密談をしている。より小さい方の問いかけに、少し大きい、でもやはり小さい影が小声で言った。

「なんだよ、ミリアは行きたくないのか？」

「う、ううん、行きたい…でも、だいじょうぶかなぁ…？」

不安そうに縮こまる小さい影の頭を、もう一方の影が優しく撫でる。

「だいじょうぶだ。なんかあったら僕が守ってやるから。それに、年に一回しかない花祭を見のがすことなんてできない。だろ？」

「…うん！リューイ兄様がいればだいじょうぶだね！」

翌日。

「よし、食べるぞー！」

久しぶりにぐっすり睡眠を取って、身も心も元気になったルイスとリディは、朝早くから祭に繰り出していた。

まだ太陽は半分程しか昇っていないが、街自体が祭の最終日だけあって、既に賑わいを見せている。

「金、卸（おろ）しといてよかった…」

出くわす屋台屋台食べ物を買いまくるルイスの傍ら、リディは目当ての蜜菓子を早々に見つけ、幸せそうに頬張っている。

が、その手にも常人の数倍の菓子類が抱えられていることは注釈しておく。リディによると、「甘いものは別腹」だそうだ。

そんな色々な意味で変な二人は、当然のごとく道行く人々の視線を集めていた。

すれ違う人々は、二人が抱える荷物の量にぎょっとし、次いでそれらが全て食べ物であることに唖然とし、とどめに二人の顔を見て陶然とする。

そんな風に通った後に律速段階を作り出していたのだが、ルイスとリディは気にせず（というか気付かず）歩みを進めていた。

が、とある路地を横に見た時、不意にリディが立ち止まる。

どうした、と振り返りかけてルイスは、路地の奥を見つめるリディの顔の険しさに気付く。

彼女に倣って路地の奥を見ると、狭く暗い通路で数人の男達が何かを囲んでいるらしい様子が見えた。

「子供…？」

微かに聞こえた声にルイスは眉を寄せる。街の喧騒でよく聞こえないが、男達に囲まれているのは子供のようだ。

ルイスより五感が鋭いため早く気づいたリディは、目を眇めて男達を睨むと、手に持っていた荷物をルイスに渡した。

自分も荷物を持っているルイスは、当然よろける。

「うぉ！？」

「持ってて」

端的な言葉を残して、リディはすたすたと路地に踏み込んでいく。その後ろ姿を目で追って、ルイスは嘆息した。

――リディにはどうも、女子供に仇成す輩に対して目の敵にしている風がある。勿論そんな下衆はルイスだって見れば蹴倒すが、リディはもはや袋叩きの体である。一対多数で、一が圧倒的強者の袋叩きだ。

（昔嫌なことでもあったのか――いや、あいつに仇なせるやつがそうそういるとは思えないな。遭いそうになったってところか？）

相手は5人。自分が手を出す必要性も時間もないと思われるので、ルイスは荷物を抱え直して傍観者に徹する事にした。

「おい」

低い声が男達の背にかかる。振り向いた男達の目に映ったのは、恐ろしく不機嫌な顔をした赤い髪の少女。顔立ちは整い、すらりとした体つきは均整がとれている。

たちまちにやつきだした男達をゴキブリを見る目で見て、リディは言葉を重ねた。

「子供相手に何してる」

その声に、うずくまっていた子供が顔を上げた。男達に遮られて良く見えないが、まだ幼い男の子と女の子だ。

「ちょっとなぁ？ガキんちょの癖にやたらといいもの着てるからよぉ、俺達に恵んでもらおうとしてたのさぁ」

「つうかオジョーサンべっぴんさんじゃね？俺達と遊ばね？」

男達には、リディの顔に吸い寄せられて、腰の剣が見えていないらしい。下卑た笑い声と共に細い肩に伸ばされた手は、しかし逆に掴まれて一本背負いの支点となった。

「うぉっ！？」

勢い良く投げ飛ばされた男は、そのままルイスの足元まで飛んでいった。ルイスは哀れむような目で見下ろしたが、微かに身動きした男の鳩尾を容赦なく踏みつけた。

「その男を連れてとっとと消えろ」

唖然としていた男達の耳に、冷たく凍えた声が届く。リディの金の眼は蔑みと怒りで満ちていた。

「今なら見逃してあげるよ。だから直ぐ様消えろ」
「ふっ…ざけんなぁ！！」
「舐めやがってこのアマ！！」

我に返った四人の男が、怒声を上げてリディに殴りかかる。男達の後ろにいた子供達は悲鳴を上げたが、それは全くの杞憂に終わる。

「素直に逃げりゃいいものを…」

憐憫を込めてルイスが眺める先では、一方的な殴打音と聞き苦しい悲鳴が響いていた。

三十秒後。

「大丈夫？」

路地に転がる失神した男達を踏みつけ、リディは二人の子供に手を差し出した。

「文字通り瞬殺だな…」

路地の騒ぎを、大通りの目から塞ぐ役割をしていたルイスも、終わったのを見て路地に踏み込む。路地は正に、死屍累々。死んではいないが、現に5人の男達はぴくりともしていなかった。

その先で子供に微笑むリディは、まるでつい今まで男達を下していたのとは別人である。

「あ、ああ…ありがとう」

呆然としていた二人の子供の内年長（と言っても精々七、八歳）の男の子が、はっとしてリディの手を握って立ち上がる。

「ほらミリア、」

そしてなお小さい、四、五歳の女の子を引っ張りあげる。そうして初めて見た二人の顔は、幼いのもあいまってよく似ていた。

「…兄妹？」

思わずリディが訊ねれば、男の子が頷く。

「助けてくれて感謝する。まさかこんな場所で魔術を使う訳にもいかないし、僕一人じゃミリアを庇って戦う事は出来なかった。ありがとう」

年に見合わぬしっかりとした口調と、男の子の後ろでぴょこんと頭を下げた女の子に、リディもルイスも口を綻ばせた。

「礼には及ばないよ。でも君達、なんでこんな場所で二人だけでいるの？お父さんやお母さんは？」

途端、子供の顔が強張った。男の子の方が目を逸らしながら答える。

「そ、その辺にいる」

……怪しい。

リディとルイスはちらと目を見交わし、改めて子供達を観察した。

先程下衆が、『いいものを着ている』と言っていたが、それは確かだった。

精一杯庶民らしい服装を目指した感じで、でも誤魔化せていない服の生地の上質さ。男の子の腰に提がった短剣は、華美ではないが手の込んだ細工がしてあるのがよく解る。耳のピアスは、どうしたって高価なものと解る銀細工で宝飾された緑玉。

女の子の髪は滑らかで、丹念に手入れされているのがわかる。髪の上部をまとめている髪飾りは、そこらでは手に入らなさそうな代物だ。

そして何より、子供達自身の顔が、生まれながらに高貴さを併せ持つ端正な顔立ちであった。

「…屋敷を抜け出してきた感じかな？」

導き出される結論を素直に言えば、子供達の顔がピシッと固まった。どうしようどうやって誤魔化そうと考えているのが丸見えの表情だ。

リディははぁっとため息をついて頭をがしがしと掻いた。後ろでルイスも似たような表情を浮かべている。

二人とも、子供達の気持ちがよく解っていた。何せ、自分もよくやっていた事だから。

「ち、違う、僕達は…」
「あーいいよ誤魔化さないで。私も良くやってたから、君達を責める資格ないし」
「後ろに同じく」

乾いた笑みを浮かべるリディとルイスを、子供達はぽかんとした顔で見上げた。

「私、も…？」
「あんた達、貴族なのか…？」

疑問系になるのも無理はない。

二人の格好はどうみたって旅人のそれであり、間違っても貴族には見えない。特に肩ギリギリの短髪のリディなど、女としてソレ自体が奇異だろう。

「…さ、それは秘密。それより君達、まだ祭、見足りないだろ？」

リディは悪戯っぽく笑って、二人の額を人差し指でつついた。ルイスも苦笑して、荷物を持ち直す。

偶にはこういうのもいいだろう。

「う、うん！まだぜんぜん、見てない！」

女の子が必死そうな声を上げる。

「じゃあ、私達が君達を一日護衛してあげる。君達の保護者から隠してあげるよ」

にっこり笑って言ったリディを、二人の子供は再びぽかんと見上げた。ルイスが肩を竦めて添える。

「そんな格好じゃ、すぐに捕まるぜ。それにお前ら、屋敷を抜け出すのは初めてと見た。やっぱりすぐ捕まる事間違いなし。――でも、嫌だろ？」

「だから、一日君らを遊ばせてあげるんだよ。どう？」

子供達の顔に理解の色が浮かぶ、がすぐに警戒も浮かんだ。

「…あんた達がそれをする利益は何だ？」

成程、頭も回るらしい。リディは顎に手を当てて少し考え、すぐに止めて。

「放っとけないんだよ。それだけ」

第三話　花と雨　（1）（後書き）

また登場人物が増えました…余談ですが、リューイは一話で出てきたリックより頭いいです。
この話から、この物語に本格的に入っていく予定です。…本格的って言っても、やっぱり途中でたくさん寄り道しながらだとは思いますが。
これからもよろしくお願いいたします。

第三話　花と雨　（2）（前書き）

注意。
他話に比べ、残酷表現が強いです。
苦手な方は、ご注意ください。

第三話　花と雨　（2）

第三話　花と雨　（2）

半ば強制的に兄妹を連れ、四人は服屋に着ていた。

ルイスとリディが買った服を、服屋の主に着せられた子供達は、ちょっと違和感は残るものの、普通の街の子になっていた。梳られていた髪もわざと乱し、『ちゃんとした』印象を弱めている。

「軽い…これが街の服なのか！」

男の子はいたく感動したらしい。目を輝かせて飛び跳ねている。

「次が楽になるからちゃんと取っておきなよ」

「さて、着替えたところで自己紹介でもするか」

ルイスの提案に、あからさまに兄妹がびくっと震える。気にせずルイスは続けた。

「いつまでもお前、じゃやりにくいからな。俺はルイス」

「私はリディ。狩人（ハンター）だ」

「出来たよ、ほれ見てみ」

「あ、どうもー…うん、まあいいんじゃない？」

「狩人…だったのか」

男の子が目を瞬かせた。それから数秒迷い、名乗った。

「僕はリューイ。妹はミリア」

「リューイにミリアね。行きたい所ある？」

「え…」

「お、おかし！おかしが食べたい！」

戸惑ったリューイを余所に、ミリアが我慢できなくなったというように声を上げる。ルイスとリディは顔を見合わせ、にっと笑った。

「了解、なら歩きながら食べようか」

「さっくりしてる…」

通りを歩きながら、リディが買い溜めていた菓子をかじり、ミリアが呟いた。

「味がしつこくない。素朴だけどおいしいな」

こちらもかじりながらのリューイの感想。リディは肩を竦める。

「凝りに凝ったデザートも良いけど、そういうあっさりしたのもいいだろ？」

「うん。おいしい！」

手を引くリディに満面の笑みを向け、ミリアは弾んだ様子でお菓子を更に口にした。

「なあ、狩人とはどういうものなんだ？一度会ってみたかったんだ」

「どういうものか、ねえ…」

女性二人を横目に、リューイが発した質問にルイスは目を細めた。

「俺は楽しんでるかな。もちろん死の崖っぷちの戦いだってある。でも責任と仕事でがんじがらめになってた頃より全然、人生にやりがいがある」

「やりがい…」

リューイは呟いて俯いた。

「…僕は、わからないんだ。今のままで。言われた通りの勉強や稽古をして、何も知らずに育っていいのか」

ルイスは少しの間沈黙してから、リューイの頭をかき回した。

「うわ！？」

「それに不安を感じたから、今こうしてここにいるんだろ？いいんじゃないのか？…国を守る者に、知識は必要なんだから」

最後の言葉はごく小さな声で発された。が、ちゃんとリューイは聞き取り、はっとルイスを見上げる。

「あんた…」

「兄様！ルイスお兄ちゃん！あっちになんかあるよ！」

が、それを遮ってミリアのはしゃぎ声が届いた。少し遠い場所から聞こえたそれに、二人が視線をあげれば、数十メートル先にリディとミリアの姿を捉える。ミリアは肌を紅潮させ、目をきらきらと光らせている。実に楽しそうだ。

「早くしないと置いてくよ」

こちらも楽しそうに笑っているリディに、ルイスとリューイは顔を見合わせてから、ぷっと笑って歩き出した。

「ミリアはまだまだだな」
「あれ四歳くらいだから当然だろ。お前が大人びてんの。精々七、八歳だろリューイも」
「八歳だ。確かに子供だけど、ただの子供じゃいられないんだ」

きっぱりと述べた子供を、ルイスは僅かに眩しげに見やり、黙って足を進めた。

「ふう…」

通りの端のベンチに座り、アイスクリームを食べる兄妹を見守りながらリディが息を吐いた。十代後半の男女と、五歳前後の子供という取り合わせに、道行く人は不思議そうな目を向けるが、人ごみ

に紛れてすぐに注意が反らされていく。

「…結構いるね」

リューイ達に気づかれないように小さく囁くと、ルイスも顎をしゃくる。

「警備の連中を回してるみたいだな。まああそこまで変装させとけば気付かないだろ」

「…やっぱりあの子達さ、」

「多分な。じゃなきゃ街の警備兵を動員させてる理由がない」

「…だよね」

通りすがりの兵士から、それとなく兄妹を己の体で隠す。歩み去るのを待ってから、リディはそれと…、と自信なさげに目を泳がせた。

「なんか、嫌な感じしない？」

ルイスは目を眇めた。黙って続きを促す彼に、リディはぽつぽつと言葉を紡ぐ。

「別に、気配は何もしないんだけど。なんかこう、うなじが粟立つ様な…じわじわと氷が背中を這い上ってくる様な、さ…」

「奇遇だな、」

ルイスは低音で囁き返す。

「俺も感じてる」

リディはぱっとルイスを見た。金の眼に、瞬く間に警戒と戸惑いが宿る。

「でも、じゃあ何？変な魔力は感じない。街がおかしい様子もない」

「さあな…ただ俺は、自分の勘は割と信じる事にしてる。お前もなら、尚更だ」

「それは私もそうだけど」

リディは心配の目を、アイスクリームのコーンをかじる二人の兄妹に向ける。

「万が一、魔力を隠せる程の危険な何かがいたとして。この子達を一緒に連れてるのはマズいんじゃない？」

「じゃ、お前は引き渡すのか？」

ルイスの単刀直入な言葉に、リディは顔をしかめた。

「…それも嫌だけど。でも絶対に死なせる訳にはいかないんだよ？」

「リディ、お前いつからそんな弱気になった？」

呆れた口調に、リディはムッとルイスを睨む。だが蒼い眼が浮かべている絶対的な自信に、逆に息を止めた。

「守ればいいだけの話だろ？お前と俺がいて、そうそう負けるかよ」

数秒目を丸くしといたリディは、やがてぷっと吹き出した。

「た、大した自信…それじゃ君、ナルシストだよ」

「失礼な。俺だけじゃこんな台詞絶対言わねえぞ」

「同じ事だろ。コンビにおけるナルシストみたいな」

ひとしきり笑ってから、ふとルイスとリディは自分達をじっと見つめる二人の兄妹の視線に気づいた。

「…なに？」

リディが首を傾げると、リューイとミリアは顔を見合わせ、リューイが素直に訊いた。

「あんた達は恋人同士なのか？」

「まさか。違う」

「……」

リディが即両断、唖然としかけたルイスもため息を吐いて肩を落とした。

「え、でも…」

「でもも何もない。そういう事だ」

「ていうか食べ終わった？じゃ、次行こうか」

リディは何か物言いたげの兄妹の手を、有無を言わせず引っ張っていく。ルイスもそれに続きながら、ふと後ろを振り返った。

「……？」

（…誰か、俺達を見ていた？）

だが目に映る風景に、先程感じた気がした妙な視線は感じない。

（…気のせいか）

ルイスは首を振ると、少し先を歩く三人に向かって歩いていった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「もう、夜かぁ…」

リューイがすっかり暗くなった空を見上げて呟いた。空は雨は降っていないものの、曇ってしまっていて星は見えそうにない。

「そういえば、ルイスお兄ちゃんは？」

キョロキョロと周りを見回し、ミリアが首を傾げる。この数時間ですっかり親しくなった黒髪の青年の姿が、いつの間にか周囲に見当たらなくなっていた。

「ああ、ちょっと先に行ってもらってる」

屋台で何やら大量の軽食を買っていたリディが、腕にそれらを抱えて戻ってくる。

「どこにだ？」

「秘密…といいたいけど、歩きながらわかっちゃうかな」

両手一杯に食べ物を抱えているせいで兄妹と手を繋げない為、自分の両脇をぴったり歩かせながら、リディが楽しそうに言った。

「……？」

怪訝に眉を寄せたリューイだが、ふと人の流れが、自分達が歩く一定方向に収束しているのに気づく。

若い男女を中心に、子供や夫婦、老人と老若男女を問わず、どこか浮ついた空気を纏って皆同じ方向に歩いているのだ。

理由を考えて、はっとして目を輝かせた。

「“朝と夜の夢”！？」

「当たり」

リディは苦笑する。着いてからのお楽しみにする筈だったのだが。やっぱり頭が良い子供だ。

“朝と夜の夢”とは、ファーデリアを中心に活動する劇団の事だ。主に若い団員で構成され、若い男女の恋愛、特に悲恋を演じる。国内外を問わず高い人気を博し、一年中あちらこちらで引っ張りだこだという。

その“朝と夜の夢”は、毎年必ずこのヴィレーヌの花祭の最終日、

最後の催し物として公演をするのだ。祭の最大最後の大目玉として、大勢の民衆が観劇に集まる。
ファーデリアに住む者は勿論、大陸の人々は皆一度は見てみたいと望む。

「“朝と夜の夢”は私もルイスも見た事ないから。やっぱりヴィレーヌの花祭に来たら観たいだろ？だからルイスに先に行かせて席を取って貰ったんだよ」

すぐに一杯になるだろうから。

野外の劇場に向かいながらリディは肩を竦め、それからふと斜め上を見上げた。

「どうしたの？」
「……？」

ミリアの問いかけにしかし、リディも首を捻る。

（…視線を、感じたような、）

が、どこにもそれらしき者は見当たらない。ので、気のせいか、と前を向いて歩き出した。

彼女は知らなかった。彼女と同じ悪寒を抱いているルイスが、同じ様な視線を感じた事を。

そして気のせいだと思ってしまったから、二人がそれをお互いに話す事は、この後に“花と血の雨事件”と呼ばれる出来事が終わる

まで、なかったのである。

―――――――――――――――――――――

リディの言った通り、野外劇場は人で溢れかえっていた。もともとかなり広い範囲に及ぶ客席は全て埋まり、立ち見席にも人がひしめいている。

「……」

少しの間視線を巡らせてから、迷いない足取りでリディはリューイとミリアを連れ、ある一点に歩いていった。

「あ、やっと来た…」

足を止めた先に座っていたのは、少し疲れた顔をしているルイス。その脇にはしっかり三つ、席を確保している。

「お疲れ。はい栄養分」

真ん中二席にリューイとミリアを座らせながら、リディは彼に、手に抱えていた食べ物を手渡した。

「もう確保するの大変だったんだぜ…おう、サンキュ」

ぼやきながらも食べ物を受け取ってから、あ、とルイスは声を上げた。

「？なに？」

「ちょっと待て…あ、あった」

ごそごそと懐を探っていたルイスが何かを取り出し、手振りでリディにしゃがめ、と指示する。

「何なんだよ…」

言われた通りにしゃがんだリディは、すっと前髪に冷たく固い感触のものを差し込まれたのを感じた。

「……？」

怪訝に手をやれば、やはり固い感触。指で辿ると、細かな凹凸が表面に刻み込まれているのがわかる。

――陶器製の髪飾り、だった。

「…え」

「髪、ちょっと伸びて鬱陶しかったんだろ？良い機会だから一つぐらい飾り付けとけよ」

屈託なく笑うルイスを見上げ、束の間リディは呆けていたが、やがて嬉しそうに笑った。

「ありがと」

「どういたしまして」

その一連のやり取りを、じいっとリューイとミリアは見つめていた。

「……」

「……」

「…何だよ？」

凝視の視線に気付いて、ルイスが彼らに首を傾げれば、兄妹は顔を見合わせた。

「ほん」

本当に二人は恋人同士じゃないの？　という台詞はしかし、高らかに吹き渡った喇叭（ラッパ）に掻き消された。リディが「あ」と言って席に座る。

「始まるみたいだね」

ポッと舞台に灯りが灯る。現れた一人の役者に、リューイとミリアはつい先程までの疑問を忘れ去って、目を輝かせた。

「わぁ…！」

頭に羽根飾りをつけ、色鮮やかな旅芸人のような服装をしたその役者は、一度ゆっくりと観客に向かってお辞儀をすると、澄んだ声を張り上げた。

「あるところに、二人の娘が在った」

「娘らは美しき姉妹」

「そして賢しき英知を持ち合わせていた」

「彼女らの名前は伝わらぬ」

「しかし彼女らの話を我らは伝える」

「これは、遠い過去の物語」

朗々とした響きの余韻が闇夜に吸い込まれると時を同じくして、語り手の姿が消え、代わりに舞台には二人の女が立っていた。

「…へぇ。“雨の乙女”と来たか」

“雨の乙女”とは、この大陸ではかなり有名なお伽噺である。

簡単にいうと、とある二人の美しい姉妹が、ある時一人の男と出会う。男は見目麗しく、そして大陸随一の戦の技量を持つ、英雄と呼ばれる男だった。

男と姉は恋に落ち、夫婦の誓いを交わす。しかし、一方妹も男に想いを寄せていた。けれど彼女は姉と男の幸せを願い、そっと二人の前から姿を消した。

しかし、悲劇が姉と男に襲い掛かる。突如襲来した邪悪なる敵が、姉を殺し、男をも死の淵に追い詰めたのだ。

男は力を振り絞って戦い、敵と相討ちとなって共に永い眠りに就いた。妹は遠き地より駆けつけたが一歩及ばず、骸となった姉と目を醒ますことのない男を前に、世界も果てよとばかりに泣き叫んだ。

妹の涙は雨となり、三日三晩大陸に降り注いだ。現大陸に存在する三大湖は、いずれもその時に生まれたと言われている。

やがて涙も枯れ果てた妹は、男という抑止力をなくした大陸のどこかに姿を消した。絶望と悲しみで満たされた妹の魂は、今でもこの大陸を彷徨っているという。

一見悲恋というよりは悲劇だが、姉と男を見て複雑に揺れ動く心、愛する二人を亡くす絶望の心をどれだけ強く描き出せるかという点で、演劇では割と多く取り上げられている。

『姉上とあの方が結婚する。私のあの方への想いはどこへ行くの？ああ、この心は空に舞い上がる程に嬉しい一方で、海に沈みゆく程に辛い』

舞台上の役者の、聴く者の胸を引き裂くような声が響き渡る他、闇夜にはなんの音もない。異様なまでの静謐さに、しかし誰も違和感を覚える思考はなく。

ただ陶然と舞台の世界に引き込まれていく。

可憐な容貌に清楚な服を纏った少女が、澄んだ美しい声と色鮮やかに変わる表情で、主人公である妹を情感たっぷりに演じる。

一方、姉と男は幸せに包まれた演技で、妹の苦悩を浮き彫りにさせる。

流石は“朝と夜の夢”と手放しで褒め称えたくなる、泡沫（うたかた）の時。

しかしその時の流れすら忘れさせる舞台も、やがて終盤に入っていった。

『なぜ、なぜ、姉上とあの方が死ななければならない。私をひとり置いて、先にいってしまうの？私を置いていかないで。信じたくない。信じられない。どうして、どうして、どうして――！』

悲痛な絶叫に、会場中が呑み込まれて固唾を飲む。主に若い女性達は、涙すら流していた。

天も裂けよとばかりの慟哭は、光のフェードアウトと共に消えていく。舞台上から少女の姿が消え、同時に物語の語り手となっていた旅芸人風の役者が、光に照らされる。

「女は三日三晩泣き叫んだ」

再びぽうと光が灯り、少女の姿が浮かび上がる。感情の抜け落ちたような顔は幽鬼を思わせ、観客は息を止める。

少女はその顔をゆっくりと周囲に巡らせ、ふらふらと歩き出した。

「姉を想い、男を想い、敵を憎んだ」

少女が舞台を降り、客席の間の通路をふらふらと歩く。会場中の目が彼女に集中した。少女の白い頬には、涙の跡が乾いて光っている。

「なぜ姉が、男が死ななければならなかったのか。女はそれだけを思って何処かへと消えた」

少女の足は、覚束ないながらも客席を練り歩く。まるで磁石にでも化したかのように、観客達の目は彼女に吸い寄せられていた。

だからすぐには気付かなかった。唐突に、舞台で朗々と喋る語り手の声が変わった事に。

少女は客席を方向性なく歩き続け、

「『女は今も大陸を彷徨う。心の傷は癒えず、枯渇した涙は再び流れ落ちることはなく。ただひたすらに、姉と男を思って』――か。ふん。下らぬ」

未だ観客の目は少女に引きつけられていたが、その少女が演技も忘れてぎょっと舞台上を見たことで、ようやく呆とした視線を舞台上に移し――思考を止めて凍りついた。

「な…？」

舞台上に立つのは旅芸人風の役者ではなかった。その体は、舞台の前に転がっている。代わりに舞台に立つのは、

「所詮心を闇に食い潰されるのは人間。あれはそのような柔なものは持ち合わせておらぬだろうに」

一言で言えば、黒。膝まである長い、黒曜石を溶かし込んだような滑らかな髪に、所々を銀細工が飾る黒いゆったりとした長衣。

鼻梁は高く彫りも深く、凄絶な美貌でありながら、しかしその肌は蝋のように白く、白眼がない眼は黒く染まり、唇は青。

明らかに人間ではなかった。

「人間共の余興はいつ見てもつまらぬ。ましてこの話など、呆れて息もつけぬわ。嫌がらせにはなるやもしれぬが」

硬直する客席や劇団員達を余所に、それは冷えた声音を発し続ける。

恐らく、耳元で囁かれれば腰砕けになるだろう美声。しかしその声は氷柱のような鋭さでもって今人に、畏れと恐怖だけをもたらしてその場に縛り付けている。

それは嗤った。そしてその足元に転がる役者の体が、びくりと痙攣する。

「か弱き人間。夜の闇は何者より勝る」

歌うような声音と共に、語り手の役者の体が膨れ――弾け飛んだ。

紅い血肉が細かい飛沫となって飛び散り、前列にいた者達に降りかかる。

しかしそれでもなお、人々は動けなかった。恐怖の極地と、今何が起こった事に対する否認の念が、彼らの体をその場に縫いつけているのだ。

その様に、それは更に唇を歪めた。

「血の雨。それも一興、水でなく今宵は血で塗れるがいい、人間」

す、と手が伸ばされる。人々は動けない。

恐怖を浮かべたままの彼らに、それが牙を向こうとした時、ダンッ！という何かを踏み切る音が響いた。

「…ほう！」

一瞬後、自らに振り下ろされた白銀の刃を、それは楽しそうに躱す。舞台の奥に移動したそれに、ルイスは剣を構えた。

「お前、誰だ」

第三話　花と雨　（2）（後書き）

主要登場人物、三人目です。

…実際のところ、この位って残酷表現に当たるのでしょうか？
私自身、あんまりグロいのはダメなはずなので、そこまでではないと思うんですが…
ひっかかりそうであれば、どなたかご指摘くださると助かります。

第三話　花と雨　（3）（前書き）

引き続き、残酷表現有りです。
苦手な方はご注意ください。

第三話　花と雨　（3）

第三話　花と雨　（3）

押し殺した青年の声に、はりつめた場の鎖が、ようやく解かれる。

一瞬の痛いほどの沈黙の後、一つの悲鳴が上がったのを皮切りに、幾つもの悲鳴と共に人々が逃げ出した。

阿鼻叫喚というに相応しい状況の中、唯一客席の赤い髪の少女だけは、舞台の上を鋭い眼で睨んでいる。その手が引かれても、彼女は視線を外しはしなかった。

「…リディ、」

「今すぐここから逃げて。兵士に捕まるなりなんなりして良いから、帰れ。街は、危ない」

彼女の袖を引いていたリューイとミリアは息を呑んだ。今日一日見上げていた顔とまるで違う。金の眼は険しく眇められ、顔は冷たく塗り替えられたようだ。

狩人の顔、というのだろうか。身にまとう雰囲気すらも一変している。

「…あれは、何だ？リディ」

震える声を抑えて、リューイが訊ねた。青い眼は食い入るように舞台を見つめている。リディの唇が微かに震える。

「…あれは、多分」

金の眼が、畏怖すらにじませた。

「魔族だ」

人に害成す“人ならざるもの”は大きく分けて3つ存在する。魔物、悪魔、竜だ。

それらにはそれぞれ位階が存在し、強さも雲泥と言える程違いがある。

例えば竜の高位などは人語を解し、人など足元どころか足の指の爪先すら及ばぬ叡智と知識を持ち、強靭な鱗と類い希な魔力を有して他の追随を許さぬ強さを誇るが、幼竜は時に悪竜と化し、人に狩られる事もある。

悪魔は人の負の魂から成るものであり、他二つと比べると『忌まわしい』か『おぞましい』の違いくらいしかない。

が、魔物。主な狩人の狩りの対象となるそれは、正にピンキリが激しい。そして魔物の頂点には、自在に姿を変え、時に人型を取り、高位の竜すら凌駕する力を持つものがいる。

それらはその異質さゆえに、特別な呼称が与えられているのだ。

『魔族』――と。

「答えろ。何故魔族がこんなところにいる」

静まり返った舞台の上で、ルイスは全神経を目の前の存在に集中させていた。向き合うだけで、冷や汗が吹き出し、知らず震えに膝が折れそうになる。目の前の魔族は笑みすら浮かべているのに、空気は重く鉛のようだ。じっとりと汗ばむ掌に必死に力を込め、対峙し続ける。

魔族は基本、人間には無干渉だ。それもそうだろう。彼らにしてみれば、人間など卑小で取るに足らないもの。虫螻のような存在にわざわざ関わる酔狂なものはいない筈なのだ。だからこそ、なぜこの魔族がここにいるのかが理解出来ない。

魔族はしげしげとルイスを見やり、ふむ、と指を唇にやる。発された言葉は、ルイスには理解出来ないものだった。

「お前が『黒』か。存外若いのだな」

「……？」

怪訝に思って眉を寄せる。そのルイスから視線を外して、魔族は後方の少女を見やった。

「してあれが『紅（あか）』か。まだ子供ではないか。さて、解らぬな」

魔族は独りごち、ルイスに目を戻した。

「さて、何故我がここにいるかであったな。簡単よ。貴様らに興味があったからだ」
「俺…達？」
「そうだ。この街に来る前、貴様らは我の気配に気付いたであろう？久方ぶりの事であったから興味が湧いた。蓋を開けてみれば、何のことはない、『原初の運命（さだめ）』であったがな」
「…お前、さっきから何を」
「さてな」

肩を竦めて魔族は唇をつり上げた。ぞっとする殺気がルイスを襲い、背筋を氷が滑り落ちる感覚にルイスは咄嗟に後ろに跳ぶ。

次の瞬間魔族の姿が消え、直前までルイスが立っていた場所がメキリという嫌な音を立て陥没した。

「ほう。勘は良いのだな？」

にやりと蝋色の顔が嗤う。それに彼が寒気を覚える前に、黒い影がルイスに怒涛の勢いで肉迫した。

「っ…！」

反射的に伸びた腕が、剣を地面と水平に構え、影から身を守る。しかし到底勢いを殺しきれず、固い感触と共にルイスの体は弾き飛ばされた。

「くぁっ…！」

弾き飛ばされたまま客席に突っ込み、ルイスの意識が一瞬飛ぶ。

僅か0．5秒もない隙は、しかしこの魔族相手には致命的だった。

間を置かずに再度、黒い影が体勢を立て直せていないルイスに迫る。そのまま彼を両断せんと振り下ろされたそれは、けれど二振りの白銀の影が弾き返した。

同時に、澄んだ声がルイスの耳朶を打つ。

「起きろルイス！死にたいのか！」

リディは叫んで、素早く火精霊を喚んだ。蛇のようにうねる炎が魔族を呑み込まんと放射される。

が、魔族はあっさりと跳躍してそれを躱した。

頭を振って霞みかけた視界をはっきりさせながら、ルイスは魔族の手に、いつの間にか漆黒の刃が握られているのに気付く。先程彼を襲ったのはあの剣だったらしい。

柄も鍔もないその剣はしかし、細身ながらも全く脆さを感じさせない。

「ほう。火精霊か。封でもかけているのか？貴様にしては力が弱い」

「なにを訳のわかんないことをっ…！君のせいで祭が台無しだっ！」

リディは踏み込んで、右手の剣を左下から右上に薙ぐ。魔族は再び後退し、自然二人との距離が開いた。

「おいリディ、リューイとミリアは」

「聖属性結界を張って逃がした。馬鹿じゃないから、城に戻っただろ」

「そうか。ならいい」

乱れた前髪を払って、ルイスはリディの隣に並ぶ。

「これ、マジでやばいかもしれねえな…」

二人で相対しても、勝てる気がしない。存在だけで膝を着きたくなる威圧感（プレッシャー）、本音を言うなら今すぐにでも逃げ出したい。けれど。

「私、こんなとこで死ぬ気ないからな？お前が諦めたら盾にしてでも生き延びてやる」

「誰が諦めるか馬鹿野郎」

恐怖を押し込め、震えを追いやり。二人はすっと身を落とした。

完全に殺気で満たされた二人に、魔族は面映ゆげに嗤う。

「我に挑むか。成程、流石だな、『原初の運命』」

「だからっ…！」

地面を蹴り、二人同時に剣を振りかざす。

「「さっきから訳わかんない（ねえ）事言ってんなよ！！」」

裂帛の気合と鋭さを持って迫る剣に、魔族はふっと目を細め、右手の漆黒の刃を持ち上げた。

「何事だ？」

外が騒がしい。ゆったりと茶を飲んでいた、ヴィレーヌ狩人協会支店長オーギーンは顔を上げた。

窓の外を見る。人が恐怖の表情を浮かべて走っていくのを視界に入れて、彼は顔をしかめる。

「おい、スィン」

「見て参ります」

部屋の隅に控えていた女が一礼して出て行き、間もなく戻ってきた。その顔が、彼女にしては強張っているのに気付いて、オーギーンは目を眇めて椅子の背もたれから身を起こす。

この女は彼の部下のようなものだが、常に無表情で淡々としていて、何を考えているのか読みにくい。その彼女が顔を強ばらせているなど――。

「何が起きている」

「劇場に、魔族が現れました」

オーギーンは耳を疑った。

（魔族だと？！）

彼も仮にもかつて『十強』と呼ばれた人間であったから、それなりの戦闘や死地を経験している。だが長い狩人人生の中で、『魔族』

と戦った事はおろか、見たこともない。

「現在、劇場に居合わせた二人の狩人が交戦中です。また、魔族の出現に伴うように、街のあちこちで魔物が現れました。既に民間人にも犠牲が出ています」

どこからつっこむか悩み、結果オーギーンは最初から追う事にした。

「交戦中だと？誰だ、魔族相手にやり合うなんて馬鹿は」

「アリエル狩人協会登録、ルイス・キリグ、リディ・レリア両名です」

オーギーンは本気で椅子からずり落ちそうになった。

「“自由時間（フリータイム）”だと…！？」

“自由時間”といえば、つい先日、ビグナリオンのアイルにいるシラスから愚痴られた連中ではないか。恐らく花祭りを目当てに訪れたのだろうが、なんでまた――。

「迷惑生産者（トラブルメーカー）かよ、そいつら…！」

痛烈に舌打ちしかけたが、むしろ彼らは被害者だということに気付いて、頭を掻き毟る。

しかしシラスから聞いた通りであれば、彼ら二人ならば、魔族相手でもある程度は持ちこたえられる筈だ。というか、そう思いたい。

「…ヴィレーヌ内にいる全狩人に通達！魔族は“自由時間”に任せ、

他は魔物討伐に当たること！人命が最優先、一匹たりとも逃がさず塵にしろ！」
「了解しました」

ぴっとスィンは頭を下げ、素早く部屋の外に出て行く。オーギーンも苦い顔で茶の残りをあおると、カンッと小気味良い音を立てて茶器を置き、立ち上がった。

「…ち、魔族とはな」

書類が詰まれた机の下に置いておいた、握らなくなって久しい愛剣の柄を、握る。しばらくのご無沙汰などなかったことのように、それはぴたりと彼の手に馴染んだ。

「…行くか」

苦虫を噛み潰したような顔で、窓の外の空に目を遣る。円い月は未だ、中天にある。夜は、これからだった。

「どうした、動きが鈍いぞ？」

首の皮一枚先を、刃が通り過ぎていく。ぞっとする暇もなく、リディは地面に手をついて身を伏せた。それまで彼女の体があったところを、黒い炎が飲み込む。

「サンディルナ！」

雷撃が幾本もの細い光となって、宙を走って魔族に収束する。しかし、吹き出した闇にバチッと音を立てて弾かれた。

しかも魔族はそれで動きを止める事はなく、剣を頭上に振り抜く。ガンッ、という重い音が響いて、魔族に迫っていた氷の塊が横に受け流された。

「ちっ…」

舌打ちして、リディとルイスはそれぞれ飛び退く。魔族を中心に対称点になるように構えを取った。

既に劇場は更地と化していた。五属性の魔術、魔族の使用する闇魔術が吹き荒れ、剣戟の余波に吹き飛び、元の面影は最早皆無と言っていい。ルイスとリディは、下手に精霊の封印を解くと街ごと破壊しかねないため封印したままだが、それだって十分な威力だ。

その猛攻にも関わらず、彼らは魔族に未だ傷を付ける事が適っていなかった。かくいうルイスとリディ自身も傷は殆ど無いが、それは二人がかりの利点を活かした攻防をしているからである。

「くそ…」

呼吸を調える。受ければ死の紙一重の攻撃は、予想以上に体力を消耗させていた。今までの敵とは比べ物にならない。

格が違う。

「どうした？来ないのか？」

中央で魔族は悠然と笑っている。ルイスとリディは目で合図を送り合い、タイミングを計る。

「来ないのなら、こちらから行くぞ」

魔族が言い終わる前に、二人同時に飛び出す。しかし魔族の、上半身を狙ったルイスの突きも、下半身を狙ったリディの斬撃も、空を切った。

「！？消えた！？」

即座に中央部で体を入れ替え、背中合わせになって、ルイスとリディは辺りに警戒を飛ばす。だがそれを嘲笑うかのように、空から声が降ってくる。

「こっちだ」

ばっと空を見上げた。黒い夜空に、尚黒い影が浮かんでいる。闇に溶け込みそうでいて、そんな事は、その存在感が許さない。

「…ルイス」

「ああ。まずいな」

頭上を見上げたリディの呟きに、ルイスも淡々と応える。

死ぬ気はない。だが勝てる気が全くしない。

冷たい汗が流れた。濃厚な命の危険が脳裏を掠める。逃げる――そんな単語が頭に浮かんだ、瞬間だった。

「浅薄」

何かに締め付けられたような悲鳴が周囲から上がり、二人ははっとそちらを振り向く。

その先には、見えない何かに吊り上げられる数人の姿があった。逃げている途中だったのだろう、服は乱れ、汚れている。男もいれば女も、まだ幼い少女もいる。

「な…！？」
「何をっ…」
「見るがいい」

魔族は人間達に向かって、笑みを浮かべる。まるで何かを愛しむような――それでいて、心胆を凍り付いた手で掴むような、妖艶で、凄絶で、残酷な。

「貴様達が逃げるというのならば」

ぶくり、と空中に浮く六人の躯が膨張した。先程の光景を思い出し、血相を変えて二人は空中に疾駆する。
恐怖に顔を歪めた少女が、リディ達に手を伸ばす。

「やめろ！！」

「――街の全ての人間が、こうなる」

耳を覆いたくなる絶叫、破裂音。手を掴もうと伸ばした指の先で、六人の体は木っ端と弾け飛んだ。

元が何であったのかすら解らぬ砕片が飛び散り、紅い飛沫が雨のように地上へと降り落ちる。

ルイスとリディは、目の前で成された殺戮に、茫然と空中で立ち尽くす。紅い滴が彼らにも降りかかり、斑な模様を刻んだ。

「あ…」

見開いた目で、リディは血に濡れた己の手を見つめた。

迷ったから。逃げようか、と考えたから。

あの人々は、殺された。

「――あああああっ！！」

大気がひび割れたかのような錯覚すら覚える勢いで、リディは空を蹴った。

「よせ、リディ！！」

ルイスの叫びも届かない。完全に逆上した彼女は、感情に任せて精霊の封印を解く。

「フレイア、殺せ！！」

これ以上間違えようもない真っ直ぐな命令を、彼女の火精霊が曲解するはずもなく。

一瞬後、夜空を遥か先まで照らし上げる程の火柱が、轟音と共に天を突いた。

「はあっ、はあっ…」

火柱が消えたあと、雲までも灼き切れた空間を見据えてリディは口元を拭う。怒りに任せての魔力解放は、魔力を調えない分使用者へのダメージが大きい。

けれど、目の前に魔族は存在しない。跡形もなく消し飛んだか、とリディは視線を移した、が。

「愚かな」

トスッ、と軽い音が耳元で響く。ついで、生暖かい感触も。

「怒りに我を忘れるなど、未熟としか言えぬ」

背後から囁かれる冷たく艶めいた美声。リディは己の右肩を見下ろした。――そこからは、何故か手が生えていた。紅い鮮血を纏って。

「リディ――――――！！」

ルイスの絶叫と同時に、ズッと肩から魔族の腕が引き抜かれ、どぷりと血が噴き出した。遅れて認識した激痛に、リディは声を上げる事すら出来ず、魔術の制御を失う。

「…く…そ…」

風魔術による足場が崩れ、なすすべもなく彼女は落下した。

みるみるうちに地面が迫る。が、叩き付けられる寸前、彼女はふわりとした風に支えられ、路地にゆっくりと横たえられる。薄れる視界で捉えた、自分に走り寄ってくる2つの影に、彼女は瞠目する。

二人は泣き出しそうな顔でリディの横に跪いた。

「リュー…イ、ミ…リア、な…で」

「喋るな！今治すから！」

真っ青な顔色になりながらも、リューイはリディの肩に手を添えて、魔力を込める。まもなく穏やかな金色の光が灯った。

第三話　花と雨　（４）

血で軌跡を描きながら落ちていった体に、ルイスは手を伸ばすことができなかった。
目の前の魔族がそれを許さなかったから。
なにもできずにあいつを死なせるのか、と思った時、一瞬視界が赤に染まった。

何をしてでも目の前の存在を殺してやりたい、

そんな感情に呑まれかけて。
それに押し流される一歩手前で、風魔術でふわりと浮いた彼女の姿に、すっと視界から赤い色が退いていった。
駆け寄る二つの影に安堵を感じ、頭に冷静さが巻き戻る。
しかし、理性が手綱を取り戻したところで、理性が激情を消す選択をするわけではないのだ、とこの時ルイスは初めて知った。

（逃げてなかったのか、あいつら…）

横目で眼下を一瞥し、ルイスは剣を青眼に構え直した。揺れることなく自らに向けられる鋼の切っ先に、魔族はくくっと嗤う。

「貴様はあの娘よりは冷静なようだ」

「抜かせ」

迸る、さっきまでとは一線を画す殺気に、魔族は僅か目を細める。

どうやら冷静ではあるが、激怒していることには変わらないらしい。蒼い目は深い瞋恚に燃えている。内心で肩を竦めながら、魔族はその仮面を剥いでやろうと一つの言葉を口にする。

「激怒しつつも、我は見失わぬ…か。流石は『氷の軍神』か？」

「――――ッ」

予想通り――深い蒼い目が見開かれた。構えに動揺が走る。だが、その時間は魔族が期待していたものより、遥かに短かく終わる。

魔族が闇の魔力を放とうとするより前に、ルイスは魔族に向かって踏み込んだ。

明確な殺意と迷いのない剣筋に、魔族はとっさに距離を取る。

「…ほう」

動揺どころか、地雷だったようだ。しかし暴走する感情は、彼の思うつぼでもある。

「その名を口にするな」

氷のような殺気が魔族に向かう。次いで突き出された鋭い刃先を、

魔族は己の剣の腹で受け止め、ぐっと捻った。

「っ！」

「所詮は貴様も、まだ子供か」

ぐら、と態勢を崩した青年に、冷笑と共に魔族は剣を振り下ろす。鋭い刃がルイスに吸い込まれ――その直前で、鉛色の軌跡が彼と黒い剣との間を薙いだ。

頭のすぐ上を横切った風圧に、ルイスは目を見開きながらも、空中を転がるようにして間合いを開けた。

「…ち」

「お前が魔族か。初めましてだが――さようならだ」

幅広の大刀を肩に担ぎ、ルイスの前に立った男と、魔族は距離を取って対峙する。剣士でありながら当然のように宙に立っている所を見ると、魔術も使えるらしい。

「あんた…」

「無事か？ルイス・キリグ。もう一人はどうした」

「…リディは、下だ」

「殺られたのか？」

「いや。死んではいない」

「なら良かった」

ルイスは目の前の男を見ながら、慎重に態勢を立て直した。誰かは知らない。だが立ち姿と気配からして、相当の実力者とわかる。

「俺はこの街の協会長のオーギーンだ」

ルイスの疑問が聞こえたかのように、男は答えた。納得するルイスに、オーギーンは言葉を続ける。

「街中の狩人で今、魔物の掃討に当たっている。ただなにぶん数が多くてな、こいつに当たれるのは俺とお前ともう一人、俺の部下だけだ」

「…ああ」

リューイとミリアが治療してはいるだろうが、リディの戦線復帰は出来るか微妙なところだろう。

「どうする」

「お前は少し下がっていろ。俺とスィンでやってみる」

オーギーンは大刀を持ち上げると、軽く振った。ルイスは素直に引き下がる。

かつて名を馳せた『十強』。しかもオーギーンと言えば、『大刀のオーギーン』という二つ名までついている実力者だったはずだ。魔術を別にすれば、確実に彼自身より強いだろう。

「よし、行くか」

先程の大刀を振る仕草。それが合図だったのだろう、地上から赤い光が発射された。鋭く細い軌跡が魔族に向かう。魔族がそれを剣を弾くと同時に、オーギーンが間合いに踏み込んだ。

（…今のは…）

ちらりと眼下を見やった。狙撃手がどこに潜んでいるのかは、見

当もつかない。が、

（ボウガン…しかも魔術付加の）

確か、魔術付加物理攻撃は、そうそう出来る芸当ではないはずなのだが。この間の魔術弓使いといい、世の中にはつくづく実力者が多いものだと思う。

流星のような強力な剣閃が魔族に迫る。圧倒的な経験に裏打ちされた力が、ルイスの洗練された剣術とは違った形を持って魔族を攻め立てた。

「邪魔が入ったか…興が冷める」

対する魔族は、先程までの嗤いは引っ込め、多少の余裕の表情は消したものの、表情からは倦怠感が窺える。予測もつかない方向から襲い来るボウガンの矢を冷静に捌き弾き、間断なく突いてくる大刀を避け捌く。しかし、反撃する気配はなかった。

「野郎っ…！」

オーギーンも、軽くあしらわれている状況には気付いていたらしく、苦々しげな顔になって、一旦大刀を大きく弾いた。堅い衝撃が双方の手を痺れさせた間に、空中を蹴ってルイスの隣に戻ってくる。地上からのボウガンの照射も、いつの間にか止んでいた。

「軽く遊ばれてるな。しかし俺とお前が連携しても、かえって危ない」

息を整えながらのオーギーンの台詞に、ルイスも頷いた。

連携は、互いの行動パターンの理解と、ある程度の意志疎通が必要だ。ほんの数分前に出会った人間となど、混乱している内にこの魔族相手には瞬殺されるのが目に見えている。

ちらりと地上を見る。あちこちから発されていた騒動の音は、殆ど失せていた。代わりに、徐々に狩人と思われる人々が、彼らの真下に集まりつつある。

「数で行ったって、弾かれるのがオチだ。どうするか…」

オーギーンが唸った時だった。それまで黙然と佇んでいた魔族が、不意に手を振った。

「飽いた」

発した言葉は一言。

だが、込められた魔力は絶大だった。純粋とすら言える闇の塊が、オーギーンを襲う。

「がっ……!?」

突然のとんでもない衝撃に、オーギーンは成す術もなく吹っ飛ぶ。数秒後眼下から響いた轟音に、ルイスはしかし指一本すら動かす事ができない。

（なんだ、今のっ…）

油断していた訳ではない。だが、実際何も出来ずにオーギーンは吹っ飛ばされた。わずか数分前の言葉が、再び脳裏に浮かぶ。

格が、違う。

闇に対するは光。聖魔術を使え、と頭の中で声が連呼するが、体が動かない。冷めた眼をした魔族が再度手を上げる動作が、やたらとゆっくりと目に移った。

が、結論から言えば、次なる衝撃波がルイスを襲う事はなかった。

「ッ！？」

地上から二つ、炎と氷の魔術が放たれ、ルイスと魔族の間を貫く。不安定ながらもかなりの力を有したそれは、二人の間を通り越して闇夜を切り裂いていき、やがて消えた。魔族もルイスも魔術施行者を探し――前者は口角を上げ、後者は蒼白になって絶句する。

地上では、二人の幼い兄妹――リューイとミリアがこちらを見上げて立ち竦んでいた。強張った顔からも漂う魔力の気配からも、彼らが今の魔術を放ったのは一目瞭然だ。

「系譜の末か。威勢の良い」

「――ッ、止めろっ！！」

魔族に集まる魔力に気付き、ルイスは咄嗟に宙を蹴りつけ、地上へ急降下する。一瞬の後着地した彼は、何も考えず兄妹を背に庇い、ぎゅっと目を瞑った。服の背を、小さな手に握り締められるのを感じる。

視界はなくとも練られている魔力は解る。そして魔族の手元で完成した魔術は、彼に向けられる前に――何故か、霧散した。

「……？」

恐る恐る目を開ける。そしてルイスは三度、絶句した。

「…貴様…」

空中の魔族の胸と腹から、それぞれ剣が生えていた。魔族は口を歪め、無理矢理背後を振り向く。

いつの間に、そこにいたのか。印象的な赤い髪の少女が、魔族の闇色の眼と視線を合わせ、にっと笑った。

ルイスは半ば呆然と呟いた。

「リディ…」

「諦めるなよ、馬鹿。ていうか、私の事、完璧忘れてた、だろ」

「…忘れてなんかねえよ」

「どうだか」

肩を竦めて見せるその顔はしかし、闇夜でもしっかりと解るほど、青白い。言葉も途切れ途切れで、かなり無理をしてそこにいるのが見て取れた。

「あの馬鹿…」

舌打ちしたルイスを、後ろから、か細い声と、小さく背を引っ張る手が引き留める。髪はぐしゃぐしゃ、顔は恐怖で歪んだミリアだった。

「ルイス、お兄ちゃん」

「――大丈夫だ。死んだりしないから」

「本当だろうな？」

妹を抱き寄せながら、リューイもルイスを見上げる。真っ直ぐなその瞳を見返して、ルイスは小さく苦笑した。

「ああ。約束する」

その言葉に安堵したのか、手が離れる。

ようやく白み始めた夜空に浮かぶ、二つの影を見上げて、ルイスは風精霊を喚ぶ。地面を蹴る寸前、思い出したように彼は兄妹を振り向いた。

「そうだ――リディを治してくれて、ありがとな」

視界の端に、騎士の姿が映った。慌ただしく走り寄ってくる足音に、兄妹も気付いて立ち竦む。その頭を軽く撫でて、ルイスは片目を瞑った。

「またいつか会おう。ちゃんと勉強しろよ――リューイガルシア、ミリアシューラ」

弾かれたように兄妹がルイスを振り向く。しかしルイスは軽く手を振ると、その後は一顧だにせず空を駆け上がった。

「大丈夫か」
「っ…」

動くに動けない状態のリディの傍に付き、ルイスは魔族に剣を向けた。心臓と腎臓を完璧に捉えた突きに、さしもの魔族といえど動けないようだ。

しかし、そこでルイスは違和感に気付いた。リディの剣は確かに魔族を貫いている。しかし、あるべきものが――あるべき色が、そこにはない。

（っ出血してない…！）
「ッ、まずい、リ…」

ルイスが声を上げた、その瞬間、リディが貫いていた躯が、一瞬で消失した。まるで初めからそこに無かったかのように、塵も残さず。

刺していたリディ本人が、違和感に気付かなかった訳もない。しかし、それと重心の消失は別問題だ。急に支えを失った事で、ただでさえぐらついていた体が、宙を泳ぐ。そこに、容赦なく飛来した魔力が激突した。

「がっ――」
「っ、リディ！！」

吹っ飛びかけた細い体躯を、その中途でルイスは受け止めた。しかしその衝撃に、彼女もろとも宙を飛ぶ。

「くそ、生きてるかリディ！」

数メートル吹っ飛ばされたところでなんとか踏みとどまり、ルイスは腕の中の少女の名を叫ぶ。が、リディの顔は血の気を失い、ぐったりとして動かない。まずい、と臍を噛むルイスの耳に、哄笑が届いた。

「――お前…」

夜空で髪を揺らして嗤う魔族を、ルイスは睨み据える。

一方、魔族はひとしきり笑うと、腕を組んで彼らを見やった。

「まさか、ここまでやるとは思っていなかった。数秒でも分身を作るのが遅れていたら、殺られていたのは我であったな」

つまり、先程リディが刺したのは、魔族が造り出した分身だったのだ。闇魔術の多様性はそんなことも出来るのか、とルイスは内心舌打ちする。

闇魔術は、人間が扱うことのできる五属性魔術と違って、様々なことができるとされている。

しかし、それを扱うのは、魔物や悪魔といった連中で、人間が本来持つ力ではない。

”人ならんざるもの”が己のエネルギーを還元して施行する力。

それを一般に、闇魔術とよぶ。

（…とはいえ…）

リディを抱えたまま、またオーギーンの援護を見込めないまま第二戦は、かなり厳しい。第一、リディも放っておけば命が危ない。どうするか、と唇を噛み締める彼に、愉快そうな声音がかけられる。

「が、貴様らはその程度で終わってはならない。でなければ、己の運命（さだめ）に殺される事になるであろう。精々次逢う時までに腕を上げると良い」

「…は？」

「ああ、そうだ、忘れていた。――我の名はセティスゲルダ」

ルイスは目を見開いた。セティスゲルダ――その名は知っている。

魔族でありながら人間に興味を抱き、歴史の折り目に度々姿を見せるといわれる、変わり種でありながら最強を冠する魔の王。その名こそが、セティスゲルダ。

黒い魔族――否、セティスゲルダは昏い笑みと共に唐突に宣言した。

「今日のところはこれで退く。そこそこ愉しかったぞ、“黒”の小僧。では、失礼するとしよう」

「待っ…！」

反射的に上げた声を吹き飛ばすように、突風が吹き荒れる。瞑っ

てしまった目を再びルイスが開いた時、既にそこに、闇の主の姿はなかった。

二日後。

「全く、酷い目に遭った」

足早に街の大通りを馬を引いて歩きながら、リディは何度目とも知れぬ文句を吐き出した。

二日前に、突如魔物の襲来を受けた街は、今は明るい声と鎚の音が響き、復興に向けて忙しなく人が動いている。

「まさか魔族…しかもあのセティスゲルダと戦うとはな。俺達、よく生きてたな」

「…うん」

戦闘の最中は必死でも、終われば寒気がひた走る。リディは本気で死にかけたし、ルイスもオーギーンの助けがなければやられていたかもしれない。

そのオーギーンは、セティスゲルダに石造りの建物に叩きつけら

れた衝撃で、しばらく気絶していたらしい。が、頭にたんこぶをこさえただけで、全く他に怪我がないのはどうしたことか。しかも、目を覚まして、既に魔族が去った後だと知った時の怒りようは半端なかった。全く、頑丈な体である。

「…まだまだ、世界は広いね」

「ああ。俺達は、もっともっと強くならなきゃならないな」

守るべきものを、きちんと守れる力を持つために。

人の波を縫って、外門に向かう。足取りは迷いなく、しかし口調は幾分寂しげにリディが呟いた。

「リューイ達に、礼が言えなかったのが残念」

「…仕方ないだろ。相手は、王族だ」

街で出会った、幼い二人の兄妹。本名をそれぞれリューイガルシアとミリアシューラと言い、ここファーデリアの、紛れもない王位継承者だった。ルイスもリディもそれには気付いていたが、彼らの気持ちを思慮ってそれを口にはしなかった。最後、騎士の姿を認めたルイスが、別れの言葉として名を呼んだだけだ。

そして、一介の狩人が王族に、早々会えるわけもない。だからオーギーンに手紙を託し、二人はこの国を発とうとしていた。

「あいつらなら大丈夫だ。オーギーンに…」

「ルイス、リディっ！！」

ルイスの言葉を遮るような背後からの叫び声に、ルイスもリディも驚愕して振り返った。その目に、信じられないものが映る。

駆けてくる、幼い二人の子供。目に鮮やかな金髪を靡かせ、質素な服を纏って、必死の形相をした彼らはルイスとリディに飛びついた。

「リューイ、ミリア…どうして」

ミリアの体を抱き留めて、呆然とリディが呟くと、涙目のミリアが彼女を見上げる。

「お礼が、いいたかったの。おととい、大変だったけど、すごくたのしかった。ルイスとリディの、おかげだから」

リューイも、ルイスに抱きついたまま言う。

「僕達を守ってくれたし、色々な事を教えてくれた。――ありがとう」

「――馬鹿。礼を言うのは、私の方だよ。治療、ありがとう」

リディはぎゅっとミリアを抱き締めて、ふわふわの髪を撫でる。

温かい温もりと、柔らかな匂いに安堵する。

――――守れて、良かった。

自分達のできることは少なく、目の前で散らされる命をすべて救うことはできない。

それでも、手を伸ばし続ければいい。少しずつでも、半歩ずつでも、手が届く距離を延ばし続けていくために。

「というかお前達、どうやってここまで来たんだ？昨日の今日で…」

「城の垣根に、ずいぶん前から穴を開けて置いたんだ。一昨日は使わなかったけど、今日はそこから。ちゃんと服も、街のものを着ているし、髪型もぐしゃぐしゃだろう」

ルイスの言葉に、自慢げにリューイが答える。

――確かに、二人の格好は、だいぶ昨日に比べて庶民ぽかった。所々に隠しきれない高貴さは漂うが、それでも街の空気に溶け込めている。

たった二日で知恵をつけた王子達に、今頃城は慌てふためいているだろう。この分では兄妹だけで出歩いても、しばらくはバレないかもしれない。

「もう、二人とも行っちゃうんだね」

ミリアがぽつんと呟いた言葉に、ルイスとリディは顔を見合わせて苦笑した。

「花祭は終わったし。怪我も治ったし、ここにいる理由はもうないからね」

「それに俺達は、長く一つの場所にいると、まずいんだ。――そんな顔すんなよ。またいつかきっと、会えるさ」

泣き出しそうな兄妹の頭を、ルイスはぐしぐしと撫で、体を離した。

「行こう、リディ。――さよならが言えてよかった、リューイ、ミリア。じゃあな。一昨日言ったこと、忘れんなよ」

「…うん。――じゃ、またね、リューイ、ミリア。元気で」

リューイとミリアは、目を擦って二人を見上げた。

鮮烈で美しい、二人の狩人。貴族だったという彼らは、年を差し引いてもなお、自分達より遥かに強く、輝いている。

今は無理でも、いつか彼らのような大人になりたいと思った。

…もっとも、それを訊いたら、二人を知る本当の『大人』は苦笑するに違いないが。

「ルイス・キリグと、リディ・レリア…か…」

「どうかなさいましたか」

漏らされた上司の呟きに、スィンは首を傾げる。彼女の上司であり、この街の狩人協会長である男は、首を振った。

「いや、な。ルイス・キリグがリディ・レリアを治療した時な」

既に治療を施されていたとはいえ、危ない状態には変わりなかった少女。その怪我をかの青年は、わずか数秒で消し去った。

「ああ、凄かったですね。並の治療術士ではありません」

「そうじゃない」

素直に感嘆の台詞を述べるスィンを余所に、オーギーンは嘆息して眉間を揉んだ。

（あの時…）

駆け寄ろうとした治療術士を追いやって、あの青年がリディ・レリアを治療した時。彼の手には、小さな小さな、青色の玉が握られて見えたのだ。角度的に、すぐそばにいた自分にしか見えていなかったのかもしれない。

だが、よくよく考えてみればその小さな青玉は、彼が耳に下げている耳飾りに酷似していたように思う。そして、あの青玉は十中八九、核だった。

しかし、核は本来掌大しか存在せず、またそのサイズを変える術など、表向きには存在しない。

（…裏向きには、あるが）

本来掌大の核を小さく小さく凝縮して、力をも純粋に封じせしめる技術は、実は存在する。

しかしそれは一握りの者しか知らぬ秘事であり、オーギーンも若い頃にたまたま、本当にたまたま、知っただけの話だ。

核の力を凝縮し、サイズを縮めたものを身につけられる者は、限られている。それこそ――

（…やめた）

オーギーンは天を仰いで、思考を放棄した。

これ以上考えたところで、何かが解る訳でもない。疑問が増えるだけだ。

（シラスの野郎に愚痴るとするか）

自分の百面相に怪訝な顔をしているスィンに対し知らぬ振りをして。オーギーンはペンを片手に鼻歌を歌い始めたのだった。

――――――――――――――――――――――――

同時刻、とある場所。

「では、『烈火の鬼姫』は本当にいないと？」

「は。少なくともこの半年、姿を目にした者は降りません」

「…そうか…」

報告を受けた男は、思案げに顎に手を当てた。やがて、その口に笑みが浮かぶ。

「警戒を怠るな。しかし、絶対に気付かせてはならん。くれぐれも注意し、準備を進めよ」

「御意。それと、セレナエンデ様については」

「引き続き、監視を続けよ。決して目を離すな。あやつを外に逃がしては、元も子もない」

「御意」

一礼して、報告した男は消えた。一人部屋に佇む男は、人知れず肩を揺らす。

「今に見ているがいい…」

忘れはしない、十年前の屈辱を。今度は自分達が、返す番だ。

暗い笑いは、しかし誰に聞き取られることもなく、曇天に吸い込まれていった。

第三話　花と雨　（4）（後書き）

ようやく魔族さんの名前が出せました。

これにて第三話は終了です。今までの話で、ルイスとリディは半最強みたいな扱いをしていたんですが、彼らもまだまだ井の中の蛙です。もちろん型破りで強くて呆れの視線を浴びる彼らではあるんですが、化け物はけっこう世の中にいます。

この後後日談をはさんで、四話です。

四話はさらにこれより短くなって、話としては小休止になるかと。

…すみません寄り道ばかりです。

第三話　後日談

第三話　後日談

ぴちゃん、と水滴が、岩の地面を叩く音が響いて、セティスゲルダは目を開いた。

…否、正しく言えば、その音で目が覚めた訳ではない。この数千年で慣れた気配を、感覚が鋭敏に捉えたからだ。

「…来たか」

口角を上げて、岩にもたれていた身を起こす。

彼がいる場所は東の果ての国、オルディアンの険しい山中の一角にある、小さな洞窟の中だった。

小さい洞窟が、奥には岩から染み出した、濾過され凝縮された水で満たされる小さな泉が存在する。入り口から忍び込む、青い月の光に揺れる水面を、数時間前興味深く見つめていたのは、うっすらと記憶に残っている。

ゆっくりと足を滑らせて、洞窟をあとにする。出たところで、闇夜でも輝く、無数の爬虫類の眼に照らされて、セティスゲルダは立

ち止まった。

「…手厚い歓迎だな、竜ども」

少し開けた洞窟の入り口の先の空間を囲うように、何匹もの竜が彼を見ていた。

赤や青、緑に紫、黄に橙と、実に多彩な色の鱗の竜達が、身動きもせずに彼を眼で追っている。

射殺さんばかりの眼差しと殺気に、しかしセティスゲルダは肩を竦めるだけで応える。

「全く、人間共が見たら卒倒するであろうな。このように竜が集まっている場面など」

『黙れ』

竜の中の一匹、鮮やかな赤い鱗を輝かせた竜が、唸り声と共にセティスゲルダに吐き捨てた。

『戯れ言を。何をしにここへ来た、闇の王』

「何をも何も。我に用があるのは、貴様らの主だろう」

激しい唸り声と威嚇音が周囲を満たす。何匹かが翼をはためかせ、殺気と瞋恚に空気が揺れる。

『去れ。お前のようなものが、ここに足を踏み入れるな』

「…全く、敵愾心の強い奴らだな。わざわざ我が自ら足を運んでや

ったというのに。――なぁ？」

セティスゲルダは言葉尻と共に視線を上げる。ついで竜達が、はっと上を見上げて翼を畳めた。

一瞬で静まり返った場に、嗄れた声が響く。

「わざわざ貴様がここに来ずともよかろうが。つくづく祭りの好きな奴じゃの」

くつくつとセティスゲルダは肩を揺らす。闇の嗤いに、若い竜達が喉の奥で唸った。

「久しいな、マルブレヒト。しばらく見ぬ内にまた年を食ったようだな？」

「は。時を止めている貴様と違って、五百年もすれば多少は老いるわ」

月光の下、突如現れたのは、黒いローブを羽織った、この場で唯一セティスゲルダと同じように人型を取ったものだった。

「貴様も時を止めればよかろう。全く、数千年前はまだ美しかったものを。今や干物ではないか」

「お望みとあらば、その姿になってやろうか」

フードが外されて、皺だらけの老婆の顔が覗くが、それは一瞬で若く美しい女の姿に変じた。

もともとしゃんと伸びていた背筋がさらに伸び、長い、金の艶を帯びた銀髪が艶を帯びて風に零れる。大理石のような肌理細かな顔

の肌はしかし――無惨な爪痕に、右半分を削り取られていた。

しかし魔族はそれについて言及することはなく、美貌を揺らして首を傾げた。

「やはり美しいな。なぜわざわざ醜い姿でいるのか、我には理解できぬ」

「理解されたいとも思わん。してセティスゲルダ、貴様、自ら儂の元へ赴いたということは、覚悟が出来ておるのじゃな？」

艶めいた唇から零れるのは美声、反対に口調は老獪なものだが、それがかえって威厳と力を帯びて聞こえている。

どんなものでも膝をつきたくなるようなその威圧感の中で、しかし魔族の王は傲然と笑んだ。

「貴様は、我が覚悟などという下らないものの為に、貴様を訪れたとでも思うのか？――笑止千万だ」

「――じゃろうな」

女の、銀色に煌めく爬虫類めいた眼が、ふっと細められた、その瞬間。

轟音と共に、セティスゲルダが立っていた空間が、背後の洞窟もろとも吹っ飛んだ。

『マルブレヒト様！』

「退(の)いておれ。邪魔じゃ」

翼をはためかせて飛び上がった竜に、女は一瞥すらせず命じた。

その声音に、周囲に集まっていた竜達は、一様に首(こうべ)を垂れる。

『仰せのままに。偉大なる女王』

竜達が去っていった後、未だ砂埃を上げている一角を眇めた眼で見据え、女は冷たく言った。

「何をしておる。遊んでおるつもりか貴様」

「つもりではない」

愉しげな声は、後ろから発された。突き出された鋭い刃先を、しかし女は眉一つ動かさず、現出させた銀の刃で持って受け止める。

金属のぶつかり合う高い音が、夜闇に響き渡った。

「我にとって、現世などは玩具。所詮は遊戯でしかない」

「相変わらず、巫山戯(ふざけ)た奴じゃ」

一秒に数度という速度で、金属音が木霊する。

光の煌めきすら追いつかぬ速さで、漆黒と銀閃が交叉する。

「『原初の運命(さだめ)』はなかなかに面白かったぞ」

目にも止まらぬ剣戟の中、セティスゲルダは口の端をつり上げて言った。応じるは、先程から幾分低くなった声。

「…貴様が興味を抱くとはの。何の気まぐれじゃ？」

胸、腹、脇、首。一呼吸で幾つもの急所を狙った攻撃を反らしながら、セティスゲルダは女の隙を窺う。

「たまたまだ。飛んでいたら、我の気配に気付いた。人間にしては

やる。流石は、と言うべきであろうな」
「当たり前じゃ。それが運命（さだめ）なのじゃから」
「く、貴様もなかなかに残酷だな。か弱き人の身に、永く続く血戦の末を背負わせるなど」
「……」
「慈愛の種族が、聞いて笑わせる」
「その口、いい加減に閉じる気はないのか」
「貴様も、いい加減に八つ当たりをやめたらどうだ？」

絶え間なく続いていた戟音が、一際強い破擦音ののち、止む。
数歩の距離を離して対峙した両者に、一切の息の乱れもない。

何もかもが息を止めたような空気の中、二つの吐息と共に、漆黒と銀閃の両方の刃が消失する。
女は吐き捨てた。

「二度とあれらに手を出すでない」
「却下」

消えかけていた殺気が再び灯る。それを感じて、セティスゲルダは首を竦めた。

「…まあ、暇つぶしに見ているだけにするがな。安心しろ、殺しはしない」
「そんなことをした時は、儂が貴様を殺してやろう」
「無理を吐くなよ、老いぼれが」
「貴様こそ、魔族ごときが儂に本気で敵うと思うてか」
「その言葉、そっくり貴様に返してやろう」

黒い視線と銀の視線が、まるで形を持つものであるかのように、

火花を散らして交錯する。

永遠にも続くかに思われたそれは、やがてセティスゲルダが宙に浮いたことによって絶たれた。

「ヴィレーヌで、貴様を観たぞ。若き貴様を」

「……」

「彷徨する者。貴様の終着点は、何処なのであろうな？」

哄笑と共に、セティスゲルダの躰は闇に溶けた。

後に一人佇む女は、無言の内に長い溜め息を吐くと、夜空を睨んだ。

その顔が、躰が見る見るうちに縮み、皺に包まれていく。艶めいた銀髪だけはそのままに、数秒と経たずにそこには老婆が立っていた。

「……、」

夜空に浮かぶ月に向かって、小さく小さく呟く。しかしその呟きを、彼女以外に聞き取る者は無い。

老婆は首を振ると、フードを被り、現れた時と同じように、唐突に姿を消した。

第四話　海の魔物　（1）

ユーデルシア大陸南西部に位置する国、ラーシャアルド。国家面積はさほど大きくないが、南の海に面した暖かい気候と、南国ならではの美しい景観に惹かれて、毎年数多くの観光客が訪れている――。

「私、南の海って見るの初めてだ」

ラーシャアルドの首都、マリナリオの城門をくぐりながらリディは言った。心なしか顔が輝いている。

「俺もだ。東や北の海はあるけど…おお」

同意しながら、ルイスは目の前に広がった景色に感嘆の声を上げた。

緩やかな丘陵一帯に建てられたのだというこの城下街は、城門から海に向かって棚田のような形状を保っている。つまり城門をくぐれば、眼下に海をおくのである。城は、城門のすぐ横にあり、戦には向かない作りだな、と物騒なことをルイスは思った。

海の色は、果てしない碧。温かさと清浄さがなせる、薄いコバルトブルーは、否応なしに二人の高揚を誘った。

「南の海は、こんな薄い色をしてるんだ」

リディが感動を隠せずに呟く。彼女の故国オルディアンの海は、漁業こそ盛んなものの、このような綺麗な色はしていない。さらに北に位置するエーデルシアス出身のルイスにしても同じことだった。

「この日差しも…。なんかワクワクするな」

手を庇（ひさし）のように翳して目を細めたルイスは、しかし頭からフードを被っている。北方民族の一である為、強い日差しには弱いのだ。

「日焼け対策しないと。君の肌が酷いことになるから」

対するリディは、抜けるような白い肌をしている癖に、日差しに強い。ので、遠慮なくいつもの格好で空に肌を晒している。ずるい、と言うルイスに、うちの一族は肌は強いんだよ、とリディは笑った。

宿屋を見つけて馬を預け、近くにあった薬屋で手っ取り早く日焼け止めを購入し、その場で顔やら腕やらに厚く塗る。ようやく鬱陶しいフードを清々しそうに脱いだルイスに、売り子の娘が惚けたのはまた別の話。

「にしても」

薬屋をあとにし、海へと繋がる一本道を下りながら、リディが呟いた。

「なんか、静かじゃない？」

道から見下ろせる白い砂浜には、人影が見当たらない。街はそれなりの賑わいを見せているのに、一番の観光の要であろう海は、妙な静けさが漂っている。

「そうだな…」

ルイスも眉をひそめたが、取りあえず行ってみなければ始まらない。人混みをすり抜け、砂浜に向かった、のだが。

「…本当に、一人もいないな」

見事に誰もいない。広い砂浜なのに、二人以外存在する者がいない。

「…ま、これじゃ…」
「…しゃーないか…」

腕を組んで二人は息を吐いた。リディが海を睨み付けて言う。

「こんな魔力の気配がするんじゃ、な」

目の前の海からは、嫌な魔力が漂っていた。種類としては恐らく魔物のもの、だがその大きさ強さが半端ではない。

二人は顔を見合わせ、

「ちょっと見てみよっか」
「だな」

頷き合うと、海の上を歩き出した。

因みに極めて簡単な魔術である。ルイスは水属性が使えるので、水の表面を操る事など容易いし、リディは風魔術でいつも空中戦を行う要領で良い。

「しかし…退治されてないとは驚きだな。ここは首都だろ、狩人協会もちゃんとあると思うんだけど」

海を歩きながら、リディが出した疑問に、あっさりとルイスは答える。

「現れたばっかりなんじゃないのか？来る途中でも、そんな噂聴かなかったし」

「成程。すると討伐隊に巻き込まれるかもね」

魔物が街近辺に現れた場合、狩人協会は直ぐ様街にいる狩人を召集し、討伐隊を組む。

そうして得られた核はもちろん山分けだが、他に貴族の依頼があったりする事が多いので、割と実入りがよく、狩人はこぞって参加する。

「そしたら結構大規模になるな。面倒なの俺やだぜ」

「私だって嫌だよ」

軽口を叩き合いながら進んでいた二人の足が、不意に止まった。

「…来るぞ」

少し前方の足元から湧き上がる、強烈な邪の気配。ルイスとリディは各々剣を抜き、魔力を練った。

そして。

――ドオオオオッ！！

凄まじい轟音と共に、二人の目の前に、巨大な何かが海の中から湧き上がった。押し寄せた波に、舌打ちしてルイスもリディも高い空中に移動する。次いで、瞠目した。

「…イカ…？」

ルイスが呟く。

白い体表に毒々しい紫が散っていて、大きさは普通のイカの百倍はありそうなものの、角張った胴部といい、波間を弾く吸盤付きの触手のような足といい、それはイカだった。クラーケン、という単語が頭を過ぎる。

「流石の俺でも食ったら腹壊すなあれは…、おいリディ、雷」

冗談を呟きながらリディを振り向いたルイスは、そこで眉をひそめた。彼の頼りになる相方は、金の双眸を見開いて、硬直していた。

「…リディ？」

常らしからぬ相方の様子に、ルイスは首を傾げて声をかける。眼下では巨大イカが苛立たしげに無数の脚を海面に打ち付けてこちらを睨んでいる。

「…き…」

「木？」

何故か色を失っている唇から漏れた音を、ルイスは聞き返す。海の上に木などないが。

一方リディは唇をわななかせ、巨大イカをもう一度見ると、悲鳴を上げた。

「うぎゃあああああああ！！」

「はぁ！？」

叫ぶなり、くるりと背を向けて浜辺に向かって全力疾走を始めたリディを、ルイスは呆気にとられて見つめた。

（しかもなんだうぎゃあって。せめてきゃーとか言えないのかよあいつ）

半ば茫然としているために、ルイスはかなり的外れな感想を抱いた。

が、風の唸りを耳にしてはっと振り返り、反射で飛び退く。空を切ったイカの触手は、しかし鞭のようにしなって再度ルイスを襲った。間一髪でそれをかわし、ルイスはリディを振り返る。が、赤い髪を靡かせるその背は、既に遥かに遠い。

そこへまたもや触手が襲いかかり、やむなくそれを斬り飛ばす。赤い血飛沫が弾け、巨大イカが苦悶の叫びを上げた。

「なんだってんだよー！？」

ルイスはそれを一瞥したが、とても一人で適う相手ではない。結果、一度風を喚んで巨大イカの無数の触手を跳ね飛ばすと、リディを追って浜辺に疾走したのだった。

「ぜぇっ、はぁっ…」
「だいじょぶ？ルイス」

砂浜で四つん這いになって荒い呼吸を繰り返すルイスを覗き込んで、リディは言った。ルイスは顔を引き吊らせ、地を這うような声で言う。

「お前が、逃げた、からだろうがっ…！」
「だってあれ嫌いなんだよ」

リディは眉を寄せながら吐き捨てた。その瞳には恐怖さえ混じっている。

「なんなんだよあいつら、だってさ、なんで足が十本もあるんだよ。さっきのあいつなんて十本どころじゃなかったし！しかも足になんか変な吸盤ついててうねうねしてて気持ち悪いったらないよ！その癖魚丸呑みにするんだよ、変態だよ変態！」

「変態ってお前な…。要するにイカが死ぬほど嫌いなんだなお前。うまいのに」
「名前言うな！吐き気がする！」
「はいはい…」

聞いている内に責める気も失せたルイスは、脱力して砂浜に座り込んだ。しかし、虫の類は全くモノともしないのに、イカが駄目と

は。変な奴だ。

「意外に可愛げあんのな」

「どういう意味だよそれ」

仏頂面のリディにくっとルイスは笑い、ぱんと膝の砂を払って立ち上がり、沖を見やった。眉をひそめて、先程の魔物の姿を脳裏に浮かべる。

「しかし…本当になんだったんだ？あれ」

その言葉に応えたのは、リディではなかった。

「クラーケンだ。聞いたことないか？“海の魔物”」

ぱっと振り向いた二人に、喋った男はよう、と片手をあげる。

「久しぶりだな。元気そうだな？お二人さん」

「ジョン…？」

リディが驚いた様に訊く。男――ビグナリオンで出会った狩人、ジョン・イーデルは、にやりと笑って片目を瞑って見せた。

「三日程前か。突然あいつが海に現れたのさ」

場所を移して街中のレストラン。地元民であるジョンの勧めは確かで、ルイスは物凄い勢いで料理を口に運んでいた。リディは食欲がわかないので砂糖八個入り紅茶を飲んでいる。
それはそれで気持ち悪くなりそうなものだが、それについて何かを言うことは、ルイスもさすがに諦めが入り始めている。

「本当に突然でな。あっという間に三十人喰われた」
「うわ、大惨事じゃねえか」

ルイスがうえー、と顔を歪める。それは海面が恐ろしい事になっただろう。考えたくない。

「ああ、比喩じゃなく地獄絵図だ。その場に居合わせた狩人がすぐに結界張って観光客逃がしたからいいものの、下手すりゃ百は死んでたな」
「にしては侵入禁止結界張ってなかったよね。何で？」

リディが不機嫌に言った。侵入禁止になってさえいれば、あれに遭わずに済んだのに。まだ鳥肌が収まらない。

「あー、一瞬だけ解除したんだよ。お前ら通す為に」
「何でだよっ！？」

リディが目を吊り上げて怒鳴る傍ら、ルイスはなんとなく理由を悟って遠い目をする。その予想に違わずジョンは快活に笑った。

「いや、お前らならアイツ相手でも何とかなんじゃねーかなって思ってな。でもまさか思いもしなかったぜ、お前さんがイカ苦手だなんてよ」

さらっと悪気なく返され、リディは唖然とした後、ふるふると拳を握った。それを見てルイスはぼそりと呟いた。

「…ジョン。覚悟はいいか」

「へ？」

次の瞬間、ジョンは窓をぶち破って外に吹っ飛ばされていた。

「ていうか、クラーケンって北の海にいるんじゃなかったか？なんでまた南に。…おし、こんなもんでいいだろ」

「まぁ通常は北なんだがな。偶にこっちにも出る。それに多分亜種だって結論された。無駄にデカいんでな。…おう、ありがとよ」

リディがジョンを殴り飛ばして、核を換金してくると言って憤然と出て行った後、ルイスはジョンの治療をしつつ、続きを聞いていた。アッパーカットを食らった顎をさすり、ジョンは溜め息を吐く。

ぶち破られた窓は、弁償するからまあいいとして、海風が吹き込んで心なしかしょっぱい。店内から向けられる視線に対してしょっぱく感じるのはきっとそのせいだ。

「しっかし、あいつは見た目は極上なのにな。中身がぶっ飛んでやがる」

「前にも言っただろうが。あれを女と言っちゃ世の中の女に失礼だぜ」

二人して散々な言いようである。もしここに本人がいたら二人まとめて鉄拳制裁に遭った事は安請け合いだ。
しかしジョンはにやっと笑って言った。

「そうか？その割には――、あの髪飾り、お前さんが贈ったんだろ？」

化粧気も洒落気もないリディが、唯一この間とは違って、綺麗な陶器細工の髪飾りを付けていたのを、ジョンは見逃してはいなかった。渋面になったルイスに、彼は豪快に笑う。

「お前さん、実は年と顔相応に女慣れはしてるだろ？気障だなぁ」
「煩い。――どの道、今だけの付き合いだからな。飾りの一つ位、付けた方がいいと思っただけだ」

怪訝そうに問い返そうとしたジョンは、その暗い影を背負った様な表情と、どこかいつもと違う口調に、拒絶を感じて口を閉ざした。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「絶対嫌。イカ退治なんて、絶対やらないからな」

レストランを後にしたルイスとジョンが狩人協会に着くと、中からは苛立った声が押し問答をしていた。声の主は、ヨセフと、勿論リディである。

「んなこと言うなよ！相手はあのクラーケンなんだぜ。頼むよ！」
「君達がいてルイスがいて更に有象無象の狩人がいればあんなイカ殺れるだろ。なんで私が必要なんだよ」
「クラーケン甘く見んな！つーか魔術士が足りねぇんだよ。俺は水風だから、有効じゃねーし、今この街に火か雷持ってるの三人しかいねぇの！剣士とかは沢山いるけど、ぶっちゃけ水中の敵には意味ないし」
「海中から引きずり出せばいいだろ。ルイスがいればそれ位できる」
「ちょっと待て勝手な事言うな。俺だけじゃ海は割れても引きずり出すのまでは無理だ」

激しい言い争いに、慌ててルイスは割り込んだ。下手をすればとんでもない役目を負わされそうだ。

「…なんか人外の会話になってんの、俺の気のせい？」

蚊帳の外のジョンが呟いた。常識的に言って、海を割るだのあの巨体を引きずり出すだの、並みの人間にはできない。まして、魔術士でない彼からしたら、理解できない会話に間違いない。

一向に構わずリディが言う。

「ならルイスが海割って、君が引きずり出しなよ。あとは剣士でトドメ。それで終わりだろ」
「俺までのところに異存はないけどな。いいか、剣士は水の上を歩けねえ。しかもそんなことをやってる上で、俺やルイスが他に魔術を使える訳ないだろーが」
「じゃあ魔術士で丸焼きにすればいいだろ」
「話を振りだしに戻すなっ！」

終わる兆しを見せない言い争いに、協会に集まっていた狩人達はうんざり顔である。
と、一人の初老の男が進み出た。

「まあまあ、それ位にして」
「店長（オーナー）」

ジョンがそう呼んだ事で、リディもヨセフもぴたりと言い争いを止め、その男を注視する。

長い白髪を一纏めに背に垂らしたその立ち姿はしゃんとしていて、若々しく見える。その魔力の気配から、かなりの腕の魔術師であることをリディは察した。

「レリア殿、こちらも困っているんだ。クラーケン相手に油断は出来ないからね。辛いのは解るが、参加してくれないかな」

柔らかな口調に、しかしリディは一層顔を歪めた。

「嫌な物は嫌です。負傷者の治療ぐらいはします。だけどアイツと向き合うのは、絶対に御免だ」

いっそ潔いまでの敵前逃亡宣言に、皆半ば呆れたが、男は苦笑してリディに歩み寄る。

「そう言わないでくれ。私も仲間が大事なんだ」
「なら貴方が出ればいいでしょう」
「私はもう衰えた。だが君なら万が一もないだろう？――」

そこから先は、彼がリディの耳元で低く囁いたので、リディ以外の誰も聞き取る事ができなかった。

「『烈火の鬼姫』」

その瞬間、リディの顔から表情や色といったものが全て消え失せた。金の瞳が見開かれ、次いで白くなった唇から、僅かな音が漏れる。数秒後、リディの右腕が目にも止まらぬ速さで男の襟首を掴んだ。

「リディ！？」

「レリア、なにを…」

周囲の混乱を意にも介さず、リディは男の双眸を見据えて押し殺した声で問い質した。

「貴様、どこでそれを」

対する男は穏やかに笑っている。

「少し伝手があってね」

リディは歯を食い縛った。ただならぬ雰囲気に、周囲がたじろぐ中、リディは数十秒の沈黙の後、突き飛ばす様に男から離れて、足音荒く建物を出て行った。その背を男の声が追う。

「今日の夜八時から会議を行う。遅れないようにな」

リディは振り向きもせず雑踏に紛れていった。

『烈火の鬼姫』

頭の中で声が木霊する。

嫌だ。

あの名は嫌いだ。

鎖されていく世界と共に、あの名も捨ててきた筈なのに。

あの名を知られたくない。

今だけの自由時間。

今までの人生で一番楽しいこの時を、邪魔するその名は大嫌いだ

――

「お嬢ちゃん。そこの赤いお嬢ちゃん」

耳に届いた声に、リディははっと顔を上げた。周囲を見回し、道端の露店で視線が止まる。

「…占い？」

庇の付いただけの簡単な骨組の下、紺色のマントを深く被った人物が、こちらを手招きしていた。もう一度周囲を見、手招かれているのが自分だという確信を得てから、リディは露店に近付いた。

「何？占い師のお婆さん」

リディの問いに、マントの下で笑う気配がする。

「災難じゃのう。この世で一番嫌いな物と戦わねばならぬなんてのう」

リディは少し驚いた。基本的に彼女は占いなど信じないが、この占い師はどうも本物らしい。でなければ、つい今しがたの出来事など言い当てられるわけもない。

少しばかり付き合うか、と思い、くすりと笑って腕を組んだ。

「全くだよ。脅迫までされた日には、最悪。嫌な事も思い出した」

「その二つ名は、嫌いかね？」

「……」

なぜわかるのか、という言葉を呑みこんだ。代わりにリディは口元を歪め、吐き捨てる。

「大嫌いだよ」

あの名に込められているのは、間違っても称賛ではない。畏怖と、恐怖と、憐憫と、嘲笑と、拒絶。過ぎた力への嫌悪。

「…そうかい。でもお前さんの力は、定められたもの。紅の運命は、この大陸の原始から決まっておった」

「…は？」

リディは眉をひそめた。話がいつの間にか理解できなくなっている。紅の運命？

（…そういえば、この間の魔族も、同じような事を言っていたような）

「紅と黒。それに連なる無数の運命。お前さんは既に運命に出逢い、宿命との出遭いに向かって歩いておる」

「ちょっと、君といいあいつといい、何の話…」

「ではまたの。紅の姫」

「ちょっ…」

リディが、一瞬吹いた旋風から思わず顔を腕で庇い、腕を下ろした時には、目の前にいたはずの占い師はいなかった。占い師どころか、露店の骨組みすら消えている。

「何だったんだ、今の…」

唖然と立ち尽くしていると、後ろから「おい！」と肩を掴まれた。振り返ると、ルイスが怪訝そうに彼女を見下ろしていた。

「…ルイス」

「どうしたんだ？ぼーっとして」

リディはもう一度露店のあった場所を見、額を抑えた。

「…訳わかんない」

「はぁ？」

「今そこに変な占い師がいたんだよ。ヴィレーヌで遭ったあいつみたいに、紅の運命だの宿命だの、変な事ばっか言ってしかもいきなり消えた」

「…占い師？」

ルイスも眉を寄せる。彼も変な事を言う占い師という存在には覚えがあるが、

（…まさかな）

首を振って打ち消した。今日び別に占い師など珍しくない。ピンキリはあるにしても、一つの街に何人かはいるのが普通だ。

セティスゲルダと同じことを言っていたの言うのは気になるが、考えた所で答えは出ないのはここ何日間かで分かっていたので、早々に諦める。

「にしても、お前どうしたんだよ？急に顔色変えて出て行きやがって」

リディは顔を強ばらせた。ルイスは少しその顔を見つめてから、はー、と息を吐いて頭を掻く。

「いいぜ。言いたくないなら言わなくて。お互い言いたくねえ事の一つや二つ、あって当たり前だからな」

リディは金の目を丸くさせてから、ふにゃっと笑った。彼女にしてはらしくない、安堵が混ざる弱々しい顔。
ルイスは一瞬その笑顔に驚いて動きを止めたが、やがて苦笑して歩き出した。

「行こうぜ。多分明日以降暇ないからな。買えるもの買っとかねえと」
「…だね。あ、甘いもの食べたい」
「お前さっき食っとけよ…」
「吐き気がようやく収まったんだよ。あー、思い出すだけで鳥肌立つ！」
「…マジお前大丈夫か…」

遠ざかる二人の背を見つめながら、老婆はマントの下で口端を吊り上げて笑った。

「あやつにちょっかいをかけられたと聞いて、少し不安じゃったが。元気そうじゃの」

そして彼女は周囲の誰に気づかれる事なく、一陣の風と共に消えた。

第四話　海の魔物　（1）（後書き）

第四話です。
リディのイカについての悪口雑言は、私が常日頃から思っているものでもあります（笑）
でもおいしいって言う人の方が多いんですよね。
私のイカ嫌いの原因は多分あれです、小学校の給食のイカリング。

第四話　海の魔物　（2）

第四話　海の魔物　（2）

翌日の昼。マリナリオにはどこか、ピリピリとした空気が満ちていた。街路には露店も少なく、出歩く人影も殆どない。だが、方々の視線は皆、一様に海に集中していた。

「では昨日打ち合わせた通りに。剣士は十名程砂浜に待機。残りは魔術師達を守れ。治療術師は結界を作戦開始後迅速に張る事だ。何かわからない事はあるか。――ないようなら、今すぐ始める。覚悟はいいか！」

砂浜に朗々とした声が響く。マリナリオの協会長――名はグレイというらしい――の声に、その場に集まった狩人達は、応えて一斉に唱和した。軽い地響きのような騒ぎに、この場にいることさえ不本意なリディは、完璧に不機嫌だった。

「あんた、本気でイカ嫌いなんだなぁ」

彼女の隣に立っているエドガー・ムーアが眉を上げていう。この作戦内で、彼の立ち位置は重要だ。イカを見たら絶対に吐くと言い切ったリディが対象を見なくて済むように考案された攻撃、その要はエドガーの弓である。

火魔術士がほとんど居合わせなかったこの状況で、彼ら”ノナ”の協力を得られることは、マリナリオにとって僥倖以外の何物でもない。

「タコも駄目だよ。あんなモノを食べようっていう神経がしれないね」

それぞれ決められた場所への移動が始まり、リディも足を動かした。彼らトドメ役が向かうのは、砂浜の端にある崖である。全貌を目にする為には、多少距離があってもそこしかない。

エドガーは気の毒そうな目でリディを見た。

「ええ、うめえのになー…」

「リディ」

少し離れた所からルイスが走ってきて、割と真剣な目で囁いた。

「本当に大丈夫か？」

昨日の会議の問題点も、そこだった。今この街にいる火属性を使える魔術士は、リディを含め三人。本来ならあの巨体を焼き尽くすには圧倒的に火力が足らない。だが、リディが三人いれば何とかなるよ、と吐き捨てた事によって、会議はその方向のまま収束したのだが――。

「ああ。核の力も借りるしね」

リディもルイスも、なにかの時の為に、常時いくつかの核をストックしてある。

核から攻撃エネルギーを引き出すのは、実は容易ではない。核とは生命エネルギーの結晶であり、元来他を傷付ける為には使い辛いのだ。しかしそういった問題点は、二人はとっくにクリアしていた。

「ルイスこそ、気を抜かないでよ?海割るの、結局君が要になったんだろ」

「あー。まぁ俺の方は心配すんな。ヨセフもいるし。あいつかなり強いぜ」

「そうだろうね」

この間のアイルでの戦闘で、リディは直接ヨセフの戦いを見た訳ではない。乱戦の中数度すれ違っただけだ。しかし、リディの魔力を視る目は確かだ。その目を持って、この場にいる魔術士達の中で自分とルイス、グレイを除けば、ヨセフが一番魔力が高いと見切っていた。

そのヨセフが、波打ち際から叫ぶ。

「おら、ルイス何やってんだ!行くぞ!」

「今行く!じゃあな、リディ。健闘を祈る」

「そっちもね」

パン、とリディと掌を叩き合わせてから、ルイスは砂を蹴った。見る見るうちに沖へ向かう後ろ姿に肩を竦め、リディも視線を崖に向けた。

「…全員、準備はいいか」

魔力の気配が最も濃密な場所の寸前でルイスは言った。海上に浮かぶ魔術士達が、皆緊張の面持ちで頷く。砂浜を振り返り、次いで崖の上を見上げる。微かに光がチラついた。

エドガーの弓である。準備はいいという合図だ。ルイスは微かに頷くと、他の魔術師と共に息を吸い込んで、水面を蹴って、ポイント上空に舞い上がった。

途端沸き上がる、膨大な、邪な（よこしま）魔力。水面が表面張力で盛り上がり、次の瞬間派手な飛沫をあげて弾ける。姿を現したクラーケンに、周囲の魔術士達が息を呑んだ。

「こいつが、クラーケン…！」

ヨセフが唇を舐めた。しかしぐずぐずしている時間はない。目配せで他の魔術師と呼吸を合わせ、精霊を喚んだ。

海上に集まった魔術師達の役割は、一様にクラーケンの捕縛。風魔術師が水魔術師の足場を作り、水魔術師は海水を操って流れを停滞させ、クラーケンの動きを制限する。

その作戦はきっちりと功を奏し、目に見えて水の流動の勢いは衰え、クラーケンの体を重い鎖のように取り巻いた。

クラーケンが煩わしげに咆哮した。ビリビリとした衝撃が水を波立たせるが、魔力がすぐに滑らかに抑制する。

そして、

「割れ、アイシィ…！」

凛とした声が響くと共に、大気が鳴動する。ルイスを要とした凄まじい魔力の収束と解放に、

海は、割れた。

クラーケンの周囲半径五十メートル程が、ぽっかりと穴を開けた。重力に従って落ちようとしたクラーケンを、ヨセフの風魔術が空中に跳ね上げる。砂浜にいる誰もが唖然とする中、膝に手をついたルイスが叫んだ。

「リディ…！」

直後、クラーケンの黄色い目と目の間に、矢が突き立った。

「おー、おいでなすったぜ」

エドガーが手を翳して言った。崖の上に集まる魔術士達が、それぞれ強張った顔で火精霊を喚ぶ。一人、背を向けているリディにエドガーは顎をしゃくった。

「おーい。大丈夫か？」

「問題ない。もう私の準備は終わった。君の魔力の補足も出来てる。

いつでも撃ちなよ」

この作戦で、エドガーはいわば導火線である。その魔術を乗せて矢を撃てる希少な能力で持って、リディの魔術を誘導する。他の魔術士達も同様だ。全員が火精霊をエドガーの矢に纏わせることにより、絶大な威力の火矢を放とうというのである。

「よっしゃ。じゃあ行くぞー」

引き締まった上腕筋が盛り上がり、力強く弦を引く。リディや集まった魔術士達は目を閉じ、エドガーの魔術の軌跡に集中した。

「…らぁっ！」

細く鋭い軌跡は、しかし過たずクラーケンの眉間に吸い込まれた。

矢が突き立つと同時に、クラーケンを取り囲んでいた水魔術師や風魔術師が、それぞれ攻撃魔術を放つ。しかし弱点ではないせいか、大した効力は発揮されていない。

クラーケンは眉間の矢に絶叫し、体を捻らせ無数の足で海面を叩く。魔術士達が懸命に動きを止めようとするも、焼け石に水の感が否めない。誰もが危機感を覚え――しかし眉間に突き立った矢を中心にして、俄かに魔力の奔流が巻き起こる。その強さを肌で感じた

ルイスは、半ば本能的に叫んだ。

「皆、離れろ！！」

リディは目を開いた。矢に乗った魔術士達の魔術の要は、リディだ。リディの命令と共に、全員の魔術が発動する。そして、唇が絶対的な力を持って命じた。

「灰燼一切遺さず焼き尽くせ、フレイア」

次の瞬間の光景には、その場の誰もが目を疑った。

クラーケンの眉間から、赤い炎が溢れ出たのだ。炎はまるで巨大な舌のようにクラーケンの体表を舐め、覆い尽くす。今までとは比べ物にならない絶叫が、クラーケンから発された。

魔術を放った当の火魔術士達も、呆然とその光景を見つめていた。かつてこのような魔術を発揮した事はない。そして、発揮できているのは、魔力を合わせたからだけでなく、要の少女がいるから、というのは自明の理だった。集束した他人の魔力を、最大限まで開放する。それは、相当の技術と魔力が必要だ。

「なんつー力だよ…！」

ヨセフが半ば恐怖を交えて言うのがルイスの耳に届く。ルイスも全く同感だった。

（やりすぎな感もするが）

もう必要ないだろうと海の穴を崩す。一気に海が流れを取り戻すのを確認し、灰燼に帰していくクラーケンを見た。

「塵一つ残らないな…」

誰かのその呟きが、聞こえたのか否か。クラーケンの、もはや一つになった目がぎらりと光り、最期の力を振り絞った咆哮が海上に響き渡った。

「うわっ、なんだっ…」

咆哮の余波からの衝撃をやり過ごしてから、海上の魔術師達は絶句した。

「波がっ…」

強大な圧力によって海面が盛り上がり、砂浜に凄まじい速さで肉迫しようとしている。剣士達が大混乱に陥って逃げようとしているが到底間に合いそうもない。ヨセフがばっとクラーケンの方を振り向くと、炎の中で僅かな影が踊り、燻って消えていく。どこか満足げな光と共に、炎ごと消えた。

大波が砂浜まであと数メートルに近付く。結界が張られたようだが、この短時間であの波を防ぐ強度などとても無理だ。ルイスは舌打ちして目をぎゅっと瞑った。

（足りるか――）

雷速の集中で魔力を練る。残り少ない魔力をかき集め、懐にしまっていた核を握って、叫ぶ。

「凍らせろ、アイシィ！！」

次の瞬間、視界は白に染まった。

「海が…」

誰かが呆然と呟いた。まだ本格的な夏ではないとはいえ、充分に暖かい場所が、白く凍り付いている。砂浜を襲おうとした大波は盛り上がった所で停止し、水飛沫すら、時が止まったように宙で白くなっている。

何者も音を立てられない世界に、不意にガシャン、という音が響いた。

「ルイス・キリグ…」

この光景を作り出した張本人――ルイスは、氷上に落下して喘いでいた。しかし誰も動けない。尋常ならざる力の前に、足まで凍ってしまったようだった。――ただ一人を除いて。

「ルイス」

とん、と軽い音を立てて、氷上に倒れ伏した青年の傍らに、細い躯が着地する。

「無理したね。大丈夫？」

「……」

覗き込む金の眼を数瞬見つめて、蒼の眼は閉じた。ぐったりと力を失った躯を、リディはひょいと肩で支えて立ち上がった。

その時漸く呪縛から解放されたヨセフが、慌ててその横に降りる。

「リディ、ルイスは…」

「平気だよ。単に急激な魔力の消費に気絶しただけだ」

淡々とヨセフに答えると、リディは一気に砂浜まで飛んだ。そして立っていたグレイに言った。

「全員砂浜から退かせろ。君は結界張ってくれる」

グレイは笑っていた。微笑みながら、

「君が張らないのか？」

と訊いた。
リディはすっと目を細めると、次の瞬間には右手のサーベルをグレイの首筋に突きつけていた。
「おい、レリア！？」
誰かの慌て声を余所に、リディは射殺さんばかりの眼でグレイを見据える。
「いい加減にしてくれない？元『十強』の魔術士ならそれ位やりなよ。この上結界張ったら、私まで倒れるだろ。――ああ、それとも」
皮肉気に口元が歪む。少女らしい表情が掻き消え、冷め切った大人の顔が覗く。
「倒れて欲しいのか？」
その意味が解った者は、その場にいた者ではグレイ以外いなかった。しかしその場に漂う怒気と殺気に、皆固唾を飲んで見守る。
グレイも流石に笑みを収めて、肩を竦めた。これ以上は、殺されかねない。
「…いや。興が過ぎたようだな」
「解ったならとっととやって」
冷たい声音に押されて、グレイに言われる前に狩人達が退いていく。リディも踵を返し、ふわっと風に乗って崖の上に到達する。そこにヨセフが、他の魔術師達と共に海上から戻ってきた。

「核あったぜ。良い色してるぞ」

ちらとリディは彼の手の中の物に目を遣った。緑がかった青い丸い玉だ。

「しかし、どうすんだこの海。こう凍っちゃ…」

「今から溶かすんだよ」

一拍遅れて「は！？」という驚愕の声が発されるのを聞き流し、リディはルイスを地面に下ろしてくるっと振り向く。

「リディ、ちょっ…」

「退いて」

すたすたと崖の淵まで近づく。砂浜にはグレイも含め、もう誰もいない。

「…フレイア」

瞬きの内に、彼女の炎の精霊が傍らに姿を現す。リディは少し笑って、命じた。

「溶かせ」

今日放たれた三つの魔術、そしてそれを為した二人の狩人を、その場に居合わせた者達は決して忘れないだろう。

崖の上から広がった炎は、海をまるで波のように被っていき、砂浜寸前で止まっている大波をも包みこんだ。

それらは数秒で終わり、次いで激しい音と共に大波が砂浜を襲う。あわや街へ続く道へ流れ込むかと思われた波は、しかしグレイが張った広範囲の結界に拒まれた。結界は怒涛にも揺るぐ事無く波を防ぎ、やがて波は引いていった。

「…氷が」

海を凍り付かせていた氷が、跡形もなく消え去っていた。外洋直前まで伸びていた白が、消えて元の青を取り戻している。

「……」

グレイは無言で波打ち際に近づき、水に触れて眉をひそめた。―冷たい。

「悪いけど、元の温度まで戻したら、私が倒れるから」

見越したように崖の上から声が届く。リディは再びルイスを担いでグレイを見下ろしていた。

「私とルイスは早く逃げるよ。これだけ大規模な魔術使っちゃったから、追っ手がすぐ来ると思う」

「追っ手って、お前…」

リディはちらとヨセフを見て肩を竦めた。

「核の配分は要らない。特に金には困ってないし。ただ代わりに追っ手にシラを切って欲しいんだ。私達がどこに行ったか知らない、名前もわからないって」

グレイはその端正な顔を見上げる。遠いせいもあるが、リディの表情からは感情が読み取り辛い。

「そんなの、参加狩人の名簿を見られたら終いだぞ」

「だからシラ切ってって行ってるんだよ、店長さん」

つまり見せるなという事か。くくっとグレイは笑った。大した奴だ。

「わかった。この件を片付けたのはお前達のようなものだからな。約束しよう」

「ありがとう。ああ、あと多分私の追っ手の方に、強い火属性魔術使える奴が二人いると思うから、そいつらに海の温度戻させていいよ。明日には絶対来るから」

それまでに大分魚が死んでしまうが、仕方あるまい。

「わかった」

「じゃあ失礼するよ。さよなら」

一度ダンッと強い音が聞こえ、リディとルイスの姿は消えた。凄まじい風魔術だな、と嘆息し、グレイは空を振り仰ぐ。

（確かにとんでもない奴らだな）

遠いアリエルにいるかつての仲間に向かって苦笑して、

「…さあ、仕事をしようか」

コキコキと肩を鳴らして、グレイは海に背を向けた。

ルイスはドアが閉まる音で目が覚めた。起き上がろうとして、頭に走った鈍痛に思わず呻く。

「大丈夫？」

部屋に入ってきたのはリディで、食事のトレイを持っている。彼女も心なしか疲れた顔で、ベッドの脇テーブルにトレイを置くと、同じくベッド脇にあった椅子にどさりと座った。

「全く、術前集中も無しにあんな温かい海凍らせるなんて。あとで人間引き揚げた方がよっぽどラクだったんじゃない？」

身を起こしたルイスに、水を入れたコップを渡す。ルイスはそれを有り難く飲み干してから、苦笑した。

「思わず、な。ていうか、ここどこだ？」
「まだラーシャアルドだよ。流石に意識ない人間連れて国境越えは出来ないし、馬にも無理させられないしね。マリナリオから五十キロ位東の…なんていったかな、デリク？とかいう街だよ」
「今、何時だ」
「真夜中を二刻過ぎたとこ。魔力が大分回復してきたから、そろそろ起きるんじゃないかと思ってたんだ。ドンピシャだね。後で世話してくれた女将さんに御礼言いなよ」

にっと笑うリディに、しかしルイスは顔をしかめる。女将さん、とは言っているが、リディが他人に任せて自分が休む人間でない事は、この数か月で重々承知している。

「寝てないのか、お前」
「私はちゃんと術前集中したからそこまでダメージないよ。これ位平気」

気丈に笑うが、金の瞳には明らかに覇気がない。恐らくずっと自分についていてくれたのだろう、とルイスは額を抑えた。

「よく言うぜ。どうせあの後氷溶かして来たんだろ？そんだけの大規模魔術使ってダメージ無い訳ないだろ。しかもお前、俺に魔力分けたろ」

リディが目を丸くし、次いで背もたれに体重を預けて首を回した。

「バレたか。でも海の氷はホントに溶かしただけだから、大した力は使ってない。後は押し付けたし」

押し付けた、という言葉に引っかかりを覚えたが、その時ルイス

の腹が盛大に鳴った。

「……」

「…ぷっ」

一拍置いてリディが笑い出し、トレイをルイスに押しやった。

「食べなよ。これしかないけど、早いとこ国境抜けて食べよう」

ルイスは今度は別の意味で額を抑えていたが、素直にトレイを引き寄せ、食器を手にとった。

何故犯罪者のように逃げるのか、どちらも口にしないがどちらも解っている。お互い追っ手がいて、それは元の身分のせいだと、知らないなりに暗黙の了解だった。

本当は『誰』なのか、訊きたい気持もある。でも、自分が知られたくない様に、相手もきっと知られたくないのだと解っているから、お互いに二人は訊かない。いずれ知る事になるのかもしれないが、それでも二人は『今』を楽しみたかった。

黙々と食事を口に運びながら、ふとルイスは、椅子に座るリディが静かな事に気づいた。よくよく見れば、俯いて目を閉じ、微かな寝息を立てている。

「…馬鹿だな」

自分はずっと寝ていたが、リディはあの戦いの後、ルイスを抱え

て二頭の馬を操り五十キロを駆け抜け、その後もルイスの世話を焼いていたのだ。今の自分よりかはずっと、疲れているに違いない。

ルイスは手早く食事を終えると、ベッドから立ち上がって、トレイを置いたテーブルを壁際に移動させた。リディを見やるが、起きる気配はない。

ルイスはベッドの毛布を捲ると、そっとリディを抱き上げ、ベッドに下ろした。微かな呼吸が一瞬乱れたが、安定な場所になったせいだろう、直ぐに深い眠りに落ちていった様だ。毛布を肩までかけ、頬にかかっていた髪を避けてやる。

不意にジョンの言葉が耳に蘇った。

『見た目は極上なのにな』

「…美人なんだよな」

普段の口調と態度と自分にも比肩する強さについ忘れがちだが、リディは今までルイスが出会った女達の中でもトップレベルの綺麗さだ。その顔をしばらく見つめてから、我に返って首を振る。

(何やってんだ俺)

早く寝よう。

出来るだけ音を立てないように荷物の中から毛布を取り出し、壁に寄りかかって毛布にくるまって、ルイスは目を閉じた。

翌朝。

目を覚ましたリディは、自分が寝た覚えのないベッドに寝ていることに少し戸惑い、次いで部屋にルイスの姿と荷物がないことに気づいてため息をついた。

（あの馬鹿。こんな時に女扱いしなくてもいいのに）

自分の部屋に戻って、簡単に身嗜みを調えて荷物を持ち、宿屋の階下に向かい――リディはげんなりした。

「おー、起きたかリディ」

山のように皿を積み上げた中にいたルイスが手を上げる。近寄りながら、まだ人のいない早い時間で本当に良かった、としみじみ思った。

「いやあ、嬉しいねえ。あたしの息子が子供の頃を思い出すよ。たくさん食べてくれるのは料理人冥利に尽きるんだ。お嬢ちゃんは何がいいかい」

が、楽しそうに厨房で腕を振るう女将に、訊かれ、リディは眉間を揉みほぐすと、

「…蜂蜜たっぷりかけたパンケーキで」

と言った。

―――――――――――――――――――――

「じゃ、女将さん、ありがとう。料理美味しかった」

「ご迷惑おかけしました…」

たらふく食べて上機嫌のルイスと、昨夜といい今朝といい散々面倒を見て貰った恩から頭を深く下げたリディに、女将は呵々大笑した。

「なんの。また来ておくれ。あんた達みたいな綺麗な子ならいつでも大歓迎だよ」

朗らかに笑う女将にええ是非、と返してリディもルイスもフードを被り、馬に飛び乗った。

「あの」

「なんだい？」

「もしかしたら、私達を探している集団が来るかもしれません。その時に…」

女将は言いたい事が解ったらしい。にやりとして言った。

「やっぱりそうかい。妙に慌ててると思ったのさ。駆け落ちかい？」

「「違います」」

「ふふ、そうかい。解ったよ。誤魔化しといてやるさ」

「ありがとうございます」

今度はルイスも深々と頭を下げると、馬の首を返して腹を蹴った。

「達者でねー！」

後ろに遠ざかる女将の声に手を振って、後はひたすら二人は馬を駆った。

「ルイス」

「なんだ？」

「私、この後アルフィーノ通ってゼノ行きたいんだけど。いい？」

ルイスは少し目を細めた。ゼノか。イグナディアと並んで好戦的な国。危険、だがしかし一度行ってみたいと思っていたのも事実。

「ああ、行こうぜ！早くしないと国境封鎖されちまうからな」

「…だね！」

勢いよく手綱をうって、二人は温かい南国の海に別れを告げた。

第四話　海の魔物　（2）（後書き）

術前集中、っていうのはなんていうか、呪文がある魔法の仕組みだったら、詠唱みたいなものです。破棄したらすごい疲れる。ただでさえ海凍らせたりしたら普通の魔術師ならぶっ倒れます。しかも凍らせられないかも。

いつのまにかＰＶアクセスが一万を超えていました。ありがとうございます。

第四話　後日談

第四話　後日談

南の海に突如現れた、魔物クラーケン。それを葬ってから僅か一日後。彼女が言った通り、その集団はやってきた。

「失礼する」

バンと音を立てて狩人協会の入口から入ってきた三人組に、狩人達は敏感に注意を向けた。

いずれも若いが、見ただけで手練れとわかる。二人は男で、一人は女だ。長い外套の下には、鎖帷子と、使い込まれた剣が垣間見える。中央にいた、鋭い鷹の様な眼をした男が代表して口を開いた。

「昨日、この辺りでクラーケンが倒されたと聞いた。倒したのはどなたかお教え願えるか」

朗々とした声音にしかし皆、来たか、と一様に身を固め、視線を店長に向けた。グレイは流石というかなんというか、内心を微塵も見せずに言った。

「もうこの街にはいない。殺るだけ殺って、あっという間に消えてしまった。あなた方、彼らの知り合いか？」

「…『彼ら』？」

向かって左の女が訝しげに呟いた。

「複数？」

意外そうな調子で右の男が訊く。

「ああ。黒い髪の青年と、赤い髪の少女だったよ」

その瞬間の三人の顔は見物だった。一人は静かに拳を握り締め、一人はやっぱり…、と呟きうなだれ、一人は深々と溜め息をついた。

「…その赤い髪の少女は、金の瞳に、腰に二振りの剣を佩いた、馬鹿強い魔力を持ってる美しい少女か？」

一分も誤魔化す隙がない、と皆思った。あの少女は忘れがちだが実は目を疑う程の美少女だ。絶対あの性格が損をしている。

「ああ。あなた方、あれの知り合いか？謝礼も受け取らずに消えたから困ってたんだが」

「…寧ろ謝りたいのは此方だ。迷惑をかけた…。して、どこに行ったかご存知ないか」

「悪いが、知らない。…あなた達、皆魔術士だろう？」

不意なグレイの言葉に、三人組が目を瞬く。グレイは苦笑した。

「火属性を使える方はいるか？」

「私と彼が使えますけど」

女が中央の男を指して言う。成程とグレイは納得した。あの少女

は自分の追っ手が誰かまでしっかり理解しているらしい。

「すまないが、海の温度を上げるのに協力願えないか。今この街に、火属性を使える人間が二人しかいなくてね、大変なんだ」

「海の温度？」

男が眉を潜める。右の男が訊ねた。

「何かあったのか？」

「赤髪と一緒にいた男が、私達を助ける為に海を凍らせてしまったんだ。赤髪が氷は溶かしてくれたんだが、何分温度は戻らなくてね…」

「海を凍らせたぁ！？」

右の男が素っ頓狂な声を上げ、他二人も驚愕して目を見開いた。

「ああ。あれはあなた方の知り合いではないのか？」

「…というより、あの人が男と旅してるって事から突っ込むべきですねぇ」

呆然と女が呟いて、中央の男が眼光鋭く問い質した。

「海を凍らせるとは…並ではありませんね」

「こっちも呆れたよ。なにしろそいつ、その前に海を割っていたんだから」

「わっ…」

今度こそ三人共絶句した。そんな、神がかった芸当が出来る人間は限られる。

「その男…何者ですか」
「さあ。ただ女顔負けの綺麗な顔立ちをした、黒髪の若い男だったよ」

左右の女と男が、若い男…、と渋面になった。

誰も気にも留めていなかったが、確かにあの年頃の若い男女が二人旅をするなど異常だ。やっていることもさておき。しかし間違ってもあの二人にそういう雰囲気はなかった。

そう伝えると、三人は微妙そうな顔つきになった。

「…情報をありがとう。約束通り海の温度は任せてくれ」

とりあえず男が礼を言って、三人は身を翻し、協会を出て行った。外から、「どこ行きやがったんだあの方は――！」「うるさい黙れっ！泣きたいのはこっちようっ！もうヤケ食いよっ！」とやり取りが聞こえ、遠ざかって行く。

泣き声混じりの喚き声が完全に消え去り、しばらくの沈黙のち、一人の狩人が遠慮がちに言う。

「にしても、何者なんすか？レリア。あれ、どーみても貴族の騎士でしょう。しかも騎士で魔術も使えるなんて、一般じゃねえっすよ」
「それは言えないよ。言った事がバレたら私が殺される」

にこやかに言って、グレイは手紙に目を落とした。

彼らのことを報せてくれたのはアリエルにいる、嘗てパーティを

組んでいた剣士だ。くれぐれもこき使えという言葉が笑える。どれだけ苦労したのか。

狩人協会は、ざっくばらんに見えて秘密主義で、仲間への情に厚い。たとえあの三人が、協会に彼らの手配を頼んだとして、請ける事はない。狩人に過去は必要ない。野蛮と謗られようが、狩人達は互いの事情を暴くものを、受け入れはしないのだ。

だから彼らは直接捕まらない限り、旅が出来る。決して長い時間ではない。それは彼らも解っているだろう。だからこそ、手を貸してやりたいと思ったのだ。

「…国境近くは、エドラだったな」

街の名前を呟いて、グレイはおもむろにペンを取った。

人が出会い、重ねていく軌跡。その交差は、気付かぬ内に増えていき、かけがえのない絆となっていく。

リディとルイス。彼らが紡ぐ、旅という名の糸もまた、いずれは鮮やかな、記憶というタペストリーを編むのだ。

その果てに何が待つのか。それを知る者は、まだ誰もいない。

第四話　後日談（後書き）

第四話終了です。リディを追ってる三人は、まあそのうち再登場するかと思います。いつになるかは未定ですが…

第五話　傷と感謝　（1）

第五話　傷と感謝　（1）

ラーシャアルドとアルフィーノの国境手前の街、エドラ。観光国家ラーシャアルドと、商業国家アルフィーノの境だ。旅人や商人の行き来は多く、自然街は栄え、二つの国が友好関係を結んでいる為、国境は万人に開け放たれている。のだが。

「…なんで国境封鎖されてんの？」

赤い髪の少女、リディは憮然と呟いた。

目の前にある、エドラから国境に向かう検問は、特徴的な青い鎧に身を包んだ兵士達が詰めていた。

「さあ…訊いてみるか」

通せと文句をいう人々の前で、どこかピリピリした雰囲気を漂わせている兵士の一群に、黒髪の青年、ルイスは近付いた。

「すいません」

歩み寄る二人の男女に兵士達が振り返る。兵士達の表情は殺伐としていたが、相手がまだ年若く、純粋な疑問を浮かべている顔であることに警戒を解く。

「何だ？」
「これ、国境封鎖されてますよね」
「見ての通りだが」
「何かあったんですか？」
リディの訊ねに、兵士のひとりが額を抑えて答える。
「…その。探し人が、いまして。その人間が、国境を越えようとしているというので」
「…通れないんですか」
「申し訳ありませんが…。通行許可証があればいいのですが。それ以外何人たりとも通すなという御指令なのです」
リディとルイスは顔を見合わせた。余り一か所に留まっているのはマズいのだが。だがここで食い下がった所で、どうにもならないだろう。
「…わかりました。通行許可証というのは、どこに行ったら手に入るでしょう？」
「この街を預かるゲザン少将か、狩人協会のフリング殿ならば…。しかしゲザン少将は難しいお方です。会われるかも…」
だからこそここで人々が、通せと詰めかけているのだろう。観光客はともかく、商品を仕入れに行く、もしくは持ち帰る商人達にとっては死活問題だ。だが、そういう事なら話は早い。
「狩人協会に行きます」
リディとルイスは踵を返した。その背を慌てた声が追う。

「否、フリング殿はもっと厄介です！過去に『剛腕の斧戦士』と謳われた、元『十強』の一人で、ご自分の認めた方としか…」
「問題ありません」
二人の顔が笑みを浮かべる。胸元で銀のプレートがキラリと光った。
「私達は、狩人ですから」

「なんか、ごちゃっとした街だね」
兵士に教えられた道を辿りながら、リディがそんな感想を言った。
そう、まさしくエドラはごちゃごちゃした街だ。元々は国境手前というだけの小さな街だったのだが、人通りが増えるにつれ、増築するように規模が拡大した為、街には設計性も何もない。路地や露店が入り乱れ、完璧主義者には耐えられない場所だろう。
「迷いそうだな」
あっさりと言ったルイスに、リディは顔を歪める。二人は別に方向音痴という訳ではないが、人並みの感覚だ。確かに一度道を見失えば迷いかねない。

「ま、風使えば平気だろ」

しかし続いた言葉に安堵する。そうだ大丈夫。自分には風魔術がある。

「でも行き倒れとかいたら笑えるな――」

笑い混じりに言ったルイスは、ふと視線を移し――固まった。

「？」

自分の後ろを見て硬直しているルイスを不審に思ってリディも振り向き――同じ様に固まった。

一人の青年が路地から這い出した格好で俯せに倒れている。いや、少年というべきかもしれない。南国らしく剥き出しの肩は、細身に分類されるルイスと比べても、かなり華奢だ。

「…行き倒れ？」

リディは、とりあえず放っておく訳にもいくまいとその体の横にしゃがみ、様子を見ようと手を伸ばし――突如伸びてきた腕にガシッと掴まれ、ぎょっとして悲鳴を上げた。

「うぎゃっ！？」

それを聴いていたルイスは、相変わらずどこまでも女らしさのない奴、いや多少のかわいげはあったっけな、とかなり失礼な事を思いつつ、行き倒れ少年を挟んでリディと反対側にしゃがみこむ。

「おい。大丈夫か？」
「…し…」
「死？」

腕を掴まれたままのリディが、出来るだけ身を引いて聞き返す。
何で物騒な方向にいくのか。
ルイスは屈み込んで、俯せたままの少年の口元に耳を寄せた。

茶髪が揺れて、苦しそうな声が漏れる。これはマズいかもしれない、とルイスは眉を寄せ、おい、と少年を揺すった。が。

「飯…」
「……」
「……」

それきりぱたりと沈黙した少年に、ルイスとリディはしばし顔を見合わせた。

「っはっ、生き返ったー！あんた達、ありがとうすんげー感謝！！」

行き倒れ少年改め、満腹少年の満面の笑みを前に、リディは半ば呆然としていた。

「ルイスと変わらない量食う奴が存在するなんて…」

「だから言ってんだろうが、お前が少食なんだって」
「んな訳あるか」

目の前には積み上がった皿。リディの言葉通り、その量はルイスと張る。その向こうにいる浅黒い肌の少年をルイスは見、軽いノリで訊ねた。

「で、どうしたんだお前。何であんなとこで行き倒れてた？」
「迷ったんだ」

少年は至極当然の様に答えた。

「…何でだ。お前魔術士だろ。どうにだって出来るだろうが」

ルイスの突っ込みに、少年は目を丸くした。

「そっか。風使えば良かったんだな」
「気付けよ…」

ルイスは呆れて息を吐いた。自分も気づかなかった口のリディは沈黙を守った。

「改めて、助けてくれてありがとう。オレはアルフレイン・ウグリス・ロウ・カーラント・ラーシャアルドっていう。あんた達は？」
「……」
「……」

（今、こいつなんて言った？）

二人は目を見開いて少年を凝視した。少年は首を傾げ――自分の

失態に気付いたらしい。

「あ、しまった」

「「あ、しまったじゃねぇえええ!!」」

思わず二人同時に怒鳴ってから、慌てて周りを見回す。今の発言、聞かれていたらかなりヤバい。が、幸い昼時には遅い時間帯の為か、店内に人の姿は殆どなく、またいる人間も気にした様子はなかった。

「ちょっと待て。今お前なんていった」

「バレちゃしょうがない。オレはラーシャアルドの第三王子だ」

「そういう事をさらっと言うな!」

リディが叫んで少年の頭を殴った。不敬罪とかそういうものは頭から吹っ飛んでいた。

「…で?王子様が何でこんな所にいるんだ?」

頬杖をついてルイスが訊く。護衛の気配もないし、何より王子にしては服が質素で、間違いようもなく薄汚れている。先程の国境封鎖を思い出し、なんとなく全景が見え始めた。

「逃げたんだ」

「……」

「…やっぱそうか」

リディは駄目だコイツ…と声に出さずに沈み、ルイスは頭を抱えた。

彼から聞き出した流れはこうだ。

観光国家ラーシャアルドは国土は広くなく、争いごとは滅多にない。従って、王家の仕事もあまりない。退屈な日々に飽き飽きしていた彼は、ある時思い付く。

どうせ何かあったとしても自分は第三王子。いてもいなくても兄上達がいれば、どうという事はない。ならば一丁王宮を抜け出し、世界を見て見聞を広めようではないか！――と。

そうして彼は王宮を出、マリナリオを飛び出し、ここに至る。

「でも国境封鎖されちまっててさ！立ち往生って訳だ」

はっはっは、と空色の眼を快活に細めて笑う少年に、リディは笑い事じゃないだろ…と頭を痛める。

「お前とっとと捕まれ。俺達が国境越えられねえだろうが」

溜め息を吐いたルイスに、少年が憮然と頬を膨らませた。

「嫌だ。折角ここまで来て諦められっかよ」

ルイスもリディも口を噤む。…彼らには、少年を非難する資格はない。それどころか、彼の気持ちは痛い程解るくらいだった。

「…しょうがない」

リディが何かを振り切った様に立ち上がり、ルイスを見下ろして言った。

「ルイス、行こう。狩人協会行けば私達はなんとかなるだろ。王子、ここは払っといてあげるからさっさと行きなよ。魔術使えばどうとでもなるよ」

少年はぽかんと二人を見、首を傾げる。

「あんた達は、狩人(ハンター)なのか？」

「そうだよ」

「狩人協会に行くなら、案内してくれ」

「…は？」

少年は、真面目な顔で言った。

「金は持ち出してきたけど、早晩なくなることは見えてる。狩人になれば魔物を狩って核を換金出来るし、今回みたいに封鎖さえされてなきゃ狩人証だけで大抵のとこパスできんだろ。元々狩人になろうと思ってたんだ」

ルイスとリディは顔を見合わせた。馬鹿そうな奴だと思っていた

が、仮にも王子。至極合理的な考えだ。

「…いいだろう。その考えは正しい。俺達は幸い地図持ってるから、連れてってやるよ」

ルイスの許可に、少年はぱっと顔を輝かせ、嬉しそうに笑った。

「ありがとな！恩に着る…そうだ、あんた達、名前なんていうんだ？」

「ああ…俺はルイス・キリグだ」

「私はリディ・レリア」

「ルイスにリディか。オレの事はアルって呼んでくれ」

底抜けに明るい少年の笑顔に、ルイスもリディもついに笑い出したのだった。

「…で、来てみたものの」

時は少し後、狩人協会前。だが三人は入って良いものか悩んでいた。

「なんか違いすぎじゃね？これ。ホントに狩人協会かよ」

少年――アルの言うことも尤もである。ルイスとリディが通ってきた街に比べ、いや比べようもない程、その建物は豪華だった。大きく、昼間にも関わらず灯り台には炎が灯り、派手な服装の人々が出入りし、装飾は限りなく華美である。

「協会っていうより、賭博場みたいだな」

ルイスが呟いて、しかし紛れもなく『狩人協会』と書かれたそこに、恐る恐るの体ながらも、意を決して足を踏み入れる。そして図らずも彼が口にした感想は、正しいものだったことが証明された。

「マジに賭博場じゃん…」

中はやはり華美な作りで、広いホールにはカード、ビリヤード、チェイス、等々…所謂オトナの遊び場が広がっていた。

まだ十六才のアルには脅威的らしい。ルイスの後ろをこそこそと歩いている。そのルイスも居心地悪げにちらちらと周りを見ている。こういった場の経験はない訳ではないが、余り好きな場所ではないが。

「…なんかお前、慣れてないか？」

二人の隣を歩くリディは、特に気負いもなく平然としている。

「そう？」

その瞳には怯えも何もない。ルイスとアルはこそこそと囁き声を交わした。

（明らか慣れてる）
（何で？）
（知るか）
（あんたら仲間じゃないのかよ！）
（仲間といえども知らないことぐらいある！）

だが彼女がそんな様子であった所で、この場で薄汚れてフードを被った三人は明らかに浮いていた。

室内の視線を浴びながら、彼らは部屋の中央にあるカウンターに行き着く。

そこに座る中年の男に、ルイスが居心地の悪さを振り払って訊ねた。

「あー…フリング殿とやらは、いらっしゃるか」

男は目を上げもしない。ただ、そこからいる事だけは確信したルイスは、話を続ける。

「俺達は狩人なんだけど、国境が封鎖されてて困ってる。フリング殿ならば何とか出来ると聞いて来た。それとこいつは狩人登録がしたいそうだ」

しかし相変わらず反応はない。ルイスは眉をハの字に開いて言葉を呑んだ。取り次いでも貰えないのか。どうする。

「リディ、どうする」

弱って振り向いたルイスは、その時男が顔を上げたのに気づかなかった。だが男の正面に立っていたリディやアルは勿論気づき、男

を注視した。

「リディと言ったか？」

突如後ろから聴こえた野太い声に、ルイスもぱっと振り向く。顔を上げた男の鳶色の眼は鋭く、猛禽類のような鋭さでもって彼を射抜いた。

「――リディは、私だけど」

リディがルイスの後ろから出て、男に言った。男はじっとリディを見て、

「三人とも名乗んな。その鬱陶しいフードも取りやがれ」

リディは素直に従ってフードを下ろし、一拍おいてルイスとアルも同じようにした。フードの下から現れた、揃って端正な顔立ちに、三人に注目していたらしい、あちこちから驚嘆の吐息が漏れる。

「私はリディ・レリア」

「…俺は、ルイス・キリグ」

「オ、オレは、アル・カーラル」

アルも今度は偽名を言え、また本名を名乗ったら見捨てようと決めていた二人は、密かにほっとする。男はしばし沈黙し、ついで。

「そうかい。お前らが”自由時間（フリータイム）”か。俺がフリング・ダートンだ」

過去に剛腕の斧戦士と呼ばれたその男は、にやりと笑った。

「お前らの事は、グレイから言付かってる」

唐突な言葉に、ルイスもリディも驚く。出て来た名前も予想外だ。その二人に、フリングはひらひらと手紙を振ってみせる。

「クラーケン退治の報酬すっぽかして消えやがったから、代わりに通行証発行してやれってな」

「あの人が…」

リディが呟く。気に食わない奴だと思っていたが、まさかそんな便宜を図ってくれていたとは思わなかった。

「だが、その坊主の事は書いてねえ。いつからお前らトリオになったんだ？」

「なってない。成り行きで連れてきただけ。多分こいつ、それなりの実力はある。狩人にさせてやってくれない？」

アルをちらと見て、リディはフリングに訊ねた。フリングは頬杖をつき、アルを品定めする様に見た。

「坊主、ジャンルはなんだ？」

問われたアルは目を瞬き、答える。

「治療士と魔術士と剣士」

その言葉に周りはざわめいたが、リディとルイスは納得した。彼からは聖属性を含んだ魔力を感じたし、身のこなしも明らかに武術をする者だ。華奢ではある。がそれに関してはリディとてそうだし、単純にアルは体がまだ成長しきっていないだけの話だ。

フリングは唇の端を軽く持ち上げる。

「ほー。じゃ、その実力、ちょっくら見せて貰おうか」

そう言うなりフリングは――カウンターの下に置いてあった斧を握り、カウンターを飛び越えてアルに斬りかかった。

「うわっ！？」

ドン、と轟音が響いて床の石が砕かれ、破片が飛び散って視界を覆う。反射的に飛び退いて剣に手をかけたリディとルイスだったが、砂塵の向こうにアルの姿を認め、慎重にフリングと思われる影を見やる。

「ほう。避けたか」

アルの剣は直刃の剣だった。長さはリディのサーベルよりは長く、ルイスの両刃の大剣よりは短い。空色の瞳は驚いていたが、同時に緊張感で鋭さを帯びている。

周囲はといえば、慣れているのか気にした様子もなく壁際に下が

っている。

「ちょっ、店壊していいのかよっ！？」
「別に困んねえよ。これ位いつもの事だし」

…やっぱり。リディもルイスも溜め息を吐いて、剣から手を離して壁際に下がった。いつもの事なら問題ないだろう。死人は出すまい。

「おら、行くぜ」
「いっ――」

フリングの第二撃を、アルは身を捻って躱した。躱しきれず頬が裂けて血が飛ぶが、かえってアルはそれで気合が入ったらしい。纏う雰囲気が硬質化し、余分な力が一切抜ける。

「…いい眼だ！」

嬉しそうにフリングが叫び、室内には金属の衝突音が相次いで木霊した。

「…アル、強いね」

その様を見ながら、リディが呟いた。ルイスも頷く。

華奢とさえ言える細身の体はしかし、綺麗な型に沿ってしなやかに動いている。どちらかというとリディに近い、相手の力を利用する技法だ。ただそれは成長途中を理由とした前段階なのだろう。所々ルイスと似た、力も使う戦法を交えている。

また、フリングの体の重さを考慮しても、アルの身のこなしは異様に軽い。

（…どこの国でも王族は普通より戦闘能力に優れる、か。本当だな）

ルイスが黙って見つめる中、しかし勝敗は見えてきた。

「おら、甘ぇんだよ！」

剛腕の斧戦士の名は伊達ではない。その凄まじい膂力と、培われた戦闘経験に、明らかにアルは圧されていた。隙を狙おうにも、相手の攻撃をかわすのが精一杯で、下手な力加減をしたらあっという間に剣が弾かれる。

アルがどうするか悩んだのは一瞬だった。しかしその一瞬が勝敗を決した。

カァン、と甲高い音と共に、銀の光が軌跡を描いて飛んでいった。尻餅をついたアルに、容赦なく斧が迫る。――が、それは寸前で三本の剣が防いだ。

「…何だ？お前らもやんのか？」

アルの前に立ちはだかり、ルイスとリディが斧を止めていた。ルイスがはっと笑って、

「よく言うぜ。一瞬俺達の方を見たのはあんただろう」

「悪ふざけも大概にしてほしいね。――アル、大丈夫？」

アルは呆然と二人を見上げた。あの斧を二人がかりとはいえ正面

から止めるなんて――。

しかしフリングは、どこ吹く風で人の悪い笑みを浮かべる。

「さてな。なんのことだか。だが邪魔した責任は取って貰おうかい。部屋の修理代払えや。狩人証と通行証の発行はそのあとだ」

ルイスとアルは唖然とした。だからこいつはあんなに容赦ナシだったのか。汚い。汚すぎる。

だが一人――リディだけは落ち着いていた。素早く右手をしならせて、踵を返しかけたフリングの頭に、何か光るモノを投げる。それなりに勢いのあるそれをフリングの右手はパシッと掴み、胡乱気にリディを振り向いた。

「フリングさん。ここ賭博場なんだよね？」

リディはにっこり微笑んだ。あちこちで物が落ちる音がする。どうやらリディの微笑みを視た男達が音源だ。しかし、ルイスはぞっと顔を引き攣らせる。

間違いない。あれは――――脅す時の顔だ。

「賭博場なら、賭博場らしい金のやり取りをしない？」

掌を開き、そこにあったコインにフリングはにやりと唇を吊り上げた。

「いい度胸じゃねえか、嬢ちゃん」

その言葉を了承と受け取って、賭博のディーラー達がそれぞれリ

ディに向かって嗤う。

「お嬢ちゃん、オトナの厳しさ思い知んな」

――――思い知ったのは賭博場の人間達の方だった。

第五話　傷と感謝　（1）（後書き）

第五話です。新しいメンバーは彼です。
ちなみに
ウグリス→ラーシャアルド王家男子直系の意
ロウ→王家の血をひくという意
カーラント→母方の名前（貴族のみこれがつく）
ラーシャアルド→ラーシャアルド王家の者であるという意
です。

第五話　傷と感謝　（2）

第五話　傷と感謝　（2）

「はい、勝ち」

さらりと言ってリディがコインを引き寄せる。――既に彼女の前には、山となったコインが積み上げられていた。

「う、嘘だ…」

ディーラーが真っ青な顔でルーレットを見つめる。

何故――何故、こうも当たる!?玉を投げているのは自分だ。なのに何故、玉は彼女の言った色と数字に収まるのだ!?

「リディにこんな才能があったなんて…」

ルイスも青ざめていた。笑顔でリディは相手を見ている。見た目だけなら美しい――だが実情を知っている彼だけに、これ程恐ろしいものはない。

「ほー。ガキの癖にやるじゃねぇか」

にやにや笑うフリングはしかし、止める気はないらしい。着々とコインの山は増えていく。

「すげー…なんであんたこんなに当たんの？運強すぎじゃね？」

目を丸くしていたアルが、リディに囁く。リディはあっけらかんと囁き返した。

「何言ってるの。イカサマに決まってるだろ」

一拍置いて、えええ！？と叫びかけたアルの口をルイスが塞ぐ。むぐー！ともがくアルをよそに、ルイスはリディに小声で言った。

「なんでお前イカサマなんか出来んだよ！？」

「だってよく賭博場行ってたし」

「なんで！？」

「最初は姉上に連れられて行って、あとは面白いから。覚えれば楽しいよ」

「お前の姉さん何者！？」

そんなやり取りの最中、またもリディは勝って更にコインが詰まれる。そろそろ潮時だな、とリディは判じた。カシャンと一つコインの山を崩して、笑顔でディーラー達に向き直る。

「――はい、これ位でいいよね。ここの修理代分と、あとアルの通行証。足りないとは言わせないよ」

――確かに、言える訳がない。むしろお釣りが出る。しかしリディはこの社会のルールをよく解っていた。これだけの大勝ち、普通なら自分は生ゴミ行きだろう。イカサマは明らかなのだから。

けれど向こう方の目論見に添う要求ならば。それは受け入れられるのだ。

「――いいだろう」

それまで静観していたフリングがリディににやりと笑った。

「ただし、お前らその坊主連れてきな。生憎この街にゃそいつ抱え込める人材はいねえ」

「…はぁ!?」

「へ!?」

リディとアルが素っ頓狂な叫びを上げる中、ルイスはやっぱり気付いていたか、諦めの境地で思った。流石に狩人協会支部長、観察眼は鋭いらしい。

「元々二人ってのが異例なんだ。三人も充分常識破りだがな。その坊主一人じゃちと不安だ。調度いい、連れてけ」

ルイスとリディは顔を見合わせた。

フリングの言うことはもっともだ。旅をしてから解ったが、一人旅はかなり辛い。何度となくお互いがいてよかったと思ったものだ。それに――放っておけない事情が彼にはある。

「…しょうがない」

リディは首を振って、金の双眸でアルを見据えた。

「連れてってあげるよ。君も束の間の自由、楽しみたいんだろ」

「お前なら充分戦力になるしな。行こうぜ?アル」

ぽかんと成り行きを待っていたアルの顔に、徐々に喜びの色が灯る。

本当は不安だった。自由を求めて外に飛び出して、でもそこに広がるのは何も知らない世界。何にも囲われていないのに、奇妙な閉塞感がそこには在った。

だから、差し伸べられる二本の腕が、限りなく光に見えた。まだ出会って間もない二人。殆ど何も知らないのに、不思議とアルは、二人を何よりも頼れるものと感じていたのだ。

「…ああ！宜しく頼むぜ！」

こうしてこの日、”自由時間（フリータイム）”はコンビからトリオになったのだった。

その夕方。

「兵隊さん、通してくれる？」

兵士は振り向いて目を剥いた。昼頃に、どうすれば国境を通過で

きるかと訊きにきたばかりの青年と少女の二人組が、紛う事無き通行証をを手に立っている。

「通行証!?どうやって…」

「フリングさんがくれました」

「ええ!?」

実力を認めた者としか話もしないフリング。それを突破するとは…。

兵士は後ろの青年に目を映し、そして昼頃には姿がなかった人間に目を留めた。

ベールを被った女だ。濃い青の布の下からは、柔らかな栗色の髪の房が零れている。

「あー、こちらはアルフィーノご在住の貴族の方です。魔物に遭遇されて、ご自身は運良く生き延びたらしいのですが、伴は皆…。フリングさんに送り届けるよう頼まれまして」

見れば、女性は悲痛そうに震えている。兵士は痛ましげにそれを見て頷いた。

「そうでしたか。お気の毒に…。どうぞお気をつけて。最近魔物が増えているようですし、お二人も、くれぐれも油断なさいませんよう」

「ありがとうございます。では」

二人の兵士が、交差させていた槍を離す。リディ達は軽く頭を下げ、大勢の兵士の見送りの下、国境を抜けた。

抜けた所で引いていた馬にそれぞれ跨り、国境の石壁が視界の彼方に霞んだ所で。

「……」

「……」

「…っがー！！暑苦しいっ！」

ご令嬢が突如ベールを剥ぎ取り、頭を掻き毟った。長い髪が外れ、茶色の短髪が現れる。リディが爆笑し、ルイスはにやにやと笑った。

「似合ってるのに勿体ない。アル、しばらくその格好でいなよ。男引っかかるんじゃない？」

「ふざけんな」

ご令嬢――改め女装させられていたアルは、憮然とリディを睨んだ。

遡ること数時間前。

「はぁっ！？女装！？オレが！？何で！？！？」

人目につかない路地裏で、告げられた言葉にアルは叫んだ。

「だって、さすがに王子だろ？どうも首都から追いかけてきた兵士達みたいだし、幾らなんでもバレるよ。だから」

女装、とあっけらかんとリディは言う。ルイスは気の毒そうに目を反らした。確かに『男』を『女』に見せてしまえば、見つかる確率はかなり低くなる。だが何もそれでなくとも――という気持は、よくわかる。

「アル、幸いまだ華奢だし。女物着せて、適当に化粧すれば充分女に見えるよ」

自分は化粧など一つもしていないリディは心なしか――否、確実に楽しそうな顔をして、反論を諦めてどんよりとうなだれたアルを引っ張って市場に繰り出したのだった。

結果としてそれは正しかった。リディが選んだ、品の良い女物の服とベールを被って、店の主人に拝借した道具で簡単に化粧をすれば、それはもう綺麗な女が完成したのだ。その間にルイスに買ってこさせたカツラを付ければ、本人も黙り込む程、女にしか見えなかった。

そうして難なく国境を突破したのだから、文句は言えない。

「大体なんで女ってこんな動きにくい服着てんだ？満足に走れもしねぇじゃん」

苛立ち紛れに言えば、リディは肩を竦める。

「私にもわかんない」
「…はあ！？」

お前女だろ、と言いかけて、アルは言葉を止める。

白単色のストールに、変哲もない半袖のシャツに、薄い茶色のチュニック。腕は黒い綿製と見える指抜きの長手袋で覆い、上腕を細いベルトのようなモノで締めている。脚は太腿の半ばより少し上までの白いショートパンツと、太腿の半ばより下は黒いソックスで覆われ、膝から下は濃い茶色の丈夫な革のブーツ。

顔の造作は綺麗だ。だが彼が見て来た『女』とは、余りにかけ離れていた。まず女は派手な色が好きだ。普通、脚を晒したりしないし、腕を覆うのは白い手袋だ。何より騎士でもない限り、『女』は剣を差していたりしない。

「……」

がっくりと肩を落としたアルに、概ね考えている事を察していたルイスが、悟ったような台詞を投げた。

「諦めろ。こいつは規格外だ」
「なにそれ。何の話だよ」

リディに答えず、ルイスは苦笑した。これで着飾れば絶世の美少女というのだから、詐欺な話だ。

山道を進み、途中何度か魔物と遭遇して撃退し、一泊野宿して翌日の昼過ぎ。三人はアルフィーノの南に位置する街、ロハスに着いた。

ロハスは山を越えるとはいえ、ラーシャアルドと最も近い街。通商で賑わう街、のはずなのだが。

「…なんか、閑散としてるな」

食事処を求めて歩きながら、ルイスが言った。ほか二人も頷く。

そう、人通りが明らかに少ないのだ。街の規模と人通りが釣り合わない。露店は殆ど見当たらず、通る人々の表情は、一様にどこか固い。

食事処もがらんとしていて、給仕の娘も注文されたものを届けると、さっと引っ込んでしまった。

「外に怯えてる？」

リディがスパゲティを口に運びながら、横目で外を見た。先程の給仕の娘は、外を見ないように、近づかないようにしていた。何かあるというのだろうか。

「魔物でも出んのか？」

ルイスと共に、何人前かも知れぬ大量の品を次々と口に放り込みつつ、アルが言う。

「さあ…。狩人協会で訊いてみるか」

思案するルイスを余所に、一人前を早々に食べ終えたリディが立ち上がった。

「私は鍛冶屋に寄る。協会で会おう」

リディがここに来る迄に、刃を見つめて眉を寄せていたのを知っている男二人は、ひらひらと手を振って見送った。

リディが席を立って半刻程。思う存分食べて満足した二人は、会計に給仕を呼んだ。すると、

「も、もう一人の女の方はっ！？」

二人のテーブルに来るなり蒼白な顔色で叫んだ娘に、ルイスとアルは首を傾げる。

「用を済ませに先に行ったけど。どうかしたか？」

娘は口に手を当て、ぱっと外を見た。陽はほぼ沈み、辺りは薄暗い。

「そんな…！どうして！」

「どうしても何も、事情が分からないんだが」

ルイスとアルが眉を寄せていると、店の奥から恰幅の良い中年女性が顔を出した。こちらも顔色が悪い。

「あんた達、旅人かね」

「そうだけど」

「…今この辺りの街は皆、若い女は一人で出歩いちゃならないんだよ」

―――――――――――――――――――――――――――――――

その頃リディは、鍛冶屋に剣を預け、さあ狩人協会はどこかと道を歩いていた。何故か鍛冶屋が引き止めようとしていたが、宿も探さなければならないし、時間は無駄にできない。

「…しかし、人気がないな」

薄闇が包み始めた街は、しんと静まり返って人の気配がなく、不気味ですらある。しかし今更それに怯える年齢でもない。

不意に感覚の隅をつついた気配に、足を止めて振り向く。

歩いてきた路地には誰もいない。気のせいか、と眉をひそめていると、にゃあ、という鳴き声と共に、ガラクタの影から黒猫が顔を

出した。

「…猫か」

にしては明確な気配だったような、と内心首を傾げるも、足にすり寄ってきた猫に笑みを漏らし、しゃがんで頭を撫でてやる。うっかり和んで、だから気付くのが遅れた。彼女の背後から、影がかぶさった事に。

「――――!」

ハッと気付いて振り向いて、反射的に腰に手をやる。だがそこに剣がないことを思い出すと同時に、リディの視界は暗転した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ここ一ヶ月位だよ、若い娘が夜、次々といなくなってね」

早くあの子を追いかけてと叫ぶ娘を宥めて、事情説明を頼むと、中年の女が深刻な面もちで喋る。ルイスとアルは黙って聴いていた。

「どこの街でも警備隊や狩人が探してるんだけど、一向に見つからないんだよ。だから娘達は夜出歩かなくなって、街もすっかり賑わいをなくしちまってね。今じゃ夜に散歩する奴はいないのさ」

「なんで若い女が攫われてるんだ?」

「それすらわからないのさ。ただどんどん娘達の姿が消えていく。

もう、私らは怖くて怖くて…」
「ルイス、どーする？」
自らの肩を抱く女と娘を余所に、アルはルイスを見上げた。ルイスは肩を竦める。
「あいつは誘拐されるような可愛げは持ち合わせてない。今頃協会で待ってんだろ。とっとと行くぞ」
聞いていた母娘はそんな薄情な、と思ったらしい。娘は非難の眼差しを浮かべ、母親は声を荒げた。
「あんた達、」
「危ないと思ってたら、こんなとこであんた達の話なんか聞いてない。大丈夫だ、あいつは強いし…あ」
不意にルイスが口を抑えた。そういや、とアルが呟く。
「あいつ…今剣持ってねーんじゃ」
「ウェーディ、あいつの魔力を追え！」

ロハスの街を走りながり、ルイスは自身の風精霊を喚ぶ。リディの事だから平気だとは思うが、人間慣れというものがある。咄嗟に剣に手を伸ばしてしまえば、次の反応は遅れる。その隙を突かれたら――。

「なぁっ、あんたのそれ、最上位？」

走りながらアルが訊ねた。視線は向けず、ルイスは返す。

「そうだ！」

「やっぱり？気配が強いと思った！あんた達二人共、魔力はオレより強いだろ！何者？オレ一応、」

「その先言うなよバカ！リディは知らないが、俺はお前と似たようなもんだ！」

「っ、それって…」

アルの疑問はウェーディが戻ってきた事で途切れた。本人にしか視えない精霊とルイスが意思を交わし、道を駆ける。辿り着いた路地裏に、リディの姿はなかった。

「…ここで、リディの魔力が途切れたと言ってる」

ルイスが険しい口調で言った。内心が猛烈に後悔に苛まれている。失態だ。幾らリディと言えど、不意打ちに得物無しで応じるのは難しいと、何故もっと早く気付かなかったのか。

「くそっ…！」

「待てよ」

冷静さを失って踵を返そうとしたルイスを、腕を掴んでアルが止める。

「離せっ！リディが捕まるような相手だっ、何されるか…」

「落ちつけよッ！！」

頭に血が上って、アルの手を振り払おうとしたルイスに、アルは辺りにも響き渡るような怒声を発した。

「落ち着け。あんたがパニクったら、何も始まらねえ」

若干怯んだルイスは、走りだしかけていた足を止めた。頭に上っていた血が下がっていく。数回深呼吸して、悪い、と呟いた。

「悪い。…お前の言うとおりだ」

「冷静になったならいいさ」

アルは肩をすくめて、掴んでいた腕を離し、けど…とからかうような目でルイスを見上げる。

「あんたも取り乱す事ってあるんだな。オレがぶちっと来る前にあんたがキレたから、なんか冴えたぜ。そんなにあいつが大事？」

ルイスは鳩が豆鉄砲を食らったような表情になり――憮然と踵を返した。

「くだらないこと訊くな。狩人協会に行くぞ。情報がなきゃ何も始まらない」

「へいへい」

アルは軽快に笑って、歩きだしたルイスの背を追った。

第五話　傷と感謝　（2）（後書き）

リディィ攫われました。でも彼女は普通のヒロインじゃありません。

キリが悪くて申し訳ないのですが、諸事情で27日まで更新を停止します。読んでくださっている方は、気長にお待ちいただけると幸いです。

第五話　傷と感謝（3）

第五話　傷と感謝（3）

リディは冷たい石の感触で瞼を上げた。
――手首と足首が縛られている。身をよじり、視線を回してみた。が、目の前に広がるのは壁だった。

「……？」
「…あなた、大丈夫？」

もう少し状況を把握しようと身を捩っていると、か細い声が背後からかかる。反動をつけてぐるんと体を回転させ、音源を見上げる。リディより少し年下位の若い娘が、リディを見つめていた。白い頬はやつれ、豊かな亜麻色の髪はほつれている。

「今、縄を解いてあげるわ」

別に自分でも解けるが、黙ってリディは少女に任せた。やがて自由になった足首と手首を、擦って血を巡らせながら、リディは辺りを見回した。

そこは大きな広間だった。八十メートル四方はあろうかという石造りのそこに、ざっと見ただけで軽く五十名以上、若い娘達が座り込んでいる。リディの右手近くに扉はあるが、重い閂が下りている。

その上、恐らく向こう側は南京錠もかかっていることだろう。

「貴女で、九十九人目よ」

ひっそりとした声に、リディは怪訝そうに振り向いた。リディの縄を解いてくれた少女の隣にいる黒髪の少女からだ。

「…九十九人目って?ごめん、状況が把握出来てないんだけど」

「何を悠長なこと言ってるのよ!この辺りでずっと若い女の子達が誘拐されてたでしょう!それで貴女が、九十九人目なのよ!」

「…ああ、成程。だから街に人通りが少なかった訳だ」

「貴女ね…!」

この状況理解しなさいよ!と怒鳴る少女を余所に、リディはふと床を見た。感覚を研ぎ澄ませ、目を細める。

(魔術環…)

広間の中央に視えた、うっすらと光るものに、リディは顔をしかめた。

魔術環とは、大規模広域の魔術や、構築魔術、召喚魔術等に使われる、一言で言えば魔力収束装置のようなものだ。

召喚魔術はどの属性にも属さない特殊な魔術で、主に強力な精霊を呼び出すのに使われる。魔術師が生涯の随伴者となる精霊を決める際、本人の魔力を糧に行われる位しか、使われないのだが。

構築魔術とは、召喚魔術とは反対に、様々な属性な魔術を組み合わせたものだ。ただ現存数は少なく、もっぱら研究者が文献で見る

ぐらいしか需要はないと言われている。

無言で精霊を喚び出そうとして、リディは魔術が使えないのに気付いた。いつもはすぐ傍にある気配が、まるで壁の向こうにいるかのように遠い。

（…何かに妨害されてる？）

すると、別の方向から声がかかった。

「無駄よ…、この中では魔術は使えないわ。結界が邪魔しているの」

リディはその方向を見た。喋っていたのは濃い茶色の髪の少女で、リディは彼女から魔力を感じ取った。

「試してみたの？」

「ええ…何度も何度も。私だけじゃなくて、この部屋の中にいる魔術を使える子達皆でやってみたわ。でも、駄目」

リディが見回すと、そこここから頷きが返ってきた。皆一様に顔は諦めの色に染まり、絶望が目に浮かんでいる。

「この魔術環って、なんの為のものかわかる？」

「詳しい事は解らないけど…何か良くない物を喚び出そうとしているみたい。多分私達は…」

その先は言われずとも解った。あちこちから啜り泣きが上がる。

リディは目を細め、思考を巡らせた。

（この広域の魔術環。私達を生贄にする召喚魔術だとすると…多分悪魔か何かを喚び出す気か。正気を疑うな）

どこの阿呆なのか。悪魔を喚び出して死ぬ以外の何がしたいのだ。あいつらに言葉は通じないというのに。

瞑目して集中する。少し手間取ったが、程なくして魔力の流れを掴んだ。不可視の壁を抜けて、体に精霊の気配が戻ってくる。要はこれを組んだ魔術士より魔力が強ければいいのだ。リディにとってはさほど難しい事ではない。

しかし、リディはそこで顔をしかめた。

（ただ破るとなると…一筋縄じゃいかないか。何人も魔術士が集まってる…私だけじゃ破るのはきついな）

まあ最悪、隠し持っている核の力も総動員、魔力の底まで使い果たせば出来ない事もないかもしれないが、そのあとの事を一切関知できなくなりそうなので、出来れば使いたい手ではない。

さっき少女は、リディが九十九人目だと言った。キリのいい数字を考えると、おそらく生贄に必要な少女の数はあと一人。その娘が来るまでに、何らかの手を打たなければならない。どうするか――。彼女が出した結論はこうだった。

（…とりあえず、寝よ）

寝て体力魔力気力を調えよう。

壁に凭(もた)れて静かになったリディに、周りは絶望で諦めたと思った

らしい。何人か啜り泣きし、四半刻程後には、重苦しい死の予感という沈黙の帳が降りた。

――――――――――――――――――――

「なんと…！リディ・レリアが攫われたと！？」

狩人協会に着いた二人の報告に、ロハスの街の狩人協会支部長、ガーク・リンゲルスは目を剥いた。

「リディは鍛冶屋に剣を預けていたから…不意打ちだったんだと思う」

深刻そうなルイスの答えに、ガークはもとより、周りで聞いていた狩人達も絶句した。

リディ・レリアとルイス・キリグの“自由時間”がこの街を訪れていた事も驚きだったが、その上にリディ・レリアが誘拐されたなど。信じられないというよりは、信じたくなかった。

「大体の話は聞いたけど…詳しい事情を教えてくれないか。この辺りで何が起こっているのか」

ルイスの要求に、ガークはすぐに頷いて、話を始めた。

大体の内容は食事処で女性に訊いたのと同じだったが、いくつかの補足を得た。若い娘達がいなくなるのは決まって人気のない路地で、ちょっと目を離した隙にさえいなくなっているという。このひと月であっという間に被害者は九十人を超え、先程入った報告によれば、リディで九十九人目だというのだ。

「九十九人…」

ルイスはしばし考え込んだ。

ひと月でそれだけの娘達が誘拐されたというのも大問題だが、気になるのは数だ。そうまでして娘達を攫わなければならず、しかも短期間。時間をかければ場所を突き止められることを危惧したのか。早急に大勢の娘達を欲したその理由は。

「生贄…」

呟きに、何人もがぎょっとした。アルが青ざめた顔でルイスを振り返る。

「な、生贄!?」

「普通若い娘を短期間にこんなに攫う必要はないだろう。ということは、何かに捧げるために攫った、と考えるのが妥当だ。…おそらく、首謀者達は女達を生贄に、何かを喚ぶつもりだ。そして生贄となる女の数は、…恐らく百人」

「百…か。魔術環を使用した召喚であれば、納得がいく数だな」

その場に居合わせた魔術士からも理解の声が上がる。ルイスは舌打ちした。

「魔術環の中に閉じ込められてるとすれば、リディでもそうそう破

る事は出来ない。二人いれば何とかなるだろうが…おい、今この街に強い女の魔術士はいるか？囮になれるような」

僅かな希望をかけて張り上げた声に、けれど返ってきたのは沈鬱な否定だった。

「いないのだ。少しでも魔力のある女は、早い段階で攫われてしまった。それも、魔術士としてはあまり力は強くない。そもそも魔術環を内から破る程の力を持つ魔術士など、女でなくてもそうそうはおらん。むしろ、リディ・レリアがいたら、万全の用意をした上で、そのことを彼女に頼みたかったぐらいだ…」

「…くそっ…」

かすかな希望さえも断たれ、ルイスは前髪を丸めた。こうしている間にも、どこかで女が攫われて、生贄が揃うかもしれない。そうすればリディは…。

その時、どんどんどんどん、と激しく扉をたたく音が響いた。

「…なんだ？」

アルのつぶやきに重なるように、怒鳴り声が扉を突き抜けてきた。

「あんたら、いつになったら娘達を助けてくれんだ！」

「……っ」

苛立ちと怒りを多分に含んだ声。一人や二人ではなく、かなりの人数が扉の向こうにいると察せられる、熱気と気配。

ルイスとアルが周囲の狩人達を見やると、沈鬱な表情で皆扉を見つめている。

「聞けば、また一人攫われたらしいじゃねえか！もう初めの一人からひと月だ！いつまでかかってんだよ！娘を早く取り戻してくれよ！」

「てめっ…！」

男の声に、アルはぶちっときて怒鳴り返そうとした。

なにがいつまでかかってんだ、だ。そういうてめえらは人任せにして怯えてるだけかよ！

そう言おうとした口を、しかし後ろから塞がれる。反射的に放った肘打ちも止められて、アルはもがきながら自分を抱えている人物を振り向いた。――この町の協会支部長、ガークだった。

「おっさ…」

「すまない。だが必ず助け出す！信じてくれ！」

ガークはアルを顧みることなく、扉の向こうに向かって叫ぶ。なおも不平の声が外から上がったが、繰り返すガークの言葉にしぶしぶと言った風情で散って行ったようだ。取り戻された静寂の中で、なんでだよ、とアルが言った。

「なんで謝るんだよ！おっさん達にまかせっきりで、あいつら怒鳴るだけじゃねーか！そんな奴らになんで謝る必要が…」

「わたし達が狩人だからだよ」

苦い笑みを、少ししわの刻まれた顔に浮かべながら、ガークが答

えた。抱えていたアルの体を離し、疲れた風に髪をかき上げる。

「わたし達には、普通の人達にはない力がある。魔術士だけじゃない、剣士だってそうだ。戦闘能力、という名の力を持っている。そういった力――魔力であれ戦闘力であれ――はたまた財力、権力であれ、持つ者は力に応じた義務があるのだよ」

「…義務…」

ぽつんとルイスがつぶやく。

「そう、義務だ。わたし達はこの戦闘能力を、人を守るために使わなければならない。普通の人達が娘達を救うために動けば、その人達まで危険に晒される可能性がある…だからこそ、わたし達が動かなければならないのだよ。それが、狩人としての役割だ」

「……」

アルは唇をかんだ。言いたいことは、何となくわからないでもない。それでも、必死の捜索に対する報いが罵詈雑言という事実を受け入れられないのは、まだ自分が子供だからなのだろうか。

（力を持つ者には義務がある、か…）

そのアルの傍ら、ルイスはふっと自嘲めいた表情を漏らした。

義務ならば、ある。しかし、それに人生を鎖されたくないという願いは、我がままでしかないのだろうか。

（…いや）

今はそんなことを考えている場合ではない。一刻も早く、娘達を救う術を見つけなければ――。

そこでふと、ルイスはアルを見つめた。視線を受けたアルはきょとんとし、次いで顔を引きつらせる。嫌な予感に思わず足を引いた彼の腕を、同じことに思い至ったらしい周囲ががっしりと捕まえた。

「坊主、お前綺麗な顔してるよな？」

「しかも肩薄いし、骨格もまだそこまでがっしりしてないし」

「筋肉もそこまで目立たないし」

「腰も細いし」

「な、な、何なんだよ…！？」

それまでのどこか沈鬱な空気はどこへやら。部屋にはどこか楽しげで、しかし不穏な（アルに対して）空気が漂っている。

だらだらと冷や汗を流しながら、アルが暴れる。しかし彼より屈強な体躯を持つ者達の前には、ほぼ無意味だった。

ルイスは僅かに思案し、次いでその誰もが見惚れる美貌を、にこりと笑ませて首をかしげた。その微笑みに、アルを捕まえていた男達の腕がうっかり緩むも、アルは蛇に睨まれた蛙のごとく凝結した。

（げっ…！）

賭博場でのリディと同じ。誰もが陶然となる笑みでありながら、解る者には解る、背筋を凍らせる脅迫の笑顔。

「アル。言いたい事は、解るな？」

否やとは言えない。解りすぎるほど解っている。解りたくはない。でも解ってしまった自分が憎い。

――数秒後、狩人協会から絶叫が轟いた。

――――――――――――――――――――――――――――――

ガタン、という音でリディは眠りから醒めた。部屋の隅、リディの右手にあった閂のかかった扉が開いたのだ。すっと意識を冴えさせ、魔力を調える。

感覚の隅で、数人の女の泣き声が聞こえた。扉から、二人の兵と、それに抱えられる様にして、華奢な体躯が部屋に入ってくる。栗色の長い髪をした、若い女だ。

兵士たちは女を降ろすと、一言も言葉を発さずに再び扉から出て行った。ガチャンと閂の下ろされる音が、やけに大きく響く。

（そういえば、百人目か）

やけに早いな…と思いながら、リディは顔をしかめた。
まだ何の手も打っていないのに、もう時間切れとは。これはいよいよ、後先考えずに魔力を爆発させるしかないのか、と舌打ちしつつも、百人目の女の一番近くにいるのはリディなので、いざり寄って横たわる女の肩に手を伸ばした。

「君、大丈…」

喋りかけたリディの声が、止まる。
栗色の髪の下から顕れた、浅黒い肌。整った顔立ち。そして、閉じていた瞳が開いて、見知った空色の瞳を目に映した時――リディは爆笑した。室内の娘達が唖然とするのにも構わず、身をよじって腹を抱えて笑い転げる。

「何やってんの君!!てか何その化粧、濃っ!!くっ、腹痛い…」
「うっせー!誰のせいでこんなことになったと思ってんだあんたは――!!」

起きるなり爆笑されて、栗色の髪の女――改め、また女装させられたアルは涙目になって怒鳴り返した。

ひとしきり笑いまくったリディは、ぶすくれて拗ねたアルを適当になだめ、未だ目尻に浮かぶ涙を拭って感心した。

「それ誰の提案？」
「あんたの素晴らしく性格のイイご相方だよ」
「ああ、やっぱり…てか、あいつは女装しなかったんだ？似合いそうだけど」
「オレもそう言った。でもあの野郎っ…」

男達に羽交い絞めにされながら、悪足掻きのようにアルが「あんたも女装しろよそんだけ顔綺麗なんだからっ！！」と怒鳴ったのだが、その綺麗な笑顔であっさりと返されたのだ。曰く、

「俺は骨格がもう男だから。さすがに担ぎあげられればわかる。遠目に見られるだけなら平気だろうけどな」

と。

「……。ルイスらしいね…」

合理的で反論できない理屈でありながら、なんか腹の立つ言い分。この半年、幾度それにやり込められてきた事か。普段は怒鳴り合う事がもっぱらだから、まだいい。しかしたまに笑顔になったルイスは、かなり怖い。ぶっちゃけ、リディの比ではない。

「で？ルイスはここの位置をわかってるの？」
「ああ。オレを囮にして、犯人達を追う手はずだから。今頃狩人達の本隊がこっちに向かってるはずだぜ」
「オーケー…残る問題は…」
「あの…あなた達は…」

派手に騒いでいたので遠巻きにしていた少女達は、ひとまず二人

が落ち着きを見せたのを見て、恐る恐る近寄ってきた。

「ああ、安心しろ、オレは――」

「アル、黙って」

笑顔を浮かべて少女達に説明しようとしたアルを、不意に鋭い眼になったリディが遮った。制止させられたアルも、並みの人間より鋭い五感が、この部屋に近づく足音を聞きとって目を細める。

「…お出ましか？」

「さて、どんなツラしてるんだか」

武器はないが、なくてもできることはある。娘達も足音に気付いて怯えを見せる中、二人はゆっくりと体勢をいつでも動けるものに切り替えた。

第五話　傷と感謝　（４）

第五話　傷と感謝　（４）

ギギイ、と軋んだ音を立てて、再び閂が外された扉が開く。
入ってきたのはみなりの良い男を先頭に、魔術師らしき者が五人、武装兵が二十人程だった。良く言えば恰幅の良い、悪く言えば肉団子のような男は、やたらジャラジャラした趣味の悪い服装のせいで、一目で貴族と解る。周りの魔術師や武装兵は男の私兵とみた。

魔術師が何か呟いた。それによって、魔術環が浮かび上がる。どうやら魔力が流されたようで、それまで魔術環が視えていなかった娘達から、驚きの声が上がる。

何かを唱えた者とは別の魔術師が命じた。

「環に入れ」

武装兵達が無言で部屋に散らばり、娘達を追い立てる。泣き声や悲鳴がそこかしこから上がった。今にも詠唱に入ろうとする魔術師達に、リディは声を上げた。

「待ってっ！あなた達は何をしようとしているの！？」

精一杯可憐な乙女らしく声を震わせ、顔を恐怖に歪めてみる。横

でぶっとアルが噴き出しかけたのを、男達からは見えない位置で足で踏んづけた。わざわざ笑われなくてもこんな道化には反吐が出そうだが、壊す前に目的位訊いておきたいのだ。

問うように魔術師達が貴族を見た。貴族はでっぷり太った腹を揺らし、にたにたと嗤う。

「そなた達はワシの為に死ぬのじゃ」

「あなたの為って？私達を使ってどうするの？私達を殺すの？なら死ぬ前に、死ぬ理由くらい教えてよ！」

アルは、容赦なくふんづけられた爪先の痛みと、腹を抱えて笑い出しそうになっているのを必死の思いでこらえ、リディに倣って精一杯怯えた顔を作る。もともとカツラは長いので、多少引きつっていても誤魔化せる。

目論見通り、貴族はリディやアル、そして娘達の怯えた顔に気をよくしたらしい。倒錯的な思考だ。大仰に魔術師達に手を振ると、話し出した。

「ワシはとあるアルフィーノの大貴族なのじゃがな。今の王家を弑逆して、王位につくのじゃ。その為にそなた達を生贄に、魔族を召喚するのよ」

「まっ…」

流石のリディもアルも絶句した。事実上の死刑宣告に、室内の啜り泣きが大きくなる。

「王家の者は強い。魔術も武術も並大抵ではない。口惜しいが、普通に行ったのでは敵わん。じゃが、魔族の中でも最強と謳われる、

セティスゲルダならば、王家なぞ滅ぼしてくれようぞ」

アルは、ぴく、とリディが反応したのに気付いた。ちらりと見れば、表情が酷く静かになっている。

（…何だ？）

「…セティスゲルダ？」

一方リディの変化には気付かず、男は得意満面に続けた。

「そうじゃ。闇の王と云われる最強の魔族の王。奴ならば王家とて…」

「バッカじゃないの」

「…ほ？」

乱暴に台詞を遮られ、男は目を瞬いた。リディがそれまでの怯えた表情を拭い去り、完全に可哀想なものを見る目で男と魔術師達を見ていた。

アルはその表情に、そっと目を伏せる。リディがなぜこうも蔑んでいるのかはわからないが、わざわざ話し合わずとも役割は見えた。魔術を使いにくい環の中で、少しずつ魔術の流れを引き寄せる。

「セティスゲルダを喚ぶ？阿呆じゃないの。あいつがそんなくっだらない事やる訳ないだろ。遊びで人を殺すような奴だよ。君達がやろうとしてる事はどっかで楽しそうに見守ってるかもしれないけど、喚び出して君らの要求聞くだけ聞いて次の瞬間には君達殺して終わりだよ。魔族が人間に協力する訳ないだろ？ホントに権力に憧れる奴って、馬鹿」

「なっ…なっ…」

先程までと天と地程の差がある少女の態度に、貴族は絶句する。
リディはそれを蔑みの目で一瞥し、魔術師達を見やった。

「君達も自殺願望でもあるの？魔術師の癖にそれが解らない訳でもないだろ」

魔術師の一人がにやりと笑ってそれに応じる。

「やってみなければ解らん。成功すればこの世は我らの思う儘よ」
「――…あー、駄目だ。壊滅的馬鹿ばっかりだ」

リディはこれ以上話す気も失せ、魔力を練り上げた。呼応してアルも、リディに同調して魔力を集める。それに気付いた魔術師が、嘲るように言う。

「無駄だ。この部屋の中は、我ら以外魔術は使え」

ない、という言葉はドオン、という大音響に吹き飛ばされた。

アルを囮にする作戦は、見事に功を奏した。わざわざロハスから少し離れた街で罠を仕掛けるという手間をかけたのだ、そうでないと困るが。

それらを全て仕組んだルイスは、見事に引っ掛かった鼠(はんにん)の根城を突き止め、ロハスの狩人協会支部長と共に包囲の指揮にあたっていた。

その途中で、犯人が何者であるかも割れ、それを聞いた者達は一様に呆れた。

「かつては栄華を極めたアルフィーノの大貴族の落ち目…か。過去の権力に目を眩まされた人間の典型だな。発想もぶっ飛んでるが」

昔は、優秀な大臣としてアルフィーノの王宮に登用され、いかんなく手腕と栄華を発揮していた一族らしい。しかしその子はともかく、孫は無能だった。しかし家の権勢に酔った孫は、まるで自分がそうであるかのように、無い威厳を誇示して宮廷を闊歩した。しかし、今の国王が、二年前に代替わりした途端、件(くだん)の貴族を始めとした、怠惰に分類される者達を身分も何も関係なしに宮廷から追放した。曰く、

『無能な者はここにはいらない。私の手足に足る人間のみが残る』

アルフィーノは商業国家で、国王も自国の利益不利益をきっちり考えて動く商人気質の人間だ。しかも現国王は歴代の中でも頭が切れ、現実主義に基づく合理的な政策を行っているらしい。民の人気も高い。

しかし一方で、国庫を自らの肥やしにしていたような人間にとっては、目の上のたんこぶのような存在だったのだろう。逆に王によって切り捨てられたが。

民からしてみれば国王こそ正義であり、追放された者達など、自業自得でしかない。

そんな自業自得の愚か者が万が一にも玉座についたとしても、即座に民は反旗を翻す。たちまち失脚するのは一目瞭然だ。

しかも今のアルフィーノ王はオルディアン王家と縁続きの人間でもある。もし何かあれば、オルディアンが黙ってはいない。

つまりは万が一、否億が一にもかの貴族が私腹を肥やせる可能性は存在しないということだ。

「しかもわざわざこんなもん作って。不信感煽るだけだろうが」

リディ達が拘束されていると思しき屋敷は、見るからに構造が変だった。一つ大きな円柱形の建物があり、付随する建物は小さい。使用目的不明の怪しい物体でしかない。

「キリグ、包囲完了した。乗り込むか？」

狩人の報告に、ルイスはそうだな…と呟いて、ガークと目を合わせた。

「中にはひと月前から拘束されている人間もいるんだ、安否が気遣われる。――乗り」

込むぞ、と続けた言葉は、盛大な爆発音にかき消された。

「……」

「……」

「……」

（キレたな、リディ…）

「…な…何なの、あなた達…」

呟いた亜麻色の髪の少女に応えず、リディとアルは視線を男達に据える。リディが火魔術で広間を建物ごと破壊し、リディに力を貸しつつアルが結界を張って、瓦礫から少女達の身を守ったのだ。魔術使用禁止結界の中での強力な魔術行使に、流石に二人とも足がふらつきかける。だがそれはおくびにも出さず、娘達を庇うように立った。

すんでのところで結界を張って建物の破片から逃れた男達は、状況が理解できていない様だった。

「な…何が起こった!?あの中で、我ら以外魔術は…」

「君、魔術の基本覚えてる?」

うろたえる魔術師に、リディはす、と笑った。アルを含め、その場にいた全員が軽くぞっとした瞬間、その姿が掻き消える。

「魔術使用禁止結界は、術者の魔力に比例する。その魔力を超える負荷をかければ、簡単に解けるんだよ」

現れた、と思えたのも一瞬だった。一秒足らずの間に、魔術師一

人と貴族の男を残し、生き残っていた兵士を含めた十人が吹っ飛んだ。

「ひっ…」

「な、何じゃ！？」

貴族の男が喚く。元の位置に戻ったリディは再び薄く笑う。

「教えてあげるよ。今のも魔術。私は雷属性が使える。雷っていうのは筋肉を活性化することが出来る。人間の体の仕組みによるものらしいけど、それは専門家に訊いて。まぁともかくそれを使っただけだよ」

超人的なスピードを持って移動し、目にも留まらぬ速さで敵を打ち倒す。実は使った後の反動が大きいので滅多に使わないのだが、この際仕方ない。

アルはため息を吐いて、カツラを取った。だが、それに注目する者は誰もいない。

（手え出す暇もねえな…）

「残念だったね。私を攫ったのが、君達の運の尽きだよ」

最早硬直して言葉も出ない魔術師と貴族に、リディは凄艶に笑んだ。

二人の男が悲鳴を上げる前に、彼らは鈍い衝撃で意識を失ったのだった。

ルイスら狩人一行が包囲網を解いて、そこに辿り着いた時には、全てが終わっていた。円柱状の建物を主とした瓦礫に、焦げた臭い。

「これは…」

狩人達が訳がわからない、といった風情で辺りを見回す。突然起こった爆発によるものだとは解るのだが、いまいち何がどうしてこうなったのかが理解できない。その中で、ひくりとルイスとガークは顔を引き吊らせた。

「…どうやら…」
「心配は無縁だったらしいな」

間もなく不自然に開けた空間が現れ、ルイス達は真実今までの心配が杞憂だった事を知った。

「あー、遅い」

ぼんやりと瓦礫の上に座っていたリディが、一行を見て文句を言った。その足元には犯人と思われる男達が纏めて転がされていて、少し離れた所に、アルを中心として娘達が身を寄せて集まっている。

「無事か、リディ、アル」

近づきながらルイスが言うと、アルは離れた所から軽く手を振ったが、んー、とリディは曖昧に笑い、瓦礫から飛び降り――がく、と崩れ落ちた。

「リディ！」

叫んで、その躯が地面に打ち付けられる寸前で抱き留める。どこか怪我したのか、と焦るルイスの近くに、ふわりと強大な気配が顕現した。

「案ずるな。ただの魔力の使い過ぎだ」

顔を上げ――瞬時にルイスは剣を抜いて跳びずさった。他の狩人達も、その尋常ならざる気に皆得物を手に円を組む。ルイスが唸った。

「セティスゲルダ…！」

相変わらずの上から下まで真っ黒の着こなし。皮肉を浮かべた笑みも以前と全く同じだ。

わずか二カ月程前の邂逅を思い出して、ルイスはギリッと歯を食いしばった。

あの時はリディもいて、『十強』の中でもかなり有名な部類に入るオーギーンがいた。しかしそれでもなお、歯が立たなかったのだ。

今は元『十強』も一人いるとはいえオーギーン程ではないし、リディも意識不明。

道中修業を重ねてはいるが、たった二カ月で、天と地程もある実

力差を詰めることができたなどという楽観的思考をルイスは持ち合わせてはいなかった。

魔族の王、セティスゲルダは、そんな彼におやおやと両手を上げる。

「別に何もせぬ。我は此度は傍観者だ。そこの愚か者共が喚び出そうとしていた、な」

「喚び…？」

ルイスは眉を寄せた。こんな奴を喚び出して何をするというのか。セティスはくつくつと嗤って答えず、代わりに近づいて来ていたアルが答える。

「こいつら、王位のを奪おうとしてたらしい。その為に女百人を生贄にして、セティスゲルダを召喚しようとしたんだ。セティスゲルダってのはそいつか？ルイス」

女装しているためにいまいち凄みはないが、警戒心と殺気は本物だ。セティスゲルダは彼を面白そうに見て、しかし何をすることもなく肩を竦めた。

ルイスが舌打ちする。

「馬鹿か、そいつら」

「それ以上言ってやるな。紅の小娘に散々罵られていたからな」

吐き捨てたルイスの表情に肩を揺らし、セティスはおかしげに目を細める。

「全く言いたい放題よくも言ってくれたな、と伝えておけ。否定はせん、ともな」

ひとしきり嗤うと、セティスは長い髪を翻した。

「小娘、そこの小僧の助けがあったとはいえ、魔術禁止結界の中で火魔術を使って建物ごと粉砕した上、雷魔術で肉体強化してそやつらを吹っ飛ばしていたから、早く治療してやると良い」

「…どういう風の吹きまわしだ？」

「別に。ただ下手に貴様らに手を出すと、我も殺されかねないのでな。ではな、黒の小僧」

それきり空に掻き消えたセティスを追って空を睨む事はせず、ルイスは抱えていたリディに魔力を流し込んだ。青白い頬に赤味が戻ってくる。ある程度で止めて、ルイスはリディの背と膝裏を支えて抱き上げた。

「リディ、大丈夫か？」

セティスゲルダが消えた後、狩人達と話していたアルが近付いてきた。

「ああ。怪我はしてない。ただ雷で肉体強化したらしいから、直ぐには動けないだろう」

「ああ、やってたな…あれやってる時は爽快だけど後がキツいんだよなあ」

自分も雷属性持ちのアルは、思い出して身震いする。筋肉に凄まじい負荷がかかる為、下手な事をすると数日間は動けないのだ。

「女達は大丈夫か？」
「ああ、無事だぜ。結界張って守ったからな。ただ、オレはそれしかやってねーし、魔力貸しただけだから、多分リディが全部片付けたと思ってると思う」

ルイスとアルはちらりと娘達を見やる。彼女達は怯えた表情でこちらを見ていた。

――無理もない。リディや自分、アルの力ははっきりいって異常だ。魔術を扱う者なら殊更強くそれを感じるだろう。まして、目の当たりにしたなら尚更だ。

しかし、アルはそうは考えていないらしく、不満げに頬を膨らませる。

「リディが体張って助けたのにな。なんか、ムカつく」
「仕方ないだろう」
（――皮肉だな）

助けた事で拒絶される。恐れられる。自分も、そして恐らく――リディも珍しい事ではない。

もう、慣れた。

「…俺達は、そうすることしかできないんだよ」

自嘲気味の呟きに、アルが怪訝そうな顔をしてルイスを仰ぐ。ルイスは彼から顔を背け、踵を返した。

「先に街に戻る」

ルイスは踵を返して、馬の元に戻った。もの言いたげにアルが見ているのがわかったが、あえて振り返る事はしなかった。風の力を借りて、リディを担いだまま馬に跨って、起きる気配のない躯をしっかり抱き寄せて、ルイスは手綱を打った。

ポツポツと水滴が彼らを打つ。空は明けると同時に泣き出したらしい。間もなく土砂降りとなったそれの中を、彼はひたすら無言で駆けた。

―――――――――――――――――――――

雨は翌日も止む気配を見せず降り続いた。そしてリディが起き上がれる様になったのは、二日後の昼過ぎだった。それでも体のあちこちが痛むらしく、ベッドで不機嫌に食事を採っている。採りながら、ぶつくさとリディは文句を言っていた。

「肉体活性の問題点ってここだよね。動けなくなるのって死活問題」
「オレもそー思う！治療術も効かねーし。何とかなんねーかな」
「難しいだろうな。普通人間に許された限界を破る訳だから」

ルイスとアルもベッドサイドテーブルで食事を共にしていた。

この二日、ベッドから離れられないリディに、ルイスとアル、特にルイスは付きっきりだった。武器無しなのを失念し、危険な目に

遭わせたのを余程後悔しているらしい。リディは呆れて、気にするなと何度も言ったのだが、ルイスは頑として頷かなかった。

「これぱっかりは魔力強くてもね。やっぱりここぞという時しか使えないな」

「オレより魔力強いあんたならなんか対処法知ってんじゃないかなと思ったんだけど。無理か」

「それは研究系に訊いた方が生産的な気がするけどな」

あの日、ルイスが半ば自嘲気味に言った言葉を、アルはずっと内心で考えていた。どういう意味だったのかを繰り返し反芻したが、解らず、ある時ルイスが旅の必需品を買い出しに行った時、代わりに置いていかれたので、アルは、試しにリディに訊ねてみた。

「リディは、さ。後悔とかしないのかよ？助けた人間に、ちゃんとした感謝もされない事」

リディはちょっと驚いたらしい。数秒目を丸くしてから、小さく苦笑した。

「アルは素直だね」

「…どういう意味だよ」

「そのままだよ。…私達は強いよ。普通の人間からは考えられない

ような魔力を持ってる。いっそ異常なほどね。それが普通の人達には、信じられないんだよ」

「信じ、られない…？」

「そう。圧倒的な力でもって敵を倒す。その敵は、自分達にしてみればとても敵わないような、とんでもない敵。それをあっさりと倒すような存在は、ある意味で恐怖の対象になる」

リディは苦笑すら浮かべていたが、顔の左右均等に収まる金色の瞳はどこまでも無表情だった。

「もしその力が自分達に向けられたら。そう、心が勝手に考えるんだ。…そんなこと、助ける真似をする訳がないのにね。――でも実際に力を悪用する人間もいるから、救いようがない」

「……」

「私だって最初は腹が立った。せっかく助けたのに。必死で頑張ったのに、って。…でも、わかったんだ、彼らが私を疎む理由が。…しょうがないんだよ」

「しょうがなくなんかねえよ！そう思って何が悪いんだよ！勝手なのは、そいつらじゃねえか！！」

「…そのうちわかるよ…と言いたいけど、君はその心を持ったままでいなよ。君らしいからさ」

今度こそ本当に苦い顔で笑ったリディに、アルはそれ以上何も言えなかった。たった二歳しか変わらないのに、彼女は自分よりはるかに多くの事を知っている――そのことが、アルの口を噤ませた。

ルイスも、リディも、多くの事を体験してきて、学んできたのだろう。ぬくぬくとした鳥籠からあまり出た事のない自分になど、想像もつかない事もあるに違いない。それでもせめて、報われて欲しかった。

その望みは、翌日叶うこととなった。

「私の知り合いにも研究系の奴いるけど、そいつも無理だって言ってたな…ん？」

リディがドアに視線を向けた。同時にノックされる。

「どうぞ？」

ガチャリ、と開いた扉から入ってきたのは、十人程の娘達だった。その姿に見覚えのあったリディとアルは、目を見開く。

「あなた達は…」

全員がリディを真摯な色で見つめる中でも、娘達の先頭にいた、亜麻色の髪の少女が、リディの目をしっかり見て言った。

「私達、貴女にお礼を言ってなかった。――助けてくれてありがとう。生き残れたのは貴女のお陰よ。あと、そこの貴方の」

「オレおまけかよ…」

「黙れアル」

ごそごそと男二人が小突きあう傍ら、違えようもない感謝の言葉に、リディは顔を歪めた。数度言葉を呑み込み、やがて隠すように顔を背ける。

――久しぶり、だった。助けた事に礼を言われたのは。

「…別に、私自身があのままじゃ死んでたし。大した事じゃないよ」

呟く様な音量に、その後ろにいた黒髪の少女がむっと声を張り上げた。

「なに卑屈な事言ってんのよ。誰が何と言おうと、あんたがいなきゃあたし達は全員殺されてたわ。礼くらい素直に受け取ったらどうなの？」

リディが酢を呑んだ様な顔付きになる。やがて、くしゃりと顔が笑み歪んだ。

「…どう、いたしまして」

「それでいいのよ」

「エミリー、態度が大きいわよ」

ふんぞり返った少女に、後ろから笑いを含んだ声が飛ぶ。煩いわよ！と叫び返したエミリーに、更に笑い声が上がり、間もなく部屋は少女達の軽やかな笑い声で満たされる。終いにはリディも笑い出して、一気に部屋の空気は明るくほぐれた。

ルイスとアルは顔を見合わせ、そっと部屋を抜け出す。

「良かったな、リディ」

階下に降りていきながら、アルが嬉しそうに笑った。

（ほら、報われたら、嬉しいもんだろ、リディ）

アルの言葉に、ルイスも唇を綻ばせながら頷いた。

宿を出て、目にした光景にさらに二人は笑みを深める。わずか三日前にはピリピリとして、閑散としていた町の通りには、多くの人がつめている。

若い男女や、幸せそうな家族、買い物をする姉妹。誰もが笑みを浮かべ、幸福と喜びを表してそこにいる。

（この風景を取り戻せただけでも）

よかったのかもしれねえな――とアルが感傷に浸り、殊勝なことを思いながら突っ立っていると、彼に気付いたらしい若い男女が急ぎ足でアル達に近づいてきた。

「君、女達を取り戻してくれた狩人の子だろ。本当にありがとう！またユーナに逢えて、本当によかった！」

女と固く繋いでいた手を離して、アルの両手を取ってぶんぶんと上下に振る男に、空色の瞳を点にさせていたアルは、やがて太陽のような明るい笑みを灯して、男の手を握り返し、女の手を取って二人の手をつなぎ戻した。

「別に大したことじゃねえよ。せっかくまた会えたんだから、幸せになれよ」

つかの間きょとんとした男女も、すぐに笑顔を交わしあって照れた風情で身を寄せ合った。その様にうんうん、と満足げに頷いているアルの後ろ、黙って事を静観していたルイスは、ぼそりと人の悪い笑みを浮かべてからかいの言葉を投げる。

「よく言う。あんなに女装嫌がってたくせして」

瞬時にアルの顔が赤に染まった。

「あっ…たりまえだろが――！！だいたいっ、あんたがあんな無茶ぶりするから俺があんな目に――！」

「うまくいったんだからいいだろ。だいたい無茶ぶりなんかじゃねえよ、ちゃんと似合ってたぞ、お嬢様」

「てっめふざけんな――――――！！」

響き渡る怒号、飄々とした軽い口調、追って上がる明るく楽しそうな笑い声。

それらはすべて、この町に平和が戻ってきたことを、強く人々に実感させるものだった。

人の感謝とは尊いものだ。それ一つで、人はこんなにも明るくなれる。それは簡単なようで、実は難しい。しかし難しいからこそ、それは心の奥まで照らし、染み入っていく。人の行いは人の心を傷つけもするが、人の心を癒すのもまた、人の行いなのである。

町の通りを駆けながらふと見上げた空は、何もかも吸い込まれそうなほど、明るく鮮やかな青い色をしていた。

第五話　傷と感謝　（4）（後書き）

第五話終了です。なんか一話一話が長かった…かな…？セティスゲルダさんはこれ以降しばらく出番がありません。たぶん。

次の第六話は、長い。予定でいます。メインとサブの中間点みたいな女の子が登場するはず。名前は前に一度出しましたが…

なんて予告しましたが、次回の更新は4月5日以降の予定です。お読みいただいている方は、再び気長にお待ちいただけると幸いです。

第五話　後日談（前書き）

六話の更新はちょっと遅れそうです読んで下さってる方すみません！代わりにもならないけど急遽書いたものおいてきます！

第五話　後日談

第五話　後日談

アルフィーノ南部を震撼させた、娘達の誘拐事件。被害者は百名に及んだが、囮となった二人を中心にした狩人達の働きで事は大惨事の寸前で収められた。

平和が戻った街の一つであるロハスも、元の活気をほぼ取り戻していた。

「今頃あの人達、どうしてるかしらね」

毎日お茶の時間に、娘達が喫茶店に集まってお喋りに興じながら、彼女達の口に上るのは、ひと月が経った今でも、この話が多い。

「ゼノへ行ったんでょう？でもあの国って閉鎖的で軍国主義だから、心配ね」

「あの三人に危険な事なんてある？」

揶揄まじりの台詞に、一同が笑い声をあげる。

赤い髪の少女も、黒髪の青年も、茶髪の少年も。彼女らが目の当たりにしたのは主にし少女の力だけだったが（少年の力で守られていたらしいけれど）、後から聞いた話では、他の二人も彼女と同等レベルの実力があるらしいと聞いて、恐れを通り越して呆れたもの

だ。

「ないない。あの三人には軍隊一個あっても勝てっこない」
「否定できないのが恐ろしいわ」

初めてみた時は怖かった。余りに強すぎるその力が。囚われていた娘達の中には魔術師を含め、魔術の心得がある者は二十人余りいたのに、全く持って歯が立たなかった結界をいとも容易く破り、犯人を打ち倒した、絶対的な力が。

でも、彼女はそれを自分達の為に使ってくれたのだ。見返りも何も求めず、ただ自らの身を削って。

礼を言った時の泣き出しそうな顔を見た時、彼女達は少しでも怯えた自分を恥じた。今まで少女の胸に降り積もってきたのかもしれない鉛に、加わる寸前で踏みとどまった事を実感したのだ。

「それにしても」
「うん」

そして話はいつもここに帰結する。

「なんか、見た目も凄まじい人達だったよね」
「うんもうリディも超綺麗だし！」
「あの肌ずるいわよ！白い癖に肌理細かいの、見た！？」
「見た見た。あの金色の瞳、猫みたいだけど澄んでて綺麗なのよね」
「あのルイスって人は、男の人じゃないみたいに綺麗でもちゃんと男らしいし！」
「そうあの髪とか嫉妬しちゃう！」
「ていうか目と声よ！ふとした瞬間に色っぽいんだもの、ドキドキしちゃった」

「アルって子も可愛いし！」
「女装超似合ってたよね！言われるまで気付かなかったもの！反則よ！」
「もう少ししたら美男子になるわよね。今はまだ美少年って感じ」
「わー、将来見てみたい！」

女を集めて姦しいとしたのは至言である。一瞬にしてきゃあきゃあと騒がしくなる一団に、しかし周囲は慣れた様子で気にも留めない。ひとしきり騒いだ後、でも、と娘達は苦笑する。

「ルイスさんね」
「うん」
「絶対アレだよね」
「うん」
「気付いてないかもしれないけど」
「かもじゃなくてないわよ。鈍そうだし」
「ええーでも慣れてそうじゃない？」
「遊びはね。でもあれは本物は経験なしと見たわ」
「成程。いいとこのお坊ちゃんって感じだしね」
「他の二人もね。ていうか問題はリディよ」
「そうね。あれはなんなの」
「あれじゃない？深窓の令嬢」
「深窓の令嬢があんなガサツだったら泣くわあたし」
「でも実際全員、ちょっとした所作が綺麗じゃない。あれは貴族でしょ」
「でも貴族皆が鈍い訳じゃないでしょ？」
「だからあれは特殊なのよ。普通の貴族は狩人なんかやらないわよ」
「もっともね」
「でも二人共それじゃ、道は遠いわよ」
「そうねえ。横から盗られなきゃいいけど」

「ねえ」

娘達は顔を見合わせくすくす笑う。

「もたもたしてたら私が盗っちゃおうかな」

「あ、ズルい！でもあんたじゃ無理よ」

「何ですって！？」

キャラキャラと明るい笑い声。それが再び響くようになったのは嬉しい事、なのだが。

「娘達にかかっちゃあいつらも形無しだな…」

たまたま喫茶店に居合わせた男の呟きは、なんとなくやるせない思いを感じていた他の店の気持を、見事に代弁していたのだった。

その頃ゼノ。

「「はっくしょんっ！！」」
「うわ、大丈夫か？風邪か？」
「大丈夫ですか？お二人共…」

アルとセレナの気遣いに、ルイスとリディは全く同時にくしゃみをしたお互いを見つめ、眉を寄せ合う。

「いや…」
「多分」
「「誰かが変な噂でもしてんだろ」」

第五話　後日談（後書き）

姦しい女の子達が書いてみたかっただけでした。
最後に出てきた未出の名前は六話のメインで全体通してのメインとサブの中間点のキャラクターです。
できれば四月の一ケタ中には六話上げます…！

第六話　陽と月　（1）

第六話　陽と月　（1）

アルフィーノと隣国を遮る山々の、斜面の中腹にある崖。そこから目の前に広がるのは、荒涼とした大地だった。視界に点々と村や街らしきものは映るが、今迄見てきた中でも、圧倒的に緑が少ない景色だ。

「ゼノ…か…」

リディは小さく呟いて、金の眼を虚空に据えた。

大国オルディアンと商業国家アルフィーノに挟まれたゼノは、しかしこれといった特色を持たない。豊かな国の間で、しかも山々によって隔絶された地域の為か、大陸の一部であるにも関わらず、単一民族の容色が濃い。それはゼノという国家自体が閉鎖的であり、時折前触れもなくオルディアンに戦をふっかける事から、余り訪れる人がいないからでもある。

また、ゼノは貧しい。土壌は痩せ、農耕の実りは少なく、国民の生活水準は低い。国家面積は大きいが、大半が荒野や山で占められている。この国境である山を抜けた先も、ゼノの中心部に辿り着くには暫くかかる。この貧しさが、ゼノを軍事国家に押し上げ、閉鎖的にしている要因の内最も大きなものだ。

「オルディアンは、もっと開放すべきなのかな」

小さくリディが言った。心配そうな口調は、彼女がオルディアン出身だという事から来るのだろう。アルは口を閉ざしたが、ルイスはさぁ、と言った。

「どうだろうな。けどゼノが閉鎖的なのは、今に始まった事じゃないだろう。オルディアンは決して非友好的な態度は取ってねえのに、戦をふっかけんのは決まってゼノだ。気にする事はねえよ」

驚いたようにリディとアルがルイスを見る。ルイスは黙って肩を竦めた。

「…ルイスって、あったま良いなぁ。オレ、多分習ったけど全く覚えてねーや」

「それマズいだろお前」

びしっとルイスが突っ込む傍ら、リディは、そうなのかな、と呟いてもう一度大地を見下ろした。

湧き上がる思いがある。この国に来るのが恐ろしかった。でも、来てみたいという願望も確かにあった。

「…行こう。日が暮れない内に、麓に着きたい」

踵を返して馬に飛び乗ったリディに、ルイスとアルも続き、三人は麓へと、ゼノの西端へと下りていった。

アルフィーノとの境から、ゼノの中心部までは三週間程かかった。水場が余りない為、馬に無理をさせず進んだ結果、かなりの時間を使ったのだ。アルフィーノで買い溜めた食糧も、このひと月弱の間にほぼ尽きて、このゼノの首都、ダリスに着いた時にはかなりほっとしたものだ。

「さすがに首都は、それなりの活気があるんだな」

宿を見つけて馬を預け、この長旅の間に溜まりに溜まった核の換金に、狩人協会と、腹ごなしの食事処を探しに三人は街を歩いていた。

「アルフィーノと比べると、品数は少ないな」

アルに同意しつつも、ルイスは小さな声で言って、ちらりとリディを見た。

ゼノに入ってからと言うものの、リディは口数が少なく、また人の目に触れる事を忌避している様だった。その上、アルを女装させる時に使った鬘（カツラ）を引っ張り出してきて髪を隠した上、フードまで被っている。

なぜそんな事をするのかと訊けば、リディは小さく苦笑して、

「この国で赤は禁忌なんだよ」

と言った。

（確かに、林檎か何かでない限り、赤を見ないな）

ゼノで赤が禁忌の色だという知識はアルは勿論ルイスの中にもなかったが、リディがここまでして隠す以上、そうなのだろうと思う事にした。

昼食を採り、狩人協会で核を換金し終えると、ほぼ空だった財布はあっと言う間に膨らんだ。

「強ささえありゃ、これ程簡単な仕事はねーよな」

ずっしりと重くなった財布に、アルが感慨深げに言った。ルイスも頷く。

「商人は魔物に遭わないように街道いかなきゃならないから遠回りしなきゃならないけど、俺達は突っ切れるしな」

行商をするにあたり、商人にとって欠かせないのが、街道である。

街道とは、遥か祖先達の頃からこつこつと治療系魔術師、つまり聖属性持ちが、固定結界を張って、魔物を寄せ付けないように保護してある道の事だ。

しかし何分本数が少なく、主要道路から保護されていく為、遠回りになるものが多く、また混み易い。それでも主要な街には通じているから、大半の旅人はそれを使う。しかし物品の仕入れなどで辺境に出向かねばならない商人達は、狩人に護衛を頼まざるを得ない。狩人なしでそんな所を行こうものなら、待つものは死だけだからだ。

逆に言えば、魔物を撃退できる程腕に覚えさえあれば、街道を通る必要性はない。街道は混むし、時間もかかる。だから大抵の狩人は街道を使わず、未保護の道路をつっきってゆく。

「…けど、なんか魔物が多い気がしたな」

道中を振り返ると、半年前と比べて、頻繁に遭遇したような気がする。アルも加わった事で完全無敵になった彼らは全く平気だったが、パーティによっては苦労するかもしれない。

リディにも訊ねてみようとした時、慌ただしい足音が響いて、三人は足を止めた。

「…なんだ？」

足音はこちらに向かってくる。一番近いのは一つで、軽いが遅い。少し離れて、重いが速い、幾つもの音を感じる。

リディはすっとルイスの後ろに隠れ、フードを更に目深に被った。その行動の意味を問う間もなく、三人がいる少し開けた小さな広場に、フード付きのマントを着た細い人影がまろびでてくる。

「…女？」

訝しげに呟いたアルの少し手前で、必死に走っていたその人影は、石畳の繋ぎ目に躓いた。

「！おいっ！」

咄嗟にアルが飛び出して、その人影が石畳に倒れる前に抱き留め

る。ぱさりとフードが外れ、その下に在った顔に、アルは息を呑む。

滑らかに波打つ薄い白金色の髪。日に当たった事などないのではないかと思わせる白磁の肌。すっと通った鼻梁の両側に収まる、夜明け前の空を切り取ってきたような薄紫の大きな瞳。愛らしい桜色の唇。今はその肌は上気し、瞳は潤みを帯びて、涙が浮かんでいる。

その辺りを差し引いても、絶世の美少女だった。

「…っ、…っ」

顔を赤く染め二の句が告げないアルの代わりに、ルイスが口笛を吹く。

「うわ、美人」

ルイスの後ろで、リディは目を見開いていた。あの少女は、確か。

「、すみません！ありがとうございました、離して下さい！」

アルの腕の中で少女はもがき、身を振り放そうとする。が、重い足音がそれを封じた。

「そこまでです、セレナエンデ様」

鋲が打たれた靴底を響かせ、四人の前に現れたのは、兵士の一隊だった。少女は身を震わせ、その壮年の兵士を睨む。兵士は意に介せず、アル、ルイス、リディを睥睨する。

「そのような下賤の者達まで使って逃げようとなされたのか。愚か

なお方だ」
「！違います！この方達はなんの関係もありません！」
少女は顔を青ざめさせて叫び、アルから逃れて、しかしアルの前で両手を広げた。
「行って下さいませ！私に構わず！関係のない方を巻き込む訳には参りません！」
「そーいう訳にはいかねーだろ」
ずい、とアルが剣を鞘ごと肩に担いで少女の前に出た。ルイスも頷いて足を踏み出す。緊迫しだした空気に、既に民衆は遠巻きに退いていた。
「女の子が泣きながら逃げてるってのに、放っとくなんて事したら、男が廃る」
アルがちらと後ろを見、少女の肩を押しながら言った。
「頼むぜ」
リディは無言で少女の腕を掴むと、横に引き寄せた。兵士達の気配が険悪になり、武器に手がかかる。隊長と見られる男が低く唸った。
「抗うか」
少女が目を見開いて叫んだ。
「おやめ下さい！こんな事をしたら、あなた達まで…！」

「よく解らねーけど、か弱い女の子相手に武器を持った男十人なんて、気分悪ィにも程がある」

アルが鞘を外して剣を兵士達向けて構えた。ルイスも倣い、戦いの気配を悟った民衆達が、ようやく散り散りに逃げ出す。

「我らに逆らった事、死んで後悔するが良い！殺せ！」

隊長の命令の下、一斉に兵士達が剣を抜いて二人に斬りかかった。少女が悲鳴を上げ、やめて、と絶叫する。が、リディは低く呟いた。

「そんな腕であいつらが殺せるか」

その言葉通りだった。

五に及ぶ銀の輝きは、二本の剣が宙を一閃すると、呆気なく吹っ飛んだ。次いで、石畳に同数の重い体が打ちつけられる。隊長以下残りの兵士が唖然とした。

「な…！」

「死んで後悔するが良い…だったか？」

ルイスが刃を軽く振り、ため息をつく。

「その言葉、そっくり返す…と言いたいが、駄目だな。殺す価値もない」

「なっ…舐めるなぁっ！」

隊長の怒号と共に、隊長と数名の兵士達が再度斬りかかる。だが、結果は何も変わらなかった。

アルがすっと身を沈め、振り抜き様身を翻す。剣を振り上げた状態だった兵士が、声もなく崩れ落ちる。その背後から突き出された剣をひょいと首を傾けてかわし、石畳に手を付いて、倒立の要領で足を突き上げる。顎を蹴り抜かれたその兵士は吹っ飛び、同僚二人を巻き込んで地に付した。アルは振り上げた足を前に回して跳ね起き、そして背後から気合いと共に斬りかかってきた二人の兵士の剣を、後転して避けると、そのままその懐に潜り込み、鳩尾を殴って沈めた。

瞬く間に計六人が倒され、気付けば立っている兵士は隊長ただ一人だった。

「俺の出番ないな」

ルイスは苦笑して剣を腰に戻し、アルは隊長に言う。

「安心しな。峰打ちだ」

隊長は言葉が出ない様子だった。呆然と地に伏す部下達を見、アルを見る。次いで肩を震わせながら少女を睨めつけた。

「…そうか。貴女は覚悟がおありなのだな、セレナエンデ様」

少女はぴくりと身を揺らしたが、瞳は揺らがなかった。ぎ、と視線がルイスら三人に向く。

「貴様ら、下らぬ義侠心で我らを邪魔した事を必ず悔いる事になるぞ。なんせ、お」

隊長の言葉は不自然に途切れ、そしてその体は傾いで他の兵士達

同様に石畳に受け止められる。

「…行くよ。人が集まってきてる」

いつの間にか隊長の後ろに回り込んでいたリディは、隊長の首筋に落とした手刀で周りを示した。隊長の言葉の続きは気になったが、このままではまた兵士がやってくるのは時間の問題だったので、三人は少女を連れてその場を駆け出した。

狭い路地に飛び込んで、外を窺いながらリディは言った。

「街の外に出よう。ここは危ない」

リディの提案に、そこまでするか？と男二人は首を傾げたが、少女が頷いた。

「はい。このままではじきに見つかってしまいます」

振り向いた三対の視線に、紫の瞳は一旦伏せられ、また上げられた時には確固たる意志が浮かんでいた。

「お詫びは幾らでも致します。けれど、このままではあなた達の命も危険に晒されてしまう。街の外ならば、安全な場所にご案内出来ます。今は、そこへ」

「…了解！いいな！？」
「異存なし」

瞬時に従う事に決めたアルが二人を見ると、ルイスが応じ、リディは黙って肩を竦め、フードを被り直した。

「私が宿屋に入って荷物を取ってくるよ。君達は厩（うまや）から馬を引き出しといて」
「わかった。頼む」

リディは頷くと、一足先に路地を出て行く。残されたルイス達も、人混みを窺い、大丈夫と判断するとそれに紛れて宿屋を目指した。

「よし、まだあいつらは嗅ぎ付けてないな」

ルイス達が馬を引き出していると、リディが細い体に三人分の荷物を、しかし軽々と持ってやってきた。手早くそれをくくりつけながら、リディはアルに言う。

「君はその子を。荷物は私が持つから」
「わかった」

準備を終えると、目立たないよう普通を装って通りに出る。馬を引いて歩く人間は別に珍しくなく、誰に見咎められることもなく四人は外壁に辿り着いた、が。

「ち、もういやがる…！」

そこには先程の兵士達と同じ鎧を纏った兵達が既に門の前に張り付いていた。遠くから彼らに気付いたのだろう、何人かが彼ら目指して走ってくる。フードをかぶったリディはともかく、ルイスやアルは一度見たらなかなか忘れられない美貌を普通にさらしている。こんなことなら自分達もリディにならってフードでもかぶっておけばよかったな、とルイスは小さく舌打ちした。

だがいまさら、何をしたところで遅い。

「仕方ないな、強行突破するか」

ルイスはひらりと馬に飛び乗り、腹を蹴る。リディはアルが少女を馬上に引き揚げるのを助けてから、それに続いた。

「ウェーディ！」

青年の凛とした声が空気を震わせ、同時に強い風が吹き荒れる。風の塊の直撃を受け、兵士達が一斉に吹っ飛ぶ。

「突っ切るぞ…！」

風を操って道を切り開くルイスを先頭に、三頭は門を目指して駆ける。と、がらがらと音を立てて格子が降り始めた。

「ちっ…」

下がっていく格子に臍（ほぞ）を噛み、リディが火を喚ぼうとした時、鈴のような声が飛んだ。

「構わず、走って下さいませ！」

一瞬声の主の少女を見てから、リディもルイスもアルも速度を緩めず馬を駆けさせた。少女が命じる。

「止めてください、ブラスティア…！」

ゆっくりと、軋んだ音を立てて格子が止まる。アルは驚いて腕の中の少女を見る。魔術が使えたのか。

再度ルイスの風に兵士達が吹き飛ばされた。門ががら空きになったその瞬間を、三頭の馬が怒涛の勢いで駆け抜ける。

兵士達が起き上がったその目の前で、魔力から解放された格子が、轟音を立てて石畳に降りた。

第六話　陽と月　（1）（後書き）

一ケタ内に更新できました…。テスト受かった。
第六話です。たぶん長い。無駄に長い。です。

拙作にお付き合い下さってる方、ほんとうにありがとうございます。

第六話　陽と月　（2）

「改めて、本当に申し訳ありませんでした」

ダリスを出、少女の示す道を来て暫く。とっぷりと日が暮れてしまった為、やむを得ず四人は夜営をしていた。周りは荒野に囲まれ、隠れる所などない為に、ルイスが土属性の結界を張って周りから見えにくくし、その中でリディの火で焚き火をした上温度を調節している。街で買い込んだ食糧は早速役に立ち、四人はある程度とはいえ腹を満たす事が出来た。

「いや、気にすんな！勝手に首突っ込んだのはオレ達だし」

深く頭を下げた少女に、ぶんぶんとアルが手を振って、なぁ、と連れ二人に同意を求める。ルイスはああ、と笑って頷いたが、リディは見張りと称して、彼らに背を向けて手近な岩に登っていた為、見向きもしなかった。相変わらずフードを被ったままで、殆ど喋らない。

「どうかなさったのでしょうか…？」

少女が不安そうに言った。ルイスも明らかにおかしいリディの様

子に、若干眉を寄せていたが、努めて明るく言った。

「まぁ、あいつのことは気にしないでいい。腹ごなしもしたし。そろそろお互い自己紹介でもしようか」

お嬢さんの事情も訊きたいしな、と笑えば、少女は居住まいを正した。端正な顔立ちに、鮮やかな威の漂う表情が浮かぶ。

「はい。――私の名は、セレナエンデ・リィ・ネフィルス・ゼノと申します」

空気が固まった。アルは、耳が今何を訊いたのか頭が理解するのを拒否し、ルイスはあまりといえばあまりの展開に愕然としていた。

それをちらと見下ろしたリディは、内心でやっぱり、とため息をつく。

（…厄介な事になったな）

セレナエンデ・リィ・ネフィルス・ゼノ。ゼノの第一王女で、天使のような外見と、澄んだ思考に、何より民を思いやる温かな心、決して自分が出しゃばることなく、静かに民の意見を照らしあげることから、その透明感のある美貌も合わせて、『月の姫君』という

異名を持っている。

「私は、ゼノの第一王女なのですが…昨今のゼノの政策に、異を唱えた所、こうして追われたのです」

自嘲気味に少女は話す。

「私に協力してくれる方々は、既にとある方の城に集まっております。城を抜け出すのは私で最後だったのですが…感づかれて」

伴の者は皆…、と少女は目を伏せた。ルイスとアルは驚き冷めやらぬまま、あの兵士は王宮のものだったのか…、とうすら寒い思いを走らせる。

「てことは…ゼノ王家を敵に回したのか、俺達は」

ルイスが小声で言った。少女は悲痛な面持ちで頭を下げる。

「説明出来ぬ状況だったとはいえ、本当にご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした。お許し下さるとは思えませんが、本当に…！」

「いいよ。今更謝られた所で何にもならないだろ」

上から飛んだ声に、三人が見上げる。リディが振り向かないまま言った。

「それより。君は『なんの』政策に異を唱えたわけ？」

ルイスがはっとする。どこかピリピリしていた街の空気。少女を出すまいといちはやく固められた外壁。つまりそれは、彼女が外に出て、『なにか』を誰かにもたらしたら困るということ。

少女は唇を噛んで俯き、絞り出すように言った。

「…我が父、ゼノ王は…」

リディはフードの下で目を閉じた。

（ああ、そうか）

また、お前は。

「オルディアンに侵攻をしようとしているのです」

今から十年前。ゼノはオルディアンに突如戦争を仕掛けた。それ

までも同様の事例はあったとはいえ、ここ百年程は音沙汰なく、気が弛んでいた矢先だった。オルディアンは事態への対応が遅れ、ゼノとの国境付近の砦が次から次へと陥とされ、一気にオルディアン国内はパニックに陥ったのだ。

国力だけでいえばオルディアンの方が上である。しかし奇襲による先制と、ゼノが百年の間に蓄えた軍事力によって、戦況は混迷を期した。もしそのままで行けば、ゼノはオルディアンの国土を幾らか削り取ったかもしれない。事実、ゼノは嬉々としていた。

けれど。

「十年前、父の思惑は阻まれました」

セレナエンデ王女は淡々と喋った。アルも、そしてルイスも、固唾を呑んでそれを聞いていた。知識としては、知っている。しかし当事者から聞くのは、また違う。

「私は当時まだ四歳になったばかりで、自分の国が何をしているのか、わかりませんでした。ただ、あの時の事は良く覚えています」

あの時、王と王妃と、王宮の奥庭で団欒をしていた時。慌ただしい足音や叫び声が響いて、王女の前に兵士が駆け込んできたのだ。顔を白くし、髪は乱れ、唇は震え。その有り様に、その時まで自国の勝利を疑っていなかったゼノ王宮は騒然とした。そして、兵士は引きつれた声で言った。戦の最前線、オルディアンのラスランにいたゼノ兵が、全滅した、と。

「『烈火の鬼姫』」

王女はその名を口に乗せた。想像していた通りの名に、ルイスが目を細め、アルが唾を呑む。

そう。十年前のゼノ・オルディアン間の戦争。当初混迷を極めたそれは、その名を持つ少女によって、呆気なく収束したのだ。

「――かの姫は、当時まだ御年七歳だったと聞き及んでいます。しかし、彼女によって父の野望は文字通り、焼き尽くされました。千以上の兵が命を落とし、またその圧倒的な力を見、父の兵達は皆、恐慌状態に陥り、散り散りに逃げ出しました」

『烈火の鬼姫』はラスランに攻め込もうとしていたゼノ兵達を、ほぼ一人で焼き払ったのだ。死体すら遺さぬ程の紅蓮の炎。その報は瞬く間に各国に伝わり、各国は戦慄した。

その後『烈火の鬼姫』は正体も名前も明かさず、戦線に出ることはなかった。彼女が表舞台に出たのはただ一度。けれど、それが脅威として浸透するには充分だった。

ラーシャアルドやエーデルシアスも例外でなく、うっすらとその時の記憶を甦らせて、アルは腕をさすり、ルイスは瞑目した。

「…結果的に、我が国とオルディアンは痛み分けという形になり、戦は終わりました。父の停戦申し入れをオルディアンの王が受諾したのです。オルディアン側は寛容な心で持って物資支援を止めず、アルフィーノにも依頼して我が国のかさんだ戦費の反動を補ってくれました。――しかし、それらは私の父には屈辱でしかなかったようです」

王女は苦しげに言って、ぎゅっと拳を握る。震える声が言葉を紡

いだ。

「――…私は、戦の後の貧困を知っています。幾ら援助をして頂いたとはいえ、奇襲をし、勝てずに逃げた国。元々の貧しさと、その年の不作も相まって、たくさんの民が飢えで死にました」

戦など、と少女は声を絞り出す。

「戦など、人を苦しませ、奪い、闇を呼ぶだけです！なのに父上は、またそれを繰り返そうとなさっている！私は、それを許せませんでした。だから、父上にお止まり下さるようお願いしたのです。けれど、けれど、父上は」

王は、戦はするなと懇願する娘に、無情にも言い放ったのだ。政をするのは王である自分。娘のお前になど、関係ない、と。

更に王はセレナエンデ王女を王宮の奥に幽閉した。王女は必死に、かねてからの賛同者達と連絡を取り、隙を見て逃げ出したのだ。しかし兵士に見つかり、捕らえられかけた所をアル達に助けられたという訳である。

黙りこくった一同に、でも、どうして？と小さな声が訊ねた。

「賛同者とやらに連絡が取れたなら、オルディアンなりアルフィーノなりにお父上の企みを報せれば良かっただろ。何で、君はそんなに必死になって逃げ出したの？」

「私は、戦は嫌なのです」

少女はリディを見上げてきっぱりと言った。

「オルディアン、及びアルフィーノに報せれば、国家間の戦は避けられません。父は最早聞く耳を持たないでしょうから…。それならばそれでと戦争に入るでしょう。しかし、奇襲が出来なくなる訳ですから、我が国は今度こそ敗北し、多くの民が犠牲になるでしょう。それほどの国力の差が、我が国とかの国に本来ならばあります。負けて、再び貧困に陥ることぐらい、少し考えればわかります…。私は、それは絶対に嫌なのです」

「でも、じゃあどうするんだ？」

ルイスが言った。内部からどうにかしようにも、ゼノ王は戦を止めようとはそれこそ絶対にしないだろう。しかし、国の支配者は王で、全てを決めるのは王だ。この辺りが王政の問題点ではあるが…今のところ、この大陸で王政以外の国はない。

「争いは避けられないでしょう。しかし、被害を最小限に抑え、オルディアンへの進軍を止めるには」

年若い王女は悲痛な顔に、しかし強い決意を浮かべて言った。

「王位を簒奪する他、ありません」

「陛下」

玉座の主は、物憂げに顔を上げた。切れ長の目が、壇下の臣下を

捉える。

「なんだ」

「ご報告申し上げます。王女殿下が、街から脱出なさいました」

「…そうか」

玉座の主――現ゼノ国王、ダグラスは、一言そう呟いた。臣下も何も驚きを見せず、「いかがなさいますか」と訊いた。ダグラスは口の端を歪めて嗤った。

「捨て置け。最早あやつには何も出来ぬ。我を、戦を止めることなど、不可能。――と言いたいところだが、小さい芽でも摘んでいた方が賢明であろうな。…魔術士に伝えろ。いかようにでも構わん、奴らの根城を潰せと」

「は。承知いたしました」

玉座から立ち上がり、王は言った。

「オルディアンにくれぐれも気取られるな。――今度こそ、我々は勝つ」

――――――――――――――――――――――――――――――――

王位の簒奪。それは、つまり。

「あんたは、父親を殺す…と？」

アルが呆然と少女を見つめた。美しく、まだあどけなさを残す顔は、昏い決意の光を灯している。

ルイスは何も言わなかった。止めろ、とは言わない。それは寧ろ、最善の方法だからだ。身内の始末は、身内がつけるべき、というのもある。

「…君の父親は、何故そこまでオルディアンと戦争をしたがるのかな」

リディは空を見上げて言った。焚き火の僅かな光のみの荒野では、宝石箱をぶちまけたような満天の星空がよく見える。

それに倣って空を見ながら、少女はほろ苦く笑った。

「ゼノは、貧しい。反対にオルディアンは、豊かです。人は、自らのものより優れたものを見ると、欲に溺れて手に入れようと策を弄する。――なまじ、十年前父は、あと一歩の所まで手を掴みかけました。だから、諦められないのでしょう」

ルイスががしがしと頭を掻いて言った。言いたいことはわかる。わかるが、どうしようもない。

「でも、どうして今更？オルディアンには『烈火の鬼姫』がいる。十年前と同じ結末になるとは思っていないのか？」

誰にも解らない位小さく、リディの肩が揺れた。気付かず、少女は俯く。

「父は…この五年というもの、軍備だけでなく魔術師育成にも力を注いできました。魔術には魔術で、対抗するつもりなのです。それに加えて、ここしばらく何故か――『烈火の鬼姫』の姿が見当たらないようなのです」

オルディアンに潜ませた間者の報告によればですが、と少女は言った。

「『烈火の鬼姫』がいない…？」

アルが呟く。少女は首を振った。

「十年前から、いえ、それよりだいぶ以前から――大変言いにくいことながら、オルディアンの王宮には我が国の密偵がおります。密偵は、一定の期間に必ず王宮を訪れる赤い髪の少女を何度も目撃しています。恐らく彼女が『烈火の鬼姫』でしょう――その訪問が、ここ最近ないようだ、という報告が入っています。……あくまで見当たらない、というだけの話です。私としては、そんなものに頼るべきではないと思います。でも父は、好機と踏んだようなのです」

呻くように言って、少女は三人を見つめた。

「ですから、私は絶対に父を止めなくてはなりません。助けて頂いた事、本当に感謝しています。ですから、どうぞ早くお逃げ下さい。ここからでしたら、私一人でも充分仲間の元に辿り着けます」

これはせめてものお礼です、と少女は懐から袋を取り出した。金属音からして、硬貨が詰まっているらしい。

「けれど、この話は決して誰にもお話しにならないで下さい。それだけがお願いです。どうかお早く…」
「馬鹿言うな！」
アルが怒鳴った。びくりと繊手が竦む。アルは明るい青い眼を少女に合わせて、一言一言発音した。
「自己紹介するぜ。オレの名前は、アル・カーラル」
唐突な自己紹介に少女の眼がぱちぱちと瞬いた。その彼女に、アルは更に言葉を重ねる。
「こんな大事（おおごと）、知っときながらほっとけるか！」
「同感だな」
ルイスも首肯して、おどけた風に笑った。
「戦争になるかならないかっての目の前にして、尻尾丸めて逃げたら男の沽券に関わるからな。協力するぜ、お姫様」
そうだろ？とルイスが岩の上を見上げれば、再びため息が返ってきた。それを肯定と見なし、ルイスは王女に対し、右手を左胸に宛てて軽くお辞儀をする。
「俺はルイス・キリグ。エーデルシアス出身の狩人だ。で、あっちが」
「リディ・レリア。…オルディアン出身の、狩人だよ」
リディは口元に手を当てた少女を、初めて真っ直ぐ見据えると、微かに唇を歪めた。

第六話　陽と月　（2）（後書き）

本来ならこの六話、思考渦巻く陰謀劇とかにした方がおもしろいとは思うんですが…この話自体のコンセプトがそれ向きではないのと、私自身にそういった方面の知識も文才もないために、単純なアクションメインの話になるかと。

リディは基本的に六話ではうだうだしている気がします。ていうかルイスとリディはここは影が薄い予定です。

第六話　陽と月　（3）

第六話　陽と月　（3）

「セレナエンデ様！ご無事でしたか！」

首都ダリスから北に百数十キロ。時間にして荒野から凡そ二日程で、陽が沈みかけている夕暮れ時、彼らはとある領地にたどり着いた。こわごわと視線を向けてくる領民たちの間を通り抜け、四人は領地の中ほどに聳（そび）える城に馬を歩かせ、やがてその壁の内に入った。

「ルーベンス伯も。此度はこのような事になって申し訳ありません」

セレナエンデ王女改めセレナ（本人がそう呼べと言った）は、アルの手を借りて馬を降りると、ルーベンス伯と呼んだ壮年の男に向かって優雅に一礼した。周囲には沢山の兵が並び、セレナの姿に歓声を上げている。

「いえ、とんでもございません。むしろ、王女殿下が我々に同意して下さった事で、どれだけ我らが勇気付けられた事か…」

そこまで言って、ルーベンス伯は、王女を連れてきた人間が王女の従者でないことに気付いた。馬から下りた王女の手助けをしている少年と、王女から少し離れて城を眺めている男女を、鋭い目で見やる。

「殿下。誰でございますか、この者達は」

その言葉と共に、周りにいた兵士達がばっと動き、彼らを囲む。面倒そうな様子を隠しもせずルイスがそれを一瞥し、セレナは慌てて両手を広げた。

「この方達は敵ではありません！街で捕らえられそうになった所を、助けて頂いたのです！それどころか、私達に協力を申し出て下さいました！」

ルーベンス伯は警戒心を多分に含めて三人を見やる。王女とそう変わらぬ年の少年に、長髪の青年、フードを被った女。怪しい事この上ない。

「この方達は狩人（ハンター）なのです！名は…」

「アル・カーラルだ。ラーシャアルド出身」

言い募るセレナを遮り、アルがルーベンス伯を見上げる。

「疑うのはもっともだけどな。せっかく狩人（ハンター）が協力するって言ってんだぜ？ちょっとは期待したらどーだよ」

不敵な笑みに、ルーベンス伯はちょっと惑った。

――確かに、人ならざるモノ達と常日頃から相対する狩人ならば、大きな戦力になることは間違いない。しかし、

「間者だと思うか？悪いが俺達がダリスに着いたのは昨日の昼なんでな、昨今の情勢なんてさっぱり知らない。なあ、セレナ姫」

ルーベンス伯の中の戸惑いを察した風に、ルイスが軽い調子で言った。セレナも慌てて頷く。

「は、はい」

「殿下に馴れ馴れしい口を利くな狩人風情が！」

「よし、信じてくれたみたいだな」

飛んだ怒号に満足げに頷き、ルイスは軽く会釈する。

「俺はルイス・キリグ。エーデルシアス出身だ」

城の外に視線を向けていたリディをルイスがつつくと、リディは少しの沈黙ののち、ぼそりと名乗った。

「リディ・レリア。…オルディアン出身」

ざわり、と空気が揺れた。リディが低い声で続ける。

「…私も、故郷が戦火に呑まれるのは御免だから」

それまでのどんな言葉より、それは説得力があった。兵士達から警戒が消えていき、ルーベンス伯が一歩下がって頭を下げた。

「…申し訳ない事をした。――まずは御夕食を。その後お部屋に案内致します、殿下。そなた達も、今宵はゆっくり体を休めると良い」

―――――――――――――――――――――

夕餉の後案内された部屋で、リディは一人ベッドに転がった。小さめの部屋で、どうやら通りすがりの旅人に開放していたものらしい。セレナは当然最高級の客間で、ルイスとアルは兵士達の舎に部屋を貰ったらしい。久しぶりの独りきりの空気に、寂しさを覚えると同時にどこか安堵を抱いていた。

カーテンの開ききった窓から見える月を眺めながら、ぼんやりと呟く。

目を閉じれば浮かび上がってくる、忌まわしい記憶。

「もう、嫌だ…」

あんな事は。二度と、あんなものは見たくない。

嫌な記憶を振り払い、とっとと眠ろうと寝返りを打ったが、まだ時間が早いせいもあって一向に眠気がこない。しばらく粘ってから、諦めて身を起こした。

（風にでも当たろう…）

起き上がってから、旅装のままだったことを思い出して顔をしかめつつ、よろよろとリディは部屋を後にした。

「…あ」
「お」

なんのあてもなくしばらく歩いていたら、ばったりとルイスと鉢合わせた。彼は廊下の途中にある、大きなガラス窓の枠に座っていた。

「どうした？」
「…眠れなくて。そっちこそどうしたの」
「風呂上がりに夜風に当たってた」

にっとルイスは笑って、くいと窓の外を親指で示す。その黒髪は確かに少し湿っている。

「…冷えるよ」

苦笑して近寄り、向かいに座り様に小さく火の魔術を使う。軽い火の結界で、冷気を遮断してやったのだ。

「お、あったけ。サンキュ」

実はちょっと寒かったんだよな、とルイスは言いながら、外を指す手を下ろさない。

「寒いならとっとと部屋に…」

帰りなよ、と言いかけて、ルイスの指を追って外を見下ろしたリディは言葉を止めた。

「…アル？と、あれは…セレナ？」

窓の下は丁度庭園になっていて、月の光にも綺麗な庭木が咲いているのが見える。そしてその中の石造りのベンチに、彼女達の仲間なの少年と、この国の王女がいた。

「…何やってんのあの子達」

風邪引くよ、と呟けば、くくっと笑ったルイスが頬杖をついて下を見下ろす。

「逢い引きだろ」

「逢い引きィ！？」

思わず叫んでから、慌てて自らの口を塞ぐ。人が来ないのを確かめ、リディもルイスに倣って外を見下ろした。

下の二人は、なかなかいい雰囲気だった。月夜の下、身を寄せ合って何かを話している。どこか隔絶された空気を出している二人に、リディは窓から少し身を引いてくつくつと笑った。

「で？君はそれを覗いてたわけだ？」
「悪いか。人の恋路を傍観する事程気楽で楽しいもんはない」
「成程。…しかし恋路、ねぇ」

確かに道中、セレナはずっとアルの馬に乗っていたし、アルもセレナを気にしている節はあったが。何匹か遭遇した魔物との戦いの最中も、いつもなら前線に出たがる彼にしては珍しく、セレナを守るように一歩下がっていた。

「…お似合いだけどね」

ゼノの第一王女と、ラーシャアルドの第三王子。身分を話したかどうかは知らないが、アルは王配とするには最適な立ち位置だ。ルイスはさぁな、と肩を竦めた。

「あいつらのことはあいつらが決めるさ。なるようになる」

リディも苦笑して肯いた。

「…そうだね」

頭上でそんな会話をされているとは露知らず。

「…私は怖いのです。戦が嫌いだと言いながら、戦をして父を止める方法しか思いつかない。私も詰まるところ父と同じではないのかと」

アルは当初、何がどうしてこうなったんだと焦っていた。何とはなしにぶらぶらと散歩をしていたら、この庭園で伴も連れずに佇んでいるセレナを見つけ、思わずどうかしたのかと訊ねてしまった。振り向いたセレナの瞳には涙が溜まっていて、どぎまぎしている内に、何故かこうなっていた。

けれど聞いている内に、アルは真剣にセレナの話に応じていた。この子の苦しみをどうにかして和らげてやりたい。己の内に芽生えた感情の名は知らずとも、アルは心の底からセレナを案じていた。

「戦を止める為の戦、か」

小さく呟く。大きな戦を止める為に、小さな犠牲を払う。成功するかどうかは別にして、数としては合理的だ。実際にゼノがオルディアンと戦を始めてしまえば、兵士だけでなくどれだけの民が死ぬのか。

「…なぁ。あんたの親父は何のために戦をすんだ?」

アルの訊ねに、セレナはうつむいたまま答える。

「最初は、国の為に。でも今は恐らく…私情でしょう」

自らを屈辱的に敗北せしめたオルディアンへの恨み。逆恨みとさえ言えるそれに、大義はない。

「じゃあ、あんたは何の為に戦う？」

はっとセレナは顔を上げた。セレナを見下ろす空色の瞳は、温かい。

「…国の、為に。民を死なせない為に」

アルはにっと笑って、しかしおっかなびっくりセレナの滑らかな髪を撫でた。

「なら、あんたとあんたの親父は、違ぇよ。あんたはあんたの信じる道を行けばいい。民を死なせようとする奴を止めんのは、王族として当然だ」

その口調に、セレナは何か感じるものがあったらしい。目を見開いて囁く様に言った。

「あなたは…」

「――さ、帰ろうぜ。このままじゃ風引いちまう」

応えず、アルは立ち上がった。しかし、その腕を思わず縋るようにセレナは掴んだ。見下ろす空色に、セレナは顔を伏せながら頼んだ。

「…もう少し…もう少しだけ、傍にいて下さいませんか」

数秒の沈黙の後、アルは返しかけた踵を戻すと、セレナの隣に戻

って腰を下ろした。腕にかかる細い指をそっと外して、代わりにその薄い肩を引き寄せる。

「…わかった」

セレナは少年の顔を見上げ――それが月の光しか灯りがない中でもはっきりと赤いのを見ると、自らも熱を持った頬を隠す様に再び顔を伏せ、少年の体に身を預けた。

（風邪なんて引ける訳がない）

反らしあった視線は何も見ず、妙に早くなる鼓動の許（もと）、二人は思う。

（だって、こんなにも熱いのに）

――――――――――――――――――――

「…おやおや」

にやにやとその様を眺め、ルイスとリディは唇をつり上げていた。今が夜で静まり返った中でなければ爆笑していたに違いない。

「これは本当に、もしかするともしかするかもしれないね」

リディは笑いながら言った。暗い気分はどこかに行っていた。

そうだ、別に沈んでいたって何かが変わる訳ではないのだ。今はセレナに力を貸せば、それでいい。

大分気が楽になって、リディは窓枠から床に飛び降りる。

「寝るのか？」

「うん。今なら寝れそう」

ひゅんと指をふって火の結界を解く。急に再び襲った寒さにルイスが眉を寄せるのを見、ひらひらと手を振る。

「君も早く寝なよ。風引くから」

むっとしたルイスは、しかし寒さに身震いし、ふと思いついて腕を伸ばした。

「おい」

「なに…ってぶっ」

リディは振り向くと同時に腕を強く引かれてバランスを崩され、転ぶ、と咄嗟に受け身を取ろうとした瞬間、何か温かいものに体を包まれた。数秒目を瞬き、少し顔を上に向ける。

「…何してんの？」

バランスを崩した瞬間にフードが外れた為、久々に開けた視界がが端正な顔を映す。ルイスは大真面目な顔で言った。

「いや。魔術消されたから、代わりに温めて貰おうと」
「バカか」
呆れてリディは自分より一回りは大きい体を押しのけようとしたが、その刹那ぎゅっと抱きしめられる。
「……？」
「…あんまり、溜め込むなよ」
訝しげに視線を上げれば、そんな言葉と真摯な視線が返ってきて、思わずリディは声を詰まらせた。
下の少年よりだいぶ手慣れた様子で、ルイスはリディの頭を撫で、栗色の髪を梳く。
地毛でないためかどこか人間味のないそれを少し残念に思いながら、ルイスは言葉を紡いだ。
「お前が何に悩んでんのかは知らないし、別に言わなくていい。ただ、一人で溜め込むな。辛ければ俺に言え。…仲間だろうが」
リディは目を瞬かせ、次いで小さく笑ってルイスの胸に頭を埋めた。
「…ありがと」
「いや」
ルイスの胸に手をついて身を離すと、今度はあっさりと離れた。
頭一つ程高い所にある青年の顔を見上げ、微笑む。

「大丈夫。今考えるべきことは、戦を防ぐこと。私の心情なんて些細なものだから、気にしないでいいよ。――でも何か元気出た」
「胸位ならいつでも貸すぜ」
ルイスが肩をすくめて言えば、リディは苦笑した。
「意味違ってるよ。――お休み、ルイス」
「ああ。お休み」
ひらひらと手を振るルイスを残し、リディはフードを被り直して、ルイスに背を向けて歩き出した。
歩きながら、妙に早足になる自分を自覚して、リディは内心焦りを覚える。
（なんで、こんなに脈速いんだ）
この年になれば、そうそう人と接触などしない。久しぶりに感じた広面積での体温は、とても温かくて、どこかほっとした。自ら離れた瞬間は、寂しさすら感じた。そして今、いつもより早い脈拍に動揺する自分がいる。
（…わけわかんない）
風邪でも引いたのか、くそ、ルイスじゃなくて自分に結界張ればよかった、と舌打ちしながら、リディは自室への道を半分駆け足で進んでいったのだった。

ルイスはリディの背を見送り、自らも廊下を歩き出した。下を見れば、いつの間にか二人の姿はない。まぁ時間も時間だし当然だろう。

角を曲がったところで、周囲に誰の気配もないのを確認してから、彼は大きなため息をついてずるずると壁に縋って座り込んだ。

（…抱きしめといて動揺するとか。俺いくつだよ…）

常にない心細げな目をみて、思わず手が動いていた。戦いの中で、何度も支え、抱えた事のある体。その時は何とも思わなかったのに、今日に限ってその体は、ひどく細く、華奢に感じた。この体のどこに、あの技量を振り回す力があるのか、疑問に思うほどに。

（なんなんだよ畜生…）

頭を抱えて数秒、しかし今はこんなことで悩んでいる場合ではないと頭の中のスイッチが切り替わり、一度深呼吸する。立ち上がった彼の眼に、もはや動揺は欠片もなかった。

（さて）

目を月に据える。

（あんたに本当に父親が殺せるか？セレナ姫）

まだ純粋無垢に、あどけない少女の色が強い王女。決意の色はあったが、断固としたものではない。僅か十四歳の少女に決断を求めるのは酷かもしれないが――それは、国を負う王族の義務だ。

（…まあ、殺せなくても支障はないと思うがな）

王位の簒奪は、なにも王を殺すことがすべてではない。追い詰められているのはわかるが、安直に繋げるのはどうか。

（あんたは今、試されてるのかもしれないな）

王としての資質を。

ルイスは月に向けた目を細めると、薄暗い廊下を静かに戻っていった。

第六話　陽と月　（3）（後書き）

「たまに恋愛」部。
主人公二人に色気はないですね。心の中ではともかく。

第六話　陽と月（４）

第六話　陽と月　（４）

翌日。

「我らの兵力は五千余り。陛下がダリスに擁する兵力は凡そ一万、加えて魔術士の部隊が存在します」

戦争反対派の城、名をガートという城の広間には、十名程の人間達が卓についていた。

セレナが一番上座に座り、彼女に協力する伯は諸侯たちが次席。ルイスとアルには一番下座に申し訳程度に椅子が用意された。リディも座る様勧められたが、言葉少なに断って、壁に寄りかかって腕を組んで立っている。相変わらずフードは外さず、栗色の長い髪の一部だけが見えている。

話は訥々と進む。

「我々の側に、魔術士は」

「いるにはいますが、陛下が手塩にかけて育てた魔術士達に、敵うかどうかは…。数もあちらの半分程しかいないでしょう」

「兵力差は歴然、か…」

アルの呟きは、思った以上に静かに部屋に響いた。ルイスも頬にかかった髪を払って同意した。

「まともにやっても勝ち目はないな。無駄に双方の兵の命を喪わせ、その後オルディアンに叩き潰されて終わりだろう」

淡々とした言い様に反論しようにも、的確な指摘な為に誰も言い返せない。

「…多分オルディアンは、この状況に既に気づいてる」

更に、ぽつりとした呟きが追い討ちをかけた。場の視線が奥の壁に集まる。

リディはフードの下で目を閉じて言った。

「幾らゼノの王が隠そうとも、たった十年前の過ちを忘れるほど、陛下――オルディアン王は楽天的な方じゃない。――こうして君達が戦を止めようとしているのに気づいているからこそ、オルディアンは攻め込んでこないんだよ」

戦は嫌だ。その気持は、オルディアンとて変わらない。…そして、彼らは五年前の切り札を今、持っていない。

「戦を避けたいのはオルディアンだって同じ。けれど君達が下手に内乱を起こしてあっさりと鎮圧されれば、手遅れになる前にと攻めてくるのは間違いない。――無駄な博打は、しない事だよ。――セレナ」

全く気負いなく、自然に王女を呼び捨てにした事に対し、集った男達が憤る前に、セレナがはい、と真摯な声と目でリディを見つめ

た。

「君は、戦が嫌いだと言ったよね」
「はい」
「でも、この場の話は正面から戦をして勝てるか勝てないかの話になってる」

ぐるり、とリディは広間を見渡した。あちこちから訝しげな視線が返ってくる。ルイスは口の端でそっと笑んだ。リディが助言を与えるとは、珍しい事だ。ゼノと関わりたくないのだと思っていたが、そういう訳ではないらしい。

「何も真っ向から斬りかかっていく事はない。相手の不意をついて、後ろからぐさっと行ったっていいんだ」

その場の殆どが内容を理解できない内に、リディは踵を返して広間を出て行く。

「あと一つだけ、教えておくよ。――烈火の鬼姫がいないというのは、本当だ」

広間のあちこちから、警備の兵士達から、ルイスとアルも、息を呑む。ルーベンス伯がガタッと音を立てて立ち上がり、勢いこんでリディの背中に訊ねる。

「そ、それはどういう…！」
「言葉通りだ。『烈火の鬼姫は今オルディアンにはいない』。――オルディアンの人間しか知らない事だけど。だから、ぎりぎりまでオルディアンはゼノには手を出さないよ。彼女がいない事を他国に露見させたくはないからね。――ああこの事は、くれぐれも内密に」

ちら、と振り返ったリディにセレナは青い顔で頷いて、それを確認してリディは広間から立ち去った。

その背を見送り数秒後、ルイスは広間を見渡して眉を寄せた。

卓につく男達から兵士まで、先程と顔色が違う。それ程までに、烈火の鬼姫がこの国に及ぼす影響は強いということか。

（――そういえば）

烈火の鬼姫は、その圧倒的な火力に加え、まるで炎のような鮮やかな長い赤髪をしているという。また、彼女を代表するように、オルディアンの国民には総じて赤髪が多いと聞く。

もしかすると。

「伯。もしかしてこの国で赤を見ないのは…オルディアン――特に烈火の鬼姫を連想させるからですか？」

ルイスの問いに、上座のルーベンス伯は頷いてみせた。

「ああ。我々にとって、かの色は、忌まわしき五年前の炎を思い出させる。多くの者が、ラスランの付近にいたのだ。突如として上がった、天に届かんばかりの赤い炎…。遠くから見るだけでも悪夢であったのに、近くから見てしまった者は、悲惨だった。それが第一の要因」

「まだあるのですか」

「ああ。停戦協定にやってきたのだよ、かの『烈火の鬼姫』は。私も覚えている…まだ幼い顔に、冷たい表情を浮かべて、他の使者達

よりなお鮮やかな赤い髪をしていた子供の姿を…」

もう二度とあんなものは見たくない、と呻くルーベンス伯の傍ら、ルイスとアルは内心納得していた。

そこまで忌み嫌われる赤。しかもリディもオルディアン国民の上、鮮やかな赤い髪だ。成程隠したくもなるだろう。もしかしたら前に嫌な目にあったことがあるのかもしれない。

（いや――まさか、『烈火の鬼姫』本人？）

そして二人同時にその考えが浮かびかけ――同時にないないないと首を激しく横に振った。

彼らも烈火の鬼姫についての噂は聞いたことがある。曰わく――

（冷酷無比で残忍冷淡、人の命をなんとも思わぬ鬼女、存在自体が炎のようだ――。リディと１８０。違うっつの）

ルイスははぁっと息を吐き出し、しかし少しかの烈火の鬼姫に同情した。

噂というものの恐ろしさなら知っている。自らもそれに苦しめられているから。

（もしかしたら、彼女のこの噂も根も葉もないものかもしれないな…）

いつか逢ってみたい。ルイスはそっと思いを馳せた。

「――話を戻しましょう。ルーベンス伯、物資の具合は？」

セレナの訊ねに、ルーベンス伯はうっと詰まった。言い辛そうに口に乗せる。

「…正直、心許ない。国全体で不作も続いていますし、準備の期間が短く、とても充分とは…」

重苦しい空気が満ちる。物資不足。それはかなり大きな問題だ。物資がなければ何も出来ない。戦を仕掛けるどころか、籠城すら危うくなるのだ。元も子もない。

「…まぁ、他の街から調達するなりなんなりするしかないでしょう。我々に後はないのですから」

卓につく男の一人が言い、そこから先は、戦についての侃々諤々の論争になった。当事者でないルイスやアルにとっては同じ事の繰り返しに飽き飽きし、この場にいないリディを恨めしく思った。

「ぜってーあいつ逃げた…」

アルの呻きにルイスもうんざり顔で同意し、強かなチームメイトに頭の中で罵っていた。

漸く会議が終わり、とりあえず何名かが物資調達に近隣の街へ行く事が決まって、ひとまず解散となった頃には、ルイスもアルも精神的に疲れてぐったりとなっていた。

アルはちらりとセレナを見たが、彼女は臣下達と書類を交わしていて、話など出来なそうだったので、ルイスの後について広間を出

た。
しばらく無言で歩き、人がまばらになった頃、ルイスは振り向かないままアルに言った。
「で？セレナ姫とはどうなんだ？」
ごふっという変な音がし、足を止めて振り向けばアルが咳き込んでいた。真っ赤に染まった顔に、ルイスはにやっと笑って再び歩き出す。真っ赤な顔のまま、慌ててアルはルイスに追いつき、言葉にならない声を出す。
「な、な、何でっ…」
「昨日見てた」
「みっ…！？」
今度こそ絶句したアルに、堪えきれなくなったルイスはついに吹き出し、肩を盛大に揺らしながら言ってやる。
「たまたまだ。上の廊下から丸見えだったんだよ。ちなみにリディもいたぞ」
「〜〜っ…」
今度は声にすらならない呻きを上げてアルは沈み、ルイスが笑いの余韻に浸っている内に、二人は中庭に出ていた。中央に生えている木を、ふとルイスは見上げる。その目がすっと細まり、低い声が発された。
「――リディ。出て来い」
ザッ、という音共に、フードを被った人影が、二人の前に飛び降

りてきた。リディは欠伸をしてから、「気付かれるとは思ってなかったんだけど」と肩を竦めた。

「狩人証が光ってたんだよ」

「成程。盲点」

今度から気をつけよう、と狩人証を懐にしまうリディに、ルイスは不穏な笑みを浮かべて詰め寄った。

「リディお前、よくも逃げやがったな？」

リディは一瞬しらばっくれようか考えたが、誤魔化すのは不可能と悟り、大人しく両手を上げる。

「悪かった。だってあのままあの場にいたら私絶対寝てたし」

「俺達はそれを耐えたんだっ！」

「お疲れ様」

絶対悪いと思ってない。ふるふるとルイスは拳を震わせたが、内心リディがいつもの調子に戻っていることに安堵していた。そんなルイスの心中は知らず、リディはひょいとアルを覗き込み、ルイスを見やって訊ねる。

「なんかアル沈んでない？何かあった？」

「…昨日見てたと言ってやった」

にやっと笑ってみせれば、リディもああ…と人の悪い笑みを浮かべ、俯いて必死で己の心を宥めていたアルの肩を叩く。

「頑張れ。目指せ王配」

「…っあんたらぜってー楽しんでんだろーっ！！」

涙目でリディの手を振り払ったアルに、今度こそ二人は爆笑した。

――――――――――――――――――――――――

「問題は、いつゼノ王が手を出してくるかだな」

「うん」

三人並んで昼食を食べながら、ルイスとリディは頷きあった。アルがきょとんと二人を見る。

「…え？」

「考えろ、アル。梃子でも街からセレナ姫を出すまいとした王だぜ。このまま放っとくと思うか？」

「戦力減らさない為に攻めてこない、ってのもあり得るにはあり得るけど。まぁ低いだろうね」

私だったら小さな禍根は断っておくよ、と言ったリディに、アルは青ざめながら怒鳴った。

「何でそれ言わねーんだよ！ルーベンス伯とかはそんな事考えてねーぜ！？」

「考えてるよ」

リディは淡々と答えた。

「まだ子供のセレナは兎も角、あの人達はそこまで愚かじゃない。ちゃんと城の警備の配置も考えてる。――でも、下の意識が低すぎる。本当に最低限しか警戒してないんだから。――本当は言うつもり、なかったんだけど。このままじゃ取り返しのつかないことになりそうだから」

ちらりと視線を周囲に向ける。昼時の食堂には、多くの兵士達で一杯だ。今歩哨には、大した数、いるかいないかだろう。

「――まぁ、流石にまだだとは思うけどな。セレナ姫が逃げてまだ三日だ。でも、明日辺りからはきっちり警戒した方が良い」

がたっとアルが立ち上がった。引き結んだ唇から、直ぐにでもセレナに報せに行こうとしているのだろう。踵を返しかけた少年に、ルイスが声をかける。

「俺達は今日は魔物狩って、物資調達してくるから。明日の朝には帰るけど、万が一の時は城は頼むぞ」

アルは振り向いて、年上の仲間を見つめた。軽い口調の割に、目は笑っていない。リディが言った。

「守りなよ。――彼女を」

「――言われなくとも」

アルは言い捨てると、足早に食堂を出て行った。ルイスとリディ

は顔を見合わせ、青いねぇ、とくつくつ笑った。その顔が、ふと真面目に戻る。

「さっさとやってこよう。大丈夫だとは思うけど、物事に絶対はないからね」

「全くだ」

ルイスもリディも手早く昼食を終え、食堂を後にした。

――――――――――――――――――――――――

「そう…ですか。ルイス様と、リディ様がそんな事を」

アルの話を承け、セレナは俯いた。気づかなかった。目先に捕らわれ、危険を察知できなかった。子供だから仕方ない――では済まないのだ。もし反乱が成功すれば、王位につくのはセレナだ。他人に甘える事は、許されない。

「ルイス様とリディ様は、私に己で考えよ、と言ってらっしゃるのでしょうか」

言うつもりはなかった、という。そして先刻の会議での暗示めいた言葉。王族としての判断を求められている、そんな気がする。

「違ぇと思う」

しかし、アルは首を振った。

「あいつらは、自分達の事は自分達で決めろ、って言ってんだと思う」

どんな些細な事にも結果はある。そして結果を生むのは決断。自らの未来を選ぶのもまた、決断の先にある事象だ。

「この国の未来を切り開くのは、セレナ達だ。だから、オレ達は本来口を出すべきじゃない。あくまでセレナ達の事は、セレナが決断すべき。――そう、言いてーんだと思う」

訥々と語られた言葉に、セレナは紫の瞳を見開き――次いで歪ませた。

（そう、か）

突き放されている訳じゃない。彼らはただ、見守ってくれているのだ。間違った道だけにはいかぬよう、最低限の力添えをしながら。ゼノの未来は、ゼノが決めろ、と諭してくれている。

「…ありがとう、アル」

泣きそうなセレナの顔にわたわたしていたアルは、予想外に向けられた微笑みに一瞬硬直し――次いで、大した事じゃねえよ、とそっぽを向いた。その仕草に思わずセレナは笑い、憮然とセレナを見たアルも、セレナの笑顔に釣られて笑い出した。

束の間の温かい時間。
しかしそれはまもなく、破られる事となる。

第六話　陽と月（5）

第六話　陽と月（5）

帳の降りた荒野に、耳を塞ぎたくなるような絶叫が轟いた。同時に明るい満月を背後に、人間のシルエットが浮かぶ。

「――八匹目！」

人影は両手に構えた大剣を大上段に振りかざし、眼下に蠢く巨大な虫目掛けて振り下ろす。再び絶叫が上がり、虫は一度身を軋ませた後、崩れ去るように消えた。

「また白か」

後に残った鈍く輝く玉を、リディが拾い上げる。鮮やかに着地し、剣を肩に担いだルイスが肩を竦めた。

「茶色じゃないだけマシだろ」

「茶色っぽいけどね」

「…」

無言になったルイスを横目に、リディは荷物の袋の中に核を放り込む。既に中には七つの核が入っている。が、どれもこれも白に茶色、良くて黄色が混じったレベルでパッとしない。

「こんな荒れた情勢なのに魔物がこんなのしかいないなんて珍しいね」

荷を背負い直し、リディが西に歩き出す。魔物狩りを目的としているのに、馬を連れてくる意味はない。動物は魔物や悪魔、竜を恐れる。リディの馬もルイスの馬も長旅を伴にして久しく、そこらの馬に比べれば魔物らに対する耐性はかなりあるが、怖いものは怖いのだろう。無理強いする気は毛頭なかった。

「確かにな…来る時も殆ど遭遇しなかったし。ここまでぶっ続けで狩ってんのに、まだ八匹だもんな」

アルフィーノとの国境からダリスに着くまでは、そこそこの魔物と遭遇した。しかし、ダリスを出てからガートに着くまでも今も、魔物達との遭遇率がこれほど少ないのはいささか腑に落ちない。魔物は世情の荒れたところに現れる。なぜなら、人を襲いやすくなるからだ。しかし、これほど不安定な情勢にも関わらず、その姿は少ない。ただ遭遇したものを倒すのでは、到底足りないほどだ。ので、風魔術で周囲の魔の気配を拾いながらの狩りだった。逆を言えば不意打ちの恐れが少ない分、楽でもある。

その時、視線の先に小さな街らしきものが見え、地図に目を落としたリディが顎に手を当てる。

「と…ここは確か…ユランの街か。ガートから大分離れちゃったな」

どうする？とリディはルイスを見上げ、ルイスも頭を掻いた。正直言うと、物足りない。黄色レベルの核が狩れたならともかく、収穫は茶色や白だ。幾ら核が高価だといっても、これでは余り足しに

はならないだろう。

「もう少し…」

狩ってから戻ろう、と言いかけて、ルイスとリディは同時に剣に手をかけた。

「なんだ…？」

嫌な感じがする。背筋を冷たい何かが這い上るような。

そして二人は目にした。まだ日の出には早い時間なのに、東で揺らめく赤い光を。

「な…！？」

絶句して二人は固まった。王の軍が来るには早い。早すぎる。けれど、あの光は。

間違いなく、城が攻められている、火の色だ。

「――くそっ！戻るぞ、リディ！」

叫んでルイスが地を蹴る。更に風魔術を使い、空中をも蹴りつけた。

「……ッ！」

なんで、どうして――という思いを、血が滲む程噛み締めた唇に

押し込め、リディも倣って地を蹴った。

―――――――――――――――――――――――――

少し時間は遡る。

「何だ…？」

ルイスとリディが城を去ってからしばらくして、アルは言い知れぬ悪寒を感じていた。頭蓋を内から引っかかれるような不快感。それは決して気のせいではない、と狩人としての勘が告げていた。

（ルイス、リディ…なんか、ヤベェ感じがすんだけど）

思った所で、二人が帰ってくる訳もない。

悪寒の理由が分からないまま夜を迎え、やがて夜半になり。眠る気もせず、街を囲む外壁のへりに座って、東の空を睨んでいると、不意に後ろから声がかかった。

「どうかしたのですか？」

「…セレナ」

上着を羽織った、夜目にも明るい白金の髪の少女は、外壁に腰を降ろすアルの隣に立って、同じように外を眺める。

「なんか…嫌な感じがすんだ。なんなのかはわかんね…でも、眠れねー」

セレナはアルを見上げた。闇を見続ける横顔はどこか緊張感を帯びて険しい。躊躇いがちにセレナは言った。

「私も…胸騒ぎがするのです。何か、嫌なものが来るような…」

アルはセレナをつかの間見下ろし、ふっと苦笑した。

「そーだな。あんたも王族だったな」

「私、も…？」

セレナが思わず訊き返した瞬間、アルがばっと外壁の上に立ち上がる。ピリッとした殺気に、セレナは息を呑む。

「ア、ル…？」

「…ものだ」

アルが囁く様な声音を発す。顔は青ざめ、唇が白くなっている。次いで、彼は打って変って領地の半分に響く程の大音量で叫んだ。

「全員目を覚ませ！！魔物の大群だ――！！」

「魔、物…！」

セレナは目を見開いて、アルが見ていた東の空を見つめた。…夜に慣れない自分の目には、まだ魔物は映らない。しかし、内の魔力をがざわめき立っていた。魔が来ると。禍々しい力の大群が迫っている、と。

「ま、魔物だ！なんだ、あの数…！」

アルの叫び声に駆け寄ってきた兵士達からも悲鳴が上がる。悲鳴は領地中に伝播していき、あちこちで松明の明かりが灯っていく。その時になって漸く、セレナの眼もそれを捉えた。

空の一部を埋めんばかりの魔物の群れ。禍々しく輝く眼光。目を覆いたくなるような異形。そのおぞましさに、セレナは一瞬目眩を覚えた。

「セレナ、城の中に行け！ここは危ねえ！」

振り向いてアルはセレナに怒鳴った。セレナは震え、足を一歩退かす。けれどその時、閃光のように一つの思いが頭を突き抜けた。

（私は、王族だ）

僅か瞑目し、目を開けた時にはセレナは決然とした表情になっていて、首を横に振った。

「いいえ。私も戦います」
「は！？何言ってんのか解ってんのかお前！」
「殿下！馬鹿な事を仰いますな！」

アルはセレナを再度怒鳴り、駆け寄ってきたルーベンス伯も怒鳴る。しかしセレナは表情を崩さなかった。

「ルーベンス伯。私をなんだとお思いですか」

凛と威厳の漂う声に、ルーベンス伯やアルだけでなく、周囲の兵達も皆、息を呑んだ。静まり返った夜の静寂（しじま）に、澄んだ声が響く。

「私は、ゼノ第一王女、セレナエンデ・リィ・ネフィリス・ゼノです。王族として戦う訓練はして参りました。国を背負うべき王族が、貴方達すら背負わず何を背負うというのですか」

白金の髪が松明に照らされ明るく輝く。燃え立つ紫の瞳は、その場の誰をも魅了する。

「まずは領民の避難を。その後、全員持ち場に付きなさい。魔物など、打ち払ってくれましょう」

声が届いた刹那、夜の静寂は大歓声に満ち揺れた。不安げだった人々の顔から一切の負の表情が拭い去られて、一様に闘気に染められる。

「…殿下の御命令に従え！全員、散！」

雄叫びと共に、兵士達が走っていく。ルーベンス伯もまた、一礼して駆けていった。残ったアルに、セレナは微笑んだ。

「…と、強気に言ってみたものの、私は実践経験もありませんし、体術は才能がないと太鼓判を押されています。専門的には治療術師ですし…。――守って頂けますか？」

苦虫を噛み潰した様な顔をしていたアルは、っあー、と頭を掻き毟ってから投げやりに言った。

「解ったよ！…その代わり、オレから離れんじゃねーぞ」

セレナは嬉しそうに笑い、あともう一つ、と付け加えた。

「この難局を乗り越えられたら…あなたの本当のお名前をお教え頂けませんか？」

アルは目を瞬いてセレナを見た。

（…気づいて、たのか）

セレナは微笑んだまま、視線を反らさずアルを見返している。アルは苦笑し、解ったよ、と答えた。

「この戦いを生き延びられたらな」

不気味に蠢く異形の大群は、すぐそこまで迫っていた。

魔物の群れがガートに牙を剥いたのは、それから三十分後の事だった。僅か二十分で、少ないとはいえ領民の避難を完了させ、十分で体制を敷いたルーベンス伯の手腕は驚嘆ものだが、今はそれを論じている余裕もなかった。

「弓撃てェ！」

領主であるルーベンス伯の喉から大音声の命令が発せられ、一斉に数百本の矢が飛ぶ。しかし柔らかい外皮のものが僅か地に墜ちただけで、大抵の人間の鎧以上硬さを持つ魔物には大した損害は見られぬまま、魔物は更に城に肉迫する。

「怯むな！撃てェ！」

再度矢が飛ぶ。またしても僅かな数が伏すが、千以上に及ぶかという魔物に対し、それは絶望的な割合だった。が、矢の後を追うように放たれた風の刃が、最も間近に迫っていた魔物達を一掃した。

「魔物にも柔らけぇ所はある！甲殻の隙間や硬皮のねーとこを狙え

！」

叫んだアルの声を追うように、セレナの氷の礫が魔物を切り裂く。遅れて強弱様々な属性の魔術が飛んだ。

魔術ならば矢よりも圧倒的に魔物を倒す事が出来る。しかし魔力を持つ人間は限られ、この場にはアルとセレナを含めても二十人程しかいない。その上白兵戦になってしまえば、アル以外は魔術を使う所ではないだろう。

どう考えても勝ち目はなかった。

「…からって、諦められっか！」

アルが精霊の名を叫ぶと共に、高密度に圧縮された岩の塊が魔物を襲う。鋭く尖った岩尖は、魔物数匹を軽々と貫いた。次いでアルは地を蹴り、剣を抜き放つと、一体突出して迫っていた空を飛ぶ長い虫のようなものを気合いと共に斬り飛ばす。着地と同時に雷を疾らせ、十数体の魔物が黒こげになって四散した。

「凄い…」

呆然とその様を見ていたセレナや兵士達は、畏怖の念すら抱く。狩人とは、ここまでの力を持つのか。

「ぼけっとすんな！もう矢は撃つな！魔術師はとっとと魔力限界まで魔術使って退避しろ！一人は結界用意しとけ！兵士は全員武器を持て！！」

鋭い指示が飛び、全員はっとして言われた通りに行動しだす。

何名かは、なぜこんな少年に従っているのだろう――と頭の片隅で思ったが、少年の口調には人を従わせるものがあった。有無を言わせず是と応えたくなる威厳。それはセレナと似通ったものと気付いた者は、ごく僅かだった。

――――――――――――――――

呼吸が熱い。普段は重みを感じないほどに自身の一部と化しているはずの剣が、やたらと重く感じる。

「ちくしょぉっ…」

まだ夜は明けない。

一体どれだけ倒したのか。

思考をする暇などなく、殺気に対する反射だけで魔術を放ち、剣を振るう。倒しても倒しても絶える気配のない魔物達に、アルは限界を覚え始めていた。既に兵士すらも退避させ、全員セレナが張った結界の内にいかせた。セレナは実戦経験はないが、内包する魔力は強い。彼女が張った結界なら、なんとか朝まで持ちこたえるだろう。

切り捨てた魔物が、伏した兵士の遺体の上に墜ちていく。

どれだけの兵士が喪われたのか。

それすらも予測がつかない。

力が抜けそうになる脚を叱咤し、振り下ろされた獣の足を避け、雷撃を放つ。魔術にもいい加減切れがない。魔物の吐き出した炎を身を捻って避ける、が。

「ぐぁっ！」

避けたと思ったそれは、動きの鈍くなったアルの足を捉えていた。灼熱に灼かれる激痛に、アルは地面に転がって呻く。そこに容赦なく魔物達の爪牙は迫った。

「ブラスティア！」

しかし、それを風が弾き飛ばす。同時に悲鳴が聞こえた。

「セレナエンデ様！！」

アルはカッと眼を見開いた。脚の激痛を忘れて身を起こす。見紛うことのない金髪が、アルめがけて走り寄ってくるのが見えた。

「馬鹿！戻れ――――！！」

有らん限りの声で叫ぶが、セレナは止まる事なくアルの側に辿り着き、転がるようにして背中合わせになると、再度風を放つ。

「馬鹿王女！なんで出てくんだ！」

焼け爛れた脚に治療魔術で応急処置をしてから、アルは立ち上が

ってセレナを怒鳴った。セレナは負けず劣らず烈しい眼差しでアルを睨み付け、怒鳴り返した。

「ここは私の国です！他国の方に全てを任せ、死なせる等出来る訳がありません！！」

「馬鹿野郎…！」

歯を食い縛り、石礫を放って迫りくる魔物を切り裂く。しかし勢いの弱まったそれに、魔物を止める力はない。

「お前が死んだら、国はどーすんだ！」

「ルーベンス伯に頼みました。妹もいますし、問題はありません！」

「大ありだろーが…！」

二人の手からそれぞれ魔力が放たれる。叫び声は聞こえるものの誰も来ない所を見ると、中からの脱出すら防ぐ結界を張ったらしい。絶叫にも似た、彼女の名を呼ぶ叫びが耳に届くが、セレナは一顧だにしない。

「私は、あなた一人を犠牲にして生き残る未来などいりません！それ位ならば、民と…あなたを守って死を選びます！」

決意の籠もった叫びをセレナが上げた時。三方向から一斉にに二人めがけて炎が放たれた。遠くからの絶叫と共に、防げない、と判断したアルは、咄嗟にセレナを引き寄せ、覆い被さる様に華奢な体を抱き締めた。目を瞑って、死を覚悟する。セレナの細腕が、ぎゅっとアルの服を握り締めた。炎が正に二人を包もうとした、その時。

「ウェルエイシア！」

「ウェーディ！」

待ち望んだ、しかし来ないと諦めていた声が響き、同時にアルとセレナを呑み込もうとしていた炎が吹き散らされる。

顔を上げたアルの面に、安堵と歓喜が浮かんだ。

「リディ！ルイス！！」

全速力で走ってきた二人の狩人は、アルを認めてほんの僅か目元を緩ませたが、直ぐに厳しい眼差しに戻る。リディが何か言うと同時に二人は温かい光に包まれた。

「聖属性の、結界…」

治療魔術でも高位に位置するそれに、セレナが息を呑んだ。彼らの本職は、明らかに剣士であり魔術士であるのに。治療術師としても、セレナの同等かそれより上だ。

ルイスの声が飛ぶ。

「大人しくしてろ！…すぐ終わらせてやる」

二人の手は既に剣を構えている。急な乱入者に戸惑っていた風な魔物達も、再び獰猛な殺気を発し始めた。

「無茶です！二人だけなんて…！」

セレナの叫びは、翻った目も眩む様な雷にかき消された。残滓が消えた後には、目でわかるほど、魔物が減っている。僅かに怯みさえ見せた魔物達を、雷を放ったリディは、今の光を切り取ってきた

かのように燃え立つ金の眼で辺りを睥睨した。

「心配には及ばないよ。…行くよ、ルイス」

「ああ。…アイシィ！」

そこからは一方的だった。ゼノの民の想像を絶する威力の魔術が宙を疾り、もはや銀の閃光にしか見えない剣が易々と魔物を切り裂いていく。

「す…すげぇ…」

兵士の誰かが呟いた。そうとしか言えなかった。

ルイスとリディが参戦して僅か四半刻程経ち、ようやく待ちに待った日の出の光が辺りを照らし始める頃、視界を覆いつくさんばかりだった魔物は全て駆逐され、後には半壊した城壁と、大量の核、そして決死の特攻をかけた五百名程の兵士の遺体が残った。

最後の魔物が四散すると共に物音ひとつしなくなった荒野に、しかし唐突に鈍い音が響く。

「リディ、ルイス！」

その頃には脚や諸々の怪我を治し終わったアルが叫んで、結界を抜け出し膝を着いた二人に駆け寄る。ルイスとリディは荒い息をつ

いていたが、大きな怪我を負っている様子はない。

（オレなんか、比べ物になんない程強ぇ）

二人が来てくれなければ死ぬしかなかった我が身を振り返り、アルは唇を噛み締める。しかし、再びドサリという音がして、慌てて顔を上げると、リディが地面にうつ伏せに倒れていた。

「リディ！？」

「心配すんな…、ただのガス欠だ」

億劫げにルイスが懐を探り、橙色の玉を取り出した。

「…核？」

「魔力の暫定的な補充。アル、負傷者の治療に行ってこい。…あと、魔術士一人たりとも逃がすな」

核からの淡い光をリディに注いだまま、ルイスはアルに指示する。アルは目を瞬くが、とりあえず頷いてセレナの方に戻っていった。アルがセレナと共に負傷者の許へ行き、治療を始めると、ルイスはだん、と拳を地面に打ちつけた。

「くそ…っ」

何故、気付かなかった。相手が魔物を使ってくるかもしれないということに。腐っても一国の主が、民の敵である魔物を使役するなど有り得ない、とどこかで思っていたのか。

「馬鹿か、俺はっ…」

自分達は一度身を持って解っていたではないか。ビグナリオンで、アーヴァリアンの宮殿魔術師の使役した魔物の大群に襲われたのは、そう遠い昔ではない。

それなのに楽観的に事を構え、ここを離れた結果が、この惨状だ。自分達がいさえすれば、守れた命だ。ルイスにはその自信があった。

やがてリディに最低限の魔力が補填され、ルイス自身もほんの少し魔力を取り込む。核の色はかなり薄くなっていた。

核は、その内包する力を引き出されると、色が薄くなるのだ。最終的にそれは透明なガラスに帰結し、砕ける。

よろよろとルイスはリディを抱え上げようとしたが、リディ自身の手で押しのけられる。顔色は悪いままだが、取り戻した意識はしっかりしているらしい。

「……」

金の眼で有り様を見つめ、その視線が魔物の吐いた火によって斃れたと判る兵士の遺体を捉える。半瞬、目が見開かれた。

「――っ」

胃から這い上がるものを必死でこらえ、リディは歯を食いしばって拳を握りしめる。剣を握るのに支障がないよう丁寧に整えられた爪が掌の薄い皮を突き破り、血が滴った。

「…リディ？」

「…なんでもない」

ルイスの声に、目を一度ぎゅっと瞑って荒れ狂う感情（きおく）を押し殺し、リディは無言で、セレナによって張られている結界の方へ歩いて行った。

「ルイス、リディ！…大丈夫か？」

治療していたアルが、二人に気付いて声を上げる。治療を受けていた人々も、一斉に二人を見た。

「ああ。…悪い、肝心の時にいなくて」

ルイスが顔を俯ける先で、リディは一方向に視線を据えると、ずんずんと歩き出した。フードが外れ、長い髪がほつれ、しかし露わになった端麗な顔に、リディを目の前に通り過ぎられた人々は、それまでフードのせいで彼女の顔をまともに見た事のなかったために、ぽかんとする。委細構わずリディは足を止めると、目の前にいた魔術師らしき男の襟首を掴み上げた。情けない悲鳴が上がる。

「!?リディ様、何を…」

「誘魔香をしかけたのは、お前か」

セレナの声を無視し、リディは低い声で男の襟首に力を込める。男は苦しげな呼吸をしながらも、にいと唇を歪めた。

「ああ、そうさ…陛下の命令でな」

その言葉に、皆息を呑む。兵士達はいきり立ち、魔術士達は信じられないような目で彼を見つめ、狩人の三人は切り裂くような鋭さでもって睨みつけた。

「…そんな…父上…」

セレナが真っ青になってよろめいた。無理もない。本来王族とは、聖をもって邪を滅す、その為に元来人より強い力をもって生まれた、とされているはずなのだ。それが、どうして。

魔術師は狂ったように笑い出した。

「貧しかったゼノはもうなくなるのだ！烈火の鬼姫のいない今こそ、オルディアンを打ち倒し、ゼノこそが大国に…」

ガン、と激しい音がして魔術師が吹っ飛ぶ。リディが渾身の力で殴り飛ばしたのだ。魔術師は壁に打ち付けられ、蛙が潰れたような声を上げてうずくまる。

「馬鹿じゃないの、君達」

激昂するのを寸前で留めているかのような声音で、リディが男に言った。怒りに震える声音と、激情に紅潮する顔に、けれど何人かの男は確実に魅了される。

「例え烈火の鬼姫がいなくとも、ヴィ…オルディアンの王族は君達なんか片手で殺せる。君達が勝てる要素なんて、どこにもないんだよ」

魔術士は何も答えなかった。というより、答えられなかった。どうやら頭を打ったらしい。白目を剥いて意識を失っていた。

リディは大きく深呼吸してから、セレナを振り向いた。

「セレナ。これからどうするべきか…君には解った？」

セレナは金の双眸をしっかりと見つめ――頷いた。青ざめた唇が、言葉を紡ぐ。

「はい。…アルフィーノに、協力を求めます」

ざわり、とゼノの民が揺れた。しかし何人かは黙然と頷く。

この物資不足、そして本拠地の半壊。とても彼らだけではなんとか出来ない。しかしこの一件は、アルフィーノ、そしてオルディアンに伝わっているだろう。もしかしたら今すぐにでもオルディアンが攻めてくるかもしれない。

「アルフィーノに依頼して、オルディアンが攻め込むのを止めるよう説得して頂きます。――また、反乱の陽動も」

アルフィーノは商業国家だが、三大国家の一員でも在るが故に、相応の軍事力を持っている。

「アルフィーノに攻め込む振りをして頂きます。実際は、国境まで軍を送って貰うだけでいい。けれど父は必ず網にかかるでしょう。その隙に、民衆を扇動して――城を陥とします」

「し、しかし…アルフィーノには如何にして依頼するので!?そんな事をかの国が承けるかは…」

そう。問題は、この話に乗った所で、アルフィーノにはなんら得がないということだ。こちらには今現在送れる金もなく、また反乱が成功する確率も高いとはいえない。商人の打算を生業とする国が、幾ら戦を防ぐと言っても、所詮他国同士の争いに首を突っ込んでくれるかどうか。

「ひとつ伏せていた札があります」

セレナはルーベンス伯を手招きし、その耳元に数言囁いた。見る間に彼の表情が変わる。

「…殿下、それは本当ですか」

「はい。まだ私を含め数人しか存じません。文字通り、最期の切り札です」

「…なるほど、それならば…。しかし、誰を交渉に？私が…」

「貴殿は駄目だ。貴殿が離れてはまとまりがつかん」

魔物との戦いでボロボロになった伯の一人が首を振る。それは、次代の国家元首たるセレナに対する侮りの言葉ともとれるが、この状況下では真実でしかない。

いくら足掻こうとも、セレナはまだ十代前半の少女。中にはその年齢で才覚を発揮する者もいるにはいるが、それは少数で、彼女に求めるような心づもりは誰にもない。

停滞した空気の中で、一つの声が上がった。

「オレが交渉に行く」

全員、その言葉を放った人物を見やる。その少年は、空色の瞳に静かな色を湛えて、セレナを見つめていた。

第六話　陽と月　（5）（後書き）

年齢を記してみると、
ルイス→１９歳
リディ→１７歳
アル→１６歳
セレナ→１４歳
です。
セレナが難しい…

第六話　陽と月（6）

第六話　陽と月（6）

響いた声に、その場は一瞬静まり返り。

「アル…いいのか？」

ルイスはアルに静かに訊ねた。彼が行くと言った、その理由は。

アルは苦笑する。

「ああ。こうするのが一番だ」

「…そうか」

ルイス、そしてリディが瞑目して頷き、それぞれアルを見据えた。

「しっかりやって来い。お前の肩に全てがかかってるのを忘れるな」

「くれぐれも無礼を働かないようにね」

「解ってる」

狩人三人の会話に、唖然としていた周囲はようやくここで意識を取り戻す。ルーベンス伯が慌てた声を上げた。

「な、何を言っている!?我らを救ってくれた事には感謝する、だが狩人などに一国の交渉を担わせるわけには…」

「騙していた事は先に謝っとく」

凛とした声がルーベンス伯の言葉を遮る。声に漂う威厳に、集った兵士も、そして各伯や諸侯は息を呑んだ。先程までと、空気が違う。

「――セレナとは、約束してたよな。この戦いを生き延びられたら、オレの本当の名前を教えるって」

セレナは目を見開いた。皆、何が言われるのかと、固唾を呑んで少年の言葉の行方を待つ。

アルは表情を別人のように改めると、言った。

「その約束を今果たそう。オレの名は、アルフレイン・ウグリス・ロウ・カーラント・ラーシャアルド。ラーシャアルドの第三王子だ」

場は静まり返った。物音ひとつせず、誰もがぽかんと口を開けてアルを見つめる。その状態が永遠に続くかと思われたが、侯の一人によってそれは破られた。

「ま、まさか！なぜ、ラーシャアルドの王子ともあろう者が、こんな所にいる！？」

アルは口を開く、がルイスが遮った。

「ゼノがきな臭いのは、ラーシャアルドにも伝わってたんですよ、侯。殿下は王命を受けてゼノを探っていたんです」

アルが目を剥いてルイスを見る。自分は断じてそんな命は承けていない。しかしそう言おうとしたアルの足を、衆目からは見えない

角度でリディが蹴飛ばした。

「いっ…」

強烈な痛みに涙目になったアルが、リディをきっと睨む。

「何す…」

「ここで君の出奔がバレたら、ラーシャアルドの信用に関わるんだよ。黙ってて」

リディが押し殺した声で言う傍ら、ルイスが言葉を続ける。

「間もなくラーシャアルドの監察がここにも来るでしょう。その時に確かめなされればいい。――セレナ、文を急げ。時間はない」

事実を呑み込もうと頑張っていたセレナは、我に返って頷いた。そう、時間はないのだ。オルディアンが動く前に、アルフィーノに行かなければならない。

「わかりました。ルーベンス伯、手紙の用意を」

「私にも一枚くれる?…あとアル、少しでも寝てなよ。馬は使えないんだから」

ルーベンス伯に手を挙げて頼んでから、リディはアルに言った。そう、馬ではとても間に合わない。持てる限りの魔力で持って、空を翔けていかなければならない。

「わかった」

話の流れに憮然としていたアルも、道理だと思ったのか頷き、壁

によりかかるとすっと寝入った。限界まで消耗していたのだろう、三秒とかからなかった。

「ベッドで寝ればいいのに…ルイス、治療と魔力、分けてやって。それから運んでやってくれる」

「了解」

駆け戻ってきたルーベンス伯から紙とペンを受け取ってリディは踵を返す。セレナも同様に、辛うじて無事な城のへと走っていく。ルーベンス伯を始め、諸侯達もそれを追った。

残ったルイスは息を吸い込むと、周りの兵士達に言った。

「悪いけど、そこら中に散乱してる核を全部集めてきてくれ。勿論見張りは立てろよ。あと避難させていた領民の保護を。備蓄は使って構わない、明日俺達が核を換金して物資を調達してくるから、お前達も含めて栄養を補給しろ。腹が減っては戦は出来ないからな」

兵士達は頷いて、皆駆け出していった。各々まだ動揺し、疲労が溜まっている様だが、文句を言わずに従った精神は立派だ。しかしその動揺に付けこんで、本来自分が出す権限を持たない命令を下し、受け入れさせた自分は卑怯か否か。――否。

（この状況だ。少しは勘弁しろ）

「…さてと」

自分の残り魔力も僅かだ。ルイスは瞑目すると、懐から薄くなった橙色の核を取り出し、寝入るアルの治療を始めた。

その夜半。

一日をばたばたと補修作業や怪我人の治療、領民達への説明などで追われていたルイスは、疲れ切った体で城の中を歩いていた。アルがラーシャアルドの王子と判明し、その従者という認識を持たれているルイスは、いいようにこき使われているようだ。同じ同伴者でも、リディは遠巻きにされているのにと少し理不尽に思わないでもない。

（…ただ、リディも変だ）

髪を晒したくないのはわかるが、カツラを被った上にフードをかぶり、なおかつ人に近づかないように拒絶の空気をまとっているのはおかしい。彼女がオルディアンの国民であるというのは周知の事実の為、ゼノの者達が自ら彼女を避けているというのも一因しているとはいえ、彼女の空気は尋常でない。素顔を見て話しかけたそうにしていた者達も、二刻と待たず消えうせた。

そのことにどこか安堵を覚える自分に苛立ちながら、自然とルイスは足をリディの部屋の方へ向けていた。

特に何を思ったわけでもない。だが、妙な勘――虫の知らせとでも言うのだろうか――に誘われて、彼はその部屋の前に立った。

なるべく気配を殺して、扉の向こうの気配を探る。人一人――勿論リディの気配を掴んで、ルイスは数秒悩み、そっと音を立てずに扉を開けた。単に、眠っているのならノックの音で目を覚まさせて

しまうのを悪く思っただけなのだが――それは、予想外の光景を彼に見せることとなった。

月明かりのみが照らす、暗い部屋の中、扉からすぐ入った所から見える場所で、リディは蹲っていた。

「な――リディ！？」

驚愕して、彼女の脇に駆け寄る。床に倒れて身を丸めていたリディは、その足音にぴくりと肩を揺らして顔を上げた。その顔色にまた、ルイスは絶句する。

青白い、を通り越して土気色だ。唇の端からは涎が流れた跡があり、窓の外のバルコニーにはそれを証明するように吐瀉物があるのがわかった。

「どうした！？」

水精霊にそれの清掃を命じてから、ルイスはリディを抱える。そしてその体が、異常なほどに震えているのに気づいてますますうろたえる。

「おい、リディ！どうかしたのか！」

「…なん、でもない…」

「何でもない訳ないだろうが！くそ、医師を――」

治療術が使えると言っても、それは怪我に対してだ。病や毒に関しては、知識のある専門家でない限り任せるに値しない。そう判断して立ち上がりかけたルイスの裾を、リディの手がつかんだ。

「いい。呼ぶな…医者は、いらない」

体はいっそ無様なほど震えているのに、ルイスの裾を掴む手は強い。一瞬反論しようかとも思ったが、日中に見た彼女に病の気がなかった事や、毒を盛られる必要性もないことを鑑みて、立ち上がるのをやめて彼女を抱き抱えた。

「…ちょっと…」

「倒れるならベッドに倒れろ」

彼女をベッドが接する壁にもたれかけるようにさせてベッドの上に座らせ、脇にあった水差しからコップに水をついでやり、ルイスもベッドの縁にぼすんと腰をおろして頬づえを突いた。

「で？どうしたんだ」

「……」

唇を噛んで、リディは目を反らす。しかしその顔色は未だ悪く、震えが止まらない。握りしめられた掌からは、幾筋も血が流れた跡があった。

「……」

ルイスは無言でその手をとり、治療魔術を使う。穏やかな金色の光がリディの手を包み、食い込んだ爪の痕を跡形もなく癒した。

「…言えないなら、いい。お前が今回のことで何にそんなに傷を負ったのか、俺にはわからない。――ただ、俺に出来ることはないのか？」

静かな口調に、リディは再び丸めた身ごと、ルイスを見つめた。

深い蒼色が、凪いだ湖面のような穏やかさで彼女を映している。

「……ごめん」

しばしの葛藤のあと、リディは首を振った。

このことは、自分が負うべき咎なのだ。誰かに背負わせる事は決してしたくないし、また出来ることでもない。――それでも、未だ癒えない傷に、寄る辺が欲しい心は制せなかった。

「話せない――けど、ちょっと、胸貸して…」

そう言うなり、リディは傍らに座るルイスに手を伸ばした。

「は？」

理解が追い付いていない彼の背に、細い手が回る。そのままぎゅっと彼の胸に小さな頭が押し付けられた。

「リ……」

「ごめん。少しだけ、こうさせて…」

狼狽してリディを見下ろしたルイスは、けれど彼女がまだ小刻みに震えているのを直に感じ取り、短く息を吐くと腕を回し返した。

人肌に触れた為か、少しずつリディの震えが収まっていく。常日頃からは考えられないほどに弱った彼女に、なのに踏み込むことが出来ない自らの無力さを嘲笑いながら、ルイスは抱く力を僅かに強める。

（お前の中の闇は、なんなんだろうな）

幾ら規格外とはいえど、彼女もまだ十七歳の少女だ。二歳しか変わらないとはいえ、自分はそうそう感情を崩すことのないように育てられた。そうあるべき立場の為に。だが、彼女は違う。

（頼れよ…なんて、何も話してない俺が言える台詞じゃないな）

自嘲の笑みを消さぬまま、ルイスはいつしか腕の中の少女の震えが消え、微かな寝息を立て始めてもなお、その体を抱きしめ続けていた。

ちなみに、翌朝早くにルイスを探してリディの部屋を訪れたアルが、彼女と一緒にうっかりそのまま寝こけた彼を見て、生温い笑みを浮かべるとともに、部屋の扉に立ち入り禁止の札をそっとかけていったのは余談である。

ラーシャアルドの監察がやってきたのは、それから三日後だった。彼らの第一声は、城門の前でひらひらと手を振っていた彼らが王子殿下に向けて発された。

「殿下っ！？」
「おー、久し振り、か？マルクスにポール」
「何故にこんな所にいらっしゃるのですかっ！？マリナリオの陛下がっ…」
そこまで叫んだ所で、マルクスと呼ばれた監察の男は周りで見守るゼノの兵士達に気づいて、言葉を呑み込んだ。
「…ともかく、ご無事で何よりです」
後でキッチリ話して頂きますよ、という視線を苦笑して受け止め、アルは顔を改める。
「今の状況、お前達はどれだけ把握してる」
それに伴って監察達の表情も変化する。その様を見ていたゼノ兵達は、それまで半信半疑だった、この少年が本当にラーシャアルドの王子という事を初めて確信した。
歩き出しながらマルクスとポールはアルに報告する。
「おおよそは。ゼノ王は本気です。魔術師達に十年かけて、魔物を誘導する術を学ばせ、今度こそオルディアンを攻めるつもりです」
「オルディアンの様子は」
「今のところ目立った動きはないようです。ただオルディアンにいる監察からは、国境付近の防備を固めている、という報告が」
「ゼノに攻め入る気はない、と？」
城の脇から現れたルイスが二人に訊いた。監察二人は驚いた様子でルイスを見、次いでアルを見たが、彼が頷いたのを認め、はい、

と肯定する。

「ゼノが戦を仕掛ければ即座に反撃はしてくるでしょう。ただ自ら進んで戦をする気はないようです」

「そっか。マルクス、ポール、父上に連絡しろ。オレはゼノ第一王女、セレナエンデを援助すると。オレの権限で余っている物資を送るように言え」

「…は！？」

耳を疑うように監察二人は叫んだ。気にした風もなくアルは続ける。

「オレはこれから名代としてアルフィーノに発つ。よろしく頼んだぜ」

言うだけ言って方向転換した王子を、唖然としたマルクスとポールが慌てて追う。

「お待ち下さい！！殿下、それは一体…」

「アル」

彼らを遮るように、二人の人影が現れた。――リディとセレナだ。リディは再びフードを目深に被っている。セレナはアルの目の前で立ち止まり、紫の瞳で彼を見上げた。

「…お行きになるのですか」

「ああ。待ってろ、セレナ」

アルは柔らかく笑んで、くしゃっとセレナの髪を撫でた。全く状況が解らないまでも、姿かたちから少女がこの国の第一王女だと知

っているマルクスとポールはひぃっと息を呑む。殿下っ！と叫ぼうとした口は、ひょいと伸ばされたルイスの手によって塞がれた。

「……」

そんな周りの一幕に気づかず、目を伏せるセレナに、アルは笑う。

「心配すんなって。――直ぐに戻るぜ」

「…解りました。恥をしのんで、お願い申し上げます。どうか無事に、この書をアルフィーノにお届け下さいませ」

セレナは手に持っていた書簡を差し出した。少し離れて見ていたリディが、こちらは小さな封筒をアルに渡す。

「アルフィーノの陛下に渡して。誰からかとかは言わなくていい。渡せばわかるから」

「何だよそれ」

言いながらもアルは素直にリディの文を受け取った。落とさないようにセレナの書簡と共に荷物に丁寧に入れる。

「じゃ、行ってくっから。後頼むぜ」

「ああ」

「任せろ」

リディとルイスはひらひらと手を振り、アルは頷いて一歩下がる。それぞれが風の精霊の名を呼んだ。俄に風が巻き起こる。

アルフィーノまでは遠い。半日程で、集めた核の魔力と睡眠でほぼアルの体力魔力は回復したとはいえ、きつい行程であることには

変わりない。その為、初速はルイスとリディが飛ばしてやる事にしたのだ。
　たまっていく魔力に、アルは顔が引き吊るのを抑えられなかった。速いのは有り難い。有り難いのだが、いかんせんこの二人、魔力が強すぎる。結界もついでに張ってくれるとはいうものの、風に押し潰されないか非常に不安を感じる。

「アル！」

　と、不意にセレナが叫んで、アルに飛びついた。驚いたルイスとリディは顔を見合わせ、取り敢えず魔術の発動を待機させ、二人を見守る。
　セレナはぎゅっとアルの体を抱き締めて、震える声音で言った。

「…どうか、ご無事でっ…」

　アルはちょっと狼狽していたが、首を振ると軽く彼女を抱き締め返した。

「だから心配いらねーって」

　そっと肩を離し、セレナと距離を取り様、アルはセレナの耳元で囁いた。

「…好きだ」

　セレナが目を見開いた瞬間、ゴウッ！と音を立てて風が巻き上がる。強烈な旋風に思わず皆が目を閉じ、開けた時には既に少年の姿は無かった。

「でっ…殿下ー!?アルフィーノって何がどうなって…ってそれ以前に、セレナエンデ王女殿下と一体何がー!?」
「どどどどうしましょうマルクスさん、陛下になんて言えばっ…」

さぁ持ち場に戻るぞー、と集まっていたゼノの兵士達が去っていく傍ら、ラーシャアルドの監察二人は右往左往におろおろしている。セレナは掌を組んでじっと空を見上げていた。

唯一、風魔術の行使者であるお陰で会話も全て聞き取っていた狩人二人は、全てを眺めてから顔を見合わせ、同時に吹き出した。

「やるなぁアル」
「純情純情」

この三日、アルは殆どセレナと行動を共にし、自分達が生き延びている事の隠蔽、裏切り者の魔術師の調査、物資の調達、父王の動向などを伯達から聞き、頭を捻らせ、領地を走り回っていた。まるで夫婦のように寄り添いあって行動していた彼らに、兵士はもちろん領民ですら、温かい目を向けていたのは周知の事実だ。渋い顔をしていたのは、セレナを娘のように思っているらしい壮年の諸侯達ぐらいか。

それくらい彼らの間にある絆と感情はまるわかりで、ルイスとリディにしてみれば面白がる以外の何物でもなかった。

リディもあの夜の後は、普段通りの精神状況でいるようだ。一応、毎晩こっそり彼女の部屋を覗きにいっているルイスも、規則正しい寝息が聞こえているのに安堵しつつ、自分の過保護ともいえる行動に半ば呆れていた。

ひとしきり笑ってから、二人は未だに狼狽えているマルクスとポールの首をがしっと掴み、城の中に向かって歩き出す。

「き、貴殿らっ…」

「安心しろ、最初から全部話してやるから」

「君達の王子様の恋も全部ね」

恋っ！？と揃って上がった悲鳴に堪えきれなくなって再び盛大に肩を揺らしながら、彼らは城内へ戻っていった。

第六話　陽と月　（7）

第六話　陽と月　（7）

――四日後、アルフィーノの首都、カミール。

（有り得ねえ…絶対有り得ねえ！最短距離を行ったとはいえなんで行きにひと月かかった距離を、四日で来てんだよっ！？）

よろよろと街の大通りを歩くアルは、傍目にもげっそりとしていた。現に、通りすがりの街人達は、皆遠巻きにその様子をうかがっている。彼がそんな風体になっている原因は寝る暇も惜しんで文字通り飛んできたのもあるが、

（つうか、たった一日で距離の半分吹っ飛ばしやがってあいつらああああ！！）

ガート城からアルを飛ばした風魔術は、恐ろしい初速を有していた。衝撃で意識が飛び、気がついた時には夕方、しかも国境の山の上空を飛んでいた時のショックは計り知れない。結界が張られていなければ、まず間違いなくアルの体は空中分解していただろう。その時には流石に初速は落ち始めていたので自分の魔力で加速をつけたが、あの二人の底無しの魔力にはぞっとする思いだった。魔物の襲撃後すぐにアルフィーノには鷹文を飛ばしておいたのだが、うっ

かりすると追い越しているかもしれない。

（――いいや、とりあえず城、城）

疲れた体に活を入れて、アルは大通りの先に見える巨大な建造物を目指した。

王への目通りは、予想外にあっさりと通った。そのあっさり具合に鷹文が届いていたことはわかったが、隣国の王子が別の国の使者として訪れたのだから少なからず戸惑いはあった筈なのに、城の者達はそんな気配をおくびにも出さなかった。それは流石三大国家の一角を占める国の宮中と言える。

謁見の間に通されたアルは、何よりもまず初めに膝を付いた。その完璧な所作に、所々から微かな感嘆の吐息が漏れる。が、アルにしてみれば王族としてこの程度の礼儀がなければお終いだ。

「――ようこそ我が国へいらした、アルフレイン殿。私がアルフィーノ国王、ヘンドリック・フィルガ・ロウ・エルクイーン・アルフィーノだ」

アルは顔を上げる。そして玉座に座る王を見つめ、少なからず驚いた。アルフィーノ国王は若かった。ルイスと二つ、三つも変わらないだろう。赤みがかった金髪は艶やかで、目を瞠る程の美貌だ。

だがその驚きを押し隠すだけの冷静さを、アルは叩き込まれていた。

「――急な来訪に対し応じて下さった事、感謝致します。ゼノ第一王女、セレナエンデ・リィ・ネフィルス・ゼノより密書を預かって参りました。鷹文での先駆けは届いておりますでしょうか」

「ああ。――こちらへ」

アルはヘンドリック国王の手招きに立ち上がって、丁寧に畳んだ密書を国王に渡した。それに国王はざっと目を通して鷹揚に頷く。

「さて、アルフレイン殿。これに対する返答の前に、いくつか質問がある」

アルは背筋を伸ばした。予測していた事ではあるが、口の中が乾くのを感じる。自分次第で事の是非が決まると気を引き締めて、アルは唇を舐めた。

「――はい。なんでしょう」

「貴殿はそもそも何故、反乱軍のただ中にいたのか？」

最初から鋭い斬り込みだ。すっと頭が冷えるのを感じながら、アルは答える。

「――私は父、ラーシャアルド王の命にて、不穏な空気が流れているというゼノ国内を探っていたのです。そんな折、偶然にセレナエンデ王女とお会いしたのですが、王女は追われていらっしゃったので、咄嗟に助けてしまったのです」

淀みなく話しながら、その実アルは舌を噛みそうになるのを必死で堪えていた。ここの所言葉遣いを気にしていなかった反動だ。だ

がここで間違うわけにはいかない。

「成程。反射で思わず、というやつかな？」

「はい。私と年の変わらぬ少女が追われている状況に、手を出さずにはいられませんでした」

アルの答えに、ヘンドリック国王は笑みを崩さぬまま頷いている。しかしその金色の瞳が顔程には笑っていない事に、疾うにアルは気付いていた。

「では、もう一つ。貴殿はなぜ、自国に全く関係のない他国の争いにも関わらず、手を貸そうと思い至ったのか？」

ここからが本番だ。アルはルイスに叩き込まれた事を思い出す。焦るな、落ち着け、と言い聞かせながら何度も頭の中で繰り返したそれを唇に乗せた。

「私も五年前のオルディアンとゼノの戦を覚えております。その時ゼノは、オルディアンを追い詰めはしましたが、結局は何も得られぬまま停戦となりました。豊かさを求めた戦の結果、ゼノ国内は飢えで苦しむ民で溢れた、とセレナエンデ王女より聞き賜りました。しかし此度、再び戦をしようとしているゼノ王は、五年前のような義侠心ではなく、自らのオルディアンに対する私怨によってのみ戦を起こそうとなさっております。…それが証拠に、魔術師軍団を練り上げ、あまつさえ王族としてあるまじき事に、魔物すら使って侵略しようとしているのです。ただでさえ回復していない国土は、再び戦を受ければ修復出来ない程破壊されるかもしれません。これは、民を苦しめる事以外、何者でもありません。同じ王族として、私は許すに値しないと判断致しました」

滑らかな弁舌に、謁見の間に居合わせた臣下達から感心したような息が漏れる。ラーシャアルドの第三王子は戦闘一辺倒だと聞いていたが、なかなかに政も出来るらしい、と彼らはアルを見る目を正す。しかし、フレデリック王だけはすっと目を細めた。

「しかし、貴殿は何故ゼノが負ける事を前提にしている？ゼノが勝てばゼノの資源は潤うだろう。確かに私怨や魔物を使うという点は頂けないが、それはあくまで倫理観の問題だ。他国に介入して止めさせようとするに至るまでの理由は私には感じられないのだが」

アルは慌てなかった。きっとこんなことを言ってくるよあの王は、と言った仲間を思い出す。ゆっくりとアルは言った。

「私からも一つお訊きしてもよろしいでしょうか、王」
「ああ」
「王は三大国家の一角が崩れたとして、何も思わないのですか」

ヘンドリック国王は面白そうに口の端を上げる。随分と直線的な質問だ。だからこそ、こちらも直球で答えてやる。

「別に我ら三国家が在り続ける必要などない」

好戦的な色を宿す金色の瞳を見返し、ふとアルは既視感に襲われた。

どこかで同じ眼を見たような気がする。

「国というのは生き物だ。永久に栄え続けることなど不可能。ここでオルディアンがゼノに敗れるというのならば、オルディアンの命に果てがきたということ」

かなり際どい発言を、しかし誰も咎めない。それは限りなく正論。この世は所詮弱肉強食。負けるのはその国自体の責任ということだ。

「私は商人の国の王だ。商売相手が変わろうと、我が国に損害がなければそれで構わん」

きっぱりと言って捨てた姿は、間違えようもなく王者だった。その国の王が護るべきは、その国の民。自国にとって何が益で何が無益か、冷静に冷徹に計算した、怜悧英明な思考だ。

アルはぞくりと背筋が泡立つのを感じた。この王は、甘さを許さない。自分と十歳も変わらない年でありながら、凄まじいまでの威厳。だが、ここで射竦む事は許されない。

「…私が何故、ゼノが負ける事を前提にしているか、でしたね」

息を吸い込み、吐き出す。冷えた背筋に、温度が戻ってくる。

「幾らゼノが魔術師を揃えようと、魔物を率いようと、オルディアンには勝てないと解っているからです」

「ほう、何故だ?」

「オルディアンには『烈火の鬼姫』がいます」

ぴくりと王の眉が跳ねる。その僅かとはいえ、感情を示す動作を示した事に少し意外感を抱きつつも、アルは続ける。

「また例え『烈火の鬼姫』がいなくとも、オルディアンの国王陛下や王太子殿下は他国の侵略を再度許すような方ではない、と伺っております。それだけの技量を持った方だと」

「貴殿はそれを信じるのか?」

「はい」

迷い無く答えたアルに、ヘンドリック国王は小さく笑う。限りなく主観的だが――この場合その主観は正しい。

しかしそれを見せず、彼は言った。

「ラーシャアルド王は貴殿にそれを許す、と？あくまで探る事だけを命じたのに、戦に巻き込まれる事を由としたのか？」

「父ならば私と同じ事を申すでしょう」

暗に了解は取っていないという事だ。が、飄々と言ってのける気概に国王は感心する。弁舌は誰かの入れ知恵がありそうだが、この度胸は気に入った。

「…それに、ゼノを助ける事には別の意義があります」

ふ、と笑みを見せたアルに、ヘンドリック国王は目を瞬く。

「別の意義？」

「はい。これはアルフィーノにとっても益のある話かと思いますが」

部屋の空気が僅かに変わる。少年品定めから、商人の駆け引きへと、敏感な人々が視点を変えたのだ。

ヘンドリック国王も笑みの種類を変える。それを見たアルは、言葉を紡いだ。

「つい先日、ゼノの南、ユーダ山脈で大規模なミスリルが鉱脈が発見されたそうです」

くっとヘンドリック国王の眼が見開かれた。場も細波のようなど

よめきが走る。

ミスリルは魔力保有率・浸透率がとても高い鉱石で、かつ防御力が高く、鎧や剣に好まれる。しかし採掘量が少なく、そういった武具防具は従ってかなり貴重だ。誰もがミスリル製に憧れ、しかし保有者はごく少数。ミスリルを産出するのはイグナディアと、それから北方二国だ。それでも細々としか採れず、供給量は低い。

その中で、大規模なミスリル鉱脈が見つかった、その意味は。

「今回の見返りに、ラーシャアルドはミスリルの優先輸入権を頂くつもりです。…アルフィーノは、どうなさいますか？」

場は静まり返り、次の瞬間王の爆笑が響いた。それまでの冷たい空気を振って払うような、年相応の明るい笑い声に、広間の空気はいつの間にか一変する。

（え？オレなんか間違えた？）

アルが内心だらだらと冷や汗を流していると、笑いを収めた王が言った。

「なかなか面白い話の運び方をするな」

「…光栄です」

それまで王の倫理観、心に訴えるある意味感情論であったのに対し、一転して打算の精神に囁く話の運び。

前半に意味がなくても、アルフィーノの王ならば後半に興味を示

すだろう、と言ったのはルイスだ。アルが今喋ったのはほぼルイスの言ったことの丸覚えであるから、少々複雑な心地である。

けれど上手く釣れたようだ。アルはルイスの知略にほとほと感心した。

「そのミスリル鉱脈は、我が国にも充分益をもたらすものであると？」

王の金の眼は既に柔らかい。アルは安心しつつも、最後の仕上げだと気を引き締める。

「はい。情報に基づく審議の結果、今までで最大級のものかと。ゼノはまだ未開拓の地が多い。まだ見つかっていないだけでゼノには他にも鉱脈が存在するでしょう。かの国も、これからは徐々に豊かな国になっていくかと思われます」

「鉱脈の存在をゼノ王は知らないのか？」

「まだ山脈付近の官僚しか知りません。山脈付近の官僚は、王の政策に反対して左遷された者達です」

成程、とヘンドリック国王は笑みを深める。ミスリルが発掘されたと聞いたら、直ぐ様ゼノ王は軍事転用した事だろう。それを見通して隠したゼノの有望な官僚達には、拍手すべきか。

「――では、ゼノ王女は、我らが陽動役を引き受ければミスリルの優先輸入権を保証すると？」

ここまでくれば成功したも同然だ。逸る気持ちを抑え、アルは懐から手紙を取り出した。

「はい。――こちらにセレナエンデ王女からその旨についての文書が」

アルから書を受け取り、ヘンドリック国王は頷く。

「――そちらの要求を呑もう。我がアルフィーノは、そちらの反乱に応じて国境でゼノ軍の陽動を引き受ける。その代わり、セレナエンデ王女が王位についた暁には、ゼノ山脈で採れるミスリルの優先輸入権を我らに与える事。――良いかな？」

「――はい！ありがとうございます！」

勢い良く頭を下げ、アルは拳を握り締める。やり遂げた。これで、セレナは最初の段階をクリアした。

ほっとした顔を隠さないアルを、ヘンドリック国王は面白そうに見つめる。

――やはり、この少年にあのような駆け引きが出来るとは思えない。入れ知恵をした誰かがいるのだろう。その誰かは、かなりの知略家だ。

「王、鷹文をお借りしてもよろしいでしょうか？セレナに――あ、間違えた、セレナエンデ王女に報せたいのです」

嬉しそうに頼んできたアルに、ヘンドリックは肩を揺らして応じる。

「その点は案じなくて良い。貴殿がミスリルの話を始めた時点で、既に送った」

「…へ？」

間抜け顔でアルが固まる。この王子はこっちが地だな、とヘンドリックは思いつつ、言葉を続ける。

「先程は他国がどうなろうと関係ない、と言ったがな。私の母はオルディアン王家とは姻戚関係あるのだ。例えばこれがエーデルシアスなら私は放置しただろうが、オルディアンだけはそういう訳にはいかない。しかしやはり、我が国にまるで益がないようでは、受ける事は躊躇われた。しかし王女は手札を見せた。――隣国としとこれから先つきあっていくのだから、ここで断る事は却って損だ」

アルはなんだか気が抜けた。つまりこの王は、自分達を試していた訳か。感情論などとっくに看破し、ゼノがアルフィーノの益をもたらせるかどうか、それを知るために。

完全に掌の上だった事を思い知らされ、がっくりと肩を落としたアルに、ヘンドリックは更に爆弾を投げる。

「それと、これは私的な質問だが…貴殿は先程セレナエンデ王女をセレナ、と呼んでいたな。――良い仲なのか？」

「なっ」

瞬時にアルの顔が赤く染まる。対してヘンドリックはにやにやとその様を見守る。子供をおちょくるのは楽しい。

「い、え、別にまだ何もっ」

「ほう、まだ、か。つまり将来には何かするつもりか」

「……っ」

絶句して口をぱくぱくさせるアルに、ついにヘンドリックは吹き

出す。

「素直だな。事の真偽はさておき、まぁこのくらいにしてやろう」

アルはようやく遊ばれていた事に気付き、がっくりを通り越してうなだれた。この性格の悪さはあの二人に通じる。大人ってこういう奴ばっかなのかよ、と遠い目で思った。

「そう拗ねるな。あともう一つ訊きたいのだが…、貴殿はどうやってこの距離をたった四日で踏破したのかな？」

アルは目を瞬いた。いきなりの話題転換に戸惑うが、今更だが最もな疑問だという事に、苦笑いする。

「風魔術で。おかげで魔力が少しガス欠気味です」

ほう、とヘンドリック国王は感嘆の息を吐く。

「貴殿の魔力はかなりのもののようだが、それにしても四日とは。恐れ入るな」

「いえ、半分は友人の狩人に送って貰ったのです。たった一日で国境まで飛ばしてくれて、早いは早いですが速すぎて死ぬかと思いました」

ざわ、と微かなざわめきが謁見の間を走る。その中心でヘンドリック国王が目を細める。

「国境までたった一日、と？それが本当なら、その狩人とは何者だ？」

訊かれて、あ、とアルはリディの手紙の存在を思い出した。急いで荷物を漁って取り出しながら、

「狩人の中でもトップクラスの実力を持つ奴らです。そのうちの一人から、これを王に渡すように、と」

忘れてました、と言いながら差し出された手紙をヘンドリックは怪訝そうに受け取って開き――絶句した。

これまでほぼ、冷静で余裕な顔しか見せなかったヘンドリックの豹変に、アルだけでなく周りの臣下達も驚く。

王は手紙に一瞬で目を走らせると、凄まじい勢いでアルに訊ねた。

「この手紙を君に渡したのは誰だ!?」

「え、あ、オレと一緒にセレナを保護した狩人です。――あの、何か?」

突然の変貌に動揺して一人称が素に戻ったが、ヘンドリックの方にも気にする余裕はないらしい。

「名前は!?」

「…誰かは言わなくても解る、とか言ってましたが」

アルの答えにヘンドリックは再び絶句し、次いではぁっと椅子に沈み込んだ。一気に疲労を帯びた姿に、臣下が恐る恐る声をかける。

「へ、陛下…?その手紙がいかがしたのですか?」

「…いや…何でもない。全員下がれ」

「は?」

「下がれ。アルフレイン殿と二人で話がしたい」
「…は」

怪訝そうにしながら、アルフィーノの臣下達が部屋を出て行く。広い部屋で玉座の主と二人きりの状態に居心地悪げに身を竦めたアルとは対照的に、ヘンドリックは鬱々とした顔で言った。

「アルフレイン殿、貴殿はこの者が狩人だと言ったな」
「はい」
「…それ以外に何か知っているか？」

それ以外？とアルは首を捻り、思いつくままに答えた。
「そうですね…火、雷、風魔術を使いこなす凄まじい技量の双剣遣いで、オルディアン出身。多分貴族出身です」
「…そうか…」

（つまり、アルフレイン殿はあれの素姓を知らん、と…）

「あの馬鹿が…」

呻いてヘンドリックは額を抑え、アルはいよいよ頭を傾げる。手紙を渡したあたり知り合いなのは察していたが、王に馬鹿呼ばわりされる程親密なのか？

「…全く、貴殿もこの手紙を最初に渡せば良いものを。そうすれば私に拒否権はなかったのに」
「え、何ですかそれ」

ぶつくさと言われた文句に、アルは目を点にした。なんでその手紙がそんな効力を持つのか。

「あれはな…」

その続きを聞いたアルは即ち再度絶句した。

第六話　陽と月　（7）（後書き）

…謀略とも言えないような感じでごめんなさい…
ちなみにヘンドリックは２３、４歳の設定です。

第六話　陽と月　（8）

第六話　陽と月　（8）

時と場所を移して夜、ゼノのガート。半壊した城も領地もこの一週間で、ルイスを中心とした魔術師達の、核の力を用いた土魔術で大分修復された。

その一角、八日前にルイスと、アルとセレナの逢瀬を覗き見した窓辺でリディはぼんやりと夜闇を眺めていた。しかしその眼前に、不意に光が現れる。

『久しぶりだな、リディ』

聞こえた声に一瞬驚き、次いで苦笑してリディは自らの風精霊の名を呼んだ。指示と共に風精霊の気配が遠ざかり、やがて再び目の前の柔らかな光から声が発される。

『着いたぞ』

「そ。アルは成功したみたいだね？」

旧知の者に対するような問い掛けに、しかし光も同様に応じた。

『ミスリル鉱脈の話まで出されればな。…というよりお前、何をやっているんだ。無断でいなくなったと聞いた時には驚いたぞ』

「心配はしないんだ？」
『馬鹿野郎。俺より強い相手に心配もあったものじゃないだろう』

それもそうだ、とリディは肩を揺らして笑う。光から呆れたような吐息と共に、やや改まった口調で訊ねられる。

『…何故、出て行ったんだ？』

リディは苦笑した。

（解ってる癖に）

「嫌になったんだよ。ひとつはもちろん…私の立場に鬱になったのもあるけど…あとは、お前も年頃の娘だ、結婚相手を見繕え、なんてさ。勿論父上が私の事を考えて言ってくれたのは解ってる。でも、嫌だったんだ。世界が鎖されていくのが」

沈黙が僅かな時間、辺りを支配する。やがて光がため息を届けた事でそれは絶たれた。

『お前らしいな。…で、そこに居合わせたのは偶然か？』
「全くの偶然。一度行ってみたいな、とは思ってたけど、まさかこんな事に巻き込まれるとはね」

笑い混じりに答えれば、向こうも笑う気配がする。

『トラブルに突っ込んでいくのがお前だろう』
「失礼な。トラブルが突っ込んでくるんだよ」
『どうだか』

軽口を叩き合い、少し笑い合ってから、不意に真面目な声がした。

『殺すのか』

誰を、とは訊かない。言わずとも、リディには明確にその意図が読み取れた。

「まだ解らない。…ただ、出来ればセレナ自身に決めさせる。『私』はなるべくこの国に関わらない方が良いから…」

少し沈んだリディの声に、光は少し沈黙し、確かにな、と頷く気配を届けた。

『その国の事は、その国が片付けるべき。『お前』は出しゃばらない方が良いだろうな』

リディはうん、と小さく頷いた。漂った暗い空気を振り払うように、光の向こうが話を変える。

『…ゼノを出たら、どうするんだ?アルフィーノに来るのか?』

「いや、アルフィーノからこっちに入ったからね。…オルディアンに行くよ」

『…こっちにいたのか…。ってまさか、ガルケイドの件、お前の仕業か!?』

ガルケイド、という名詞に一瞬リディは思考をめぐらせ、次いでにやりと笑った。あの、自分を攫ってくれた馬鹿な貴族だ。

「御名答。感謝してよ」

『……。…感謝しよう』

腹を切るような声音に、リディは軽い笑い声を立てた。しかし、ふと真面目に声音を戻す。

「でも、危なかったんだからね。私や私の連れがいなきゃ、女の人百人危なく死ぬとこだったんだよ。そこ、ちゃんとわかっときなよ」

『…返す言葉もない』

「ま、いいよ。次に繋げれば」

数秒、沈黙が場を包んだ。しばし後、幾分低まった声がリディに訊ねる。

『…戻るのか？』

その意味をわずかに測りかね、察するとリディは相手に見えないとわかっていても、首を振った。

「馬鹿言うなよ。リリエイヌを避けて行くさ。エーデルシアスに行きたいんだ」

『成程。あの国は面白いぞ。何より王妃が』

「何だよそれ」

『実際に自分の目で見るんだな』

笑い混じりの声に、リディは目を瞬く。

「…告げ口、しないの？」

『…お前、それ今更だぞ。俺がお前の嫌がる事を出来ると思うか？』

「思わない」

即答する。というより彼がリディに逆らう事はない。三倍返しの憂き目に遭うから。

その時リディの耳が、こちらに近づいてくる足音を捉えた。

「――じゃ、この辺りで切るよ。アルを宜しく。あと陽動」

その口調に、彼も悟ったらしい。

『ああ、責任を持って送り出そう。陽動に関しても任せておけ。――じゃあな、リディ』

「ああ。またね、ヘンドリック」

ふっと光が消える。その数秒後、ひょいと廊下の角から黒い頭が覗いた。

「…リディ？」

きょろきょろと蒼い瞳が周囲を見回す。理由を解っていながらも、リディは微笑んだ。

「ルイス。どうかした？」

「…今誰かと喋ってなかったか？」

「いや？別に誰とも」

ルイスは僅か、探るようにリディを見たが、すぐに首を振って詮索を止めた。代わりにリディの向かいに腰を下ろす。

「アル、平気かな」

「大丈夫だろ。あいつも馬鹿じゃないし」

淡々と返すリディに、微かな違和感を感じるも、その表情はフードに隠れてよく見えない。ここ最近目にすることのない彼女の赤色を少し寂しく思いながら、ルイスは別の事を口にした。

「ここが終わったら…どこに行く?」

リディはなぜルイスがそんな質問をしたか、正確に理解した。彼はリディがオルディアン出身だと知っている。追っ手をかけられる身分であることも。だからこそ訊くのだ、どうする、と。

けれどリディは肩を竦めて答えた。

「決まってるだろ。オルディアンだ」

ルイスはちょっと拍子抜けしたらしい。だが真っ直ぐ向けられたリディの眼に意志を悟り、それ以上無駄な質問を連ねようとはしなかった。

「…じゃ、このままの進路で問題ないな。…ていうか、もう半年以上なんだな…お前と旅を始めてから…」

遠い目になって呟いたルイスを、リディは目を瞬いて見やる。その台詞にはどこか郷愁めいたものが漂っていたのだ。

「…オルディアンの後…エーデルシアスに帰る?」

だからそっと訊ねてみたのだが、勢い良くルイスは首を横に振った。

「まさか。まだ旅を止める気はないぜ。…ただ今回の事でちょっと…色々思い出させられた」

どこか自嘲気味に釣り上げられた唇に、しかしリディは何も言えない。今回アルを使者として向かわせる中で、ルイスは年に見合わない知略と手腕を垣間見せていた。それに加え今までの旅で、彼が自分と同じ貴族出身であることは解っているものの、自分とは立場も責任も違う立場にいるのだろうなと思わせられていた。

「…オルディアンは、リヒトールの森やアルシェルラ湖が有名だけど、温泉もあるんだよ」

だから話題を変える。お互い、空気を読む事は得意だった。

「…へえ。それは初耳だ」

リディの話に乗って、ルイスも表情を切り換える。それだけで二人の間に漂った過去という鎖は霧散した。

「首都レノーラの北に、ジルフェイ山地があるの解る?」

「ああ。標高はそこまでないのにやたら険しい奴だろ。それのせいでグリアンへは迂回していくしかない」

リディは頷く。前人未到とまで称されるその山地のせいで、本来ならさほど遠くないエーデルシアスの首都グリアンまでは山地を迂回していかなければならず、結果実質距離に見合わない所要時間を有している。

「ジルフェイ山地の上の方は基本雪が積もってるんだけど、その奥に最近秘湯が見つかったんだよ」

「秘湯、ねえ」

それは温泉好きにはたまらない魅力かもしれない。上手く道を拓ければ、オルディアンの新たな観光要素になるだろう。たが別にルイスもリディも、温泉好きという訳ではない。ぶっちゃけ、だから何だという話でもある。

ルイスの内心を見透かした様にリディはにやりと笑って人差し指を立てた。

「本題はここからだよ。…当然オルディアンは秘湯までの道を拓こうとした。外部に漏れないように自国民だけでね」

なぜなら、公開前の観光要素がバラされれば損害だからだ。

「そしたら、秘湯までの道のりを邪魔するのは雪と山道だけじゃなかったんだよ。…何だったと思う？」

金の眼が好戦的に煌めいた。その色に、ルイスは自然と自らの口角を上げる。

「――竜の群れ。秘湯に向かおうとしてた調査団が遭遇したらしい」

「…マジか」

ルイスも瞠目した。本来、竜は単体で行動する。と言われている。何分個体数は少なくはないと言われていても、滅多に人前には現れない種族だ。人間がまだ知らない生態系など幾らでもある。

「調査団はそのまま泡を食って逃げ帰ったらしいんだけどね。その話を聞いた後に私はオルディアンを出ちゃったから、今どうなってるかは知らない。――ただ、竜の群れともなれば」

「挑戦する奴はそうそういない、か。――面白そうだな。群れ…一

回拝んでみたいな。多分壮観だぜ」

にやりと笑みを二人で浮かべる。よしっ、とルイスが窓の桟から降り様に言った。

「決まりだな。ここ片づいたらレノーラ通ってジルフェイ山地に行くぞ。――それでいいな？」

「いいも何も、この話は私が振ったんだけどね」

くすりと笑って、リディも桟から飛び降りる。

「それと…この間、ありがとう」

ルイスは『この間』がいつを指すのか明確に理解した。軽く肩をすくめて、ぽすぽすと彼女の頭を叩く。

「気にすんな。大したことはしてないしな」

リディはフードの下で小さく笑った。あの夜で、自分が彼の体温にどれだけ救われたか、彼には分らないだろう。彼女自身、わからせるつもりはないにしても。

何にしてもその話はここで終わりだ、というのがルイスのまとう空気から察し、リディは頷いた。

それから南の空を――ゼノの首都、ダリスがある方角の空を――二人で見つめた。

「…絶対に片付けるぞ」

「ああ」

色の違う二人の瞳はしかし、はっきりと同じ決意の光を灯していた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

アルフィーノが挙兵し、国境に迫っているという報がゼノに届けられたのはその一週間後だった。王宮側は動揺し、王女側は快哉を上げた。三日前に、協力受諾の鷹文は既に届き、応じて反乱軍もダリス近くに密かに進軍していたものの、まるで蜃気楼のようだった勝機が、ようやく現実となって目の前に現れたのだ。

ここ数日で、既に民衆には噂を流してある。王がまた戦を起こそうとし、それを諸外国が阻もうとしている、と。またセレナは幽閉されていることにした。元々人気のある王女だ。民意は一気に反乱軍側に傾いていた。そこにこの挙兵の報だ。

アルフィーノの王は聡明なことで知られている。もともと自国が戴く王に不安を持っていた国民達だ、浮足立つのは当然の事だ。

「今こそ行動を起こしましょう！王も今は混乱しているはず。一刻も早くダリスを奪還するのです！」

逸る声をあげ一人の伯に、野営の本拠地に集まっていた他の騎士

や侯爵がそうだと呼応する。瞑目して思考を巡らせていたセレナが、覚悟を決めた眼で一同を見据えた。

「…ドルネイド伯の言う通り、今こそ好機です。サークレイ侯とゲネヤ伯は手筈通り先行し、民の煽動にあたって下さい」

「はっ！」

地響きを立てる勢いで二人の男が駆けだしていく。残った騎士達に、セレナは朗々たる声で告げた。

「全軍、攻撃の準備を。明朝、ダリスに攻め込みます」

地を揺るがす雄叫びが上がった。口々にセレナの名が唱和され、次いで準備に皆散る。その後の本拠地に残った巨漢に、セレナは腰を折った。

「ラーシャアルドの方々、ご支援を感謝致します」

「いえ、我らが王子殿下のお望みになった方の願いとあらば。大した事ではございません」

深々と頭を下げたセレナに、ラーシャアルドからいくらかの手勢と物資を運んできた、ユルドレイアス将軍は豪快に笑った。

その、まるで息子の嫁を見るような目にセレナは頬を赤く染める。

この将軍、アルの武術の師であり、第二の父のような存在なのだという。少数とは言え軍勢とは思えぬ速さでガート城に到着し、血走った目でアルの行方を食ってかかった姿は、まさに子を思う父のようで温かみがあったが、なにぶんその熊のような強面のせいで皆が怯えたのは余談である。

そのユルドレイアス将軍に、僅かな間にあること八割ないこと二割を狩人二人は至極楽しそうに吹き込んでいた。結果、ユルドレイアス将軍を始めとするラーシャアルドの人々はすっかりセレナを愛すべき王子の将来の妻とを思い込み、この反乱に異常なやる気を出していた。

まぁ間違いじゃないから良いよね、という全く責任感のない台詞を吐いたのはどちらだったか。

「しかしアル遅いな。もう着いてもいい頃だけど」

同じく本拠地に残っていた当の無責任な二人組は、困っているセレナにはどこ吹く風で頬杖を突いている。

「まぁ魔力温存しながら来れば一週間は見ないとな。最初は力業でやっちまったし」

行きはルイスもリディも持ちうる限りの魔力でもってアルを吹っ飛ばした。恐らく世界最高飛翔速度を持つという竜並に速く飛んでいっただろう。現実に考えればそんな業は帰りは不可能であるから、行きの倍の時間がかかっても仕方ない。

「さ、俺達も準備するか。ユルドレイアス将軍、ラーシャアルドの兵達をよろしくお願いします」

「任せておけい。貴殿らの腕前を早く拝見したいものだ」

ユルドレイアス将軍は、一目見ただけでルイスとリディを手練と判断し、それに応じた敬意を示した。当初王子の名を呼び捨てにし、あまつさえ明らかに異分子であるこの二人組にラーシャアルド兵達は懐疑的な目を向けていたのだが、将軍のそんな様を目にしたお陰

で今やそんな空気は消え去っている。フードを被りっぱなしのリディに対しては国籍を問わず皆遠巻きにしている節があるが、ルイスに対しては早くも長年の仲間であるような雰囲気すら漂っている。

「将軍こそ、余り目立ち過ぎない方がいいですよ」

苦笑して部屋を出ようとしたところで、ルイスは息を切らせた兵士と危うくぶつかりそうになった。

「うわっ」

「わっ…す、すいません！」

慌てて謝る兵士を抑えて、ルイスは彼に何事かと訊ねる。兵士は顔を輝かせてセレナに言った。

「アルフレイン王子殿下がお着きになりました！」

ガタン、と椅子を蹴立ててセレナは立ち上がり、それ以降の兵士の言葉を聞こうともせず部屋を飛び出していった。

「噂をすれば、だね」

その背を目で追いながらリディが肩を竦めた。唖然としていたユルドレイアス将軍も、はっとして巨体に似合わぬ俊敏さで駆けだしていく。

「役者が揃ったってことか」

ルイスも口の端を持ち上げて歩き出す。

（…さあ、いよいよだ）

リディも自分の中の緊張を押し隠して後に続いた。

第六話　陽と月　（8）（後書き）

リディの出奔理由は軽いです。

第六話　陽と月　（9）

第六話　陽と月　（9）

野営地の外側には、兵達が集結していた。兵数、およそ五千。
彼らを率いるセレナは、それを見つめながら唇を噛みしめていた。

（…ついに、来たのだ）

父を玉座から引きずり降ろす日が。自らが戦を率いる日が。

内心を言えば、怖い。戦で人が死ぬことも、父に立ち向かわなければならないことも。だがここで自分がやらなければ、もっと状況は悪化するのだ。諦めるわけにはいかない。

「セレナ」

閉じこめられた気持ちは、しかしかけられた声によって霧散する。振り向くとそこには、茶髪の少年の姿。彼女を助けてくれた狩人であり、実は他国の王子だった少年。けれど彼は、王子であるとかそういった事とは関係なしに、彼女と向き合ってくれた。

「覚悟は…出来てんのか？」

心配そうな声音で彼は訊ねる。その言葉が意味することを理解し、

セレナは声を詰まらせた。一瞬の沈黙の後、けれどセレナは頷いた。

「…出来ています。私の父は――もう、いないものと、思っていますから」

セレナの顔に、彼は言葉を呑み込んだ。少女のあどけなさが残る顔には、悲壮な表情と、何より強い恐怖が浮かんでいる。…本当のところでは、彼女の中で覚悟はできていないのだろう。

――でも、彼女は逃げる事は出来ない。道を踏み外した王族を罰するのは、同じ王族がやるべき事だからだ。

だから何も言わず少年はセレナを抱き締めた。

「…オレがついてるから」

少年の腕の中でセレナは小さく頷き、ぎゅっと腕を回して抱き締め返した。

「…この戦が終わったら…貴方に伝えたいことがあります」

見上げなくても、少年が驚く気配が解った。一瞬の後、回された腕に力が込められる。

「…ああ」

…この温もりを奪わせない為にも、絶対に負けられない。

「…公衆の面前でいちゃついてるよあの子達」

集う兵士達とは少し離れた所で、リディは呆れた口調でぼやいた。隣で剣の点検をしているルイスは、我関せずと言った調子で気にした風もない。

しかし、展開する兵士達はその限りでなく、白昼堂々二人の世界に入っている自分の主君に、いささか居心地悪げな空気を醸している者が多いのも確かだ。まあ、ユルドレイアス将軍はじめ、壮年をいくつか過ぎ、半ば老年に差し掛かっている将軍達が好々爺然とその様を感激しているから、まあいいかーという感じに流れているが。

壮年を超えていない者達は幾人か納得がいっていなさそうなものもいるが、それは圧倒的多数に流されている。

「アルが帰ってきた瞬間に抱きついてたからな。王族としては、政略なしは珍しい結婚になりそうだ」

言われてリディも苦笑した。

つい先ほど、アル帰還の報を受け、走っていったセレナを追っていけば、同じように走ってきたのだろうアルと、野営地の真ん中でしっかり抱き合っている光景があったのだ。ユルドレイアス将軍は感涙にむせび泣いているし、周りの兵達は視線のやりどころに困ってへどもどさているしで、かなり混沌とした情景に、驚きを通り越して呆れた。

ようやく離れたらお互い赤面して言葉がでないわ甘い空気は漂うわで、いい加減にしろとルイスとリディで割って入ったのだが。初々しいにもほどがある。

が、残念ながら自分は彼ら以下の恋愛未経験者であることにリディは気付いていない。

落ち着いてから、自分を見つめたアルの目に、リディはああ、知ったのだなと何の感慨もなく悟った。大方ヘンドリックが喋ったのだろう。

反対にアルは反応に困っていたようだが、やがて「…うん、関係ねーよな。リディはリディだし」とか何とか呟いて、リディに向かって手を差し出したのだ。

「これからもよろしく、リディ」とか言いながら。

周りが訳がわからず首を捻る中で、呆気に取られたのも束の間、彼女も笑ってその手を握り返したのだ。

アルの純粋さは、まるで陽だまりのようだ、と、この旅の間で幾度か彼の本質に触れたリディはほほえましく思う。

「…出発するぞ」

剣を収めたルイスの声に回想から引き戻されて、リディははっと顔を上げた。兵士達の前に立った小柄な影が、高々とレイピアを掲げる。時の声が上がり、兵の波が動き出した。ルイスが軽く手を振る。すると、野営地全体を覆っていた土属性の結界が消失した。

土属性の結界には、付与効果として地上における迷彩機能がある。この機能によって、ルイスは首都の兵士達の目から反乱軍を覆い隠していたのだ。つまり王宮側から見れば、反乱軍はいきなり湧いて出たということになる。さぞ混乱することだろう。

「行くぞ！！王宮を奪還するのだ！！」

ルーベンス伯の鼓舞の声は、この場の思いを凝縮したような強い響きを帯びていた。

「…さ、俺達も行くか」

動き出した兵士達を横目に、ルイスとリディは精霊を喚んだ。風が巻き起こり、二人を包んでいく。

二人の役目は兵士達とは別にある。二人にしか出来ない事だ。それを為すための布石。

「ルイス様、リディ様」

残っていたセレナが飛び立とうとしている二人に叫んだ。

「…お願い致します」

深く下げられた頭に二人は微笑み、勢い良くその場から消え去った。

―――――――――――――――――――――

風の精霊の力を借りて、残り十キロ程の距離を一気に翔る。眼下の反乱軍はあっと言う間に目に見えなくなり、代わりにゼノの首都、ダリスが見えてくる。僅か五分程で二人はダリスの上空に到着した。

「…いい具合にパニックだな」

「パニックにいいも悪いもないだろ」

見下ろす街に向かって呟いたルイスに突っ込み、リディは風魔術をもう一つ連動させる。まもなく不可視の結界が彼らを包んだ。

土属性の結界が地上において迷彩機能を持つのに対し、風属性の結界は空中において迷彩効果を成す。余談だが、水属性の結界は水場において同様の効果を発揮する。

ただでさえ遥か上空、その上に迷彩までかけてしまえば、二人の姿を視る事ができる者などこの街にはいないだろう。

なおかつ街は、ルイスが言ったようにパニックに陥っている。そ

れもそうだろう。アルフィーノ挙兵の報に動揺していたところに、突然街の近くに、軍隊が現れたのだから。

ある者は悲鳴を上げて通りを走り、ある者は兵士に食ってかかり、ある者は城壁に野次馬精神で近付こうとしているのが、上空からでもつぶさに見える。

「……」

ルイスとリディがじっと見守る先で、ある時を境に群集が一気に城に向かって押し寄せだした。

「始まった」

ルイスとリディは目を見交わして頷くと、空を蹴って城に向かって急降下した。

予めダリスの街に潜入していた反乱軍の兵士達。彼らの役目は、ゼノ王が五年前の報復でオルディアンに戦をしかけようとしていて、それに対し周辺各国が揃ってゼノに敵対姿勢を取ろうとしている、という限りなく真実に近い噂を流布する事。加えて、今度戦になれば必ずゼノは終わるとか、それを食い止めようとした第一王女を王が監禁しているとか、そういった煽りもばらまいた。結果民衆は不安感を募らせ、此度のアルフィーノの出兵と突然の軍隊の出現にパニックに陥った、という訳だ。

もし今上のゼノ王が人望厚く、王女にさほどの人気が無ければ、このような事態にはならなかっただろう。しかし民は、十年前の戦を機に、魔術師団を造り、軍事に病的なまでに力を注ぎ始めた王を不信し、若く美しく聡明な王女を愛していた。

「ひとえにセレナが頑張ってたお陰だね」

やはり混乱状態にある王城の歩哨の一角に降り立ちながらリディが剣を抜く。同時に風魔術の結界を解いた。

「ああ。父親とは雲泥の差、だなっ！」

自身も剣を抜き様、ルイスはこちらに走ってきた兵士を峰打ちで気絶させる。そして、他の兵士が来ない内にと二人は駆け出した。

「っ、流石に王城だけあって広いな」

内部に入り込み、時折鉢合わせる兵士を気絶させながら二人は走った。一応事前にセレナから大まかな城の見取り図は貰っていたが、一々見ている暇はない。一夜漬けの勢いで頭に叩き込んだそれを思い浮かべながら、ひたすら魔力の流れる方向に向かってひた走る。

二人の役目とは、魔術士団の無力化。城攻めに当たって最も厄介のが魔術士だ。騎士同士の戦いなら、不意をついたこちらに利がある。けれど鍛えられた魔術士の魔術というのは、その程度の有利などひっくり返してしまう威力がある。

ならば反乱軍にいる他の魔術士と共に、圧倒的な魔力量を誇るルイスとリディで魔術を防ぎ、反撃をすると言う手もあったのだが、七面倒臭いと二人が却下した。そんな結界を張りながら城や街に被害を出さないように細かく魔術を使うぐらいなら、城に乗り込んで魔術士達の動きを封じた方が早いと主張したのだ。

そしてその案には多数が賛成し、結果として街に潜入していた反

乱軍の斥候がパニックを引き起こした隙に、城内に入り込んで速やかに魔術士の捕縛を行うこととなった。

「近いよ」

走りながら、二人を見て悲鳴を上げかけたメイドの首筋に手刀を入れて気絶させ、リディは廊下の先を見据えた。

「…確かに、王直々の魔術士団っていうだけはあるみたいだな」

廊下の先から感じ取れる魔力にルイスはそう言い、一気にスピードを上げる。呼応してリディも加速し、そのままの勢いで廊下の先にあった大扉を蹴り開けた。

「なっ、何者だっ！？」

大扉の中はかなり広い広間となっていて、中央部分にマントを着た、所謂魔術士然とした百人程の人間達が集結して何かを話していた。見る限り、反乱軍に対して何をすべきか決めていたのだろう。

ルイスとリディが急いだ訳はこれだった。反乱軍が確認されて時間が経ってしまえば、魔術士達は城壁に散開してしまい、目立たずに無力化することは難しくなる。だから街を混乱させたのは、城の対応を遅らせて魔術士達の展開を大幅に遅くさせるという狙いもあった。その狙いは効を奏し、こうして魔術士達は未だひとところに集まっている。もう怖いものはなかった。

「大人しくしてた方が、痛い目見なくていいよ」

二振りのサーベルを閃かせ、リディは一気に魔術士達の輪に踏み

込んで峰打ちを放つ。不意の攻撃に呆気なく五人が吹っ飛んだ。

「ウェーディ、扉に結界を」

ルイスも風精霊に命令を下してから、剣を一閃させた。この剣、実は彼の愛剣ではない。彼の両手剣は両刃である為、平を使わない限り人を傷つけずに斬る事ができない。なので適当に反乱軍の武器庫から拝借した剣を用い、彼自身の剣は腰に収まったままである。

彼自身も人を殺したくはないが、こういう状況下にある以上、最悪手を汚すことも仕方ないだろうと覚悟を決めていたのだが、それをセレナは止めた。

たとえ今は敵であっても、彼らもゼノの民であることに違いはない。少しでも犠牲を抑えたい、という彼女の意を汲んで、反乱軍には出来る限り殺しはしないように、という意思が伝わっている。

「くそっ、なんだお前達!!」

瞬く間に十人以上を無力化され、焦った魔術師達はばらばらに陣形を組んで魔術を放ち始める。

その内一つの火の玉をひょいと避けながら、リディが不敵に笑って答えた。

「ただの通りすがりの狩人だよ」

「もう、ルイス様達は城に入ったでしょうか…」

アルの馬に二人乗りしているセレナが呟いた。もうダリスまでは三キロを切っている。それはつまり、間もなく戦闘が始まることを意味していた。

「ご無事、ですよね…」

不安げに見上げてくるセレナに、アルは肩を竦める。

「あの二人がその気になりゃ、二人だけで城一つ位陥とせっからな。魔術士の無力化位、訳ねえだろ。今頃遅いとか文句言ってんじゃねえ？」

アルのこの台詞はあながち嘘ではなく、ルイスもリディもこの頃には魔術士全員捕縛して暇を持て余していたのだが、それを彼らが知る由もない。

そしてあと一キロという所で、軍隊の先頭から伝令が走ってきた。

「見えました！城壁、魔術士の姿はありません！！」

「――よし」

信じていた、でも一番の不安要素を打ち消すその報にアルは拳を握りしめ、前に座るセレナに言った。

「行くぞ、セレナ！しっかり掴まってろよ！」

「――はい！」

首都ダリスの外門は目前。魔術士排除の報に気運を上げた反乱軍は、雄叫びを上げて突っ込んで行った。

――――――――――――――――――――

「あ、ようやく来た」

頬杖をついて窓の外を見ていたリディが声を上げる。ひょいと覗いたルイスも、

「やっとかよ」

と同様の文句を言ってため息を吐いた。

窓の外から見える、ダリスの街並み。街と外界を繋ぐ門では、泡を食った様子のゼノ兵達が必死の応戦をしている。が、制圧は時間の問題だ。一方の街中は、先程のパニックが嘘のように人っ子ひとりいない。これもまた、潜入していた反乱軍の兵士が、余計な混乱を避けるために避難を誘導したようだ。その速やかかつ迅速な行動には恐れ入る。

「まぁ魔術士は抑えたし。ここからは早いだろ」

ルイスとリディの足元には、百人程の魔術師が意識を失った上に縛り上げられて転がっている。また、幾度かに渡って魔術師に出動要請に来た兵士や大臣達も問答無用で昏倒させたので、部屋はまさに屍の山と言った風である。死んではいないが。

流石に一々殴り倒すのが面倒になったので、リディが火魔術の応用で幻を作り、部屋には誰もいない様子を装った。結果として城内はどこにもいない魔術師探しに奔走し、誰もこない部屋で二人は暇を持て余しているという訳である。

そうこうする内。

「あ、突破した」

僅か半刻程で街の外壁は陥落した。開け放たれた大門から、兵士達がなだれ込んでくる。城目掛けて怒涛のように迫る兵士達の後に、馬に乗った茶髪の少年と金髪の少女を認めて、ルイスとリディは立ち上がった。剣は鞘に収めたまま、悠然と部屋の外に足を踏み出す。

これまで何者も通さなかった結界は、あっさりと主を外へ解放した。

通った後も結界が維持されているのを確認して、二人はもと来た道を見据える。

「よし、行くか」

主要な役者はそろい、不要な駒は排除された。舞台は整い、残された道筋は幾本もない。

閉幕（カーテンコール）はすぐそこに迫っていた。

第六話　陽と月　（9）（後書き）

なんだかだらだらと続いてしまっています…。
次で第六話は終わりたい…。

第六話　陽と月　（１０）（前書き）

なんかいつもの二倍くらいの量になってしまいました…
読みにくかったらすみません。

第六話　陽と月　（１０）

玉座の主は、酷く焦っていた。

魔術師に命じて魔物に襲撃させ、壊滅させた筈の、娘を筆頭とした反乱軍は、何故かこのダリスの眼前に突如として現れて、街に乗り込もうと攻め込んで来ている。

今朝アルフィーノから唐突に、これ以上戦の準備をするならば攻め込む、という警告が発され、アルフィーノが事実を知っていた事に驚きを覚えながらも、対処に国境に兵を送った。しかし戦を止める気もなく、アルフィーノを抑えながらオルディアンへどう攻め込むかを案じていた所にこの状況だ。しかも、自らが手塩にかけて育てた魔術士団は、どこを探しても見つからない。

魔術士団さえいれば反乱軍など一掃できたはずなのに、外門は突然の襲撃にパニックを起こし、今にも破られんばかりだ。

「セレナエンデめ…！」

忌々しく娘の名を吐き捨て、苛々と肘掛けを叩く。

「やはり、殺しておくべきだったのです！」

玉座の側に控える大臣が、血走った目で訴えた。他の大臣達も、驚天動地の展開に右往左往とするばかりだ。

そんな主達の様子に、玉座の間の兵士達は不安を募らせていた。何故か城内の何カ所かで倒れている仲間達。敬愛する王女の謀反。魔術士達の失踪。数々の不安要素に、彼らの王への忠誠心は、とっくに揺らぎつつあった。

その時、王側にとって最悪の報せが飛び込んで来る。

「外門が破られました！」

息急ききって駆け込んできた兵士の報に、場は動揺に色めき立つ。

「こうなったら逃げますぞ、陛下！態勢を立て直すのです！」

明らかに自分の保身が隠れた発言に、しかし皆あたふたと頷く。王も苦虫を噛み潰した表情ながら、立ち上がった。

「隠し通路へ参る。兵士は我らの護衛を…」

「残念、逃がす訳には行かないんだな、王様」

苦々しさを隠さない王の声を、その場にそぐわぬ軽い調子の声が遮った。

一斉にその場の視線が扉を向く。

黒髪の青年と、フードを被った少女と思しき二人が扉の前に立ちはだかっていた。

「大人しく諦めなよ。もうじき王女達がここにやって来る。君達に

逃げ場はない」

リディが淡々と王に告げる。その横で、ルイスはこきこきと首を回した。

「魔術士は抑えたし、ここにいる程度じゃ俺達は倒せない。投降した方が身のためだぜ」

唖然としていた王や大臣達に、徐々に怒りの形相が浮かぶ。

「貴様らがまさか魔術士達を…！」

「当たり。面倒だから全部捕らえさせて貰ったぜ。城内の兵はここ以外あらかた城門に集まってるし、残りは文字通りあんたらだけだ」

す、と表情を真面目にして、ルイスは正面から王を見据えた。

「諦めろ。お前は王としての価値を失った。玉座に座るべきは――セレナエンデだ」

「わっ…若造が！！衛兵、何をしている！！捕らえろ！！」

それまで二人に気圧されるように動けなかった兵士達が、王の怒鳴り声に我に返って剣を抜いた。頭のどこかでこの二人はヤバい、という警鐘が鳴るが、この部屋には二十人以上の兵士がいる。その事に愚かにも依存して、侵入者の二人に斬りかかった。

が、結果は始めから見えていた。

「馬鹿だね、本当に」

ルイスが剣を抜くまでもなかった。リディが目にも止まらぬ速さ

で床を蹴り、三分とかけずに二十人を地に下した。

反動でフードが外れ、露わになった金の眼を冷たく凍らせ、リディは一息で王に肉迫した。

「なっ…！」

驚愕した王が逃げようとする間もなく、その腕を取って背中に膝蹴りを入れ、体の正面から大理石の床に引き倒す。そしてその背中を、動けないように膝で抑えつけた。

「ぐあっ」

「き、貴様王に何をっ！！」

「動くな」

悲鳴を上げた王に大臣達が怒声を上げるが、リディは冷えた声で刃を王の首筋に当てた。

「ルイス、そいつら逃がさないでよ」

「んなヘマするかよ」

喋るだけで全く手を出すまでもなかったルイスは、肩を竦めた。城の外の騒ぎは、徐々に近付いてきている。どの道ここにいる者達に、逃げ場はない。

「ぐっ…貴様ぁ」

対して王は、憎々しげに自分を抑えつける少女を睨み上げた。返ってきたのは、氷のような鋭さに炎の激情を秘めた視線。その視線に、王は何故か既視感を覚えた。

「本当に貴方は馬鹿だ。学習という言葉を知らないの？たった十年前の事なのに」

その既視感を後押しするように低く囁かれた声。

王はまさか、と目を見開いた。聞き覚えのある声。見覚えのある金の瞳。

「き、貴様…」

先程と同じ、しかし含む意味も色も違う声音に、ふ、と金の眼が笑みを刻む。ご名答、とでも言うように。

「言ったでしょう？　”紅蓮の炎は常に貴方達の上にある”」

「――――っ」

「愚かな王。…今度は陛下も許さないよ。私は勿論、ね」

他の人間に聴こえぬように囁かれた言葉に、ゼノ王ダグラスは全てを悟った。

セレナが父親の待つ玉座の間に着くと、そこは既に到着していた反乱軍の兵士達の他に、部屋の隅で縮こまる王側の大臣達、昏倒している近衛兵、それを牽制しているルイス、そして王を抑えつけているリディの姿があった。

「ち、父上…」
「あ、ごめん」

流石に顔を引き吊らせたセレナに気づき、リディがあっさりと王から退き、すたすたとルイスの隣に並ぶ。それによってどこか気まずい空気が漂っていた室内は、俄かに緊迫感を取り戻した。

「…セレナエンデ」

ゆっくりと立ち上がった王が、娘であるセレナを睨みつける。その憎しみの烈しさにびくっと身震いしたセレナを、彼女より広い背が庇うように前に出る。その背の主を見、僅かに王の目が見開かれた。

「…貴様は…ラーシャアルドの…？」

流石に一国の主ともなれば近隣国の王子の顔は把握しているらしかった。無表情に頷いたアルに呆然としてから、扉の前に控える少女に目を移し、不意にくくく、と王は嗤い出した。

「成程。仲間に恵まれたものだな、セレナエンデ」

ぞっとするような暗さを含んだ声に、しかし軽くアルが反論した。

「そうだな。あんたと違ってな」

「貴様！王に向かってなんというぞんざいな口を！」

王とは違ってアルの顔を知らない大臣の一人がヒステリックな声を上げた。王を擁護する事で、自らの終わりを認めたくないらしい。はっきり言って見苦しい。

だがその言葉は、アルの後ろから進み出たセレナがきっぱり否定した。

「もうその男は王ではありません」

部屋の全ての視線がセレナに集まった。セレナはしっかりと王を――父を見据えた。美しい顔は蒼白で、どこか泣きだしそうではあったが、声はしっかりと言葉を紡いだ。

「今この時をもって、ゼノの王位は私が継ぎます。そして――旧ゼノ国王、ダグラスを始め、現大臣達を謀反人として拘束します。――捕らえなさい」

絶対的な王者の威厳を纏った声に、直ぐ様兵士達は従った。玉座の前で立ち尽くす愚かな男と、壁際で聞き苦しい喚き声立てる男達が、瞬く間に兵士達によって縄を打たれていく。

玉座の間から引き出されていく際、王であった男は、王となる少女を見た。少女は彼と同じ色の瞳を、揺れそうになるのを必死で抑えながらそれを見返す。男は小さく息を付いて、広間を去っていった。かつて少女にとって、とても広いように感じていたその背は、酷く小さく映った。

その夜、セレナは一人、自室の窓の側で佇んでいた。

あの後は、目も回るような忙しさだった。父親達を捕らえたあと、母と妹と再会し、母は自身と目を合わせられない娘を何度も頷きながら抱き締め、まだ幼い妹は単純に姉と会えたことを喜んではしゃいだ。

ルイスとリディによって捕らえられた魔術士達は、ひとまず脱出禁止結界を張った部屋に閉じ込めた。あとでおいおい尋問する予定だ。

ダリスの街は勿論、ゼノの国内全てに、反乱の結果セレナが王位に着いた事を公布し、また各国にも伝令を送った。中でもラーシャアルドとアルフィーノには丁寧な感謝を、オルディアンには陳謝を添えた。

また、戦った兵士たちや協力者への慰労を含めて、城内では盛大

に宴が開かれている。セレナも先ほどまでそこにいたのだが、わずかに疲れをにじませていたらしい主の顔に目ざとく気付いたルーベンス伯によって、強制的に休むように自室に戻されてしまった。

だが眠れる気もせず、こうして窓からダリスの街を眺めている。

（父上…）

自分と同じ色の瞳で自分を憎々しげに睨み付けた父。何も言わずに何度も何度も自分の頭を撫で、抱き締めた母。まだ何もわかっていない幼い妹。

――本当にこれしかなかったのだろうか、と心が叫んでいる。父は塔の最上階に軟禁し、大臣達は牢屋に送った。しかし父はもう一生日を見る事はないだろうし、大臣達は恐らく極刑だろう。もはや王であるセレナが謀反人、と断定したのだから。数ある国、数ある法律の中で一番重い罪――それが、大逆だ。

本当にこういう形でしか戦を止められなかったのだろうか。もう二度と家族四人で過ごす事はない。まだ妹は五つにもなっていないのに、父と会うことは最早叶わない。

十年前まで、父はそれなりに良い政治を敷いていた。自分に父を超える政治が務まるのだろうか。民を失望させることがないような政治が出来るのだろうか。実力もないのに王位を簒奪した愚かな娘と謗られないだろうか。

とめどない不安が心を満たし、胸をかき乱す。夜の闇という物理的なものだけでなく心理的にも押し寄せてくる暗闇に、セレナが押し潰されそうになった時、不意に部屋のドアが叩かれた。

「…はい」

咄嗟に声を絞り出すと、遠慮がちな声が届けられた。

「オレ。…入ってもいいか？」

まだ変声しきっていない声に、セレナは慌てて己の姿を見下ろす。――が、部屋に押し込められてからこっち、ただぼんやりしていただけなので、寝間着などではなく朝からの変わりない姿でありほっとする。

「どうぞ」

答えると、ガチャリとドアが開いてアルが顔を覗かせた。その瞳が驚いて見開かれる。

「暗っ。何で何も点けてねーんだよ」

ぼやきながら、壁のスイッチ――火魔術が仕込まれていて、灯りが点く――を押そうとしたアルを、咄嗟にセレナは止めた。

「点けないで下さい！」

「…へ」

きょとんとその手が止まり、訝しげな視線がセレナを捉える。が、その表情が急に静かなものになった。無言で手を下ろし、窓際に立つセレナに歩み寄る。戸惑うセレナの体を、何も言わずに引き寄せた。

「…泣くなよ」

突然の事に息を詰めていたセレナは、その言葉にはっとした。そっと指を頬にやる。そこには確かに、湿った感触が流れていた。

「どした？」

優しい、でも不器用な声は、しかしセレナの中の何かを決壊させた。

ぽつぽつと、けれど堰を切ったようにセレナの喉から言葉が溢れ出す。

本当にこれしかなかったのか、自分は酷い親不孝者だ、自分は為政者となりうるのか――。アルはセレナのそんな心の内を、じっと黙って受け止めていた。

やがてセレナが少し落ち着くと、アルはあやすようにセレナの背を撫でて、言った。

「お前、今この街を見てたんだろ？」

「…はい」

「あのな。お前の親父がもしこのまま王だったら、この街はきっとなくなってた。オルディアンはきっともう容赦はしなかった。…アルフィーノやエーデルシアスも、見逃さなかったかもしれねえ」

ゆっくりと、アルの言葉がセレナに染み込んでいく。一つだけ年上の少年の声は、とても温かい響きを帯びていた。

「他の奴らだってそう。あの時お前が戦ってなかったら、皆死んで

た。お前は皆の命を助けたんだよ」

だから、と言葉を紡ぐ。

「お前は精一杯やったんだよ。お前の親父にはもうこうなるしかなかったんだ。生きてるだけでもいいんだぜ？オルディアンと戦したら、確実に死んでただろーしな」

言いながらアルは、アルフィーノの王に聞いた話を思い出し身震いする。

「アルフィーノの王が言ってたけどな。オルディアンは烈火の鬼姫だけじゃなくて、王太子も超強ぇんだってよ。どんな国だってんだチクショウ。…って違くて」

ああ話が逸れた、とアルはぼやき、ぎゅっとセレナを抱き締めた。

「要は、お前が後悔するような要素なんてどこにもねーってことだ。信じられないってんなら…ほら、あそこ見てみ」

アルが体を離して窓の外を指差す。その先を追って、セレナは息を呑んだ。

城のすぐ下の広場で、夜遅い時間だと言うのに、大勢の人が集まって何かを騒いでいる。その顔は遠目から見ても、いずれも楽しげで、晴れ晴れとしている。

――ずっと遠くを見ていたから、気づかなかった。

呆然とするセレナに、アルが微笑んで窓を開けると、微かに風が声を運んで来た。

「…セレナエンデ王女万歳！…」
「…新陛下誕生万歳！…」
「…ほらな？」

アルは肩を竦め、窓際から下がった。セレナは食い入るように眼下を見ている。

「皆、お前に感謝してる。誰がなんと言おうと、民が示す王は、お前だ」

セレナは涙を溜めた目で、こくりと頷いた。自然と笑みが浮かび、どっと安心感と希望が心を満たした。民に愛されている。その光景は、どんな言葉よりもセレナの心を癒やした。

「あと…お前が良い政治が出来るかって話だけど」

微かに躊躇うような響きに、セレナはくるりとアルの方を向いて、それを制した。

「事が終わったら、貴方に言いたいことがあると私は言いました」

闇の中でもはっきりとわかる程、綺麗な笑みをセレナは浮かべた。アルが息を呑む。

「…私も、貴方が好きです。どうか、この国に留まって、私と共にこの国を支えて下さい」

固まっていたアルは、やがて反則、と呟いて髪をかきあげた。少し恨みがましそうな目でセレナを見る。

「…オレの台詞取るなよ」

子供のように拗ねた口調に、思わずセレナは笑っていた。ぶすっとしていたアルは、不意に悪戯を思い付いたとばかりに笑みを浮かべる。セレナがそれに首を傾げたと同時に、ぐいっとセレナはアルに抱き寄せられ、彼女の唇に何か柔らかいものが触れた。

「……！？」

すぐに離れたその感触に、しかし彼女は事象を正確に理解して、瞬時に白い顔を赤に染め上げた。悪戯成功、とばかりにアルは笑い――ただし暗闇にセレナは誤魔化されたが、その耳は真っ赤――低い声で囁いた。

「喜んで」

月明かりの下、少年と少女はゆっくりと顔を寄せ合う。

もう少女は迷わない。
もう少年は逃げない。

まるで二人の行く先を祝うように、晴れた星空がダリスの街を包んでいた。

「こんなところにいらっしゃったのですか」

背後からかけられた声に、リディは振り向いた。夜の冷たい風が、今は長い栗色の髪を揺らして通り過ぎ、背後の男の髪も嬲っていく。立っていた壮年の男に、リディは内心で眉を寄せた。

「ルーベンス伯。どうかなさいましたか」

リディは体を起こすと、怪訝な顔をしながらも壁の内側に飛び降りて男と向かい合った。

ここは王城の、中心に聳える塔の頂点、というよりかは鐘楼の下である。少しばかり高い壁が囲むばかりのそこは、狭いが、ダリスの街を隅まで見渡せそうなほどの高さを有し、高所に脅える者ならば、まず身がすくんで持たないだろう。が、リディにそんな心配は無縁で、落ちたらただでは済まない壁の上に腰をおろしていたのだ

が。

「いえ。…ひとつ、お聞きしたい事がありまして」

リディは実際に眉を寄せた。この男が自分に話しかけてきたことは、限りなく少ない。しかも、敬語ではあるものの、対等なものに寄せる類のものだったはずだ。それが、いまや上の者への口調と化しているのは、どういうことか。

「…何でしょう」

小さく問えば、ルーベンス伯はしばし沈黙し、それから一つの言の葉を口に乗せた。

「“紅蓮の炎は、常に貴方達の上にある”」

「――――っ！」

リディは目を見開いた。その反応を視界に収めつつも、ルーベンス伯は続ける。

「“結ばれた約定が守られるなら、それは貴方達を包む暖炉の光。守られぬならば、焼き尽くす地獄の業火。――前者であることを、願ってる”」

「……」

「我々は、前者と成れたのですかな」

神妙な顔のルーベンス伯に、リディは当初苦虫を噛み潰したような顔で、だがやがて苦笑を浮かべる。

「いつから気付いて?…炎は、使わなかったのに」

ガートに魔物が襲撃をしてきた時。彼女は決して火魔術を使用しようとはしなかった。だから、気付かれまいと思っていたのに。

「ガートにいたころから、薄々は。髪の色が違うので最初は思いもせんでしたが、纏う空気や、面差しが重なり申しておりましたよ」

「…他に気づいている人は」

「おりませんでしょう。貴方のお顔を近くで拝見したのは、私ぐらいでございましょうし」

「…参ったよ。…それで、私にそれを今言って、どうする？あと二日もすれば、何も言わなくても出て行ったのに」

ふっと自嘲の色を浮かべ、リディは腕を組む。相対するルーベンス伯は、対して穏やかな笑顔を浮かべて、――深々と、頭を下げた。

「ゼノの民を代表し、心より御礼を。炎を業火とせず、我らが民を見守り、導いてくれたことを、感謝いたす。――烈火の――否、リディ・レリア殿」

リディは軽く絶句して、白髪交じりの頭を見下ろしていた。それから慌てたように姿勢をただすと、わからないんだけど、と押し殺した声で呟いた。

「なんで？私は――頭を下げられるような立場じゃない。今あなたにここで刺し殺されても文句は言えないんだ」

「殺されるおつもりもない方がよくおっしゃる」

少女は黙り込んだ。男は軽い笑い声を立てる。

「確かに十年前、私の友人達の中にも貴方に殺されたものはおりま

す――けれど、戦とはそういうもの。私は貴方を畏れこそすれ、恨んだことは一度もありません」

「……」

「そして貴方は今、確かに滅びようとしていたこの国を救ってくださった。貴方がやろうと思えば、三日で壊滅させられたものを。…ありがとうございます」

「…私は、何もしなかっただけだよ。救ったのは貴方達自身の力だ」

半ば言い訳めいたように言うリディに、ルーベンス伯は年長者の温かみをともして見下ろした。

「それでも。唯一気付いた者として、御礼を言いたかったのですよ」

「…じゃあ、…どういたしまして」

不貞腐れたようにそっぽを向く頬は、夜の闇に紛れてしまってよくは見えないが、赤いに違いない。不思議とルーベンス伯は確信できていた。

「しかし、貴方も人が悪い。潜入するならするで、狩人などと嘘をつかなくても」

「嘘じゃないよ」

冗談交じりに口にしたルーベンス伯に、リディは淡々と否定を乗せた。

「……は？」

「私は今は狩人だよ。家出中だもん」

呆気にとられる男に対し、リディはにやりと笑みを刷いた顔を向けた。それこそ本当に人の悪い笑みで、だ。

「だから間違っても国に私のこととか言わないでね。せっかく追手も撤いたんだから」

軽やかに笑いながら、リディは立ち尽くすルーベンス伯の横を通り過ぎる。あんまりそこにいると風邪ひくよー、などと嘯きながらそのまま少女は立ち去ってしまうが、男はそのまましばらく凝然と直立し。

「はあああああああ！？」

夜の町の上空に、絶叫を響かせたのだった。

――――――――――――――――――――

二日後。

「本当に、ありがとうございました」

ダリスの街の外門には、大勢の人々が集まっていた。門の外側にはずらりと兵士達が並び、それより少し外側には、新しくゼノの重臣となった、ルーベンス伯を始めとする反乱軍の中心メンバー、そして更にそこから数メートル飛び出した所には、セレナとアル。

「あなた達がいなければ、この国はきっと取り返しのつかないことになっていました」

彼らの前に佇むのは、今回の陰の立て役者と言っても良い狩人の二人。二人の協力なしにはこの反乱はありえなかった事を、この場の全員が知っている。だからこそ皆、仕事をほっぽりだしてここに集まっているのだ。

「何言ってんだ。俺達がいなくてもお前たちなら成し遂げられたさ」

しかし当の二人は軽く受け流し、短い間ではあったが、彼らの旅の同行者を微笑んで見つめた。

アルとはここでお別れだ。いったん彼はラーシャアルドに戻った後、ゼノに戻り、セレナを助けるという。その先にある報せを聞くのは、そう先の事でもないだろうな、と密かにルイスもリディも思っていた。だからここで別れる事も、寂しさは在っても悲しさは無い。

「元気で。ちゃんと勉強しろよ」

「頑張れ王配」

「…最後まで引っ張るのかよそれ！」

軽口を叩きあって、ルイスとリディはじゃあ、と手を振った。

「またいつかな。手紙は出すよ」
「セレナもまたね」

そう言って馬に飛び乗ろうとした内の一人に、アルが不意に真面目な声で言った。

「リディ。最後くらい、カツラ取れよ」

え、カツラ？とはセレナ以下ゼノの人々の心の声である。リディはというと眉を上げてアルを見――ったく、と肩を竦めた。

「悪知恵つけちゃってまあ。――ま、君の女装記念でもあるしね」
「ちょ、おまっ！」

三倍程になって返ってきた逆襲に目を白黒させるアルを余所に、リディはフードを下ろすと、勢い良く栗色の長い髪を剥ぎ取った。陽光に照らされて、肩より少し長くなった赤い髪が舞う。

「ほら、あげるよ」

セレナ以下ゼノの人々が呆気にとられている間に、にっとリディは笑ってカツラをアルに投げ、馬に飛び乗った。そこから手綱を打とうとして、ふと思い出したようにリディは振り返る。視線の先には、眩しげに彼女を見遣る壮年の伯の姿があった。

「ルーベンス伯」

赤い髪を自由な風に靡かせて、リディは言った。

「“貴方達が今の志を忘れぬ限り、紅蓮の炎は暖炉の光であると誓

う”。――また来るよ」

そうして、先に馬に騎乗していたルイスに頷いて、二人は駆け出す。

「ルイス、リディー！またなー！！」

声の限りに叫んで、二人の背を見えなくなるまで見送り、それからアルは後ろを振り返った。そこには同じような色を浮かべた無数の顔が彼を見つめていた。

「あの、アル…リディ、様は」

全員の心を代表したセレナの問いに、アルは爽やかに笑って。ルーベンス伯は穏やかに耳をふさいで。

「そ、あいつは――」

その台詞の結果として、その日一日、ゼノ王宮は機能しなかった。

「さー、待ってろオルディアン！」
「急に元気になったなお前…」

二頭の馬が荒野を駆けていく。

「この国には、来たい気持ちと、来たくない気持ちと半々だったんだけど。――今は、来てよかったと思うよ」
「――そう思えたなら、来た価値はあったんじゃないか」

ルイスは先ほどの彼女とルーベンス伯の会話から、彼女が何を背負うのかを察した。彼女があの夜苦しんでいたわけも。
けれど彼女がそれを言われてくないとわかるから、何も言わない。代わりに、いつか自分のことも話そうと思う。これからも彼女と一緒に時を過ごしていきたいから。

誰かと、見る景色、経験する事象、重ねていく思い出を共にしたいと思ったのは、彼にとって初めてだ。そういう想いに夢も希望も持ち合わせていなかった彼は、しかし今、それを何よりも大事にしたいと思いを馳せる。

（…ま、こいつの鈍感ようじゃ、言わないと伝わらないと思うが）

こっそり胸の内に芽生えた気持ちに苦笑して、ルイスは蒼穹を見上げた。

この国にはまだ何もない。それこそ、他の国にあって当たり前のものが、何も。けれどあの二人が一つ一つ積み上げていくだけ、未来は広がるのだ。

何もない、という事は逆に、何にでもなれる、という事だ。これからこの国がどんな道を歩むのか。それはただ、二人の若者にかかっている。

「がんばれ」

最後にそう、遠くなった城を振り向いて呟き。
祈りと願いを胸に、ルイスとリディは手綱を打った。

痩せた土地で、それまで何の特産物もなく、他国からの支援の有無で景気を左右されていたゼノは、新たに発見されたユーダ山脈のミスリル鉱脈により、急激な発展を遂げ始める。そのうちユーダ山脈だけでなく、その近隣の山地や、新たに東にも鉱脈が発見され、数年後にはエーデルシアスに次ぐ資源大国とまで呼ばれるようにな

った。

そのゼノの玉座に座る女王と、献身的に女王を支え、やがて生涯を共にすることとなる異国の王子とを、人々は尊敬をこめて後世、こう呼んだ。女王は、その美貌と穏やかさから。王子は、その明るい笑みと、どんな者の心も照らす温かな心から。

『陽と月の名君』――と。

第六話　陽と月　（１０）（後書き）

…分けた方が良かったかもしれないと思った。
第六話にお付き合いくださり、ありがとうございました。

後日談をあげたら、キャラ紹介を書きなおそうかと思います。

第六話　後日談（前書き）

ＰＧ－１２…？

かもしれませんが、大したものではないと思います。たぶん。

第六話　後日談

第六話　後日談　ある日ある国の閑話

手元に届いた報告書を見て、男はため息をついた。白味の強い長い金髪が、緩く後頭部で結ばれた髪紐から一房滑り落ち、白皙の頬にさらりとかかる。男の端麗な憂い顔も相まって、それはあたかも一枚の画のようですらあった。

「セレナエンデ王女が即位…か…戦争にならなくてよかったね…」

「そうですね。もしそうなった場合一番苦しむのはあの子ですから」

男の呟きに答えたのは、赤みがかった金髪を無造作に左右で結い、それを首でまとめている女だった。眼鏡の奥に隠された金色の眼は思慮深く、しかし無表情に男の持つ書類を見眇めている。

「それに、ラーシャアルドの王子が婿入りか…まあ、情勢的には妥当なところかな…」

「政略結婚ではないと聞いていますが」

律儀な女の反論に、男はそう、と興味もなさげに書類を机に放った。パサリとめくれて折れかけた白い紙を、女は手にとって直す。

「しかし、セレナエンデ王女殿下はまだ御年十四と聞き及んでいま

す。そのような幼い身で、王位の簒奪をしてのけた強さは、驚嘆に値すべきと評価しますが」

「そうだね…まあ、裏で手伝った子がいたみたいだけど」

後半の呟きは、小さすぎて女の耳には届かなかった。その為女は無表情の中にも怪訝な色を浮かべたが、男はそれ以上そのことを言及することなく、ふうと細く息を吐き出した。

「そういえば、まだ見つからないのかい？エリアは」

「…ええ、まだ。それにいい加減言い飽きましたがヴィー、その名で呼んでも誰だか分りません」

「君はわかってるからいいでしょ」

男はくすりと笑い、しなやかな両腕を組んで上に差し上げ、猫のように伸びをした。長く座っていたせいで、体のあちこちから変な音がする。偶には体を動かしたいものだ。

「エリアがいないと体が鈍って困るね…。ねえクロナ、ひとつ」

「お断りします。私は武闘派ではありません」

すげない拒絶に、ええー、と男は年に似合わぬ駄々めいた批難を漏らすが、女は直接的にそれに返すことはなく、畳みかけるように言う。

「ちなみにクリフもユーリも家を空けておりますから、そちらも無理です。偶には騎士の鍛錬に参加されてはいかがですか」

「…君は頭が切れすぎるのが癖者だね…」

要求しようと思った事を、口に出す前に却下された男は、半眼になってぼやきを投げるが、女は堪えた風もなく打ち返した。

「それが私の仕事ですが、何か？文句が御有りなのでしたら、今度からお仕事のお手伝いは遠慮させて頂きますが」
「……」
藪を突いて蛇を出してしまった。
「クリフは貴方の代理で出かけましたし、ユーリも似たようなものです。本来なら仕事はもっと多かったはずなのですから、残っているもの位こなしてください」
淡々とした口調に、しかし男はぐうの音も出ない。まあ、だからと言ってそれが心に響くものという訳でもないのだが。
「では、失礼します」
黙り込んだままの男に、女は無表情を崩さぬまま軽く会釈して、踵を返す。
が、その細い腕を、見た目は繊細な、しかし実際は確りと筋肉の付いた男の手が掴む。
「――ヴィー？」
「ねえ、クロナ」
にっこりと、端麗な男の顔が笑む。蒼紫の眼が、濡れた色を伴って女の金の眼と合わさった。
「体を動かすなら、鍛錬じゃなくてもいいだろう……？」
女は眼を瞬き――深く長い溜息をついた。

「それは……命令ですか？」

女の問いに、虚を突かれたような顔をした男は、しかしすぐに艶やかに口元が弧を描く。

「そうだね。――命令だ」

彼女が緩慢に、掴まれていない右手で己の眼鏡を外し、机に置くなり、男の左手が女の項（うなじ）に伸び、引きずり寄せた。ふわりと風が揺れ、開け放たれて昼の陽ざしをさんさんと差し込ませていた遮光幕（カーテン）がゆるりと閉ざされる。

たちまち薄暗くなった室内で、それでも明るい男の金髪に縁取られた顔を零距離で眺めた女は、唇の奥への侵入を許したのを契機に眼を閉じる。

眼を閉じる前に思い出したのは、行方知れずのあの娘（いもうと）。

（…あなたは今、どこにいるの…）

無事だといいのだけれど。

一瞬だけ脳裏を占めた思考は、しかしすぐに目の前の熱に居場所を奪われていった。

第六話　後日談（後書き）

…短いですね。ごめんなさい。
ここの二人も、そのうち本編に出てくると思いますが、予定は未定
…

登場人物紹介（前書き）

前のを改正しました。
以後、ここに加えていきますので、ネタばれにご注意ください。
本編第八話（３）読了後にお読みいただくことをお勧めします。

登場人物紹介

＊ルイス・キリグ（本名：ルイシアス・アレシウス・ロウ・キリグライト・エーデルシアス）
１９歳、狩人（ハンター）。黒髪蒼眼。１８２ｃｍ。エーデルシアス第二王子。『氷の軍神』
魔術属性：水（アイシィウェーデアースエイシア）、風、土
使用武器：両刃剣
能力：剣士、魔術士、治療術士

＊リディ・レリア（本名：リディエーリア・リィ・オルディアン・エルクイーン）
１７歳、狩人（ハンター）。赤髪金眼。１６９ｃｍ。『烈火の鬼姫』
魔術属性：火（フレイアウェルエサシディルナ）、風、雷
使用武器：双剣
能力：魔術士、剣士、治療術士

＊アル・カーラル（本名：アルフレイン・ウグリス・ロウ・カーラント・ラーシャアルド）
１５歳、ラーシャアルド第三王子。茶髪に空色の眼。
魔術属性：風、雷、土
使用武器：片刃剣
能力：剣士、治療術士、魔術士

＊セレナエンデ・リィ・ネフィルス・ゼノ
１４歳、ゼノ女王。白金髪紫眼。
魔術属性：風（ブラスティア）、水
能力：治療術士、魔術士

＊シルグレイ・イドリナ・ロウ・マキュロイ・アーヴァリアン
２３歳、アーヴァリアン王弟。銀髪紫眼。
魔術属性：火（フィアル）、風
使用武器：エストック
能力：魔術士、剣士、治療術士

＊ヘンドリック・フィルガ・ロウ・エルクイーン・アルフィーノ
２４歳、アルフィーノ国王。赤金色の髪に金眼。
魔術属性：水、雷
能力：魔術士、剣士、治療術士

＊ラグ・ルガンナ・シューベルト
１７歳、オルディアンの国家機密。白髪赤眼。
魔術属性：水（アクアメイン）、風、火、土、雷
能力：魔術士、治療術士

＊ジョン・イーデル
３０歳、狩人。『ノナ』リーダー。
使用武器：両手剣
能力：剣士

＊セティスゲルダ
不明、魔族。黒髪黒眼。『闇の王』
魔法属性：闇
使用武器：不定
能力：万能

登場人物紹介（後書き）

既出で、これからも登場予定の人たちを中心にあげました。以後、ここに加えていきます。

第七話　神の愛し子　（1）

ゼノを北へ抜け、山地を越えた先は、ユーデルシア大陸の三大国家の一であるオルディアンが広がっている。

オルディアンは別名、水と森の国、と呼ばれている。国土の三分の一以上を森が占め、特に西側には、リヒトールの森と呼ばれる大陸最大の樹海が広がり、その森で膨大に蓄積された雨水は、地下水となって東へ、つまり低地へと流れていき、オルディアンのほぼ中央に位置する巨大な湖、イルリア湖を介して無数の川へと水を送り、豊かな国土を形成しているのだ。

鉱物資源などはないが、一次産業が大陸内でも群を抜いて栄え、その自然の美しさからラーシャアルドに次ぐ観光産業の発展を見せている。

「で、ここが首都リオーラ」

ルイスを振り向いて、リディが楽しそうに笑った。

オルディアンの首都リオーラは、『水の街』として有名だ。白亜からなる建物が広い街に整然と並び、街の随所に渡って余すところなく水路が張り巡らされ、澄んだ水が流れている。

王城はやはり白亜の石を細部まで彫刻し、繊細で美麗な造りで、街の荘厳さをより一層際だたせている。その様は街と共に、その風

景だけでも観光要素だと称えられている。

オルディアン国民にとって、この首都を始めとした自国は、誇りなのだろう。それは例外なく、連れの少女も同じであるようだ。

前にも来たことがあるとは口に出さず、ルイスは素直に感嘆の声を上げた。まあ、こうしてじっくり街を観光するのは初めてだから嘘ではない。

「綺麗な街だな。なんか洗練されてる感じがする」

「何代か前の陛下が大改築したんだって。その時の借金がまだ残ってるとかないとか」

ゼノにいる時は全く見られなかった彼女の赤い髪は、しかしここでもフードに隠されている。まあ、彼女にとってこの国は故郷だし、その判断は正しいと言えるだろう。彼女の髪は、赤い髪が多いオルディアンの中にあっても、ひと際鮮やかで目を惹くのだ。一般のオルディアンの人々の髪を朱色と評せば、彼女の髪は真紅とすら言える。

「ルイス、何か買いたいものある？」

「飯」

「…言うと思ったよ。来て、おいしい店知ってるから」

即答したルイスに半眼を向け、しかし弾んだ足取りで通りを歩く少女は、久し振りに年相応に見えた。

リディに案内された店で、リディが頼んだ食事は確かにどれも美味だった。その割に値段も安く、舌鼓を打ったルイスはお代わりまで頼み、二人の前にはいつものように幾枚もの皿が積み上げられている。無論半分以上はルイスのものだ。

「で、本当にこれからどうする？ジルフェイに登るなら、それなりの準備をしないと。装備も少し頑丈にした方がいいと思う」

骨付き肉をかじりながらのリディの問いに、ルイスは一度食事を採る手を休めて顎に手をやる。

「そりゃあな。下手したら竜と戦る羽目になるかもしれねえし。…そんなことにならないに越したことはないけどな。差し当たり脛当てと篭手を新調して…後は鍛冶屋に行きたい。剣を見て欲しい」

「妥当だね。私も手袋をケドン革に換えるか…剣は行き着けの鍛冶屋があるから、連れてってあげるよ。この間研いで貰ったけど…大分斬ったしね。私も研いで貰おう」

骨付き肉を食べ終えてリディは水を飲む。その顔にルイスは胡乱げな目を向けた。

「…大丈夫なのか？」

「ああ、平気。おやっさんは告げ口とかするタチじゃないし」

主語も何もないルイスの言葉を正確に理解してしかしあっさり流し、リディは笑った。その意味をルイスは数時間後に知ることになる。

食事を終えて狩人協会で、狩り溜めた核を換金すると、かなりの額が手元に残った。まあそれはいつもの事なのだが、この一年で溜まった額に、リオーラ狩人協会の主は呆れ顔だった。曰わく、普通の狩人が五年かけて集まる額を一年で稼いでいると言うのだ。が、他の狩人パーティが魔物と遭遇しても、適わないと判断すれば逃げる事があるのに対し、出遭う端から狩っていけばこうなるだけの話だ。

それに、狩人と言っても格差がある。『普通』の狩人と、ルイスやリディのような『トッププハンター』達は稼ぐ額も実力も大幅に違うのだ。ルイスやリディの稼ぎは、『トッププハンター』の中ではあくまで『普通』に入る。世の中には幾らでも強い人間がいるのである。

閑話休題。

次に二人は防具屋に赴くと、当初言っていた通りにルイスは篭手と脛当て、加えてブーツと外套を新調した。リディも指貫長手袋を、革素材の中では軽いながらも最高峰の頑丈さを誇るゲドン革に換え、ボロボロになっていたストールの代わりに、魔術抗力を持つという布を買い、ルイスと同じく外套を新調した。

財布の中身を大分軽くし（と言っても貯金しているので問題はない）、二人は一路リディの行き着けという鍛冶屋に向かった。

「…て、なんかやたらと奥だな？」

大通りから外れ、建物の奥の路地を迷いなく進んでいくリディに、ルイスは声をかけた。これまでに細い路地を何度曲がったことか。方向感覚にちょっと自信のない人間なら、とっくに道を失っていてもおかしくない。アルあたりならとっくの昔に迷子コースだろう。

「安心して。変人だけど腕は確かだよ」

「へん…」

それってどうなんだろうか…と限りなく微妙な顔付きになったルイスを余所に、えっと確かこっちだったかな、とか言いながらリディは一際狭い路地を曲がり、

「あったあった。ルイス、着いたよ」

にっと笑ってルイスを振り向いた。

ルイスはリディの示す扉を見て、ますます懐疑的な視線になるのを止められなかった。何しろその扉と来たら、この白亜の街にあわないボロい木で出来ていて、辛うじて脇の壁から『ジェインの鍛冶

屋』と書かれたやはり木製の看板がぶら下がっているだけである。

が、ルイスのそんな様子に構わずリディは扉を開け、「おやっさん！」と声を上げてそのまま中に入っていく。ルイスも仕方なくそれに続いたが、中は案外普通の鍛冶屋だった。埃っぽいことを除けば、だが。

そして中では、中年の男が新聞を読んでいた。入ってきた二人に、男は胡乱げに目を遣ってくる。

「なんだ？お前さんら」

「久し振り、おやっさん。相変わらずみたいだね」

が、その表情は笑いながらフードを取ったリディを見て一変した。黒の目が丸まり、ばさっと手から新聞が落ちる。

「お、お前さんは…」

わなわなと手を震わせたかと思うと、突如その男はうおおおー！！と奇声を上げながら二人に突進してきた。

余りの勢いにぎょっとして、思わずルイスは剣に手をかけたが、リディはひょいと体の向きを変えただけだった。そしてそれは正しく、リディが向きを変えた事によって出来た空間に男はダイブし、そのまま凄まじい音を立てて入り口の扉に激突、なおかつドアを破壊してごろごろと転がっていった。

「お、おいリディ！？」

「大丈夫。おやっさんの生命力はゴキブリ並だから」

転がっていった男を一瞥すらせず室内に足を進めたリディと外の男を、交互にルイスは見比べたが、リディの言葉通り心配は杞憂だった。

先程よりも薄汚れているものの、大きなダメージを追った様子もなく男が駆け戻ってくる。

「りりりりリディ！！おおお前今までどどどこで何を！！！！」

「んー、諸国漫遊？」

駆け戻ってくるなり再びリディに突進していった男の顔を、リディは床に落ちていた新聞を広げながら、持ち上げた左膝で受け止める。

ゴンっ、という音にルイスは最早呆気に取られて立ち尽くすことしか出来なかったが、男は数歩よろめいただけで踏みとどまり、ふふふふ、と不気味な笑いを零す。

「か、変わらないようだなリディよ…！相変わらずの強くて美しい姿、安心…」

不自然に言葉が途切れる。なんなんだ！？と慄きながら見つめるルイスの先で、男はリディを凝視したままぶるぶると震え、三度、彼女に絶叫しながら飛びかかった。

「そそそその髪はどうしたーーー！？そそそんな短く切っ――――」

そして三度目は、リディの目を向けすらしないハイキックをもろに側頭から食らい、「げふぅっ…！」という呻き声と共に、再び、

今度は家財道具を幾つか巻き込みながら、店の外へ吹っ飛んでいった。

ああ、だからこの店の扉はあんなにもボロいのだな、とルイスは最早現実逃避を始めた頭で思った。

「改めて。ルイス、紹介するよ。この人は鍛冶屋のジェイン。ジェイン、こっちはルイス。私の仲間だ」

「はあ…」

「うおう!?リディにも全く負けてない美しさ!!お前さん、なにも…」

「黙る。話が進まない」

初めてルイスを認識したのか、せっかく落ち着いた所に再度奇声を上げかけたジェインの腹を、容赦なくリディは肘で打った。

結構な勢いだったのだが、ジェインは「おうっ…!」とか呻いただけで倒れもしなかった。リディ曰わくの「ゴキブリ並の生命力」とはあながち間違いでもないらしい。

「ふっ…相変わらずいいキレだ…!」

「はいはい。おやっさん、早速だけど私の剣とこいつの剣、研いでくれる？」
「お前さんのはいつもとして…こいつはお前の何だ？」
年頃の男女にしてみれば際どい問いであるが、リディには効をなさない。
「言っただろ。ルイス・キリグ。狩人（ハンター）で、私の旅の仲間だ」
「ほーう…って、おおお前さん狩人なんかやってたのか！？そりゃお前さんなら楽勝だろうが…お前さんが他人と組むとはねえ」
「成り行きでね。でもルイスは剣術は私より強いよ」
ほう、と唸ってジェインがルイスを見つめる。その目に先程まで奇天烈さは見あたらず、どこか品定めめいた色が宿っている。
「お前さん、その剣見せてみな」
不意にジェインがルイスに要求し、ルイスは一瞬躊躇ったものの、素直に鞘ごと剣を渡した。剣を他人に渡す、というのは剣士にとって少なからず恐怖を覚えるものだ。しかし、これまでの会話でリディがこの男を信頼しているのは解っていたし、自分を見つめた目は、一流の職人を思わせたからである。
「ふむ…」
ジェインはルイスの剣を一度じっくり見つめてから、ゆっくりと鞘から刀身を引き出した。シンプルなようでいて芸の細かい鍔を見、刃を見てその目が細まっていく。
「…お前さん、ひょっとしてエーデルシアス出身かい？」
ルイスは少なからず驚いた。まさか剣を見られただけでそこまで

見抜かれるとは思っていなかった。そのルイスの様子をジェインは肯定と受け取り、

「この特徴的な金属加工はエーデルシアスの秘伝だからな。それに最高級のミスリル。使い手の重心に合わせたバランス。リディ、お前さんのと並ぶ一級品だぞ」

「そんなことわかってるよ。てかさり気なく自分の作品の自慢するな。はい、私の」

ジェインはリディの剣も受け取って眺め、渋い顔をした。

「お前さん少し前に研がせたろう」

「よくわかったね。でもその後魔物凄い数斬ったからちょっとね。ジルフェイに登るなら不安要素は削っておきたい」

ジェインの顔は見物だった。

丸い黒い瞳が、きょとんますます丸さを深め、ついでざあっと音が聞こえる程の勢いで、痘痕の浮いた顔から血の気の引き、色が赤から青、紫から白へと目まぐるしく変化。

果てにはわなわなと唇を震わせ、

「おおおおおお思い留まれリディィィィィ!!死ぬくらいならワシの」

「早とちりしてんなよ色ボケオヤジが」

飛びつこうとしたリディに、渾身のアッパーカットを食らった。

（…もうツッコむのやめよう…）

視界の隅でのたうち回る姿を捉えながら、いい加減諦めたルイスは、店の主人に黙ってテーブルの上を片付け始めたのだった。

気を取り直して。

「しかしお前さんら、なぜわざわざジルフェイに？あそこは今」
「知ってるよ。竜の群れがいるんだろ？」

ルイスによって綺麗に片付けられ、コーヒーまで淹れられた卓で、三人は比較的穏やかな会話をしていた。だがいつ均衡が崩されるかわかったものではない、とルイスはティーソーサーごと持ち上げて飲んでいる。

「何のことはない、只の興味だよ。単独行動が常と言われている竜が徒党を組んでるなんて、普通じゃない。上手く行けば上位竜だって見られるかもしれない」

金の眼を輝かせるリディには、間違いなく好奇心しかない。付随する危険など二の次だ。

「…好奇心は猫をも殺す、と言うぞ」
「おやっさんからそんなマトモな言葉が出るとは意外だね」

渋い顔のジェインだが、リディにはさして堪えた風もない。額を抑えて、ジェインはルイスを見た。

「お前さんも。いいのか？竜だぞ。好奇心だけじゃ割に合わん」

しかし、ルイスはカップから唇を離すと、にやりと笑った。

「狩人は冒険者なんだ、オヤジさん」

そして冒険者の最大の行動理由は好奇心、だ。

「……」

ジェインは天を仰いだ。

なんて事だ。ただでさえトラブルメーカー、好奇心から首をつっこんでは厄介を背負って帰ってきて、しかし全部力ずくで解決してしまうのがリディなのに、それと組んでいるのが全く同類の人間だなんて。誰が止められるというのか。否、誰も止められない。

泣きたい。いっそ号泣してもいいだろうか。

うっうっと目元を抑えて俯くジェインに、しかしリディは気にも留めずに言った。

「てわけで、研磨よろしく。二日あれば君ならできるだろ。明後日の朝取りにくるから」

後光が見えそうなイイ笑顔でのたまったリディに、ルイスは

（鬼だなコイツ…）

とカップの中身を飲み干しながら、内心で呟いた。

そして二人は立ち上がって、そのまま出て行こうとしたのだが、沈んだ声が呼び止める。

「よぉく解った、お前さんらにゃ何言っても無駄だって…。けどリディ、交換条件と言っちゃなんだが…せめてラグ連れてけ」

「……え」

「ラグ？」

驚いた顔になったリディに、ルイスは首を傾げる。どうやら人名のようだが、話が見えない。

「お前さんら二人と、ラグがいれば、万が一にも死ぬ事はないだろう。それにラグは今旬のものなら着いてくだろうよ」

「まぁそれは…確かに」

驚いた顔をしながら相槌を打った彼女に、ルイスはますます首を傾げた。旬…とは恐らく竜の事だろう。生態系に興味があるなら、それは研究者なのだろうが…死ぬ事はないとはどういう事だろう。

「わかった。行ってみるよ」

だがリディの中では何かしら完結したようだ。首肯すると、ルイスに顎をしゃくって、今度こそ店を出た。

「で、誰だ？ラグって」

「私の幼なじみ」

再び曲がりくねった路地を進む。行きで大体道筋を覚えたルイス

は、今度はそこまでの不安なしにリディについて行く。

「幼なじみ？」

「うん。今は研究者やってる」

「…研究者？」

「そ。でも魔術士だよ。ま、行ってみれば解るよ」

第七話　神の愛し子　（1）（後書き）

第七話です。ジェインさんは紙一重の変態です。

第七話　神の愛し子　（2）

リディが彼を案内したのは、リオーラの街の、割合端の方に位置する屋敷だった。一般庶民よりは大分大きいが、貴族にしてはこぢんまりとしているな…というのが第一印象である。おそらくは中級貴族だろう。

さて入るか、と門に歩き出そうとしたルイスを、リディは呼び止めて、屋敷の側面まで移動した。曰わく、「正面はマズい。あれは解けない」とのこと。意味不明だ。

「じゃ、やりますか」

塀を見上げて指を鳴らしたリディを、当然ルイスは慌てて止めた。

「おい、やるって何を!?まさか不法侵入する気か!?」

「だって正面突破なんて、流石に無理だよ。私だけだったらともかく、ルイス結界解読なんてしたことないだろ?」

「…結界解読?」

鸚鵡返しにルイスは訊ねた。

「結界破りじゃなくてか？」
「まぁ本質的にはそうなんだけど。言ってみれば一時解除みたいな。勿論そのまま破ることも出来るけど」
「なんだそれ」

他人が張った結界を破る方法は2つある。

一つ、使用者の魔力切れを待つこと。

二つ、外から強制的に結界の効力以上の負荷をかけて、結界を無効化、つまり破壊すること。

前者は所謂持久戦であり、使用者の魔力が空になってしまえば、保持は不可能。言わずもがな結界は完全に消失する。

後者は所謂力比べであり、対抗者は莫大な魔力を要するが、結界に対して、保持不可能な圧力をかけるのだ。風船が抱き締めれば割れるのと同じ原理で、形から崩壊する。

つまり、一度破ってしまえば、その結界はもはや効力を発揮する事は出来ず、消える。しかし、一時的に無効化するなどという話は、聞いたこともなかった。

「ていうか、この屋敷、結界なんて張ってあるのか？」

屋敷を見上げてルイスは呟いた。確かに門には門番らしき者はいなかったが、中からは人の気配がした。貴族の屋敷なら当然だし、綺麗に手入れが行き届いているのを見ても、決して人が少ないということはないだろう。そこにわざわざ乗り込む強盗はいないし、結

界の必要性は感じないのだが…。第一、住まいに結界を張っているのは、王族ぐらいな筈なのだが。

「そうだね…じゃルイス、ちょっと魔術で攻撃してみて」

「は？」

「そしたらわかるよ。いいから遠慮せず」

ルイスはかなり躊躇った。リディが言うとはいえ、対象は民家だ。精霊は封印しているとはいえ、方向を間違えれば間違いなく倒壊させてしまうだろう。しかしリディは無情に催促した。

「平気だよ。ほら早く」

仕方なしに腹を決め、水精霊を呼ぶ。軽く屋根を傷つける程度の威力に調整して、ルイスは氷の刃を放った。

――――が。

「は！？」

それなりの速度を有して飛んでいった氷刃は、塀を超えた瞬間、パキィンと澄んだ音を立てて砕け散った。砕片すら残さず失せた魔術の産物に、ルイスは呆然と立ち竦む。

「今回は消失か。前は反射だったけど…さてどうしようかな」

硬直するルイスの傍らからひょいと顔を出し、リディは顎に手をやる。

「…リディ」

「なに？」
「お前俺で試したな？」
「うん。ごめんね？」
「……っ」

（絶対悪いと思ってないコイツ…！！）

ぶるぶると拳を握り締めて、ルイスは殴りたい気持ちを抑える。
リディは彼を意に介さず思案していたが、よし、と頷くと、軽く跳躍して塀に飛び乗った。

「ルイス」

呼ぶ声に応じて、気持ちを切り替えたルイスも彼女の隣に着地する。
そうして気付いた。

「なんだ、これ…」

下からは見えなかったもの。結界が、塀より少し内側に、ぐるりと張り巡らされていた。近くで見ないと気づかない、でも気づいてしまえばその存在を無視できない、複雑怪奇かつ強固な結界だった。

「安心して。こんなもの作れるの、多分ここに住んでる馬鹿しかいないから」

言いながら、リディは小さく精霊を喚んだ。火、風、雷そして聖の魔術が彼女の手に収束する。
何をする気かと見守るルイスの目の前で、リディは魔術をまとわせた手を結界に押し付けた。

「な…！」

驚愕したルイスが、先程の事を思い出して慌ててリディを引き戻そうとして、はたと気付く。

リディの手は、先程の彼の氷刃のように消失してはいない。結界に触れ、そしてまるで水の中に手を突っ込んだように、揺らいで見えているだけだ。

「えーと…あったあった。ここが火で、あっちが雷…で不可視…で破壊…」

ぶつぶつ呟きながらリディが結界に触れていると、結界が奇妙に歪み始めた。しかも、リディが手で触れている部分を中心にした、小さい範囲でだ。

「リ…」

「…っし、ルイス、飛び込んで！」

話しかけようとした刹那、結界に穴が開く。リディの命令に押され、取り敢えずルイスは穴に身を投じた。

浮遊感は一瞬、すぐに両足が柔らかい芝生を捉える。遅れてすぐ隣に軽い着地音と共にリディが降り立った。ルイスは自分達が通ってきた結界を見上げる。魔力を込めて見上げてようやく可視できるそれはしかし、今しがた自分達が通ったにもかかわらず、滑らかな壁を保持し続けていた。

「…今のは…」

「結界解読。あとで教えて上げるよ。結界破壊にも応用利くから」

言外に質問は後だ、と告げてリディは歩き出す。内心が疑問でいっぱいになりつつも、ルイスもそれについていった。

人気のない庭を歩く。まばらに人の姿は伺えるのだが、注意していれば避けるのは簡単で、あれだけ強固な結界のあとだと、なんだか拍子抜けする。

「…慣れてるんだな」

迷いもせず歩いていくリディに、ルイスがそう問えば、

「よく避難しにきてたから」

と肩を竦めた。

(避難ってなんだ避難って)

ところどころ廊下も抜けながら、やがて二人は屋敷の北にある一室に着いた。しかし、リディに言われなければルイスは全く解らなかったほど、扉は質素で、とても貴族の部屋とは思えない。

「ここか？」

「ああ」

頷いて、リディはドアをノックした。

――返事はない。

「さてはまた寝てるなあいつ…」

ぶつぶつ呟きながら、リディは遠慮なしにドアを開けた。開けた視界の光景に、ルイスは呆気に取られた。

「なんて本の数だ…」

扉からすればかなり広い室内は、しかしうずたかく積まれた本に占拠されていた。しかもよく見れば、天井までの高さがある本棚にぎっしりと詰め込まれた上でだ。

「また増えてるよ、これ…」

リディもさすがに呆れたらしい。手近にあった本をぱらりと捲り、溜め息をついた。

「思った通りだ。今のあいつの興味はやっぱり竜か」

ジェインのはアタリだな、と半ばぼやくように言って、リディは声を張り上げた。

「ラグ！起きろ！久しぶり！」

しばらく何の反応もなく、外で小鳥がチュンチュンと鳴く声だけが響き、ルイスが「…いないんじゃ…？」と言いかけた時、ごそっ、ドサッという音と共に、少し先の本の山が崩れた。ゴンッ、という音も同時。

「いっ…」
「いたいた」

痛そう、と顔を歪めたルイスとは対照的に、リディは苦笑してそこに近寄る。そして短く「ウェーディ」と喚んだ。

穏やかな風が巻き起こり、ふわりと数冊の本が浮かぶ。浮かんだ本を適当に積み上げ、リディはルイスを手招きする。

ルイスが躊躇いながらも寄ると同時に、むくりと本の山の間から白いものが起き上がるのが見えた。

「ラグ、起きた？」

リディは腰に手を当てる。ルイスも並んで、ようやく彼女が話しかけている相手を視界に捉える。

真っ白い髪はくるくると天衣無縫に跳ね、肌はリディよりは濃いものの白。大きめの赤い眼は、夕焼けを思わせる。白衣に包まれた華奢な体つきは、しかし直線を描き、健康な少年で在ることを示している。

丸い眼鏡の奥のその眼が、ぽわんとしながらもリディに焦点が合

い、軽く見開かれた。

「…リディ？」

「久しぶり、ラグ」

二年ぶりに会う幼なじみに対し、リディは笑顔で手を差し出したのだった。

「…へぇ、狩人なんてやってたんだ…まぁ、君らしいといえば君らしいよね…」

辛うじて生き残っていたテーブルと椅子に座ってお茶を飲みながら、彼、ラグ・ルガンナ・シューベルトは呟いた。

「…それで彼と…男の人と旅なんて、びっくりだよ。まぁ成長したってことかな…」

「…ラグ」

「改めて。僕はラグ・ルガンナ・シューベルト。魔術師兼研究者。君は…？」

リディの低い声音をあっさりと流し、ラグはルイスに首を傾げた。彼を眺めていたルイスは、はっと我に返って悪い、と頭を下げてから名乗る。

「俺はルイス・キリグ。狩人だ」

「ふうん…リディと同じか」

赤い眼は茫洋としていて、感情が読めない。後半は意味深に聞こえた今の台詞も、彼が意図してそうしたのかは解らなかった。

「で、リディ。一年近くも行方を眩ましてたのに、どうしたの…？」

「まだ眩ましてる最中だよ。今日来たのは、ラグが興味ありそうな話があるからだ」

「…へえ？」

赤い眼が煌めく。それを見ながら、雪兎みたいなやつだな、とルイスはかなり失礼な感想を抱いた。

「なに。君の持ってくる話はロクでもないのが大概だけど、期待は外さないんだよね…」

「お褒めに預かり光栄だよ」

にやりとリディは笑って、話し出した。

「実はさ。私達、ジルフェイに登ろうと思ってるんだ」

赤い瞳が見開かれた。僅かに探るような視線をリディとルイスに向けてから、ラグは息を吐く。

「…本気？」
「本気。だからお誘い。君も来ない？」
「…全く、君には参ったよ…」

ラグは紅茶を一気にあおると、首を傾げた。

「出発はいつ？」
「明後日の朝」
「なら、その時屋敷の前に来て」
「わかった。じゃあ、明後日」

席を立ってラグに別れを告げ、部屋を後にしながらルイスは知らず詰めていた息を吐いた。それを横目で見、流石だね、とリディが歩きながら囁く。

「微塵も動揺を出さなかった魔術士は、君くらいだ」
「…必死で堪えたさ…」

ゆっくり深呼吸して頭（かぶり）を振り、ルイスはひたとリディと目を合わせた。

「あいつ、何者だ？あんな魔力…尋常じゃない」

ルイスがラグから感じた魔力。魔術師の中でもかなりの量を誇るルイスが、足元にも及ばないという感覚を抱いた。…並では、ない。

「詳しくは言えないけど…あいつは、オルディアンの国家機密の一つだ」

廊下に目を走らせ、人がいないのを確認してからリディは進む。

「人間の域を超えた、膨大な魔力。あと…ルイス、聞いて驚くなよ」

前置きして、リディは淡々と言った。

「あいつは、五属性持ちだ」

「――――ッ！？」

人は通常、火風地水雷の中から一つの魔力属性を持つ。偶に2つ、ごく偶に三つ持つものがいるが――四つ、五つは確認された事がない。そう、言われていた。

「…驚くな、って言ったのに」

絶句して凍りついたルイスに、リディは呆れたように言う。ようやく解凍されたルイスは、馬鹿か！と叫んでリディに詰め寄った。

「驚かずにいられるか！五属性なんて、聞いたこともない！！」

「聞いたことなくても、現実にあいつは存在する」

目でルイスに歩くよう促して、リディは続けた。

「この屋敷のあの理解を越えた結界も、五属性をもつラグだから張れる結界。あの結界には、五属性の魔術が全て編み込まれてる」

「…馬鹿な…」

「そう思うのも仕方ないよ。でも、真実だ。それにあいつは治療術

も使える」

ルイスは力なく頭を抱えた。リディはごめん、と呟いて、軽く彼の腕を叩く。

「いきなりこんな事話されても困ると思う。でも、あいつと同行する上で…知って貰いたかった」

俯いていたルイスは、なあ、と訊いた。

「オルディアンは何故、彼の存在を公表しない？」

「あいつがまだ、未成年だから」

キッパリと答えたリディに、ルイスは顔を上げる。リディの眼は、苦笑に細められていた。いつの間にか抜けていた廊下の先の、庭に降りる。

「ラグは今十七歳だ。もしあいつがそんな力を持っていると知れれば、利用しようとする輩がわんさか現れるのは目に見えてる。だから、あいつが成人して、しっかりと自分の身を自分で支えられるようになったら、公表しようとヴィ…王太子と、陛下が決めたんだよ」

ルイスは黙り込んだ。

賢明な判断だと思う。確かに幼い内から公表していたら、彼はあっという間に政治の道具にされていたかもしれない。高位貴族ならともかく、彼の家は中級貴族。彼を庇護しきる権力などないだろう。

それでも、もやもやした感情は残る。万が一彼が、戦の要員となったら――他国に、それを防ぐ術はない。ただでさえ、この国には『烈火の鬼姫（彼女）』がいるのだ。

「…ちなみに、エーデルシアスとアルフィーノの国王は知ってるよ」

見透かしたようなリディの付け足しに、ルイスははっとし、次いで決まり悪く息を吐いた。

ならば、問題はない。

「ま、私としてはふわふわに見えるけど、あいつはそんな馬鹿じゃないと思うんだけどね」

肩を竦めてリディは笑い、よっ、と塀に跳躍した。

「だからこそ研究者になって――逆に研究の魅力に取り付かれたって意味では、馬鹿か」

二人の目の前に、大きな穴が開く。今度は、あの少年が開けたのだと直ぐに理解出来た。

「そういうことだけど、あいつの同行許してくれる？」

街路に飛び降りてから、リディは上目遣いにルイスを見上げた。

ルイスは珍しくきょとんとした後、くっと笑い出した。

「今更過ぎるだろお前…当然だ」

「ありがと」

ほっとしたように笑うリディに、内心で憮然とした思いを抱いたルイスは、心のままに一つの質問を口にする。

「そんなに大事なのか？あいつ」

きょとんとしたのは、今度はリディの方だった。数秒目を瞬かせ、首を傾げる。

「大事っていうか…昔からの付き合いだから、弟みたいな感じかな」

「…弟ってお前、同い年なんだろうが」

答えながら、憮然とした気持ちが消えていくのを感じ、ルイスは顔をしかめた。

ゼノでの夜が、脳裏に蘇る。

（…変われば、変わるものか…）

半ば自身にあきれながらも、彼もリディに並んで宿に戻る道を辿った。

第七話　神の愛し子　（2）（後書き）

ラグはメインの一人です。魔術だけならセティスゲルダともタメかそれ以上張れます。

第七話　神の愛し子　（3）

二日後。

「待ってた」

まだ朝靄も晴れきれない内に宿を出た二人が真っ先に行った先で、ラグは感情表現の乏しい顔で少しだけ笑った。一昨日着ていた白衣は脱ぎ、少し頑丈な服の上に黒いローブを羽織った姿だ。

「ちゃんと執事さんには言った？」
「ちょっと出て来るってだけ」
「……ま、いいか」

いや良くないだろう、とルイスは突っ込みたかったが、まだ朝の早い時間帯ということもあり、それ以上の会話を避けて二人を促した。

「早く鍛冶屋行くぞ。どうも剣が無いのは落ち着かない」

この二日、剣が手元に無いのは実に不安を誘った。体術や魔術だけでも充分とは解ってはいたが、提げなれた重みがないというのは、

いつまで経っても慣れない。
リディも同意を示し、三人はその場を後にした。

「全く、本当に行くのか…」
「今更だよ、おやっさん。ラグも一緒だからもう文句無いだろ？」
「お前というやつは…」

ぶつぶつ呟きながらも、ジェインは約束通り研ぎ終えた、ルイスとリディの剣を二人に渡した。
ルイスは試しに剣を鞘から抜いてみる。柔らかな朝の日差しを反射して、それは鮮やかな銀色に輝いた。

「…ありがとう、ジェインさん。こんな状態のこいつを手にしたのは、一年ぶりだ。…斬れないものなんてない気がする」

素直な謝辞に、ジェインは照れ臭そうに鼻頭を擦った。リディも少しだけ鞘から剣身を出し、満足そうに笑って、パチンと軽快な音を立てて鞘に納め直した。

「腕は落ちてないようで安心したよ。ありがとう、おやっさん」

「お前さんはもう少し素直になれ」

ビンとリディの額を弾き、痛ぁ、とリディが額を抑えてしゃがみこんだ所で、ジェインはぼーっとしていたラグに向き直った。

「ラグ、お前さんは優秀だが、竜に気を取られすぎて殺されないようにな」

「…僕もそこまで馬鹿じゃないよ…」

「そうかそうか」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられ、元々くるくるのラグの頭はさらにぐしゃぐしゃになった。うー、と頭に手をやるラグを余所に、最後にジェインはルイスに顔を向けた。

「俺はお前さんがどういう人なのかは知らん」

黒い目がじぃっとルイスの蒼い瞳を覗き込んだ。ルイスはたじろぐ事なく、静かにそれを受け止める。

「…だが、何よりもリディがお前さんに心を許している。それが何よりの証拠だと俺は知っている。…リディとラグを頼む、ルイス」

「ああ」

差し出された逞しい手を、ルイスは頷いて強く握り返した。

長年鎚を持っていたことで、ごつごつとした手。しかしこの手は、確かに自分達の命を守ってくれる。職人の頼みを聞き入れるのは、使用者の何よりの務めだ。

「何だよおやっさん、私やラグがガキみたいな言い方して」

「実際僕達はまだ十七だよ、リディ…」

「ルイスだって十九だよ！」
「残念、俺はもう二十歳だ、リディ」
「…はぁ！？」

からかうように言ったルイスに、一拍置いてリディは目を剥いた。
思わず彼に詰め寄る。

「何それ、聞いてない！！いつ！」
「…いや、ガートにいた時。そう言わなきゃならない事でもないだろ」
「よくない！」

本気で怒っているらしいリディにルイスが狼狽えていると、ラグが微かに笑いながら助け船を出した。

「ルイスさん…リディの家は、誕生日を大事にするんですよ。大事な人の誕生日をなおざりにするなんて、許せる事じゃないんです」
「…いや、それは」
「何で言わなかったんだよ！」

ぎゃあぎゃあと始まった言い争いを、ラグは目を細めて眺める。
その彼の首に片手を回して、ジェインは声を潜めた。

「いいのか？お前さん…あの二人」
「いいんですよ」

そう言いながらルイスとリディを眺め続けるラグの横顔は、ジェインには寂しげに映った。

「リディとあんな風に対等に喧嘩している人を、僕は始めて見まし

た。…それが、答です」
「…ラグ…」
「まあ、あの天然素材のリディじゃ、何年かかるかわかったものじゃないけど…」
苦笑して、ラグは二人の仲裁に入ることにした。
「ほら、二人共、早くしないと日が暮れるよ…リディはジェインさんに代金払って」
「それだ！リディ、もうそれでいいから！研磨の代金払うんでいいから！」
「金って言ったって、君も稼いだ金だろ！！」
「リディ、声少し下げて…」
終わらない言い争いに頭を掻きながら、ジェインは若い三人を見つめた。
（…元気に帰ってこいよ）

ジルフェイ山地。大国オルディアンと同じく大国エーデルシアスの東の国境にそびえ立つ、人跡未踏の険しい山並みには、昔から竜が棲んでいると言われていた。

ほぼ1日かけて風魔術でリオーラから飛び、麓の村で一泊した後、三人はジルフェイに足を踏み入れていた。直線で突っ切るの為、オルディアン側からエーデルシアスに抜けるには、計三つの山を越えることになる。

「人跡未踏って言われるだけあって、なかなかキツいな…」

山道の途中で小休止をしながら、リディが汗を拭った。

ここを登るのに、馬はむしろ邪魔である。連れていけないと悟った時、二人はリディが信頼できるリオーラの馬屋で、それまで旅を共にした馬を売った。寂しさも悲しさもひとしおだったが、なんとか振り切った。

自分で言うのもなんだが、良い馬だったから、よい種馬になって、たくさんの駿馬を生めばよいと願う。

「ラグ、大丈夫か？」

同じく汗を拭きながら、ルイスはこの場で一番体力が無いラグに問い掛けた。

「…こんなに動くのは、久しぶりだから…結構、大変…」

もうすぐ秋だ。標高の問題もあって気温は低めなので、うっかり外套は脱げない。だが、運動から来る熱は、とても籠って苦しかった。

「アイシィ」

小さくルイスが水精霊を喚ぶ。すぅっと冷気の膜が三人を包み、穏やかな涼しさが身をすすいだ。
爽快な心地にリディもラグもは頬を緩めた。

「うわ、気持ちいい…ありがとルイス」
「どういたしまして」

軽く応じて、しかし…とルイスは上を見上げた。

「本当に道無き道、というか。しかもこれだけの山なのに、魔物が一匹もいないなんて、信じられないな」

魔物は基本肉食で、勿論人も喰べるが、人は大抵街に固まっている。魔物が返り討ちに遭う危険性も高い。それに、動物は人を避ける。よって動物は、人里離れた山や森に棲む。魔物はそれらを主に狙う為、必然魔物も森や山に多く棲むのだが――。

「精霊がいつもより活発な気がするし」
「うん…」

三人とも魔術士でもあるから解る。なんとなくだが、精霊の動きがいつもより強いのだ。原因は解らないが。

「竜が何か関係してるのかな…？」

ぶつぶつと呟くラグは、懐から手帳を取り出して何かを書き付けている。

「もうすぐ日暮れだし、あと一刻登ったら今日は休もう。夜は冷え

るからな」
陽の傾き加減からのルイスの提案に、リディもラグも同意して、腰を上げた。

「そうだ、ラグならわかるかな…ラグ、『原初の運命（さだめ）』って意味、解る？」

陽もとっぷりと暮れ、ラグの特殊結界の中でリディが火を熾し、夕飯を取った後、不意にリディがそんな話題を口にした。

「『原初の運命（さだめ）』…？」

赤い眼にさらに炎の光を反射させて、いっそ不思議な煌めきを帯びながら、ラグが訊き返す。

「そう。話すと長いんだけど、私達春に、魔族の王のセティスゲルダと遭って」
「その長い部分をちゃんと話してねまず」

流そうとしたリディに、ビシリとラグがツッコミを入れた。聞い

ていたルイスも思わず尤もだ、と内心で拍手した。
リディは嫌そうな顔をしたが、大人しくかいつまんで事情を話した。
聞き終えたラグは、ふうん、と呟いて眼鏡を外し、懐の布で拭いて、再び掛けた。

「つまり…気まぐれで現れた闇の王と、マリナリオで会った占い師に『原初の運命』と呼ばれた、と…」
「そう。訳わかんなくて。ラグならわかるかなと思ったんだけど」
「ごめん、わからない」
「…そっか…」

謎は謎のままか…とリディが空に向かって伸びをする傍ら、ラグは思案げに揺れる炎を見つめた。

（『雨の乙女』の舞台に闇の王が現れ…居合わせたリディとルイスを、『原初の運命』と呼んだ…。これは、偶然…？）

ラグは偶然をあまり信じていない。物事に偶然はなく、全ては何かに基づいた必然だと考えている。
そして一見関係がなさそうに見えるこの事も、何か意味があるのかもしれない。

「…帰ったら、調べてみるかな…」

低い呟きは、他の二人の耳を掠める事なく、闇夜に溶けた。

翌日も、ひたすら登る事に務め、積雪が視界を覆い始めた頃、ようやく一つの山を越えた。その山の頂上からは、まだ先にそびえる山のせいでエーデルシアスは見えなかったが、オルディアンが一望出来た。

「…本当に森が多いなあ」

目を細めてオルディアンを見下ろし、リディはそんな感想を漏らす。

水と森の国、オルディアン。豊かな自然と国力を擁する国。

「…またね」

微かに郷愁を浮かべて、リディは少し先で彼女を待っていた二人の青年達の元に駆けていった。

二日目の夜も一日目と同じように野営し、三日目もひたすら山を登った。負った疲労はそれぞれ治療魔術で回復し、魔物も出ないので、本当にただの雪山登りだ。

「…竜…いないね…」

残念そうに言うのはラグだ。勿論出たら出たで大変なのだが、元々彼は竜を見たくてここに来ている。がっかりするのも仕方ない。

「でもなんか、ここまで魔物に気を払わずにいられる日って、珍しいかもしれない…」

よっ、と雪の積もった倒木を飛び越しながらリディが肩を竦めた。ルイスも同意する。

「ひたすら同じ景色、ってのは疲れるが…ある意味、安心できるな」

「どんだけ殺伐とした日常送ってたの君達…」

呆れながら突っ込むラグは、流石に疲労が顔に現れ始めている。いくら治療術で回復出来ると言っても、現役狩人の二人とは基礎体力が違う。ルイスにしてみれば、研究者なのにかなり体力がある、と驚嘆していたのが、ラグ曰わく「小さい頃からどこかの誰かに連れ回されてたから」だそうだ。ちなみにそのどこかの誰かはそっぽを向いて口笛を吹いていた。

「でも、この山ももうすぐ終わ…わあ…！」

滑りやすい岩場を登り切ったリディが、歓声を上げた。遅れて辿り着いたルイス、ラグも、眼前に広がった光景に思わず感嘆の吐息を吐いた。

一帯を覆う白銀の雪の中に、広い湖のようなものが広がっている。湖は湯気をあげ、綺麗なモスグリーンに輝いている。

「ここが温泉か…」

予想以上の景色に、ルイスは頭を掻いた。正直温泉にあまり興味はなかったのだが――こうも壮大だと、そんな気は吹っ飛んだ。

「観光に使いたかった気持ちも解るよ…」

ラグも眼鏡を外して呟いた。短く水精霊の名を喚び、コンと眼鏡

を叩く。水蒸気で曇っていた硝子が晴れた。

「せっかく来たんだし…」

入ってこうかな、と続けようとしたリディはしかし、ぴくりと身を震わせると、ばっと上を向いた。

全く同時に、ルイス、ラグも上を見上げる。

「…っ、本気でっ…」

顔を引き吊らせたリディの腰をさらって、ルイスとラグは水精霊を喚んだ。

「アイシィ！」

「アクアメイン！」

ザザザッ、と三人が温泉の湯面を滑ったのと、空から幾つもの大きな影が地面に急降下してきたのはほぼ同時だった。

山ごと揺るがしそうな衝撃と共に、湖を取り囲むように、少なくとも十体以上の影が着地する。

足下で暴れる水を何とか制御し、ルイスとラグは背中合わせになる。水魔術が使えないリディは通常水上戦では風魔術で対応するのだが、この数の竜の翼の羽ばたきが乱気流を起こしている中、軌道を読まずに風魔術で飛ぶのは自殺行為だ。

水飛沫と風圧をやり過ごした彼らは、認識した光景に絶句した。

「…上位竜…」

ラグが微かな呟きを漏らした。

竜の位階は、幼竜、下位竜、中位竜、上位竜、そして最上位竜となっている。ただし最上位竜は存在するのかも危ぶまれ、実質的なヒエラルキーのトップは上位竜、という見方も強い。

上位竜の特徴は、色鮮やかに輝く鱗だ。赤、緑、青、紫、橙と、竜の鱗の色は様々だが、上位竜のそれは、まるで宝石のごとく煌めくという。

約一年程前、ルイスとリディが狩った竜は、下位竜だった。また、狩人に狩られる悪竜の特徴として、皆鱗が黒く変色しているというものがある。

つまり、鱗を黒く変色させずに輝かせて、今三人を取り囲んでいる竜達は、紛れもなく善竜であり、上位竜だった。

「…まずくないか、これ」

善竜を殺す事は出来ない。それ以前に、この数の上位竜相手に、幾らトップハンター二人、オルディアンの国家機密がいるとしても、たった三人で敵う訳がない。

「ここは…停戦申し入れした方が良いんじゃ…？」

研究対象とはいえ、ラグも流石に命が惜しい。冷や汗を背中に伝わせながら、小さくルイスとリディに囁いた。二人も少し青ざめた

顔で頷き返した。

「私もそう思う」

「俺もだ。上位竜なら、人間の言葉を話せる…多分、話せばわかってっ…って、うわっ！」

硬直した雰囲気を割ったのは、青い炎だった。唖然とする前に、ルイスとラグは慌てて水面を蹴った。空中に飛び上がって足場を作り、リディもルイスから離れて体勢を立て直す。

「問答無用！？マジで！？」

「俺に訊くなっ！」

結界を張りながら、リディが喚く。それに怒鳴り返して、ルイスも結界を張った。少し離れた所で、ラグも倣いかけたが、途中で思い直すと、ラグは竜に向かって叫んだ。

「僕達はあなた達の棲み処を荒らす気は無い！！興味本位で踏み込んだ事は謝罪するけど、どうか敵意を収めて欲しい！！」

それに対する応えは、再びの炎だった。危うい所でそれを避け、ラグは厳しい目で竜達を見た。

「一体どうなってるんだよ…悪竜でも無いのに」

再び三人固まりながら、リディが困惑混じりに呟いた。わからない、とラグが首を振る。

「でも…やらなきゃ殺られるよ。たぶん」

「たぶんじゃなくて、事実みたいだぜ」

ルイスが軽く舌打ちして、剣を抜いた。

「ルイス」

咎めるようなリディの声に、彼女を一瞥してルイスは言った。

「俺達が必死でやった所で、多分こいつらは倒せない。隙を見て逃げるぞ」

「賛成」

ラグが短く頷いて、ローブの下から短めの剣を抜いた。赤い眼が、常になく鋭く尖っている。

「出来れば、この事態の原因を知りたい所だけど…それ以前に死ぬのは嫌だからね…。戦うしかない」

「……」

リディは不安げに唇を噛んだが、渋々自分も双剣を抜いた。やらなきゃ殺られる。それは確かに、真実だ。

「三人バラバラに行こう。攪乱した方が良い」

「通用するかは微妙だけど…固まるよりマシか」

頷き合って、体に力を溜める。その瞬間、三人に準備が出来たのをまるで見計らったように、三体の竜が飛び出してきた。

「…行くぞ！」

「死ぬなよ！」

「そっちもね！」

青の竜にルイス、赤の竜にリディ、緑の竜にラグ。

連携を一切考えずにそれぞれ突っ込んだ三方向で、同瞬、激しい轟音が轟いた。

第七話　神の愛し子　（3）（後書き）

「物事に偶然はない。すべて必然」
この言葉好きです。あの漫画も大好きです。結構メジャーな考え方だとは思うけど、あのキャラが使うとすごい説得力あるなと思って読んだ記憶が残っています。

第七話　神の愛し子　（４）

（…何か、引っかかる）

「…っはっ！」

竜の翼が生み出す乱気流をなんとかいなし、風魔術で足場を作って跳ぶことにもようやく慣れて、裂帛の気合いで持って剣を撃ち込む。剣が竜の尾の棘や爪に弾き返されるその間断に、精霊を喚んで魔術を放つ。それを竜が防ぐ間に間合いを取る。

それを何回も繰り返している。

善竜は殺してはならないなどという遠慮は疾うに消え去っていた。と言うより、そんなことを言っていられる余裕はない。殺す気でかからなければ、竜の炎や爪や尾を防げない。隙をついて逃げるなんて、なおさら無理だ。

荒い息を吐きながら、リディは僅かに他二人に目をやった。

水面近くで戦っているルイスはリディと似たり寄ったりの状況だ。剣と魔術を駆使し、必死に戦っている。リディと同じく空中で戦っ

ているラグは剣はそこまでの腕ではない代わりに、雷以外の四属性の魔術を全て総動員して対抗していた。通常ならとっくに魔力（スタミナ）切れを起こしている頃合いだが、彼の魔力量（ラグ）は半端ない。例の、何でも防ぐ特殊な結界もある。

三人の中では一番冷静に、竜の攻撃を捌いているようだ。

「――っ、危なっ」

間一髪で迫った爪を避け、竜の腕の付け根を狙って袈裟懸けに切り上げる。しかし、ジェインの研ぎ上げた刃で持っても、僅かに傷を刻む事しか出来ない。

「くそっ」

悪態をついて、体を回転させて竜の背を蹴り、距離を取った。

竜は、鱗と同色の爬虫類の眼を、ぐるりとリディに向け、がぱりと口腔を開けた。

（あの眼）

「――ッ、フレイア！！」

すんでの所で、火結界を張った。次の瞬間鈍い衝撃と共に、超高温の炎が結界に激突する。

「あの時の悪竜とは、桁違いだっ…！」

呑まれそうになるのをギリギリで堪え、炎が消えた瞬間に風刃を返した。

（あの眼が何か、違和感を感じる）

リディは竜がひらりと旋回して避けたことに舌打ちして、追撃の魔術を組んだ。

――さっきから、気になっている事がある。

竜の尾を紙一重で避け、水面を蹴って後退しながら、ルイスは空に舞い上がった竜を見上げた。

再び吐かれる炎。跳躍したルイスの足元が、猛炎が襲ったことにより、激しい水蒸気を上げる。それに軽く背筋を泡立たせながら、ルイスはうそ寒い笑みを浮かべた。

（リディやラグが頭に血が上っていないのが幸いだ）

この水蒸気。竜の吐く炎。万が一ここに二人のどちらかでも雷魔術が奔れば、一瞬で大爆発だ。竜は退けられるかも知れないが、そんな事になればルイス達もただでは済まない。即死だ。

「…って、そんな事に安心してる場合じゃねえなっ…！」

身をかがめて、右手を一閃する。剣先は迫っていた竜の首の皮一枚手前を掠め、竜は宙返りをして少し遠ざかった。

（気になってるのは、あの眼だ）

遠ざかる竜から視線を外さず、剣を構え直す。未だ刃こぼれしないそれに、改めてジェインの腕に感心する。

（普通、何かを襲う時は、どんなものでも何かしら感情があるはずなんだが）

動物なら、身を守る為の警戒。怒り。
魔物なら、獲物への飢え、狂喜。愉悦。
人間なら、憎しみ、怒り、恐怖。
悪魔なら、残忍、狂喜、嘲笑。

しかし、この竜の眼には、そういった感情が一切浮かんでいない。何も読み取れない爬虫類の眼が、静かにルイスを見つめている。

それは、まるで――。

「観察でも、してるの？」

多属性結界で攻撃を阻みながら、小さくラグは呟いた。

あまりにも頼りないそれは、けれど口に出した事で、不思議にも確信が覆っていく。

大体、最初からおかしいのだ。高位竜なのに一言も喋らないし、自分達を排除したいのであれば、この場に集う竜皆でかかってくればいい。一体相手が精一杯なのだから、そうされたら一溜まりもない。

なのに、三体を除いた竜達は、皆湖の淵に立って、じっと戦いを静観している。その眼は、ラグ達が相対している竜と同じだ。

「アクアメイン」

喚ぶ声に応じて、氷の礫が竜に飛んだ。ラグに向かって突っ込もうとしていた竜は、たたらを踏んで宙返りすると、上空に逃げる。が、すぐに炎が飛んできた。

それを反射を組んで逸らし、ラグは竜と視線を合わせる。

緑柱石のような、鮮やかな緑色。その眼に敵意は無い。感情がな

い。あるとすれば、

「好奇心？それとも――」

しなる尾を、何とか剣で弾く。衝撃で手が痺れた。

リディやルイスが信じられない。よくこんなものを弾いた上で、攻撃が出来るものだ。

「何かを、確かめたいの？」

呟く前から、ラグはそれが答えだという確信があった。

きっとそうだ。竜達は、自分達に何かを見ている。何かを見たいが為に、彼らは一人につき一体で、戦っているのだ。

（…なら）

違っていたら、自分は命を落とすだろう。

けれどラグにはそうはならない自信があった。だから――次の瞬間、迫る爪を前にして、ラグは結界を解いた。

「なっ！？」

上空からその光景を目にして、リディは目を見開いた。

「は！？」

水面からその光景を見上げて、ルイスは凍り付いた。

二人が叫ぶ暇もなく、鋭く尖った湾曲型の爪が、ラグに振り下ろされる。

しかしその爪は、ラグの体を引き裂く寸前で止まった。

「…やっぱり」

心なしか青ざめた顔で（それはそうだろう）、ラグが落とした呟きに、彼と戦っていた緑色の竜は、

『いい加減に気づく頃合いだと思っていた』

そう、今日初めて人語を発した。

「要するに君達は、理由は言えないけど私達の実力を知りたくて、だから一対一で戦ってみたってこと？」
『ご名答。頭もそれなりのようで安心した』
「意味わかるかっ！」

時を十分後、場所を温泉湖のほとりに移して、ルイス、リディ、ラグは傷を治しながら竜達に囲まれていた。

自分の図体より遥かに大きい、しかも竜という存在に囲まれるのは幾許かの不安感をもたらしたが、さっきまで戦っていた相手である。早いうちから割り切って、臆せず話を聞いていた。

「全くだ。こっちは何度死にそうになった事か…」

ぶつぶつ言いながら、ルイスは体中に散る掠り傷を治していく。しかし、それらが掠り傷で済んでいる事自体が、竜達に、本気で殺す気がなかったことを表しているのだろう。

「ラグ、訊きたいこと訊けば？…って、もう自分の世界か」

ラグは竜達を見上げてぶつぶつ呟きながら、超高速で手帳にペンを走らせていた。それを竜達は興味深そうにのぞき込んでいる。

「上位竜の炎…推定３０００度…爪は鋼より硬く…」
「あいつ戦闘中にそんなこと考えてたのか…」

ルイスは額を抑えた。リディは慣れによる無反応である。

ラグは一通り書くと、緑色の竜を見上げた。

「訊いてもいい？」

『何だ？』

「竜は、普段単体行動って聞いてたんだけど…違うの？」

竜は喉の奥で音を立てた。どうやら笑っているらしい。

『違わない。だが今、この山は特別だ』

「特別…？」

「そうだ。そしてその『特別』が、お前達を呼び寄せた』

「呼び寄せ…？」

聞いていたリディが顔をしかめた。ここに来るのを決めたのは彼ら自身だ。誰かに示唆された訳ではない。しかし、幼なじみにラグを持つせいで、彼女も余り『偶然』を信じない質（たち）だった。

「つまり、必然だったって言いたいの？」

『その通りだ。話が早くて助かる』

「で、何なんだ？その特別って」

ルイスが立ち上がりながら訊ねる。立ち上がってもなお、遥かにある目線の差に首を痛めながらも、彼は蒼い眼を細めた。

「少しだけ、心当たりがある。お前達が俺達を呼び寄せた理由が。でもその『理由』の意味が、俺達はわからない。お前達が知っているなら、教えて欲しい。『原…」

『その問いに、我らは答える事は出来ない』

ルイスの言を遮って、青い竜が言った。

『確かに我らはその意味を知っている。しかし、お前達に教える事は許されない』

「許されないって…誰に…？」

ラグの言葉には答えず、緑の竜が、三人に向かって身を屈めた。

『乗れ。お前達に逢いたがっている方がいる。それが此度（こたび）、お前達をここに呼び寄せた理由だ』

「乗れって…」

度肝を抜かれて三人は立ち尽くした。

かつて今まで、竜の背に乗った事のある人間がいるか。いや、恐らくいない。

しかし、今この竜は乗れと言っている。

煩悶する彼らに焦れて、周りの竜達はひょいと首を下げると、牙を三人の服に引っ掛けた。

「え」

「な」

「ちょっ」

驚く間もなく、牙にひっかけられて宙に浮いた三人は、すぐにそれぞれ牙から振り落とされて、

「うわっ」

「ぎゃっ」

「痛っ」

緑色の竜の固い背中に落ちた。大きいだけあって、三人が転がってもまだ余裕がある。

『よし。では行くぞ』

「え、ちょっと待っ――」

待ってなどくれなかった。三人が制止の言葉を言い終える間すらなく、竜達は一斉に飛翔した。

「「「うわぎゃあああああああ！！」」」

三人が変な悲鳴を上げたのは言うまでもない。

――――――――――――――――――――――――――――――――

およそ五分程飛んで、竜達は下降した。竜の背中の突起にしがみついていた三人は、風圧に閉じていた目をうっすらと開ける。

「…まだジルフェイみたいだね…」

山深い眼下の光景に、ラグが呟いた。

開けた空間に、まず三人を乗せた竜が着地する。三人が強張った体で慎重に地に足をつけると、緑の竜は一声鳴いて、一瞬白い光に包まれる。

そして、

「嘘だろ…」

ルイスもリディもラグも揃って絶句した。

光が収まった後には、鮮やかな緑色の髪に立派な体躯の男が立っていたのだ。

「人の姿になるのは久し振りだ」

愉快そうに笑う彼は、しかしよくよく見ると、違和感が浮き彫りになった。

眼は、白眼が殆どない、爬虫類めいたもののままだし、肌はうっすらと鱗のような模様が見える。耳も尖り、爪も人間にしては異様に長く、鋭い。

「ついてこい。こっちだ」

ついさっきまで竜だった男――とでも言えばいいのだろうか――が、三人を手招きする。その先にはぽっかりと巨大な口を開けている洞窟がある。

「……」

三人は一瞬目を見交わし、それから意を決して歩き出した。洞窟に入った瞬間、背後から聞こえた、竜達が着陸したことによる地響きがやたらと耳に響いた。

「…広いな」

洞窟を、竜の男について歩きながら見回す。光苔が天井や壁に張り付いているせいか、洞窟内は仄かに明るい。洞窟の床は湿り、時折水溜まりを踏んで、ピチャンと音が響いた。

「遥か昔から、自然がゆっくりと作り上げた洞窟だ。道を知る者でなければ、三刻と経たずに迷うだろう」

リディとラグはぞっとした。つまりもしこの竜に置いてけぼりにされた場合、ほぼ間違いなく自分達は死ぬ。

ルイスだけは、今まで辿った道をちゃんと記憶している為、そこまでの不安感は抱かなかったが。

「…竜が人型を取るなんて、知らなかったよ」

「人の体は機能がいいからな。魔術も使いやすい」

「ま…」

即ち三人は絶句した。

「竜は魔術も扱うの…！？」

竜の男は心外そうに、口走ったリディを見やる。

「精霊は人だけに力を貸すのではない。我らは精霊の姿を見ることも可能だ。…まあ、魔術を扱えるのは中位以上だが。それまでは魔力が安定しない」

「……」

驚きすぎて言葉も出なかった。

自惚れていた訳ではないが、魔術とは人だけの力だと思っていた。
しかし、人は自分の契約精霊以外は視界に捉えることは出来ない。
でも今の話では、竜は見える。つまりそれは、竜の方が精霊の恩恵を受けているという事だ。そう考えると、この山に精霊の気が活発なのも、道理だ。精霊の恩恵を多大に受ける竜が生活しているのだから、その気も人間界より多いに違いない。

「人間はちっぽけだ…」

ラグの呟きは、重くルイスとリディの胸に染みた。
そうこうするうち、彼らは開けた空間に出た。

「…まあ、詳しくはこの先で待っておられる方に訊くといい」

カツン、と響いていた足音が止まる。

そこは、洞窟の岩の隙間から、光が線となって差し込んでいた。
そして空間の奥、少し高い、舞台のようになっているところに――

「メルセイエデス様。お連れしました」
『…手間をかけたな。済まぬ』
「いえ。貴方様の御為ならば」

す、と竜の男が一礼して三人の脇を通り過ぎ、下がる。いつの間にか少し離れた背後に、ルイス達を連れてきた竜達が皆、人型となって佇んでいたその中に、緑色の髪の男も静かに加わった。

それらを感覚の端で感じ取りながら、けれどルイスもリディもラグも、指一本動かすことが出来なかった。

舞台のようなものの上にうずくまる巨体。一目見ただけで、名匠が打ち鍛えた鋼よりも遥かに硬いとわかる、堅牢な鱗。それは、微かに差し込む月の光に照らされて、清冽な月白に煌めく。長い首の先の頭部から生える角は、幾本にも枝分かれし、年月を経た牡鹿を思わせる。微かに睫毛さえ生える瞼の下から顕れた眼は、夜明けの空のような薄紫。底深い知性を宿したその眼は、どこまでも慈愛を感じさせる。

「まさか…最…高位…？」

赤い眼をこれ以上ないほど見開きながら、ラグが微かに喘いだ。

大の大人程もある首（こうべ）をゆっくりと持ち上げた、雪のように白い竜は、ふと眼を笑ませる。紡がれた言葉は、至極滑らかだった。

『そう、『精霊の御手』。私の名はメルセイエデス。竜の最高位に位置する者』

第七話　神の愛し子　（5）

第七話　神の愛し子　（5）

「…『精霊の御手』？」

ルイスが小さく呟く。答えが得られるとは思っていなかったのだが、存外あっさりと竜――メルセイエデスは答えた。

『五属性と聖属性、全てを扱える人の子のこと。精霊の加護を持つ者。千年に一人が現れる』

「……。…スケールが大きすぎて想像が出来ない…」

ラグの呻きには全くもって二人も同意だった。その二人に、メルセイエデスの瞳が向けられる。

『会えて良かった。お前達に渡したいものがあった、『原初の運命』』

「！…それ…」

それまでの硬直も忘れ、リディがはっと声を上げた。

「それ、何なの？セティスゲルダにも、占い師にも云われた…『原初の運命』って、なに？」

束の間、メルセイエデスは目を瞬いた。数秒後、『あの方も人が悪い…』と、リディ達には聞こえないように呟いて、それから持ち上げていた首を少し下げた。

『私の口から、言うことは許されていない』

リディは素直に肩を落としたが、ルイスは蒼い目を曇らせて訊ねた。

「…最高位竜である貴方を、口止めする者がいるのか？」

この大陸において、竜の存在は絶対だ。

国を作り、日々を動かしているのは人かもしれない。しかし、人など及びもつかない力と知性を持つ竜は、神の信仰がないこの大陸では、逆説的となるが神のようなもの。そしてその竜の頂点である筈の最高位竜を、上回る存在を彼は知り得ていない。

それだけに、続くメルセイエデスの言葉は衝撃的だった。

『私達の位階は、最高位が頂点ではない』

「メルセイエデス様！」

非難の声が、三人の背後、佇む竜達から発せられる。しかしメルセイエデスは緩やかに首を振ると、今し方の言葉に凍結している三人を穏やかに見つめた。

『私の上――竜という種族の頂点は、“天竜”と呼ばれている』

「……」

『人の子にとって我々が神めいたものであるのと同様に、我らにとっての神は、“天竜”…。至高の存在』

そして、哀しい存在。

口には出さずにメルセイエデスは呟き、苦笑するように目を細めた。

『本来、人の子が知り得ない話。他言無用にすること』

「…言えないよ…」

ラグが頭を掻いた。

こんな話、とても他人には出来ない。今までの常識をひっくり返すことになる。そっと胸の内にしまい込む良識はあった。

「…なんか、驚きすぎてもう何がなんだかわからないけど…つまりその“天竜”が、口止めしてる？」

リディの問いに、メルセイエデスは答えなかった。しかし、それ自体が、リディの言葉が正しい事の証明だった。

「…それで…渡したいものとは、なんだ？」

ルイスが静かに訊ねた。完全に単語に気を取られていたリディは、ぽんと手を打つ。忘れていた。

メルセイエデスはゆったりと首をもたげ、小さく『風よ』と囁いた。

ふわりと柔らかい風が、身を丸めているメルセイエデスの腹の間

から、二つの丸い物体を浮かべた。すうと流れた風は、それらをルイス達の眼前に運ぶ。

「……？」
『それは、私の卵』
「たっ…！？」

訝しげに物体を眺めていた三人が、驚愕のあまりぽかんと口を開ける。しかしラグは、研究者魂のせいか直ぐ様我に返り、興味津々に“卵”を覗き込み、サッと取り出した手帳に凄まじい勢いでペンを走らせ始める。

白濁色の表面に、黒い模様のようなもの。形は楕円形で、大きさは人の頭程もある。

「竜の卵なんて初めて見た…」
「人間で見たのって、多分いないんじゃ…」

恐る恐る囁いて、ルイスとリディはメルセイエデスを見上げる。柔らかい瞳の光がそれを肯定していた。

『それを、お前達に与えよう』
「…は！？」

事前通告があったにも関わらず、三人は頓狂な声をあげてしまった。愕然と卵と竜とを見比べる。

『触れるが良い』

一瞬目のやりとりをしてから、リディとラグが恐る恐る手を伸ば

した。
少しだけ色合いの違う白い手が、それぞれ左右の卵を掴んだ。

「…ッ」
「…う、おも…」

途端、ズンと手にかかった重みにそれぞれふらつきかけ、なんとか踏ん張る。そして、卵の表面にピシッと亀裂が走った。

「…え」

三者三様に固まる前で、瞬く間に亀裂は卵の全体に及び、細かくひび割れを作っていく。

「わ…！」

一瞬パンと弾け飛ぶような光が網膜を刺し、思わず目を瞑った。そして、消えた手の上の重みに慌てて目を開くと、リディとラグの足元に小さな生き物がうずくまっていた。

「…これ…」

そうっとしゃがんで、卵の中から現れた生き物を覗き込む。それは、表皮にこびりついている粘膜を、長い舌で舐めとっていたが、三人の視線に気付いて小さな頭を上げた。
体は薄蒼い白で、きょとんとした風な眼は薄紫。メルセイエデスと同じ彩(いろ)だ。大きさは、畳められている翼を除けば野兎程で、鱗はまだ薄く、ぱっと見た目は滑らかだ。牙も短く、爪もまだ軟らかい。尾の棘は未発達で、小さな突起があるだけだ。

「竜の子供…なんか、感動する…」

リディィの呟きに、メルセイエデスは喉の奥を鳴らした。

『それらは私の子。しかし、運命に従いお前達に預けよう。竜の子は、『神の愛し子』。大切に育てるが良い』

「ちょ、ちょっと待て」

ルイスが狼狽えて立ち上がり、メルセイエデスを見上げる。

「預ける、って言われても、俺達は竜の育て方なんて知らないし、それに人里に連れて行ったら、大変な事になる。そんな無責任な事をする訳にはいかない」

『心配無用だ。――ほら、お前達』

ぴくんと二匹の子竜が小さな角を揺らした。じいっと母親を見上げる。

そうして数秒後、一瞬光に包まれたかと思うと、そこには子竜の姿はなかった。代わりに、

「『ピュルマ』…？」

ラグが目を輝かせて、腕を伸ばしてそれを抱き上げた。ルイスがぎょっとしてラグを見るが、その生き物は大人しく抱き上げられている。

ピュルマとは、非常に希少な生物の一種で、ふわふわした真っ白の羽毛と、兎のように長い耳、猫のようなふさふさの尻尾に体躯と、可愛いもの好きなら一瞬で悩殺されてしまいそうな愛くるしい姿形をしている、といわれている。

けれど人前に現れる事は殆どなく、半分伝説のように云われていたのだが――。

「可愛い…！」

ラグがどちらかというと興味津々な一方で、女の血が疼いたらしい、金の目をキラキラさせたリディは我慢できないといった風に勢いよく、片割れを見上げていたピュルマを抱き上げた。

「っ、ふわふわ！やばい、可愛すぎる！可愛すぎて犯罪…！」

「いや、可愛くても犯罪にはならねえよ」

一人冷静にツッコミを入れ、ルイスはラグとリディを微笑ましそうに見下ろしているメルセイエデスを見た。

「ピュルマは竜なのか？」

『いや。しかし、竜の基本は擬態。上位竜になれば人の擬態も可能になるが、幼竜は自分と同じような大きさの動物に変わる。生まれたばかりの竜は非力。だから竜とわからないように擬態する。…大陸で、なかなか子竜が見つからないのはそういう訳だ』

「ラグ、聞いてたか」

「勿論。…これも書けないけどね」

ラグは少しだけ残念そうに眉を曲げて、ピュルマを下ろそうとした。しかし、下ろされそうだと見るや、ピュルマはふわふわした外見からは考えられない速度でラグの肩を駆け上り、

「ぐえっ」

頭にしっかと張り付いた。

「ちょ、ちょっとー…」

「…髪が増えたみたいに見えるぞ」

ふわふわが倍加したようにしか見えない。ルイスは噴き出しそうになり、慌てて横を向いた。

『ふふ、どちらも懐いたようだな』

どちらも、と言われ、ルイスはリディに目を動かす。…確かにこの短い間で、リディはピュルマを肩に乗せて、嬉しそうに撫でていた。

『食事は肉を与えれば良い。そのうち自分で狩りにいくようになる。ひと月もすれば、人二人乗せて飛ぶ位には成長するはず。…ただし、竜の姿に戻らないと、どれだけ大きくなったかはわからない』

「なんで…貴方は、俺達にこいつらを預ける？」

この場の三人の中で唯一、冷静さを保ち続ける青年を、メルセイエデスは穏やかな目で見つめ返した。

『私がお前達に出来る、唯一の事だから』

メルセイエデスは首をいったん丸めると、どこからか取り出した銀色の玉を口にくわえた。そしてそれを、ルイスに向かって首を伸ばすことで差し出す。

「メルセイエデス様…！」

『良い』

後方から、どこか恐怖を帯びた声がかかったが、メルセイエデスは軽くいなした。
躊躇いながらもルイスは数歩歩み寄ってそれを受け取り、瞠目する。
「…これは…まさか、核…！？」
その声に、ぽやぽやしていたリディもようやく現実に帰ってきた。鋭い眼でルイスとメルセイエデスとを見比べてから、ルイスに近づいて、やはり瞠目した。
『そう。それは紛れもない核。子らと共に持っておいき』
「なんで…」
言葉の出ない二人の人間を、メルセイエデスは慈愛の瞳で見やった。
『旅を続けよ。その先に、お前達の求める答が待つだろう』
「……」
「…わかった」
どこか釈然としない顔つきのままながらも二人が頷くと、メルセイエデスはもう一人に愛おしげに視線を移す。
『『精霊の御手』よ。お前も、彼らが見つける答に関わる事となるだろう。…研究はいいが、その子を頼む。大切にしてほしい』
「…はい。言われるまでもありません」
前半の意味合いはわからなかったが、ラグは後半にしっかりと頷

く。そしてその意志はルイスもリディも同じだった。

「頑張って育てるよ」
「安心して任せてくれ」

メルセイエデスは頷き、さて、と大きく息を吐き出した。

『お前達には旅がある…エマルファ、麓まで送ってやってくれないか』
「…わかりました」

青い髪の女が頭を下げた。その眼はどこか悲しげに最高位竜を見上げている。

「メルセイエデス様。…私達は、いつまでも貴方をお慕いしています。…どうぞ、お安らかに」
『…ありがとう。さあ、行け、人の子。我が子らよ、自らの務めを果たせ。…愛している』

ラグの頭のピュルマと、リディの肩のピュルマが同時に一声鳴いた。

リディとラグは顔を見合わせる。――これはまるで、今生の別れのような…。

しかしどちらもはっとした。一人は狩人の性ゆえに、一人は研究者ゆえに。あの核は、もしかして。

「、行きましょう。エーデルシアス側にお連れします」

エマルファと呼ばれた女が静かに踵を返した。

「……」

ルイスは静謐を湛えた瞳で最後にメルセイエデスを見つめると、黙って一礼し、渡された銀色の核を懐に丁寧に入れて踵を返し、エマルファのあとを追った。

リディとラグは戸惑い気味に顔を見合わせ、慌ててメルセイエデスに頭を下げると、それぞれピュルマを連れて、並びいる人間に擬態した竜達の間を抜けて、先を行くルイスの背を追っていった。

それを見送り、竜に比べて余りにも小さなその背が見えなくなると、メルセイエデスはゆっくりと大きな息を吐いた。

「…メルセイエデス様」

竜のひとりが、悲しそうに言った。

「何故…、とはもうお訊き致しません。ですが、どうにもならなかったのですか」

『わかっているだろう。私がお前達と共にいられるのは、ここまで』

「…なればこそ、形見を残したのじゃろう？メルセイエデスよ」

不意に、嗄れた声が響いた。全員がはっとその方向を見、漣のようなざわめきが走る中メルセイエデスは嬉しそうに目を細めた。

『来て下さったのですか、マルブレヒト様』

呼ばれた老婆は、若干眉をひそめて白竜に歩み寄る。

「…あれは、お前の核。核を渡せばどうなるかわかっておるだろう

に…己の子らまで託しおって。私はそんなことをしろと言った覚えはないぞ」

『私が好きでしたのです。どの道近い内に滅びた身。ならば何も出来ぬこの身を、せめて役立てて欲しかったので』

穏やかな声音でそう喋るメルセイエデスの体に、徐々にひび割れた線が走っていく。

老婆は瞑目した。次に睫毛の下から覗いた銀色の瞳は、慈愛に満ちて優しかった。

「あの者達は――、解っておったぞ」

『聡い子らでしたね。自分に課せられた運命が何か知らずとも、私の願いを受け取ってくれた…』

ピシピシとひび割れが広がっていく。背後の上位竜達は顔を伏せ、老婆は肩を竦めた。

「あれならばお前の核も役立てるだろう。安心して眠れ」

『…そうですね…。では、そう致しましょう。先立つ不幸をお許し下さい』

「馬鹿者」

老婆は顔を歪めた。引きつれた傷痕の上を、透明な雫が伝う。

「…愛している。我が娘よ」

メルセイエデスの全身にひび割れが伝わり、強固なはずの鱗が、砕ける。

『私も…愛しています、お母、様…』

パン、と。

薄氷が砕けるような澄んだ音を立てて、白竜の体は砕け散った。煌めく光は直ぐに四散し、下に降り注ぐことなく空気に消えていく。

「……」

数秒前まで白竜が存在した、今は虚無感の漂う空間を老婆と、そして後ろに並ぶ竜達は凝視した。しかしそこに最早、メルセイエデスが存在した痕跡は残っていない。彼女の形見は、彼女が未来を視たものが連れて行った。

「『神の愛し子』…か…」

老婆は呟いた。

誰も彼らに言わなかった事がある。

通常、竜が子を孕むのは、上位竜までだ。長い年月を経た竜は、生殖機能を徐々に失い、孤高の存在と成り果てていく。

その中でメルセイエデスとその夫は、例外的につがい、メルセイエデスは子を宿した。その代償として、メルセイエデスとつがいの竜はその命を喪った。

「生まれながらにして上位竜」

長い歴史の中でも、未だかつて例のなかった最上位竜の子。二匹の子達は、宿す精霊の加護も命の輝きも、並のそれではない。

神――精霊に愛されし子ら。

彼らが、『原初の運命』の傍らにつく子供は、果たして何を生むのだろうか。

だが、

「お前の願いを無駄にはせぬ、メルセイエデス」

竜達が多く見守る中、老婆はゆっくりと頭を垂れた。

ルイス達三人は、青い竜、エマルファの背に乗せられ、ジルフェイを越えた。あれほど登るのに苦労した山も、竜の翼にかかればひとっ飛びで、まもなく見えた、故国エーデルシアスの風景に、ルイスはそっと息を吐いた。

三人を山の麓手前に降ろすと、エマルファは言った。

『ここからは自分達で行きなさい。私の姿を見られる訳にはいかないから』

「ありがとう。…て、ラグ、こっち来て良かったの？」

「ああ…大丈夫だよ。手は打ってあるんだ」

今更のように慌てたリディに柔和に微笑み、ラグはエマルファに頭を下げた。

「大切な貴方達の遺産は、僕の命に換えても守ります。…ありがとうと。お伝え下さい」

『…ええ。確かに伝えましょう』

エマルファは、わかっているのかどうか感情の読めない夕焼けの瞳を見返し、静かに頷いた。

「俺達からも。これ以上ない餞（はなむけ）を頂いたと。…想いは受け取った、と」

『…はい』

真摯な蒼の瞳に微笑み、エマルファは最後に少女に抱かれるピュルマを見た。ふわふわの毛に埋もれる薄紫の瞳に思念を送り、ばさりと翼を羽ばたかせる。

『どうか良い旅を。私達は皆、貴方達の同朋です』

そう言って青の竜は、勢いよく翼を鳴らして、霞む山奥に姿を消した。

「…なんか、果てしなく長く感じた旅だったよ。今までの知識がひっくり返された気分だった」

未だ頭の上に乗っかるピュルマを撫で、ラグはルイスとリディに微笑んで言った。

「でも、楽しかった。期待は裏切られなかったよ。…また次を楽し

みにするね。じゃあ」
「ってラグ、君ここからどうやってオルディアンに帰るの？まさかまた登る気じゃ…」
「そのことなんだけどね…」
リディの制止に、ラグは悪戯っぽく笑った。
「新しく開発した魔術があるんだ。魔術環を使った魔術で、ちょっと魔力消費量が大きいんだけど」
言いながら、懐から何やら紙を取り出して、二人に背を向けると、ラグは何かを唱えだした。
「…召喚…？」
リディは呟き、いや違うな、と否定する。召喚の詠唱ではない。
「…複雑怪奇だな」
紡がれる詠唱を聞いて、ルイスが眉を寄せて言った。
数分後詠唱を止め、ラグは紙を宙に放る。ぼっと燃え上がったそれは、同時に地面に銀に輝く魔術環を描く。
見たこともない魔術環に、リディもルイスも眼を点にした。
二匹の子竜もといピュルマも、それをきょとんと見つめている。
「まだ秘密だし、不安定なんだけど。…転移魔術だよ」
次いでリディもルイスもぽかんと口を開けた。

従来、風魔術による高速移動は出来ても、瞬間的に離れた場所に移動するなどという魔術は、この世界には存在しない。

はず、なのだが。

「もうちょっと安定したら、図教えてあげるね…じゃ、また」

頭に重大混乱を来しているルイスやリディの心情を推し量ることはせず、ラグは軽く手を上げると言った。

「転移ー」

まるで、いい天気だねーとでもいう口調そのままに、ラグと、頭の上のピュルマの姿は消失。

ひゅるー、と寒い風がその場を吹き抜けた。

「「……」」

今の今までラグの立っていた場所を穴が開くほど凝視し、ぽつりとルイスが言った。

「もう、常識ってなんだかわからなくなってきたのは俺だけか」

「…すいません」

別にリディのせいではないのだが、その沈痛な声音に思わず謝ってしまう。

まさかあそこまで青天井だとは思っていなかった。もしあの転移魔術が普及すれば、大陸の交通は一気に塗り替えられるだろう。が、そんなことをラグはこれっぽっちも考えていないに違いない。かと

いって無闇に人に渡す事もしないだろう。馬鹿なのか賢者なのかわからないのは昔からだ。

そこでリディは思考放棄を決定した。なるようになる。それでもういい。

（…リオーラにはヴィンセントもいるし）

たまにはあいつが厄介事を負えばいい。

ひとり納得すると、リディは表情を差し替えてルイスに言った。

「ねえ、ルイス」

「……？」

「この子達は、どういう存在なんだろうね」

「……」

話題転換に、ルイスは目を瞬くが追及はしない。

「あの竜の願いって何なんだろうね」

自分達に命を預けた、その理由はなんだったのだろうか。

「…旅を」

ルイスは蒼穹を仰いで言った。

「旅を続けた先に答えがあると、あの竜は言っていた。なら、旅を続けよう。俺は、自分がなんなのかを知りたい」

一声、ピュルマが高く鳴いた。じっとリディの肩で大人しくしていたのに、急な動作に一瞬驚くが、リディは柔らかいその背を優しく撫でた。

「うん。私も知りたい。あの竜が言う――私達の意味を」

そして二人は歩き出す。最高位の竜の想いを背負ったその背は、新たな道連れをその傍らに、青年の故郷――エーデルシアスに踏み出していった。

第七話　神の愛し子　（5）（後書き）

ラグは魔術においていろいろ規格外です。彼のもう一つの規格外魔術と、子竜の名前は次回更新で出す予定です。

ピュルマは兎＋猫×ふわふわ度三倍　みたいな生き物です（どんなだ

第七話　閑話&後日談（前書き）

今回は一つ一つが短いお話を三本。前半二つは本編に入れられなかった補足です。

第七話　閑話&後日談

第七話　閑話&後日談

●閑話1

ルイス、リディ、ラグが青竜エマルファの背に乗って飛行していた時のこと。

「ねえ、この竜名前なんてつける？」

竜の翼がもたらす風圧を、結界でいなすことを覚えたリディが不意にそんな話題を提供した。

「名前？」

「うん。だって呼びにくいだろ、無きゃ」

確かに、とルイスは頷いた。メルセイエデスのことが気にかかり失念していたが、リディの肩とラグの頭に乗る生き物は、これから自分達と旅を共にするのだ。

ラグが引き取ることになった、今は真っ白い毛皮のピュルマとなっている子竜が、くわりと欠伸をする。反対にリディの肩に乗る方

は、目をぱちぱち、と瞬いて尻尾を振った。前者は「どうでもいいよ」と言いたげで、後者は「名前くれるの？」とでも言いたそうである。

しばらくの間で解ったが、この竜達は人語を喋ることこそ出来ないが、言っている事はしっかり理解しているようだ。こうして仕草で反応を返す。

ともかく、兄弟でもかなり性格に違いがあるらしい。というより、ラグの方は早くも主に似た空気が漂っている。ペットは飼い主に似るというが、早すぎやしないか。

「そうだね…じゃあ……」

わし、と頭の上のピュルマを掴もうとしながらラグは考え、言った。

「じゃ、ウサギ」

恐ろしい沈黙がエマルファの背の上に降りた。心なしかエマルファの羽ばたきも鈍った気がする。ルイスは今のは冗談なのか本気なのか真剣に悩み、白いピュルマは思わずといった調子でラグの頭からずり落ちかける。リディは額を抑えて嘆息した。

「…まだ治ってないの？その壊滅的ネーミングセンス」

昔からラグはネーミングセンスが無かった。拾った亀や猫を飼いながら、それらに「苔」「三角」などと名付けた程に。

「…今の本気なのか？」

ルイスの訊ねに、リディは無言で首肯した。ルイスは半分愕然と

しながら、ラグに訊いた。

「…なんで竜に『ウサギ』？」

「真っ白くてふわふわだから」

「子供かお前は！」

ぱしんとラグの額を叩き、リディは彼の後頭部にぶら下がっているピュルマをひょいと抱き上げてラグの頭に戻した。

「…いや、それ置くとこおかしいんじゃ…」

「君の頭程おかしいものはない。君に聞いた私が馬鹿だった」

ごめんね、という風にピュルマを撫でると、リディの肩のピュルマが彼女の頬に身をこすりつけた。

「甘えてるぞそいつ」

ルイスが手を伸ばすと、しかしピュルマはひょいとルイスの腕に飛び乗った。そのまま彼の肩に到着する。

「…人懐こいな」

若干驚くが、そのふわふわの感触にルイスも頬を緩める。なんだかんだ言って、かわいいものは心の癒やしになるのだ。

「で、名前どうする？」

「だからウサ」

「お前黙れ」

「じゃあワタガシ」

「だから却下」

「ならクモ」
「…白ならせめて雪の方を思いつかないわけ！？」

（…若いとはいいものですね）

ぎゃあぎゃあと大空の下で、果てしなく低レベルの、しかし本人達にしてみれば真剣の、でもやっぱり子供っぽい言い争いが繰り広げられのを聴きながら、エマルファは知らず知らずのうちに笑みをこぼしたのだった。

結局、二匹の子竜の名前は、ラグが連れて行く方がヴァイス、リディ達が連れて行く方がネーヴェとなった。
奇天烈なことしか言わないラグを無視し、ルイスとリディで決めた名前を二匹の子竜は素直に受け取り、エマルファも快く賛成した。
危うく適当な名前を付けられそうになったヴァイスが、それから先ラグの命名行為を禁じる第一人者になったのは言うまでもない。

●閑話2

ジルフェイを登っている時のことだ。

「あ、リディ」

休憩をとっていると、思い出した、とラグが手をポンと叩き、懐をごそごそと探って何かを取り出した。

「はい、これ。ルイスも」

不思議そうな顔で彼を見つめていた二人の掌に落とされたのは、銀色の耳環（ピアス）だった。しかも一つずつ。片方ずつしかない。

「耳環…？なにこれどうしたの」

小指の爪の先に嵌る程の大きさのそれに、リディが首を傾げた。

「リディはわかるよね。風魔術による通信」

「うん」

あっさり頷いた少女とは対照的に疑問符を浮かべたのはルイスだ。彼にラグは説明した。

「まだ未発表の通信手段なんだけどね…風精霊を使役する人同士しかできないんだけど、風精霊を送りあって言葉を届けるんだ」

「要するに、遠く離れてても、まるですぐ近くにいるみたいに会話出来るんだよ」

ルイスは耳を疑った。この大陸において、遠く離れた人と人とを繋ぐ手段は、手紙か狼煙しかない。もしそれが本当なら、歴史に残る発明に間違いない。

「…もっとも、まだ僕とリディとへ…もう一人しか知らないし、相手の大体の位置がわかってないと駄目なんだけど」

「…三人しか、知らないのか？」
「君入れて四人。この方法は、一歩間違えば怖いことになる。バラす時は大陸全土って三人で決めたんだよ」
リディはさらりと言った。その意味を、明確にルイスは察する。
もしこの力が、ある一国のみで伝わったら。その国は、戦になった時に、他とは一線どころか何線も画す情報力と指揮力を持ってしまう。
ルイスはこの発明をしたのがラグであることに感謝した。欲や栄光に目が眩む者は多い。そしてその結果で命を失う者は、もっと多い。
それをちゃんと理解し、人の犠牲や争いを防ごうとする彼（ラグ）が、この力の持ち主で良かった。
「…俺も絶対に言わない。話してくれてありがとう」
請われる前に自分から誓うと、こっそり息を詰めていたラグとリディはほっとして笑った。
「…で？それがどうかしたの？ラグ」
「ああ、そうそう…この耳環付けるだけで、それが出来るようになるんだ」
「…はい？」
唖然として、リディとルイスは掌にちょこんと乗る耳環を見下ろした。見る限り、何の変哲もない、銀色の輪だ。
「それミスリル製だから、上手く魔力が溶け合って感じられないみ

たい…。その中に、僕の風精霊の配下の風精霊が封印してある」
「…はい？」

なんだか「はい？」しか言ってないなと頭の片隅で思いつつも、リディもルイスも耳環を凝視するのを止められなかった。
じいっと見つめると、ようやく微かに魔力が揺れているのが感じ取れた。
魔術師として高位の腕を持つ彼らでさえこれなら、大半はどれだけ視ても気づけないだろう。それくらい微弱にしかわからない。

「多分そのうち召喚でも出来るようになるとは思うんだけど…とりあえずは僕の精霊に頼んでみた」
「頼んでみたって、お前…」
「だから、本来この精霊に契約主はいないんだけど…使用者の魔力を喰う仕組みになってるから。普通に魔術を使うのと同じくらいは魔力消費するよ…」
「お前に常識って、あるのか？」

最早驚きも呆れに変換され、ルイスが言えば、ラグではなくリディが答えた。

「ない。言っただろ、ラグに常識を求めるな」
「…そうだったな…」

ルイスはうなだれた。
ラグは説明を続ける。

「当然だけど…魔術はその耳環を持ってる者同士の間でのみ使える。相手が外してたら無意味だから、肌身離さずつけて。あくまで魔術の一つだから、魔術禁止結界の中では使えないよ」

「わかった」

ルイスとリディは頷き、リディは耳朶に小さな輪を通した。ルイスは既に耳朶に青玉のピアスもつけているから、少し上に付ける。

「あとリディはこれも」

そう言いながらラグがリディに渡したのは、小さな紙きれだった。しかし蝋で封がしてあり、何なのかは分からない。

「何これ」

首を傾げたリディに、ラグは少し笑って説明する。

「必要になる時が来るかはわからないけど…『僕』が必要だと思った時に、それ開けて。ただ一回こっきりだから、よっぽどの時以外開けないでね」

「…よくわかんないんだけど」

「わかんなくていいよ。とりあえず失くさないように持ってて」

「…わかった」

頷いて、リディは紙を荷物の中にしまった。ラグのもの言いは訳がわからないことが多いが、役に立つこともまた多い。長い付き合い上、よく知っていた。

「じゃあリディ、そのうち耳環の使い方は教えてあげて。僕からの成人祝いはそれ、ルイス」

「…ありがとう。お前が成人した時の祝いに困るな」

ルイスの冗談混じりの礼に、ラグは大真面目な顔で答えた。

「フェニックスの尾羽」
「……」
「……」

ちなみにフェニックスとは、秘境に棲み、最も貴重と言われている鳥のことだ。

凍りつく二人を眺め、ラグは内心で少し笑った。

――だって、小さな頃からずっと僕の大切な人だった娘を奪っていくんだもの。

これくらいの意地悪くらい、いいよね？

●後日談

「ふー、ただいまー」
「お帰りなさいませ、ラグ様」

ラグが転移魔術でリオーラの自室に着くと、まるで待っていたかのように執事が姿を現した。否、実際待っていたのだろう。

「アイオン、お茶入れてくれる」

「承知いたしました」

「ちょっと出かけてくる」と言ったきり何日も家を留守にしたことについても、この執事は何もとがめない。そこがラグは好きだった。執事からしてみれば、彼の主とその幼馴染の少女に仕えて早幾年という具合なので、もはや慣れっこといった風情なのだが。

「ああ、あと肉。小さく切って」

「肉…ですか？」

意外なものを聞いた、という顔で執事はラグを見た。そして、彼の頭を見て若干眉を上げた。――なんだか、ふわふわ具合が五割増しな気がするのは気のせいだろうか。

「うん。この子に」

と思ったら、ラグはひょいと己の頭に手を遣り、なんと上半分を持ち上げた。執事は少なからずぎょっとしたのだが、ラグの手に持たれたそれがぴくりと身動きしたことで、ようやくそれが主の頭の一部でないと気づく。

「ラグ様…それは」

「うん、ピュルマ。今回の旅先で預けられたんだ」

「預けられた、ですか」

うん、とラグは頷いた。その赤い目は、長年仕えている執事から見ても、何を考えているかはわからない。ただ、優しい色を灯しているのだけはわかった。

「お肉、でしたね。すぐお持ちいたします」

にっこりと微笑んで、老執事は踵を返す。久方ぶりに楽しそうな主を見たことで、彼の表情筋も自然と緩んでいた。

厨房に肉を切らせ、お茶を手ずから入れ、次いでに菓子も用意して台車に乗せて運んで行くと、ラグは何やら手帳を見ながらぶつぶつと呟いていた。

「お茶をお持ちしましたよ、ラグ様」

根っからの研究者肌の主は、一度研究に没頭してしまうとなかなかこちらの世界に帰ってこない。なのでまだ集中が浅い内に連れ戻そうと言う老執事の目論見は見事に効を奏した。

「ありがと。ヴァイスの肉も」

「ええ。あとお菓子どうぞ」

ぴょこぴょこと近寄ってきた白い生き物に肉の乗った皿を出してやり、主が座る椅子の机には紅茶と菓子の皿を乗せる。

舌鼓を打ちながらそれらに手を伸ばしたラグに、執事はふと思い出して何の気なしに言った。

「そう言えば、隣国エーデルシアスに新たに王女様が誕生されたそうですよ。ひと月後の式典に向けては王太子殿下の代理でサーレクリフ様が発たれたとか」

ぴたり、とラグの手が止まった。数秒沈黙し、恐々と言った体で執事を見上げる。

「エーデルシアス？クリフが？」

「ええ。まあ、王太子殿下が行かれないのはいつもの事でしょう」

「……」

無言でラグは頭を抱えた。執事は怪訝な顔でその様子を見やり、首をひねるもののさっぱり原因がわからない。

ラグはと言えば、あまりといえば余りのタイミングに頭痛を覚えていた。

あの二人が向かったのはエーデルシアス。

サーレクリフが向かったのもエーデルシアス。

（…まあ、頑張れ。リディ）

遠い目になる自分を自覚しながら、ラグは運の悪いとしか言えない幼馴染に向けて、ささやかな祈りを送ったのだった。

第七話　閑話&後日談（後書き）

サーレクリフが誰かは次の話で。名前だけは既出ですが。
今回の閑話ですが、２の方は結構本編にかかわってきます。

第八話の更新は少し遅れるかもしれません。読んで下さっている方は、お待ちいただけると幸いです。

第八話　発覚と未来　（1）

第八話　発覚と未来

秋も深まる頃。

エーデルシアスの南西部、オルディアンとの国境を越え、ジルフェイ山脈を背にすること数十キロの場所に位置する街、シュリアグランデではここ数ヶ月、奇怪な事件が起きていた。

カランカラン、と入り口の扉にぶら下がるベルを鳴らしながら屋内に入ったリディは、カウンターの一席に座る黒髪の相棒を見つけるとすぐ、その隣にどさりと腰を下ろした。

「どうだった？」

ルイスの訊ねに、カウンターの主に食事を注文してから、彼女は顔をしかめて首を振った。

「全然駄目。痕跡一つ見つからない」

「…そうか。これでもう九件目…俺達が関わって三件目だってのにこのザマか…」

「『ヘキサ』の名を冠すあんたらでも駄目なのか？」

「……」

横合いから入った茶々に、今度は二人して渋面になった。ルイスの肩で丸まっていたピュルマ――ネーヴェがぴゃあ、と鳴く。

二人がこの街に着いたのは、一か月程前の事だ。まず資金の補充に赴いた狩人協会で二人が言い渡されたのは、先代『ヘキサ』の狩人パーティの解散に伴い、彼ら二人にその名を背負えという辞令だった。通常繰り上げ式の『十強』順位においては異例の事である。

当然二人はびっくり仰天し、二人パーティであることを理由に取り下げて貰おうと反発した。しかし、狩人にとって、狩人協会の指令は絶対である。結局覆す事は出来ず、かくして『自由時間（フリータイム）』は十強の一つ『ヘキサ』となったのだった。

「だって夜間外出禁止令も出してるし、見回りもしてるのになんで被害出るの」

「見回り自身がやられてるしなあ…」

そしてもう一つ――彼らには現在この街で起きている事件を解決せよという辞令も下っていた。

「眼を抉り取られる、とか。考えただけで怖気が走るよ」

――ここ、シュリアグランデを二ヶ月前から襲う、被害者は既に九人に及ぶ事件。

夜、街の人間が何者かに襲われ、しかし犯人は未だ捕まっていな

い。

今のところ被害者は、全員が片目を抉り奪われていた。

「被害者に共通点はなし。男四名女五名、年代は十代から四十代とまちまち。生存者は五名、死亡者は四名。いずれも出血多量」

報告書を読み終え、シュリアグランデ狩人協会支部長アリスティアは溜め息を吐いた。

アリスティアはもう五十の半ばを越えるが、青い眼が力強い意志を放つ闊達な女性である。かつては十強として名を馳せたパーティの弓士であり、その腕は老いたからといって褪せてはいない。

「被害者九名の内二人は狩人…か。全く、何だというのですか」

狩人は対〝人ならざるもの〟戦闘の専門家（スペシャリスト）だ。個人で力の強弱はあれ、少なくとも一般人とは一線を画した強さを有している。その

狩人がやられるということは――

「上位の魔物や悪魔と考えた方が良さそうですね…。ここに『自由時間』…いえ、『ヘキサ』がいて良かった」

殺された狩人二人は、まだ駆け出しだった。だから弱いという訳ではないが、数多の狩人の頂点に立つ『十強』は、この状況下とても心強い。

「私も昔のように体は動きませんものね」

弓の腕は落ちていないとはいえ、筋力や体力は二十代の頃に及ばない。出来るのはせいぜい援護位だろう。

民からは既に王城からの援軍を求める声が上がり、実際に早馬を送りはしたが、よりによってこの時期だ。動かせる数は少ないだろう、とアリスティアは踏んでいた。

今――エーデルシアスは、八日後に控えた王女生誕式典の準備が大詰めに迫り、首都グリアンはその為に奔走している。大陸各国から代表として王族達が一同に会す為、警備、もてなしとどれを取っても最大級の気を使っているはずだ。

エーデルシアス王宮がいくら有能と言っても、割ける人員には限りがある。もしこれが普通の事件だったならば、周辺の街から警備隊の派遣を頼んでいるところだが、彼らはあくまで対人戦闘を主としている。狩人ですら既に二人やられているのに、彼らより“人ならざるもの”に慣れていない者達を呼んだところで、結果は見えている。だからこそアリスティアは現在、シュリアグランデ警備隊は導入せず、狩人達だけで事態にあたっているのだ。

こうした指示を出しておきながら、一向に犯人を捕まえられない狩人達に対しては不満も上がっている。が、この大陸では『普通』の事件ならば各街の警備隊が、明らかに『異常』な猟奇事件ならば狩人協会が中心となって動くことになっている。

今のこの状況が『異常』であることは、火を見るより明らかだった。

「一刻も早く片付けねば…」

これ以上の犠牲者は出したくない。そのために打てる手は、もうあまり残されていない。

「この手はあまり使いたくなかったのですが…」

アリエルにいる旧友には殺されそうだけれど――仕方がない。

アリスティアは瞑目した後、人を呼んで指示を出し始めた。

――――――――――――――――――――

その夜。

「今度は本当の囮捜査、って感じだね」

普段の戦闘に適した服を脱ぎ、街の娘の服を着たリディは、自分の姿を見下ろして苦笑した。

「もっと早くからこうすべきだったんだ」

こちらも街に合った服を身に付けたルイスが不満そうに言う。

彼ら二人は、この街について直ぐに起きた、通算七人目の犠牲者が出た後真っ先に、アリスティアに囮捜査を提案したのだが、当のアリスティアはうんと頷かなかった。まあ、既に狩人二人が犠牲になっているので慎重になる気持ちもわかるが、そこは仮にも『十強』に選ばれた人間の力を信用してほしいところである。

「ネーヴェはルイスが連れてって。私のが五感は鋭いし」

白いふわふわの毛玉――しかし実態はこの大陸のヒエラルキーのトップに君臨する竜の子供――をルイスの肩に渡し、リディは言った。

「わかった。でもいつもの武器はねえんだから、無理すんなよ」

「そっちこそ」

囮捜査の都合上、二人共いつも腰に提げている剣は使えない。代わりに少し長めの短刀を仕込んではあるが、心許ないのは確かだ。

「じゃあ、見つけたら魔術を打ち上げるってことで」

「頼みます、二人共。どうか気をつけて」

その様子を見守っていたアリスティアは、彼らに頭を下げた。ルイスとリディは肩を竦め、「努力します」と口を揃えた。

リディと別れ、夜の、人気がまるでない街を歩きながら、ルイスは知らず詰まる息を何度目が吐き出した。

この事件だ。外出禁止令が出ていてもいなくても、外に出る人間は少ない。しかし、街中が死んだように静かなのは、不気味が過ぎた。

（…が、国（エーデルシアス）の惨状をほっとく訳にはいかない）

ここは彼の故郷であり、彼の国である。王城が手を伸ばせない今、せめて自分が片付けないと――。

と。不意に鋭くネーヴェが鳴いた。次いで襲ってきたぞっとする程の寒気に、ルイスは咄嗟に仕込んでいた短刀を抜いて飛び退さる。闇から伸びた手が、突き出した短刀とかち合って硬い音を立てた。

「…出たか」

視界の先で揺らめく影を見据えて唇を舐めると、ルイスは迷わず氷を空に打ち上げた。

街を一人で徘徊していたリディは、遠くから伝わってきた気配の揺れに、足を止めた。そして見上げた夜空に、赤みがかった円い月を背景に、薄青い大きな氷の結晶が上がっているのを見つけて、迷わず石畳を蹴る。

「ウェルエイシア」

走りながら風精霊の名を喚び、風を足に纏わせて、一気に速度を上げた。次々と角を曲がり、一分と経たずに目的地に到着する。狩人の中で誰よりも早く現場に着いたリディは、絶句した。

ルイスが石畳に仰向けに倒されて、その腹の上で黒いマントを被った『何か』が彼の顔に手を伸ばしている。

その指が鈍く光り、尚且つ今は閉じている紺碧の瞳に向かっているのを悟り、リディの頭は瞬間沸騰した。

「ルイスからっ…」

叫びながら仕込み刀を抜き、怒涛の勢いで黒い影に迫る。

「離れろッ！！」

大きく、しかし必殺の勢いを持って振り抜かれた刃は、けれどさっとマントが飛び退いた事によって空を切った。ルイスと、ルイスの下敷きになっているらしい（ルイスの体躯の横から白い毛がバタバタともがいている）ネーヴェを庇い、リディは黒いマントを対峙した。

「ルイスッ、生きてる！？」

呼び掛けるが、反応はない。が、死んでいる訳ではなさそうだ。どちらにしろ起きる気配のないことに顔を歪めて、リディは黒マントに激昂した。

「お前、ルイスに何したッ！？」

「……」

黒マントは何も答えない。ゆらり、と姿が揺れるのみだ。フードの奥は暗く、顔は見えない。

「答えないなら…」

だん、とスカートを払って間合いに踏み込む。

「吐かせるまでだ！」

跳躍した勢いをそのままに短刀を振り下ろすが、それは再び避けられる。けれど今度は予期していたリディは、軽くステップを踏む

と、横合いから深く切りつけた。

「……！」

フードが裂ける。次いで黒マントの胴部を、強烈な蹴りが襲った。

「…ッ！」

「…ちっ、浅いか」

軽く三メートル程吹っ飛んだ相手に対し、リディは舌打ちした。彼女の心算では五メートルはいった筈だが、スカートに邪魔された。だから動きにくい服は嫌いだ。

よろめいて立ち上がったマントに、リディが三度目の攻撃を仕掛けようとした時、辺りの路地から叫び声が響いた。

「いたぞ！」

「こっちだ！」

その声に一瞬リディが気を取られたのを見逃さず、黒マントは身を翻して跳躍した。軽々と屋根に飛び乗り、重量を感じさせない速さで走り去っていく。

「逃がすなっ！」

「追えー！」

黒いマントを照らすランプの灯りと怒鳴り声が街の壁を反射していくのを一瞥して、リディは追う気の欠片も見せずに踵を返し、倒れているルイスに駆け寄った。ようやく彼の躯の下から抜け出せたらしいネーヴェが、みゃっと鳴いてリディの肩に飛び乗る。しかし

それに対しリディは何も反応せず、ルイスの脇に跪く。

「ルイス、起きろ！何があった！」

しかし、青白い顔をした彼が起きる気配はない。唇を噛み締めて、リディは彼の首筋に手を当て――ぬるりとした感触に眉をひそめた。

（血……）

脈の拍動を確認してから離された指には、真新しい血がべとりと付いている。しかし、ルイスの服の襟に血は殆ど付着していないし、肝心の傷痕も見当たらない。

「…何だっての？」

怪訝さを込めた呟きに、彼女の肩でネーヴェが何やら訴えるように鳴く。――が、まだ幼い竜であるネーヴェに人間の言葉は話せない。

仕方なく、ルイスを担ぎ上げてリディは地面を蹴った。風の力を借りつつ狩人協会へ戻りながら、リディは不吉に赤みを帯びた月に、舌打ちした。

（…どうにも、嫌な感じだ）

「で、貴女はその場で一番力が有ったにも関わらずその黒マントを追わなかったのですか」

結局、その夜犯人は捕まらなかった。追った狩人の話によると、細い路地の袋小路に追い詰めた筈が、狩人達がそこに駆け込むと、その姿はまるで煙のように消え失せていたという。

まあそうだろうな、とリディは思った。地面から大した予備動作もなく屋根に飛び上がったのだ。袋小路など路地の壁を蹴って登るなりなんなりすれば、脱出は容易いだろう。

「いくら貴女のパートナーが倒れていたからといって、優先順位というものがあります」

ルイスも未だ昏睡状態だ。命に別状は無いということだが、何故か大量に血を失っているらしい。徐々に血色は戻ってきているものの、普段の彼からすれば恐ろしい程に生気がなかった。

「聞いているのですか、リディ・レリア」

「――聞いてるよ」

咎める響きに、リディはぞんざいに返した。

今リディは、昨日の件でアリスティアに呼び出しを食らっていた。犯人には逃げられたが、もし飛び抜けた運動能力を持つリディが追いかけていれば、捕まえられたかもしれない。あくまで可能性だが。

しかし可能性は可能性だ。その機会を無視し、死んでもいない狩人一人を運んだ彼女の行動を、他の狩人達は批判していた。

けれど、部屋でぴくりとも動かず眠り続けるルイスに、リディが何を思ったか。もし今のリディの表情を、アルやラグあたりが目にしていれば、全速力で逃げ出しただろう。

しかしそんなことはわからない、一同に集められた、この事態にあたっている狩人の一人が、怒気も露わにリディに詰め寄る。

「レリア、貴様アリスティア様に向かって…」

「煩いよ、ボンクラが」

氷のように冷たい声が、狩人の声を遮った。一見何の感情も移していない風に見える金の瞳が、しかし凄まじいまでの冷気を伴って、その場を貫く。

「袋小路如きで油断してみすみす取り逃がしたのは君達だろ。自分を棚に上げ、強者(虎)に頼るのか？とんだ弱者(狐)だな」

「何だとっ…」

反射的に反較しようとした男は、しかしリディに顔を正面から向けられ言葉を詰まらせた。

「優先順位？はっ、糞食らえ。君の価値観を私に押しつけるな」

「では、大衆の命より貴女はパートナーの傷を優先するとでもいうのですか」

アリスティアは、さすがというべきか落ち着いていた。しかし、その彼女も続くリディの言葉に声を失くす。

「ああ。天秤にかけられたなら間違いなく私はルイスを選ぶよ」

リディはくすりと笑って、踵を返した。

「人によって大事なものなんて違う。貴女がこの街の人が一番大切で、ルイスの命が二の次ならば、私はその逆なだけだ。…けどルイスはこの街を守りたいと思ってる――だから」

リディはドアから出て行く寸前で足を止め、アリスティアを振り返って笑んだ。ただし、それを笑みと捉えるかはそれこそ人によって違っただろう。

元々美麗に整った顔立ちが、冷たく甘く微笑み、けれど猫を思わせる金色の眼はひとかけらも笑ってはいない。さながら獅子が獲物に狙いを定めた瞬間のようだ。

「要はあのマントを殺せばいいんだろう?それくらい、やってあげるよ」

絶対零度の、しかし地獄の業火の如く苛烈なオーラを纏って、リディはその場を後にした。

歩きながら、考える。

(ルイスが氷を上げたということは、その余裕はあったということ)

けれど実際には、彼はあと少しで眼を抉り取られるところだった。

(それ程大きな大気の乱れは感じられなかった…つまり、ルイスは魔術は使わなかった)

しかしそれはおかしいのだ。彼もリディもマズいと感じたら魔術を迷い無く使う。魔術を打つ間もなくやられたなら兎も角…時間的にそれはないだろう。そうならまずリディが着いた時点で死んでいたはずだ。

なら何故むざむざとやられたのか。

（蹴った感触…人型だった）

加えてあの身のこなしだ。常から人の姿でいなければ、ああも機敏には動けまい。つまり人型の魔物だ。

（人間って線は…ないな。魔術も無しにあの高さを飛ぶのは無理だ）

リディは自分が、普通の人間よりかなり身体能力が高いと自負しているが、その彼女も、魔術の助けなしに屋根の上になど飛べない。そしてあのマントに、逃走時魔術を使った気配は無かった。

（人型、かつ…そう、ルイスの意表を突いた何かを持ってるもの…）

しかし、漠然としすぎていてわかりそうにない。彼女はラグのように知識量が豊富でないし、ルイスのように頭が切れる訳でもない。

「被害者に訊いてみるか」

今彼らは神殿にいるはずだ。

リディはそう決めると、狩人協会を出て、一路神殿に向かった。

その髪色の如く苛烈な炎のように少女が去っていったあと、集まっていた狩人達は一斉に張り詰めていた息を吐き出した。中には知らず震えていた己の手を握り締めるものまでいる。

「…一瞬殺されるかと思った」

呟いたのは、彼女の態度を非難した男である。周りにいた狩人も同意を示した。

「あれは怒ってる、なんてもんじゃねえな。あんな小娘が出して良い殺気じゃねえ」

「二人パーティにして『ヘキサ』の名前は伊達じゃないということね」

口々に囁きながら、けれど一同の顔には一種の安堵すら浮かんでいた。

それは勿論本人（リディ）が出て行ったこともあるが――何より、この事件が終息するであろうという見込みの為だ。あの怒り狂った少女を前にして生き残れるのは、恐らく竜か魔族かぐらいしかいないだろう。

「デキてる雰囲気じゃなかったのになあ…やっぱそうなのかなァ」

「色ボケは黙ってろや。あれは仲間意識だろ」
「なんでそう言い切れんだよ」
「あの子からは女の匂いがしないもの」
「…確かに」
「どっちかっつーと獣の気配だな」
「言えてる」

「…いい加減になさい」

狩人達の会話を、額を抑えて聞いていたアリスティアは、うんざりした調子で止めた。

「人のことをあれこれと詮索する暇があったら、あなた方も引き続き見回りにあたりなさい。前にも言ったように、…死なないのが大前提です」

リディは彼女を非難したが、アリスティアとて狩人の命が街人より軽いなどとは思っていない。ただ、彼女の狩人協会支部長としての任は、狩人を使って、か弱い街人を守ることが第一なのだ。
それを、大人の狩人達はよく解っている。だから皆、一様に首肯した。

「はっ！」

第八話　発覚と未来　（1）（後書き）

一週間空いてしまいました。すみません。

が、さらに申し訳ない話なのですが、
この話を少し早目のペースで掲載して、短い番外編を載せたら、連載を休止したいと思います。詳しくは活動報告をご覧ください。

と言いましてもこの第八話、無駄に長い予定ですので、休止までの数話、もうしばらくお付き合いいただけたら幸いです。

第八話　発覚と未来　（2）

第八話　発覚と未来　（2）

神殿とは、昔は文字通り神を祀る場所であったらしい所のことだ。しかし何百年も前に、『神』を崇める信仰は既に途絶えていた。この大陸は基本的に無信仰で、でも人々の意識の根底に、『この世の至高の存在は竜』というものがある。竜は決して伝説の存在などではないし、崇め奉った所で何か人間に干渉する訳でもない。

つまり、『心の寄る辺』としての『神』は竜であるが、『神頼み』としての『神』は存在しない。

うっかりその対象にも竜がなる所だったらしいが、そんなことをしているくらいなら自分でやり遂げる為に動け、と時の竜が言ったとか言わなかったとか。つまりは遠い昔に神の存在論争は終止符を打たれているのである。

しかし、建物のとしての『神殿』は未だ各地に残っている。しかも、神を祀る場所であったからか、やたらと丈夫で作りが凝っている。これを壊すのは勿体ない、しかし住むのは嫌、という議論の末、神殿は『怪我人を治療する所』と相成った。常時治療術師と薬師が数名詰め、怪我をした人、病気を患った人の治療に当たっているのだ。

「…ここか」

この件の生存者も、何名かここでまだ手当てを受けているはずだ。リディは事件当時の状況を訊こうと思ってここへきた。だが――。

「…覚えてない？」

目の前で、片目に痛々しい包帯を巻いた男、残った緑の右目で済まなそうに頷いた。

「後ろから襲われて、振り向いた所までは覚えてるんだが…、その後の記憶がぷっつりと無いんだ。他の人もそうだと言っていた」

「振り向いた時に、顔とか見なかった？」

「見ていたら狩人協会に伝えているさ。…見たかも知れないが、覚えていないんだ」

リディは唇を噛んだ。そうだろう。もし事件の時の有力な状況情報があったら、狩人協会（アリスティア）を通じて渡されているに違いない。自分の浅はかさをリディは呪った。

が、続けられた男の言葉に彼女は眉を寄せる。

「…しかし…狩人協会には言ってないし、今はそれ程感じないが、目が覚めた直後には、かなり違和感を感じたんだ。…記憶がないんじゃなくて、奪われたような」

神殿を後にし、人気の少ない通りを歩きながら、リディは今し方の情報について考えていた。

（記憶が奪われたような、か）

確かに男が狩人協会に言わなかったのも無理はない。漠然としすぎていて、言えなかったのだろう。だが残っていた気がかりを、言わずにもおれなかったということだ。

（収穫としていいのかどうか微妙なところだな…）

昼ご飯でも食べながら考えよう、と歩いていたリディの背に、不意に「そこのお嬢さん」と声がかけられた。

ちらりと周りを見るが、『お嬢さん』と形容出来る年齢の者は彼女くらいのものであったので、仕方なしにリディは振り向く。

「…何ですか」

「ちょっとお尋ねしたいのですが」

声の主は、三十程と見える男だった。旅装に隠れてはいるが、体つきはかなり筋肉質のようで、腰には剣も佩いている。

リディは眉をひそめ、それと気付かれないように足をずらした。

…剣をいつでも抜けるように。

「この街、何か起こっているのですか？やけに人気が無いし…ピリピリしている。貴女も」
「…貴方、旅の人？」
「ええ。王女殿下の生誕を聞きつけ、故郷に帰ってきたところなのですが…」
「……。今この街は、猟奇殺人事件が起こってるんですよ。夜は絶対出歩かないで下さい」

詳しい事は街の人間に訊いて下さい、と言い捨ててリディは踵を返した。しかし、再び呼び止められ、足を止める。

「あと、人を探しているのですが」
「…どんな人？」

出した声は平坦であった、と思う。半分だけ振り向いて、男の顔を伺った。
短い干し草色の髪に、鈍角的な顔の男は、柔和な――しかし目は顔程笑っていない――表情で、リディに言った。

「長めの黒髪に、深い蒼の瞳。年齢は二十歳くらいで、身長はあなたより頭一つと半分くらい高いでしょう。剣を帯びているとも思います」

リディはすっと目を細めた。笑う男の表情は読めない。数秒後、リディはすいと肩を竦めた。

「さあ。私は会ってませんね。私も流れ者ですから」

今度こそ彼女は歩き出す。今度は呼び止められることはなかった。

歩き去る少女の背を見つめ、男は足早に路地に入った。すぐさまその傍らに黒装束の人影が降り立つ。

「どうだった」

「さあ、知らないと。だが」

「信じるのは愚かだな」

「ああ。――尾けろ」

男の言葉に頷いて、黒装束は再び姿を消した。

（…尾けられてる、な）

手近な食事処に入って昼ご飯を食べながら、リディはちらりと目を動かした。

…先程男に話しかけられた直後から、リディを尾けている男がいる。しかも相当な手練れだ。かなり集中していないと気配が感じ取れない。

（ルイスの追っ手か…厄介そうだな）

ルイスはゼノでの一件で、薄々彼女の正体を察していると思う。だがリディ自身はルイスの正体は全然解らない。だが彼女にとって重要なのは『今』であり、過去はどうでも良かった。

ただ見るに、どうも自分と同レベルかそれ以上に厄介そうだ。

（まあ、狩人協会にいる限りは大丈夫だろ）

ルイスは狩人ということで、神殿ではなく狩人協会の一室で眠っている。そして狩人達は、無闇に人の過去を詮索する事を嫌う。だから、あそこにいる限り彼は安全な筈だ。

「問題は私の方、か」

スプーンを口にくわえてリディは唸った。

眼。

記憶。
人型の魔物。
夜。
血。

「――血？」

自分の中で浮かんだ単語に、思わずリディは口に出して眉を寄せた。なぜ血という単語が――。

「……」

待て。あの時ルイスは、何故倒れていた？大した外傷もないのに。当て身を食らった可能性もあるが、それだけならこうも目覚めないのはおかしい。なのにルイスは、血の気が殆どない白い顔で――。

「――…」

その時何かが脳裏をかすめた。いつか、誰かが何かを話していたような…。

（――で、この魔物は記憶を消すんだって。自分の存在がばれないように）

ガタンッ、とリディは椅子を蹴立てて立ち上がった。周りの、数少ない客がびくっとした顔で彼女を見るのもお構いなしに、そのままの態勢で立ち尽くす。

「そうか……」

もしかしたら、そういうことか。
確証はない。裏付けも無いに等しい。だが――尻尾は掴んだ。

「囮作戦、続行だ」

にやり、と一人人の悪い笑みを浮かべ。リディは周りの客が怯えるのに一切気付かず、食事処を飛び出していく。その背をそっと黒い人影が追ったが、リディの頭からはすっかりその存在は消えてしまっていた。

夜。

『彼女』は夜道を歩いていた。

――ここのところ、街の人間達も自分に警戒して、夜歩きをする者は殆どいない。代わりに、そこかしこで緊張と敵意を漲らせた、『普通でない』人間達が目を光らせている。大方自分を捕らえようという狩人（羽虫）達だろう。――が。

彼女はくすりと嗤う。

――狩人だろうがなんだろうが、自分と一真正面から向かい合って《・・・・・・・・・・》、敵う者などいない。昨日の、あの尋常でない魔力を持っていた男だって自分の前では無力と化した。

そこで彼女は、顔をしかめる。

あの時あのタイミングで邪魔が入らなければ、あの男の眼を奪えたのに。あの忌々しい、紅い髪の小娘――。

――ああ、だが。

あの小娘の眼は、良い色をしていた。あの男に負けず劣らず、澄んだ鮮烈な彩を。何より――美味そうだ。

昏い笑みが、彼女の唇に浮かぶ。

――あの様子では、激怒して再び自分を探しているだろう。あの男が小娘にとってどういう存在かなど興味は無いが、冷静さを失ってこの街で彼女を待っているなら、好都合。あの時は不意を突かれたが、今度は――。

偶に視界に入る人影を慎重に避ける。どいつもこいつも不味そうなのばかり。

どこだ――？

どこかに必ずいる。あの鮮烈な、金の眼の持ち主。

勝手知ったる街をゆっくり歩いていく。夜の闇はいよいよ深い。街全体が、押し殺したように静かだ。――押し殺しているのが自分だということに、彼女は愉悦を抱く。

そして。

いた。

路地の先で翻った、紅い髪。

「――見つけた」

音も立てずに忍び寄る。そのまま襲えれば簡単だが、そうもいくまい。現に娘は振り返った。猫科のような瞳が、敵愾心に満ちて彼女を貫く。

――思う壺だ。

彼女はニヤリと唇を歪めると、被っていたフードを自ら取り払う。そして、娘に見えているだろう顔で嫣然と笑んだ。――思惑通り、娘の顔が驚愕と困惑で、歪む。その機を逃さず娘の背後に回り込み、その白い首筋に――

バリッ――！！

何が起きたのかわからぬまま、彼女の躰に衝撃が走った。

――そんな、まさか。

彼女は有り得ない、という思いに満たされたまま、地面に倒れ込む。彼女の視線の先で、娘が乱れた襟元を直し、凶悪に嗤う。

「やっと会えたね。――吸血鬼（ヴァムピール）」

リディは目の前に倒れ込んだ黒いマントに、自分の策が見事効を奏したのを見て、笑った。――多分、今自分の顔は凄く悪人面だろう。まあいい。誰も見てないし。

「な、んで…」

黒マントが動かない躰を戦慄かせて、リディを見上げる。蹴りつけ様、思いっ切り雷魔術を叩き込んでやったので、もう喋ることすらままならないだろう。そして、その顔は予想していたものだ。

「君は――淫魔（サキュバス）と吸血鬼（ヴァムピール）のハーフか何か？その顔――『対象者が最も強く想う者の顔の幻』を見せるんだろう？」

今――彼女の目の前で驚愕の表情を浮かべているのは、ルイスの顔だ。

愕然とする黒マントを見ながら、リディはこの結論の経緯を思い返した。

――――――――――――――――――――――――――――

『ああ、それ――多分、吸血鬼か淫魔の仕業じゃない…？』

風魔術による通話で、リディから事情説明を受けた、遠く離れたオルディアンにいる幼馴染はあっさりとそう言った。

やっぱり、と思いながらも理由は、と訊ねたリディに、幼馴染は淡々と説明する。

一点目は、ルイスの容態である。大した傷も無いのに眠り続け、血の気がない。

――文字通り、血が無かったのだ。発見した時、襟元には血の痕があったのに傷がなかった。吸血鬼（ヴァムピール）は獲物の血を吸った後、バレないようにその痕跡を消すという。ルイスの様子は、それに合致する。

第二に、神殿にいた男の話だ。彼は『記憶が奪われたように感じる』と言っていた。…そんな芸当が出来るのは、人型の魔物――その中でも知能が突出して高い、吸血鬼（ヴァムピール）や淫魔（サキュバス）、もしくは悪魔だけだ。

そして淫魔（サキュバス）の最も知られた能力として、幻惑がある。淫魔（サキュバス）達はその幻惑能力で人を誑かし、精気を奪い取るのだという。

『で、その幻惑能力ってさ…『強く思う者の顔』って説があるんだよね…』

「強く思うものの、顔？」

『うん。数百年前にテーリアでおんなじような事件があったらしいんだ。おもしろかったから覚えてるんだけど…。確か、何十人かで特攻したら、みんながみんな違う顔を見て、それで気付いたんだって。頭いいよね…』

確かにそれならどんな強者でも、必ず隙は生まれる。

「でもわからない。血ならともかく、なんで目を？」

『ん、確証はないけど…カササギって、宝石好きでしょ…？』

「は？」

『それとおんなじじゃないかな…。吸血鬼とか淫魔とかって、綺麗…というより、『美しい』ものが好きだし。ルイスの眼も、綺麗な蒼玉（サファイア）みたいでしょ…？それを狙ったんだとするなら…』

「全部、辻褄が合う」

にっこりと笑んでやった。自分に出来る中で最高に美しく。最悪に凶悪に。

ラグから話を聞き出した後、リディはすぐさま準備に向かった。切る直前、ラグが珍しく慌てたように呼び止めようとした気がするが、それどころではなかった。多少気になるが、まあ後で聞きだせばいい。

黒マントは黙り込んでいた。その顔は未だルイスのままに見えたが、リディは懐から小瓶を取り出して、遠慮容赦なく中身を黒マントにぶっかけた。

「……！」
「『解除』」

パン、と何かが砕けるような音がして、一瞬ルイスの顔がぼやける。――ついで顕れたのは、ルイスとは似てもつかない、金髪の肉感的な女の顔だった。

「それが君の正体か。女だったんだね」

リディが今ぶっかけたものは、幻惑を解く効果のある薬草を調合した液体だ。魔術薬屋に普通に売っている。人間は、魔術によって幻惑や催眠を行えない代わりに、薬草技術を持っている。それを持ってすれば、かなり応用が利く。

「まあ女だからといって容赦なんてしないけどさ」

今のリディを誰かが見れば、一般人は元よりアル、ラグ、ルイスといった面々も漏れなく凍りついただろう。――それ程までに、彼女から放たれる殺気は凄まじかった。
現に、最早黒マントからの回答を求めていない。求めていたとしても、そこに見解の相違はなかったのだが。

リディは怒っていた。眼の収集なんて嗜好で何人も襲った吸血鬼（バカ）にも、それに踊らされていた自分達にも、果ては術中にあっさり嵌って死にかけたルイス（バカ）にも。

しかもルイスのことを考えると腹も立つ。

自分は今淫魔の幻惑に浮かぶ程彼のことを心配しているのに、彼はどこぞの『大切な存在』とやらを視て動揺し、淫魔（サキュバス）なんぞに遅れを取った。そのことを考えると、何故か無性にイラつく。

だが今はその時ではない。

「奪った眼も、直に私の風精霊が見つける。君の魔力痕を辿ればすぐだ――安心して死になよ」

代わりに、そう悪魔も裸足で逃げ出すような声音と顔で、淫魔に剣を振り上げた。

――どうしてこうなった。

スローモーションのように落ちてくる銀の軌跡を、彼女は――吸血鬼（正しくは淫魔とのハーフだが）は呆然と見ていた。

何故。自分の計画は完璧だったはず。なのにどうして、こんな小娘に――。

有り得ない。たかが人間の小娘に、この私が追い詰められるなんて――。

有り得ない！！

彼女はそれまでの凝結が嘘であったかのように、バネのように弾ね起きると、鋭い爪を伸ばして小娘に向かった。

まさか魔術を破られると思っていなかったのだろう、小娘の驚愕した顔。

――馬鹿な小娘。吸血鬼と淫魔のハーフの魔力が、高くない訳ないだろう!!破れないと驕ったその傲慢さの報いを、死を持って思い知るがいい!!

反撃を許さず、小娘の胸に風穴を空けてやろうと手を突き出した、その時。

どすっ、と鈍い音が響いた。

「――え」

間抜けな声が、自分の喉から零れ落ちる。

彼女の。胸と腹の間から。月を反射して輝く銀の刃が、突き出していた。

「…ルイス!?」

「…後ろからなら…そのツラ、見なくて済む」

彼女の肩口に被さるように、誰かが立っている。否、小娘の顔を見ればわかる。彼は――

「…よくも、ヒトの大事なもんに化けてくれたな」

昨日眼を奪えなかった、青年だ。

「ルイス…」

危うく殺される所を寸前で救われたリディは、呆然と青年の名を呼んだ。ほぼ同時に、彼の剣が貫いていた躰が、紫色の珠を残して崩れ去る。青年は剣を鞘に納めて、未だに青白い顔は、しかししっかりとした意識を保って、リディを睨んだ。

「馬鹿かお前はっ。幾ら自分が優勢に立とうと、一時たりとも油断するな！戦いの基本だろうが！」

リディは首を縮めてそれを受けたが、むっとした顔で言い返した。

「君だって人のこと言えないだろ！淫魔（サキュバス）なんかに引っかかってほぼ無抵抗で死ぬとこだったじゃないか！」

「ぐっ…、確かにそれは俺の落ち度だが。俺は油断はしてなかった！」

「そーだね惑わされたんだったね。大切な存在（ひと）とやらの顔に気を取られて死にかけたなんて知れたら、『自由時間（フリータイム）』の名が泣くよ！…っ、よっぽど大切なんだね、その人っ」

早口でまくし立てながら、リディは胸の奥がズキリと疼くのを感じていた。訳がわからない感情が、理解の外で心を満たし、意志とは無関係に涙が出そうになる。それを必死で押し留めて、でも真正面からルイスに向き合うことは出来ずにそっぽを向く。

ルイスの方も喉に餅が詰まったような音を出したあと、沈黙していた。

一分が過ぎ、二分が過ぎ…五分が過ぎた頃、リディが呟いた。

「眼、見つけた。…今、ウェルエイシアがアリステアに伝えた」

「…そうか」

ルイスも呟き返し、「…その」と言った。

「リディ、俺は…」

何かを言いかけた、その時だった。唐突に二人の周りを、白い霧が包む。

「！これはっ…ウェー…ッ！」

何かに気付いたルイスが、咄嗟に風精霊の名を喚ぼうとし、…途絶えた。ごすっ、どさっという鈍い音が聞こえて、リディは目を見開く。

「ルイスッ！…これ、水魔術かっ…吹き飛ばせ、ウェルエイ――」

飛びずさった背後に不意に気配を感じると同時、首筋に衝撃が走った。一瞬火花が飛び、薄れゆく視界。

（…ああ、そうだった…）

冷たい石畳に倒れ込みながら、リディは臍を噛む。

（ルイスの、追っ手…）

視界の端に、二つの見下ろす影を映したのを最後に、リディの意識は闇に溶けた。

自らが昏倒させた二人の若者を見下ろし、干し草色の髪の男と黒ずくめの衣装をまとった男は顔を見合わせた。

「…油断をされていて助かったな」

その台詞はもしルイス達が聞いていたら、喉元を過ぎぬ間に、と自分達を猛省したに違いない。

「まあ、無理もない。事件に終止符を打ったと安心なされたのだろ

う」

倒れている血の気のない横顔。それに胸を痛めながら、黒ずくめの男は干し草色の髪の男に問いかけた。

「どうする」

「どうもこうも、お連れするまで。…伴がいたならそれも連れてこいとの仰せだからな…、その娘も連れて行く」

「わかった」

「途中で目が覚めて暴れられても面倒だ。殿下諸共ユラの香を嗅がせておこう」

「妥当だな」

黒ずくめは頷くと、気絶している少女を肩に担ぎ上げる。青年の方は、干し草色の髪の男が担いだ。

「人目に付かない内に。行くぞ」

未だ、脅威が去ったことを知らない、静けさに満ちた街を、二人の男は足早にあとにした。

第八話　発覚と未来（3）

第八話　発覚と未来（3）

（…何だ…）

頭の内を引っ掻かれるような不快感を感じて、水泡が水面に浮かぶように、リディの意識は闇から浮上した。

うっすらと開けた視界に、見た覚えのない豪奢な天井が映り…数瞬目を瞬いてから、リディは飛び起きた。すう、と不快感が消えるが、頭痛がそれに気づくのを邪魔する。

（どこだここ）

鈍く頭に走る鈍痛は、眠りすぎた時のそれと酷似している。そして思い返せる最後の記憶は――。

「ちっ…」

頭に蘇った情報に、思わず彼女は舌打ちした。油断はしないと反省した舌の根も乾かぬうちにこのザマか。最悪だ。

あの人影の片方は、リディにルイスのことを訊ねてきた男だ。あの霧は自分達の視界を奪いかつ不意をつくことが目的だったのだ。見事にはめられた。

あれから何日経ったのかは知らないが、この痛む頭と怠い体から察するに、薬か何かを嗅がされて連れてこられたのだろう。

しばらく黙考し、リディは計画を決めた。ここは全く未知の場所だ。この場にルイスがいない以上、合流は難しい。自分の体も本調子ではないし、ここは一旦退こう。

今の自分の服装は、淑女が纏うような繊細な白い夜着だ。剣も当然取り上げられてるし――って。

「ネーヴェ…」

あの時、ルイスは白いピュルマを連れていなかった。つまり…シュリアグランデの狩人協会に、荷物と一緒に置き去りだ。

「…殴ろう」

決めた。絶対に殴る。ここに自分達を拉致してきた奴、必ずボコボコにしてやる。

そのために、手始めは――。

「お目覚めですか？――ッ！！」

タイミング良く開いた扉から入ってきた女の首筋を、リディは瞬時に背後に回り込んで問答無用で打った。崩れ落ちる躰を抱き留めて、小声で謝ってから、しかし遠慮なく服を剥ぎ取った。代わりに自分が着ていた夜着を着せてからその侍女のお仕着せを被る。…悲しいかな、胸を中心に全体的に幅が余りまくった。だがそんなことを言っている場合ではない。

「じゃっ、身代わりよろしく！」

髪色が違うので大した時間稼ぎにはならないが、ないよりマシである。そして悠然と部屋を出て、部屋の前に立っていた兵士に「まだお目覚めにならないようです」と告げ、そのまま立ち去り――角を曲がってから猛然と駆け出した。

辺りに散らばる気配を集中力を駆使して読み、人と鉢合わさないように小走りで建物を駆ける。が。

「なんつー広さ、なのっ」

行けども行けども出口が見つからない。窓の外は青い空だ。なんだっていうんだ。

焦ったのがまずかった。人の気配を紙一重でかわし、角を曲がった所で――

どん。

と誰かにぶつかった。

「も、申し訳ありませ…！」

反射的に腰を低くして謝りながら、リディはちらりと相手を見上げる。そしてげっと顔をひきつらせた。

「…あなたは」

驚いたように自分を見下ろす男は、間違いようもなく自分達を攫った男だ。核心に触れられる前に、リディは思いっ切りその男の急所を蹴り上げた。

（ザマ見ろ！今はこれ位にしといてやるけどあとで覚悟しろ！）

三流の悪役のような捨て台詞を脳内で吐くリディの前で、聞くも無惨な呻き声を上げ、男が膝を着く。その脇を走り抜け、ようやく見つけた階段を駆け下り、更に逃亡を図る。しかし、

「そこまでです」

角を二つ抜けた所で、騎士に取り囲まれた。皆一様に油断なく剣の柄に手をやっている。喋ったのはその中でも目立たない、若い騎士だった。

「いくら逃げ惑おうと、若い娘一人を取り逃がすエーデルシアス王宮ではありません。お諦めなさい」

「…王宮？」

リディは驚いてオウム返しに言った。

「ここエーデルシアス王宮なの！？」

一瞬沈黙が降り、再び騎士が口を開く。

「陛下のもとへご案内します。…連れてこい」

「陛下ってちょっ…待って、わっ」

ご案内しますとか言ったにも関わらず、リディは両腕を取られて連行されていった。

連れていかれた、大きな白い石に気が狂いそうなほど繊細な彫刻が施されたの扉の奥は、まさしく金殿玉楼という言葉が相応しい、最高峰の技術のさらにその粋を極めたような部屋だった。

形質は、どこの王宮の謁見の間にも共通する、広い赤絨毯の一本道の先に玉座があり、壁際に臣下がいるというものでありながら、天井は巧妙に角度を変えた梁の下、陽の光が様々な方向が差し込んでくる。

細かいところまで美麗な意匠の細工が施され、しかし暑苦しさを感じさせない。

圧倒的に計算された、人の手による稀なる造型。

「陛下。お連れいたしました」

玉座から五メートル程離れた段差の下に膝をつかされるのと同時に、両脇を固めていた騎士達が離れていく。その背を一睨みして、リディは迷い無く立ち上がった。

（人を無理やり誘拐した奴に、跪いてなんかやらない）

壁際に詰める大臣や騎士達から、漣のようなざわめきが走るが、リディは欠片も意に介せず玉座を見据える。そして口を開いた。

「初めまして。御機嫌麗しく、エーデルシアス国王陛下。私は一狩人、リディ・レリアと申します。堅っ苦しい時候の挨拶は抜きにして、わざわざ私をここに呼んだご理由をお聞かせ願えますか？」

――皮肉たっぷりに。

玉座の主は、人知れず口元を緩めた。

――あれがずっと行動を伴にしていたという娘は、予想以上に面白い。顔は目を疑う程整っているのに、言動にまるで媚びた所がな

い。こちらを真正面から睨む心意気も気に入った。

「無礼を許せ、ご客人。私はエーデルシアス国王シージス・アレシウス・ロウ・リゼンシア・エーデルシアスだ。此度は息子が世話をかけたことに礼を言う」

臣下の声を片手で抑え、玉座の主は名乗る。少女は片眉を上げた。

「…息子？」

玉座の主は笑みを深める。

「ああ。我が息子――エーデルシアス王位継承第二位、ルイシアス・アレシウス・ロウ・キリグライト・エーデルシアスのことだ」

少女の瞳が、見開かれた。その唇が、「…ルイス？」と紡ぐ。

「ああ。愛称はルイス。…そなたと約一年、行を供にした相手だ」

さあ、どう反応するか。

硬直するか。
青ざめ、失神するか。
媚びるか。

内心を密かに期待で満たして、王は少女の反応を待った。

「ルイスが、」
「ああ」
「エーデルシアス第二王子？」

「ああ」
「てことは…『氷の軍神』？」
その単語に、王はやはり頷いた。
『氷の軍神』。幼い時のある一件によって、息子に与えられた名だ。それは尊敬も含みもすれ、大半は畏敬、恐怖、萎縮。息子は昔からそれを疎み、二つ名を嫌っていた。それは、文字通り水魔術―特に氷に関して、彼が異常な程秀でていることを示す。魔力の度合いとしては、かのオルディアンの『烈火の鬼姫』と同等。その名を大陸において、知らない者はいない。ただし『烈火の鬼姫』とは違い、名前も流布しているが。
その名に対して何を示すか。王の、玉座の間にいる全員の視線の先で、しかし少女は全く予想を裏切る反応を示した。
「成程ね…。納得がいきました」
あっさりと、そう言っただけで、頭を掻いたのだ。
「…それだけか？」
思わず、王はそう訊ねてしまった。少女は肩を竦める。
「辻褄が合うんですよ。あの一般には有り得ない魔力も、その中でも特異な水魔術。大事な所で礼儀は正しいし、頭も切れる、回る。国際の駆け引きも出来る。王子だって聞いたら、成程、と思います」
さらりと述べた少女に、王は二の句が継げない。

――そうではなく。いや、間違ってはいないのだが。それに対し思うところはないのか!?

「それでルイス…いえ、ルイシアス殿下は未だ寝込まれていらっしゃるので?」

少女は全く気にした風も無く、堂々と訊ねた。

「あ、ああ…血を奪われたのであろう?そのせいあってか、一度は覚めたのだがまた眠ってしまった」

正しくは眠り香との相互作用のせいだが。

とその時、バタバタという音、「王子!?」「お戻りください!」とかいう悲鳴が遠くから響き、数秒後バンッと玉座の間の扉が勢いよく開け放たれた。

「リディ!!」
「…ルイス?」

突然の乱入者に満場が呆気に取られている中、ルイスは玉座の前に立つ少女を見、唇を噛むと、足早に少女に近寄ってうなだれた。

「悪い。巻き込んだ」
「や、どーってことないって。それより大丈夫?」
「これだけ寝れば充分だ」

王以下エーデルシアスの者達は驚きを隠せなかった。彼らの記憶する第二王子は、成長してからはもっぱら、女嫌いで冷静で冷めていて無表情気味の人間だった筈だ。

が、なんだこの差は。

「ていうかルイス、君『氷の軍神』だったんだ」

「…ああ」

しかもずばりと言った。それに対しルイスは――なんと苦笑いしたのだ。いつもだったら無表情になっていたのに。

「それってさあ…なんか我ながら、おっそろしー組み合わせで旅してたと思わない？」

「思う。俺他人だったら近寄りたくない」

「だよね。ジョンあたりが知ったらどうなるかなあ」

「失神するんじゃないか」

和やかに、しかし王宮の人間には訳の分からないことで顔をひきつらせあっている。色々な意味で新鮮だった。

「父上」

不意に、ルイスが王を振り返った。

「色々と話さねばならないことはありますが…リディはここことは無関係です。軟禁のような真似はせず、素直に市井にお返しください」

「その言い方では私が悪人のようではないか。言われんでも素直に返そう…が、リディと仰ったかな？お嬢さん、ここに滞在されても良いぞ？快適な生活を約束しよう」

「はあ…」

親子のやり取りを眺め、気の抜けた返事をした少女に、ルイスが何やら耳打ちする。途端に少女の顔がさあっと青ざめた。

「…っ、お気遣いは結構です！ちょっと行かなくてはならないところもありますし、失礼させていただきますっ！」

凄い慌てようだ。ルイスが「行きたいところ？」と訊ね、少女が「シュリアグランデ！ネーヴェ置いてかれた！」と返す。少女の目的がわかった騎士の一人が声を上げた。

「ああ、それなら心配ございませんよ。殿下の魔力証文を取って訪ねたら、荷物と…白いピュルマを預かりました」

「ネーヴェは俺の部屋にいる」

頷いたルイスに、少女はほっと息を吐いたが、しかし慌てた様子は消さずに、口早に辞去の言葉を告げる。

「誰か出口まで連れて行ってやれ。荷物…こいつの剣と、俺のじゃない方の袋と、ピュルマだ」

ルイスの指示に何人かが先だって広間を出て行き、少女はルイスに軽く頭を下げた。

「ありがと。夜には連絡するから」

「ああ。ネーヴェは頼む」

「大丈夫。じゃ」

最後まで敬意も何も示さず、誰かが二の句を継ぐ前にさっさと身を翻し、出て行こうとした所で――開けっ放しであった広間の扉から、赤みがかった長い金髪を三つ編みにしている青年が姿を見せた。その顔は驚くほど整っていて、文句のつけようもない美男子ぶりだ。

「失礼。どうかなさいましたか？何やら騒がしいように――」
「ああ、済まないサーレクリフ殿。息子が帰ったのでな」
「息子というと――ああ、漫遊に出てらした第二王子殿で？」

年頃の少女の百人に九十九人は顔を赤らめるであろう、甘いマスクを振りまいて青年は視線を動かし、ルイスに目を留める。

「お初に、ルイシアス殿下。僕はサーレクリフ・ロウ・オルディアン・エルクイーンと申します。オルディアンの王太子ヴィンセント殿下の名代として参りました。どうぞ見知り置きを」
「あ、ああ…こちらこそ」

キラキラと効果音がしそうな笑みの男に若干引きながら、エルクイーンって確かオルディアンの唯一筆頭公爵家だったよな…と思い返す。そして色々な事情から、そこの家の者達は、直系王族にも等しい王位継承権を持っているのだとも。

「…そちらのお嬢さんは？」

リディに水を向けられ、はっと我に返ってルイスはリディを見る。果たしてリディは――だらだらと冷や汗を流していた。百人中の一人は彼女だったようだ。

「リディ…？」

ルイスの呟きを聞き咎めたのは、リディではなくサーレクリフと名乗った男だった。怪訝そうにしてから、まさか、といった顔付きになる。それから脇目も振らず早足で近寄ってきて、後退りしようとしていたリディの腕をひっつかみ、顎をぐいと持ち上げた。

「！何を……」
「リディエーリア…？」

咄嗟にリディを男から守ろうとしたルイスは、囁くようなその声音に動きを止める。

リディはと言えば、青を通り越して白くなった顔色で、しかし諦めたように耳を塞いだ。

その行動に皆が疑問を持つ前に、竜の咆哮もかくやという絶叫が轟いた。

「なぜここいるんだい妹よ――――――！！」

…王城の本宮中に響き渡った絶叫。後に聞けば、その瞬間王宮の樹に止まっていた鳥という鳥が一斉に飛び立ったという。

第八話　発覚と未来　（3）（後書き）

ということで、二人の素性暴露話でした。お約束といってもいい。

夏休みがもう終ることに危機感を抱いています。やばすぎる…！

第八話　発覚と未来（４）

第八話　発覚と未来（４）

サーレクリフ・ロウ・オルディアン・エルクイーンという人物の評を、彼をよく知る人に訊いたなら、大抵「掴めない」「読めない」という言葉を聞くことになるだろう。

しかし、今目の前で繰り広げられる光景に、エーデルシアスの面々の頭の中からはそんな言葉は抹消されていた。

「今までどこにいたんだいいいい――！僕がどれだけ心配したと――！？」

「……」

「ああ、こんなに痩せて――じゃない、大体なんでエーデルシアス（ここ）に――」

「やかましいっ！」

リディは突然キレた。逆ギレした。

「あのヴィンセント（バカ王太子）じゃないのはまあ当たり前として、なんでクリフ兄なんだよ！？確かに社交性が大いにあるのは認めるけど！！」

それってもの凄くこういう場に向いてるんじゃ、ていうか自国の王子を馬鹿呼ばわりっていいのか、と皆同時に思った。

「ははは、嬉しいことを言ってくれるね。僕としても王族その他の麗しい方達に会えるのが楽しみでね」

「――っからあんたはその女たらしをどーにかしてから外交を語れ――！」

…どっちが悪いのかわからなくなってきた。ていうか顔そのまんま女たらしなのか。

とエーデルシアス一同は思った。

が、不意にサーレクリフの顔が真面目になる。

「今は僕のことはどうでもいい。君が今どうしてここにいるのか、僕は訊いてるんだよ」

軽薄さの一切が吹き払われたような声だった。場に静けさが戻る。はっきりとリディが唇を噛んだ。

「…まあ、サーレクリフ殿」

その空気を和らげたのは、国王シージスだった。軽く苦笑して手を上げる。

「その件については私の愚息も絡んでいるのでな。また後にして――そのお嬢さんは貴殿の妹なのかな？」

サーレクリフはきょとんとした。愚息？と呟いてルイスを見やる。ルイスはなんとも言えない笑いを浮かべた。次いでリディを見やる。

目を逸らされた。

「…リディ。君はその…まさか名乗ってないのかい？」

「…名乗りましたよ。『リディ・レリア』って」

サーレクリフは天を仰いだ。

「母上の愛称を家名にしたの？それは名乗ったとは言わないよ」

「……」

リディはそっぽを向いたままだった。彼女にとってこの事態は完全に計算外だった。こうならない為に、ルイスの助けも得て街に出ようと思っていたのに――。

「リディエーリア。例えもう素性が割れていても、名乗るのが礼儀だよ」

少し厳しくなったサーレクリフの言葉に、諦めたらしい。リディは不機嫌な表情を無理矢理消して、国王に向き直った。傍でずっと呆気に取られていたルイスは、その様子を目の当たりにして知らず息を呑む。

リディは流れるような仕草で膝を着いて頭を垂れ、淡々と名乗った。

「…名乗りが遅れ、大変申し訳ございません。私はオルディアン、エルクイーン家が末子、リディエーリア・リィ・オルディアン・エルクイーンと申します。…以後、お見知り置きを」

「…成程。だからヴィルヘルム殿と繋がりがあったんですねー」

静寂が降りた広間に、不意にまだ声変わりのしていない幼い声が響く。見れば、玉座の横合いから、杖を突いた白髪の青年と、薄墨色の髪である点と年齢を除いてルイスそっくりの少年が入ってきていた。

「…兄上…それに、エデルも」

ルイスが呟く。それでリディは、白髪の青年がエーデルシアスの王太子、並びにその隣の少年が彼の弟応じなのだと悟った。

「お久しぶりですー、兄上。初めまして、えーと、リディエーリアさん？僕はエデルフィオ・エーデルシアスです」

「…お初にお目にかかります」

リディは弟王子に礼を取ったままながらも、王太子であるその青年の躯の細さに気づく。健康的に細いのではない。白い髪は少し引

っ張れば切れてしまいそうに細く、整った顔は、文系では済まされない程弱々しい。肌は異様なまでに白く、折れそうな程に厚みがないのだ。

――そういえば、エーデルシアスの王太子は病弱だと聞いた覚えがある。その聡明過ぎる頭脳を与えられた代わりに、足を与えられなかったのだ、と冗談混じりにあの男が言っていた。その時は不謹慎だ、と殴り飛ばしたのだが…今は、その意味が解る。

（なら…ルイス、君の『理由』はもしかして）

視界の隅で俯いているルイスに、リディは内心でため息を吐いた。

（…苦労、してるんだね）

「そうだ、リディ、ヴィルヘルム殿と会ったの？彼、何訊いてもだんまり決め込んでたらしいんだけど」

飛びかけたリディの思考を、サーレクリフの声が繋ぎ止めた。そして台詞の意味を理解すると同時に少し笑う。

「約束、守ってくれたんだ…でも、エデル殿下といいましたか。何故、そのことを？」

少年――エデルは悪戯っぽく微笑む。なんとなく間延びするしゃべり方だ。しかしそれは人を苛立たせるものではなく、優しさを感じさせる。

「ビグナリオンの式典でお会いしましてー。ヴィルヘルム殿は何もおっしゃいませんでしたよ。それこそ何かあるんだなーって勘ぐれ

るくらい。代わりに、エリオット殿がぶっ倒れられましてー」
「「……」」

あの馬鹿。

リディとルイスは揃って顔をひきつらせた。…まあ、エデルとルイスはそっくりだ。無理もない。

国王シージスはごほんと咳払いした。第三王子の茶々で話がズレたが、本題はそこではないのだ。

「エルクイーン公爵家の次女殿、でよろしいか」

リディは少し眉を寄せ、いかにも渋々、といった風に頷いた。

「風の噂では、オルディアン王位継承権第六位の少女は体が弱く、社交界に滅多に姿を現さない、と聞いたのだが」

目に見えて、オルディアンの兄妹はうっと詰まった。

「見たとこ真逆ですね」

くすり、と初めて王太子がこの場で発言した。自然、その場の注意は彼に集まる。王太子はにこりと笑うと、杖をつくぎこちなさを殆ど感じさせない優雅な礼をした。

「初めまして、リディエーリア嬢。私はエーデルシアス王太子、シルファーレイ・アレシウス・ロウ・キリグライト・エーデルシアス。弟が世話になりました。お礼を」
「…いえ。勿体無いお言葉です」

その立ち居振る舞い、発声の仕方だけで、リディには彼が紛れもなくエーデルシアスの後継者だというのを理解した。一瞬で表面の脆弱な印象が拭い去られた。相対した者に絶対的な服従感を与える、王者の覇気――それを確かにこの青年は有していた。

（あの馬鹿にも爪の垢煎じて呑ませたい）

奇しくも自国の王太子と比較してのその感想が、初めてシルファーレイと相対した時サーレクリフが持ったものと全く同じであったことは誰も知らない。

「まあ訊きたいことは様々あれ――とりあえず可及的速やかにすべきことは、二人共まずは採寸ですね」

「は？」

採寸？　とルイスもリディも疑問符を浮かべた。そこに、にっこりとサーレクリフの追撃が入る。

「知ってるとは思うけど――王女殿下の誕生式典、三日後なんだよねえ」

「……っ！！」

ようやく言わんとすることを察し、二人の顔が瞬間的に青ざめる。しかし退路は既に断たれていた。

「ちょ、クリフ兄！」

「って離せパリス！」

同時に踵返そうとした二人を、それぞれサーレクリフ、騎士が羽

交い締めにする。騎士の方はリディをこの場所に連行した地味な青年だ。申し訳なさそうにしながらも、しっかとルイスを捕えている。

一方サーレクリフは物凄く楽しそうにシルファーレイに言った。ノロケた。

「この子、僕が言うのもなんだけどすっごく綺麗でしょう。昔から頑張ってパーティーに出させようとしてたんだけどねえ…クロナ姉上といいリディといいパーティーホント嫌いで。だから久々に着飾らせる機会くれてありがとう、レイ」

「お安い御用だよ、クリフ。二人が採寸してる間に、配布寸前の参加者名簿書き換えておくからね。騎士団、絶対逃がすな。逃がしたら一週間書類仕事だ」

「はっ！命にかえても！！」

一斉にその場にいた騎士が敬礼した。ヤケに気合いが入っているのはなぜだ。リディ達としてはそんな意味不明の命令に敬礼はしてほしくなかった。

それからその一日のことは、返す返すも思い出したくない、と二人は後に語る。

風呂に放り込まれ、旅の汚れを徹底的に洗われ磨かれ、体の隅か

ら隅まで採寸し、精魂尽き果てた所に食事と称して根掘り葉掘り旅の話を吐かされた。王妃の姿は無かったが、産後の経過で大事を取って療養しているのだと聞いた。

話は、無論、ルイスもリディも語るべきでないこと――セティスゲルダや竜との遭遇――については全くおくびにも出さなかったが、それ以外は洗いざらい喋らされたと言っていい。特にゼノの王位交代劇の話については執拗で、リディは自らの『正体』についてポロッとバレないよう必死だった。ルイスはルイスで歯切れが悪く、いつもの回転の速さが発揮されていなかった為、しどろもどろにならないようにするのが精一杯だった。

食事が終わり、オルディアンの公爵家兄妹が退出してから、ようやくルイスは父、兄、弟と向き合った。

「改めて。よくぞ無事で帰った、ルイシアス」

「…申し訳、ありませんでした」

父の言葉に、ルイスは返す言葉もなく頭を下げる。彼なりの目的は多々あれど――彼が王族たる義務を捨て、出奔したのは事実。ここで廃嫡されたとしても、彼は文句は言えない。けれどこの優しい

家族がそれをすることはないだろうということもまた、解っていた。

「お前の一年間の不在は、諸国漫遊ということにしておいた」

ルイスは無言で顎を引いた。…妥当な設定だ。

「真相を知るのは王家、宰相、騎士団上層部のみだ。諸貴族やその他の者は皆そう信じているから、違和感を持たせないように」

「はい」

「お前は明日から書類に騎士団の訓練、その他いくらでもある仕事に取り組んでもらう。出来るな」

「――はい」

父は、優しいが甘くはない。文字通りこきつかわれるだろう。だがそれくらいの罰は甘受して当然だ。

「今日の所は休め。まだ体も本調子ではないだろう」

「わかりました」

一言も言い返さずに頷いて踵を返したルイスの背に、それまで何も言わなかったシルファーレイが声をかけた。

「ルイシアス。君がくれた時間は、ちゃんと活かした」

ルイスの足が止まる。シルファーレイはにっこり笑って、おいで、と言った。

数秒の沈黙の後、ルイスはゆっくり振り向いて椅子に座すシルファーレイに歩み寄り、跪く。記憶にあるより更に儚げに見える兄に、ほんの少し眉を歪めた。

「本当に、君は不器用だ。そこらの官僚には及びもつかない能力を持ちながら、いつも自分が傷つく道ばかりを選ぶ。僕がどれだけ君を心配してるか、わかってる？」

ルイスは唇を噛み締めた。わかっている、そんなことは。けれど自分がいるからこそ、兄の立場は危うくなる。兄は本来なら、誰の追随も許さない明晰さで、穏やかに君主となるはずなのに。中途半端に才能があるせいで、『健康体』であるだけで、ルイスの存在は兄を脅かす。そうする位ならこの才能など、要らなかった。

本人の自覚無しにくしゃりと歪められた顔を見て、シルファーレイは全く、と女よりもか細い手を弟に伸ばした。

「またそう自虐的な顔をする。…僕は君の兄なんだよ。少しは信用しなさい」

「俺は兄上を信用してなくなど…！」

「わかってるよ。君は心配性が過ぎる」

ぐしゃぐしゃと、一族の誰よりも黒く艶やかな髪を撫でる。子供の時から、シルファーレイがこれをやると、何故か必ずルイシアスは黙ってされるがままになった。

「でも、今回ばかりは僕もエデルも、父上も母上も心配した。実際危険な目に何度か遭っていたようだし。…でも、無事でよかった」

囁いて、シルファーレイはそっと弟の頭を抱き寄せる。

「お帰り、ルイス」

ルイスは兄の薄い肩に頭を押し付け、抱き返しながら小さく言った。

「…ただいま、帰りました…」

―――――――――――――――――――――

主不在の部屋を守っていたエルクイーン家の騎士達は、エーデルシアス国王との会食を終えて帰ってきたサーレクリフが連れ帰ってきた少女を見て、仰天した。

「姫様!?」

「あーうん。久しぶり」

どこか投げ遣りにリディは応じる。それに対して騎士達は眼を白黒させて混乱する頭を整理しようと試みる。が、割と無駄だった。

一年程前に姿を眩ました、第一級国家機密の彼らの姫。いなくなったと知れた時には、彼女に関わる者達全員が蒼白になった。が―

―なぜこんなところにいるのか皆目見当がつかない。

「姫様が何故ここに」

「うん、後で話すよ。今は人払いを頼むね」

詰め寄ろうとした騎士達を、サーレクリフは笑顔でいなす。そして命令通りに兄妹以外いなくなった部屋で、サーレクリフとリディは向かい合った。

「キース達が、マリナリオで君の足取りが掴めなくなったと言っていたから…心配したよ」

切り出された言葉に、リディは無言を返した。

「それまで追えていたのに、不意に途切れたって。どうしてたんだい？」

「色々協力してもらったから。追っ手がいるのはわかってたし」

淡々と答えた少女に、反省の色は見えない。もともとルイスと違って、彼女はただの公爵令嬢だ。負う責任はさしてない。…普通なら。

静かに、サーレクリフは自分とよく似た金の双眸を見据える。

「…君は自分が『誰』か忘れた訳ではないよね」

リディは黙った。少ししてから、声を絞り出す。

「…忘れてなんか、ないよ」

忘れてなどいない。忘れられるはずがない。彼女は『存在』が国家に対する義務だからだ。

ラグと並ぶ、オルディアンの最後の切り札――それが『烈火の鬼姫（女）』だ。

「…そうまでして、嫌だった？婚姻（彼）」

「うん」

兄の問い掛けに、即座にリディエーリアは頷いた。

ルイスのように、何かを苦慮した訳ではない。彼女の理由は傲慢で身勝手だ。それがわかっていながら、彼女はなお意志を曲げなかった。

「婚姻なんてごめんだ。父上に伝えて。もし強引なことする気なら、頭の毛全部燃やしてやるって」

…恐ろしい沈黙が落ちた。彼らの父、オルディアン王弟ディオールは、残念ながら頭の毛根に血筋的に大いに不安がある。現在進行形で。

サーレクリフは顔をひきつらせながら言葉を紡ぐ。

「ち、父上なりに君を心配して」

「なに。じゃあ私が結婚しても兄上はいいの？」

リディは脅した。

「いいい良い訳がないだろうっっっ！！愛する君をどこぞの男にくれてやりたくなどないっっ！！」

それまでの説教調子も一変、サーレクリフは拳を握りしめて叫んだ。

彼を含め、リディの三人の兄姉達は総じてリディに甘いのだ。特に兄二人は、『救いようのないシスコン』との異名を王太子に付け

られた程である。

「兄上も反対なんでしょ。じゃ、そういうことで。私の意志を無視して勝手にそんな話を進めないでって父上に伝えて」

言いおいて、リディは席を立つ。その背に、やや抑えられた苦い声がかけられた。

「僕やユーリ、クロナも父上を責めたよ。流石に反省しておられた。…でもだからと言って、何も言わずに行方を眩まして良い訳じゃない」

「……」

リディは立ち止まって、唇を噛んだ。

わかっている。悪いのは自分だ。嫌なら、面と向かって言えば済んだ。彼女に甘い兄姉達もいるし、父も母も頭の固い人間ではない。それにかこつけて出奔したのは、自分だ。あたかも自分は悪くないような顔をして——逃げたのだ。

立ち尽くす妹に、ため息を吐いてサーレクリフは歩み寄る。背を向けたままの妹の体を反転させて、サーレクリフはゆっくりと抱きしめた。この一年で幾らか細く、しかし鍛えられた躯はけれど、間違いなく生者のもの。

「…心配、したんだよ」

掠れた声で、サーレクリフがリディの耳元で囁く。

「最悪の事態を、何度も夢に見て…もう会えないかと…」

部下が追えていた時はまだ良かった。でも見失って。毎日毎日、気が気ではなかった。もう妹はこの世にいないのではないか――そんな思いの中床については、悪夢を見て飛び起きて。

妹の躯を抱きしめ、その体が実在することを確かめながら、妹と再会して初めてサーレクリフの胸にどっと安堵が溢れた。

ぎゅっと力を込めて回される腕に、リディは顔を歪めて、兄の胸元に顔を押し付けた。

「…ごめんなさい」

絞り出された小さな言葉に、サーレクリフはますます腕に力をこめて。

しばらく部屋には、小さな嗚咽が響いていた。

兄と別れてあてがわれた部屋に戻ったリディは、入った瞬間にネーヴェの襲撃を受けた。

「ぎゃっ」

ふわふわで軽い体躯のおかげでそこまでの衝撃はなかったが、いきなり顔面に飛びかかってこられては反応のしようがない。勢いを殺せず、運動法則に従って背後に体を泳がせてしまった。そのままだと倒れるしかない体を、固く鍛えられた腕が受け止める。

「なにをなさっているんですか、リディ様」

「…ごめん、ありがとうゼリク」

顔面にネーヴェを張り付かせ、背中を騎士に抱えられた間抜けな格好で、リディはそう騎士に謝罪した。

この騎士――ゼリクは、現在リディの追っ手役を仰せつかっている、リディの筆頭騎士であるキースの兄だ。普段はサーレクリフについているのだが、キース達が来るまでの護衛(かんし)役に任じられたのである。

「なんですか、この生き物は」

ひょいとリディの顔からネーヴェの首元をつかんでひっぺはがし、吊り下げながらゼリクは眉を寄せた。

「ピュルマ。ネーヴェっていう。返して」

伸ばされた手に、大人しくピュルマを渡して、ゼリクは一歩下が

って片膝をついた。

「お帰りをお待ち申し上げておりました。不在の弟の代わりに、御身を守る事をお許し下さい」

「…ただいま」

実直な言葉に照れ臭さを感じて、リディは頬を掻いた。

ゼリクの弟キースは、兄同様とても有能だが、一つ違う点がある。性格だ。嫌味なのが玉に瑕、慇懃無礼という言葉がこれほど似合う奴はいないとリディは勝手に思っている。その点ゼリクは真面目の一言に尽き、なのでリディは、ゼリクが母親の腹の中に残してきた嫌味成分を、キースが全部吸収して生まれてきたのだと思っている。

けれど彼ら兄弟の、リディ達エルクイーン家に対する忠義はどちらも変わらず、本物だ。

「あとで手合わせしてよ。強くなったんだよ私」

「見ればわかりますよ。――甘さが抜けてます」

少し眩しそうにゼリクは少女を見上げた。

彼女が姿を消す以前は、自分や弟の方が彼女より強かったが。今は、わからないかもしれない。

貴族の子女らしい甘っちょろさが消えて、命のやり取りをした者特有の鋭さ――元々、十年前のことのせいでそれは根付いてはいたが――が宿っている。

戦士として彼女が成長した事を喜ぶ一方で、守るべき愛すべき彼らの姫君が自立してしまったことは、寂しくもあった。

「失礼します」

扉が叩かれ、約束通り運ばれてきた肉に、リディの手をガジガジと噛んでいたネーヴェが飛び上がって喜び、すぐさま肉の皿に駆け寄る。が、物言いたげな視線をリディに向けた。

「あ、そうだね。待って、今柔らかくしてあげる」

何事かと見守るゼリクと肉を運んできた侍女の前で、リディは風精霊の名を喚ぶと、命じた。

「結界。あと切断」

命令に従ってふわりと肉が浮き、柔らかな風の結界に包まれ――内部で無数の風の刃が生肉を細かくバラバラにした。

「……」

「……」

「はいネーヴェ。ごめんね、食べていいよ」

黙り込む騎士と侍女には気づきもせず、リディは柔らかい笑みで、凄まじい勢いで肉にがっつくネーヴェの背を撫でた。

のちに侍女は語る。

一言で肉を細切れにした令嬢も怖かったが、愛らしい姿で肉にがっつくピュルマの飢えた顔が一番怖かった――と。

「ああそうだ。ゼリク、明日までにサラフ用意しといて」

サラフとは、貴族の普段着のようなものだ。男性はともかく、普通女性はドレスを着ている。しかし勿論ドレスは着脱が面倒くさい。よって、準正装と認められているのがサラフだ。

もっとも、大抵の女性はドレスを着るし、着飾ることに楽しみを見いだす。必然、サラフを好む女性は少ないが…残念ながら、リディはその少数派の筆頭だ。

「しかしリディ様、ここは…」

「用意しといて」

「…はい」

いくら不満と言えど、二回繰り返された命令に背く訳にはいかない。

サーレクリフがどんな顔をするかと思いながらも、ゼリクは頭を下げたのだった。

第八話　発覚と未来　（4）（後書き）

残りも少ないので、更新を早くしてみました。

サラフに関しては思いっきり捏造です。リディもルイスも王族関係者と暴露されましたが、この話は王宮陰謀モノにはなりません。なれません。（笑）

この第八話はほんのすこし権力闘争が混じりますが、以降はやっぱり冒険ものに戻ります。

第八話　発覚と未来（5）

第八話　発覚と未来（5）

朝。まだ陽が地平線から顔を出し始めたばかりの時、リディは目を覚ました。

「…柔らか…」

旅の中で、柔らかいベッドで眠ることは殆どない。貴族のリディから見れば、宿屋のベッドも大抵固いからだ。それに文句を言うほどリディはお嬢様気質ではなかったが。

一瞬自分がなぜこんな柔らかいベッドに寝ているのか把握しかね、次いで記憶に顔をしかめた。

そうだった。見つかったんだった。

ベッドから音を立てずに降り、閉まっているベランダに通じるガラス戸へ歩み寄った。その途中で、ソファの上の、クッションが敷かれた籠の中で微睡んでいたネーヴェが、耳をピクリと動かして、頭を上げた。

「おはよう、ネーヴェ」

囁くと、大きな欠伸をしたネーヴェは体を震わせて伸びをし、ぴ

ょんと跳躍してリディの肩に飛び乗った。
微笑んでその頭を撫で、リディは観音開きのガラス戸を開ける。
冷たい風がひゅうと吹き込んできた。

「もう、秋も終わりか…」

バルコニーに出て、冷たい空気に身を晒しながら、リディは手すりに身を預けて日の出を見つめた。

昨年の秋、家出してから一年と少し。本当に、色々なことがあった。
ルイスと出会い、各国を旅し。竜を狩り、魔族と遭遇し、大物の魔物を狩り。ゼノの王位交代劇を手伝い、最高位の竜と出逢い。

「…本当に、色々あったなあ…」

自分で思い返していて、なんだこの驚天動地の旅はと呆れてしまった。
時間は長くはないが、短くもなかった。ただし中身は濃厚で、普通の人間の三倍くらい騒動に巻き込まれたことは安請け合いだ。…一年前の自分なら、ここでもう満足したかもしれない。けれど。

「…まだ、旅を終える訳にはいかない」

徐々に明るくなる朝の光の中で、リディは小さく呟いた。肩の上のネーヴェが、じっと彼女を見つめる。

「まだ、知らなきゃいけない事がたくさんある…そうだろ、ネーヴェ」

ぴゃんとネーヴェが一声鳴いた。

そうだ。この子は、託されたのだ。優しい優しい目をした、あの竜から。

あの竜は、旅を続けろと言った。ネーヴェとヴァイスを自分達に託し、その核（いのち）を与えて。

彼女がどうしてそこまでしたのかは、わからない。教えてくれなったから。けれど彼女は、旅の先に答えがあると言った。――ならば、彼女に報い、意志（いのち）を継ぐ為にも、今ここで止まる訳にはいかないのだ。

「…どーにかして、抜け出さないと」

が、今はそれはもう厳重に警戒されているだろう。現に今も、どこかから複数の視線が向けられている。ルイスも同じかこれ以上に違いない。

「…しばらく様子見だな」

迂闊に動けば瞬殺ならぬ瞬獲される。ルイスの体面もあるし、王女生誕記念式典への出席は避けられないだろう。

「ああ、めんどい…」

着飾るのかと思うと今からうんざりだ。採寸だけであれだけ疲れる。化粧は顔がベタつくし、ドレスは動きにくいし嫌いだ。…まあ、一種の罰と思って受け入れよう。それが終われば少しは監視も和らぐ…と信じたい。

「ごめんねネーヴェ。しばらく我慢してね」

ネーヴェは、仕方ないなあ、とでも言うようにもう一度高く鳴いたのだった。

――――――――――――――――――――

ルイスは早朝から、やってもやっても終わりそうにない仕事に心身ともにぐったりしていた。罰(これ)ばかりは他人に手伝いを頼む訳にも行かず、文句を言える立場でもない。

しかし他人からいかに有能と言われても、ルイス自身は自分の天分は戦闘だと認識している。ずっと座って書類仕事は苦痛でしかなく、体を動かしたくて仕方がなかった。

集中力にも限界が見え始めた頃、扉が軽く叩かれた。

「なんだ」

「失礼しますよ、ルイス殿下」

億劫気に出した声に応じたのは、軽い声の持ち主だった。よく知る声にルイスは驚いて手を止め、ドアを見る。

「ギルバート…？」

ギルバートと呼ばれた、ルイスと同じくらいの年齢の男は、戸口でにっと笑い、軽く手を振って扉を閉める。

暗緑色の眼が、五体満足のルイスを見て嬉しそうに笑む。」

「どーも。お帰りなさいませ、殿下。いつ帰ってくるかと心配してましたよ」

「…耳が早いな。兄上か？」

「そーです。しかしあなたも無謀なことをなさることで。俺、聞いた時爆笑しちゃいました。陛下の前で」

「お前は少し慎みを持て、騎士団副団長」

ルイスは書類を片付けて立ち上がると、久々に会う、臣下であり、数少ない友人の肩を叩いた。

「久しぶりだな、ギルバート。心配掛けたか」

「いーえ。殿下なら無事だと信じてましたから」

精鋭であるエーデルシアス騎士団の副団長を務める男は、なんでもないようにルイスの肩を抱き返した。

「陛下から多少話は聞きましたけどね。ほんとに殿下は面白さの絶えない人だ。常人の一生分くらいのもめごとは三日でクリアしてるんじゃないですか」

「黙れ。俺もどうかと思ってるんだから」

一休みということで侍女に運ばせた茶をルイスはすする。ギルバートはいやいや、と首を振った。

「あれですよ。殿下はトラブルメーカーに間違いないです」

「斬られたいか？」

おおおっかない、とおおげさにギルバートは身震いする。それから真面目腐った顔で言った。

「でもわかりますよ。――殿下、強くなられた」

「……」

「前も十分強かったですけどね。一年前とは大違いです」

ルイスはふっと息を吐く。

「今ならお前から一本くらいは取れるか？」

「…そですね。一本どころじゃ済まない気もします」

思いのほか真面目な答えが返って来て、ルイスはひそかに眉をあげた。

数少ない友人であるこの男は、エーデルシアス国内でも中流階級の出である。しかし、幼いころから突出した剣の腕で騎士団に入団し、十八という異例の若さで副団長に就任した。

自然、年の近いルイスとは鍛錬を共にすることが多く、宮中に渦巻く人の暗い念にいらいらしていたルイスを、その飄々とした性格でいなし、上手く発散させていたのが二人の始まりだ。

だが昔から、ルイスは剣においてこの男に勝てた試しがなかった。

「…それは嬉しい知らせだな。あとで手合わせ願おうか」
「いいですねー。でもそれより殿下、書類何とかしてくださいね」
にこにこと発されたセリフにルイスは撃沈した。わざとか。わざとだ。

その時、こんこんと扉が叩かれた。応答すると、がちゃりと扉があいて、若い仕官が顔をのぞかせる。ルイスを認めて安堵した顔になり、失礼します、と礼をとって入ってきた。

サイドテーブルに追加された書類の山もさることながら、その顔に見覚えがなかったルイスは、眉をあげた。

「見ない顔だな。誰だ？」

薄い茶髪に、温和そうな顔立ちをしたその仕官は、人好きのする顔でにっこりと笑った。

「半年ほど前より、市場管理府の大臣補佐をしております、ミハエル・ハイムリヒ・フォイルニスと申します。ルイシアス殿下におかれましては、以後お見知りおきをお願いしたく」
「ミハエルは優秀ですよー、殿下。こないだも滞ってた小麦の供給、半日で修復してましたから。将来有望株ってやつかも」
「ギルバートさん、買いかぶりですよ」

照れくさそうにはにかむ青年に、ルイスも相好を崩した。若い人材は、これからの兄の治世において必要なものだ。

「そうか。長らく城を空けていたため、無知を許してほしい。これ

からも兄上を頼む」
「仰せのままに、ルイシアス殿下」
至極礼儀正しい礼を残し、ミハエルが部屋を去ったあと、ルイスはギルバートを見遣る。
「お前が文官に目を止めるなんて珍しいな」
「あのひとたまに、体ほぐしたいって言って鍛錬場に来るんですよ。へっぽこですけどねー」
言い置いて、さてとギルバートは立ち上がった。
「俺も騎士団に戻ります。殿下もそれちゃっちゃと片付けて頑張ってくださいね。待ってますから。ま、今日中は無理だと思いますけど」
「お前は一言多い！」
あははは と軽く笑いながら去っていくギルバートに舌打ちしつつ、ルイスは随分軽くなった思考で書類に向かい合った。
「…さて、出来るだけ早く終わらせないとな」
約束もあるし。
そう呟いて、再びルイスは書類の山との終わりなき戦いへと突入したのであった。

その日、リディはエーデルシアスの騎士に王宮内を簡単に案内して貰った。…王宮は、信じられないほど広く、複雑だった。一人歩きしたら絶対迷う、とリディは顔をひきつらせたが、広さの面ではオルディアンの王宮とどっこいどっこいであることに彼女は気づいていない。

歩く内に、王宮内の各所で各国の使者らしき人をちらほらと見かけた。主賓は王族と言っても、その護衛やら、国によっては外交官などが付随して来ている。また、昼間はエーデルシアス国内の各貴族も訪れている為、必然、今のエーデルシアス王宮は人口密度が高くなっていた。

歩きながら、リディはエーデルシアスの騎士に訊ねた。

「十三ヶ国全部の王族が集まったの？」

「あ、いえ…フェルミアとザイフィリアは欠席で…イグナディアとラーシャアルドの方はまだです。地理的な問題で…。でも今日か明日にはお付きになられる、と」

大陸南西にあるラーシャアルドと、北西にあるイグナディアは、東部に位置するエーデルシアスからは遠い。王女の臨月を迎えた時点で手紙は各国に送ったらしいが、それでも限界はあるのだろう。

「ラーシャアルドからは誰が？」

「あ、ええと…第二、第三王子殿下達と聞いておりますが」

ふ、とリディは真顔になり、騎士に問いを重ねた。

「…第三王子？…じゃあ、ゼノからは？」

「は、ゼノからは新女王自らいらしています！とてもお優しく聡明な方と伺っています」

騎士は慌てたように答えた。どうやらオルディアンとゼノの不和を心配したらしい。リディはくすりと笑って否定する。

「別に害意はありませんよ。過激派の父王を諫めて王位に就いたのでしょう。親しみこそあれ、敵意などあるわけもない」

言いながら、胸の内ではリディはにやついていた。

（アルがわざわざ参加するのは、十中九セレナのお陰だ。これは楽しくなりそう）

エーデルシアスの騎士がほっとする傍ら、長い付き合いのゼリクは彼女がやたらと楽しげなのを正確に読み取り、無言で目を逸らした。

一通り城内を案内してもらい、その芸の細かさにひとしきり感嘆しとおしたところで、ふとリディは騎士に訊ねた。

「ルイス――じゃなかった、ルイシアス殿下はどうなさってます？」

ルイスとリディの関係を知らない騎士は驚いた。第二王子の女嫌いは有名で、それでなくても愛称で呼ぶ者など、両手にも満たない。

だが慌てて気を取り直し、答える。

「殿下は今は書類仕事をなさっていると聞きました。諸国漫遊の間積もりまくったものを片付けているらしく」

「…成程」

リディは哀れみの表情を浮かべた。…自分と違って仕事も義務もたくさんあるルイスに同情した。そして、知らずにのんきに城内散策をしていたことに僅かながら罪悪感を抱く。少し悩んでから、リディは騎士に頼んだ。

「殿下の部屋に案内して頂けますか？」

「リディ？」

「やあ、ルイス。…大変そうだね」

机の上を占める書類山脈にリディは心底同情の色を示し、失礼しますと扉の外の騎士に声をかけて、室内に入ってきた。

「うわー…」

扉を閉め、改めて机の惨状を見てリディは呻いた。

「私、今本気で君を尊敬した。私だったらこんなの丸投げして逃走する」

「義務だからな。俺達は民の税で生きてる。ここに戻ってきた以上、ちゃんとやらないとな」

ルイスは苦笑いして答えるが、その間も手は止めない。彼の頭の中には、ロハスの狩人協会長の言葉が蘇っていた。

(力を持つ者には義務がある…って言ってたな)

ならば、力だけに執着し、義務を怠る者は。力だけを得る為に、悪事にも手を染めるような輩は。

「切るべきなんだろうな」

呟かれた言葉にリディは首を傾げたが、特に聞き出す心算はなかった。代わりに白い山の一つに手を伸ばし、ぱらぱらと捲る。

「ねえ、ルイス」

「何だ?」

「手伝おうか。仕分けだけだけど」

ルイスは驚いた。が、リディの目は特になんの気負いもない。

「見ちゃマズいものって入ってる?」

「…いや、ない。けどお前、出来んのか?」

仕分けとは、聞くだけなら簡単に聞こえるかもしれないが、その実かなりの判断力と知識を必要とする。経験もないと無理な仕事なのだが――。

リディは不敵に笑ってそれに応じた。

「見くびるなよ。伊達に馬鹿王子（ヴィンセント）の仕事を何年も手伝ってる訳じゃない」

――それから数時間。合間に夕食を挟んだ以外は二人とも殆ど無駄口を叩かず仕事に徹し、戦闘時張りのコンビネーションを発揮して山を着実に減らしていった。

まだルイスの帰還は貴族達には知らされていないため訪れる者は無かったが、ルイスの部屋付きの侍女達は、その様子を目の当たりにして絶句した。筆頭侍女は、長年王宮に仕え、夫も子供も王宮勤めのベテランの中年女性で、侍女の中でも肝が太く、滅多な事では驚かないと評判だが、その彼女をして、その部屋の様子にはあんぐりと口を開けた。その後ろに付き従っていた二人の若い侍女は言わずもがなだ。

定時にお茶の用意をして部屋に入ってみれば、そこにいたのは第二王子だけではなかった。簡素なサラフを身につけただけの、その

年の女性としては洒落っ気の一切ない少女が黙々と仕分け作業をしていたのだ。

一瞬何者かを思案し、その見かけない鮮やかな赤い髪と、まだ幼さの多少残る美貌に、すぐさま昨日訪れた隣国の公爵令嬢と思い至る。しかし若い年頃の男女が目すら上げず、それぞれの作業に没頭する様は異様だった。

（…もう一つお茶の用意をしましょう。あと、甘いものを）

どうすべきか考えた間は一瞬しかなく、侍女頭は素早くそう若い侍女に指示を下し、間もなく二人分の茶菓子が用意されたものの二人が手を伸ばす気配はなく、仕方なしにそろそろと部屋を出て行ったのだった。

また部屋の護衛に転じたゼリクは、あんまりといえばあんまりな彼らの姫に、そっと天を仰ぎ、元から護衛を勤めていた騎士に同情された。

真円に程近い月が、頂点まで三十度を指す頃。ようやく溜まりに溜まっていた白い書類山脈が、元の茶色い机平野に姿を取り戻した。

「終わったあー…」

ルイス本人よりよっぽど疲れた声を上げて、リディはソファにぼふっと沈み込んだ。文字を追いすぎた目が痛い。ルイスが苦笑して、騎士に最後の書類を持って行くように頼み、今更のように冷め切った紅茶を飲み干した。

「俺もまさか一日で終わるとは思ってなかった。ありがとな」

「どういたしましてー」

ぱたぱたと手を振り、…それ以降二人共沈黙した。ソファに沈み込んだまま、リディの額に冷や汗が浮かぶ。

（そ、そういえば私達――）

誘拐並びにルイスの正体発覚のどさくさに紛れていたが、シュリアグランデの最後の記憶では口論していた。しかも今考えると、凄く下らない事で。

（ってか何だ私、ルイスが幻覚にころっと引っかかった事になんかムカついたんだっけ？幻覚って――そうだ、大切な人の顔――）

ずき、と胸の奥が軋んだ。訳も解らず何かがせり上がるような感覚を覚える。

（わけわかんない…）

俯いたままでいると、不意にルイスの声が響いた。

「リディ」

「…なに？」

まともに目を合わせたらなにかが溢れそうで、上目遣い気味にリディはルイスを見た。しかし月を背後にリディを見つめる蒼い瞳に、吸い寄せられるように目が合わさる。

「悪かった。シュリアグランデで、あんな風な言い方をして」

出し抜けに言われた言葉に、リディは目を瞬く。

（えっと…何言われたんだっけ）

確か、戦闘中に油断するな、と怒鳴られた気がする。

（もっともじゃん！）

あれはどう考えてもリディのミスだ。ルイスの叱責も当然である。何故か苛々して言い返した自分にリディは愕然とした。

「え、あ…いや、あれは私が悪いよ。ルイスは間違ったことなんて一つも言ってない」

大体、あのサキュバスは、わざわざ人が油断するような幻覚を選び抜いて使っているのだ。なんの予備知識もないまま相対して、動揺しなかったら人間出来過ぎだ。

サキュバスの幻覚のことを思い出してまた若干心が沈んだリディ

に、躊躇いがちにルイスが言葉を紡ぐ。

「いや…他にも言い方はあった。ただ、無性に苛々して――」

…ルイスも苛々していたのか。それは知らなかった。でも、何故？

リディの視線の先でルイスはぐしゃっと前髪を丸め、あーとかうーとか呻いていたが、やがて何かに押されるように零す。

「お前の目に見えたのは、誰だったのか――とか、余計なことばっかり頭にチラついて」

……。それって、どういうことだろう？

（私が見たのは、ルイスだ）

ルイスを殺そうとしたあの淫魔を探しながらも、目を覚まさないルイスが心配で、もしかしてもう覚まさないんじゃと考えると恐怖が押し寄せた。だから、これだけ考えてたんだからルイスの顔が見えたのも当然だ、と思う。

なのにルイスは、リディが見たのは誰かと言う。そんなの、訊かれるまでもない。

「私は――」

ルイスが見えた、と続けようとするのを、ルイスが遮る。どこか熱を持った瞳がリディを見据えて、俺は、と囁くように言う。

「俺は、リ」

その先の台詞は、何もかもを吹き飛ばすように勢い良く開け放たれた扉によって紡がれることはなかった。

「はっ!?」

目を点にして振り向けば、目に映ったのは鬱陶しい程長い金髪。

「リディ――!!こんなところにいたのかい!?僕に何も言わずにいつまで経っても帰らないから、心配で――」

「～ッ、うっざいわこの色馬鹿兄貴がっ!!」

避ける間もなく抱き付かれ、最初は呆気に取られていたリディも後半は顔を歪め、最後には蹴り飛ばした。

「私の行動は私が決める!一々気にかけないでいい!!」

息も荒く叫んでからふとルイスを見れば、なんだかとても脱力していた。がっくり、と言うのもおこがましい沈みっぷりだ。

「どうかした?ルイス」

「いや…」

力なく首を振り、ルイスはうなだれる。何やらぶつぶつ呟いているのがなんだか哀愁を誘い、リディはふと思いついて言った。

「ねえ、これから少し鍛錬しない?今朝出来なかったし」

その言葉にルイスは顔を上げ、しばし黙考してから頷いた。

「いいな。肩も凝ったし、やるか」
「リディ、君は何を…」
「煩い。ただの気晴らしだよ。私は戦闘職種なんだから」
止めようとしたサーレクリフをあしらい、リディは自身の武器を取ってくるためにルイスの部屋を出て行った。

リディの背を見送り、さて、と重い上着を脱いで肩を回しながら、ルイスは知らず苦笑した。

（…言おうと思ったんだが。…邪魔されたなあ）

絶対確信犯だ。とサーレクリフをちらりと見る。と、見事に目が合った。
常は甘く微笑みを象る金色の眼が、いっそ冷たささえ宿してルイスを見据えていて、ルイスの背をひやりと撫でる。

「…君はあの娘をどうしたいの」

女性に対しては優しく、睦言でも喋るかのような声も、今はひんやりとして色味がない。

あれだけ、本人に対して言うのに煩悶とした言葉が、ルイスの喉から滑り出た。

「好きですよ」

ぴくりとサーレクリフの眉が寄る。ルイスは怯まず、微笑を浮かべた。

「本人がどう思ってるのかは、わかりませんけど。俺は、彼女を愛してます」

サーレクリフの纏う空気が、ますます冷たさを増した。…立ち居ふるまいから単なる貴族だと思っていたが、どうやら大きな間違いだったらしい。この顔を常に隠し持っていたのだとすれば、演技力にかけては、リディのはるか上だ。

（あいつの兄なだけある――立派な戦闘職種だ）

考える以前に、彼もほぼ王族の直系なのだ。そこらの狩人より余程強い事に間違いはなかった。

「そう。…君は知っているの？あの娘が『誰』なのか」

「知ってますよ。…『烈火の鬼姫』でしょう」

間髪入れずにルイスは答えた。サーレクリフの眉が更に寄ったが

気にしなかった。

「あの娘が言ったの」

「いいえ。俺が自分が誰かを言わなかったように、彼女も言いませんでした。でも俺はゼノで気付いて――彼女も俺が気付いた事には気付いたでしょうが、特に何も話しませんでした」

「へえ。じゃあ君は、『氷の軍神』である君と、『烈火の鬼姫』のリディなら釣り合いが取れる、とでも？」

初めて、ルイスの顔から笑顔が消えた。蒼い瞳が眇められ、サーレクリフを睨み据える。

「それは、俺だけでなくリディに対しても侮辱です。釣り合いとか、力とか。そんなの俺と彼女の間には何も関係しません」

怒気すら籠もるルイスの声に、サーレクリフは若干詰まった。数秒の沈黙の後、冷たさが少し薄れた声で、再び問う。

「君は――あの娘を、どう愛している？エーデルシアスの第二王子として？男として？」

何を今更、とはルイスは言わなかった。彼らの間でそれは重要なことだからだ。

王族の結婚は、大抵が政略だ。アルとセレナの場合は異例と言っても良い。政略結婚の後幸せな家庭を築く場合も少なくないから、一概にそれが悪いとは言わないが、そこに某かの意志が介在する事は否めない。

だがルイスは一笑に付した。

「『氷の軍神』と『烈火の鬼姫』ですよ？下手をすれば大陸中の格好の攻撃材料です。もし俺が他国の者なら、なんとしてでも防ぐでしょうね」

彼ら二人がもし結ばれれば、それはただでさえ強大な力を持つエーデルシアスが、更に凄まじい力を誇る事に繋がる。同じく大国であるオルディアンとも事実上、これ以上ない同盟を結ぶ形となり、他国はその事に間違いなく危機感を抱く。最悪、エーデルシアス・オルディアン対他十一ヶ国となってもおかしくはない。

でも、そうなるかもしれない危険性を承知していても。

「俺は一人の男として、リディを愛してます。誰にも否定なんかさせない」

ルイスはそう、断言した。

「遅かったねルイス。なんかあったの？」

ルイスが、日中は騎士達が鍛錬に使用している場所へ着いたのは、二人が別れてから大分経った後だった。

待てどもルイスが来ないので、リディは一人型の反復に励んでいたが、彼が来たことでその手を止める。

「いや、ちょっとな」

肩を竦めて見せるルイスの顔は、確かに疲れを浮かべているのにどこかすっきりとしている。

（さっきは別にあんな顔じゃなかった気もするけど）

リディは首を傾げたが、元々細かい事は余り気にしない質だ。そ、とあっさり頷いて、ルイスから数歩離れて剣を構えた。

しんと静まり返った鍛錬場。少し離れたところにある騎士団の宿舎にそれなりの人の気配を感じるが、そろそろ就寝時刻なのもあって、自主練をする者は一人もいない。

騎士団の朝は早いのだ。そろそろ真夜中というこの時間では、夜明けに起きる彼らに取って遅い部類に入る。それでも普段なら皆起きていてもおかしくはないが、今は大事な時期だ。団長麾下、全員割り振り通り寝起きしているのだろう。

まあなんにせよ、誰もいないのは都合が良い。一応今のリディは『公爵令嬢』だ。

…ならこんなことやんない方がいいんじゃ、という理性の隅の囁きは綺麗に無視して、リディはルイスに向かって地を蹴った。

主にバレないように、物陰から二人の様子を窺っていたゼリクは絶句していた。

奔る銀色の光、静止することなく地面を弾く足捌き。王子の容赦のない剣先を最小限の力で受け流し、逆に間合いに踏み込む身のこなしと剛胆さ。並外れた跳躍力と、生来の素早さと歩法とを重ねた驚異的なスピード。

「リディ様…」

エーデルシアスの第二王子は強かった。剣に力と速さがしっかり乗り、攻勢には反撃する余裕を持たせず、守勢には隙がない。

もし自分が立ち会ったとして、勝利を手に入れられるかと言えば、迷った末、否と言わざるを得ない。

しかし目の前でかの王子と剣を交すリディは、明らかに対等に戦っている。しかも、攻撃の手は王子より上だ。守勢は甘いが、守勢に回る隙を見せない矢継ぎ早の攻撃と足捌き、見切り。

見た目はたおやかな少女であるのに、どこからあんな剣閃を繰り出すのか、と常日頃から思っていたが、全てに置いて、一年前よりキレも速度も格段に上昇している。

しかも、それを王子は冷静に弾き、正確に防いで剣を返し、攻撃を仕掛けている。悔しいが自分なら瞬時にガードを崩されて負けを喫すような突きを、しっかり見極めて弾き、さらに攻めている。

ガサ、と微かな物音がして顔だけ振り返ると、サーレクリフの姿

を見咎め、ゼリクは驚いた。

「サーレクリフ様」

「……」

ゼリクの小声に無言で応じ、サーレクリフは目の前の剣戟を眺めた。先程から絶え間なく続く金属音。闇の中で、剣は銀の光にしか見えない。

「あの子は…強くなったね」

囁くような声音に、ゼリクは頷いた。

「ええ…剣に迷いが見られない。本当にお強くなられた」

サーレクリフはそれには返事をせず、黙って二人を見続ける。

『俺はリディを愛してます』

先程の青年の声が甦る。どこまでも彼の眼は本気だった。妹一番のサーレクリフが、妹を任せてもいいかもしれないと揺らぐ程に。

でも、

「…どうせあの子（リディ）は気付いてないんだろうね」

昔から恋愛に関しては悲劇的に鈍い妹だ。サーレクリフらが潰すまでもなく自分で知らない内に叩き払った数、数知れず。

「…まあ、君次第だ」

面白くないが、妹もまんざら皆無というわけではなさそうだ。文字通り、後は彼の行動如何だろう。

くすりと笑った主に、ゼリクは本日何度目がなため息をついたのだった。

カァンッ、と一際高い音を立てて剣が弾き合い、二人は同時に飛びずさった。軽く肩を上下させながら睨みあい――時を同じくしてふっと剣を下ろした。剣を鞘に納めた後、リディはどさりと地面に腰を下ろす。

「熱が入りすぎたね。ちょっと疲れた」

「あれだけ書類仕事やった後だしな。でも大分鬱憤が晴れた」

リディに向かい合うように座ったルイスも同意し、しばし無言で二人で空を見上げる。

「…なんか、自分が意外。こっちの生活に戻ったことが」

「平和が信じられないか？…ここはここで戦場だが」

付け足された呟きを、リディは少し間を置いて理解した。

「…やだな。私社交界、嫌いなんだよね」

「病弱設定まで作ってたんだから相当だよな」

「……。だって私、情報戦とか得意じゃないし。家柄に媚売ってくるうざい奴もいるし。特に男はしつこい。婿狙うったって、うちには兄貴がいるから無意味だってのに」

「……」

それは家柄に対してじゃなくお前自身に興味があったからじゃないのか、とはルイスは言わなかった。代わりに、

「ならまたやるか？虫除け」

と言った。リディが怪訝そうに首を傾げる。

「虫除け？」

「ビグナリオンでやったろ。お前は男が厭、俺は女が厭。なら俺達が一緒にいりゃ、大分減るだろ」

その台詞に後ろで何か騒ぎが起きたが、ルイスは敢えて無視した。抑えてくれたらしいオルディアンの騎士に感謝だ。

リディはルイスの言葉の意味を把握するなり、ぱっと顔を輝かせた。

「名案！…でもいいの？」

「俺が言い出したんだ、いいに決まってるだろ。…それとこれ」

リディの手を掴んで裏返し、掌に銀の小さな耳飾りを落とす。リディは首を傾げた。

「何これ？」

「メルセイエデスの核だ」

「かっ…」

目を剥いてリディは耳飾りを見つめ、次いでルイスに詰め寄った。

「って、核はもっと大きいだろ！こんな小さな宝石みたいのになる訳…」

「なるんだよ。直系王族の極秘技術だけどな…シルグレイも、リューイとミリアも付けてたろ？お前の国の王太子も、これに似た形の耳飾りか何か付けてないか？」

過去出会った王族達、それにあんまり思考に上らせたくない自国の王太子を思い浮かべ、確かに、とリディは頷く。

「言われてみればしてたかも。…でも、アルとセレナは？そんなのしてた覚えないよ」

「十六歳未満の内は、『それがなんなのか』を知らされない。アルは旅に飾りをするタイプじゃないし、セレナは父親に幽閉されてたから、その時に取り上げられでもしたんだろう」

「…成程。でもじゃあ、なんで私にこれを？直系王族には近いけど、違うし」

尤もな問いにルイスは自分の髪をかきあげて青玉の耳飾りを見せて、言った。

「その核を貰ったのは俺達だからな。俺はこの通り持ってるし、流

石に王位継承権を持たないラグにこのことは露出出来ない。つまり選択肢は一つだ」

「成程、諒解。なら有り難く貰うよ。同伴もよろしく」

「ああ」

言いながら、ルイスは誘いがあっさり成功したのが嬉しいような、拍子抜けのような気分を味わっていた。

一般的に、貴族達のパーティーで同伴している者は、恋人や婚約者同士、もしくはエスコート役というのが多い。しかしエスコート役というのは、大抵親族もしくは特に親しい付き合いのある者が殆どだ。リディのエルクイーン家とエーデルシアスは別に親しい付き合いではないし、親族関係もない。それなのに、彼ら二人が連れだっていたら。…何を言われるかは想像に難くない。

そのうち気づけば、リディは怒るかもしれないが、ルイスとしてももう退く気はさらさらなかった。相手は鈍いリディだ。多少強引な手を使っても外堀を埋める。

もしこれをアルが聞いたら、だったらまず告白から始めろよ――とでもいうことは間違いないのだが、『本気の恋愛』をしたことがないルイスにとっては、これが精一杯なのであった。

煩悶するルイスを余所に、リディはふっと眉を寄せた。

（――…まただ）

この国に入った時と、王宮で目覚めた時感じた感覚。
頭を内から引っかかれるような違和感、不快感。ぞっと肌が粟立つような寒気。

「ルイス、今…」
「あ？どうかしたか？」

しかし、ルイスは何も感じていないらしい。リディを見返す瞳は少し丸い。

「……。いや、何でもない…」

三回目ともなれば、気のせいでないのは解っている。ただ、それを感じているのは、どうやら今のところリディだけだ。
ファーデリアでは、二人が二人、そういった感覚を覚えていた。
結局全ての人間を救うことは叶わなかったが、警戒することは出来た。

本来ならば、この事をルイスに伝えるべきなのだとは思う。
けれど、エーデルシアス（ここ）は彼の国で、彼女の国ではない。自分自身だけの微かな感覚だけで、国の頂に立つ者の一人にそれを伝えてしまう事は、躊躇われた。

そして彼女は、ずっと後になってからこの時を思い出し、後悔する事になる。

第八話　発覚と未来　（5）（後書き）

やたら長くなってしまいました。区切りが見つからず…

ＶＳ　兄（シスコン）。

ルイスは恋愛に関してはアルよりヘタレかもしれない。

バカバカ言われてる王太子は、一応どこかの後日談に出てきているヒトです。

第八話　発覚と未来（6）

第八話　発覚と未来（6）

王女生誕式典を二日後に控え、ルイスの帰還はエーデルシアス貴族並びに諸王族の知るところとなった。諸王族は、すれ違った際に挨拶を交わす程度だが、問題は貴族達だった。

王位継承者ではないとはいえ、第二王子。その端麗な容姿も相まって、なんとしてでも娘を眼に止まらせたいという貴族達は、早速争いを始めた。要するにルイスのご機嫌取り合戦である。

しかしルイスは仕事を理由に端から叩き出し、一切取り合おうとはしなかった。

一年前までは婚約者がいたので、あまり悩まされることはなかったのだが、一年前出奔する際破棄してきた。元々親が酒の席で適当に交わした口約束で、気に入らなかったら破棄していいと言われてきたのもあり、あっさり解消したのだ。婚約者の性格にしてもルイスは嫌っていたのでいい機会だったのだ。――その代わり、今面倒なことになっている訳だが。

しかし、本当の面倒事はその日の午後だった。

仕事がひと段落つき、ギルバートに暇か訊ねたところ、余裕で暇

だと言う返事が返ってきたため喜び勇んで部屋を出たルイスの顔は、しかし三分後には冷たい無表情と化していた。

「戻ってらしたなら、お声をかけて下されば良かったのに。そうしたら、すぐにでもわたくし、伺いましたわ！」

だから言わなかったんだよこの女（アマ）。

無表情ながら、ルイスの醸す雰囲気は明確で、たまたまその場に居合わせてしまった人々は、いつ彼が爆発しないかハラハラしている。

それに気づいていないのか、それとも気づいていて無視しているのかはわからないが、どちらにしろルイスの前でにこにこと笑っている若い女に、周囲は呆れと苛立ちと微かな尊敬の眼も向けていた。

「…悪いが、私は鍛錬場に行かなければならない。失礼したいんだが」

「まあ、つれない殿下。せっかく婚約者のわたくしが参りましたのに」

女の名はエルゼリーヌ・ザクリスカルタ・シャードプス。エーデルシアス筆頭公爵二家の血を継ぐ、この国で直系王族を除けば一番身分の高い女だ。ルイスのはとこにあたる。

「…何度も言ったはずだ。貴女との婚約は解消したと」

「わたくしも何度も申し上げましたわ。解消など、いつでもなかった事に出来ると」

――殴りたい。ルイスの心底からのその願望を、周りの目は必死に止めた。いくら王子でもやっていいこと悪いことがある。

しかしそんな皆の努力を水泡に帰すかのように、なおも甘ったるい声は続く。

「ねえ、ルイシアス様、これから――」

「あ、いたいたルイス。副団長さんが呼んでるよ」

それを遮ったのは、彼女とは正反対のさっぱりした声だった。反射的にその場の全員がそちらを向き、…ルイスを始め、何人かが目を点にした。

「お前…なにその格好」

現れた、紛れもないオルディアン公爵令嬢は――何故か騎士見習いの軽装を身に纏っていた。つまりは、身分の低い少年の格好を。

「いや、ちょっと騎士団に潜り込んでて…命令で君探してたんだよ。いったいなんだってまだこんな――て、あ」

前半の台詞ににルイス達は脱力した。リディはと言えば、それまでルイスが壁になってエルゼリーヌが見えていなかった為、近付いて初めて視界に収め、軽く目を見開く。

エルゼリーヌは突如現れた、親しげな口調の妙な少年に驚いた様子だったが、すぐに高慢な調子で命令した。

「なんですの、貴方。この方はこの国の最も高貴なお方の一人ですのよ。貴方ごとき騎士団見習いが、そのようなお方にぞんざいな口を、あまつさえ愛称を呼ぶなど、許されるとお思いですの？」

リディは目を瞬いた。次いでルイスを見上げる。

「…直さなきゃ駄目？」

ルイスはすり寄るエルゼリーヌから軽く身を避け、リディに歩み寄って首を振った。

「いや、直すな。今更気持ち悪い」

「…そうだね」

リディは、ははは と空笑いして、エルゼリーヌに向き直る。

「だそうですから、ご寛恕を、お嬢様」

愕然としていたエルゼリーヌは、そのまま軽く頭を下げて、王子と共に立ち去ろうとしていた少年を、慌てと怒りの入り混じった声で呼び止める。

「お待ちなさい！何なのですの。いきなり来ておいて殿下をお連れするなんて。無礼ではありませんの？」

リディはちらりとルイスを見てから、立ち止まってエルゼリーヌを振り返り、少し冷えた声で言った。

「じゃ、君はご自分の都合ならば、殿下と騎士団副団長の先約を破ってもいいっての？とんだ礼儀知らずなんだね」

その物言いには周りが青ざめた。ルイスは天を仰いだだけだったが。リディは言いたい事を素直に言い過ぎる。

エルゼリーヌの白い頬にかっと血が昇った。

「下郎の分際で私にそのような物言い、してもよいと思って！？」

「親の身分を笠に着て威張り散らす女は、見ててうんざりするよ」

そういうリディはエルゼリーヌより身分が高いのだ、と思ったルイスはなんだかやるせなくなった。が、そうこうする内、憤怒で顔を真っ赤にしたエルゼリーヌが叫ぶ。

「なっ…この無礼者！衛兵、この下郎を…」

「止めろ、エルゼリーヌ。リディ、言い過ぎだ」

片手でリディを抑え、目線でエルゼリーヌを牽制してルイスは、ため息をついて発言する。

「エルゼリーヌ、私は最初に言った。鍛錬場へ行かなければならないと。聞かなかったのは貴女だ。…リディ、行くぞ」

「そんなっ…ルイシアス様！」

悲鳴のような呼び掛けを発したエルゼリーヌを故意に無視し、ルイスは歩き出す。リディも少し不満そうにしながらもそれに続き、後にはルイスとエルゼリーヌが分かれた事により時を取り戻した廊下があった。立ち止まっていた人々は歩き出したが、皆一様に気遣わしげな目でエルゼリーヌを見ていく。しかしそれは、負ったかもしれない心の傷の心配ではなく、彼女の次なる行動への恐怖ゆえである。

「…許せませんわ、あの下郎っ…！」

エーデルシアスの中では筆頭を誇る公爵二家の血を継ぐエルゼリーヌは、幼い頃から蝶よ花よと育てられてきた為、とても高慢な性格の持ち主だった。しかし頭も回る為、猫を被るのも得意であるし、身分が高い為に皆おいそれとは諫言出来ないのを良いことに、自分

に都合良く物事を動かすのは日常茶飯事とすら言える。
そんな彼女に、あのような暴言を吐いた者は過去一人としていない。ルイシアスが自分を庇わずあの者の肩を持ったことも気に食わない。

「見ていらっしゃい」

吐き捨てるようにその場を去った令嬢を、エーデルシアスの者達は皆おののきながら見送った。

鍛錬場へ行く道すがら、リディは一歩前を歩くルイスに、「あれ、誰」と不機嫌な声音で訊ねた。

「エルゼリーヌ・ザクリスカルタ・シャードプス。この国で、王族を除けば一番良い血統のサラブレッドだな」

皮肉を混ぜてルイスは返した。全く、そのせいでこっちは飛んだ迷惑なのだ。

「ザクリスカルタ・シャードプス…ああ、エーデルシアスの筆頭公

爵二家？」

意外にもリディの知識にもあったらしい。驚きが顔に出たのだろう、ルイスの顔を見て若干また機嫌を斜めにしたリディはぶつくさと言った。

「今回の式典に出席する人達の顔と名前くらいは覚えろって、クリフ兄が。面倒くさい。名前だけならともかく、顔とか無理だよ」

ルイスはなんとも言えない曖昧な笑みを浮かべる。通常、外交戦争と化すこういった催し物において、出席者の顔と名前は勿論、ある程度の家系や環境、経歴などを把握しておくことはほぼ当たり前のことだ。ただの貴族達はともかく、各国家の代表者達はそれ位しているだろう。

まあ、リディの場合はいきなりの参加だし社交経験もないから、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

「それよりリディ、お前騎士団に潜り込んで何してたんだ？」

切り替わった会話にリディは、別に、と肩を竦める。

「本当に潜り込んだだけ。バレてもマズいし、水汲みと観察だけしてた」

間違っても公爵令嬢のやることではないが、もう今更だ。

「で？」

「強いね、この国の騎士団は。団長とかはおいといて、下のレベルが高い」

武力だけで言えば、オルディアンはまずエーデルシアスには敵わないだろう。

「それはどうも」

軽口を叩き合い、二人が歩いていると。

「リディ…？」

不意に、横手から唖然とした風な声がかけられた。同時に振り向いて、一人は驚愕、一人は首を傾げる。

立っていたのは、赤みがかった金髪の、背の高い青年だった。金色の眼が丸くなり、こちらを凝視している。

（確かこの人は…）

ルイスが確認の為口を開いた傍らから、

「どうして君がここに！？なんで国王自らここに来てんの！？馬鹿！？」

…擁護しようもない罵詈雑言が投げられた。

「馬鹿！リディ、」

言いかけて、はたとルイスは言葉を止める。リディのこれは、未知の者に対する態度ではない。むしろ、極近い者に対する――。

「…それはこっちの台詞だぞ、リディ」

呆れた風に、青年が腕を組んだ。ルイスよりなお上背のある立ち姿は、どこまでも気品があり、かつ威厳に満ちている。

「ゼノでバタスカ暗躍していたお前が――何故こんなところにいるんだ…？」

三大国家が一、アルフィーノ国王――ヘンドリックは低い声で、その目を眇めた。

「質問してんのはこっちだ、ヘンドリック！確かアンナは身重じゃなかったの！？」

ルイスが唖然と見守る先で、二人の口論は続いていた。

「阿呆。お前が出奔して何ヶ月経ったと思ってるんだ。もう生まれたぞ」

「本当！？男、女？」

「女の子だ。フィレスっていう」

「――って、そんなちっちゃな子とアンナおいてきた訳！？うわ最悪！世の敵女の敵！」

「…意味がわからん」

「…あのー」

このへんで口を挟まないと会話がいつまでも終わらないと判断したルイスは、遠慮がちに言った。

「ヘンドリック国王陛下、ですよね？」

くるりと同じ色の眼が同時に向けられ、若干怯むルイスをじっと見てからヘンドリックはふっと表情を緩めた。

「ああ。確かに俺はアルフィーノが国主、ヘンドリックだ。そちらはエーデルシアス第二王子殿…で宜しいか？」

「はい」

ルイスは微かな緊張を瞳に浮かべながら辞儀をした。五つと変わらないだろう年の男にこれほど気圧されるのは初めてだ。

「ルイシアスと申します。此度はご多忙の中、御自らエーデルシアスにいらしてくださったこと、誠に感謝しております」

「いや、俺も久々に王族（同類）の顔を見たかったからな。それより、そんな畏まらなくていい。大して年も変わらないだろう」

気さくな声をルイスにかけ、ヘンドリックは一転リディに怪訝そうに問いかける。

「何故ルイシアス殿とお前が共にいる？その格好も…。それ以前にどうしてここに…」

「あーもうわかったから。ルイス、近くに四阿かなんかない？」

「ある。案内する」

そうこうして、かくかくしかじかリディは事情をヘンドリックに語ったのである。

「…成程。奇縁というか、運命というか」

話を聞き終えたヘンドリックは、しみじみとした顔でルイスとリディを見やった。

ルイスが案内した四阿は、数カ所ある庭の内、一番小さいが、穏やかな花や静かな空気を楽しめるところにあった。洗練された装飾の柱や床の造りと静けさで、一種、外界から隔絶されたような雰囲気すら漂い、三人は遠慮はばかりなく会話できた。

「お前とルイス殿が旅か。…間違っても敵に回したくないな」

その言葉で、ルイスは彼がリディの正体を知っていることに気付く。だがそれを指摘する前に、リディが嫌味を言った。

「君のバカな元臣下は回したよ?忘れた訳じゃないだろ」
「……。ルイス殿、その節は大変ご迷惑を」
「え、いえとんでもない!」

慌てて首を横に振れば、リディが「なんかルイス性格違う…」と呟いたのでお望み通り脛に蹴りを入れてやった。

「痛ったっ!」
「…して、ルイス殿。パーティーにはもしや?」
「…ええ」

ちら、と笑ったルイスを、ヘンドリックはしげしげと眺め、「やっとか…」と笑んだ。

「ルイス殿。リディを頼む」
「はい」

「……？」

男二人の通じ合いにリディは一人、脛を抑えながら首を捻るが、彼女にわかる訳もない。

「話では、王女がお生まれになったということですね。おめでとうございました」

「ありがとう。まあ、エーデルシアスからは祝いを貰ったがな。その時来られたのがシージス殿ご本人だったので、俺も参った次第だ」

「……そうですか。それは」

（原因は父上かー！）

「…失礼ですが、ヘンドリック殿はおいくつになられるのですか？」

ルイスとさほど変わらない風に見えるのに、既に女児がいるという。ならば若顔なのかとも思ったが、彼は実際に、二十四だと答えた。

「お若いですね。なのにもう一国の主で父とは…尊敬するばかりです」

感嘆を交えるルイスの言葉に、何故かリディは噴き出した。

「…リディ」

「や、だって…。ルイス、こいつが即位したのは二年前で、確かに若いけど、片想い歴は馬鹿みたいに長い…だっ」

笑いで肩を揺らしながら喋るリディの頭を、ヘンドリックが容赦なく叩いた。

「いたっ！なにすんだよ！」

「それはこっちの台詞だ。何を要らないこと喋ってる」
「要らなくない。君の人柄を知る上で重要だろ。小さな頃からずーっと一人の女の子に恋してて、なのに女の子は全くそんなこと知らなくて、思春期なんか『なんで婚約者作らないの？』とかグサグサ無意識の刃物で刺されまくってその度死ぬ程落ち込んで、やっと告白したらしたで結婚するまでまる三年。でもすぐ妊娠して、甘い蜜月はお預け。笑っちゃうねー…ってちょっと待て落ち着け！無言で精霊喚ぼうとするな！」

ルイスはどう反応すべきか非常に困った。

（…有能な方なのは本当らしいが。照れ屋なのか）

リディが聞いたら「甘い！」とでもツッコミそうな結論だったが、ルイスは目の前の喧嘩一歩手前の状況を改善すべく、先程から気になっていたことを訊いた。

「その…リディとヘンドリック殿は、どういう関係なので？」

二人は動きを止めて、ルイスを見やり、お互い「…話してないの？」と視線を交わした。

「俺はお前が正体バレた時点で知られたものかと」
「そっちこそ当然の事実として流布させてるものかと」
「「……」」

肩を落としたところを見ると、何やら行き違いがあったらしい。
リディはため息をついてやおらルイスに向き直り、言った。

「ルイス。私の家名は？」

「？エルクイーン、だろ」
「ヘンドリック。名乗れ」
ヘンドリックは逆らわず、少し笑みを浮かべて会釈した。
「改めて名乗ろう。俺はヘンドリック・フィルガ・ロウ・エルクイーン・アルフィーノだ」
ルイスは固まった。エルクイーン、という名が頭の中で木霊する。
そんな彼を余所に、やれやれとリディは首を振った。
「私もついに叔母さんかー。…正確には違うか。従兄の娘ってなんていうの」
「さあな。面倒だから叔母でいいだろ」
そんな会話を余所に、ルイスは頭の中の情報を整理し、結論。
「つまり…ヘンドリック殿は、リディの母方の妹君が母上、ということですか」
「察しがいいな。その通りだ」
オルディアンは女性にも家督継承権があり、現在のエルクイーン家はその代表例だ。つまり、エルクイーン姓を名乗りながらアルフィーノの王族ということは、エルクイーン家の女性がアルフィーノに嫁いだということで――立派な血縁だ。
「そういう意味では、リディは二重の意味で“リィ”を名乗れるな。俺の従妹で、王弟の娘」
「我ながら複雑だよ」

現エルクイーン家当主は女性。そこに婿入りしたのが、現オルディアン王の弟。弟にも公爵を名乗る権利があったりするので、この辺りは相当複雑だ。

「誰からも政略に見られる癖に、どいつもこいつも恋愛結婚ってとこが笑えるよ」

リディ曰わく、リディの母は幼い頃から現オルディアン王弟と仲良しで、結婚は当然と認知される仲だったらしい。その通り結婚したのだが――前々からリディの母の妹に熱烈な求婚をしていた、当時のアルフィーノの王太子（つまりは前国王）が、その隙をついて彼女をほぼ攫う様に娶ったとのことだ。

本人はそこそこ彼に惹かれていたらしいので問題は無かったが、大変だったのはリディの母である。

昔から妹を溺愛していたリディの母は、それ以前からの食い違いもあり、彼を目の敵にしていたのだが、その彼に隙を突かれまんまと妹を奪われたのだ。魔物も裸足で逃げ出しただろう凄まじさで怒り狂い、自らアルフィーノに殴り込もうとしたのを、すんでのところでリディの父とその兄が止めた。妹からの手紙も受け、渋々引き下がったものの、今でもアルフィーノ前国王のことを蛇蝎のごとく嫌い抜いているらしい。その代わり、妹の血を継ぐヘンドリックを息子同然に可愛がり、そのお陰で、国を隔てているにも関わらず、リディ達兄姉とヘンドリックは親交が深いのだ。

「…なんというか、まあ…お前の性格、母親譲りなんだな」

ルイスは散々迷った末、そう言った。ヘンドリックが堪えきれず爆笑し、リディは憮然としながらも否定はしなかった。

その時、

「ルイス！」

四阿の外から涼やかな声が響いて、銀髪が頭を覗かせた。見知った顔に、ルイスは驚き、リディは「あ」と声を上げる。

「シルグレイ！」

ルイスとリディがビグナリオンで出会ったアーヴァリアン王弟、シルグレイ。そういえば参加者名簿にあったな、とヘンドリックは思った。

「帰ってきたと聞いて驚いたぞ。まさか帰るまいと思っていたからな」

「俺も帰ってくる気はなかった」

「ほう、なら何故……、！」

四阿に足を踏み入れ、そこで初めてシルグレイはヘンドリック、リディの両名を認知したようだ。彼からは、入口側に座っていた二人が見えにくかったのだろう。

シルグレイはリディを見て驚き、ヘンドリックを見て少し慌てた。急いで姿勢を取り繕い、会釈する。

「これは、失礼を。初めてお目にかかる、私はシルグレイ・アーヴァリアンと申します」
「いや、構わない。私はヘンドリック・アルフィーノだ。よろしく」
貴族の名前は長い。正式な場で正式な挨拶ならばともかく、その他では名前と家名だけなのが普通だ。まして今この王宮内は王族や著名な貴族ばかり。長たらしく名乗らずとも問題はない。
「して、こちらは…」
シルグレイは物言いたげにリディを見た。勿論ビグナリオンで出会った少女だとは気付いているが、彼は彼女を元貴族かもしれない狩人だと思っていた。この場に、しかも妙な格好をして存在するのを不思議に思ったのも無理はない。
それに対し三人は一様に笑い、リディが滑らかに立ち上がって膝を折った。
「私はリディエーリア・エルクイーンと申します。以後お見知りおきを、シルグレイ殿」
ぽかんとシルグレイの口が開いた。ルイスを見、ヘンドリックを見、最後にリディを見――絶句した。
「にしても、知り合いに会うね」
「ああ。今回のパーティー、知ってるか？ゼノからは――」
「見たって。ラーシャアルド、ビグナリオンからも、ねえ？」
「パーティーが楽しみになるのは生まれて初めてだ」
「おや、ルイス殿もパーティーが嫌いか？」
シルグレイの目の前で会話が流れていってしばらくして、彼は盛

大にため息を吐いた。

「もう、いい…。驚くのは止めにする」
「止めるのか？つまらねえな」
「やかましい」

面白そうなルイスにぴしゃりと言って、シルグレイはどっかりと四阿の一角に腰を下ろし、ジト目でルイスを見た。

「どうせビグナリオンの事も話したんだろう。…ヘンドリック殿、相席失礼仕る」
「お構いなく」

余り人目に付かない庭の一角の為、侍女も気付かずお茶もないまま、和やかに会話は交わされていく。本来なら護衛騎士がそれぞれいてもおかしくないのに誰もいないのは、全員が全員捲いたからだった。

「ほう、魔族にねえ…強かったのか？」
「強いなんてもんじゃない。悔しいが歯が立たなかった」
「あれは腹立った」

主にルイスとリディの旅の話を肴にしていると、さくりと草を踏む音が近づいて、白金色の髪の持ち主がおずおずと顔を出した。

「あ」
「おや、貴女は…」

リディ、ルイスが目を丸くし、シルグレイが微かに腰を浮かせた。

「あの、失礼します。私、セレナエンデ・ゼノと申します。ヘンドリック様が見えましたので、ご挨拶をと…、！」

やはり先程と同じように、しかし今度は見えた角度が違ったらしく、彼女はルイスとリディを見つけて息を呑んだ。

「リ、リディ様？それにルイス様も…」

一瞬呆然として、しかしすぐに気を取り直したリディが笑って席を詰めた。

「久しぶり、セレナ」
「元気そうだな」

ルイスの挨拶にはっと我に返って、セレナは空けられた席に遠慮がちに座り、まずは懐疑的な視線でルイスを見た。

「ルイス様は、まさか…？」
「そ。エーデルシアスの第二王子」
「……！」

リディの愉快そうな答えに、驚愕の余りセレナは危うく卒倒しそうになった。頭の中であの日々と交わした会話、行動の記憶がよみがえっては流れていく。…多分致命的なことはしていない、はずだ。

寸前でなんとか自分を取り戻すと、セレナはリディ、ルイス両名、それとヘンドリックに向き直った。

「改めて…あの折は、ありがとうございました。あなた方のお陰でわが国は救われました。この恩は決して忘れません。…三大国家の皆様に借りなど、おこがましいことではありますが」

「俺はルイス・キリグ個人として手を貸した。エーデルシアスは関係ねえよ」
「右に同じ。ヘンドリックはともかく、オルディアンは関係なし。セレナが気にする必要はないよ」
「俺も充分ミスリル(アルフィーノ)を回して貰っている。やったことの借りはもう利息付きで返ってきたぞ」
「ヘンドリックは国境兵をちょっと動かしただけだもんね」
「だけ言うな」

リディとヘンドリックが言葉のキャッチボールをしている傍ら、シルグレイはセレナに挨拶した。

「初めまして、セレナエンデ女王。聞いていた以上に綺麗な方だ。私はシルグレイ・アーヴァリアン。見知り置きを」
「あ、はい！どうぞよろしく…」

滑らかにセレナの右手を掬い上げ、その甲に口付けを落としたシルグレイの頭を、ルイスはばしっと叩いた。

「セレナに色目を使うな。セレナはもう予約済みだ」
「よ、よや…」
「予約！言い得て妙！」

セレナは顔を赤らめて絶句したが、リディは爆笑した。確かにまだ婚約はしてないらしいので、ある意味正しい。

「ほう？貴女を射止めるとは…どんなお方なので？」
「ラーシャアルドの第三王子だ。そのうち来るだろうさ」
「ほう、ヘンドリック殿もご存知で？」
「ああ、ゼノの内乱の折にな。というのも…」

など、話が盛り上がっている内に、セレナの護衛騎士が気を利かせて侍女を呼び、全く気づいていなかったことで泡を食った彼女達は大慌てで茶会の用意に走った。

そこまでは良かったのだが、通りがかりにそれを耳にしたサーレクリフが顔を出し、リディが色気どころか女にすら見えない格好をしているのを見て（誰も敢えて突っ込まなかったのだが）、無言で笑みを浮かべると、短く辞去を述べてリディの首根っこを引っ掴んで引きずっていった。

そのすぐ後、騎士団副団長ギルバートが現れてルイスもげっと青ざめた。そういえば元々はリディが使い走りで呼びに来ていたんだった。あからさまに忘れていた、という顔のルイスにギルバートは表面真っ白中身真っ黒な笑みでにっこりと笑い、やはりルイスも引きずられていった。

あとに残った三名はお互い顔を見交わし、苦笑しあってお互いが持つ二人との思い出話に花を咲かせたのであった。

第八話　発覚と未来　（6）（後書き）

今までに登場したメンバーが再登場するこの話。あらかた出ましたが、まだ一人か二人出ます。

第八話　発覚と未来　（7）

式典前日、街がいよいよお祝いムードで盛り上がる中、王宮内は若干の緊張感に見舞われていた。他国の使者達はともかく、エーデルシアスの者達は大変だ。警備、もてなし、段取り、不測の事態への対処法の確認…などなど、やるべきことはいくらでもある。

城を空けていた為に、今更そういった仕事に首を突っ込んでも混乱させてはいけないからと、本来余り関わらない予定だったルイスも強制的に駆り出され、直前準備という名の嵐に巻き込まれた。というか、こき使われた。

一方リディは一夜漬けよろしく参加者の顔と名前を覚えるべく、部屋にこもって、放って置かれてすっかり不機嫌なネーヴェを片手間に構いながら、似顔絵と名前を睨めっこしていた。

参加者は大貴族以上なので、そこまで人数は多くないし、四分の一は各国王族である。それらの顔はお互いの間では常識だし、身分的に難しいと捉えることでもない。

がしかし、興味のないことを覚えることが壊滅的に苦手なリディは、結局半数覚えられたかられていないかの境目で終了した。サーレクリフは嘆息したが、まあルイスがともに行動するのであれば問題はないか、と引き下がった。要するに丸投げである。

その他王族達は皆気ままに過ごしていた。何にせよ、彼らの本懐であるパーティーは夕方からだ。当日は朝から支度だのなんだのに追われるとはいえ、それまでは至って暇だ。国同士交流を深めたり、エーデルシアスの邪魔にならないように城内を散策するのが関の山だった。セレナやヘンドリックはすっかり茶飲み友達と化し、他の王族たちも巻き込んでおしゃべりに興じていたらしい。

この日の昼、ラーシャアルドからも二人の王子が到着した。出迎えにはルイスが立候補し、彼を見たアルと一悶着あったものの、そこまでの混乱はなく落ち着いた。

ただし、到着予定であったイグナディアの第一王子が、国が災害に見舞われたとのことで、急遽引き返した。一人の臣下に贈り物やら書状やらを持たせ、とんで帰ったらしい。まだ情報は入ってきていないが、その様子からみて相当酷いようだという報告は来ていた。

また、年中戦争状態継続中のザイフィリア、フェルミナも臣下を使者を立てるに留めた。それはそこそこいつものことであるので、特に気にせず流された。

そして、当日。

「うわー…すっごー」

あてがわれた部屋のバルコニーに出て、リディは思わず口笛を吹いた。

広いエーデルシアスの首都、グリアンを、今日は見渡す限り人が埋め尽くしている。大通り、小さい通りを問わず露店が所狭しと立ち並び、華やかな色合いに装飾された街は、派手さにおいてファーデリアの花祭すら上回るのではないかと思わせる。

しかもこれだけの装飾を、全て公費で落としているのだ。各店、酒場なども本日だけはタダ同然であるらしく、そのせいで各地のエーデルシアス国民のみならず、旅人達も数多く訪れているようだった。

これだけの規模で、誕生を祝うとは。エーデルシアスの国民の、王族への信頼が顕著に顕れている証だ。

「リディエーリア」

後ろからかかった甘い声に、リディは途端に顔の輝きを一転不機嫌に塗り替え振り向いた。

「いいじゃん、他にやることないし。それともまさか…もうやるとか言わないよね？」

それに対する返答は、キラッと効果音が付きそうな笑みだった。そこらへんの女ならころっと引っかかりそうだが、妹にとっては気

持ち悪い以外の何物でもない。ぞわっと背筋が泡だった。

「そのまさか」

「――ッ！！」

長い経験上反射的に逃げを打とうとしたリディを、既にその動作を予測していたサーレクリフが羽交い締めにする。そのままばたばたと足掻く体を抱えて部屋に戻った。部屋で、ずらりと待ち構えていた侍女達に、さあっとリディの顔が青ざめた。

「ちょっ、嘘だろ、まだ昼前…！」

ちなみにパーティーは夕方、日暮時からだ。

ええ、と侍女の一人が笑う。普段からとても美しい笑みが、今日は二割増だ。なんか張り切っている風に見える。

「ですからまず昼食をお召し上がり頂いて、それからご入浴の後着付けに入りますわ、リディ様。お久しぶりですが、御覚悟なさいませ」

ぞおっとリディの背を寒気が這い上がる。

（…そういえば、オルディアンにいた頃はこのヒトにドレス着ろって追い回されてたんだっけ…！）

思い至った所で何をすることも出来ない。

何の味もしない（ように感じる）昼食を食べ終えたリディは、それまでの人生で間違いなく一番だという苦しみを味わった、と後に親しい人々に語ったという。

その夜――。盛大に飾り付けられたエーデルシアスの大広間には、招待客達が続々と集まってきていた。

「ルイス！」

大貴族の一人と言葉を交わしていたルイスは、近寄ってきた少年を笑って振り返った。

「これは着飾ったな、アル」

今夜のアルは、見慣れていた雑な姿とは違い、立派に王族としての正装に身を包んでいる。暖色系を主とした上着は一目で上物と解る高級な生地だし、控え目ながらも袖飾りやカフスも最高級の宝石だ。髪も前髪がかきあげられた状態で固められ、大きめの琥珀の瞳が一層映えてみえる。いつもは幼い表情のせいか、あまり顔の造詣が日に当たらないが、今日は侍女の苦心のせいか、立派に美少年に見える。

「そういうあんたこそな。貴族的な顔だとは思ってたけど、そのツ

ラにそのカッコじゃ、最早歩く女悩殺器（ホイホイ）だな」

アルと違って、普段からその美貌に見惚れられがちなルイスは今日は更に迫力があった。

首の横で銀細工の髪留めに留められた黒い髪は細部まで梳られ、長旅をしていたことなど嘘のような艶を帯びている。瞳の色に合わせた深い蒼を基調とした服装は、たった三日で用意されたとは思えない程手が込んでいた。華美ではないが、着る者を引き立てている。

アルにわざわざ指摘されなくとも、自分がさっきから数多の女性の熱の籠もった視線を浴びていることに気付いていたルイスは、うんざりと目を伏せた。

「ルイス、それにアルフレイン殿」

そこへ新たに、シルグレイ、フレデリック、それにアルの兄であるリヒテルジークがやってきた。各々やはり、いるだけで目を惹く華麗な様相を呈している。

王族達は皆美形が多い。それは彼らの遥かな祖である一族が常軌を逸した美形一族だったからだとかそうでないとか言われているが、結局不明だ。

「女性陣はまだか？」

「まだですよ」

すいっと自然な足取りで加わったのは、サーレクリフと、ゼノの若い大貴族にしてセレナの臣下、ヒューレット。

ヒューレットは内乱の折、ルイスも幾度か言葉を交わした覚えが

ある。確か妻子持ちだった筈だ。

「クリフ、リディもまだ？」

「ええ。昼頃から侍女が張り切ってやってますからね、出来上がりを楽しみにしてて下さい」

笑顔のクリフの返答に、ルイスとアルは深い同情を覚えた。昼頃というと、もうかれこれ六時間。…哀れ過ぎる。

「セレナ様ももう少しかかりそうでしたので、私は先にご挨拶をと」

穏やかに言ったヒューレットは、この中にあってはかなり地味に見えてしまうが、朴訥ながらも優しげな顔立ちをしている。温和な好青年、といった感じだ。内乱時からセレナの忠実な臣下だったが、実は、アルが存在せず、ヒューレットに妻子がなければ恐らくセレナの王配だったというのだから、人生とは不思議なものである。

「セレナ様からもお話しになられたとは思いますが…ヘンドリック陛下、ルイシアス殿下。その折は誠にありがとうございました。我が国はこの御恩を一生忘れません」

「俺には無しかよ」

若干面白そうに言ったアルに、当然、とヒューレットは事も無げに返す。

「貴方は直に我（ゼノ）らの者になるから良いのです」

笑い声が弾けた。ひとしきり笑ってから、ルイスもヘンドリックもセレナに言ったようなことを言い、最早目を惹くどころではなくなり始めた集団に、しかしまたしても加わる者がいた。

「ルイス様っ…！」

幼さが残る可憐な声に振り向けば、大きい翠の瞳を一杯に見開いた金髪の美少女が、ルイスを凝視して立っていた。ルイスは苦笑して、

「お久しぶりです、レティシア殿」

あの時は雇い主の娘と雇われ者だったのに、今はこちらの方が身分が上だ。正直、まさかこの娘がやって来るとは思っていなかったのだが、ちらりと兄から聞いた話を思い出して、ルイスはくすりと笑って言った。

「弟（エデル）は失礼をしていませんか？」

途端にレティシアの顔が真っ赤に染まる。え、とかう、とかわたわたとする少女を見て、リヒテルジークがほう、と興味深げに言った。

「ビグナリオンの天使は、エデルフィオ殿を想っているのか。全く、兄弟揃って罪作りだな」

「リヒト兄、エデルフィオって第三王子だったよな？あのルイスにそっくりの。オレと同年代位だっけ」

「…お前は少し敬語を覚えろ」

この面々の中にあっては仕方ないかもしれないが、遠回しという言葉を知らない弟に、リヒトことリヒテルジークは深々と溜め息をついた。

その時、広間に微かなざわめきが走り、自然と彼らの自然は入り口に向けられる。

「あれは…」

リヒテルジークが小さく感嘆の声を上げた。

入ってきたのは、白に近い真っ直ぐの金髪を、軽く纏めて流し、細身のシンプルな銀のドレスを纏う背の高い女性と、この場の誰より鮮やかな巻き毛の金髪を高く結い上げ、スパンコールの散る紫紺のドレスを見事に着こなした女性だった。

銀のドレスの女性の方がどこか硬質で清廉な雰囲気を宿すのに対し、紫紺のドレスの女性は、その豊満な肢体のせいか凄まじく妖艶な雰囲気を漂わせている。

前者は、ビグナリオン第一王女アマーリア。後者はテーリア王妹ローズマリア。アマーリアは次期ビグナリオン女王だ。

「…にしても、いつ見ても…」

ヘンドリックがぼやく様に言った。

「目の毒だ。保養とも言うが」

アマーリアはともかく、ローズマリアの体つきは、なんというか素晴らしい。出るところは出、引っ込むところは引っ込んだ躯。特に林檎なんか目でもない大きさの胸は、男女共通の夢だろう。（意味合いは違うにしても。）

「すげー…」

アルはぽかんと赤面して固まっていた。…まあ、セレナにしてもリディにしても、良くも悪くもまだ少女体型なので仕方ない。十代

半ばの男子の性と言えるだろう。

「俺あの女苦手」

こそこそとルイスの影に隠れたのはシルグレイだ。シルグレイは後腐れのない大人の女性、もしくは清純な女性が好みなのであって、幾ら垂涎の肢体を持っていても、あの気もプライドも高そうな女は苦手だった。といっても話したことはないのだが。

ルイスもヒューレットも小さく同意した。二人共想い人がいるところも大きいが、タイプでない、と片付けた所が大きい。あのスタイルは素晴らしいとは思うけれど。

そのうち、アマーリアとローズマリアは別れ、アマーリアの方がこちらに近寄ってきた。すぐに男達に囲まれたローズマリアと対照的に、近寄ってきた彼女はまず、レティシアを開口一番叱った。

「先に行くなと言っただろう。何故一人で行った？」

それまでの印象をがらりと変え、目をつり上げて叱る彼女に皆驚く。対するレティシアは、しゅんとうなだれた。

「ごめんなさい…私、あの人苦手で…」

あの人、とは恐らくローズマリアのことだろう。

「知っている。だが、お前は外国に来るのは初めてだろう。何かがあってからでは遅いんだ。言っただろう、男は皆狼だと。私はヴィルヘルムにお前の事を頼まれているんだ。勝手な行動はするな」

その場の男性陣は非常に気まずく身を縮ませた。ばしっと否定できるほど、人間出来ていない。

「はい…」

しおれた花のようになったレティシアに、少し口調を和らげてアマーリアは言った。

「解ればいい。次からは気をつけろ」
「はい」
「良し。…さて」

アマーリアはくるりとルイス達に向き直った。ルイスは表面上笑顔を取り繕ってアマーリアを迎える。

「紹介が遅れたな。私はアマーリア・ビグナリオンだ。此度は妹君のご誕生、誠に喜ばしく思う。ビグナリオンを代表してお祝い申し上げる」
「丁寧な言葉、有り難く受け取らせて頂きます」

ルイスの応えにアマーリアは、にっと男性的な笑みを浮かべた。
――軍人めいた王女だな、と思う。

（リディと似たような空気を感じる、この王女…）
「兄上…、なんですかーこの集まり」

不意に呆れた風な声を出し、エデルが近寄ってきた。レティシアににっこりと微笑んでから、一同をぐるりと見回し、低い声でルイスに文句を言う。

「狸（貴族）の相手をしたくないのはわかりますけどー…、だからって王族の輪に逃げないで下さい。妙な派閥に思われますー」

「逃げるも何も、向こうが寄ってきたんだがな…」

言い訳の裏で、密かにバレたか、と舌を出していたのはお見通しだったらしい。ふんと鼻を鳴らされた。

「それは人望があってよろしいですねー。じゃ、それを国内の掃除に向けてくださいー」

さらりと恐ろしいことを言うガキだ、とアルとレティシアを除いた王族は心胆を冷やした。間違ってもここで吐く台詞ではない。だがシルグレイだけは、半ば感心したように言った。

「本当に顔だけじゃなくて性格もそっくりだな。笑顔で取り繕える分エデルのが上手か」

「…シルグレイ、お前な…」

ジト目でシルグレイを睨むと。ほぼ同時に、広間の入口がしんと静まり返ったのを察して、ルイスはそちらを見た。そして、息を呑んだ。

先程のアマーリアとローズマリアよろしく、二人の女性が連れだって大広間に入ってくるところだ。片方はセレナ。『月の君』とまで称されるその美貌は確かで、少し緊張しているらしい小さな顔はしかし、少女から女性へと移行する境の危うさが、レティシア以上の美少女ぶりを呈している。透き通るような長い銀髪は編み込まれて結われ、薄い青のふわりとしたドレスが華奢な肢体を包んでいる。紗のショールが白い肌を覆う様は、正に神秘的だった。

が、一同が固まったのは、七割ほど彼女のせいではない。

「ダレ…？」

わからない否わかりたくない、という体でアルが囁くように言った。

セレナの隣を毅然とした風に歩く少女は、セレナを「静」と称すなら、正しく「動」の美貌だ。炎のように鮮やかな髪は、多少付け毛でもしたのか長くなり、頭の横で翠の髪飾りに留められて流れている。その髪と同色の目も覚めるような緋色のドレスは、シンプルながら細部のデザインに手がこみ、評論家が見たら絶賛すること安請け合いの出来映えだ。

細くはないがしなやかな白い腕を包むのは、薄桃色のレースの手袋。細くもか弱さなど微塵も感じさせない立ち姿の中で、左右対称の、猫のような金の瞳だけが憂鬱そうに伏せられている。しかしそれは美貌の更なる味付けになるだけで、なんの損ないにもなっていない。普段より更に白さを増した頬は、いっそ作り物めいてすらいる。耳から下がる銀玉の耳飾りは、灯りを反射してきらきらと輝いていた。

「久しぶりに見たが…やはり美人だな、リディは」

「当然です。僕の妹ですから」

ヘンドリック、クリフの台詞の横で、シルグレイ並びにリヒテルジークはぽかんと口を開けていた。レティシアはやはり適わない、と唇を噛み、アマーリアは素直に感嘆の息を吐いた。

「初めて見る顔だな。貴殿の妹というのは確かか？サーレクリフ・エルクイーン」

「何を当たり前のことをおっしゃいますか」

…まあ、サーレクリフが自慢するのも無理はない、とルイスは思った。ビグナリオンでの姿より更に綺麗だ。

リディは視線を巡らせ、ルイスらを見つけると、セレナに何かしら言って二人でこちらに歩み寄ってくる。

それを迎えたルイスが、滅多に見せない本物の笑顔だったことが、場に一層の衝撃をもたらしたことは――知る者ぞ知る裏話である。

第八話　発覚と未来　（8）

第八話　発覚と未来　（8）

時間軸は少し前に遡り、ようやく侍女の最終チェックのお許しが出たリディは、もうへとへとに疲れたと言っても過言でない状態で、ゼリクと共に部屋を出た。

「よくお似合いですよ、リディ様」

「…どうも」

リディとて、綺麗だと言われて悪い気はしない。しかし、こんな鬱陶しい支度をする位なら言われなくていい、というのが本心である。

歩くすがら、すれ違う人々の視線を集めていくのも殆ど気づかず、早く終われ眠いと始まる前からあんまりな呪いを心中で吐いていたリディは、前方に見知った背中を見つけて思わず声を上げた。

「セレナ！」

振り向いた既知の少女は、リディを見て瞠目した。連れ添っていた騎士はポカーンと口を開けた。

「リ…リディ様!?え!?本物!?」

彼女達が知るリディは、前髪を陶器細工で留めていることが唯一の洒落っ気という勢いの、狩人の姿だ。合致しなくても無理はなかった。

もともと整った顔立ちは、繊細な化粧で一層輝きを増し、細い体つきはまっすぐしなやかで美しい。セレナは本気で、なんでこの人いつもあんな格好しているんだろう、勿体ない、と思ってしまった。

「本物だよ、残念ながら…行こう」

そんなセレナの内心を知りもせず、リディは無念そうに呻いて、セレナの横に並んで歩き出した。自然、並ぶリディとセレナの後ろを、オルディアンの騎士とゼノの騎士が並ぶ形となり、二人共なんともいえない顔で視線を交わす。

戦争は防がれ、王も替わったとはいえ、つい数ヶ月前までは敵国同士だったのだ。戸惑うのも当たり前である。

しばらく皆無言のまま歩き、やがて大広間に通じる場所に出る。ここで別れる騎士二人が、それぞれ主に礼を取った。

「では、リディ様」

「セレナ様、お気をつけて」

去っていく騎士の背を見送ってから、リディが「行こうか」と言うのを、セレナは呼び止める。

「リディ様――もう機会が無さそうなので、この場で失礼いたします。…我が国を滅ぼすべきあなたが、滅ぼすどころか守って頂いたことに、心からの謝辞を。私達ゼノの民、この恩は一生忘れません」

不意に切り出したセレナに、リディは驚いた目を向けるも、すぐに皮肉気に笑った。

「そんなに礼ばっかり言わなくていいよ。それに忘れないって言ってもね…ゼノ（そっち）は赤が禁色になるほどだろ？その元凶は、私だ。無理だよ。忘れた方がいい」

「いいえ。変えます。私達が変えてみせます」

だからこそ、断固としたセレナの宣言に、瞠目した。今しっかり自分を見据える少女は、果たしてこんなにも強い眼差しを持っていただろうか？

「私はゼノの女王です。万人が、心置きなく訪れる事が出来る国を作るのが私の仕事です」

見ていて下さい、とセレナは笑った。

「今はまだ無理でも、いつか必ず。だから――その時は」

佇む少女を見返して、くっとリディは笑った。しばらく静かに肩を揺らして、参ったよ、と苦笑する。

「わかった。その時は呼んで。――必ず行くよ。今度はありのままの姿で」

ほっと破顔した少女は、確かに女王に相応しいのだと。

ある意味、リディはここで初めて実感したのかもしれない。

「化けたなぁ、リディ」

近寄ったリディをまず迎えたのはルイスの手と、アルのそんな感想だった。リヒテルジークが顔をひきつらせアルを殴ろうとするより早く、リディはげんなりと肩を落とす。

「化けさせられた、だよ。この白粉がべたべたしてホント嫌…」

うんざりと恨めしげに、リディはサーレクリフを睨むが輝く笑顔を返されて即座に顔を背けた。セレナが本当に驚きました、と笑う。

「本当にお綺麗なんですから。私なんか歯が立ちません」
「そんなことないよ。明らかにセレナのがお姫様っぽい」
「確かにな。リディは迫力が有りすぎる」
「何を、ルイス殿。そこがいいんじゃないか！我が妹の美しさは――」
「クリフ煩い。…俺達もそろそろバラけよう。注目を集めすぎている」

ヘンリーの提案に全員我に返り、さっと周囲を眺めるなり、作り笑いを浮かべると三々五々に散っていった。

サーレクリフも名残惜しそうにしながら去っていき、後にはルイス、リディ、アル、セレナが残る。

「この面子でいると思い出すな」

ルイスが三人を見て言うと、リディがにやりと笑った。

「アルもセレナに会うの久しぶりだろ？積もる話あるんじゃないの？」

「なっ…なっ…くもないけど、無くないけど、…」

瞬時に顔を赤くしてしどろもどろになるアルに、リディは表面の取り繕いの為だけに上品に笑って、ルイスの腕を取った。その動作があまりに自然だった為に、ルイスもアルもセレナも驚く。

「リディ様、本当にご令嬢だったんですね…」

些か失礼なセレナの言葉に、リディは笑って返した。目が完全に据わっていた。

「クソ兄貴と馬鹿（ヴィンセント）のお陰でね。この程度の演技なら楽勝だよ」

今の天気（リディ）は、見た目は晴れでも中身は嵐だった。

「……」

「……」

「…後で鍛錬（うさばらし）付き合うから。我慢しろ」

「よろしく」

「…オレも付き合う。パーティー終わったらまた集まろうぜ」

「賛成です」

エルゼリーヌは絶句していた。他国の王族達と歓談していた第二王子（シアス）が、真っ直ぐに手を取ったあの女は、格好が違いすぎるけれどあの鮮やかな赤い髪は間違いなく――二日前の下郎（ルイ）だった。

あの時は男だと思い、その日の夜の内に騎士団長に、連れてくるように問い質したのだが、返ってきたのは『そのような者は我が団にはおりません』というものだった。

そこらにいた騎士を捕まえても、そんな者は知らないというので不審に思っていたが――まさか他国の令嬢だったとは。

しかも、聞こえ聞いた噂によれば、オルディアンの王女に等しい存在だという。

「なんて、こと…っ！」

ギリリ、とエルゼリーヌは歯を食い縛った。

同じ公爵家の人間でも、自分と、王位継承権を持つあの女の間には、歴然たる差がある。いつものように、権力で黙らせることが出

来ない相手。しかもあろうことか、ルイシアスが滅多に見せない笑みすら浮かべた。

「ルイシアス殿下、今日ご機嫌良さそうですなあ」

「あのご令嬢とはどんな関係なのだ？」

そんな周囲の会話にも腹が立つ。自分と同じようにルイシアスを狙っていた女達が、彼があの女と楽しそうに喋るのを見た途端一気に諦めムードに入ったのも気に食わない。

「ふざけないで…」

第二王子の相手は自分だ。婚約までしていた自分以外、彼の相手など有り得ない。

（あの女…忌々しいですわね。なんとか排除できないものかしら）

「父上遅いな…あらかた招待客は集まったぞ」

大広間を見渡してルイスが呟いた言葉に、確かに、とリディも同意した。

「私ぎりぎりかなって思ったぐらいだし。…っと」

危なく誰かにぶつかりそうになり、すんでの所で避ける。ルイスはリディを側に伴ったまま、各国の使者や貴族達と談笑をしているので、おちおち気を抜いていられない。

が、今のぶつかりかけた貴族に、リディは微かな違和感を抱いた。

（……？なんか、変）

だがそれも、満を持して現れた、エーデルシアス王、王妃、王太子、そして赤子の王女に向けられたざわめきがどこかにやってしまう。

「やっと来たか」

隣でルイスがほっと息を吐く。満場の視線を集めている、王の手を取りながら椅子に座った王妃の健在そうな様子に一番ほっとしたのは彼かもしれない。なにしろ戻ってきてからこっち、妹はおろか母にも、自身の忙しさと彼女達への気遣いとで会っていなかったのだ。

「綺麗な人だね…」

リディは目を丸くしていた。余り人の顔の美醜に拘らない彼女がそう評価することも珍しい。

王妃は正に、儚げな、という形容がこれほど似合う人はいまい、という風情だった。白金の髪は真っ直ぐで癖が無く、小柄な体は直

ぐに折れてしまいそうなほどに薄い。顔は、四人の子がいるとは思えない程少女めいた美貌を有している。
よくあんな体で子供産めるな、と密かに感嘆していると、リディが何を考えているのか表情から察したらしいルイスが、低い声で囁いた。
「母上の見た目に騙されるな。ああ見えてそこらの騎士は瞬殺するぞ」
「え」
嘘だろ、とリディはルイスを仰ぐ。が、ルイスはどこまでも真剣だった。
「嘘じゃない。昔は母上に稽古付けて貰ってたんだぜ。騎士さしおいて」
「……」
無言でリディはぽかんと口を開けた。
（うわ、想像出来ない！あんなナリでうちの母上と同じタイプってそれ…）
リディが認識を新たにして見つめ直す前で、王が招待客に向けて挨拶し、それに対し各国代表が言祝ぎを述べるという儀礼が始まった。
広間は一気に人の話声で満たされ、各王族も動き回って互いに挨拶を交わし始める。ルイスもそれは同様で、彼のパートナーを務めるリディも、必然多くの貴族や王族たちと言葉を交わす羽目になった。

何人かの王族と談笑したところで、一人のエーデルシアスの男性貴族が寄ってきた。五十を過ぎ、皺の入り始めた顔に笑みを浮かべてルイスに恭しくお辞儀をする。

「お久しぶりです、殿下。諸国漫遊をなさっていたと伺いました。いかがでしたか？」

それに対し、ルイスは完璧な微笑で応じた。

「ありがとう、ミシュレア公。多くのものを見ることが出来たよ。得難い経験だったと思う」

「それは良かった…ところで、そちらのご令嬢は？」

リディにすら、明らかにそちらが本題とわかる話の運び方で素性を問われ、リディは張りつけた笑みと共に裾をつまんでお辞儀を返した。

「リディエーリア・エルクイーンと申します」

「エルクイーンと申されますと…サーレクリフ殿の？」

「ええ、妹です」

上滑りするような受け答えに、終始ミシュレア公は品定めの視線を送ると、では、と笑顔のまま二人の前から立ち去った。その彼を数人の貴族が取り囲んだところをみると、情報収集特攻役だったのだろう。

「腹の中で何考えてるかわかんないオヤジだな」

ミシュレア公が去ったと見るや、笑顔を保ったままにそんな言葉を吐き捨てたリディの頭を苦笑して叩き、ルイスは小さな声でささ

やく。

「これが社交界だ。仮面を一枚も二枚も被った連中が腹を探り合う、陰険な場所だ」

「兄上の馬鹿…一度参加したら、もう逃げられないってのに…」

呻いている間にも、また別の男が近づいてきた。その男を視界に入れた途端、リディは本能の部分で姿勢をただした。無意識に顔が強張りそうになるのを、表情筋を最大限動員して抑える。

「これは、シャードプス公」

心なしか、ルイスの応える声も堅い。そして彼が発した名に、リディは聞き覚えがあった。

（シャードプス…ああ、あの高慢ちきな女の…）

「ご機嫌麗しく、ルイシアス殿下。一年間の諸国漫遊と聞き及びましたが…お元気そうでなによりですな」

「ああ、見聞を広められたのが何より嬉しいな」

「それはそれは…英明な殿下が、さらにすばらしい方になられたということですかな」

整えられた灰色の髪に、彫りの深い顔立ち。まだ五十代に届いていないだろうと思われる男は、しかし油断も隙もない光を切れ長の瞳に宿して見えて、知らずリディは冷たいものを感じた。そしてつ、とその眼がリディに向けられる。

「して、そちらのご令嬢は？どちらかの王族とお見受けしますが」

先程の貴族とは格が違う、威厳も覇気も伴う問いに、しかしリディは正面からその瞳を睨み返すことで応えた。

「リディエーリア・リィ・オルディアン・エルクイーンと申します。以後お見知りおきを、シャードプス公」

正式な名を臆することすらせず名乗り上げたリディを、シャードプス公は黙って睥睨した。数秒の沈黙が流れ、やがてシャードプス公は当たり障りのない笑みを浮かべる。

「こちらこそ、リディエーリア嬢。あなたのような美しいご令嬢は、引く手があまたでございましょうな」

これに顔を引きつらせ掛けたのは、ルイスの方である。要するにこう言いたいのだ。『お前にはもっと相応しい相手がいるだろう。さっさと殿下から手を引け』と。が、人の裏を読むのを不得手とするリディがそんなことを読めるはずもない。『引く手あまた』の意味をよくわかっていないまま、しかし結果として大いに誤解を招く牽制の言葉を吐いた。

「とんでもありませんわ。私のようなものと仲良くしてくださる殿下のような奇特な方は、滅多にいらっしゃいません」

「……」

再び重い沈黙が下りる。ルイスが取り成しを入れようかと思ったところで、シャードプス公はいささか強張った笑みを見せた。

「さようですか。では、ごきげんよう」

去っていくシャードプス公を見送り、リディは首を捻った。

「引く手あまたって…私むしろ友達少ないんだけど」
「お前はそのままでいろ、リディ」
これはリディの一人勝ちだな、と内心でルイスは大笑いしていた。が、リディは眉をひそめる。
「あの公爵…なんか蛇みたいだ。寒気がする」
「……」
（蛇みたい、か）
言い得て妙だな――とルイスは頷く。しかし直接リディに応えることはせず、その手を改めて取った。
「さあ、まだまだだ。また来るぞ。今度は女連れ」
「うわ、もう帰りたい」
嘆きを零しながらも、リディはきちんとルイスに付き合って挨拶をこなしていった。中にはリディに対して遠まわしに辛辣な言葉を投げてくる令嬢もいたが、そのあたりはルイスがフォローした。もっとも、フォローしなくてもさっきのシャードプス公のように、リディだったら躱せたと思わなくもないのだが。
顔合わせがあらかた片がついたところで、正式なものの終了と同時に、本格的な情報戦もといダンスの時間がやってくる。一曲目さえ終わってしまえば、あとは壁の花を決め込んでも問題はない。
情報戦は自分には無理、と早々に悟っているリディも、一曲目をルイスと踊ったら、そうするつもりでいた。
音楽が流れ始め、人々が男女でペアを組んで広間の中央へ向かう。

決まった相手がいないものも、同士で組めばあぶれることは殆どない。

リディもルイスの手を取りながら、ふと周囲を見回した。不意に、少し前にぶつかりそうになった男の様子が気になったのだ。

それは彼女の凄まじいまでの勘の良さの賜物だったのだが――結論から言えば、少し遅かった。

一瞬、広間の床の中心部に赤い円線が浮き上がった、と思ったその瞬間。

「…ふはっ、ふはははは、ははははっ!!やった、やったぞ!貴様らはもう、そこから出られない!!」

狂ったような哄笑が、大広間に響き渡った。

第八話　発覚と未来　（8）（後書き）

社交界を本気で書くと終わらなそうなので省きました。…省きすぎた感もありますが。

第八話　発覚と未来　（9）

第八話　発覚と未来　（9）

「なっ…？」

誰もが一瞬、呆然とした。ダンスの為に広間の中央に集まった人々、それを囲い込むように赤い円が大理石の床に走っている。玉座すらも同様で、今円に囲われていないのは、部屋の隅にいた給仕達や、警備の騎士くらいのものだった。

「なんだ…？」

訝しげな顔をする面々の前に、見るからに興奮している男が踊り出る。無論、円の外だ。

その男に、あっとリディが口を抑える。――さっき、ぶつかりそうになった貴族だった。

「ははははは、無様なものだっ、あっさりとひっかかったな」

「どういう意味だ、というより無礼だぞ貴様」

エーデルシアスの大貴族の一人が男を睨み、円の外に足を踏み出す――が。

「『出るな』！」

大貴族の足が円を踏み、男の叫びが走ると同時に、彼は吹っ飛んだ。円の中に位置する大テーブルに突っ込み、凄まじい音を立てる。

「なっ…？」

「足掻くのはよせ！貴様らはもうここからは出られん！」

「何を世迷い言を」

シルグレイはそう吐き捨て、手の一振りと共に火矢を男めがけて放つ。しかしそれは、

「『跳ね返せ』！」

再びの男の叫びで、なんとシルグレイの方に弾かれ返ってくる。愕然として動けないシルグレイの代わりに、側にいたサーレクリフがかろうじて結界で防いだ。

「何だ…今の」

ルイスも信じられないという面持ちで呟く。シルグレイは治療術こそ不得手だが、魔術は一流だ。その彼の魔術が、なんの魔力も籠もらない男の叫びだけで、無効化された。

「どうなってんの…？」

テーブル上のナイフをこっそり隠し持ち、リディが困惑の色を濃厚にして眉を寄せた。

その声が聞こえた訳ではないのだろうが、男は嬉しくてたまらないというように嗤う。

「貴様らを囲むその円は、竜の血だ！！」

「は？」

共にいたセレナを庇うようにしながら、アルが素っ頓狂な声を上げた。

「竜の血？それが何だってんだ？」

男が嘲りを込めて叫ぶ。

「知らないとでもいうつもりか？王族ともあろうものが、戯けたことを！」

だが、その場の大半はアルと同意見だった。貴族達や、各国招待客達も訳がわからず眉を寄せる。しかしごく一部――エーデルシアス王、シルファーレイ、ヘンドリックを始めとするほんの数人が顔色を変えた。

だがそれに他の者が気付くことはなく、皆不審げな目で男を見返すものが殆どだった。

それに男も気づいたらしい。眉をひそめて、

「貴様ら、本当に知らないのか？貴様らの――」

「あなたの要求はなんですか？」

その声に被さるように、シルファーレイがよく通る声で言った。

「この祝いの場を汚すあなたの目的はなんなのですか？何がしたいのですか？」

シルファーレイが意図的に話を反らしたことをちゃんと認識した

のも、やはり数人だった。シルファーレイの質問は、今全員が一番知りたいことであったためだ。

それは男も同様だったようで、狂気を顔に浮かべて再度叫んだ。

「何がしたいか、だと!?決まっている――貴様ら一族の滅亡だ!」

「一族?」

さっきからさっぱり要領を得ない、とリディは顔をしかめた。その傍らで、ルイスは思い当たりにしかし首を捻る。

「遥か昔、今の王族の祖はとある一族だった――ってやつか?それがなんの因果なんだ?」

ぐり、と男の顔がルイスを振り向き、その形相に思わず彼は身を引く。――正気じゃない。

「俺の一族にはその遥か昔から伝わる家訓がある――『王族達を許すな』ってな!祖母曰わく、その昔貴様達と覇権争いをしたんだそうだ!覇権争いに負けた俺の一族は、土地を追われ見つかり次第殺されたそうだ――それが俺にとって現実を伴ったのは、祖母を含めた俺の家族が皆殺しにされた時だ!エーデルシアス王!貴様にわからんとは言わせない!!」

血走った目が、玉座の王に向けられる。釣られて一斉にその場の眼が彼に向けられたが、王は落ち着いていた。

「……。確かに知らぬとは言えまい。平和をかき乱す者を放逐することは我らには出来ぬからな」

客達は、未だに根底にあるものはわからないものの、どうやらこ

れはエーデルシアス王に対する怨恨らしい、と悟った。あの男が、王が某かの理由で抹殺を命じた中の生き残りだということも。

「それで、何が望みだ？聞くだけは聞いてやろう」

「この後に及んでまだ自分が優位であると疑わないとは、大した愚か者だな、王！！――まあいい、俺の望みは他でもない――この国の破滅、ひいては王族共の死だ」

その瞬間、ふっと降りた気配にアル、ルイス、リディの肌が泡立った。鍛えられた狩人としての察知能力が警鐘を鳴らす。

「この気配っ――」

「まさか、魔物を――」

それに応じるように、男の側に二体の人型の魔物が顕現した。人型ということは、上位だ。

「くはは、その通りだ！今この王宮は魔物に包囲されている。王族の貴様らはそこから出られない。守るべき国民が死んでいく様を見ているがいい！！」

その言葉と同時に、部屋の隅で震えていた給仕達が、血飛沫を上げて倒れる。はっとして騎士達は剣を抜くも、混乱した状態では大した抵抗も出来ぬまま、鋭利な爪に貫かれて絶命する。甲高い悲鳴があちこちから上がった。

そして、部屋の外から聞こえてくる喚声。男の言葉に、偽りはなかった。

「貴様っ――！！」

「くははははっ、苦しめ、民の声を聞きながらな――『魔術は使

うな』！」

その言葉で、その瞬間にも魔術を発動させようとしていたサーレクリフ、ヘンドリック、リヒテルジーク、アマーリアの手から魔術が弾け散った。同時に、魔術禁止の効力を持ったらしい赤い環が鈍く輝く。

「貴様らはもう出られず、魔術も使えない！！無力な者共よ、くははははっ」

「…あの野郎…」

殆どの女性陣は勿論、男ですらも顔色をなくし、何人かは意識を失う状況下で、リディは舌打ちした。ぎり、と歯を食いしばる。

いっそこの手のナイフを飛ばして息の根を止めてやりたいが、そこまで投擲の腕前に自信はない。障害物（魔物）はいるし、失敗した場合のリスクが高すぎる。

「どうする、魔術も行動も弾かれるんだろ…どうすればいい」

先程のシルグレイの魔術が無効化されたことといい、一言で吹っ飛ばされた貴族のことといい…迂闊に動けば致命的になりかねない。竜の血が何故このような効果をもたらすかはわからないが、最悪の状況に近い。

「しかも、早く片付けなければ街が危ない」

側にいた男性が呟いた。リディがそちらを見やると、金髪の、まだそう年のいっていない顔が目に入る。

（あれ？この顔、どっかで…）

「ファーデリア王…すみません、我が国のいざこざでとんだご迷惑を」

まるでリディの疑問に応えるかのように、ルイスが男性に向かって頭を下げた。その単語に、あっとリディは眼を瞠る。

（リューイとミリアの父親…！）

ファーデリアで出会った幼い兄妹。その兄の方の顔は、目の前の男の面影を確かに宿していた。

いささかの懐かしさに言葉を使えさせるリディをよそに、ファーデリア王は首を振った。

「いや…あの一族のこととなれば、我らは皆、言うなれば運命共同体。来るべきものが来ただけだ」

ルイスは内心引っかかるものを覚えた。『あの一族』とは何か――ルイスには未だよくわかっていないが、このファーデリア王はその意味を知っている。だが、それを問いただしている場合ではない。

「…民の方ですが…大丈夫です。我が国の騎士団並びに魔術士団は、それ程柔くはありません」

「…ま、そうだろね」

自ら潜入して確かめてきたリディは頷いた。あの力があれば、魔物を殲滅とは行かずとも、防衛戦くらいならやれるはずだ。実際、殆ど断末魔と思われる絶叫は外から届いてこない。

ただ、誰も大広間に来ないところを見ると、王族は大丈夫だと思

っているか、手を回す余裕がないか――恐らくは後者だろう。

「さて――どうやってこの状況、打開するか」

男とは、未だエーデルシアス王が会話を続けている。だが魔術は禁止されているし、環からは出られないし、どうにもなら――――

「…ん？」

そこまで考えて、リディは眉を寄せた。

数ヶ月前、うっかり巻き込まれたアルフィーノ貴族の陰謀。その際、リディはアルや現地の女性達と共に、魔術禁止結界の内に捕らわれたのだが――その時の、半身を抑えつけられるような不快感を、今は感じている気がしない。

「ルイス、ファーデリア陛下…本当にこれ、魔術禁止されてます…？」

「は？…されているが」

ファーデリア王は怪訝そうに返して、忌々しい、と舌を打つ。

「精霊の気配が遠い…そうでなければ一息に壊してくれるものを」

対照的に、ルイスは虚を突かれた顔になった。手が宙を彷徨い、終にぐっと握られる。

「…俺は、遠くには感じない」

「！？」

「…私もだよ。多分、使える」

迂闊に発動したら気づかれる可能性があるので実際のところはわからない、が。

「…何でだろ？」

リディの呟きに、何故かファーデリア王が固まった。まさか…と口が音をなくして紡ぐ。だが、それにはリディもルイスも気付かずに首を捻っていた。が、すぐにリディが眼を鋭くして魔物二体に守られている男を睨む。

「まあ、なんでもいいよ。動けるなら」
「だな…じゃリディ、まずは魔物潰すぞ」
「了解。ファーデリア王、離れてて下さい」

ファーデリア王は未だ呆然と二人を見つめていた。だが強い視線にはっと我を取り戻し、

「…君達は…」

そう微かに呟くも、すぐに首を振って数歩退いた。ついでに周りの人々も引っ張って下がる。

未だに場の注意がエーデルシアス王達に向かっているのを確認し、ルイスが低い声で囁いた。

「五秒数えたら風魔術で跳ぶ。いいか」
「大丈夫。じゃ、カウント取るよ」

ぱちん、と小さく小さく、リディが指を鳴らす。そして——五秒後。

だん、という強い音を立てて二人の姿が掻き消えた。

男は込み上げる嗤いを抑えられなかった。

――ついに宿敵であり仇であるエーデルシアス王を捕らえてやった！しかも、生死は自分の掌の上だ。これほど愉快なことはない。

自分の一族に伝わる、“王族封じ”。効くかどうかは半信半疑だったが、見事に効を奏した。自分にとってはただの赤い水でしかないもので描かれた円を、奴らは越えてこれない。これをくれたあの女と、手引きをしてくれたあの男には、感謝するばかりだ。

特にあの愚かな男には心底礼を言わなくてはならない。もっとも、今あの男は王族もろとも環の中にいるから、もう機会はないだろうが。

（血は水よりも濃い、とはよく言ったものだ）

気が遠くなるような長い時を経ても、奴らは自分達の血（業）を超克できないのだ。

「私に怨みがあると言うなら私を殺せばいい。他国の者まで巻き込むな」

先程から似たようなことを繰り返す玉座の主。見苦しいものだ。王者としての傲慢（プライド）ゆえに、命乞いすら視野にない。

――もっとも、命乞いをしたところで聞き入れる気は毛頭ないが。

「言っただろう！俺は貴様達の中に流れる血が憎いのだ、そこに国などない！！だがそういうなら、手始めに貴様の息子から殺してやろうか？」

哄笑と共にそう言えば、王の顔が微かに強張った。賢王と称えられても、子供には弱いか。

（貴様にも、家族を失う痛みを思い知らせてやる）

歪んだ嗤いを浮かべて、男が再び口を開きかけた時、だん、という出所不明な音が響き。

「ごめんだよ」

玉座の隣に座る王太子と似た顔の、薄い笑いが通り過ぎたと思った瞬間、男の両隣から血飛沫が上がった。

男の両脇を固めていた魔物は、リディ達が床を蹴った瞬間に反応した。が、それでは遅い。反応し、出所を探してから戦闘体勢に移るのでは、遅いのだ。

「残念でした」

緑色の顔に驚愕を浮かべた魔物を、リディは風の刃で粉々に切り裂く。血を吹き出した直後、魔術は霧散した。男を挟んで反対側では、ルイスが同じことをしていた。

「なっ――」

事態が理解出来ていない男と一瞬で距離を詰め、逆手に握った果物ナイフを喉元に突き付ける。しん、とした静寂が広間に降りた。

「さて、と」

冷徹な声を発してルイスは男の前に立ち、微かに笑みを浮かべる。

「生憎だったな。俺達にはなんでか知らないが、竜の血封は効かな

いようだ」
「一対一戦闘なら、明らかに私達に分がある。諦めて投降した方がいい」
呆然としていた男は、はっとして喚く。
「なっ…何故だ！この封じは絶対のはず！！貴様らに…」
「だから知らないって」
淡々と答えて、リディはナイフを握る手に力を込めた。途端食い込む刃に、ひっと男が息を呑む。
「さっさとあの術を解いて。じゃないと殺すよ」
だが、その言葉は逆に男を冷静にさせた。唐突に静かになり、くくく…と乾いた嗤いが男の喉から漏れる。リディは走った悪寒を誤魔化すように舌打ちした。
「何が言いたい」
「じゃないと殺す…だと？馬鹿だな、娘」
「…なに？」
「この企みを失敗した以上、どうせ俺は殺される。しかもお前らに散々拷問された後でなあ…。俺の情報を、散々極悪人のように切り刻んででも取り出すのさ。どうせなら、死なば諸共、という言葉を知っているか？」
前半の台詞に動揺したせいで、リディもルイスも反応が遅れた。にやりと男の唇がめくれあがり、ばっと懐に入れられた手が黒く輝く珠――核を取り出す。

「っ、やめ――」
「　」
口の動きをみる限り、恐らく、滅びろ、と紡ごうとしたのだと思う。しかしそれは音にはならなかった。
ルイスとリディの視界で、鮮やかな金と紅が、舞った。
「馬鹿ねえ。こんなところで役者（キャスト）を殺しちゃったらつまらないじゃない？」
響いた、婀娜めいた女の声。艶を引くそれは、薔薇のような毒を含んで二人の耳に滑り込む。
「――な…」
びちゃ、と顔に降りかかる鮮血に、リディはのろのろと足元に視線を落とした。赤黒い、元が何かもわからない破片が紅い水溜まりの中に浮かんでいる。その水溜まりの中に自分はいて、躯には所々薄赤い濁った破片が散っていた。
「――ッ！」
吐き気をこらえてよろめいた彼女の肩をルイスは抱えて跳びずさった。彼にしても顔は青ざめ、手が微かに震えている。
距離を取って改めて認識する視界。先程まで確かに人間の形をしていたものは、最早単なる肉塊でしかなく、知らなければそれが元は何の形をしていたかの連想すらままならない。
それは、かつてファーデリアで見た光景と酷似していた。

堪えきれず失神、嘔吐する者が続出する。視界の端で、セレナをはじめとする女達をかばう男達の姿が目に入った。

「人間って馬鹿ねえ。ちょっと力をあげただけで、すぐになんでも出来る気になっちゃうんだもの」

その光景を挟んで立つ女は、全く自分のしたことを意に介した風もなく肩を竦めた。

震える手を握りこみ、ルイスは低い声で誰何した。

「お前は何だ」

「何だと思う？」

くるりと、一本の枝毛もなくゆるやかにウェーブした黄金の長い髪を見せ付けるように、女はその場で回ってみせる。

荒れひとつ見当たらない白磁の美貌。白眼の存在しない緑の双眸はまるで緑柱石（エメラルド）のようで、妖艶な笑みは、総毛立つ程美しい。卵型の顔の各所に配置されたパーツに欠陥など存在しない完璧な美貌は、――逆に人間味が無い。

趣きは違うものの、その存在感は、やはりかつてファーデリアで相対した存在と同じものだ。

「…魔族、だね」

リディが呟いて、「フレイア」と喚んだ。

瞬く間に顕現した気配が、すぐに更なる苛烈さを帯びる。際限なくいや増す勢いに、まだ意識を保つ面々は慄いた。

「リディ…」

小さくサーレクリフが呟いた。妹の“本気”を見るのはあれ以来だ。自分も魔術を使おうとして、施術者の死を持ってなお、未だに血の結界が効力を持っていることに唇を噛む。

ルイスも無言で手を振った。清冽な水の力が刺すような鋭さを持って顕現する。リディの火と対照的な力は、しかし相殺しあうことはなく並びあって魔族と相対した。

女は大げさに手を振って、からかうような声音で言った。

「そういきり立たないの、『烈火の鬼姫』、『氷の軍神』。貴方達二人と今ここでやりあう気はないわ」

その台詞に、既にその事実を知る者以外が皆、はっとリディを見る。

が、リディはラーシャアルドで指摘された時のようには動揺しなかった。ゼノでの一件は、完全とは行かないまでも、彼女に毅さを与えていた。

「じゃあ、何しにきた?」

ルイスが守るようにリディの肩を引き寄せ、低く問い質す。

「そうねえ。私は『原初の運命』になんか興味はないのだけど…あの方がとても面白そうになさっていたから。理由はそれだけよ?」

「あの方?」

「ファーデリアでお会いしたのでしょう?魔族(わたしたち)の王。闇の名を冠す、私達を統べるお方」

「…セティスゲルダ、か」

落とした呟きに、あちこちから微かな悲鳴が上がった。基本的に人に不干渉の魔族に在って、異端ともいえる存在。人に興味を抱く彼の単なる気紛れで起こった禍いは決して少なくない。

「そう。あの忌々しい蜥蜴共の主と同じ位の悠久を生きておられる方。あの方の望みは私の望み。だから貴方達を見に来たの」

幸せそうに笑む彼女からは、先程思い出すのもおぞましい殺戮をしたとは到底思えない。けれど無邪気な口調の裏には、確かに『虫けら』への嘲弄が潜んでいた。

「半信半疑だったのもあるけれど、これではっきりしたわ。あの馬鹿で煩い男も、少しは役に立ったわね。じゃなきゃわざわざあいつら(竜)の血肉をあげた意味がないもの」

「じゃあお前がこれを仕組んだのか？王族の殺戮を？」

「馬鹿ねえ、ただの実験よ。殺すことが目的だったらその男、止めてあげなかったわよ」

ルイスを一蹴し、女はふわりとその場に浮かび上がった。

「教えてあげるわ。私の名は、エカテリーナ」

はっとして身構える間もなく、女の姿が消え、ルイスとリディの耳元で、艶やかな毒を含んだ声が囁く。ばっと振り返っても、その姿は既に視えない。

「イグナディアで、貴方達を待っているわ」

くすくす、と軽い笑い声だけを残して。

魔族――エカテリーナの姿は忽然と消え失せた。

第八話　発覚と未来　（9）（後書き）

第八話は次話で完結です。

第八話　発覚と未来　（１０）（前書き）

時間軸が飛びます。二ヶ月後です。

第八話　発覚と未来　（１０）

ルイスは視界の端を過ぎった白いものに、書類を書く手を止めてふっと顔を上げた。
昼下がりの空、窓の外で、ゆっくりと舞い落ちるそれは綿菓子のようで、けれどずっとずっと小さくも地面に層を重ねてゆく。

「雪…」

呟いて、窓を開けてその一片を掌に落とす。瞬きの間にそれは溶けて失せたが、ペンを握り続けて凝った手に、微かな冷たさを残した。

「もう、そんな時期か。…二ヶ月経つんだな」

波乱のエーデルシアス王女生誕式典から、早二ヶ月経った。各国王族はそれぞれ自国に帰り、ここエーデルシアスも後始末も大凡終えて、淡々とした日々を刻んでいる。

あの騒動のあとは、大変だった。生々しい惨殺死体を目の当たりにした貴族達の衝撃は深く、エーデルシアスの者は謝罪と医師の派遣に奔走する羽目になった。

そこまで思い出して、ルイスは顔をしかめた。

――エルゼリーヌ。あいつの鬱陶しさはなかった。

心に負った衝撃とやらを理由に、王宮に頻繁に訪れてはルイスにまとわりつき、ほとほとうんざりしたものだ。何より一番腹が立ったのは、あれだ。

各王族が帰途についたあと、城内を歩いていたルイスを捕まえて、エルゼリーヌは嬉々として話しかけてきた。具合がどうかとか、家族がどうだとか。それに対しルイスが無関心を貫いていると、急にエルゼリーヌは話題を換えた。それが最悪だった。

「あのオルディアンの女、『烈火の鬼姫』でしたんですって？オルディアンでは英雄扱いをされていると聞き及びましたが、所詮ただの人殺しではありませんか。そのような女が、ルイシアス様のお側に寄るなんて――」

その時点で、ルイスはエルゼリーヌの手を振り払い、冷たい目で

睨み付けた。

「お前は今自分が何を言っているかわかっているのか？王族の末席ですらないお前が、他国の正統な王位継承者を侮辱する資格があるとでも？」

エルゼリーヌは目を見開き、信じられないと言った風にルイスを呆然と見つめた。それに対し、ルイスは冷徹に言い放った。怒りのあまり、一人称を『私』にすることすら忘れていた。

「不愉快だ。二度と俺に近付くな」

それ以降、エルゼリーヌと会ったことはない。

――が、あれくらいでめげる女なら今まで苦労していない。近いうちにまた攻勢があるだろう、と考えるだけ鬱だった。

――それに、リディ。

あのあとお互いばたばたとして、大して言葉を交わすことも出来ないまま、彼女は帰国してしまった。

今回の件で、『烈火の鬼姫』であることが露見したリディ。全員が竜の血の支配下にあった中で、ルイスと共にたった二人だけ動けたことと合わせて、彼女については様々な憶測が飛んだ。それこそ、エルゼリーヌのようにリディを傷つける者まで。

竜の血の束縛については、エーデルシアス王が一言だけ発言した。

『王族の血を継ぐ者は、誰であろうと竜の血に逆らえない』

と。それ以上は貝のように口を噤んで、ルイスや他の者がいくら問おうと何も語ることはなかった。

しかし、その発言で、ルイスもリディも極めて不名誉な噂を立てられる。曰わく、王族の血を継いでいないのではないか――つまり、母の不義の子ではないかというものだ。

これに関して、しかし二人とも全く興味を示さなかった。それぞれ自分の両親に対する疑いを持つことすら馬鹿らしい、と認識していたからだ。むしろ、噂をする者達に憤慨したのは兄弟達の方である。

サーレクリフはいつもの好青年キャラはどこへやら、ぶちキレて刺客を送ろうとするわ、シルファーレイは無言の笑みと共に王宮から除籍しようとするわ、エデルは毒を盛ろうとするわ。

なんとか事なきを得たが、もし成就していたらとんでもないことになっていた。

まあそんなこともあって、ルイスは今現在自主的な蟄居中にある。こういう時はほとぼりが覚めるまで引っ込んでおいた方がいいのだ。

淡々と仕事と鍛錬を繰り返す彼は、僅か二ヶ月と少し前までの生活を、早くも懐かしく思い始めていた。

日々緊張感と目新しさに心を躍らせていた時間。過ぎてみれば、これほどまでに自分とは遠い存在だったのだな、と思ってしまう。

狩人協会にも結局何の連絡も入れていない。このまま再び城を出ることがないのであれば、登録を抹消するのが筋なのだが――彼にはまだ、迷いがあった。

「旅を続けろ、か…」

メルセイエデスの言葉は、未だ心にしっかりと根をはっている。自分達の存在、かけられた言葉の意味を知るには、旅を続けろといったかの竜。彼女の忘れ形見は、二つともリディが連れていった。それに、あの魔族の女――エカテリーナが残した言葉が気になる。

『イグナディアで待っている』

確かにあの女はそう言った。その不審さに、諜報員をイグナディアに派遣したが、未だに報告は入ってきていない。式典に急な欠席を申し入れたこととといい、気になるのは山々だが、こちらとしても動かせる人手が少ないのが現状だ。

「どうしたもんかな」

前髪をかき混ぜて空を睨んだ時、自室の扉が軽い音を立てて叩かれた。

「入れ」

臣下の報告だろうと思って振り向くと、入ってきたのは全く違う人物だった。

「お邪魔するよ、ルイス」

「……兄上ッ!?」

柔和な表情を浮かべる青年に驚愕して、慌てたルイスは飛んで駆け寄ってソファに彼を座らせる。

気が散るからと侍女を遠ざけた自分に臍を噛みつつ、そこそこ慣れた手付きで紅茶を淹れ、兄に差し出した。

「ありがとう。…美味しいね」

「粗茶で申し訳ありません。しかし兄上、いかがなさったのですか？供も連れず」

暗に危ない、と非難をこめて言えば、シルファーレイは微笑した。

「そんなに心配せずとも大丈夫だよ。今は調子がいいんだ。…君に伝えておきたいことがあってね」

シルファーレイは笑みを消すと、カップを置いて感情を消した声で言った。

「あの犯人の男…引き入れたのは、十中八九シャードプス公爵だろう」

ルイスは息を呑んで絶句した。

あの事件のあと、疑問視されたのは、『何故貴族の身分でない者があの場に入り込めたのか』ということだ。貴族の中でも、更に大貴族が厳選された今回のパーティー。そして、配布されていた名簿に、あの男の存在は記されていなかった。ということは、出席者の内、誰かが手引きをしたとみて間違いはない。

しかし、確認しようにも、給仕も広間を護衛していた騎士も殺されてしまった為、事実上それは不可能に近かった。

が、シルファーレイは根気よく城内の者から話を聞き、犯人を探していたのだ。

そしてその結果、浮かび上がったのはひとりの公爵。

「シャードプス公、ですか…」

沈黙の後、ルイスは呻く。あの日、挨拶してきた公爵に対して「寒気がする」と感想を述べたリディの顔がよみがえった。

シャードプス公爵は、彼の元婚約者エルゼリーヌの実の父親であり、現在エーデルシアスにおいて財務大臣を務めている重鎮でもある。切れ者と名高いが、ルイスからしてみれば一々鬱陶しい権力者でしかなかった。というのも、シャードプス公爵は、所謂『第二王子派（ルイシアス）』の人間であるからだ。

第二王子派とは、文字通り、第一王子かつ現王太子であるシルファーレイではなく、ルイシアスこそが王に相応しいと推挙する一派である。

シルファーレイは、体が弱く、その為武術も疎い。しかしそれを補って余りある程の才を持っているため、人心も篤いが、余りに聡明過ぎる彼は、腹の底に何かを飼うのが常である宮廷の一部の者達にとっては、ある種危機感を持つ類いの次期王である。

また、シルファーレイの婚約者が、権力争いとはほぼ無縁の家の出身の出であり、外戚となることによって幅を利かせることはまず不可能という事情もある。その点、ルイスの隣はまだ空席だ。

そこで、彼らはシルファーレイの体の弱さを理由に、ルイシアスを祭り上げ、彼に王位を継がせようと裏で画策している。もちろん、その隣はシャードプス公の愛娘であるエルゼリーヌ。

つまり、聡明すぎる程有能で、もう自分たちの入る隙のない王の下でより、まだ地盤が安定せず、隙のあるそこそこ有能な王子につ

いた方が、自分達の利に走れる――私腹を肥やせる、と踏んだ訳だ。
不名誉な思考ではあるが、元々ルイスは、自ら軍職の人間であると認識しており、上に立つ能力はあっても、政治の才は兄に到底及ばないと自己評価を下している。けれど、優秀なことに変わりはなく、彼の立場は複雑だった。

だから、ルイスにとってこれらの動きは迷惑でしかなく、兄に対して負い目を感じるものでしかない。
ルイスとエルゼリーヌが婚約していたのも、半ばシャードプス公爵の画策であり、それもあってルイスはエルゼリーヌを疎んじていた。

「大方、私共々有力なエーデルシアス諸貴族を始末しようとでも企んだのだろうけど。流石の彼にも、あの展開は予想外だったのだろうね」

まさか、あのような他国の王族をも巻き込んだ大量虐殺未遂が起こるとは思っていなかっただろう。そしてその結果、ルイスの血が危ぶまれるようになる現状も。
ルイスはうなだれて、声を絞り出した。

「…申し訳ありません、兄上。どうやって詫びたらいいのか…」
「やめなさい。君が詫びる必要はどこにもない。…ただ、証拠がないからね。捕らえるのは無理だろう」

ぴしゃりと言って、シルファーレイは紅茶を口に運ぶ。

「この体が健康であれば、と何度思ったか…そうすれば君に辛い思いをさせずに済んだ」

苦笑するシルファーレイの瞳は、どこまでも弟を気遣う色に染まっている。ルイスは唇を噛んで俯くしかなかった。

「ルイスも、シャードプス公の動きには気をつけなさい。…あと、無闇に気を病まないことだよ。君が無茶に走ったら、私達はそれこそ心配で死ぬかもしれないからね」

冗談めかして言うと、シルファーレイは紅茶を飲み干して立ち上がり、扉へ向かう。追って見送るルイスに、彼は扉に手をかけたまま立ち止まって、呟くように言った。

「それでも…君が願うなら、君が願う通りに行動していい。私も父上も、いくら君が心配であっても、定めを覆すことは出来ないから…」

「…兄上…？」

ルイスの怪訝そうな声には応えず、シルファーレイは短く茶の礼を言って出て行った。

ルイスは首を傾げたまま、机の前に戻って、書類を手に取る。

（俺の願い…って…）

兄の言うことは、時々よくわからない。それは、兄が伝えたくないことの時もあれば、単にシルファーレイが知っていてルイスが知らないことを喋る時のこともある。今回は、なぜかどちらもではないか、という気がする。

（俺の願いは、兄上が王座に就いて、善政を敷いて下さること。あとは…）

思わず浮かんだ思考に、ルイスはそっと嘆息した。

（今出て行ったら、確実に母上がキレるしな…それに、あいつと一緒じゃなきゃ、楽しくない）

あのパーティーの後ようやく顔を合わせることが可能になった母親は、ルイスの顔を見るなり泣きだすと同時に凄まじい勢いで怒った。お陰で妹の顔を見ることもままならない内に、母親の体に負担をかけない内にほうほうの体で逃げ出したのである。勿論、後に日を改めて会いに行き、ちゃんと謝りを入れたが。

ただでさえ出奔していたことで、ルイスに対する家族の危機感は強い。今ここで出て行ったら、後が恐ろしい。それに何より――あの少女が共になければ、どうしたって味気ない。

向こうもばたばたしているだろうからと、敢えてルイスも今まで連絡をしようとはしなかったが、やはりどうしているかは気になる。そろそろ手紙でも書くか――と思った時だった。

不意に、耳元で魔術の気配が現出した、と思った瞬間。

『あー、あー。ルイス、聞こえる？聞こえてたら応答をー』

余りといえば余りなタイミングで、慣れ親しんだ懐かしい声が、響いた。

三秒程硬直し、はっと我に返って思わず叫ぶ。

「…リディッ！？」

『あ、良かった通じた。久しぶり』

「ああ、久しぶり――じゃなくて、どうやって！？」

『忘れたの？耳だよ耳』

言われて、はたと思い出した。――完全に忘れていた。ラグから貰った、通信具（ピアス）。

『もうちょっと早く連絡しようかとも思ったんだけどね、そっちも忙しいだろうと思ったし、私の監視も厳しくて。ようやっとラグの所に来れたから連絡したんだ』

記憶と変わらない、はきはきとした喋り方に自然と笑いながら、ルイスは訊ねる。

「ラグの所だとなんで大丈夫なんだ？」

『だってあの結界、許可なしじゃ私以外に解けるのいないし。…あー、いるけど基本的に無気力な奴だし。つまりこうして目に見えない相手と会話する方法もバレずにすむ場所ってことだよ。私がここに開けたって気付くのは術者のラグだけだしね。つまり私がここにいると解ってるのもラグしかいない。これほど都合がいい場所はない、以上』

…つまりは不法侵入だろう、とは賢明にもルイスは言わなかった。

「ラグは？」

『帰ってきてからこっち、ヴァイスの研究と転移魔術の研究ばっかしてるみたいだよ。今も何か書いてるし』

「本当に研究者なんだな…ヴァイスといえば、ネーヴェはどんな様子だ？」

『元気だよ。もう肉を食べる食べる、これでピュルマが草食だってことになったら真っ先に疑われるよ』

おかしそうに言うリディの台詞に、ルイスも声を上げて笑った。

「懐かしいな…また会いたいよ」

意図せず口から滑り出たのは、そんな素直な言葉だった。寧ろ驚いて自分の口を押さえると、少しの沈黙の後、リディが言った。

『そのことなんだけどさ。…ルイス、自分の身分を捨てる覚悟、ある？』

そんな台詞に、即ちルイスは瞠目した。

「…どういう…意味だ？」

『ルイス、王子だろ？…色々政治的な問題はあるにせよ、一回君は国を出奔した。常識的に言って、二回目は許されないだろ。――まあ、君も私も立場が特殊だから、追放ってことはないだろうけどさ』

リディは淡々と語った。

『それでも、最悪王族の身分剥奪ってことは有り得る。――その可能性を理解した上で、君に、もう一度旅をする気はある？』

ルイスはじっくりとその言葉を咀嚼してから、先程の兄との会話、今のエーデルシアスの状況、自分の立ち位置を考え込んだ。

数十秒の後、ルイスはふっと笑う。

「出来るなら――俺は『ルイス・キリグ』に戻りたいよ。今エーデルシアスは、俺の存在で揺らいでるからな…兄上の為にも、消えた方がいいとすら思う」

自嘲的な台詞に、しかしリディは大して頓着した風もなく続きを

喋った。あるいは、それが彼女の気遣いだったのかもしれないが。

『私は、あのメルセイエデスの言葉の先を知りたい。まだ、世界を見たい。ルイスもそうだと考えていい？』

「――ああ。俺は、出来るならお前と一緒にそれを見たい」

魔術で繋がれた空間の先で、明るい笑い声が上がる。

『同じだ。じゃあ、ルイス――』

続く言葉に、ルイスは眉を寄せた。

『今日の深夜、荷物を纏めて、君の部屋の窓際で待ってて。出来れば窓開けて』

リディはそう言って、一方的に通信を切った。どういう意味だと問い返す暇もなかった。

仕方なく、何もわからぬままルイスは周りの者に気づかれないよ

うに旅支度を整え、背後の窓を開け放って椅子に座っている。
しかし、一体どうしようと言うのだろうか。この間の一件を踏まえて、今まで申し訳程度だった城の結界は強固に張り直され、いかなる邪悪なものも魔術も簡単には通さないものになった。つまり、風魔術を使って侵入するのは不可能。かといって城内に単身侵入し、ルイスの部屋までたどり着くのも不可能。全くわからなかった。

「何考えてるんだ、あいつは…」

ひとりごちて、窓の外を振り向く。真夜中を少し回った今、明るく円い月が中天を少し過ぎた位置で夜の闇を照らしている。灯りを消したルイスの部屋は、しかし充分な程月の光が補足していた。
大体、満月の夜に逃亡なんて無茶だろう――と、ルイスが嘆息した時。ふっ、と　辺りが暗くなった。

「……ッ！？」

否、違う。部屋へと射し込む月の光が、遮られた。夜空に浮かぶ、それによって。

「やあ、ルイス。迎えに来たよ」

それの首もとに跨って、リディがにやりと笑う。首にはストール、実用性重視のショートパンツにロングブーツという懐かしい格好そのままに、しかし赤い髪は一年前になった時より更に短くなって。

「おま…それ、」

言葉にならないルイスの声の原因を、的確にリディは察した。というか、確信犯なのだから当然だが。

「ネーヴェだよ。綺麗だよね」

リディが跨るそれ。薄青く輝く鱗を持つそれは、今まで見たものより大分小さいものの、確かに――竜だった。

長い首に、薄紫の瞳。翼を含めた横幅は六メートル程で、縦幅は尾を含めて凡そ四メートル前後だろう。蝙蝠のような翼は、一定の高さを保つために力強く羽ばたいている。胴体の首の少し下の部分から翼の前にかけては、頑丈そうななめし革が巻かれていて、そこから手綱というよりかは、掴まるためのものと思しき革の紐が伸びていた。なめし革の一番翼側には膨らみがあり、どうやら馬の鞍のような役割を果たしているらしい。

そういえば、とルイスはかつてメルセイエデスに聞いたことを思い出す。ひと月もすれば、人を乗せて飛べるようになる――確かそんなことを言っていた。

呆れるよりもおかしくなって、ルイスは笑い声をあげた。

「まさか、こういう手でくるとは…予想だにしなかったぜ。ネーヴェ、久しぶりだな」

「だろ。それより早く乗って。結界のせいで目隠し張れてないから、バレてる」

はたとルイスも気づいた。この満月の夜に、そこまで大きくないとはいえ、三メートルは優に越すこの巨体。…バレない訳が、ない。

図ったように、ドンドンと部屋の扉が叩かれた。

「ルイシアス殿下！今、そちらに竜が！ここをお開けください！！」

「…やべ」

鍵をしておいて良かった、と密かにほっとしながら、ルイスは慌てて荷物をリディに投げ渡し、勢いをつけて窓の縁を蹴る。危なげなく自らの後ろに跨ったルイスに、リディは悪戯っぽい笑いを見せた。

「挨拶はいい？王子様」

「そういうのは自分がやってから言うんだな」

「ごもっとも。――ネーヴェ」

とん、と軽くリディが竜の首の背を叩くと、竜は一声鳴いて首を返し、方向を変えると一際大きく翼をはためかせ、ぐいっと高度を上げた。

リディからひょいと投げ渡された太い革紐を掴んで、鞍の滑り止めとともに重力に耐える。その直前、扉を破って部屋に突入したらしい騎士の、呆然とした顔に笑いが込み上げ、ルイスは肩を揺らした。

「あのあと家に戻ってから直ぐにネーヴェで飛んだんだ。その時は目隠し張れたから…今頃大騒ぎだろうな」

着いてから驚かせたかった、というリディに、

「充分驚いた」

とルイスは笑いながら言った。少しの間上昇を続けたネーヴェは、やがて体を水平に戻し、その場で停止する。

眼下に映る城と、広い街並みを、少しの間ルイスは無言で眺めた。

やがて、

「…よし。行こう、リディ」
「もういいの？」
見納めになるかもしれないよ、という言葉にルイスは頷く。
「ああ。捨てる訳じゃないからな。…この国の姿は、俺の中にちゃんとある」
だからいい、と言えば、前を向いたままのリディが微かに笑った気配がした。
「じゃ――行くよ！『自由時間』、再開だ！」
少女の快哉と、青年の歓声と、若い竜の嬉しそうな鳴き声と。それを一瞬だけグリアンの空に響かせて、彼らはエーデルシアスの夜空を飛翔していった。

――――――――――――――――――――

「…行きましたか」

遠く空を、目を細めて見上げ、シルファーレイは呟いた。先程から城内は竜が現れたと大騒ぎで、街も深夜とは思えぬほどの喧騒を放っている。

「しかし派手にやったな。これは噂を適当に流すのが大変だぞ」

シルファーレイの向かいで、彼の父親は赤いワインを揺らしながら肩を竦めた。

「あの少女――リディエーリア嬢も、よくやる」

まさか弟に、「出て行ってもいい」とそれとなく伝えたその日に迎えにくるとは。弟はわかっていなかったようだけれど。

「まさか、自分の息子が『原初の運命（さだめ）』だとはな。全く人生とは面白いものだ」

「前から片鱗はありましたが、いざ突きつけられると…」

この部屋にはシルファーレイとシージスしかいない。そしてこの話は、彼ら二人しか知らない事柄であった。

「『黒』の運命…。総じて色の薄い我が家にあって、あの漆黒の髪を見てそう思わなかった訳ではない。時に、あの少女を見た時はぎょっとした」

彼ら王族に伝わる伝承。それを知る者は王族の中でも、王位継承者のみに限られる。

並び立った黒と紅の色彩に、アルフィーノ王もアーヴァリアン王も、どこかで感じるものがあった、と帰途に着く直前に口にしてい

た。

「各地から上がる報告に、厭な予感はありましたが。現実味を肌で味わいましたよ…。二人の存在と魔族の出現でね」

シルファーレイは短く嘆息し、それまで口に運んでいなかったワインを一息に干す。

「我らも、覚悟を決めなければいけませんね」

――――――――――――――――――――

「再び発った、か」

二人の若者が竜の背に乗り、飛んでいくさらにその上空で。銀髪の老婆は小さく呟いた。

地上からは砂粒ほどにも視認できないだろうその高度で、強く吹き付ける高所風の中、しかし老婆は僅かも揺らがず立ち尽くす。艶やかな銀の髪ですら、風の影響を受けていないようだ。

「此度のことで、各地の王族も認識したじゃろう――定めの刻は近いと」

二人目の魔族の介入は、彼女にとっても想定外だったが、逆に刺激になったことだろう。

「ルイス、リディ――その時が来るまで、死ぬでないぞ」

大陸の遥か、遥か昔に熾り、同時に定められた終焉。その刻はもう、遠くない。

第八話　発覚と未来　（１０）（後書き）

第八話終了です。大きく話全体を分けるなら、二幕構成の一幕が終わったというところでしょうか…。
王族長子だけがこの話の根幹を知っていますが、主人公二人が知るのはかなり後になってからです。必然的に、明かされるのも後ということですが…

このあと、軽い番外編というか過去編を載せられたらと思います。多くて三話ですが。それが終わったら、休載という形をとらせていただきます。
詳しくは、番外編掲載後に活動報告でもう一度書きたいと思いますので、気にしてくださる方はそちらをご覧いただけると幸いです。

番外編　過去の記憶　（1）　リディの場合（前書き）

というわけでちょっとした過去編です。ほんとにちょっと。
兄視点。（サーレクリフの双子の弟）

番外編　過去の記憶　（1）　リディの場合

番外編　過去の記憶　（1）　リディの場合

僕には妹がいる。

正確に家族構成を言えば、父母と、三つ上の姉と同い年の兄、それから五つ下、十六歳の妹だけど。

妹の名はリディエーリア・リィ・オルディアン・エルクイーン。僕と同じくオルディアン筆頭公爵家の血を継ぎ、諸事情で王位継承権も持つ。

妹は、自慢だけどとっても可愛い。一族――いや、この国中探しても一番の鮮やかで薔薇のように美しい真紅の髪に、小さい白い顔は完璧な位置で顔のパーツが並んでいる。オルディアン王家特有の金色の瞳は猫のように愛らしく、くるくると変わる表情はいくらみても飽きない。健やかに伸びた、女性にしては少し高めの背と、――まあちょっと――いやかなり――凹凸は足りないけど、均整の取れた、細くしなやかな肢体。

兄の欲目を差し引いたって、充分を軽く越える魅力的な少女だ。

だがしかし。

「キース、手を抜くな！」

「抜いてません。姫様こそなんで魔術使わないんですか」

「君が使ってないからだ！」

――僕がいる部屋の真下には、鍛錬場がある。念の為いうと、鍛錬場とは、騎士や男の貴族が腕を磨く場のこと。

けれど今、金属音と共に威勢良く響いてくるのは、女性にしては少し低めではあるが、明らかに男のものではない凛とした高い声だ。

「大体姫様、なんで男装ですか。言葉遣いはもう諦めましたが、ヘーベル先生にお叱りを受けたばかりなのでしょう？そのままでは社交界に出られませんよ」

「私が社交界に出たいとでも？今更だね」

「社交界に出ても出なくても、普通女性はドレスを着ます」

言ってやれ、キース。

僕は内心でエールを送った。

妹の護衛騎士、キース・ハンベルグ。まだ若いながらも、この国の十指に入る優秀な騎士であり、また魔術士でもある。残念ながら治療魔力はないが、魔術と剣、両方を扱いかつ実力の高い者でのみ構成される『魔騎士団』に所属している。ちなみにこれはオルディアンの最高にして最終戦力で、国家機密だ。

しかしキースは大変な皮肉屋で、いつもリディを怒らせていることもまた、公爵家では有名な話だった。

今日も眼下で、剣を交えながらの言い争いが続いている。

「ドレスなんか着たら剣振れないだろ」

「普通女性は剣を持ちません」

「じゃあ母上はどうなるの」

「あの方が母上だからといってご自分も剣を振る理由にはなりませんよ、リディ様」
「女が剣を振らない理由もない。剣は男のものだって誰が決めた？」
嘲笑うような調子に、おや、と思う。リディのあのような口調は、珍しい。
「…男の方が力が強いし、頑丈だからですよ」
キースもそれを感じているらしい。皮肉は控えられ、歯切れも悪い。対するリディは、完全に挑戦的だった。
「だから？――私に力以外の身体能力では負ける癖によく言う――魔術に至っては言うまでもない」
嘲笑――それは紛れもなく、キースにではなく、自らに対する類のもので。
「……」
僕は唇を噛み、キースも動揺したのが見えた。
「――今日はこれで終わりにするよ」
歪んだ笑いを浮かべた妹は、そう口にしてキースの剣を弾き返し、自らの双剣を鞘に収めると、僕の視界から消えた。反射的にその背を追おうとしたキースを、同じリディの護衛騎士のひとり、クリスが止めた。代わりにアイコンタクトで、数少ない女性騎士であるマリアが追っていくのが見えた。
重苦しい雰囲気が立ち込める眼下に、その時になってようやく僕

は思い出す。

「…そうか…」

今日は――あの日だ。

九年前――オルディアンは、隣国ゼノと戦になった。戦といっても、半ばゼノの奇襲のようなもので、完全に不意をうたれた僕達（オルディアン）は、国力の差にも関わらず劣勢に立たされたのだ。

僕達はその時、たまたま休暇で国境近くの街ラスランにいた。しかしそこにあっという間に戦線は迫り、要塞ではない、大した軍備を持たぬ街は恐慌に陥った。

貴族でありながら強力な騎士として名を馳せていた父上も母上も、僕達には逃げるように指示し、戦うことを選択した。

その時リディはまだ七歳で、僕とクリフは十五、姉上は一八だった。でも僕とクリフはそこにいた武官よりも武術の才があったから、母上達に怒られるのは解っていたけど、残ることを決めた。

そして、荒事が得手ではない姉上と幼いリディに、二人で逃げるよう言った時、リディがぽつんと呟いたのだ。

「父上達も、兄上達も、死んじゃうの？」

――と。

咄嗟に誰も何も言えなかった。僕達は王族の血を継ぐ者として、普通の者より遥かに強かったけれど、残念なことに、誰も魔術は得意でなかった。父上と母上は単に相性、僕とクリフは鍛錬不足で。我が家で魔術が得意なのは、アルフィーノに嫁いだ叔母上と、何より圧倒的に――リディだったのだ。

リディは幼い頃から、その才を発露していた。圧倒的な戦闘センス。その一言に尽きるだろう。同じく天才の王太子を除く他の王族の追随を許さぬ、膨大な魔力と発現力。僅か四歳にして宮廷魔術士が匙を投げた、所謂異端児だった。

この時のような、戦力差が甚大な戦闘において物を言うのは魔術である。けれど生憎とラスランには大した魔術師はおらず、父上達は白兵戦を挑む気でいた。

父上も母上も、強い。一人でも、十人や二十人なら平気で倒す。それでも戦場は――違う。弓もあり、相手の魔術もあり、戦力差は十や二十ではない。

必ず死ぬとは言わないが、死なないともまた、とても言えなかった。

僕達の沈黙に、リディは幼い顔をくしゃりと歪めると、小さく、解った、と言った。

僕達が逃げる訳にはいかないのだ、ということを理解したのだと

思って、僕は、嬉しいような悲しいようなで複雑だった。王族としての誇り、責任の重さ――。それを理解する幼い妹が聡いことに安堵すればいいのか、そんな思いをさせてしまうことを嘆けばいいのか、わからなくて。

けれど、違った。妹の「解った」は全く意味が違ったのだ。

「敵が、いなくなれば…兄上達は、死なない、よね」

――意味が解らなかった。その場にいた誰もが、小さな少女の呟きの意図が、読めなかったのだ。

皆が混乱している内に、ふいとリディは顔を外壁に向けると、彼女の風精霊の名を喚んで、あっという間にその場から消える。いち早く我に返ったのは姉上で、半分パニックになりながらそれを追っていった。僕もはっとした。

「まさか――ヤバい、クリフ、あの子――」

――嫌な予感は、的中した。

その日リディは、才能を爆発させた。寒気がするような量の魔力を注ぎ込み、火魔術を発動させ――ゼノの軍を、焼き払った。千に及ぶ兵が文字通り消し炭となり、その倍近くの兵が死傷した。

ゼノの軍は散り散りに敗走し、その間にオルディアンは体勢を立て直すと、リディに恐れをなしたゼノ兵を早々に鎮圧した。

リディはというと、強大な火を放ったあと丸三日寝込んだ。ろくな制御もせず、力だけで魔力を解放したせいだという。

しかし、回復後――リディの顔に、最早幼い純真さはなかった。

人の命をその手で奪い、消し去った。

その事実は、少女から容易く幼い心を拭い去ってしまったのだ。

しかもリディは僕達に黙って停戦調停に同行し、ゼノに釘すら刺してきたらしい。次はない、と。

到底、七歳の子供の行動ではなかった。

そしてこの出来事により、妹にはあの忌まわしい名がついてしまったのだ。

何もかも焼き尽くす、煉獄の姫――『烈火の鬼姫』と。

母上達は、リディを一言も責めなかった。誰も予期しない中勝手に行動し、独りでゼノ兵を壊滅させたことも、停戦調停についていったことも。ただ、娘を抱き締め、黙って頭を撫でた。

僕達は何も言えなかった。まだまだ幼かったはずの妹が直面してしまった『現実』に、向き合うことすらできなくて。――悔しかった。でも、――何も出来なかった。

リディは戦後しばらく殆ど口を利かず、部屋に閉じこもってばかりいたが、やがて段々と自分を取り戻し、笑顔を顔に浮かべていった。

けれど――決定的に変わってしまったことが一つある。

それまでリディは、武術も好きではあったが、少女らしくお洒落にも興味があった。綺麗な宝飾や可愛らしいドレスを見れば喜び、一通り礼儀作法をマスターする程、令嬢らしさも持ち合わせていた。

なのに、その一件以来、リディはそれらに見向きもしなくなってしまった。

ひたすら魔術と武術に打ち込み、ドレスや宝飾にはまるで興味を無くした。礼儀作法だけは僕やクリフのしつこい言いつけに辟易したらしく、学び続けたけれど、決して着飾ったり、社交界に出たりしようとはしなかった。

それは、オルディアンの重臣達が皆彼女が『烈火の鬼姫』ということを知っている為だけではなく――リディ自身が、自らを律しているようですらあった。

…もっとも、そのうち服装に関しては本当に嫌いになってしまったらしいが。

僕達もそれをなんとかしようと、リディを色々連れ回したのだけれど。功を奏したのは、どこかズレた姉上が連れて行った賭博場（カジノ）だけだった。…父上が泣いた。

そして未だにリディは、ゼノと戦があった時期になると、様子がおかしくなる。彼女の中ではまだ、あの時から動けていないのかもしれない。

それはとても歯痒いけれど――僕にはもう、どうしようもなかった。

そんなことのあった、二ヶ月後。かくて嵐は、訪れる。

「リディエーリア。話がある」

妹の十七歳の誕生日。和やかな家族団欒の最中、唐突にそう父上がリディを呼ばわった。

「なんですか？父上」

母上たっての希望で、今日だけはとドレスを着ているリディは、笑顔で父上を振り返る。それに対し、父上は数秒の逡巡の後、諦めたように息を吐くと、リディに向かって何やら数枚の紙を差し出した。

「お前も十七になった。…そろそろ相手を見繕え、とのお達しだ」

空気が音を立てて凍りついた。僕達に背を向けているリディの纏う雰囲気が硬質化したのが、目に見えてわかる。

…っていうか父上、何それ聞いてないよ!?相手って…つまり婚約者とか!?は!?いきなり何の話してるのさ!!

「…どういうことですか、父上」

先程までの笑顔を消した姉上が、低い声で父上を問い質した。まったくもって同感だ。

「…城の大臣達からだ。お前と同年代の諸王族、大貴族の資料だ。目は通しておけ」

その言い方で、婉曲に父上はリディに「無視してかまわん」と言っているのだと僕達は悟った。そりゃそうだろう。姉上は…まあ、あの人じゃしょうがないとはいえ、大切な二人娘。やりたくないに違いない。

しばらく押し黙っていたリディは、不意ににっこりと笑った。見えていた姉上曰くだけど。

「わかりました。目は通しておきます」

後から思い返すと、妹が一瞬で表情をにこやかに切り替え、不気味な程素直に父上の言葉に頷いた時点で、疑問を感じるべきなのだったと思う。だけど僕も情けないことに動揺していたらしい、その時勘づけなかったのは一生の後悔だ。

金色の眼をにっこり細めたリディは、その後いつも通り談笑し、いつも通り自室に下がり、いつも通り眠った——筈だった。

が。

翌朝。

「ユーリ様！リ、リディエーリア様がいらっしゃいません！！」

部屋で仕事をしていた僕の元に飛び込んできたメイドの真っ青な顔に、驚愕した一方で、どこか納得してしまった自分がいたのは確かだ。

「昨日は早くお休みになられたのですが――今日は休日だから寝たいだけ寝る、起こすなと言付かっておりまして――でもそろそろお起こししようと思ってお部屋を覗きました所――」

当の主はどこにもいない、もぬけの殻の様相を呈していた、とのことらしい。とりあえず兵士に城内捜索と、城下町への手配を命じて、僕は駆けつけたクリフと一緒にリディの部屋に入った。

綺麗に片づけられた部屋は、いつ見ても年頃の女らしくなくシンプルで、本人の気性を伺わせる。

部屋をぐるりと見回して、ふと目に留まった卓に近付いて、そこに積み重なった書類と手紙と、赤い糸の束を見出した。

書類は昨日の男の写真群で――ぶっちゃけめくった形跡すらない。手紙を開くと、こうあった。

『昨日のお話を受け、よくわかりました。やはり私は貴族に向いていないようです。私はここを出て行きます。結婚なんて御免被ります。今までお世話になりました。さようなら。リディエーリア』

「…の、馬鹿」

クリフが低く呻いて額を抑える。リディは気付かなかったのだ、昨日の父上の言い回しに。鈍い妹相手に、あんな婉曲表現をすべきではなかったのだ。

そして続きがあるのに気付いて読み進めた。

『追伸　恥とお思いになるのなら死んだ事にでもなさって下さい。髪を置いていきますので』

ぎょっとして僕は横にあった束を見た。気付いてしまえばどう見ても、女の艶のある髪だ。リディエーリアの髪。令嬢らしさの欠片

もなくなり、礼儀作法だけは完璧の代わり言動、趣味、やることなすこと男になってしまった妹が唯一残していた女らしさであった、長い赤い綺麗な髪。――それが、綺麗にそっくり卓の上にあるのだ。彼女の髪の長さはこの分では、肩にかかるか否かくらい――

「アホかお前は――――――!!!」

僕は大音声で叫んで、手紙を力一杯壁に投げつけたのだった。

「…逃げられた、かな?」

屋敷から大分離れた、森に程近い丘で、リディは馬の足を返して首を傾げた。肩より少し上までの長さになった赤い髪を無造作に風に揺らし、いつも好んで着ていた軽装に身を包んでいる今、どこからどう見ても王族に近い大貴族の令嬢には見えない。

目を細めて遠くを見る。今朝方まだ夜も開けない内に後にした故郷は、彼女の目を持ってしても、もう霞んでしまって見えない。

「……」

微かに息をついて、リディはくしゃりと前髪を丸めた。

いつまでこの逃亡劇が続くかは解らない。いつ追っ手に捕まるかはわからない。

でも、自分から戻る気は更々なかった。故郷は好きだ。家族も、場所も、そこに住まう人々も。でも自分が自分でいられなくなる位なら。

そんな日が来る事を、薄々リディはわかっていた。来た事を知った瞬間、リディの体は逃れる事を選んだのだ。こっそり常に準備しておいた旅支度を完成させて、最低限の処理をして。

「…親不孝と、お思いになるでしょうね」

父に悪気はないのだ。リディに女としての幸せを与えたいと、真剣に案じてくれただけ。ただそれを、リディが受け入れられなかっただけ。

――あの時、一方的にたくさんの命を奪ってしまった自分が、今更武人として以外、生きる資格などありはしない。彼女はもう、戦いに身をおくことでしか、生きられないのだ。

だからその意志を示すように髪を置いてきた。長く背に重みをもたらしていたそれが無くなった今、酷く頭が軽く感じる。首筋に寒さを感じて、頭巾の代わりにしようと思っていた布を首に巻く。それはマフラーのように風に靡いて、その感触が気に入ったリディは、

次の街できちんとしたものを買おうと決める。

「…さよなら」

目を閉じて、思いを振り切るように呟くと、リディは馬の手綱を引いて身を翻した。そのまま深い森に足を踏み入れていく。馬の上でぴんと伸びたその後ろ姿は、もう二度と振り返ることはなかった。

その姿を、少し離れた所から、一人見ていた者があった。小柄な姿は長いマントとフードな覆われ、男か女かすらわからない。その口元が弧を描き、嗄れた声が紡がれる。

「紅の運命は動き出した。黒もまた、直に――。さて、楽しみなものじゃ」

心底楽しそうに言うと、ふふ、と笑う。と、一陣の風が吹いて――過ぎ去った頃には、そこには誰の姿もなくなっていた。

番外編　過去の記憶　（1）　リディの場合（後書き）

前半の視点はリディの兄で、ユーリヴィルスといいます。王太子の代わりにオルディアン各地にトバされてるかわいそうな人です。

番外編　過去の記憶　（2）　ルイスの場合

番外編　過去の記憶　（2）　ルイスの場合

「ルイス様！こちらの案件は」
「シュルドーに確認を取れ。裁可が降りてなかったら保留に回しておけ」
「殿下、こちらは」
「それは陛下へ持って行け」

…ああ、煩い。ひっきりなしにやってきては自分に案件を放り込んでくる臣下に苛立ちを覚えながら、ルイスは部屋を後にする。

「殿下、お気をつけて」
「ああ。俺の留守中、侍女以外誰も入れるなよ」
「はっ！」

敬礼してくる騎士に軽く手を挙げて、ルイスは城の外へと向かうために廊下を迷いなく進んでいった。

これからオルディアンに程近い、エランという街へ行くのである。なんでも魔物が出たとかで、諸々の事情からルイスに白羽の矢が立

ったのだ。ルイスは内心で毒づいた。

――俺は政治の道具じゃないんだよ。

今回の出張は、わざわざルイスが赴かなくともよい規模のものであったはずだった。だが、かの『氷の軍神』が自ら助けにいくとなれば、自ずと王家への民の思慕も集まりましょう――という忌々しい大臣の言葉に反論できる要素が見つからず、仕方なしにルイスは足を運ぶことを決めたのだった。

あの男――シャードプス公の狙いは見て取れる。つまり正しくは、『王家への』ではなく『ルイスへの』思慕だ。『第二王子派』の筆頭であるあの男は、ルイスの評判を上げることで、シルファーレイを追い落とそうとしている。兄大事のルイスにとって、余計なお世話もいいところだ。

（…だがそれもこれも…俺のせいか）

自分で言うのもなんだが、ルイスはそこそこ優秀だ。兄が病弱な事も手伝い、仕事量は普通の王子よりかなり多いと言ってもいい。

加えて、彼の二つ名。

五年前のあの件以来、ルイスが『烈火の鬼姫』と並ぶ者として位置付けられてしまって以来、エーデルシアスの水面下は、一層混迷を期すことになっていた。

「ルイス様」

甲高く甘ったるい声が足音と共に後ろから聴こえて、ルイスは顔をしかめた。不機嫌な顔を隠しもせず振り向くと、予測通りの姿がある。

「エルゼリーヌ嬢。何故ここにいる？貴女との婚約は解消した筈だが」

通常、ただの貴族の娘では、王宮にいることは出来ない。茶会などがあれば別だが、母はつい二、三日前風邪をひいてそれどころではない。

ルイスの底冷えのする声音にも満面の笑みを消さず、走り寄ってきた少女は口を開いた。

「そんなことを仰らないで。確かに私達の婚約は、お父様達の酒ついでで効力を発揮しないものでしたけれど、私達次第で、また復縁なんて簡単ですわ」

――復縁も何も俺とお前の間に縁（よすが）なんて塵も無えよ！

心中で吐き捨て、絡み付いてこようとした腕を振り払い、踵を返して歩き出す。

「悪いが私は今忙しい。戯れ言に付き合っている暇はない。他を当たれ」

追い縋る気配に釘を刺し、足早にその場を後にする。歩き辛いヒールのせいもあるのだろう、それ以上は追ってこなかった。

「王子さん」

半日後、エランの街についたルイスは、砦に行くべく街の通りを歩いている時、不意に耳に、そんな声が届いて、足を留めた。喧騒の中の、小さな、本当に幽かな声だったのに、それは不思議とルイスの聴覚を捉えたのだ。

自然と視線が吸い寄せられる。暗い細い小道の先に、フードを被った人間が、卓の上に水晶玉を載せて座っていた。

――占い師？こんなときに、なんてベタな。

ふっと皮肉げに唇を持ち上げて、ルイスは小道に入る。

「なんだ？婆さん」

占い師の前に立って、そう訊く。占い師は面白そうに言った。

「儂を婆と見抜くとは大したもんじゃ」
「お互い様だろ」

自分を王子と見抜いたのだ。そこそこの力はあるのだろう。

「ふふ。王子さん。あんたはいずれ、運命に出逢うよ」
「…はァ？」

おいおいベタもどこまで行くんだ。

呆れるルイスを余所に、占い師は楽しげに続ける。

「お前さん、今人生楽しくないじゃろ」
「……」
「顔を見りゃわかる。お前さんは有能な王族じゃが…飽いておるな」
「…はっ」

ルイスは自嘲げに髪を掻き上げた。蒼いサファイアの目が虚ろに歪む。

「当たり前だ。来る日も来る日も仕事。言い寄ってくるプライドばっか高くて中身の無い女共。何より…俺をなりたくもない王太子に仕立て上げようとする連中」

吐き捨てられた言葉に、占い師は僅か沈黙し、やがて言った。

「…そうかい。逃れてみたい、と思った事はないかい？」
「…は？」

ルイスは怪訝そうに占い師を見つめる。目深に被ったフードのせ

いで、弧を描いた口元しか見えない。

「現在から逃れて。好きに生きてみたいと思った事はないのかい？」

「……」

ルイスは唇を噛んだ。そんなのはいつもの事だ。王族なんかからはぐれて、奔放に世界を見たいとなんと思ったことか。

その道を選ばないのは、家族が心配だから。何より、結局身分を棄てられない己の甘えがあるからだ。

「…出来たら、いいのにな」

呟いて、ルイスは占い師に背を向けた。彼女は何も言わずにそれを見送る。

ルイスは、歩き出してから、そういえば結局何の用だったのだろうと思ったが、振り返っても、小道の先には暗闇が澱むだけで、誰の姿もなかったのである。

「じゃあ、その魔物の群はオルディアンの国境の森に逃げたんだな？」

着いた先の城で兵士から状況を聴き、ルイスは顔をしかめていた。なんでも近隣で出没しているのは有象無象の魔物の群で、死者も二十人程出ているらしい。

（俺が出向いたのは無駄ではなかったな。このままでは民に余計な死傷者が出る）

早急に解決すべき、と断じて、ルイスは立ち上がった。

「殿下、どちらへ」
「片付けてくる。オルディアンへの連絡をしておけ」
「はっ、では部隊を…」
「要らない。私一人で充分だ」

にべもなく切り捨てたルイスに絶句し、兵士がですが！と声を上げたのを、黙って聞いていた城主が止めた。

「殿下。お任せすること相済みませぬ」
「構わない。気晴らしになる」

外套を翻して出て行った王子と城主とを見比べて、兵士が叫んだ。

「閣下！？どういう…」
「心配するな。殿下はお強い。我らが行っても足手纏いになるだけよ」
「しかし、お一人では…！」
「あの方は戦神に愛された御子だ。魔術と剣技にかけて、この国の

民でそうそう叶う者はおるまいよ。知らん訳ではあるまい？エルニルの件と、あの方の二つ名を」

はっと兵士は息を呑んだ。――エルニルとは、数年前突如に魔物の大群に襲われた中規模の街の名だ。配備されていた兵力ではまるで歯が立たない数の魔物によって僅か一日で街は壊滅寸前まで行きかけたが、駆け付けた一人の王族によって、その大群は殲滅された。

――その王族こそ、ルイシアス・アレシウス・ロウ・キリグライト・エーデルシアス。この国の第二王子にして、後に氷の軍神と称される、青年だった。

「王族の方々は、どこの国でも総じて戦闘能力が高い。常に最高峰の二属性以上の魔力、更には治療魔力を有し、身体能力は常人はまるで及ばぬ。――だが、それをさし引いてもあの方は、エルニルの時、御年僅か十四であられた」

兵士は言葉を無くした。たった十四で、街一つを壊滅寸前まで追い込んだ魔物の大群を、たった一人で殲滅した――

「あの方は飽いておられるのだろうな、今に」

戦慄する兵士をよそに、ぽつりと城主は呟いた。疲労の滲む、冷めた海色の目。生まれだけなら兎も角、なまじ優秀故に、生きる道を翻弄されている彼。

まるで、籠の中の金糸雀の様だ。その檻から解き放たれれば、もっと美しいのだろう――と、ふと思った。

―――――――――――――――――――――

鬱蒼とした森を、ルイスは無造作に進んで行った。魔の気配が探らずとも、手に取る様に感じられる。

（多いな）

エルニルの時ほどではないが、一人で相手にするには荷が勝ちすぎる感がある。――が、それは普通の人間の話だ。

ああ面倒だな、と舌打ちして、ルイスは魔力を練り始めた。結界くらいは張っておいた方がいいだろう。

気配が濃厚になる。唇を舐めて、小さく呟いた。

「アイシィ、ウェーディ、アースエイシア」

ルイスの声に応えて、彼にしか視えない三体の精霊が顕現する。いずれも最上位、気配は一目瞭然だろう。魔の気配の中に殺気が迸った。

押し寄せる殺気にルイスはに、と口の端をつり上げ、鋭い音を鳴らして剣を鞘から抜き払う。息を吸い込んで跳躍すると、開けた空き地で、数十の魔物が彼を一様に睨んでいた。圧倒的不利に見える状況下にあって、しかしルイスは笑みを消さない。それどころかより一層、獰猛とすら言える笑みを形作って魔物を睥睨し返す。

「さぁ…暴れるか！」

ザクッ、と剣を地面に刺して、体重を載せる。荒い息を気休めに宥めて、辺りにもう気配がないか視線を走らせる。目に映るのは、斬られ、刻まれ、凍り、潰され、縦横無尽に蹂躙された魔物達の死体。それを作り出したルイスの体にも、無数の小さな傷痕が走っている。

「…ちっと多かったな」

滴る汗と血の混じった液体を、篭手ごと拭った。流石にこの数を一人は厳しいか…と内省したその瞬間、肌がぞわりと泡立った。本能的にその場から飛び退くと、次の瞬間にそこは鋭い爪らしきもので木っ端微塵に抉られていた。

「まだいやがったのかっ…」

ヒヤリとしたものを首筋に感じながらルイスは氷の刃を放つ。真っ直ぐに狙い撃たれたそれは、しかしやはり爪らしきもので弾かれる。距離をとり、砂埃が収まってから漸く、相手の姿の前方が見えた。

一見、蟷螂（カマキリ）。但し体長はルイスの三倍はあろうかという具合で、その体色は墨の様な黒、目は血の如く赤い。両前足の鎌すら、ルイスより大きい。その魔力の禍々しさに、ルイスは舌打ちした。

「中位種かよっ…！」

遭遇するのは初めてではない。倒した事もある。だがそれは他に何人かの魔術師がいて、体力満タンの上でだ。

これは少々厳しいかもしれない。這い上がる寒気を振り払い、ルイスは足を踏み換え跳躍した。

ギギギギッ！

耳を覆いたくなる様な鳴き声に顔をしかめながらも、鎌をかいくぐり剣を走らす。確かな剣筋はしかし、堅い表皮に弾かれた。

「なっ…」

見た目は昆虫なのに、鉄もかくやという硬さに驚愕した隙に、もう一方の鎌が迫っていた。

「ぐぁっ！？」

鋭い痛みが脇腹に走り、血が噴き出す。顔を歪めて、ルイスは巨大蟷螂の肩辺りを思い切り蹴ると、近くの木に着地した。

「くそ…」

血がどくどくと流れる感触と、揺らぎ明滅する視界に苛立ちながら、左手で傷口を抑えて治療魔力を込める。今出来るのは痛み止めだけだが、少なくとも視界は安定した。

血が流れ、力が抜けそうな感覚から無理やり意識を遮断し、ルイスは目の前の敵に集中する。生半可な攻撃は効かない。

「固ぇな…とすれば」

狙うのは関節。

瞬時に決めると、ルイスは叫んだ。

「アースエイシア…！」

叫びに土精霊が応え、地面が割れて隆起する。ぐら、と蟷螂の体が傾いだ瞬間、ルイスは木を蹴った。

不自由な体勢の蟷螂から繰り出された鎌を弾き、その奥の関節に剣先を潜り込ませ、一気に叩ききる。青い体液と悲鳴を撒き散らすのを介さず、そのまま大上段から剣を振り下ろした。

国の最高の刀匠に鍛えられた大剣は、裂帛の気合いと重力に助けられて蟷螂の頭を深々と貫き、一瞬の沈黙後、蟷螂は凄まじい悲鳴を上げ、壊れた絡繰の様に身を震わせ、どうと倒れた。

地面に叩きつけられる寸前で蟷螂から飛び離れたルイスも、がくりと膝を付く。痛みを止めるだけで止血もしていなかった為、予想以上に血が失われていたらしい。急速に世界が色を失くしていく。

世界が暗く染まる寸前、長いマントの裾が見えた様な気がした。

鈍く脈動する痛みを感じながら、ルイスの意識は暗いところに落ち込んでいった。

目の前に広がる、セピア色の世界。

これは記憶だ、とぼんやりとルイスは頭の隅で思った。

『エルニルにっ…大量の魔物が――！』
『このままではエルニルは全滅ですっ…！』

ああ、とルイスは顔を歪めた。しかも、あの記憶なのか。

心で何を思っても、その場に立っているルイスの顔は、ただ青さを浮かべているだけだろう。これは過去の夢――未来が干渉することはない、決して。

『く…、僕の体が弱いばかりに…！』

苦しそうに胸を抑える兄の姿。国主である為に玉座を離れられない父。流産直後で危篤の母。まだ幼い弟。

軍を派遣しても、到底間に合う距離ではない。軍が着く前に街は滅びてしまうだろう。歯噛みする面々を見て、十四歳だったルイスは決めた。

『俺が行きます。風魔術を使える魔術士を集めて下さい』

――それから半日後には、ルイスは全滅に瀕していた街を、魔物から救っていた。

エルニルを襲った魔物は凡そ百に及んだが、地形を利用した風魔術の効果的な展開、最終的にはルイスの魔術による圧搾作戦で片が付いた。

しかし、その手際の良さと、居並ぶ王族をも圧倒する実力に、ルイスは『氷の軍神』という二つ名を戴かされる羽目になる。

それは『烈火の鬼姫』とは違い、憧憬と感謝、畏敬を多分に含んだものではあったが――その名の為に、王宮はより一層の分裂の道を辿ることになったのである。

温かい。ふわりと鼻を擽る匂いにつられ、薄らとルイスは目を開けた。

「起きたかい」

同時にかけられた声の方向を見やり――飛び起きる。警戒心を目いっぱい宿らせた目で、ルイスはその人影を睨む。

「あんた…」

「命の恩人に、その反応はないんじゃないかい」

ルイスの視線の先では、つい一日程前に目にした、怪しい占い師が肩を竦めていた。

「とりあえず腹ごなしが先じゃな」

と、まずシチューを突き付けられ、多少警戒したもののその美味しさに無言でかきこみ、お代わりもし、落ち着いてから、改めてルイスは周りを見回した。簡素な小屋のようだ。

「その、命の恩人って…」

「脇腹の傷と、その他色々。塞いでやった」

言われて確かに瞠目する。かなりの深手を負っていたはずの左脇腹は、綺麗なものだった。

「…感謝する」

「構わんさ。お前さん、うなされていたね」

占い師はルイスから空の皿を受け取りながらそう言った。ルイスはぎょっとし、次いで浅く息を吐く。

「ああ。――嫌な夢を、見ていた」

「過去かい」

「……」

無言は何よりの返答だった。占い師はやれやれと首を振ると、手元に運んできたお茶を啜る。

「紅――いや、『烈火の鬼姫』と違ってお前さんの名はさして忌避はせんでもいいと思うがな」

「確かにな。だが、俺の存在は兄上を脅かしている」

ルイスは兄を尊敬している。将来兄が国を治めることを、誰より待ち望んでいるのはルイスかもしれない。なのに、なのにだ。

「あいつらは、俺を玉座につけようとしている。自分達の為にだ。俺は、そんなことの為に力を使った訳じゃないっ…！」

掌を握り締めて激昂する。押さえつけていたものを、一気に吐き出した気分だった。

占い師は黙ってそんなルイスを見やり、やがてそうかい、と呟いた。

「あの子も、お前も。その力の為に、苦しませてしまったね…」

誰とは無しに囁かれた言葉。それはあまりに小さすぎて、ルイス

が聞き取ることは叶わなかった。

ルイスはしばらく目をぎゅっと瞑っていたが、首を振ってベッドから足を下ろした。

「世話になったな、婆さん。そろそろ戻らねえと、皆心配する…」

「まあ、待て」

占い師はルイスの肩を押さえて留めた。不審そうに見上げてくる蒼い瞳に向かって、占い師は拳を突き出した。

「お前さんの想いはきいた。そして今お前さんには二つの選択肢がある」

占い師はさらりと言った。ますます怪訝そうにするルイスに、指を一つ立てる。

「一つ。このまま城に戻り、今まで通り王子として生きる」

もう一つ、指を立てる。

「もう一つは…このままオルディアンへ抜け、違う道を生きてみる」

「は…」

目を見開いたルイスに、占い師は笑った。

「例えば狩人とかじゃな。他は…」

「…ま、待てよ！それはど」

「お前さん、戦うの、好きじゃろう？」

ういう意味だ、という台詞を遮った占い師の言葉に、ルイスは言葉を失う。

――確かに、どこか戦いに高揚する自分がいたのは事実。生と死の交差する場の緊張感。それは、日常より遥かに魅力があった。

そして何より、もし自分がいなくなれば。家族は悲しむだろう。部下達は狼狽えるだろう。だけど――自分が義務を投げ出した王子の汚名を着れば、臣下の心は兄上に傾く。自分を押し上げようとしている貴族達の中でも、見放す者も出てくるだろう。そうすれば。

（これ以上兄上を苦しませなくて済むかもしれない…！）

そんなルイスを見ていた占い師は、微かに笑った。黒の運命が、動き出す。

「…逃がしてやろう。王には一報を入れる。お前さんはこの森を抜けて、オルディアンの街、アリエルへおゆき。さっきの魔物共の核は集めておいてやったから、一も二もなく狩人登録出来るじゃろう」

そこから先を、ルイスはよく覚えていない。気付けば簡素な旅装に身を包み、懐に核を幾個も入れ、馬を駆っていた。

国を、義務を放棄してしまったことへの罪悪感はある。だが、その時の彼にとって、それらは全て二の次であり、未来への茫洋たる想いが占めていた。

ルイスを送り出した老婆は、ふふ、と笑う。さぁ、紅も、黒も動き出した。彼らはまもなく出逢う。そして世界の歯車も回りだす。

「そして我々の行く末も、な」

老婆は笑みを深めると、肩を揺らして小屋の中に戻っていった。

番外編　過去の記憶　（2）　ルイスの場合（後書き）

ルイスがひねくれてます。今のルイスは、リディと出会って少し角が削れました。

番外編　過去の記憶　（3）　二人の出逢い　（前書き）

これにて過去編は終了です。
読んでくださった方はあとがき、並びに活動報告をご覧頂けると幸いです。

番外編　過去の記憶　（3）　二人の出逢い

番外編　過去の記憶　（3）　二人の出逢い

オルディアンの西部一帯に広がる豊かな広葉樹林の森、通称リヒトールの森を抜けて更に西、商業の国アルフィーノと国境近い所に、オルディアン第三の都市アリエルは位置している。

首都リオーラが白亜と清水で形作られる整然とした荘厳な街であるのに対し、アリエルは、あちこちに張り巡らされた水路という点では同じものの、入り組んだ小道とてんでばらばらな色合いの家が並ぶ、雑多な、しかしどこか懐かしい街並みを有している。

「アリエル、か…。話に聞くのみだったけど、良い街だな」

そこを歩く、フード代わりに布を肩より上に巻きつけたルイスは、眩しげに目を細めた。

老婆に言われた通りリヒトールを抜け、馬を走らせて二日。辿り着いたこの街で彼を知る者はなく、新鮮な気分だ。

「っと、狩人協会って何処だ…？」

馬を引いて歩きながら周囲を眺めやったルイスの目に、ある大きめの長屋が留まる。一部に喫茶店を有しているらしいそこは、屋根の下に確かに『狩人協会』と書いてあった。

「あったあった」

昼時で人気がないそこは、日の光に頼っている為か、少々薄暗い。馬を繋ぎ、中に入ると、やはりそこには殆ど人がいなかった。奥のカウンターに一人と、内部でつながっている喫茶店のテーブルに一人しかいない。

奥のカウンターに坐す灰色の髪の壮年の男が顔を上げた。

「何だァ、あんた」

男は胡散臭げにルイスを見やってくる。ルイスは構わず近づき、カウンターの正面に立つと、顔を覆う布を取った。

布の下から現れた面立ちに、男は息を呑んだ。北方に住む民特有の白く肌理細かい肌に蒼く深い双眸、すっと通った鼻筋は彫りが深く、引き締まった唇と涼やかな目元からは聡明さが滲み出、それらを収めた細面を、女顔負けの絹のように滑らかな黒い髪が緩く結われて彩っている。

文句の付けようがない美青年だった。

だが同時に男は、青年の研ぎ澄まされた刃の様な気配も感じ取ったいた。腰に佩かれた長剣といい、佇まいといい、並みの者ではない。

「…狩人登録をしたいんだけど。教えてくれ」

唇から発された声音も、口調はともかく玲瓏とした美声で、男は感心するより呆れた。ここまで完璧って人間どうなのだろうか。さ

っきの奴といいこいつといい、綺麗すぎるのもどうかと思う。

「…ああ、してやるよ。だがあんたァ、パーティー組む宛はあるかい？今この街には、他に志望者が…いないんだが」

いるにはいるが、という言葉を寸での所で男は呑み込んだ。あれは挙げてもしょうがない。が、次なる青年の言葉に男は呆気に取られた。

「必要ない。一人で充分だ」

その台詞に、喫茶店のテーブルでスパゲティを口に運んでいた人間が、顔を上げた。金色の眼に興味の光が灯る。

男はそれをちらと見、口元を引き吊らせて言った。

「一人って…あんたァ、わかってんのかい？見たとこ確かに腕ァ立つようだが、一人だけじゃな。…どーしてもってんなら、核一つ取ってきてみろ。まぁ無理だとは思」

うが、という言葉は、無言で青年が開いた袋から零れ落ちた物に阻まれ消えた。

「な……」

出てきたのは、多量の茶が混じった白い核と、一つの黄色の核。

「これ全部殺したけど。足りないか？」

絶句する男に、ルイスは首を傾げる。が、それには唐突に横合いから反応があった。喫茶店に座っていた人間のようだ。

「うわ、すご。君、これ全部一人で殺したの？私以外にそれやる馬鹿がいるとは思わなかったよ」

横を見て、刹那ルイスは息を呑んだ。小さなハート形の、抜けるような白い顔に、大きめの金色をしたアーモンド形の瞳。個々のパーツが完璧に整っている造形は、勝ち気そうでいて、思慮深さを同居させている。何より鮮烈な印象を残すのは、その赤い髪。襟足でばっさりと切られたらしいそれは、しかし繊細にさらりと風に揺れている。

一見ただの美少女は、しかし背中に差された二振りの短めのサーベルがそれを否定した。また、魔術師でもあるルイスは、鋭敏に彼女もまた魔術師である事を察する。そしてそれはお互い様であったらしい。少女は軽く眉を上げると、男を振り向いた。

「マスター。こいつ心配ないよ。私と同類。剣士兼魔術士だ」

店主は絶句した。常識離れその2を同日中に目にした事への驚き或いは絶望のためであった。しばし二人の人間を見比べた後、がっくりと肩を落としてカウンターに身を沈める。

「厄日だ…今日は俺の人生最大の厄日だ…なんで一日に二人も人外をうちから排出しなきゃならんのだ…」

「マスター、排出って文字違うよね。輩出だよね。ていうか承認してよ。私あんまりここに長くいるとヤバいんだけど」

「黙れ。頭が痛くなるわ」

頭を抱えて呻いた店主は、あ、と手を打った。

「そーだ。お前らコンビ組め。そしたらパーティ承認してやらァ」

「…はあ？」

「はい？」

思いつきの様に言われた言葉に、少女もルイスも眉を上げた。少女が詰め寄る。

「何だよそれ。私一人でいいって言ったんだけど？」
「問題なんだよ新米のしかもガキが一人ってのは！」
「ガキって何だよ私はもう十七だ！」
「俺も十九なんだけど」
「どっちも充分ガキだ！！」

店主は二人を怒鳴りつけ、髪を掻き毟る。少女はしばらく膨れっ面をした後、急にルイスを振り向いた。

「君、ちょっと剣の相手してよ。私ちょっと厄介者なんだ、足手纏いだったら願い下げ」

ルイスは怒るよりも、感心して思わず笑ってしまった。

――初めてだ。足手纏いなんて言われたのは。そして、氷の軍神と云われ、畏れられ敬遠されてきた自分に、こうも対等な口を利いた奴は。

こいつは今まで見てきた女と違う、と鋭敏にルイスは悟る。普通の人間でもない。自分と同種の人間だ。

「いいぜ。俺も厄介なもん抱えてんだ、お前こそ強いんだろうな？」

少女もまた唇を持ち上げた。金色の瞳が至極楽しそうに細まる。

「上等だ」

そして完全に置いてけぼりを食らっていた店主は、頭痛に加え胃痛まで覚え始め、カウンターの下で腹を抑えていた。

場所を移して、人気のない噴水の広場。剣を振り回す充分なスペースがあるのを確認すると、二人は剣を抜いて向かい合った。少し離れた所には、監督役として巻き込まれた店主の姿もある。

「魔術はなしだ。うっかり街を破壊しかねないだろ、君と私じゃ」

「…だな」

ルイスはにやっと笑った。――今までの会話で解った。魔術に関しては、恐らくこの少女は自分の上を行く。他人の魔力レベルを感じる力は、自分にはない。血が湧く。こいつは、今までで一番、強い。

「え――、じゃあ、始め」

勘弁してくれという表情丸出しの店主の合図と共に、二人は同時に地を蹴った。

先手は少女。二刀の内、右手の一本で、掬い上げる様にルイスを切り上げる。その速さに少しヒヤリとしながらも、ルイスは最小限の動きでそれを躱し、長剣を突き出した。

少女はそれを左手の剣で逸らして勢いを逃がし、手首を返した右手で垂直に薙ぐ。それに対してルイスは身を屈めて脚払いをかけたが、少女は軽く跳躍すると、両手の二振りを重ねてルイスに振り下ろした。

「…やるな」

真っ向から受け止めて鍔迫り合いをしながら、ルイスは口角を上げる。少女もギリギリと剣を押し、「そっちこそ」と笑った。

力比べは結果が見えているためか、少女は素早く剣を弾いて、その反動を利用し後方へ一度宙返りをして距離を取った。それを追ってルイスが斬りかかり、応じた少女の銀閃とルイスの刃とが、激しい金属音を立てる。

「…もうやだこいつら…」

金属音に何事かとギャラリーが集まり始め、ずっと見守らされている店主は天を仰ぐ。

ぶっちゃけ呆れた。タダモノじゃないとは解っていたが、今の攻防、どちらも相当のものだ。青年が安定した無駄一つない動きをするのに対し、少女は、女である上に二刀流の為に勢いを付けないと力が足りないからか、些か動作に間があるものの、軽業師並の身の軽さでもって軽く補っている。

（こいつら二人だけで、軍一個中隊は軽いな…）

そんな奴らを排出、否輩出したら協会から何を言われるか。否、悪い事ではないのだが、奇しくも二人とも言っている。「厄介者だから」――と。

実は店主には、少女の正体にはアタリがついていた。この国で、あの鮮やかな赤毛で、超のつく美少女で、ぶちぎれた戦闘能力を持つと云われれば、自ずと答えは出てくる。青年の方はまだ解らないが、その内情報が入ってくるだろう。どの道貴族だ。もしかしたら、さらに上の。

そうこうする内、二人の剣戟は苛烈さを増していた。交わされる金属音が、絶え間なく広場に響く。今や数十人に膨れ上がった観衆達は、固唾を呑んでその行方を追っている。

潮時だな、と店主は思った。

「――止め」

すっ、と二人の間に入り込んで、腰から抜いた二本のナイフで、双方の刃を受け止める。青年の目も少女の目も、軽く見開かれたのが解ったが、店主は委細構わず淡々と言ってやった。

「もう充分だろ。ほら見ろ、ギャラリーが集まって来ちまったじゃねぇか」

言われて初めて二人は周りを認識したらしい。呆気に取られて立ち尽くした。観衆はざわざわとしながら三人に注目していた。ありゃ狩人（ハンター）だとか誰だとかなんとかも聞こえてくる。

「で？お二人さん。組むか？」

店主の問い掛けに、剣を鞘に納めながら二人は顔を見合わせ、二人同時に笑い出した。

「悪かった。君は私より強い。足手纏いは撤回だ」

「こっちこそ。感服したよ」

笑い合いながら手を差し出して、ガシっと握りあう。

「そういやお前、名前なんていうんだ？」

思い出して言ったルイスに、少女は悪戯っぽく笑う。

「人に名を訊く時は、まず自分からだろ？」

ルイスも笑い声を上げた。確かにそうだ。

「俺はルイス…ルイス・キリグ。グリアン出身だ。で、お前は？」

少女はにこりと笑んだ。その笑みは邪気なく澄んだ笑みで、そんなものを長らく見ていないルイスは一瞬どきりとした。

「私はリディ。リディ・レリア。リリエイヌ出身。宜しく、ルイス」

こうして後に狩人のヒエラルキーのトップ、『十強』に名を異例の速さで連ねるようになるこれまた異例の二人パーティ、『自由時間（フリータイム）』は結成されたのだった。

おまけ

「ねぇマスター」
「あぁ？つうか狩人ライセンスもやったんだからとっとと行けよ。何お前らこの一日で超有名人になってんの？」
「こういう協会支部の店長ってさ、一線退いた『十強』が配されてるんだろ？てこたぁあんた、」
「「超強いんだろ？」」

赤の少女と黒の青年の、無邪気と完璧の双璧構成笑顔は、竜の如く店主を襲った。店主は顔を引き吊らせ、どうにかしてこの状況を逃れれないか視線を走らせる。

が、結論として。

「相手してよ」

事情を知らぬものから見れば爽やかな、

「この間の素直に尊敬したんだぜ」

しかし知る者から見れば酷薄極まりない笑顔が店主に迫る。

「…せんでいいわあああああ！！」

アリエル一角でその日、轟音と悲鳴と笑い声が聞こえたという話は、あっさりと日々に流された。

番外編　過去の記憶　（3）　二人の出逢い　（後書き）

これにて第一部（仮）、並びに番外編は終了です。お付き合いくださりありがとうございました。

また、これより少なくとも五カ月、多ければ一年以上更新を停止いたします。詳しくは活動報告をご覧頂けると幸いです。

読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方に最大級の感謝を。ありがとうございました。

第九話　砂漠の鳥籠　（1）

エーデルシアスより北西、大陸北部の海岸線に接する場所は、小規模国家であるテーリアが位置している。人口密度は国家の北部に集中し、領土の大部分を広大な砂漠が占めている。

国家経済はほぼ漁業において補われ、大きな軍事力は持たず、隣国とも適度な付き合いを保ちながら人々は暮らしていた。

名物ともいえる砂漠は通称、クローキア砂漠と呼ばれるが、またの名を無限砂漠と言われる。広さでいえば、オルディアンのリヒトールの森よりも小さいくらいなのだが（それでも十分広いが）、延々と続く代わり映えのしない景色と、土中に棲む生物以外はなんの生き物の姿もなく、更に頻繁に起こる砂嵐によって感覚を狂わせ、立ち入る者の悉くを迷わせることからつけられた名だ。

なんの動物も、空の鳥すらも存在しないと云われる砂漠。

しかしこの日は、砂で霞んだ空を横切っていく大きな影があった。

「ひーろー…確かにこんなとこに歩きで入ったら絶対迷う迷う」

蝙蝠のような翼を大きく広げて空を滑空する生き物――この大陸の主である竜の背で、短く赤い髪の少女は下を見下ろして身震いした。

「アルあたりなら三秒と持たないな絶対。しかし無限砂漠の名は伊達じゃないな…」

その少女の背後で、少女より余程長い黒髪を風に遊ばせている青年が、感慨深げに呟いた。

「ルイスも見たことなかったの？アーヴァリアンには何度も行ってるんだよね？」

意外そうな少女の声に、青年は肩を竦めて応える。

「そりゃ、遠目にはあるけどな。いつもイェーツ側から迂回してたから、こういう風に間近で見るのは初めてだ」

「そうなんだ。…今は、早くイグナディアに行きたいから、突っ切れるのは有り難いね。ありがとう、ネーヴェ」

労るように自身の首を撫でた少女――リディの手に、二人を乗せて羽ばたく薄青く輝く白い竜は、嬉しそうに一声鳴いた。

リディとルイスがそれぞれの国を飛び出し早一週間。ネーヴェを連れているのに馬を買うのは馬鹿馬鹿しい、という理由で、二人は人目につくエーデルシアス国内を魔術や乗合馬車で移動した。国境は、警戒していたが封鎖はされておらず、ちょっと変装すれば抜けることができた。このあたり、少し引っかかったものの、二人とも余り深くは考えないようにしていた。

そしてテーリアに入って砂漠に向かうなり、こうしてネーヴェに乗っての砂漠越えを敢行したのである。

前に乗る少女の項で踊る赤い髪を眺めて、そういえば、とルイスは訊ねた。

「お前、髪どうしたんだ？」

ひと月前彼女と別れた時、彼女の髪は肩甲骨くらいまではあったはずだ。それが、一年前出会った時よりも更に短く、ギリギリ首の半ばから、頭の形に沿うように切りそろえられている。まるで平民の少年のようだ。

「ん、置いてきた。前出てく時も髪切って置いてったから、どうせならもう一回同じことしてやろうと思って。私の縁（よすが）に」

遺髪かよ。

声には出さずルイスはツッコんだ。

「一度切っちゃうともうラクで。洗う手間もかなり省けるし。ルイスはよく伸ばしてるよねー。面倒じゃない？」

リディひょいと振り向いて、ルイスの、顔の横で結ばれている、胸くらいまで長さのある黒髪を指に滑らせた。一瞬ドキリとした思考を抑え、ルイスは敢えて淡々と答える。

「慣れてるからな。それに女ほど手入れにはカリカリしないし、今更切っても逆に違和感がありそうだ」

「それは言える。初めの三日位は頭が軽すぎて困った」

あっさりとリディはルイスの髪から手を離し、前を向いた。少々残念に思いながら、ルイスは話を続ける。

「それにたいてい、貴族は男でも髪伸ばしてるの多いしな。女は言わずもがな」

「例外で悪かったね。そういえばあの馬鹿も馬鹿みたいに長かったな」

修飾語の使い方が変だった。馬鹿二回言った。

しかしこの名詞が誰を指すのか、さすがにルイスももう認識していた。

「…ヴィンセント殿のことか」

「あれに殿なんてつけなくていいよ。ただのサボリ魔のやる気ナシの年中寝てる駄目人間の馬鹿だから」

リディは容赦がなかった。ただし、それがかの王太子の全てでな

いことは、彼女もよく知っている。

「あんなのが姉上の婚…いや、やめる。口に出すだけで腹が立つ」

…つまるところ、リディも大概シスコンだった。

ぶちぶちと何か文句を言っているリディからやれやれと視線を外したルイスは、ふと眼下に目を留めた。そしてその顔が嫌に固まる。

「なあリディ」

「だからあの馬鹿は…え、なにルイス」

「あれ、なんだと思う」

ルイスが指さす方向、二時の方角。彼の目がおかしくなければ――砂が、もうもうと巻き上げられていた。しかも、猛スピードで範囲を広げている。

リディは乾いた笑いを浮かべた。ネーヴェが首を傾げる。

「…砂嵐、かな？」

僅かふた月の休暇で本能が磨耗したのだろうか――二人と一匹はそれが自分達に近づいているという事柄に、反射行動を起こせなかった。そうこうする内に砂嵐は威を増して二人と一匹に牙を剥いた。

「や、やば――」

ようやく理性が躯の支配権を取り戻すも、時既に遅し。

「ぎゃーーーー！！」

「うわあああ！！」

「ぴいいいいい！！」

泡を食って逃げようとした一行を、呆気なく容赦なく、砂の暴風は飲み込んだ。途端、激しい風圧が彼らを襲う。

「くっ…」

黄土色の粒子が視界を潰す中、リディもルイスも結界を張ろうとするものの、口を開けた瞬間飛び込んでくる数多の砂にそれを阻まれ、精霊の名を喚ぶことができない。ネーヴェもなんとか持ちこたえているが、激しい風に煽られ、今にも錐揉み状態に突入してしまいそうである。

ヤバい、本気でマズい――とヒヤリとしたものが背筋を伝った時、リディとルイスはほぼ同時に視界の端に何かを捉えた。

（……塔！？）

それは砂に見え隠れする、大きな塔。石造りの堅固な円筒形には、ところどころ窓硝子が張り付いている。明らかな人工物に、二人は一瞬目を見交わして決めた。

リディが素早くネーヴェの首を叩き、塔を指差す。ネーヴェはその意を正しく理解し、力を振り絞って翼をはばたかせ、塔目掛けて滑空した。

「はあ、はあ…た、助かった…」

砂嵐から逃れ、塔の根元の部分に足を着けて、二人はぜえぜえと喘いだ。ネーヴェも竜の姿からピュルマの姿に戻り、体についてしまった砂を落とそうとぷるぷると身震いしている。

「どうやら、ここが砂嵐の中心部のようだな」

砂まみれになってしまった黒髪を忌々しげに後ろへ払い、ルイスは空に伸びる塔を見上げた。首のストールから砂を払い落としていたリディも、諦めて巻き直し、ルイスに倣って上を見た。

「砂漠の真ん中に、塔？ルイス、聞いたことある？」

「ない」

だよねえ、とリディは呟いてその場からすたすたと塔に沿って歩き出した。数分後、戻ってきた彼女は首を捻りながらルイスに言った。

「おかしいよ、この塔。入り口がない」

ぐるりと一周してみたのに、どこにも見当たらないのだ。出入りをする為の扉が。

「…なんなんだ？」

ルイスも眉を寄せて腕を組む。肩に乗ったネーヴェが、首を傾げた。

「どうするルイス？」

リディがルイスを仰ぐ。

「このままこうしてても仕方ないし…あの砂嵐にまたすぐ突っ込む気にはなれないからな。入ってみようぜ」

「どうやって？入り口ないのに」

「入り口ならあるさ。あれ」

ルイスが指差したのは、少し上に位置する窓だった。小さいが、人ひとり入れる位の幅はある。それを目にして、リディは呆れたように息をついた。

「…君さ、本当に王子？泥棒みたいだ」

「ほっとけ」

「すいませーん。誰かいらっしゃいますかー？」

窓にかけられていた結界をリディの結界解読で通過し、二人は塔

への侵入を果たしていた。外とは打って変わった痛いほどの静寂の中、二人が立てる足音が嫌に響く。

「…誰もいないのか？」

一向に返ってくることのない応えに、ルイスは頭を掻く。リディはつと、壁の窪みに備え付けてある蝋燭立てを覗き込んで首を振った。

「うーん。蝋がまだ新しい。誰かはいるんだろ、多分」

塔は螺旋階段が上に向かって伸びていて、階層毎に部屋もあるようである。さてどうするか、と二人が思案を巡らせかけた時、かたりと音がした。

「！」

反射的に、それぞれ剣に手をかけながら振り向く。そしてその手を慌てて止めた。

「…どちらさま、ですか？」

彼らの後ろには、ひとりの女性がびっくりした顔で固まっていたのである。

「驚きました。ここに人が入ってくるなんて、思いもよりませんでしたから…」

案内された部屋で、コポコポと温かな音を立てて淹れられた紅茶を、ルイスもリディもありがたく口にした。おいしかった。

ネーヴェもビスケットを貰ってご満悦の様子である。

「えっと…」

何を言えばいいか言葉を脳内に巡らせるリディの傍ら、ルイスがすっと頭を下げた。

「何の断りも無しに邪魔をしてすまなかった。だがおかげ砂嵐から逃れることができた…礼を言う」

なんだか謝り口調が偉そうなのは王子に戻ってた弊害かな、とリディは思ったが、慌てて自分も頭を下げるに留めた。

女性はネーヴェを興味深げに見ていたのを二人に戻し、微笑して首を振る。

「いえ、命が助かったのなら何も反することはありません。…けれど、どうやってここに？砂嵐の中を抜けられたとしても…」

「うん、魔術でちょっとやらせて貰った。でも何でこの塔、入り口がないの？」

女性の質問を軽く流して、リディはズバリ訊ねた。すると女性は

微笑んだ。寂しげに。

「扉から出る必要も…まして入る必要も、存在する人間がいないからです」

「？どういう意味？君はここから出ることはないの？」

女性は黙って微笑むだけだった。リディが首を傾げる一方で、ルイスはそれとなく部屋を観察する。

ぐるりと石壁に囲まれた円形の部屋。壁際には本棚が並び、中には本がぎっしりと詰まっている。机も広く、椅子はしっかりした作りの芸術品（アンティーク）めいたもので、寝台は天蓋つきでやたら大きい。無骨なイメージの拭えない外見と比して、妙に浮いた感がある。

女性自身も、鮮やかな長い金髪を後ろで三つ編みにし、飾りのひとつもつけない地味な深緑のドレスという出で立ちだが、顔は高貴な感じに整っているし、地味にみえるドレスはしかし、材質は高級品だろう。

ちらりと窓を見やると、鉄細工の網が張られ、魔力で視れば結界が張られているのもわかる。

ここまでの情報があれば、答えを導くのはそこまで難しいことではない。

「貴女は閉じ込められているのか？ここに」

リディがぎょっとルイスを見た。その一方で、女性は静かに微笑むだけ。ルイスはその中に穏やかな諦観を見出した。

「なら、私達とここから出ようよ！結界は私が破れるし、すぐに―

―」

「いいえ」

勢い込んで言ったリディに対し、女性は首を横に振った。

「お申し出は嬉しいのですが、私はここから出はしません」

「なんで？閉じ込められてるって、要するに監禁だろ？だったら」

「私が逃げるわけにはいかないのです」

やんわりと、しかし断固として女性は言った。

「私がここから出れば――なんの罪もない方々に害が及んでしまうでしょう。でも、私はここで不自由は…していないのです」

その時翡翠のような瞳がちらりと陰ったのを、ルイスもリディも見逃さなかった。が、二人に何かを言う隙を与えず女性は彼らから視線を外すと、つと外を見て、さあ、と二人を促した。ふっと窓の外を指差した手首で、銀色の腕輪が煌めく。

「あなた方も早くここを出た方がいい…ここから北東に、小さな街があります。もうそろそろ日暮れですから…お気を付けて」

「どう思う」

来た時と同じ手順で塔の外に出、念入りに結界を張ってからネーヴェに乗って飛び立ち、リディはルイスに呟いた。

「誰かに閉じ込められてるのは確かだ。…しかも、人質を取られてる」

「閉じ込められてるのに人質っておかしくない？普通あの人が人質じゃ？」

「あの人、『逃げるわけにはいかない』って言ってたろ」

ネーヴェがぐるりと塔の周りを回る。その堅固な作りを見下ろして、ルイスは言った。

「何にせよ…事情がわからない以上、俺達が何かするわけにはいかない。ひとまず、あの人が言ってた街に行こう。考えるのはそれからだ」

「…わかった」

渋々頷いたリディは手綱を握り締め、ネーヴェに指示を出した。

「行こう、ネーヴェ。北東だ」

それにネーヴェは咆哮で応えると、外に出るべく、翼を大きく羽ばたかせて砂嵐へと突っ込んでいった。

第九話　砂漠の鳥籠　（1）（後書き）

お久しぶりです。久しぶりすぎて文章が多少おかしくなってる気がものすごいするんですが、甘く見てやってください…。

第九話　砂漠の鳥籠　（2）

「あ〜…喉乾いたあー…」
「取りあえず飯…」

結局二人が、あの女性に示された街にたどり着いたのは日没間際だった。砂漠に数少なく存在するオアシスに作られた、名をミルーファというその街は、こぢんまりとはしているものの、多くの人が住んでいる賑わいがあった。

その中の一軒で食事を済ませ、二人は狩人協会へ向かおうとしたのだが、残念ながらこの街には狩人協会はなかった。街の人からそれを聞き、まああんまり大きい街じゃないから仕方ないかと諦めて宿を探す。幸い、金の心配はしばらくしなくて良さそうなくらいは、二人とも持ち出してきていた。

歩きながらリディがふと言った。

「そういえばさ。ルイス、あれから狩人協会に連絡入れた？」

あれから、の意味を考えてから、ルイスはいや、と首を振る。

「城抜け出せなかったからな。何もしてない」

「私もだよ…てことは、ちょっと面白いことになってるかもね」
「面白いこと？」

ふふ、と笑ったリディにルイスが問えば、肩を竦められた。

「だってほら、シュリアグランデで事件解決してから音沙汰なしなわけだろ？すわ死亡かって言われてたりして」
「んなまさか」
「まあ、なってたら面白いよねって話」
「まあ、面白いわな」

二人は、この時の冗談があまり冗談ではなかったことを後に知ることになるとは、今は思ってもみなかった。

「でも…何だったんだろうね？さっきの」
「さあな…この街の人間に聞いてみるか？あの塔に住んでる女はなんなんだって…」

ルイスが言い終わらないうちに、ドサドサっという何かが落ちる音が背後で響いた。

「？」

同時に二人が振り向くと、そこには茶色の髪にいかにもお人好しそうな顔立ちの青年が、手に持っていたと思しき紙袋を地面に落下させ、中身の林檎をごろごろと転がらせて、二人を呆然と見つめていた。

「？君、大丈…」
「会ったんですか！？」

棒のように突っ立っている彼を心配してリディが声をかけようとすると、突如青年は息を吹き返したかのごとく切羽詰まった形相でリディの肩を掴んだ。

びっくりしたリディが、目をしばしばと瞬くのを余所に、青年は必死に言い募る。

「教えてください！あなた達も塔を見たんですか入ったんですか！？彼女はどんな様子でしたか！？彼女に…」

「ストップ」

周りが見えていない様子でリディにしがみつく青年の頭を、ルイスががしっと掴んでべりっとリディから引き離した。心なしか冷ややかになった目で青年を見やる。

「お前は誰だ、あと何者だ。話はそれからだ」

ルイスの冷ややかな目と淡々とした口調に青年は我に返ったようだった。はっと周りを見回し、それからわわわ…！と慌てる。

「す、すみません！僕、興奮すると周りが見えなくなっちゃって」

「冷静になったならいい。それよりどういうことか教えてもらおうか」

「はい！狭いですけど僕の家にご招待します、こっちに…」

「あのさ」

歩き出そうとした青年に、ぽつりとリディが言った。

「足元、林檎…」

が、その矢先に彼女の視界からあまり逞しいとは言えない背が消え失せる。ついでどべしゃ、という情けない音が響いた。

「わわわわわっ！うわあああ～…」

「…遅かったか」

無惨にも林檎に足を滑らせ石畳に潰れた青年を前にして、ルイスとリディはなんともいえない目を互いに見交わした。

「…お見苦しいところをお見せしました。改めまして僕、ルシアンといいます。しがない治療術師をやっています」

二人が林檎を拾い集め、青年を助け起こしてから彼に案内されたのは、小さな診療所だった。

大陸共通の医療施設である神殿は、全ての街にあるわけではない。むしろ小さな街には、ないところの方が多い。そういう街では、治療術師達はこうして街のどこかに小さな診療所を持って、人々を治しているのだ。

「こちらこそ、お邪魔します。ていうかそのおでこ、大丈夫？治さないの」

リディは彼――ルシアンの額を指して言った。さっき転んだ拍子に擦りむいたのだ。傷は浅いが、額という目立つ場所のせいか、やたら痛々しくみえる。

「あ、いいんです。これくらいしょっちゅうなので」

しょっちゅうなのか。

二人の内心のツッコミはぴたりと一致した。

「それより――あなた達はあの塔を見たんですか？」

改まった声。そして青年の目には、必死さが浮かんでいた。

ルイスとリディはちらりと目を見交わし、ルイスが頷きを返した。

「ああ、見た。砂漠の真ん中で」

その答えを聞いた瞬間、ルシアンはへなへなと椅子の上で崩れ落ちた。

「ど、どうしたの？」

「よかった…」

半ば引きながら心配するリディに答えず、ルシアンは震える声音を吐き出した。

「実は…」

彼から聞き出したことを要約すると、こうだ。

ルシアンは元々この街の人間ではなく、他国から他国へと旅をしていたらしい。旅の途中で出会う人を治しては、また他国へ流れる日々。言わば流浪の治療術師だった。だがある時彼は、随伴していた隊商（キャラバン）にこの砂漠で置き去りにされてしまう。持ち物もほぼ全部奪われて。

（多分隊商に化けた盗賊だったんだろうな…）

ルイスもリディも遠い目になったが、あえてツッコむことはしなかった。

金どころか水すら奪われたルシアン、しかし彼が初めて踏み込む無限砂漠に対抗できるはずもなく、相次ぐ砂嵐によって星導も見失い、彼はなすすべもなく砂漠で命を落としかけた。しかし、彼は砂嵐に飲まれて気絶したと思ったら、気づけばいずこかの塔の中にいたのだという。

「その塔で僕を救ってくれたのが、アリーシャさんなんです」

ルシアンの声色に混じったものに、これは…とルイスとリディは目を見交わした。

「アリーシャさんは見ず知らずの僕に食べ物や飲み物をくれて、介抱もしてくれたんです。彼女は僕の命の恩人です。それに、すごく豊富な知識を持っていて…あんなに楽しい会話はしたことがありませんでした」

「ちょっとひとつ」

リディが手を挙げた。

「そのアリーシャさんて、綺麗な金髪に翠の目の人？名前聞きそびれて」

「はい！あんな黄金みたいな髪、僕見たことなくて！目も緑柱石（エメラルド）のようで…」

「あーはいわかった。要するに惚れちゃったわけだ、そのひとに」

ルシアンの顔は見物だった。浅黒い肌がそれとわかるほど赤く染まり、耳の先まで真っ赤に変化。のち、なんだかよくわからない奇声を発しながら椅子を蹴倒し立ち上がった。

「ほほほほ惚れっ…！？」

ヤバい、面白い。

またもルイスとリディの思考は一致した。

「お前、自分の顔鏡で見て見ろよ？一発でわかるぜ」

「まあ確かに綺麗なひとだったよねー」

にやにやしながらの二段攻撃に、ルシアンはなすすべもない。真っ赤な顔で口をぱくぱくするのが精一杯らしい。

「助けて貰って始まる運命の恋！ってか？なんか男女逆な気もするが」

「う、うんめっ…」

「ルイス、クサい。でも物語に出来そうだよね」

「まあちょっと脚色加えないとだけどな。実は塔の女性は隠された姫君で、男がそこから強引に攫う…的な」

「っ！？」

「それお約束っていう。でもま、一番大衆受けはするよね」

いいように遊ばれたルシアンは、もはや窒息寸前だった。

それを横目で見やった二人は、このあたりが潮時と悟り、「まあ冗談はこのへんにしといて」と話を区切った。

「で、君はなんで私達が塔を見たってだけでそんなに安心したの？…ルシアン？」

まだ赤い顔で唸っていたルシアンは、問いかけられたことではっと現実に戻って来た。

「あ、ええと、すみません…その、この街をアリーシャさんに教えてもらってやってきたんですが、誰も知らなかったんです…塔があるっていうことすら」

「…へえ？」

二人は姿勢を改めた。少しずつ、きな臭くなってきた。

「砂漠の真ん中に塔があるってことも、そこに人が住んでるってことも、誰も聞いたことがないって言われて。…僕は途方にくれました。僕は確かにあのひとに会ったのに、って」

椅子に座り直したルシアンは、膝に置いた掌を微かに握り締めた。

「僕は耐えきれなくなって…それに、もう一度アリーシャさんに逢いたくて。死ぬかもしれないとわかっていたけれど、また砂漠に行ったんです」

「でも、なかったと？」

ルイスが問えば、いいえ、とルシアンは首を横に振った。

「塔は、ありました。アリーシャさんにも逢えました。でも…」

ルシアンは声を詰まらせ、半ば囁くような調子で言った。

「また死にかけた僕をアリーシャさんは救ってくれました…でも、僕が目を覚ました時、塔にいたのはアリーシャさんだけじゃなかったんです」

「…というと？」

「…恐ろしい…男がいたんです」

あれ？これは間男鉢合わせってやつか？とルイスは思いかけたが、赤かったのが嘘であったかのように真っ青になって震え始めたルシアンに、その考えを霧消させる。

「黒いローブを着ていたので、顔は見えませんでしたが…恐らくは壮年の魔術士だと思います。僕も魔力は多少ありますから…。そして、僕は言われました。…『命が惜しければ、二度とここに近付く

な』と」

しんと部屋は静まり返った。眉をひそめたリディが、

「それでそれっきりなの？」

と訊ねると、ルシアンはまた首を振った。

「僕もそれでは納得出来なくて。問い詰めたんです、なんで会っちゃいけないのか、とか街の人はなんで塔の存在を知らないのか、って。――そうしたら…」

いわく、男は嗤って言ったのだという。

『これはお前が逢っていいようなものではない。生まれた時より、その身に咎を背負いし人間なのだから』

「咎…？」

「僕もよくわかりません。ただ、それを訊こうとして…僕は、殺されかけました」

「……！」

すっと二人の目が細められる。いよいよ尋常でない。

「多分、風魔術の一種なのでしょうが…、見えない力に押しつぶされるような感覚でした。死ぬのかって思った次には、僕はアリーシャさんに庇われていました」

ルシアンは苦しそうに話し続ける。

「アリーシャさんは、僕の命乞いをしているみたいでした。私がここを出て行くことはないから、決して逃げたりしないからって」

そして泣きはらした顔で彼に言った。

『貴方と話すのはとても楽しかったわ。もう随分と、お父様以外と喋っていなかったから…。でも、もう二度と来ないで。私は貴方に死んで欲しくない』

「それから僕はあの男の人に頭を掴まれて、気付いたらこの街に戻ってきていました…一年程、前のことです」

「……」

「……」

ルシアンの話を聞き終え、ルイスとリディは黙り込んだ。しばらくしてリディが低い声で呟く。

「父親が娘を監禁してるってこと？」

「しかも、外との接触を一切禁じる？どこの過保護だ」

冗談めかしたルイスの目は、しかし決して笑っていない。

「今の話でわかった。あのひとは多分、街の人間の命を盾に取られてる」

ルシアンが驚く一方、リディは頷いた。

「逃げられない、ってこういう意味だったんだね。…最低なやつだ

な」

それからちらりとルイスを見やる。その視線の意味するところに、ルイスはひょいと肩を竦めた。その目が細く眇められる。

「イグナディアに急がなきゃならないのは確かだが、これを放置してくのは性に合わねえな。…家庭訪問といきますか」

翌日の昼過ぎ、ルイスとリディは再びネーヴェに乗って飛び立った。ただし、旅の荷物や余計なものはまとめてルシアンに預け、戦闘に備えた用意をした格好でだ。

「しかし、本当に父娘（おやこ）だと思う？」

リディが言った。ルシアンを疑うわけではないが、父が娘を、他人を殺すと脅してまで外界と遮断するというのは、些か想像力を超える。

「さあな…俺達はとりあえず、必要とあらば戦うだけだ」

昨夜のルシアンを思い出す。

二人は昨夜、ルシアン宅に泊まらせて貰ったのだが、ルシアンは最後まで塔に行こうとする二人を止めようとした。真っ青な顔で、それこそ寝る直前まで。

それだけでも、彼がどんな恐怖を覚えたのかわかるが、二人に退く気はなかった。

その時、彼らの行く手に巨大な砂嵐が出現した。見えたのではない。つまり、なんらかのトラップになっていると考えてもよさそうだ。

「あれだな。行けるか？」

ルイスは少し目を細めてそれを確認すると、跨るネーヴェに問いかけた。ネーヴェが軽く唸る。リディは一瞬沈黙し、ちらと振り向くと不敵に笑った。

「誰に言ってる、ってさ。――防御結界は頼んだ」

砂嵐が急速に近付いてきて、一行に牙を剥く。ルイスは今度は何も言わずに風属性の結界を展開した。

「――ネーヴェ、行くよ！」

応じるネーヴェの咆哮と共に、彼らは砂嵐に突っ込んだ。

第九話　砂漠の鳥籠　（3）

第九話　砂漠の鳥籠　（3）

砂嵐の勢いが、前回よりも強くなっていたのはきっと二人の気のせいではないだろう。予め結界を張っておいたにも関わらず、砂の渦に飲み込まれそうになる。

だが、幼竜とはいえネーヴェもこの大陸のヒエラルキーのトップに位置する存在である。ルイスの結界の後押しを受けて、力強い羽ばたきと共に一気に嵐の外周を突っ切った。

「っし、抜けた！ネーヴェ、ありがと！」

「よくやったネーヴェ！」

主二人の歓声に、ネーヴェも嬉しそうに鳴いて応える。そのまま地面に降り立つと瞬時にピュルマの姿になり、間を置かず地面を蹴ったリディの肩に跳び乗った。

「結界の種類は…変わってないな」

窓の付近まで飛んだリディが、結界を調べながら呟く。そしてすぐに解読して突破した。塔内部の石床に着地しながら、振り返らずに声をかけた。

「…っと。ルイス、ついてきてる？」
「ああ。その結界解読、今度詳しく教えろよ」
たんと軽い音を立ててルイスが背後に降り立つと共に、穴が開いていた結界が音もなく元に戻る。
片手でネーヴェを撫で、リディは笑った。
「そういえば教える約束だったね。了解、この件が終わったら始めよう」
それからリディは上を見上げた。ここからはすぐ上の階しか見えないが、太い柱の先に、幾つもの階層が連なっているのだ。
「さて。あのひとは何階にいたっけ？一階一階確かめてくか」
ルイスが答える前に、低い声が響いた。
「その必要はない」
二人のずば抜けた反射神経が剣を抜くよりも早く、突如浮遊感が彼らを襲った。
「なっ、これはっ…！？」
ふっと視界が暗転し、次の瞬間戻った視界が捉えたのは、奇妙に近い天井だった。
「な…っ」
「！？」

回転する視界に、飾り気のない石壁、窓、本棚の上辺、テーブルや椅子の俯瞰図が小さく映る。悲鳴が上がった。

「っ、落ちてっ…」

次いで体にかかった負荷に、二人は状況を悟って身を丸め、回転させる。リディは風圧で離れかけたネーヴェをはっしと捕まえ、胸元に押し込んだ。胃がひっくり返りそうな落下感覚の後、体全体に痺れるほど重い衝撃が足の裏から伝わった。

「っつ…！」

直ぐには立ち直れない痛みを数秒でやり過ごし、ルイスとリディは立ち上がった。

そこは、塔の最上階と思しき部屋だった。少なくとも三階層くらいはある高さの天井には天窓が見える。周りの物の配置から、ほぼその天辺から落下したことが察せられ、二人はぞっとした。

「ほう。今の高さを難なくやり過ごすか。遣り手のようだな」

冷たくなんの感情も籠もらない声が響き、二人ははっと振り返った。そこには黒いローブを目深に被った男と――それに、名をアリーシャというらしい女性が口を両手で覆って立っていた。

「今のはお前か。何をした？」

ルイスが不気味な浮遊感を言及すると、男は嗤った。近くの床に描かれた魔術陣を指差す。

「転移魔術だ。驚いたか？」
「……」
驚かなかった、といえば大嘘に違いなかったが、二人は約一名のお陰で耐性がついていた。
「へえ…あいつ以外にそんな無茶苦茶なもん開発した奴がいるとはね。驚きだ」
慎重に驚きを隠しながらリディが言った。男は眉を上げたようだ。
「余以外にもいるのか。余は精々半径五キロが限界だが、その者はどうだ？」
「君の知ったことじゃない。私達が来たのは、そんな話の為じゃない」
ばっさり切り捨て、リディは強い眼で男を睨みつける。
「君がそのひとをここに閉じ込めてる奴だな？」
男は何も言わなかったが、その後ろにいるアリーシャの真っ青な顔からすれば、一目瞭然だった。
「どんな事情があるにせよ、監禁と脅迫は犯罪だ。大人しく解放しろ」
しかし、ルイスの宣告に男は大きく嗤い出した。耳障りとすらいえる哄笑に、リディもルイスも顔をしかめる。数秒後、唐突に嗤うのを止めた男は、僅かばかり愉快そうな色を声に混ぜて、二人の狩

人を見返した。

「物事の全てを自分の定規で計るつもりか？」

嘲笑う声に、リディが言い返した。

「そこまで愚かでもないよ。…アリーシャさん」

茫然と立ち尽くしていたアリーシャは、その声にはっと我に返ったようだった。最早真っ白になった顔で、リディに食ってかかった。

「何故、またいらしたのですか！？二度と来ないで下さいと申し上げたはずです！」

「確かにね。だけど決めるのは私自身だ。…ルシアンが貴女を心配していた」

出し抜けに言われた言葉に、アリーシャははっと息を呑んだ。瞳が揺れる。

「あのひとは、あなた達との約束を守ってここには来ないけど。私達はそこまで素直じゃなくてね。どうせ流れの狩人だし」

「それでなくても、綺麗な花がこんなところでひっそりと枯れていくのは忍びない。お節介と言われようが、首突っ込ませて貰うぜ」

各々剣の柄に手をかけ、不敵に笑う。それに対し、ローブの男は呆れを交えて二人に問いかけた。

「本当にお節介だ。たかだか塔に閉じ込められた他人の為に、なぜそこまでする？」

リディは剣の柄に手を置いたまま、唇を更に吊り上げた。

「いいこと教えてあげようか。私達のパーティ名は、『自由時間（フリータイム）』」

「『自由』を好み、なによりそれに敏感な人間だ――理由はそれで充分」

戦闘の気配を察して、リディの胸元からネーヴェが飛び降りアリーシャに走り寄る。そして足元で男に向かって威嚇し始めた。まるで男から彼女を守るようなその行動に、アリーシャは驚いた。

それをちらと一瞥したローブの男は再び感情を消した声で、淡々と言った。

「死ににゆくというならば、それもよかろう。かかってくるがいい」

ルイスとリディは目配せし、同時に剣を鞘から抜きはなった。ここしばらく使っていなかったそれらはしかし、主の手に再会できたことを喜ぶようにしっくりと馴染む。

「訓練は怠ってないだろうな、リディ？」

「誰に向かって言ってる？」

束の間軽口を叩き、そして二人は床を蹴った。

先手はリディ。身軽さを活かして高く跳躍し、重力を上乗せした勢いで男に剣を振り下ろした。男はそれを、ローブを払って上げた片腕の腕輪で受け止める。

「…やるね！」

「貴様もな」

高い音を立てて軋む剣と腕輪の競り合いからあっさりと剣を外し、リディは床に着地すると同時に左手の剣を横薙ぎに振るった。後退する男に、回り込んで迫っていたルイスが立て続けに斬撃を放つ。

「…ほう」

それを腕輪や結界で防いでいた男は、一つ感嘆と思しき吐息を吐き出した。

「口だけの愚か者共かと思っていたが。強いな」

「お褒めの言葉ありがとう…なっ！」

ルイスが不意に強く床を蹴りつけ、男の頭上を飛び越える。男が振り向くと同時にルイスは剣を切り上げ、同時にリディが男の背後から魔術を放った。

「…ほう！」

危うく自分を飲み込もうとした火を、男は水魔術で弾く。同時にルイスを結界で弾いた。

ルイスとリディはそれぞれ反対方向に跳びずさり、油断なく剣を構えた。

「ふむ。今までの輩とは格もなにもかも違うようだな」

「それはどうも」

落ち着いてリディが答えた。小手先調べはやはり必要なかったかもしれない。剣を持っていないが、この男は体術にも長けているようだし、なにより魔力がかなり高い。

「君ほどの人がなぜこんなところにいる？宮廷魔術師でもなんでも、よりどりみどりだろ」
「賞賛、光栄だ。その言葉そっくり返そう。何故狩人などやっている？」
「趣味」

一言で答え、リディは再び魔術を放った。鋭い風の刃が、かがんでよけた男の頭上を通り過ぎ壁に激突――はせず、一瞬淡く壁が輝いたかと思うと刃は消え失せた。

「…“消失”作用！？馬鹿な！」

リディは思わず叫んだ。あの結界の付随効果は、五属性を持つラグだからこそ成せるものだ。ありえない。
一瞬驚愕し、壁へ意識が逸れた隙を、突かれた。

「貴様、何者だ？何故そこまで、複数属性の結界について知っている？」

ふっ、と目の前に影が差したと思った次の瞬間。腹に凄まじい衝撃を食らい、リディは後方に吹っ飛んだ。本棚に激突し、遅れて凄まじい痛みが体を襲う。その頃になってようやく、リディは自分が蹴り飛ばされたのだと認識した。

「っ……」
「リディ！！貴様、よくもっ！――アイシィ！」

声もなく床に崩れ落ちたリディを見て、ルイスが激昂する。怒鳴るように精霊の名を呼び、無数の氷刃を空に出現させると、一斉に男目掛けて飛ばした。男はそれを難なく結界で防ぐ、が。

「まだだ！」

ルイスが飛ばした氷刃の中には、男に向かわず頭上を通り越していったものもあった。それを、ルイスは風を巻き起こすことで方向を逆転させ、背後から男を襲わせる。

舌打ちして身を翻した男に、今度はルイス自身の剣が迫った。

「…冷静だな、口調の割に」

呟いた男は、ギリギリでそれを腕輪で受け止める。真っ向から剣を振り下ろしたルイスは口角を上げた。金属がこすれ合い、耳障りな悲鳴めいた音が軋る。

「伊達に死線はくぐってないんでな！」

ぐっ、とルイスが一層力を込め――次の瞬間、パンと儚い音を立てて男の腕輪が砕け散った。

（貰った！）

男は手首を落とされる寸前で身を引いたが、体勢が崩れる。そしてそれをみすみす逃がすルイスではない。迷わず距離を詰め、剣の柄を男に向けて振り上げた。

しかし、その光景を見ながらリディが呻いた。

「駄目だ…」

アリーシャの足元でネーヴェが鳴く。アリーシャもまた、その光景に顔を青ざめさせ、目を見開いていた。

リディは身を丸めながら、必死に腕で上体を支え、声を振り絞る。同時にアリーシャも、悲鳴を上げた。

「ルイス、ダメだ…！」
「やめてっ……！」

男の首から紙一重のところで、ミスリルの柄頭が止まる。剣の主であるルイスは、目を見開いて動作を止めていた。
それは、リディの制止を受けたためでも、アリーシャの悲鳴を聴いたためでもなかった。

「――力はある。だが甘い」

そう言って、男はゆっくり立ち上がった。ルイスは動かない。動けない。

「博愛精神を発揮するのは結構だが、時と場合を選ぶべきだ。さもなくばこうなる」

ルイスの足元には、魔術環が浮かび上がっていた。恐らくは予め敷いてあったのを、魔力を流し込むことで発動させたのだ。

見えない鎖に雁字搦めにされるような感覚に、ルイスは顔を歪めた。それしか出来なかった。

（くっそ…！）

確かに刃を使っていればこの環には引っかからなかったかもしれなかった。でも、それはつまりこの男を殺すということだ。…それは余りに理不尽が過ぎる。…が、その考えが彼を窮地に陥れていた。

「…全く無茶苦茶だな…」

リディがよろめきながら立ち上がった。

まだ痛む腹から、無理矢理意識を遮断する。拾い上げた剣の片方を支えに、きっと男を睨む。

「転移魔術の次は、拘束結界？…天才ってやつは、ひとりじゃないんだね」

「…どうやら貴様の身近に天才がいるようだな。だが私は天才ではない」

男は淡々と述懐した。

「私は長年複数人に研究させただけだ。日の目を見ることはないと思うがな」

「…もったいないな。この成果を娘を閉じこめる為だけに使うっての？」

低い笑い声が響く。渦を巻く魔力の流れに、リディは腰を落とした。

「私の勝手だ。…ゆけ、ラクイア」

「っ、迎え撃て、フレイア！」

動けないルイスの眼前で、リディと男の魔術が真っ向からぶつかり合う。

「くっ…」

ルイスは必死に腕に力を込めたが、全くびくともしない。ならば魔術には魔術をと魔力を集中させたが、逆に愕然とした。

（魔力が吸い取られるだと！？）

恐らく、流出する魔力を環構成に還元する式を魔術環に組んでいるのだろうが、いくらなんでも無茶苦茶だ。拘束作用に加えそんなものまで組み込まれた魔術環など聞いたことがない。大体、魔術環自体、召還以外に滅多に使われるものではないのだ。

「しぶといな」

「こっちの台詞だ！」

真実手の打ちようが無く、なすすべなく見守るルイスを余所に、二人の闘いは拮抗していた。

――だがそれも異常な光景だった。

リディの魔力量は半端ではない。若干十歳にして『烈火の鬼姫』の名を冠したのは伊達ではない。魔術の扱いにしたって、そこらの魔術師なんかてんで歯が立たない。

その彼女が、魔力に加え剣術でもっても押し勝てない人間。

有り得ない、とルイスは心底思った。体術はともかく、魔力はトリックがあるとしか思えなかった。その時、ふっと感覚が何かを引っ掛ける。

（…ん？）

トリック。有り得ない魔力量。――ストック。

はっとして、ルイスは目を閉じた。周りの音、景色、苦痛、何もかも遮断し、目に見えない力の流れを感じるためだけに意識を集中する。

すぐ近くでぶつかり合う巨大な魔力。片方はよく知る少女のもので、もう一方は相対する男のもの。――が。

（……！違う！）

ルイスは更に感覚を研ぎ澄ませた。魔力の爆発すら意識の外に追いやり、細い糸を辿る。

（魔術の発動源は、確かにあの男からだ。だけど違う。魔力が汲み出されているのは、あの男の体からじゃない！）

魔力の流出源は――。

ルイスはカッと目を見開いた。そして自らの感覚と視界が一致した存在に――思考を止めた。

「――え？」

青ざめた白い顔。鮮やかな金の髪。翠の瞳。華奢な体躯。

（アリー、シャ、さん…？）

混乱の狭間に陥ったルイスを、しかし鈍い音が叩き戻した。

「ぐっ…！」

魔術が迫り負け、リディが反動で床に叩きつけられたのだ。衝撃で咄嗟に反応できない彼女の頭を、男が掴んで床に抑えつける。小さな頭が黒いローブに覆われ、細い手がそれを外そうともがく。

「ここまでだな」

男は勝利の喜びすらひとかけらも見せず、やはり淡々と言った。リディが魔力を込めようとした指先は、男がリディの頭を強く掴んで床に押し付けたことで空を滑る。弱々しく視界を泳いだ白い手に、ルイスは何もかも忘れて激昂した。

「やめろ!!」

残存魔力の爆発が、力任せに見えない鎖を引きちぎる。流石に男も驚愕したらしい。一瞬隙が出来た。

「――っあああああ!」

その隙を見逃さず、リディが強く腕を振った。そこから生まれた風の刃が、男の頭目がけて空間を裂く。

「…っ」

男は俊敏にそれに反応したが、至近距離からのそれを完全にかわすことは出来ず、風の刃は男のフードを切り裂き、こめかみを掠めて飛んでいく。すかさず跳ね起きようとしたリディは、しかし目をこれ以上ないくらいに見開いて、動きを止めた。

「…え…?」

そして、拘束を解いたことで魔力を使い果たし、床に倒れたルイスも絶句した。

フードの下から現れた、少し褪せた金髪。深い森のような切れ長の翠の瞳。それらを収めた、年を重ねてもなお精悍さを伺わせる整った顔立ち。

それはアリーシャに酷似し――また別の誰かにもよく似――なにより、二人ともその顔を、目にしたことがあった。リディの口から言葉が零れる。

「…テーリア、前国王陛下？」

男は目を眇めた。次いで発生した風が、何の構えも取っていないリディと、さらにルイスを襲い、二人諸共壁に吹き飛ばした。

「ぁぐっ…」
「っうぁっ…！」

残っていた魔力、体力が一気に削ぎ落とされる。力なく床に崩れ落ちた二人に、ネーヴェが一際高く鳴いて駆け寄った。

その様を眺め、男はそうか…、と呟いた。

「見覚えがある。その赤い髪…『烈火の鬼姫』。それに、『氷の軍神』だな？」

二人は答えることすら出来なかった。だが男は構わず、成る程、と独りごちる。

「ならば納得も行こう。尋常でない魔力、身体能力、知識。そして私の顔も知っていること」

「な…んで、元国王ともあろう者が、こんなっ…ことを、してるっ…！」

途切れ途切れにルイスが呻いた。腕や脚に力が入らない。

「ていうか…なんで、幽閉なんかっ…王女だろ…！」

彼らを無表情に男は見やる。

…テーリア前国王、ヘイゼル。

奇しくもルイスもリディも、過去に彼に会ったことがあった。片や式典で、片や彼からの来訪で。

抜きん出た魔術の腕を持ち、研究も惜しまなかったと聞くかの王は、数年前に息子に王位を譲って以来、人前に出たことはないと伝え聞いていた。

だが。

「見損なった…！魔術師として、私はっ…ラグは、貴方を尊敬、してたのに！」

リディが叫んだ。彼女の幼なじみが唯一尊敬していた魔術師。それがこの王だった。力任せの魔術を好まず、緻密なコントロールを有すとして名高かった存在。彼を見て、ラグは研究者の道を選んだのだ。

しかしその言葉に心を動かされる気配もなく、ヘイゼルは肩を竦めた。そして何かを呟き手を振る。途端、ルイスとリディの体の上に見えない凄まじい力がかかり、思わず呻いた。

「かはっ…」
「それは残念だったな。だが私の預かり知るところではない」
そう言って一歩、倒れ伏す二人の方へ足を踏み出した。
「おやめください、お父様っ…！」
ついにアリーシャが駆け出した。ヘイゼルのローブに縋り、懇願する。
「私は逃げたりいたしません！それにこの方達が、お父様の仰る通りの方なら…！」
「黙っていろ」
煩わしげに振り払われた腕に、アリーシャは尻餅をつく。それでもなお追いすがろうとするアリーシャを、ヘイゼルは冷たく一瞥した。
「お前が口出しすることではない。他者の命乞いをするよりも、自らの存在を省みることだ」
「……っ」
アリーシャは父より明るい翠の瞳を目一杯見開くと、涙を溜めて俯いた。しかし、再びヘイゼルが歩もうとするのを見るや、きっと決然とした色を浮かべ、身を翻すと二人の前で手を広げた。
「ならば、私を代わりに殺してくださいませ！もともと本来ならばとうになかったこの命、惜しくはありません！」
ヘイゼルは目を眇め、顔を険しくした。その口から低い激昂が放

たれる寸前、アリーシャの前に一つの小さな影が走り出る。

「……？ピュルマか」

シャーッと猫のような威嚇をする白い毛並みの小さな動物。それを、あの二人が連れているものだと認識したヘイゼルは、構わず近づこうとし――その瞬間、ピュルマの姿が変じたことに瞠目した。

――グルルルル…！

先程とは比べものにならない程の鋭い威嚇。そして、それを放つのはピュルマではなかった。

「り、竜…！？」

自らの前に立つそれを見上げ、アリーシャが驚愕に身を竦ませた。青みがかった白い体表を持つ竜――ネーヴェは、ただヘイゼルを睨み付けて動かない。

「…そうか…」

足を止め、ネーヴェとしばし睨み合ったヘイゼルは不意に視線を竜の背後に移した。納得と憐憫、それに形容しがたい色が目を通り過ぎる。

「成程。『原初の運命』ということか」

その単語に、最早薄れかけていたルイスとリディの視界が像を結んだ。

「…な、に…」

「確かによく見れば紅と黒。眉唾と思っていたが、存外本当だったわけだ。…ならば殺すわけにはいかないか」

微かに感心するような声音で言って、男は肩を竦めて手を振った。途端、ルイス達の足元に魔術環が浮かび上がり、同時にアリーシャが彼らから弾き飛ばされる。

「きゃっ…」

「自らに課された運命に感謝することだ。さもなくば貴様達は死んでいた。…これに懲りて、もう二度とここに訪れるな」

詠唱が紡がれ、魔術環が一層強い光を放つ。ネーヴェはヘイゼルを睨み付けたまま、動くことはしない。アリーシャは俯き、泣きそうに唇を噛み締めた。

「さらばだ」

その一言で、薄れつつあった視界が完全に白く染まり、ルイスとリディは浮遊感を最後に意識を失った。

第九話　砂漠の鳥籠　（4）

第九話　砂漠の鳥籠　（4）

たゆたう暗闇の中から、ふっと声が聞こえてきた。

「…たんでしょ？…から…」

「…も、…です…れに、」

それらの声に引き上げられるように、リディは意識の底という暗闇から抜け出し、目を開けた。

視界に映ったのは茶色い天井。視線を横に振れば閉じられた窓と白い遮光幕（カーテン）が映り、下に下ろせば白いカバーが目に入った。

（……）

ぼんやりする頭で、やたら重く感じる腕を上げる。そこにはやっぱり真白い包帯が巻かれていて、同時に体中の感覚があちこちの怪我を伝えた。

（…そうか）

思考に蘇る、塔での激闘。そして――敗北。

「…くそっ」

腹立たしさが溢れてきて、リディは拳げた拳を自分が横たわる寝台に叩きつけた。

また救えなかった。ファーデリアのあの出来事で、手の届く限り守りたいという願いを、誓いをまた守れなかった。

自己嫌悪に唇を噛み締めていると、隣からかすかな呻き声がした。顔を振り向ければ、彼女同様の有り様でベッドに横になっていたらしいルイスが、ゆっくり目を開けたところだった。リディはほっとして、声をかけようとしたがその前にルイスが口を開く。

「…リディ…？」

ぼんやりとした掠れ声が耳に届くなり、何故かリディの背筋がぞくりとした。寒気ではない。何か――優しく撫で上げられたような、そんな感覚で、リディの顔に知らず朱が差す。

起き抜けのルイスはいつものぴしりとした感が薄れ、少し宙をさまよい気味の蒼い眼は子供っぽいようでいて、けれど掠れた声と相俟って――どこか、色っぽい。

（……って、なに考えてるんだ私！？）

さっきまで悔しさに震えていたのもどっかに吹っ飛んでいた。混乱の余り千切れた思考が繋げず、あわあわとリディはルイスに背を向けた。

「…リディ？」

先程よりも幾分しっかりした声が、怪訝そうな色を孕んでリディ

の背に当たる。が、未だ混乱中のリディはそれに応えることが出来ず、意味をなさない言葉の断片が唇から零れるだけで、それが益々彼女の焦りを増幅させる。

「リディ？どうした？怪我が痛むのか？」

背後で、ルイスが些か慌てて、しかし体に障らないようにゆっくりベッドから降りた音がした。

「ななんでもない！気にするな！」

噛んだ。しかも妙に上擦った声が出てしまい、リディの頭は最高潮に混乱を極める。

「なんでもないわけあるか、おい…」

それをルイスが不審に思わないわけもなく、気遣うような訝しむような口調になりながら、鍛えられたしなやかな手で、リディの肩を掴み、振り向かせようとした。

（ぎゃ――今こっち見るな――！）

内心絶叫したリディに、そこで思わぬ助け舟が入った。

「あ、起きられたんですね！良かった！！」

戸口に茶色の髪の青年――ルシアンは顔を出し、二人を見るやいなや嬉しそうに叫んだ。それからふと室内の微妙な空気に気づき、首を傾げる。

「…どうかしましたか？」
「いや、なんでもないよ」

一気に思考が繋ぎ合わされていくと同時に頬が冷えていくのを感じながら、リディは心の中で、よくわからないものを霧散させてくれたルシアンに何度も礼を言ったのだった。

「吃驚したんですよ。物音がしたと思って見に行ったら、お二人が倒れてるんですから」

コポコポと薬湯をカップに注ぎながら、ルシアンは言った。その顔は安堵の色が深く、本当に心配をかけていたのだと思い知らされる。

「ごめん。…やられた」

リディが神妙に告げれば、一瞬の沈黙を挟み、怒ったようにルシアンが言った。

「なに言ってるんですか。あなた達が生きてること、それが一番大事なことです。僕になんで謝るんですか」
「だって…大口叩いといて」
「人間それくらいの失敗します。でも懲りたならこれからの無茶はしないことですね」

リディの声をそれで叩き折ったルシアンは、そこでふと自分を唖然と見つめる視線に気づく。

「…なんですか？」
「いや…結構言うやつだな、と思って」

目をしばたたくルイスに、ルシアンは包帯を手にとりながら苦笑した。

「…昔、無茶をして命を落とした姉がいたんです。それ以来、そういうことには敏感で」

沈黙が三人に降りた。しばらくして、「ごめん」とルイスとリディの声が重なる。

「やな話させたな。悪い」
「…いいんですよ。ですからもう、あの塔に行こうなんて」
「行くよ」

ルシアンの言葉を遮って、リディが言った。ルシアンは自分の耳がおかしくなったかと思って眼を点にした。
「…は？」
「行くよ。負けっぱなしで帰れるか」

憤然と言ったリディに続き、ルイスが頷いた。

「ここで逃げたら『ヘキサ』の名が廃る。――テーリアの元国王だろうが、知ったことか」

「…え？国王？ちょっとなにが…」

「なんのために対策って言葉があると思ってる。一回負けたくらいで諦められるか」

「ああ。色々と分析したいこともあるしな」

勝手に頷きあう二人を前に、ルシアンは叫んだ。

「何がどうなってるかはわかりませんけど、待って下さい！正気ですか！？だいたいその怪我じゃ無理ですよ！悔しいですけど僕そこまで魔力多くないんで、お二人の骨折治すので精一杯だったんですよ！」

「…ああ、だから思ってたよりだいぶ怪我が少ないのか。確実に肋はいくつかイったと思ってたから…。ありがとう」

「どういたしまし…いや、そうじゃなくて！」

ルシアンが怒鳴ろうと息を吸い込んだ時、クスクスという笑いが戸口から響いた。ルイスとリディは同時に戸口を見て、前者は驚愕、後者は「あれどっかで会ったような…」という表情を浮かべる。

「ローズさんっ！笑ってないでなんとか言って下さいよ！」

ルシアンの声に、戸口に寄りかかっていた女は、艶やかな金髪を揺らして、翠の瞳で二人に笑ってみせた。

「どうも。一ヶ月ぶりですわね？またお会いできて光栄ですわ」

「あなたは…」

ルイスが呟く一方で、ようやく記憶を浚ったリディがぽんと手を叩いた。次いで目を円くする。
ルシアンはきょとんとそれを眺めていたが、次ぐ女の台詞に愕然とした。

「リディエーリアさんとちゃんとお話するのは初めてですわね。――わたくしの名は、ローズマリア・リィ・テミシエン・テーリア。現テーリア国王サラディンの妹ですわ」

ルシアン宅の居間は、奇妙な光景になっていた。期せずして田舎町に王族三人が居合わせたのだ。しかも全員が簡素な格好で、端正な顔以外彼らを王族と判断できる要素はない。

「起きた時話し声が聞こえたような気がしたんだ。君だったんだね」

ルシアンが淹れた薬湯を啜り、リディがローズマリアに言った。

その膝にはネーヴェが乗っている。二人の体に障らないように居間にいたらしく、彼らを見るなりとびついてきて大騒ぎし、今は疲れたのか丸くなって眠っている。

ローズマリアは頷いた。

「わたくしが治療できれば良かったのですけど。残念ながら、魔力はあっても治療術はからっきしなのですわ」

ちらりとローズマリアは家主（ルシアン）を見るが、彼は衝撃の余り魂を飛ばしているようだった。目の焦点が合っていなかった。

「あなたはなぜここに？俺達のように脱走したわけではないでしょう」

ルイスが慎重に発した問いに、ローズマリアはころころと笑った。

「やっぱり家出でしたのね。ルイシアス殿下は諸国漫遊に出掛けた、とシルファーレイ殿下は公表していらっしゃいましたが。…駆け落ちですの？」

「「違う！！」」

サラウンドで怒鳴られたが、ローズマリアは気にした風もなくあら失礼しましたわ、と肩を竦めただけだった。

それからふと真剣な目になり、翠の瞳が深みを増す。

「…ひと月前のあの件…お兄様に報告しましたの」

空気が変わったことを察して、ルイスとリディは姿勢を正した。

「不審な男が竜の血でわたくし達を動けなくしたことも、あなた達

にそれが効かなかったことも。…そうしたら、お兄様の顔色が変わったのです」

リディはちらりとルシアンを見た。――まだ魂は飛んでいるようだった。

「お兄様はそれについて何もおっしゃいませんでしたわ。でも、思わず、という感じでこう呟かれたのです。『原初の運命』と」

二人は息を呑み、それからローズマリアを見つめた。ネーヴェがぴくりと長い耳を動かし、むくりと頭を上げる。ローズマリアはゆっくりと言った。

「わたくしが知らない王族の秘密など、あって当たり前ですわ。でもそれ以来、お兄様は何故か軍編成を強化したり、食べ物の貯蓄を貯めたりし始めたんですの。家臣も訝しがっていて…。あなた方は、何かご存知なのですか？」

しっかりと二人を見つめ返した翠の瞳は強く、ルイスは彼女に持っていた印象を改める。…高慢などではない。しっかりと自己を確立している、大人の女だ。

「知らないから、旅をしてるんだ」

リディが答えた。

「最初はまあ、単に家出だったんだけど。旅する中で、知らない奴らから呼ばれたんだ、その呼び名で」

「…『原初の運命』と？」

「うん。それ以外にもちょっとあってね。二度目の出奔、てわけ」

ローズマリアはしばし考え、やがて頷いた。

「ご事情はわかりましたわ。…話を戻しましょう。ルシアン、いい加減魂戻したらいかがですの？」

一転冷ややかな声に打たれ、ルシアンははっと我に返った。

「はっ、すすすみません！僕は何を…」

「衝撃だったのはわかりますけど、いつまでもぐずぐずしないでくださいませ。そんな輩にお姉様を好きになられるなんて、虫酸が走りますわ」

「はうっ…！す、すみません…」

ぐっさりと言葉の槍に穴だらけにされ、ルシアンは撃沈した。一方、ルイスとリディははたと気づく。

「お姉様、って…」

考えてみればあたりまえだ。あの男は前テーリア国王。そしてアリーシャはそれを父と読んだ。そして今の国王は前国王ヘイゼル、つまりあの男の息子であり、ローズマリアはその妹。血の繋がりがない訳がなかった。

よくよく見れば、黄金色の髪や、鮮やかな翠の目だけでなく個々のパーツもよく似ている。余りに雰囲気が違うから気づかなかったが、それを除けば瓜二つとすら言えた。

「アリーシャは、わたくしの双子のお姉様ですわ」

二人の考えを読んだかのようにローズマリアは弾んだ声で言った。

しかしすぐに声を低めた。

「では、本当にお会いしたんですのね？砂漠の塔の中で」

「…ああ。あなたとそっくりの女性がいたよ。ヘイゼル元陛下もな」

ルイスが頷けば、ローズマリアは一瞬泣きそうな顔になり、ついで喜びと安堵の声を震わせた。

「…ようやく見つけましたわ…！」

そのまましばらくの間自らの身を抱き締めて震えていたが、やがてローズマリアは顔を上げ、落ち着いた調子で三人を見た。

「あなた方にはいくらお礼を言っても足りませんわ。わたくしはやっとお姉様にお会いできます」

「良ければ、聞いていい？君達一家がなんでこんなことになってるのか」

リディの訊ねに、ローズマリアは迷うことなく頷いた。

「あなた方なら、無闇に口外しないですわね。恩もありますし、包み隠さずお話ししますわ」

そして、ローズマリアは語り始めた。

事は二十一年前――ローズマリアとアリーシャの双子が生まれた

日まで遡る。

二十一年前の夏、テーリア王家の当時の王妃が、子供を身ごもった。彼女は十年前に第一子であるサラディンを産んだあと懐妊がなく、国民は皆喜びに沸き立った。そして翌年の春、国中が待ち望んだ出産が訪れ――双子の娘が生まれ、王妃が死んだ。産後の肥立ちが悪かったせいだという。

国民は王女の誕生を喜ぶ一方、王妃の死を嘆いた。さらにその十七年後、双子の一方――アリーシャ王女が病を得て亡くなった。国中が沈む中、当時の国王ヘイゼルは退位を表明し、その時二十八になっていた第一王子サラディンに王位を譲った。

ここまでは、表向きの話である。

「お母様はお体の具合が悪くて亡くなった訳ではありませんでしたわ」

ローズマリアの口から紡がれる話を、夜の帷が降り、魔術の光が灯された部屋で三人は黙って聞いた。

「そして、ご存知のようにお姉様もお亡くなりになってはいませんわ。それらは全て、お姉様自身に起因します」

「アリーシャさんに？」

リディの声にローズマリアは頷き、続けた。

「お姉様は、四属性を持っていらっしゃいます」

全員呆気に取られた。しばしの沈黙の後、ルシアンが「えええええ！？」と絶叫する。

「よよよ四属性って…！バランスが悪くて存在出来ないはずじゃあ……」

「ええ。通常はそうですわ。でも我が王宮には多くの優秀な魔術師がおります。お姉様はなんとか命を取り留めました。けれど、同時に膨大すぎるほどの魔力を持っていたお姉様と、わたくしを生むのに、元々魔力をお持ちでなかったお母様の体は耐えきれなかったそうですわ」

「成程…そうだったんだ」

リディがどこか神妙に言うのでルイスが見やると、リディは肩を竦めて口パクで伝えてきた。

『ラグもそうなんだよ』

ルイスも神妙な顔になった。

「…お姉様には、幼い頃からたくさんの制約がありましたわ。何人かの魔術師の立ち会いでなければ、普通の生活すら送れさせて貰えなかったんですの」

悔しげにローズマリアは言った。その表情からも、彼女が本当に姉(アリーシャ)を慕っていることがわかる。

「お父様は、お母様が亡くなって…なんというか、近寄りがたくなられたそうですわ。わたくしは殆どお会いしたことがないので、お兄様によるとですけれど」

「会わないって…なんで？」
「わかりませんわ。まあ、特に疑問に思ったことはありませんけれど。…けれど、四年前…お父様ば突然わたくし達を訪れました」
リディの疑問をさらりと流して、ローズマリアは本題に入った。
「お姉様もわたくしも十七歳になった日でしたわ。いつものように二人で部屋で話をしておりましたの…そうしたら、突然お父様が現れて…」
曰わく、二人に冷厳にこう言ったのだという。
『アリーシャは私が連れて行く。呪われし身は、相応の場所に在るべきだ』
「…驚く間もなく、お父様は転移魔術でアリーシャを連れて消えてしまわれました。転移魔術自体は、城の研究者達が何代にも渡って開発を続けていたので、ようやく完成したかくらいの気持ちだったのですけど。…わたくしが呆然としていたら、外が騒がしくなってお兄様が来られましたの。お兄様は部屋に入るなり、アリーシャのことをお尋ねになりましたわ」
あれほど青ざめた兄は見たことがなかった、とローズマリアは首を振る。
「わたくしがアリーシャはお父様が連れていった、と言ったらお兄様のお顔はもう、真っ青どころか真っ白になってしまわれましたわ。事情をお訊きしたところ…お父様が王位をお兄様に譲られ、議会の場から姿を消したのだ、とおっしゃいましたわ」
ヘイゼルはその日の議会で突然、息子サラディンに位を譲ると宣

言し、後は勝手にしろ、だがアリーシャは連れていくと言いおいて消えたらしい。その足で姉妹の部屋を訪れ、アリーシャを拉致したのは最早確定的だった。

「アリーシャを連れていった原因は、アリーシャが四属性を持っていたからなのは自明の理ですわ。お兄様は、わたくしに諦めろとおっしゃいました。アリーシャはお父様に任せようと」

「…で、どうしたの？」

その言うとおりにしていれば、今ここにローズマリアがいる筈がない。そんな意を込めてリディが言えば、ローズマリアはにっこりと笑った。

「ひっぱたきましたわ。お兄様を」

「「「……」」」

「アリーシャはわたくしの大事な大事なお姉様です。魔力ごときの為にわたくしから奪うなんて許せる筈がありませんわ。そう思うでしょう？だからひっぱたいた上で大事なところを踏んづけて差し上げましたの」

リディがコメントを控える傍ら、男二人はひっと身を竦めた。まだ見ぬサラディンに心底同情した。

「…それからわたくしは暇があればお姉様を探しましたわ。国内ならばどこでも。外交上国外、という可能性は低いので…」

ローズマリアは立ち上がった。翠の瞳を燃やし、拳を握り締める。

「ようやく見つけましたわ。これでようやく、お姉様にお会いできますわ！ではお三方、わたくしはこれで」

「待てよ」

言うだけ言って、颯爽と出口に向かったローズマリアをルイスが止めた。

「なんですの？」

「あのな、わかってるか？相手は俺達二人で負けた奴だぞ？お前一人で姉を救えるとでも？」

「…だからなんですの？このままわたくしに指をくわえて見ていろとでも！？居場所がわかっているのに！？」

ローズマリアが激昂した。瞳には水が張っている。

彼女にもわかっていた。ひとりで魔術師として名高い父に抵抗することなど出来ないと。でもだからと言って、諦めるのは彼女の矜持と姉への思いが許さなかった。

ルイスはそれらを理解し、溜め息をついて言った。

「誰も諦めろなんて言ってねえよ。…二人では敵わなかった。なら、三人になればいい」

ぽかんとローズマリアはルイスを見た。それを飲み込むのに数秒かかり、やがて困惑したように首を振る。

「けれど、あなた方は怪我を…」

その台詞は途中で止まった。ルイスも、そしてリディもおもむろに、巻かれた包帯を解き始めたからだ。

「駄目です！まだ治療薬が…」

ルシアンの台詞もまた、途中で止まった。白い包帯の下から、傷も打撲痕もない綺麗な肌が現れたからだ。

「な……」

「治療ありがとうルシアン。下地があったから魔術追加するの楽だった」

「職業柄核も持ってるからな。…あ、ふたつ壊れてるな」

「どうせ白だろ、いいよ」

やがて包帯を全て外した二人は、どこからどう見ても健康体だった。というのも、躰の内部の内出血やら骨折やらの怪我はルシアンが治したので、躰表面に残っていた痕や、打撲が消えただけではあるが。

「助太刀するぜ？ローズマリア。…俺達の二つ名は伊達じゃないぞ」

振り返って笑ったルイスに、呆然としていた表情をやがて苦笑に替えたローズマリアは、頷いた。

「ありがたく、受け取らせていただきますわ…『氷の軍神』と『烈火の鬼姫』の力」

第九話　砂漠の鳥籠　（4）（後書き）

ローズマリアのイメージ改善話？笑

第九話　砂漠の鳥籠　（5）

「あの男――ヘイゼルは、魔術使うのに別の場所から魔力を汲み出していた。恐らくアリーシャさんからだ」
「どうりで。普通の人間にしては多過ぎると思ったんだ」

再挑戦すると決めたからにはと、彼らは改めて机を囲んで作戦会議をしていた。

「一般的に、持ってる属性が多いほど魔力も多いからな。四属性ってことは、俺達より多い可能性が高い」
「ヘイゼル自身の魔力もあるしね。となると、どうにかしてヘイゼルとアリーシャさんの間の魔力供給路を断たないと」

ローズマリアも加わるとはいえ、単に人数が多ければいいというものではない。多対一の時でもチームワークは必須だ。下手を打つとお互いを潰しかねない。

「恐らく魔術環を描いて、ある種の召喚を行っているのだと思いますわ。この場合、召喚されるのはお姉様の魔力ですわね」
「なら、まず魔術環を探す？塔のどっか？」

「いや、多分アリーシャさん自身に描かれてるだろうから…囮を作った上でアリーシャさんを奪還するのが第一段階だな」
「それでなおかつ、召喚式を打破出来る能力を持っている必要がありますわね」

ルイスはつとリディを見た。リディは軽く頷く。

「奪還は私がやるよ。とすると、囮はルイスがメインでローズはサポートになるかな。最初は防衛基本で」

ローズマリアも頷き、淡々と段取りを決めていく。

「わかりましたわ。ルイスさんはわたくしに気にせず攻めて下さい。援護には自信がありますわ」
「頼む。あの感じを見るに、ヘイゼル自身は風、水属性は確実に持ってる。砂嵐を張ってるから土もだな」
「ルイスと同じじゃないか」
「だから手の読みようもある。逆にこっちも読まれるってことだから、アリーシャさんの魔術環を消し次第リディは前線に戻ってくれ」
「了解。ローズの属性は？」
「わたくしは火と風だけですわ」
「じゃあ風基本で援護頼むよ。火と風なら相乗出来る」
「なら、タイミング的には…」

いざその場になってしまえば、不測の事態はつきものだ。だが、ある程度打ち合わせしておくのとおかないのとではがぜん対応力が違う。だからこその打ち合わせだった。

そして大凡詰んだところで、それまで黙って三人の様子を見ながら何かを考えていたルシアンが、唐突に手を上げた。

「あの。僕も行かせてください」

三人は話を止め、一斉にルシアンを振り向いた。三種の色の違う瞳に見つめられ、内心どきどきしながらもルシアンはしっかりした声音で言った。

「あの、聞いてたら、アリーシャさんの魔術環を消したあとはローズさんが守ることになってますけど。…その役割、僕がやった方が効率がいいと思うんです。お二人に核をお借りすれば、それなりの聖属性結界を張れる自信はありますから」

「いいかっこを見せようって言うんですの？おわかりですの？相手はヘイゼル・テーリアですのよ。生半可な気持ちではあっという間にあの世ですわよ」

ローズの刺々しい言葉に、ルシアンは静かに首を振った。

「違います。僕は治療術師です。あなた方の怪我を少しでも少なくする為に行きたいのです。攻撃に関しては無能ですが…守ることなら、僕は出来ます」

ローズマリアは言葉に詰まった。ルシアンの瞳は、揶揄や中傷をするには余りに真摯で、誤魔化しの色が存在しなかったのだ。

リディはどうする、とルイスを一瞥した。ルイスはそれを正確に汲み取ると、数秒の思案の後頷いた。

「わかった。一緒に行こう」

「でも、ルイスさま…！」

なお不満気なローズマリアを目で抑え、ルイスは耳から青玉の耳飾りを外すとルシアンに手渡した。

「無くすなよ。…それがあればお前の力は何倍にもなる。お前はコントロールがかなり上手いみたいだから、充分なはずだ」

実際、ルシアンの技術はかなりのものだ。魔力が少ないのが惜しいが、それを補えるくらいのコントロール力を持っている。

そこに力――高位の核を渡してやれば、文字通り鬼に金棒になるはずだ。

「これは…」

「大きさは企業秘密だが、核だ。大切なものだからな、大事に扱えよ」

核と言われてルシアンは目を見開いたが、寸前で言葉を呑み込んで頷き返した。

「あと外套ある？ボロボロになっちゃったから…」

「あ、それならちょっと古いけどあります。持ってきますね」

バタバタと別の部屋に走っていったルシアンを見やってから、ローズマリアがルイスとリディに向かって呟いた。

「いいんですの？お姉様を助けても、あの男が死んだら本末転倒ですわ。…お姉様にはあの男が必要です」

ルイスとリディは少し驚いて目を見合わせる。彼女がいつまでも渋っていたのはその為だったのか。

ローズマリアはぷいと横を向いた。

「いつまでも子供っぽい独占欲を持っても見苦しいだけですわ。わ

たくしの願いは、お姉様の幸せです」

沈黙の後、少し苦笑してリディが言った。

「大丈夫。死なせない」

何かを言おうとしたローズマリアを視線だけで制して、リディははっきりと宣言した。

「『烈火の鬼姫』の名に懸けて」

四騎の馬が砂漠を駆ける。砂埃が巻き上がり、乾いた風にすぐさま流されていく。

「この先だ」

横並びに駆ける内の端の一方から、ルイスの声が飛んだ。リディは頷き、ローズマリアとルシアンの顔には緊張が走る。

「ネーヴェ、一般人（ルシアン）もいるから…最悪の事態になるまでは竜にならないでね」

リディは、マントのフードと首の境に座るネーヴェに小声で言った。ネーヴェは少し不満気な色を薄紫の瞳に浮かべたが、短い鳴き声を上げて了承する。

本当なら再びネーヴェに乗る気だったが、三人まではなんとかなっても四人はネーヴェは乗せられない。そもそもルシアンにネーヴェの姿を見せる訳にもいかず、彼らは街で馬を借りたのだ。

先のルイスの声から約一分後、唐突に一行の眼前で砂嵐が出現した。常軌を逸した速度で砂が渦を巻き、拡大する。

四人は馬の手綱を引いて止まった。怯えた馬が鼻面を振り、落ち着かなげに蹄で砂を掻く。ローズマリアとルシアンが怯みを見せる傍ら、ルイスはリディに言った。

「防護は頼む。正面突破するぞ！」

「了解」

瞬時にリディの聖属性結界が展開する。ルイスはその中で魔力を集中した。

この砂嵐も、土属性魔術の一つ。…ならば、

「アイシィ！ウェーディ！」

自らの精霊達の名を喚ぶ。答えて気配が舞い上がった。

「アイシィは雨を！ウェーディは回転と逆方向に風を！」

魔力がルイスの内から引き出され、命令に従うために精霊が飛び出していく。その量を調節しながら、ルイスは上を見上げた。

砂で霞んだ晴れた空が一部分、俄かに曇り、ポツポツと水滴が地に墜ちる。やがてそれは無数に増え、バケツをひっくり返したように激しく降り注いだ。

砂が水を含んで重くなり、砂嵐の速度ががくりと落ちる。それでもなお回ろうとするそれを、逆向きに押し寄せた風が迎え撃った。

「――やれ」

ルイスの一言で、雨足と風が一気に勢いを増した。数秒の後、何かが砕けるような音と共に砂嵐が消失する。一気にクリアになった視界で、リディがルイスに赤い珠を投げた。

「補給しときなよ」

「サンキュ」

ローズマリアとルシアンは呆気に取られていた。

ヘイゼルが作った砂嵐を消すなんてとんでもない芸当を、一人で同時に二属性を使うことで止めた。それだけでも信じがたいのに、リディはそれを特段感嘆したりせず、当たり前の顔をしている。

彼らにとってこれは通常なのだ。

そう思うと同時に、ローズマリアとルシアンの背に戦慄が走った。

「行くよ」

リディが馬の腹を蹴り、単騎駆け出す。赤い珠を持ったままのルイスがすぐさまその後を追い、ローズマリア達は顔を見合わせてから、余計な感情を振り捨てると同時に馬の腹を蹴った。

「さてと」

四人は馬から降り、眼前に聳え立つ石の塔を見上げていた。馬は少し離れたところに結界を張った上で、ルイスが水溜めを作ってやった。馬達は落ち着かなげだったが、逃げ出す様子はなく、黙って塔に向かう人間達を見送っていた。

「大きいですわね」

初めてこの塔を目にするローズマリアは低くそう呟いた。他三人はそれぞれ、瞳に前回の記憶を過ぎらせながら黙って見上げている。数秒、誰も言葉を発しない空隙が流れたあと、リディが足を踏み出した。

他三人の視線を集めながら彼女は塔の外壁に手を伸ばし、数セン

チ離れた所でそれを止める。

「…結界か？」

「うん。前より複雑化してる」

ルイスの問いにリディは端的に頷いた。それに対し誰かが何かを言う前に、「でも」と薄く笑みを刷く。

「ラグのところ程じゃない」

リディの手に三つの属性の魔力が集束する。やがて空間が揺らぎ、そこにあった透明な境界が穴を開けたのがルイス達にはわかった。

しかしそんな、扉もなにもないところに開けてどうするのか。そんな疑問にすぐにリディは行動で応えた。

「…せっ、と」

軽い掛け声と共に、手を結界から離さぬまま片足を回転させて叩きつける。…爪先に炎魔術が仕込まれていたらしいその蹴りは、あっさりと外壁を砕き破った。

轟音と共に塔基盤の外壁の一部に穴が開いた。

「「「……」」」

「どうせなら堂々と行った方が面白いだろ」

にこやかに言った彼女をよそにルイスは額を抑え、ルシアンはぽかーんと間抜け面を晒し、ローズマリアは信じがたいとでもいうように首を振っていた。

「ほら、早く入って。魔力が減る」

リディの声に後押しされる形でルイス、ローズマリア、ルシアンの順に穴から塔内部に足を踏み入れる。殿にリディが続いて、彼女が魔力を霧散させると同時に彼らの背後で音もなく結界が綴じた。

ひんやりとした空気に、全員が口を噤んだ。――ピリピリとした緊張感。

ルイスが目を細め、魔力でもって行く手を見る。…床に、魔術環が描かれている。

それを伝えると、ローズマリアが部屋の反対方向にある階段と魔術環とを見比べ、肩を竦める。

「どうせなら一気に飛ばせてもらえば早いですわ。来るとわかっていれば、着地も手が打てます」

前回を省み、ルイスとリディも頷いた。そしてひとり不安そうなルシアンの肩を、ルイスががしりと掴む。

「え？」

「じゃあ行くか。全員覚悟はいいな？」

ルイスが顔を順繰りに見つめていくと、全員（ルシアンはあまり訳がわかっていなかったが）闘志を目に乗せ頷きを返した。

「よし――行くぞ！」

四人が魔術環に足を載せた瞬間、魔術環は白く輝き――あの、感覚が消失する一瞬を味わった後、彼らは予想通りやけに近い天井を視界に映した。

「う、わあああ！？」

ルシアンの悲鳴に、下方から女性の悲鳴も混ざった。しかしそれを気にする前に、ルイス、リディ、ローズマリアの声が重なる。

「ウェーディ」
「ウェルエイシア」
「エアリエラ」

ゴッ、と円筒形の部屋に風が吹く。その風を器用に操り、四人（ルシアンはルイスの脇に抱えられ）は石の床に軽い音を立てて着地した。

ゆっくりと顔を上げる。――彼らの予想に違わず、少し離れたところに黒いフードの男――ヘイゼルと、美しい顔を青を通り越して白くに染めた女――アリーシャの姿が在った。

「どうも。昨日ぶり」

軽い笑みを浮かべて、リディがマントを脱ぎ捨てた。ヘイゼルは呆れかえっているようだった。

「性懲りもなく来るとはな。人数を増やしたらどうにかなるとでも思ったのか」
「思わなきゃ来ねえよ」

にやりと笑ってルイスがマントを脱ぎ捨て、続いてローズマリアが丁寧にそれを脱いだ。
フードの下から顕れた顔に、さしものヘイゼルも驚きを隠せなかった。

「…ローズマリア？」

はっとアリーシャがローズマリアを凝視する。ローズマリアは若干強張った顔で、しかしにっこりと笑った。

「お久しぶりですわ、お父様…お姉様」

「何をしにきた」

「決まっていますわ」

ローズマリアは毅然とした動作でマントを払い、腰から武器を取り出した。体の前で張ったそれは、…鞭だった。

ローズマリアは豊満な肢体を流れるような動作で動かし、まとめていた鞭を解いて床にバラリと降ろす。そして殊更嫣然と笑んだ。

「お姉様を取り戻すためですわ。その為にはお父様を這い蹲らせてでも戦いますわ」

ビシリと鞭が床を打った。その様はまるで女王のようで――

「「「……」」」

似合いすぎてて誰も笑えなかった。

「…、アリーシャさん」

気を取り直したルシアンが、フードを外してアリーシャの方を向いた。アリーシャがはっと息を呑み、小さな悲鳴を上げる。

「どうして、あなたまでっ…！二度と来ないでと言ったではありませんか！」

悲痛な声に、ルシアンは微苦笑を浮かべた。

「この方達の助けとなる為です」

ルシアンとしては、だからあなたが気に病む必要はない、という意味を込めたつもりだったのだが、そう言った瞬間リディから見えない風の塊が飛んできた。

「痛たっ！？」

「そこは『貴女を助けに来ました』だろ。なにその気の抜けた答え」

「ありえませんわ。朴念仁にも程度ってものがありますのよ」

女性二人の容赦ない口撃にルシアンは目を白黒させ、助けを求めるようにルイスを見たものの、肩を竦められ目を逸らされた。

「…そうか。見覚えがあると思えば、いつかの治療術師か」

ヘイゼルが呟く。そして嘲笑した。

「愚かな。ローズマリアは殺せぬ。仮にも娘だからな。それにそこの二人はそう易々とは死なぬだろう。だが貴様は脆弱だ。魔力は少なく、結界もいかほど張れるものか。死ににきたのか？」

「父上っ！」

「そうさせない為に俺達がなにもしないとでも思ってるのか？」

ルイスが不敵に笑いを返す。足が石畳を踏みしめ、ジリ、と音を立てた。

「…ふん。ならば、精々足掻いてみせろ」

その言葉によって、戦いの火蓋が切って落とされた。

「ルシアン、直ぐに結界展開しろ！範囲は四人入ればいい！」

叫んで、ルイスとリディが同時に床を蹴り、二方向から剣を振るう。ヘイゼルはすっと目を上げると、ローブの下から長剣を取り、剣でルイスを、腕輪でリディを止めた。

「…へえ。剣持ってたんじゃん！」

リディがにっと口角を吊り上げ、腕輪から剣を弾き、床に着地するなり回し蹴りを放つ。ヘイゼルはルイスを風で吹き飛ばすとともにすっと身を退いてそれを避けた。

「ち、やっぱ易々とはいかねえか」

ルイスはくるくると宙を回転し、少し離れた空中で止まり、視界下で剣戟を交わすリディとヘイゼルを見やった。一瞬だけリディとルイスの視線が交わり、意志を交換する。

一拍後リディが跳んでヘイゼルの頭上を抜き、代わりにルイスの剣がヘイゼルの剣を捕らえた。

リディはちらりと方向を確かめる。…まだだ。まだ、遠い。

「っ、らあっ！」

ルイスが速さでヘイゼルを攻め立てる。リディと稽古することで恒常的に速くなったそれを、しかしヘイゼルは顔色ひとつ変えず捌

いていく。だが防戦一方なのに、ルイスもリディも気付いていた。

リディの手から火矢が飛ぶ。ルイスは予め少し距離を開けていて、矢羽まで炎で出来たそれはまっすぐヘイゼルの背を目指した。

「……」

ヘイゼルはルイスが離れた隙を利用し、風を背後に巻き起こらせた。

「…っと！」

火矢は消し飛び、その余波はリディをも吹き飛ばす。空中で態勢を整えようとしたリディは、不意に足の裏に足場を感じて驚いた。頭が下を向いたまま、足が壁らしきものを捉えている。

（！？風の塊？）

その時、下でローズマリアが見上げているのがわかった。翠の瞳は真剣で、目が合うと頷きを返される。

（…なるほど。確かに援護、上手い！）

膝を縮めて力を溜め、だんっとそのまま空中を踏み切る。

「！？」

予測より遥かに速い反撃に、しかしヘイゼルはぎりぎりで攻撃方向をズラす。受け流された方向に、リディとルイスは笑みを浮かべた。

「ローズっ！」

リディは叫び、空中を蹴る。後を考えず吹っ飛んだ彼女の体を、しかしローブの足場が受け止める。真下に金髪を捉え、リディは迷わず足場を蹴った。

「え…！？」

アリーシャは呆けた顔でリディを見上げていた。その腰をさらって肩に担ぎ上げ、リディは瞬時に大きな凸型の放物線を描いて部屋を横断した。アリーシャの悲鳴が上がり、すぐに途切れる。

リディは放物線の頂点でくるりと一回転すると、綺麗に足から着地して、ルシアンの結界に飛び込んだ。

「な、なにっ…えっ…！？」

困惑しきりの体のアリーシャは無視して、リディはローズを仰いだ。

「行ける？」

「当然ですわ」

ローズマリアは決然とした色を目に宿して、結界から駆け出していく。次の瞬間鞭の唸る音がして、何かが弾かれた。

「貴様ら…それに何をする気だ」

押し殺したヘイゼルの声。リディはそれすら意識の外に追いやると、アリーシャの肩に手を当て目を閉じ、全ての感覚をアリーシャに向けた。

「貴様ら、それに何をする気だ」

ヘイゼルと相対するルイスは、そこに微かな怒気を感じて片眉を上げた。

今まで呆れや嘲り、僅かな驚きを示したことはあったが、所謂『喜怒哀楽』はなかった。

「無論、助けるのですわ」

ピシッと鞭を鳴らして牽制しつつ、ローズマリアが言った。ヘイゼルも自らの娘を殺すことには躊躇うのか、彼女が出てから明らかに手が緩んだ。だが依然、強敵には違いない。

「わあっ!?魔術環がっ…!?」

後ろでルシアンの驚く声が上がり、ヘイゼルが目に見えて顔色を変える。

「どけ!」

飛来した風の刃を、ルイスは自身の魔術で弾き飛ばした。背後に結界を据え、剣を地面と水平に構え、腰を落とす。傍らでローズマリアが防護結界を展開するのを感じながら、ルイスは不敵に笑った。

「あんたの絡繰りは、もう終わりだ」

第九話　砂漠の鳥籠　（6）

（…火…水…風…また水…これで消失作用…土…風…ええとこれは座標？…で汲み出し…あああややこしい！）

周りの全てを意識から遠ざけ、アリーシャの体に仕込まれた魔術環を探り当て、丁寧に解きながらリディは冷や汗を掻いていた。

さすが、高名な魔術環の作ったものというところか。ラグが張ったオルディアン王宮結界並みにややこしい。あれの解き方は慣れているが、こっちは未知数という点では余程難しいかもしれない。

「リディ、まだかっ！？」

ルイスの呻きまじりの声だけが意識に割り込み、反射で「まだ！」と怒鳴り返す。ヘイゼルの攻勢が増したのか。しかし、それに気をとられては本末転倒なため、リディはいっそう構成に集中する。

（…ってか、ラグにしてもあのひとにしても、こんなもん組む頭ってどうなってんだろ…だっ、これ火じゃないし！…うわ聖が中枢か…ややこしいっ）

だがややこしくてもなんでも解かなければならないのだ。集中力と頭をフル回転させてリディはアリーシャの体に魔力というメスをいれ続ける。

暗闇の中で縫い物をするようなそれを、リディは慎重に進め――ついに、最後までたどり着いた。

（よし！ここを壊せば…）

ほどくべく手をかけて、しかしリディははっと手を止めた。

「死ね！」

「まずいっリディ！」

最後の一本を切ろうとする彼女に、ヘイゼルが放った氷の矢が迫っていた。

（ヤバっ…！）

この勢い、鋭さでは結界を突き抜ける、それがわかった。だがリディは動けない。動いたら全てが無駄になる。覚悟を決め、リディは術の破壊に集中した。

氷の矢が結界を貫き、リディに迫る。が――それがリディを貫くことはなかった。

ドッ、という嫌な音。同時に呻き声が漏れる。

「うっ…」

リディははっと降り仰いだ。彼女達の前に、ルシアンが立ちはだかっていた。その脇腹に氷の矢は突き刺さり、ぼたぼたと紅い血が床に落ちている。結界が儚い音を立てて壊れた。

「ルシアンさま…っ！」

アリーシャが悲鳴を上げる。

「馬鹿、ルシアン！」

「なにをしてるんですの、馬鹿！」

ヘイゼルの追撃を防ぎながらのルイスの怒鳴り声、ローズマリアの悲鳴が飛ぶ。リディも危うく切れそうになった集中をギリギリで繋ぎ止めながら、「何してんの！？」ど怒鳴った。

「あなたたちに…怪我をさせるわけには、いきません、から」

口の端から血を落とし、ルシアンは無理に笑顔を作る。それから床に膝をついた。リディが舌打ちする前に、彼女の懐からネーヴェが飛び出した。

「ネーヴェ…！？」

ネーヴェは一度リディを振り返り、心配するなとでも言うように耳をはたはたと上下させると、ととっとルシアンに近寄る。そして彼が握り締めていたルイスの耳飾りに顔を近づけ、じっと瞳を閉じた。

「！？」

ぽう、と金色の光が生まれ、ルシアンの腹部を包む。誰もが驚愕してネーヴェを見た。

「治療魔術…！？」

信じられない、とアリーシャが首を振り、ヘイゼルですら呆気に取られる。ひとり冷静にそれを見咎めたルイスは、渾身の力で暴風を起こした。

「ぐっ…！」

不意を打たれた形のヘイゼルを壁まで吹っ飛ばす。それを追って、リディに叫んだ。

「リディ、今だっ！」

「！！」

呆けていた頭が我に返り、リディは最後の要に手を伸ばす。

（これで、）

終わりだ――！

構成を探り、感じ――そしてそれを、叩き壊した。

リディがアリーシャの魔術環を破壊した瞬間。

ぱあん、と硝子が砕けるような音と共に、塔全体に組まれていた術が弾け飛んだ。

「やっ、た…？」

解析による集中力と魔力の消費で痛む頭を押さえながらリディは立ち上がり、手を離されたアリーシャはどこか呆然と周りを見回す。

「こわれた、みたいですね」

途中から自分で傷を治療したらしいルシアンもまた、立ち上がりながら咳き込む。喉の奥に詰まっていた血の塊が吐き出され、床に新たに模様を作った。

「ったく、無茶しすぎ。守ってくれたのには感謝するけど」

リディは溜め息をついて、ててと走って戻ってきたネーヴェを抱き上げる。満足そうな顔の彼の頭を優しく撫で、ありがと、と笑えばぴゃっと鳴いて肩に収まる。ルシアンが疑問の色濃く訊ねかけた。

「リディさん、そのピュルマ…」

「お父様…っ？」

しかしそれは、ローズマリアの動揺の強い声に打ち消される。一同がはっと視線を向ければ、黒いローブの魔術士は、壁にもたれてぐったりとしていた。

「おい、……」

近寄って肩に手をかけたルイスが、目を見開いてヘイゼルの胸に手を当てる。僅かの沈黙の後、「ヘイゼル！」と怒鳴った。

「どういうことだ！あんたの体、これは…！」

「…たいした、やつらだ…」

ヘイゼルは掠れた声で言った。汗ばんだ髪を避けた顔は苦し気ではあったが清々としていて、さっきまでの鬼のような形相は幻だったのかとすら思わせる。

「まさか、わたしの生涯の、最高傑作とすらいえる、あの魔術環を、ものの五分で解かれるとは、思わなかった…さすがは、烈火の鬼姫と、いうことか…」

リディは呆然と思考を捲り、先程解いた構成を思い返す。それから、まさか、と呟いた。

「まさか、あの聖魔力は、君に…」

「さよう…アリーシャから聖魔力を奪うことで、わたしは永らえていた…さもなくば、とっくに死んでいる存在だ…」

声なき悲鳴が彼の二人の娘から漏れる。

遅れて意味が頭に浸透したリディも、さっと青ざめた。

（それは、私が）

（また、私は）

ひとを殺したのか――？

そのリディの思いを見抜いたのか、ヘイゼルは苦笑して唇を歪める。

「そのような顔を、するな。わたしは感謝、している…お前に…お前達に。わたしを止めて、くれたこと…礼をいう」

「…どういうことだ？」

焼け石に水と解りながらも、ヘイゼルに聖魔力を注ぎながらルイスが訊ねた。

「そう、か…まだ、お前達は、知らないの、だな…『原初の運命』を…」

ルイス、リディ、ローズマリアの三人が息を呑んだ。注視される中で、しかしヘイゼルは視線を逸らす。

「そなた…ルシアン、だったか…？」

半ば呆然と事態を静観していたルシアンは、はっとヘイゼルを見つめる。緑色の眼は、願いと温かみを帯びている。

これからの言葉は遺言なのだ、と全員が悟った。未だ頭は混乱し

ているが、死に逝く者の言葉を受けるべく、しんと黙りこくった。
静かな部屋に、喘鳴まじりのヘイゼルの声が響いた。

「実をいうと…初めに見た時から、お前がアリーシャを浚っていくものだと…不思議と確信した。アリーシャを、頼む」
「え…」

戸惑うルシアンを余所に、ヘイゼルはローズマリアに視線を転じる。

「ローズマリア…頼みがある。サラディンに…良い王になったな、と…伝えてくれ。これから、どれ程の苦難が待ち受けていようと…お前のその民を思う心があれば、乗り越えられる…と」
「…しかと、承りましたわ」

戸惑いながらもローズマリアは零れた涙を袖でぐっと拭い、しっかりと頷いた。ヘイゼルは微笑み、それと、と言った。

「お前は美しい女になった。魔術にも、感服したぞ。私の…自慢の娘だ」
「……っ」

跪いたローズマリアは声もなくぎゅっとヘイゼルの手を握り締め、嗚咽に身を震わせた。

「アリーシャ」

びくり、と立ち尽くしていたアリーシャの肩が震える。困惑と怖れの多分に滲む表情に、ヘイゼルは苦い思いを感じた。

「お前には多くを教えぬまま、辛い思いを、させた…地下の隠し部屋に、私の日記がある…そこに、全てが綴られている」

ひとつ言えるのは…とヘイゼルは続けた。

「お前はもう、魔力バランスの不和で苦しむことは、ない…これからは健やかに、あれ」

「お父様…っ！」

鮮やかな翡翠の瞳から、透明な雫が滴り落ちた。

恨みがあった。たくさんの悲しみがあった。憎みすら、したこともあった。

それでも――この男は、彼女にとってたったひとりの父親なのだ。困惑と絶望がない交ぜになり、その場から動くことはできず、しかし涙が止まることもなかった。

最後にヘイゼルは、自らに魔力を注ぐ青年と、硬直している少女を見遣った。

「今私から、お前達に全てを教えてやることは、できん」

「……」

「言えるのは…お前達は…これから先、一番重い代物を、背負う羽目になる。だが…お前達がお前達である限り…その強い意志を持っている限り、お互いを信じる限り、大丈夫だ。きっと克てる。その時が来たなら…迷わず、挫けず、立ち向かえ。お前達なら、やれる。私はそう…確信している」

「ヘイゼル…？」

すまんな、と男は言った。

「お前達の行く末を、見守れないことが、残念だ…だが、未来を生きる者達よ…決して絶望に負けず、闇を破れ…」

ルイスは顔を歪めた。急速に掌の光が弱まっていく。死神に、治療が弾かれる。

「では、さらばだ…達者でな、アリーシャ、ローズマリア」

ふっとヘイゼルの瞳から光が失われる。同時にルイスの掌の光も消え失せた。

ヘイゼルの手から力が抜け、ローズマリアの掌から滑り落ちた。ローズマリアは呆然としながらも、黙ってヘイゼルの瞼を閉ざした。

血の気のない死に顔。それを見て、リディは耐えきれず床に膝をつき、ルシアンは瞑目して祈りを捧げる。誰もが沈黙する中で、ルイスがすっと立ち上がる。

「地下の隠し部屋だと言ってたな」

アリーシャを振り返り、ルイスは言った。

「行ってみよう。ヘイゼルの想いを、あなたは受け取らなきゃならない」

「っと…この石か」

ネーヴェをヘイゼルの遺体の傍に守らせて、人間達は一階まで降りてきていた。まだ殆どの者が混乱を脱していない中、感情の制御に長けたルイスはひとり淡々と探索していた。

床にひとつだけ色の違う石を目敏く見つけたルイスは、力をこめてそれを押す。

ゴゴゴゴゴ、と地鳴りのような音と共に、床の一部が口を開ける。真っ暗な地下へと続く階段に、ここだな、とルイスは断じた。

リディの火で暗闇を照らしながら一行が着いたのは、アリーシャの部屋の比ではない、大量の本で溢れた部屋だった。壁の燭台に火を移し、リディが思わずすごっ…と感嘆する。

「ラグより多いかもしれない…」

部屋面積からしてそれは脅威の発言だが、ルイスも頷いた。山、というよりは海だ。本棚にぎっしり詰まるだけでは飽きたらず、床にもうず高く積まれている。さらには書類も散乱し、あちこちに複雑な理論や図が描かれているのが見えた。

「この中からお父様の日記を探せっていうんですの？」

辟易した様子のローズマリアに、ルイスはいや、と首を振った。

「多分あれだろう」

彼が指し示したのは、本に埋もれるようにしながらも鎮座する大きめの机。その真ん中に、ぽつんと分厚い革張りの本が置かれていた。

「……」

無言の一同の中で、迷っていたアリーシャはふと顔を上げると、黙ってその本を取り上げ、ぱらりと捲った。

そこには、淡々とした文章が刻まれていた。

『三の月二十五日
妻シエラが懐妊した。男でも女でも関係なく、無事に生まれてほしい。』

『一の月四日
シエラは出産と同時に死んだ。子供は女の双子で、どちらも強い魔力を持っていたから、そのせいだろう。すまない、シエラ…
双子はアリーシャとローズマリアと名付けた。

アリーシャの方は四属性を有して生まれた。宮廷魔術士が総力を上げて暴走を抑え込んだが、このままでは二十歳まで生きられないという。なにか手はないか。』

『六の月二十八日
悩んだが、これしかないだろう。
明日私は退位する。サラディンはもう充分立派に成長した。わたしが教えることはもうなにもない。
老い先短いこの命くらい、娘に捧げよう。
行き先はどうするか。やはり、砂漠のどこかがいいだろう。万が一暴走した時、死ぬのはわたし達だけでいい』

『七の月十二日
…アリーシャに魔術環を仕込んだ。アリーシャの膨大な魔力を拡散し、わたしの魔力でバランスを取るものだ。
あとは時間をかけて、アリーシャの火の魔力の封印式が馴染んでいくのを待つのみだ』

『五の月三十日
どうも調子がおかしい。最近、妙に自分が欲深く感じる時がある。
死ぬことなど怖れはしないつもりだったが、執着を感じる…』

『八の月九日
しくじった。これは恐らく『あれ』の影響だ。
まさか、わたしの代…否、わたしの子の代に起こるとは。口伝は確かだった。サラディンにどうにか伝えられぬものか…。
それも叶うまい。気付くのが遅すぎた。仮にも王族の者が、情けないことだ。もう自分が自分でない時の方が多いだろう。アリーシャには怖い思いをさせてしまっている。すまない。』

『十の月二十八日
これが最後の日記となるだろう。わたしの自我はもう殆どない。魔術環は維持されているのが幸いだ。
アリーシャがわたしから逃れる術は、もうわたしの死しかないだろう。誰かがそれを成し遂げてくれることを祈るしかないのが歯痒い。
アリーシャの魔術環について記しておく。
アリーシャの封印は、あと一年もあれば完成するだろう。そこにわたしはひとつの要素を加えた。わたしの死によって、封印をより強めるものだ。
それにより、アリーシャは永遠に火の魔力を失うが、もうバランスで苦しむこともなくなる。
これをアリーシャが知るのは、わたしが死んだときだろう。アリーシャ、決して気に病むな。わたしは親の務めを果たしたまでだ。お前が健やかに、幸せに育っていくことを祈っている。』

日記はそこで終わっていた。

読み終えたアリーシャの手から、日記が滑り落ち、ごとんと床に落下する。しかしそれを意に介すことなく、震える両手でアリーシャは己の躰を抱き締めた。

「あ…あ…」

この四年間の記憶が脳裏を走る。怖かった、辛かった――それでも、全ては自分のためだった。けれど、全てはもう終わってしまった。父には何を言うことも、伝えることもできない。命を賭して救ってくれた、父には――

「あああああああっ！！」

身も裂くようなその叫びは、最早支配するもののいない塔に響き渡り、広大な砂の海に静かに呑み込まれていったのだった。

その翌日。まだ朝靄も晴れぬ早朝、ルイスとリディ、それにローズマリアはルシアン宅の前に立っていた。前者二人は旅支度を整え、後者は訪れた時より身綺麗な格好で戸を背にしている。

「お姉様も、わかっているのだと思うわ。わたくし達の気持ちを」

美しい顔を伏せ、ローズマリアはそう言った。

あの塔をあとにしてから、アリーシャはまともに四人と口を利けず、自らの内に籠っていた。何を聞いても泣くばかり、完全にうちひしがれているようだ。

しかしリディに関しては殊更、拒絶を見せている。不可抗力とはいえ、リディが止めを刺したのは事実なのだ。しかも自分のために。

自分の為に命を懸けた父親、自分の為に父親を殺した少女。結局全てが何に繋がっているのか――アリーシャは既に理解していて、それでも認めたくないのだ。

「まだ、整理がつけられないのでしょう。あの塔から出たいという密かな願いは叶ったけれど、それはお父様の死と引き換えだった。しかも、死に際になってお父様の理由を知った」

ヘイゼルの遺体もまた、彼らは街に連れ帰ってきていた。昨日の内にテーリアの王宮に連絡を入れたので、早ければ昼前にも王宮の臣下がやってくる。だからこそローズマリアは身綺麗にしているのであり、ルイス達が早く発とうとする一因でもあった。

リディは静かにローズマリアと視線を合わせ、ゆっくりと言う。

「アリーシャさんが私を恨むのはもっともだ。それでいいとも思う」

痛みを押し隠して笑うリディの頭を、ルイスは黙って撫でた。彼女は上辺の慰めを必要としていない。今ルイスに出来るのはそれ位だった。

「…ルシアンに伝えて。アリーシャさんを頼むよって」

「俺からも。任せるってな」

「…承知しましたわ。お二人もお気をつけて。イグナディアに行かれるのでしょう？」

「ああ。まあ、その前にアーヴァリアンを通るけど」

「今、あの国の中とは連絡が取れないと聞いていますわ。お兄様も調べておられるようですけれど…」

ルイスとリディは固い表情で頷いた。

エカテリーナと名乗る魔族に接触してからふた月以上。その間、イグナディアに関する情報はほぼゼロだ。何が起こっているのか、起こっていないのか――それすらわからない。不気味なことこの上なかった。

「くれぐれもお気をつけて。お父様もおっしゃっていらしたことですわ」

リディは苦笑し、ローズマリアをの肩を軽く叩いた。

「うん。ありがと。…じゃ、行くから」

「元気でな」

言葉少なに、二人は彼女に背を向けた。朝靄の晴れ始めた街を通り抜け、ぽつぽつと歩く人を避けながら街を出て、しばらく歩いたところでネーヴェを竜に変じさせた。

塔での出来事からこっち、ひたすら大人しいネーヴェは黙ってそれに従い、彼らは間もなく砂漠の空に飛び立った。

乾いた風。優しさの欠片もなく髪をなぶるそれを、リディは無言で仰いだ。

「おい、あれ」

ルイスが指さしたのは、昨日死闘を繰り広げた塔だった。守るもののなくなったそれは、早くも砂にまみれ始め、壊れた壁とあいまって否応なく廃墟の様相を呈している。

「……」

リディはそれを黙ったまま見つめ、それから逸らした。

守るために閉じ込めた、砂漠の塔。外界からその身を保護し、あらゆる危険から遠ざけるそれは鳥籠に似ていて、けれど中の鳥は危険を知らずに外を夢見る。

檻が壊れて外に飛び出した鳥は、けれどどうなるのだろうか。自ら生きる術を見つけられるのか、それとも広すぎる世界に戸惑って野垂れ死ぬのか。それとも――安寧を保っていた檻を壊した破壊者を憎むのか。

アリーシャはまだ、分岐点にすら立っていない。

彼女がどう考え、どんな答えに行きつくのか、リディはわからない。でもたとえどんな結論になろうとも、向き合おうと思う。

（それが、結果的とはいえ、籠（ヘイゼル）を壊（ころ）してしまった破壊者（わたし）の、責任であるはずだから）

それでも、それに向き合うのはまだ先のことだ。

「急がないとね。とりあえずアーヴァリアンに」

不意にそう言ったリディを、ルイスは目を瞬いてから凝視し、やがて苦笑した。

「ああ。シルグレイに状況聞かねえとな」

「知ってるといいけど。…そういえばアーヴァリアンこの時期なんか大会なかった？」

「ある。冬は武術大会だったか？夏が魔術だから。なんだ、出たいのか？」

「暇だったらね。でもそんなことしてる場合でもないし。なんか嫌な予感するし」

「…あたるから嫌なんだよな、俺ら二人の予感って」

「ルイスも予感してるのかよ！」

呆れた風に笑い声を上げたリディの頭を、ルイスはぐしゃりと撫でた。

「だからさ。俺達は二人で一つの共同体だ。お前ひとりに重荷を背負わしたりはしないからな」

リディは思わずルイスを振り向き、一瞬泣きそうに眉を歪めると、結構な勢いで肘鉄を打った。

「いっ！？って馬鹿リディ、落ちるかと思っただろうが！」
「そんなにヤワじゃないだろ！」
「不意打ちは卑怯だ！」
「突然変なこと言う君が悪い！…でも」

ありがと、という言葉は本当に微かで、すぐに風に溶けてしまったけれど、ルイスの耳はちゃんと捉えていた。しかしふと、眉を曇らせる。

（ただ、気になるのは…）

遠くに影を探して目を細めながら、ルイスはヘイゼルの日記を思い返した。

（ヘイゼルが書いていた『あれ』…。なんのことなんだろうな）

口伝だの、伝承だの。
誰かが何かを知っていることは間違いない。それが自分達に知らされないだけで。教えることを拒まれているだけで。

「…ルイス？」

訝しげに見上げてくるリディに首を振り、ルイスは蒼い目を遥か

彼方に向けて笑った。

（ま、いいさ）

教えてもらわなければ自分で探すまでだ。

小さく微笑んで、彼は会話を切り替える。

「…残りの金も少ないしな。さっさとこんな砂漠抜けようぜ」

「同意。よし、そういう訳でお願いねネーヴェ！」

きゅおお、と嬉しそうにネーヴェが鳴く。主達の心境の変化が、彼の心も上昇させていた。

速度を上げて砂漠を飛び去っていく影。それはやがて、終末の兆しと出会うこととなる。

回り始めた崩壊の歯車は止まらない。だが、それが音を立てて激しく回り出すのは、まだもう少し先の話である。

第九話　砂漠の鳥籠　（6）（後書き）

当初この話に月設定をする気はありませんでした。ですがどうにもないと不便で…。
単純に、一～十二の月まで、ひと月は三十日。捻りもなんもありませんごめんなさい。

第九話　閑話（前書き）

時間軸が少し前までさかのぼります。どっちかって言うと八話の後日談的な感じです。
前半はいつかの兄視点。

第九話　閑話

第九話　閑話

エーデルシアスの王女誕生記念式典から帰ってきたクリフが伴っていた人物に、僕達は一瞬思考を凍結させられた。

「…ただいま、みんな」

多少伸びたらしい赤い髪は傷んでいるみたいだし、元々細い躰も更に細くなったようだし、勝ち気そうな目は鋭さと思慮深さを増している。それでも、その容貌は見間違えようがない。

「リディ…なのね？」

クロナ姉上が確かめるように口に出した言葉に、彼女は一瞬沈黙し、それから頷いた。

「心配かけてごめん、クロナ姉」

「……っ」

クロナ姉上が駆け出し、少女を――リディを抱き締めた。ぐぇっという呻きも聞こえたけど、リディはされるがままになることを決めたらしい。黙ってぽんぽんと姉上の背を叩いた。

「ごめんねえ。連絡入れるのすっかり忘れてたんだ」

おどけた風に言って、クリフが僕に向かって歩いてくる。その顔から見るに、絶対わざとだ。我が兄ながら性格が悪い。

「…あとでじっくり聞かせて貰うから」

じとりと睨むと、怖いなあ、とクリフは大げさに退いた。浮かれるのも大概にしろってんだこの野郎。

…でもまあ。

「仕方ない、か」

呟いて、僕は姉上の腕から離れたリディの頭に遠慮なく拳骨を落とした。

「うん忘れてた。忘れてたよ、ユーリ兄の行動パターン…」

頭に大きなたんこぶをこさえたリディは、治療を許されないまま風呂に突っ込まれ洗われ着替えさせられ、げんなりとして居間のソファに懐いていた。その膝には旅の途中で拾ったというピュルマが

乗っかっていて、侍女達が可愛いと騒ぐ声も僕には届いていた。

父母に帰還報告と謝罪を済ませ、屋敷の者達にも心配をかけて済まなかったと頭を下げて、リディはかなり神経を浪費したみたいだ。その間頭に出来た瘤を物問いた気に見られ続けたのだから尚更。

「そろそろ治してあげてもいいんじゃない、ユーリ」

クロナ姉上の言葉に、僕は軽く笑って首を振る。

「駄目です。いい反省材料でしょう」

ちなみにクリフはこの間エンドレスで笑い続けていた。腹筋の強い奴。

「だいたいのことは聞いたが…。全く、波瀾万丈な一年を送ったのな、リディエーリア」

父上が呆れと感心の入り混ざったような声で言うと、隣で母上がうんうんと頷いた。

「全くだ。私が若い頃より遥かに凄い」

「…そうでもないと思いますけど」

リディが口元を引きつらせて言った。…確かに、叔父上(陛下)やら叔母上やらから聞く母上の話は、色々間違っている。このへん血の繋がりを強く感じる。

「…だがなリディ。これは行き過ぎだ(出奔)」

不意に母上の声が厳しくなった。ぴんと空気が張る。父上も青い目をすっと細くし、リディの側にいたクロナ姉上もいつの間にか退いている。

「普通の令嬢だって出奔なんてものは許されない真似だ。…お前はその普通にさえ当たらないということは、自分が一番良く知っているだろう」

威厳を存分に含んだ声。当主である母上は、そこら辺の男よりよっぽど漢らしい。反対に僕は、父上がこういう風な説教をするところは見たことがない。王弟であっても、この家の主はあくまでオフィーリアだからな、といつだか言っていたように思う。

リディがぽつりと呟く。

「知ってます」

母上は頷き、ならば、と続ける。

「今後このような軽率な真似はしないことだ。…罰として一年は、城を除き一切の外出を禁じる」

厳しい、甘さの欠片もない断言に、それまで笑みを浮かべていたクリフすらふっと無表情になった。僕の背にも畏れが走る。…紛れもない、本気だ。

姉上がなにか言いかけ、すぐに唇を引き結んだ。僕よりも余程妹に甘い姉上のこと、多分それはいくらなんでも、と言いたかったのだと思う。でも、姉上は同時に聡明だった。母上に理があると判断したんだろう。

誰も、何も擁護しない中で、リディは少しの間俯いていた。それはそうだろう。当主としての威厳を発揮した母上には、リディも勝てなかった。生まれてから、今に至るまで。

だからこそ絶句した。次なるリディの行動には。

「承服はします。ですけど、誓約はしません」

きっぱりと言い返し、――笑った。

妹を除いた全員の眼が点になる。その中で、リディは金の眼を強く煌めかせて続けた。

「わかってます。私の意義も、義務も。…でも、それがあるからといって止められないものを私はこの旅で見つけた」

リディの指が、いつの間にか耳に飾られていた銀玉の耳飾りに触れる。その輝きをどこかで見たことがあるような気がした。…どこで見たんだっけ。

「だから、誓約はしない。時が来たなら、私はまたここを出て行きます」

事実上の宣戦布告。一年前にはなかった自信と強さを備えた笑顔を浮かべると、リディは固まっている僕達に軽く会釈して、颯爽と部屋を出て行った。

短くない沈黙の後、父上が呟いた。

「なんとまあ…あんなところまでオフィーリアに似なくてもいいだ

ろうに」

ずる、と皆滑った。そこなのか。

「私はあそこまで馬鹿じゃなかったぞ」

母上が憤然と言い返した。だけどそこもポイントじゃない。

「…でも、吹っ切ったみたいだな。いい顔つきになった」

父上の言葉にみんな黙った。毎年、あの時期になるたびふさぎ込み、常にどこかに影を背負っていたリディ。聞けば、ゼノの内乱に関わったんだという。多分それが、あの子になにかを乗り越えさせた。

「…悔しいけど、ルイシアス君に感謝しないとねえ。まあ、あの人になら任せてもいいかなあ」

クリフがぼやく。それには父上が噛みついた。僕も聞き捨てならない。

「ちょっと待て。さっきの話じゃ偶々気が会って組んだということだったろう。なぜそうなる」

「そうだよ、話飛ばすな」

クリフが呆れた風に僕達を見た。なにその反応。

「あのねえ、あのリディが、だよ?まる一年も他人の男と行動を共にして、心許して、パーティーじゃパートナー組みすらしたんだよ。本人に自覚ないみたいだけど、知れたことでしょ。僕は口出すのヤ

メにした。だって僕が馬鹿みたいだし」

後半僕は聞いていなかった。

「それだ！いいい一年もリディと一緒にいたなんて、なんて身の程しらずだ！王子と言えど許せん！」

「しかもパートナー！？あの子は社交界経験ないんだ、それをいいことに…！」

確かエーデルシアスの第二王子はかなり見目麗しいらしい。リディがそれ程度に引っかかるとは思えないけど、よくパートナーの意味も知らせずに組んだに違いない！なんてやつだよ！

僕は舌打ちして、頭の中で計画を立て始めた。

「闇討ちするか…」

「闇討ちするか…」

なにやら危ない思考に走り出した弟と、ぶつぶつ頭を抱えだした父を眺め、サーレクリフはふうっとため息を吐いた。その彼に、クローディアナが歩み寄って、意外、と言葉を零した。

「あなたが認めるとはね。てっきりユーリと同じ考えだと思ってたわ」

「最初はね」

エーデルシアスでの彼らの姿を思い出す。知らない内に多大な成長を遂げていた妹（リディ）は、絶大な信頼と、本人も気づいていない好意をかの青年に向けていた。

「…似たような存在だからこそ、分かり合えた苦悩があったのかもしれない。でも確かにあの子達は、お互いを想い合ってる」

全力でぶつかり合い、力を合わせ、笑い合っていた顔。リディの表情は、それまでサーレクリフにすら見せたことがないような種類のものだった。

「だから僕は、邪魔しないことにしたんだ」

「…そう」

クローディアナはそっと笑った。

妹の姿を思い浮かべる。年の離れた末の妹。幼いころの傷を負い続け、それでも懸命に前を向こうとしている、大切な妹。

「あなたにも、大事なひとが出来たのね、リディ」

家族相手に啖呵を切ったリディは、翌日はオルディアン王宮へと赴いた。随分と久しぶりな感のするそこで、顔馴染みに挨拶し、大臣の説教をかわし、目的の部屋にたどり着く。

「ヴィー。リディだよ。いる？」

大きな樫の扉を叩いてみるが、何も反応がない。リディは日の高さを確かめ舌打ちした。もうすぐ昼前だというのに。

「まだ寝てんのか、あの馬鹿は」

ぶつぶつ言って、遠慮なしに扉を開け放つ。侍従は、ああ久しぶりだこの光景…とかほざいてどこかに消えた。多分朝餉でも取りに行ったんだろう。

部屋に踏み込むと、予想通り本棚と机と書類とに占められた執務室にヤツの姿はなく、リディは不機嫌に続きの間の扉を睨む。そのままつかつかと歩いていき、蹴り開けた。

「起きろこの怠惰馬鹿王太子！もう昼前だ！」

暗い部屋の遮光幕（カーテン）をざっと開け、窓を開け放つ。冬の冷たい風が吹き込んで、奥の寝台の上の塊がもぞ、と動いた。長い金髪が布の上を滑り、くぐもった声が発される。

「なに…、誰」

「相変わらずだなこのくそ王子。三秒で起きろ。さもないとその無

駄に長い髪燃やすよ」
「……エリアか」

金髪頭が揺れ、むくりとしなやかな体躯が起き上がる。青紫の眼が幾度か瞬き、ようやくリディで焦点を結んだ。軽く眉が上がり、ふうん、と胡座をかいた。

「帰ってきてたのかい」
「昨日ね」

リディは冷たい風を遠慮なく吹き込ませて換気すると、手慣れた仕草で箪笥から服を取り出し、寝台の上の男に向かって投げつけた。

「さっさと着替えなよ。侍従が朝餉取りにいってる間に」
「はーい…」

気抜けた声を背景に、リディはバタンとドアを閉めた。

「相変わらず元気そうだねえ、エリア。安心したよ」
「お陰様でね」

予想通り運ばれてきた朝餉を口に入れながら、くそ王子ことヴィンセントは朗らかに笑った。リディはというと執務机の上に堂々と腰掛け、手近にあったチェスの駒をくるくると弄んでいる。

「ラーシャアルドでキース達が見失ったって聞いて、ちょっと心配したけど。あれだけゼノで大暴れしたなら平気だと思ったよ」

カコン、と受け止めそこねた白のクイーンがリディの指から落ちて執務机に当たる。リディは目を丸くしていた。

「…知ってたの」

「僕しか知らないけどね。ゼノの反乱軍に混ぜた密偵の中に君の顔知ってる子がいたんだよ。いやあ、ゼノの王様殴り倒したんだって？笑った笑った」

「…相変わらず食えない奴だな」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

かたり、と使い終わったナイフを置く。それを見たリディが侍従に食器類を運ばせる間、双方無言だった。

侍従と、そして侍女が一礼して出て行った後、リディは執務机から降りて椅子で茶を飲むヴィンセントを正面から見据えた。

「ゼノにいたこと知ってるなら、私がそのあとどこに行ったか知ってるよね？」

「途中までね。あとはラグから聞いたよ」

その台詞に、リディは特に驚きを見せなかった。リディとラグは幼なじみで仲もいいが、二人とも主は誠に残念ながら目の前のだらだら男だ。しかもラグはリディと違って、ヴィンセントにきちんと

信頼を抱いている。ラグはリディの肉親に告げ口をすることはまずないが、必要と判断すれば王太子に報告することは厭わない。そしてヴィンセントがエルクイーンに告げ口することもまたなく――ラグが判断した”必要“が誤ったことも、またなかった。

「なら私の訊きたいことも解ってるだろ。――『原初の運命』って、なに？」

その瞬間閃いたヴィンセントの笑みに、リディは本気で背筋を泡立たせた。それに気づかなかったふりをして、彼女は言葉を重ねる。

「この際だからいうけど、ヴィレーヌでもセティスゲルダから、マリナリオでも変な占い師から、果てにはこないだのグリアンでもエカテリーナとかいう魔族からもそう呼ばれた」

「占い師？」

唐突にヴィンセントが口を挟んだ。リディは鷹揚に頷く。

「今時珍しい本物の占い師だったよ。私が『烈火の鬼姫』だってわかってたっぽいし」

「ふうん…」

顎に手をやり、思考をどこかに向けたヴィンセントに構わず、リディは言い募った。

「だけど誰もその言葉の意味を知らない。エーデルシアス王は知ってるみたいだったけど、教えてくれなかった。だから訊く――私は、『何』なの？」

一気に吐き出された言葉が終わると、しんとした静寂が部屋を包

んだ。ヴィンセントは青紫の瞳を細め、彼の婚約者と同じ、しかしもっと猫めいている金の瞳を見つめる。

小さな頃から見てきた、最早妹と言ってもいい少女。彼女に課せられた運命を、彼は数年前には予期していた。…まさか、彼女が成人を迎える前に訪れるとは、思っていなかったけれど。

「…エリアは、この大陸の成り立ちを知っている？」

突然変えられた話に眉を跳ね上げ、でもリディは淡々と答える。ヴィンセントの頭の中で何が展開されているかは、自分程度にはわからない。

「あれだろ。『雨の乙女』とかが代表例のやつ」

「うん。あまり知られていない神話だけどね」

前置きして、ヴィンセントは滑らかな声で話し出した。

「遥か太古の昔、この大陸は竜の国だった。勿論今なお竜は棲んでいるけど、人間が少なかった頃、大陸の主は正しく竜だったんだ。でもある時、大陸を厄が襲った」

「厄？」

「うん、災厄。それを食い止める為に、沢山の竜が死んだ。…今、大陸に竜は数多くいると云われてるけど…本当は、もうあまり残っていないんだ」

淡々とした語り口は信じがたいことを紡いでいくが、それが嘘である徴はない。

（この男はのらくらと人を誤魔化すけど、嘘は言わない）

だからリディは、黙って聴くに徹した。

「沢山の竜が死に、大陸は滅びかけた。…その時に定められたそうだよ。『原初の運命』が」

「……！」

金の眼が見開かれ、ヴィンセントを食い入るように見つめる。明らかに続きを急く眼に、しかしヴィンセントはくいっと口角を吊り上げて嗤った。

「教えてあげるのは、ここまで」

「……ハァ！？」

素っ頓狂な声を上げてしまったリディを誰が責められようか。あれだけ思わせぶりに話しておいて――！

だがリディがそれを罵る前に、ヴィンセントが素早く言った。

「考えてみて、エリア。シージス王や僕、レイやヘンドリックが何故何も言わないのかを。僕はともかく、ヘンドリックは、君の不利益になるなら言わないはずがないだろう？」

虚を突かれてリディは言葉を見失う。…ヘンドリックまで知っているとは思わなかった。

（だって、何も言わなかった）

だが――ヴィンセントの言う通り何かを知っていて、それをリデ

ィが知りたがっているのを知っていて、なおヘンドリックが彼女に言わないということは。それはつまり、

「“言えない”ってことか」

落とした呟きに対し、正解、とでも言うようにヴィンセントは満足そうに微笑んだ。

「正確に言えば、『まだ時期じゃない』。本当はこれも言っちゃいけないんだけど。君は僕の大事な義妹（いもうと）だからね」

「誰が義妹だ！」

瞬間勢い良く投げられた黒のポーンをひょいと避け、ヴィンセントは妖艶な笑みに種類を変える。

「義妹だよ。まあ、まだ従妹たけど…だって愛するクロナは僕のものだし」

今度のビショップは容赦がなかった。先程の二倍以上の速度で飛んできたそれを流石に避けきれず、もろに額に食らってヴィンセントはいたあっ！と呻いた。

「本当のこと言っただけじゃないか…」

「もう一つ食らいたいの？」

剣呑にリディが指先で振って見せたのは白のナイトで、無駄に起伏のあるそれにヴィンセントはやむなく沈黙を選んだ。

「…今度私の前で姉上を自分のもの呼ばわりしたら即刻その無駄に綺麗な顔潰してやる。言葉には気をつけなよ」

「…エリア、口悪くなったねー…」

「お褒めの言葉どうも」

鼻で笑ってヴィンセントの側を通り過ぎ、数歩進んだところでリディは立ち止まって王太子を振り返った。金色の瞳を輝かせ、宣言するかのごとく明朗とした口調で言った。

「君達が教えてくれないと言うなら、自分達で突き止めるまで。私達の運命は私達で見つけてやる」

「…それは、逃亡宣言？」

そのまま扉に歩いていくリディの背に、ヴィンセントは面白そうな声音で問いを投げる。

ノブに手をかけたリディは、すり抜け様ちらりと目線だけ寄越して、

「悪いかくそ王子」とだけ言葉を投げていった。

無人になった部屋で、ヴィンセントは一人くく、と肩を揺らす。

「レイに書こうかなあ、『うちのお姫様がそっちの王子様を攫いにいきそうです』って」

無論そんなことをすればリディに殺されかねないのでやらないが。

「にしても…」

私『達』、ねえ、とヴィンセントは呟く。

あの、良くも悪くも自分の世界で完結していたリディが、よく成長したものだ。この一年は余程大きかったと見える。

「…それとも、」

シルファーレイの容貌に力強さと色素を与えた姿を思い浮かべる。

「あのエリアの価値観に影響を与えたルイス君が凄いのか」

――いずれにせよ。

ふ、とヴィンセントは目を細めた。その顔に、先程までのような笑みはひとかけらとして見受けられない。

頭に蘇る、ある一節。

――『古の結末が始まる時、現世（うつしょ）もまた終わりを迎える』

「…そうさせてなるものか」

その囁きは、誰もいない部屋に静かに落ちた。

第九話　閑話（後書き）

ヴィンセントを書くのが楽しい。

次回の更新は少し時間が空くかと思います。ご容赦ください。

第十話　安寧への撃鉄（1）

第十話　安寧への撃鉄（1）

――思えば最初から、どことなくツイてなかった。

大陸北西部、イェーツの北に位置する国家、アーヴァリアン。これといった産業は持たないが、かの国の特色は何と言っても魔術だろう。連綿とした歴史の中で、代々の王が魔術の研究に研究を重ね、膨大な実績を積み上げ、秘匿されたものも含めれば他国が束でかかっても叶わない程の成果を挙げてきた。

首都ハイレインは、魔術による道具を用いた移動方法の短縮化や、文字通りの空中庭園の実現化を始めとした、他国には決して見られぬある意味での先鋭都市として名高く、観光客の足は絶えないし、また治安の良さもあいまって移住を望む者も多い。

魔術国家アーヴァリアン。専ら、そう呼ばれている。

「人出多っ…」

アーヴァリアンの首都ハイレインに足を踏み入れたリディの第一声はそれだった。内心別のものを予測していたルイスは苦笑いを浮かべざるを得ない。

「まあ、武術大会中だからな…大陸各地から人が集まってるんだろう」

「にしても多すぎるよ。君の国の先月の式典より多い」

ぼやいて、リディは乱暴に黒い髪をかきあげた。

「全く、早く水を浴びたいのに…これじゃ、宿屋が空いてるかもわからない」

「だな…まあ、アテはあるけど」

対するルイスは、やはり苦笑したまま街を眺める。金色の髪が昼下がりの光を反射してきらりと輝いた。

紅と黒。彼らの色彩であったはずのそれが、なぜ黒と金に変じているのか――それを説明するには、二刻程前に時間を巻き戻さなければならない。

およそ、二刻前のこと。

「あれがハイレインかあ」

リディは午の強い光から手で庇を作って目を庇いながら言った。

「なんか…前衛的だね」

二人は今、ハイレインの城門へと繋がる街道を歩いていた。聖魔術で護られた、魔に侵されることのない道。側を商人や狩人、武人と思しき人間達が歩いていく。

普段は街道など丸無視の二人だが、いつもと違い今は馬を連れていない。人目につく恐れのあるところでネーヴェに乗る訳にも行かず、かといって保護されていないところを徒歩で歩くのも骨が折れる。

そこで、ある程度ハイレインに近くなった地点からは街道を使うことにしたのだ。

「まああそこは、魔術を使って街を改造しまくってるからな。浮遊してる家とか道とか、音が鳴りだす噴水とか組み換わる路地とかたくさんあるぜ」

「…それ、もう人間が住む街じゃないよ」

「そんなことないぜ。結構面白いし、慣れれば快適だ。油断は禁物だけどな」

過去を思い出しながらルイスは笑う。年がまだ一桁だった頃、魔術の研修に行った先で、年の近さからすぐ仲良くなったシルグレイに連れられてよく街を歩き回ったものだ。大体巡って、街を理解したと調子に乗って一人で歩いた結果、路地の奥で迷子になり、二日

後に呆れたシルグレイによって救出されたのも今となってはいい思い出だ。

「まあ、あんまりゆっくりしてる暇がないのが残念だけどな」

そう、彼らがハイレインを訪れるのは観光の為ではない。アーヴァリアンのさらに西――イグナディアに入る為に、シルグレイ、もしくはその姉、アーヴァリアン女王クリスティアーナに断りを入れるためだ。

本来なら、国に入る為に隣国に挨拶など必要ない。だが、今――

「イグナディアに“入れない”。そのワケを聞かない事には、何も始まらないからね」

アーヴァリアンの西部の街、ドラジェで聞いた話。曰わく、イグナディアには今不可視の結界が国境全てに渡って張られていて、入国が出来ないということ。また、イグナディア側からの人の出も、全くないこと。

様々な人間から商人から魔術師から、果ては兵士からも話を聞いた結果、どうやらこれは紛れもない真実らしかった。

――確かに、西の方で変な違和感を感じるし…シルグレイに事情聞いた方が早そうだ。

そう提案したルイスに、リディは一も二もなく賛成した。そこからだとハイレインは幾らか北東に戻ることになったが、国境まで行ってしまってから戻るよりは当たり前だが近く、また何の情報もなしにイグナディアに乗り込むのは怖いので、最良の判断だと思った

のだ。

「一応冬支度はしてるけど…ちょっとこの気温じゃ、不安だし。今ですら寒いし。服も替えようかな」

リディは白く染まる呼気を眺め、軽く溜め息をついた。

二人とも国を出る際、冬に備えた格好では出てきたが、イグナディアは険しい山地と冷たい海に囲まれているという土地柄もあってか、大陸北東部に位置する極寒の地、ザイフィリア、フェルミナに次いで寒いという。ルイスはそこそこ寒さに強い自信があるが、リディは余りなかただ。

「そうしようぜ。俺も替える。これから冬は厳しくなってく時期だしな、備えるに越したことはない。

それに、アーヴァリアンには魔術付加の機能性が高い装備が揃ってるから、買い換えて損はない」

「成程。ストールはマフラーにでも替えるか。お金ある？」

「装備全部替えられる程はない。ま、卸せばいいだろ」

そんな会話を交わしながら歩いていた時。

「……！……！」

後方から、何やら騒音が響いてきた。

「なんだ？」

二人揃って立ち止まり、振り向く。周りの旅人達も一様に足を止めて振り返っていた。
徐々に見えてきた砂埃。砂と一緒に悲鳴を上げ近づいてくるそれは、馬だった。

「…ええ！？」
「うわあ！」
「逃げろー！」
「馬が暴走してる！」
「避けろー！」

阿鼻叫喚の騒ぎは、直ぐにルイス達の周囲を巻き込んだ。周りから泡を食って人々が逃げていく中、ルイスとリディは走ってくるそれを眺め、軽く眉を上げるだけしか反応を示さなかった。

「暴走してるね」
「ああ。ていうかあれ」
「うん。荷車引いてるよね、音的に」
「…そうか。いや、俺が言いたいのは」
「わかってるよ。このままじゃぶつかるってことだろ？」
「…お前、わかってて言ってるな？」
「うん。人が乗ってるよね」

――人をおちょくる技能が少しずつ上昇してやがる、こいつ。

ルイスはひくりと唇を持ち上げてから、首を振って思考を逸らした。

「助けるか？」
「そりゃあね。このまま行ったら城門直撃、被害多数確実」

「だな」

呑気な会話を交わす間にも馬は驀進してくる。悲鳴と逃亡勧告、騒音が辺りを占める。そのうち暴走馬の首に必死にしがみついている人間の姿もはっきりと認識できる距離になった。

「あ」

「…女の子？ていうか、何あの髪…」

そう、凄いスピードで爆走している馬の主は、少女だった。年でいえば多分、リディと変わらない。その彼女は、ド派手な橙色の髪を風にぐちゃぐちゃにされ、振り乱されながらはっとこちらを見た。…はっきり言って、あの状況で前を見る余裕があるのは賞賛に値する。

「そこのおっ、ふにゃっ！おふた、りっ！に、に、にっ、逃げてくださあああああいっ……！」

途中で舌を噛みながらの悲鳴。甲高いそれだけでなく、既に遠くに逃げ去った人々からも悲鳴と怒声が飛んでくるが、一向に意に介さず二人は目を見合わせた。

「――どっちやる？」

「俺が結界」

「りょーかい」

五秒の会話。しかしたった五秒で馬と二人の距離はみるみる縮まり、回避不可能域に達する。馬上の少女、並びに傍観者達が最悪の事態を覚悟したその先で、ルイスとリディの手が、動いた。

「――ウェーディ」
「ウェルエイシア」

ふわり、と二人の傍らで気配が動く。空気がその色を変える。

「優しく守れ」
「受け止めろ」

その瞬間、ルイス達の寸前まで迫っていた馬が、何か見えないものにぶつかったように、後方に弾き返された。

「!?っ…きゃあああああっ!」

馬と荷台ごと吹っ飛ぶ少女。それを柔らかな風が、空中で受け止めた。

「…れ?」

少女だけではない。馬も、荷車も、その中に積まれていた様々なものも、全て空中に浮かんでいる。それはゆっくりと高度を下げ、静かに地面に下ろした。

「ほら、落ち着け…大丈夫だ」

ルイスが素早く立ち上がった馬に近づき、穏やかな声音で声をかけながら鼻面を撫でる。リディは肩のネーヴェを撫でながら、少女に視線をやった。

「大丈夫?」

呆然としていた少女ははっとし――慌てて、荷台を振り返った。

「くくくく薬っ！薬はぶじっ…良かった、無事だあっ！」

「……」

自分より荷物の心配か、とリディは呆れた。が、薬？と首を傾げる。そういえば、やたらと荷物に瓶が多いようだったが――。

「はっ！私、なんてことをっ！まずは助けてくれた人にお礼を言わなくてはならないとですねっ！」

少女はがばりと起き上がり、その手になにやら大きめの硝子瓶を抱えたまま、リディと、馬を引いて彼女の側に戻ってきたルイスに駆け寄ろうとして――

「ひうっ！？」

二人の面前で、小石に躓き――盛大に、コケた。

「え」

「あ」

呆気に取られる間もなく、顔面から地面に激突した少女の腕から飛んできた瓶が――目を丸くしたままの二人の、咄嗟に上げた腕に当たる。そして当然のごとく砕け散り。

降りかかる鮮やかな色をした液体。それをルイスもリディも、頭からもろに被る。

「わっ！？」

「いっ…」

パリーン、ビシャーン、という音が連続して起こった後、数秒の静止をおいてルイスとリディは腕を下ろし、状態を確認しあった。

「リディ、大丈夫か？」

「ああ、へい…」

き、と続けようとしてルイスを見上げたリディは、かくんと顎を落とした。

「…？どうし、」

不審を感じてリディを見やったルイスも、彼女を見下ろし唖然と目を見開く。

「「……」」

双方なにも言えずにいる中、あたたた…とおでこをさすりながら地べたにコケていた少女が身を起こし――はっ！！と何も抱えていない自分の腕を見る。

「わわわっ、薬があ～…って、あああっ！！」

刹那、ルイス達の姿を認めて愕然とする。数秒の沈黙の後、ルイスを見たままぽーっとなって呟いた。

「カッコいいですー…」

いい加減ぷちっと来たリディが、少女の頭に掌底を振り下ろしたのは言うまでもない。

結論から言えば、二人にぶっかけられたのは髪染め薬だった。斑に染まってしまった髪を、道脇で荷台に乗っかり、少女――名をアズナ・シトラスというらしい――に全体的に染めてもらいながら、ルイスが疑問を呈じた。

「でも、被っただけで染まるか？よく知らねえが、髪を染めるにはまず脱色しなくちゃならないんだろう？」

「必ずしもそうじゃないんですー」

本来はそう使うのであろう、瓶の中身を櫛に馴染ませルイスの髪を梳きつつ、アズナは答えた。

「最近の開発なんで、まだあんまり知られてないんですけど。こうやって薬をかけるだけで染められるものもあるんですよー。いわゆるコーティングって感じかもしれません。つまり、もとの髪の上に薄い膜を張ってるようなもので――この薬なら、一週間くらいで効果が切れてもとの髪の色に戻っちゃいますー」

「この薬ならってことは、時間も調整できるの？」

先に染め直してもらったリディが、元のルイスに似た色と化した自身の髪を指先でくるくるといじりながら訊いた。

「はいー。一日だけのものから一ヶ月までのものもありますねー。それ以上も別に作れるんですけど、色のおかしいプリンみたいになっちゃうからオススメできないんですー」
「…成程」

生きている以上、日毎髪は伸びるものだ。一ヶ月ならまだしも――何ヶ月も経てば根元は地毛の色を主張する。根元は黒、下は紅――なんていう、そんな情けない髪は嫌だ。

「――はいっ！出来ましたっ」

アズナが弾んだ声を出してルイスから離れ、ルイスも荷台から飛び降りた。

「自分じゃ今いちわからないんだが…リディ、どうだ？」
「……」

無言でリディはルイスを上から下まで眺め、一言。

「キラキラしてる」
「キラッ…」
「キラキラ！その通りに見えますー！」

アズナも荷台から飛び降りて、上気した顔でリディに並ぶ。

「金髪碧眼で、御伽噺の王子様みたいですー！凄いカッコいいです！」
「……リディ」
「ま、概ねその通りだね」

確認を取るようなルイスの視線に、リディはあっさりと頷いた。

「なんていうかな――君、元の髪だと、怜悧な感じが強いんだよ。黒と蒼だからかな…冷たいってわけじゃないけど、大袈裟に言えば渋い。でも金髪になると、所謂キラキラ成分――言っちゃえば白馬の王子様的な優しさ甘さが見える」

リディの評価を、ぽかんとした顔でルイスは聞く。それをちらりと眺めやり、リディは肩を竦めて言った。

「まあ、街じゃ大変だろうね」

「……！！」

げっ、という表情を隠しもせずに出したルイスの肩を、ネーヴェが慰めるように尻尾で叩いた。

「まあ、何はともあれ大事な商品使わせちゃって悪かったね。安くないだろに」

「あっ、いえ！元より、お二人に助けていただかなければ全滅でしたし…私の方こそ、ごめんなさい」

深々と頭を下げるアズナの後ろでは、のんびりと馬が街道の草をはんでいる。そもそも――

「なんで、暴れだしたの？」

アズナは眉をハの字に開いてわかりません、と首を振った。

「こんなことは初めてですー。幾ら私がマヌケでも、一応薬師ですからこの子に異常があればすぐわかりますー。でも、本当にいきな

りでした」
「マヌケって自覚はあるんだ…」
リディは曖昧に頷き、鬱々としているルイスを仰いだ。
「まあいいや。ルイス、行こう。あとちょっとだし」
「…ああ、そうだな」
「あっ、あの本当にありがとうございました！」
再度頭を下げるアズナに、リディは苦笑して手を振る。
「気にしないで。大したことはしてないし」
「いえっ！こんなにカッコいい男のひとに二人も出会えただけでも、アズナは充分幸せでしたっ！」
大袈裟な――というか、それ以前に。
「男二人…？」
聞き間違ったかと思って聞き返したリディに、アズナは紅潮した笑顔を満面に浮かべて頷いた。
「はいっ！趣は違うけどとっちもすっごい美男子ですよねっ！」
ぶはっ、とルイスが笑い出した。さっきまでの鬱ぶりはなんだったのだと思うくらいの爆笑っぷりだった。ネーヴェもぷるぷると長い耳を震わせて、ルイスの髪の間に隠れる。アズナは戸惑い顔になる。
「え？ア、アズナなんか変なこと言いました！？」

「…ねえ」

リディが微妙としか言えない口調で言った。

「私――男じゃないんだけど」

「……。えええええええっ！！！！？？？」

――――――――――――――――――――――――――――――

その後彼らは街を入った所でアズナと別れ、今は通りを歩いている。

「…ま、それはそれで面白いんだけどね」

回想を終え、リディはそう言って軽く笑った。

短い黒髪に、猫のような鋭く、意思のはっきりした瞳。体型はスレンダーで、余分な脂肪は殆どない。元々女性にしては背が高いこともあり、今は少年にしか見えなかった。

「男に見えるなら、いつもは出来ないこと出来そうだし。花街とか行ってみようかなー」

「やめてくれ頼むから」

「ぴゃっ」

ルイスは即座に切った。ネーヴェも真面目な鳴き声で反対していた。本気で冗談ではない。

「ちぇ、つまんないの。まあ、現実問題そんな暇ないけど。…ああ君、狩人協会どこにあるかわかる？」

通りすがりの街の女の子を呼び止め、リディはにっこり笑って訊いた。女の子は顔を真っ赤に染め、どもりながら道を教えてくれた。

「ありがとう」

爽やかに礼を言ってリディはさっさと歩き出す。未だ顔を赤らめている少女に同情的な視線を送ってから、ルイスは呆れ顔で先を行くリディの背に行った。

「女誑かしてどうすんだよ」

「失礼だな、誑かしてなんかないよ。ただ面白いと思うだけ。いつもは君見てぽーっとしてから私を見てむっとする女の子達が、私見てもぽーっとしてるのがさ」

リディは酷く楽しそうで、ルイスとしてもなんとも言えず口を閉ざした。

途中何度か逆ナン（？）に遭いながらも、二人は無事狩人協会にたどり着いた――のだが。

「なに、店主留守？」

扉に貼り付けられた紙を見て、リディは首を傾げた。

「狩人協会の支部店長って、滅多に留守にしないのに。珍しいね」
「えー…武術大会中の為、留守…うわ、タイミング悪いな」
「ていうか武術大会って結局いつまで？」
「ええと、多分今が二日目だから…あと三日の筈だぜ。シルグレイ達も忙しいだろうな…ま、いいだろ別に」

同じような立場の身としてこういうイベント事に付随する忙しさを解らない筈がないが、ルイスは一言で片付けると陽の傾きを見てからリディを振り返った。

「とりあえず、飯でも食おうぜ。城いくのはそれからでもいいだろ」
「賛成。お腹空いた」
「ぴゃー」

しかし行った先の食事処で、二人は思わぬ話を聴くことになる。

第十話　安寧への撃鉄　（2）

第十話　安寧への撃鉄　（2）

狩人協会の側にある食事処は、狩人と思しき人間達で溢れかえっていた。リディは入った瞬間に顔をしかめる。

「うっさ…」

狩人の人口比率としては圧倒的に戦士職の男――つまり、むさ苦しい類の奴が多い。女性はそもそも少ないし、魔術士は大陸全体で見たって圧倒的に比率は少ない。

そんな人間達が集まっているのである――マナーも何もあったものではないし、一人一人の声が野太くて喧しい。

空いている席に座り、給仕に食事を頼む。いつも通りルイスは大量だったが、給仕も慣れたものだ。こんな位置で長年狩人を相手に商売しているなら、大食漢など珍しくもなんともないからだろう。

予め大量に用意されていたのか、すぐに運ばれてきた食事をさっさと食べ終え、ルイスは水、リディは甘い紅茶を飲んでいた時。不意に隣のテーブルから、自分達の名前が耳に飛び込んできた。

「しかし、マジなのかよ？『自由時間（フリータイム）』が壊滅したって」

ぶっ、とルイスが飲んでいた水を吹き出す。唖然としたリディの手からもカップが滑り落ち、机の上に転がった。しかしそんな一幕も騒がしさに紛れ、ルイスがげほごほと咽せるのを余所に、噂話は続く。

「マジらしいぜ。三か月近く前か？エーデルシアスのどっかの街で、吸血鬼騒ぎがあったらしいんだが、それの解決と同時にぱったりと足取りが掴めなくなったんだと」

「丸三カ月？一切何の音沙汰ナシ？」

「ああ。狩人協会は、半年何の連絡も無かったら死亡判断するらしいが…。“ヘキサ”にまで上りつめた奴らがねえ」

「土台二人なんて無茶だったんだよ」

「そーそー。どっかでしくじったところ回復も出来ない内に殺られちまったんだぜきっと」

「あーあ、早く空いたヘキサの席こっちに回ってこねーかなー」

「てめえらじゃ無理だろ」

「んだとコラ！」

「やるかテメエ！」

「……」

隣で巻き起こった喧嘩も気にならず、二人は愕然と眼を見交わした。…砂漠の上で交わした会話が蘇る。

「……まさか、本気で死亡の噂が流れていたとは」

「笑い事じゃなかった…」

隣では悲鳴や怒声が上がり、たまに物も飛んできたが、二人は無視した。

「…まあ、死亡判断は半年だっていうし…今日慌てなくても大丈夫

だろ」
「…だね。とりあえず城いこ城」
そして、店全体を巻き込み始めた喧嘩の間を縫って、店を出たのだった。

「殿下に面会？」
「ああ。ルイス・キリグと言えば解ってくださるだろう」
「……」
（嘘だろ…）

ルイスが王城の門衛と会話をしている横で、リディはぽかーんと城を見上げていた。

アーヴァリアンの王城は、ハイレインの街の中心部に浮かんでいる。それは比喩でもなんでもなく、ありのままの事実である。

黒を基調とした――恐らくは魔鉱岩を精練した素材を使っているのだろう――外壁に覆われた、尖塔の目立つ作り。オルディアンの王宮が、どちらかと言えば敷地面積が広く、扁平な作りなのに対し、ここは空へ空へと高みを目指したような形だ。

リディが立っているのは、唯一城と街とを繋ぐ大きな橋の上なのだが、遥か下の地上では、基盤の関係なのか、空に浮かぶ城ごと逆三角錐に切り取られた地面の跡に、澄んだ水が湛えられている。さながら小さな湖のようだ。

（緻密な固定型の風魔術陣を敷いて、尚且つ土魔術系で地盤を補強してるのか…正気で出来る業じゃないだろ、これ）

肩に乗るネーヴェも耳と尻尾をぺたんと下げてぽけらっとしているようで、ほとほとこの光景の非常識さを思い知らされる。

「リディ、行くぞ」

話が付いたらしく、こちらを振り向いたルイスにはなんの動揺もない。見慣れているのだろう。リディは一つ息を吸って気持ちを落ち着けると、城の中からやって来たらしい侍従について、アーヴァリアンの王城に足を踏み入れた。

「こちらでお待ちくださいとのことです」

通されたのは、応接室の一つのようだった。華美なものは控えら

れ、どちらかと言うと実用性重視のシックな調度品が設えられた、デザイナーの品の良さを浮かばせる部屋だ。

「ルイス、これなに？」

リディは机の上に置いてあった、透明な水が張られた円盤を指差して訊ねた。

「ああ、それはな」

ルイスは机の前の椅子に腰掛けると、ふっと円盤の上に手を翳した。

すると、触れたわけでもないのに、円盤の水が揺らいで波紋を作る。

「え…」

リディは驚いて目を見開いた。揺らぎが収まったあとの水面に、明らかにこの部屋のものではない景色が映っているではないか！

「これは『水鏡』って言ってな」

ルイスは楽しそうに言った。

「この水盆の底には魔術陣が刻まれてる。詳しくは良く知らないが、この城の真下にある湖から水精霊を呼び出すものらしい。呼び出された水精霊は、それと同じものが描かれてる水場を行き来できて、そっちの風景をここに映してくれる。この魔術陣は城の、風呂場と手洗場以外の水場ならどこでも描いてあるから、つまり、水魔術使いでなくとも、この城の中ならほぼ何処でも覗けるってわけさ」

「へえ…」

原理的にはラグの開発した通信具に似ているが、誰と契約しているわけでもない水精霊を、魔術師でもない人間まで使えるとなると、それより格上と言えるかもしれない。発表されていないだけで、この国で既に通信具が開発されていたとしてもおかしくないな、とリディは思った。

「で、今はどこ見てるわけ？」

「それはだな…あ、こっち来るな」

ルイスが水盆から顔を上げるのと、部屋の扉が勢いよく開くのがほぼ同時だった。

「ルイス！…て、は！？」

部屋に飛び込んできたシルグレイ――こと、アーヴァリアン王弟――は、見慣れない色彩に絶句したようだ。

凡そ似つかわしくない騒々しい登場の仕方をした旧友に、ルイスは苦笑して手を上げた。

「よう、シルグレイ」

「お邪魔してまーす」

リディの緊張感の全くない挨拶も受け、我に返ったシルグレイはさっと辺りを見回してから扉を閉め、微妙な面持ちでルイスとリディを振り返った。

「…久しぶりだな、ルイス…それに、リディエーリア殿も。という

か、その髪の色は…」
「リディでいいですよ、シルグレイ殿下」
リディが茶化すように言う傍ら、ルイスは事情説明を簡単に済ませる。聞き終えたシルグレイは、苦笑するしかないといった風に顔を歪めた。
「一瞬誰かと思ったぞ。リディ…は、また髪を切ったんだな」
遠慮がちに呼び捨てたシルグレイを気にすることなく、リディはにやりと笑う。
「男に見える？」
「…遺憾ながら」
やった、とネーヴェに微笑むリディを微妙な眼差しで見遣ってから、シルグレイはルイスを探るように見つめた。
「で？二度目の出奔をしたらしいお前が、なぜこんなところにいるんだ？」
前にも何度か誰かに同じような台詞で訊かれたな、となんとはなしに思いながら、ルイスは真面目な表情になってシルグレイを見返す。
「解ってるんだろう？俺達がここを訪れたわけぐらい」
無駄な詮索は止めようぜ、と言ったルイスをじっと見つめてから、そうだな、とシルグレイはルイスの向かいに腰を下ろした。

「先に言っておくが、イグナディアとの国境に結界を張ったのは私達ではない」

一切の前置きを省かれ切り出された言葉に、リディもすっと目を細め、ルイスの横に歩みよって座った。

「つまり、向こう側から張られてるってことか？」

「ああ。それも恐らくは人の魔術ではない。魔族――十中八九、お前の国の式典で現れたエカテリーナとかいうやつの仕業だろう」

「参考までに訊くけど、なんで人の魔術じゃないってわかるの？」

リディの疑問に、シルグレイは頷く。

「魔力には波長があるだろう？それは勿論千差万別だが、なんというかな…大きな範囲で見ると、人と人同士には共通パターンとでもいうべき形がある。だがそれとは明らかに形が異なっているからだ」

「成程。解りやすい説明ありがとう」

「礼には及ばん。…ともあれ、あの結界のせいで、こちらからの出入りはおろか、この三カ月というもの、イグナディア側かこちらに来た者は一人としていない」

「…一人も？じゃあ、中の様子とかは…」

「悪いが、全くわからん。時期的には、エーデルシアスから飛んで帰っていったロドニス…イグナディア王太子が国境を越えたあたりからだ。その後一切イグナディアの内部とは連絡が取れない」

予測していた中で最も深刻な事態に、ルイスとリディは顔を見合わせ沈黙した。シルグレイが何かを知っている可能性は五分だと思ってはいたが…見事に外れた。

「強行突破してみようとかは考えなかったの？」

「やった。…だが、多人数で無理矢理こじ開けようとした結果――」

全員、結界からの反発に遭って死んだ。

そう、シルグレイは苦い顔で吐き捨てた。

「――……」

何も言えずリディが黙り込み、ルイスも前髪をぐしゃりと握り潰した。

「じゃあ、どうやって入るってんだ…？アーヴァリアンの魔術士が束になっても敵わなかった結界を俺達が破れるとは…」

言いかけて、はっとルイスはリディを見た。リディも強張った顔つきで頷く。

「出来るかもしれない。結界解読なら――」

「駄目だ」

しかし余りにもあっさりとシルグレイが否定し、リディは目を剥く。なんで知ってる、とばかりの彼女の視線に、シルグレイは肩を竦めて答えた。

「私としては貴女があの技術を知っていたことの方が驚きだが。複数の属性を組み合わせて一時的に結界を無効化するものだろう？結界解読は、我が国の研究班が長年かけて秘密裏に編み出したのだが」

「…その辺は企業秘密で…」

リディのぼそぼそとした誤魔化しに、ルイスが助け船を出した。

「なんで駄目なんだ?試したのか」
「…ああ。宮廷魔術士長が直々にな。だがやはり弾かれたと言っていた」
リディの返答に、当然シルグレイは納得が行っていなかったが、ルイスの手前突っ込むのはやめておいて、素直に疑問に応じた。
ルイスは眉を寄せ、思案を巡らせる。
「…八方塞がりだな。一体どうすれば…」
「そうでもありませんよ」
澄んだ声と共に、唐突に扉が開かれた。そこに立った人物を見た瞬間、シルグレイは席を立って直立し、ルイスは些か行き過ぎ気味に背筋を正したのでリディは目を点にする。
誰、と聞きかけ、しかしその顔が自分の乏しい対人記憶能力の内にすら刻まれていることに気付いて慌てて立ち上がって頭を下げた。
「まあ、そんな改まらなくていいですよ」
長い銀髪に、すっと美しく背筋の伸びた、女性にしては高い背。どこもかしこも余分な肉など存在しないように細いのに、女性らしいまろやかさは確りと主張する体躯。雪のように白い肌に、高い鼻梁、その両脇に左右対称に収まった最上級の紫水晶(アメジスト)を思わせる柔らかな双鉾は、同時に理知の光を多分に含んでいる。儚さを訴えているのに、弱さは感じさせない――そんな立ち姿。
「お初にお目にかかります――クリスティアーナ陛下。ご尊顔を拝せますこと、誠に光栄に存じます」

頭を下げたまま、リディは久方ぶりの拝謁の文句を述べる。女性――アーヴァリアン現女王、クリスティアーナ・リィ・ヴィルニア・アーヴァリアンはにこりと笑って優雅にお辞儀を返した。

「こちらこそ。初めまして、リディエーリア・エルクイーン。噂はかねがね」

「…良い噂ではないでしょう」

リディは少しだけ笑ってみせた。

「あら、噂というものは人を判断する材料の、そのまた原料にしかならないものですよ。――失礼しますね」

クリスティアーナはさっさと先程までシルグレイが座っていた席に腰を下ろしてしまった。それと同時に、扉の脇に控えていた侍女が、てきぱきと机の上に紅茶や茶菓子を用意していく。立ったままのシルグレイに、クリスティアーナは声の調子を変えないまま言った。

「お客様がいらっしゃったなら、お茶ぐらいお出ししなさい。幾ら機密を話すからと言って、順番というものがあるでしょう？」

「――はい。至らずすまなかった、ルイス、リディ」

「いや。気にするな」

「うん、別に…ていうか」

なんで二人してそんな硬いの、とリディは言いかけてやめた。タイミング的にクリスティアーナが関係していることは間違いないし、なら後で訊いた方が無難だ。

（しかも喋るの私任せ？）

ごほん、と咳払いし、口を閉ざす男二人に呆れた視線を送ってから、リディは改めてクリスティアーナに正面から向き合った。

「僭越ですが…『そうでもない』と仰る理由は、なんでしょう？」

クリスティアーナは再びにこりと笑うと、一口紅茶を飲んだ。同時に扉が閉まる微かな音で、準備をしていた侍女達が出ていったことに今更ながらリディは気付く。…会話に気を持ってかれていたとはいえ、自分に気取られないとは凄まじいまでの職業意識だ。

「…エーデルシアスでのことは、おおよそシルグレイから聞きました」

かちゃり、とカップをソーサーに置いてクリスティアーナは話し出した。

「かの魔族はあなた方に言ったそうですね？『イグナディアで待っている』と」

「…はい」

「ならば、その魔族はあなた方を誘き寄せる為にあの結界を仕掛けているのでしょう」

静かな部屋に、クリスティアーナの穏やかな声だけが流れる。

「ロドニス王太子が取って返したことから考えても、かの魔族は、イグナディアの中に何らかの災厄を喚んでいる。それらは全て、あなた方に帰結するのでしょう」

「…私達のせい、ということですか」

「そうではありません。原因の一つとなっていることは否定出来ませんが…。今かの国を襲っている出来事など、これからの序章に過ぎない」

最後の言葉は独り言のように小さく――実際独り言だったのだろう――リディが聞き返す前に、クリスティアーナは話を戻した。

「目的は解りませんが…あなた方が狙いである以上、恐らくあの結界はあなた方以外が通れないようになっているのではないでしょうか。理由は…私達の介入（アーヴァリアン）を阻む為、かもしれません」
「じゃあ、私達は入れるってことですか？」
「あくまで私の予測では、ですが」
「なら迷ってる必要はないですね。ルイス、早いとこ用意して出発しよう」

勢い込んで立ち上がったリディを、しかしクリスティアーナは止めた。

「お待ちなさい。――あなた方二人だけを行かせることは出来ません」

リディと、同じく立ち上がろうとしていたルイスは揃って怪訝な顔でクリスティアーナを振り向いた。のち、ルイスの表情が固まる。というか、恐怖でひきつった。

「どういう意味ですか？」
「私としては、どういうつもりですか？とお訊きしたいですね」

全く先程と変わらぬ口調の中に、しかし言い知れぬ圧力を感じて、リディは連ねる言葉を無くす。

「事情は伺っていますし、理解もしています。けれどあなた方は、紛れもなく一国の王位を左右する資格を持っている。解りやすく言えば――存在するだけで責任がある。そんな立場にあるくせに、何が起こるかもしれぬ、奈落へと通じているかもしれない地に、たった二人で乗り込もうなどと――何を考えているのですか」

あくまで穏やかな声音。だが紛れもない国の頂点に立つ者としての冷ややかな台詞は、リディとルイスに酷く刺さった。

リディはつっと背筋に冷や汗が伝うのを感じて唇を噛んだ。――怖い。今わかった。彼女の笑みは、為政者としての仮面。優しく穏やかな微笑みの裏に、厳しさと冷徹な心を隠しているのだ。

（ルイスやシルグレイが怯えてるわけは、これか）

「…すみません、クリスティアーナ。でも行かなくてはならないんです」

だが、少しの沈黙を置いて初めて、ルイスがクリスティアーナに向かって言った。

彼としては精一杯の勇気を振り絞って、クリスティアーナの深い紫の瞳を見据える。

「俺もリディも、自分の立場を忘れたわけじゃない。でもあの魔族が俺達を呼び――俺達に何らかの運命が課せられているのなら、俺達は今更歩みを止める訳には行かないんです」

ルイスはちらりとリディの肩に乗るネーヴェを見やった。夜明け色の瞳。それを持っていた、今はもういない竜のことを、決して忘れはしない。

「死ぬつもりはありません。だから行かせてください」

クリスティアーナはじっとルイスを見つめた。目を逸らさず相対し続ける青年に、彼女は束の間昔を思い出す。

弟を真似して自分の顔色を伺っていた幼い少年。それが面白くて少々過度にいじりすぎたせいか、いつの間にか本当に怖がられるようになっていた。笑顔で逆さ吊りにしまくったのがいけなかったのかもしれない。

それでも今彼は、自分に面と向かって反論している。

（…成長したのですね）

ひとつ、息をつく。反射にびくついた二人――ついでに愚弟――に向かって、クリスティアーナは、久しぶりに仮面ではない微笑を浮かべた。

「私は、行かせない、と言っているわけではありませんよ？」

「――へ？」

思わず、といった調子の音がリディの喉から零れ落ちた。心情的には他の二人も同じらしく、ぽかんとクリスティアーナを見ている。

「二人は駄目、と言っただけです」

晴れやかに笑うクリスティアーナを一頻り見てから、ルイスとリディは互いの顔を見交わし――脱力した。

「ということは――誰か実力者をつけるということですか？なら―

―」

ようやくシルグレイが声を発した。しかしその言葉の先を読んで、クリスティアーナはぴしゃりと言う。

「貴方は駄目ですよ、シルグレイ。貴方は彼らより弱いてすし、万が一貴方に何かあった場合、私か独身を貫けなくなりますから」

「……」

シルグレイは沈黙した。

今現在、女王クリスティアーナには王配がおらず、当然子もいない。するとシルグレイは他と一線を画した第一王位継承権を持つわけで、もし彼が死んだ場合、彼より下に位置する有象無象の継承権持ちの間で血みどろの争いが起きるだろうことは想像に難くない。

「なら誰を――」

「それはあなた方自身に選んで頂きます」

首を傾げたルイスにクリスティアーナは告げた。

「？どういう…」

「あなた方は、狩人という肩書きで今歩んでいらっしゃるのでしょう。ならば、その立場を活用なさい」

リディは怪訝な顔をしたままだったが、その時点でルイスは嫌な考えに辿り着いた。顔をひきつらせて問いを口にする。

「クリスティアーナ、まさか…」

「相変わらず察しがいいですね、ルイス。――武術大会は明後日か

ら団体戦です。その団体戦に出場し、自分の眼で自分達と同じかそれより強い者を見つけ、同行を頼みなさいな」

短くない沈黙が落ちた。のち、割かし早めに自分を取り戻したリディが、慎重に訊ねる。

「つまり…私達を負かした相手を応援に寄越すように、狩人協会にかけあえ、と？お言葉ですが、私達は『十強』の末席に名を連ねるとはいえ所詮その程度です。そのような願いが聞き入れられるとは――」

「ならば、アーヴァリアン王家からの依頼ということに致します。きちんと謝礼も弾みますから、問題はないはずです」

「あ、それなら――ではなくて！ていうか、アーヴァリアン王家がそれをする理由は…」

「リディさんは、私達が遥か昔には祖先を同じくしているということはご存知ですか？」

「え…あ、はい」

唐突に切り替えられた話に、リディは目を点にしながらも頷く。クリスティアーナはふっと目を伏せ、言った。

「ならば――血縁を心配するならば、理由は要らないでしょう」

「……」

リディは微かに息を吸い込んで、クリスティアーナを凝視した。

（…わかった、気がする。この人の本質）

この人は――クリスティアーナは、身内への情がとても厚いのだろう。その厳しさは、身内への心配の裏返し。彼女の力は、即ち身

内を守ることに向けられている。
しかし、クリスティアーナは内心で続けていた。
（それにあの国は――一度壊れなければ、歪みは直りはしない）
ルイスがはあっと息を吐いた。全く、この人には敵わない。
「…わかりましたよ、クリスティアーナ。貴女には申し訳ないですが、狩人協会にはそのように依頼をお願いします。ですが確か、団体戦は三対三か、五対五だったはずです。どちらにせよ人数が足りません」
クリスティアーナはにっこりと笑った。
「それについては考えがあります」

第十話　安寧への撃鉄　（2）（後書き）

クリスティアーナはS。
当初武術大会はスルー予定でしたが、新キャラを絡める方法が思いつかず。この章は長そうです。

第十話　安寧への撃鉄　（3）

第十話　安寧への撃鉄　（3）

「…で、『考え』って…これ？」

数刻後、アーヴァリアン王城の鍛練場に訪れたリディは、視界に映ったそれに胡乱気な目を向けた。ルイスは頭を掻いて異を唱える。

「…これ、はないだろリディ。王家ゆかりの人間に。悪いな、こいつ口悪いんだ」

「……いいえ」

二人の前に立った少年――クリスティアーナ曰くの『考え』は、無表情にそう答えた。

少年の名は、スヴェン・ロウ・アーヴァリアン・アイヒホルン。クリスティアーナ・シルグレイ姉弟の従弟にあたる。

（で、この年でこの国トップレベルの実力者――か）

クリスティアーナ曰わく。

この無表情な少年は幼い頃から、その突出した魔力と武術の才で、

所謂神童と讃えられてきた。事実その才はぐんぐん伸び、今となっては武術で敵う者は騎士団幹部並み、魔術では宮廷魔術士の中でも上位のものしかいないらしい。

また彼はシルグレイ達の従弟と言っても先先代の王――つまりシルグレイの祖父が持っていた数多くの側室のうち、末席に位置していた女性の孫であり、王族としての地位は酷く低い。そんな彼が天才であることが他の王位継承権持ちには気に入らず、数え切れない程の嫌がらせを受けてきたらしい。

そしてその彼を見込んだ女王とその王弟が、彼を手ずから可愛がり始めたのもそれを助長させる結果となった。

シルグレイ達が幾ら目を光らせようと、それをすり抜ける嫌がらせなど貴族の十八番である。スヴェンは虐めを受け続け、どんどん性格は内向きになっていった。

そうして今、十四の年を数える頃には、彼は無口・無表情・無愛想のマイナス方向に三拍子揃った少年になってしまった、というわけである。

「今更だけど、君はいいわけ？シルグレイのお墨付きとはいえ、所詮は得体の知れない狩人なんかと一緒に武術大会に出ることになっちゃって」

「…別に」

シルグレイより色素の薄い銀髪は前髪が長く目にかかり、スヴェンの表情をよりいっそう解りづらく、ハッキリ言えば暗くしている。

だがその声音から、どうでもいい、寧ろ面倒くさい――といった感情を読み取って、リディは軽く眉を上げルイスを仰ぐ。その視線を受け、ルイスは軽く周囲を見渡した。

鍛練場に騎士やら兵士やらがいるのは当たり前だが、そこここから視線が集中しているのは気のせいではない。それに、明らかに戦闘職ではない人間達が、物陰から様子を伺っているのも簡単にわか

った。
だがスヴェンからは緊張も苛立ちも感じない。在るのは空虚な諦感だ。

（同年代で自分の相手を出来る者がもういないということへのつまらなさ、妬みに対する気疲れと、下らない権力欲へのとうに限界を通り越した嫌気から――ってとこか。まあ、珍しい例ではないな）

大陸の長い歴史の中で、スヴェンのような子供は決して少なくない。その中には騎士団長や宰相といった国の実力者になった者もいれば――歴史の闇に消された者もいる。…クリスティアーナ達は、この子供を後者にしたくないのだろう。
何より少しだけ、この子供は昔の自分に似ている。

「スヴェン、だったな」

思索を終え、ルイスはスヴェンに話しかけた。色味のない菫の瞳がルイスを見上げてくる。彼はにやりと笑って言った。

「一つ、賭けをしよう」
「……？」

スヴェンは眉を寄せる。リディは取りあえず話の行く先を伺うことにしたが、すぐに出てきた自分の名前に片眉を上げた。

「今からこいつ――リディと戦え。もしお前が勝ったら、武術大会に出る必要はない。だがお前が負けたら、武術大会に出るのは勿論、しばらく俺達と一緒に行動してもらう。武術大会だけじゃない――日常生活もだ」
「…それをすることに、何の意味が？」

スヴェンは眉を寄せたまま訊ねた。対照的に、リディは成程ね―と口角を上げる。まあ確かに、それか一番手っ取り早い。

たが、ルイスはくくっと笑った。

「お前、自分がこんなちんくしゃに負けるわけないって思ってるだろ」

「ちんく…」

唖然とリディが絶句し、スヴェンは何も言わずにルイスを見つめ返す。

「ま、物は試しでやってみな。ちなみにそいつ女だけど、男だと思ってやっても足りねえからな」

軽く手を振ってその場から数歩下がったルイスの耳に、「嘘!?」「あれ女?」「どう見ても美少年じゃない!」という囁きが届く。爆笑したいのを堪え、ルイスは腕を組んで、向かい合う二人を見守ることにした。

「…女性、なんですか?」

不審そうに自分を見上げてくるスヴェンに、リディは肩を竦めてみせた。まだ成長期前なのかスヴェンの背はリディより小さい。

「詐欺だとか間違ってるとかよく言われるけどね。ま、一応。でも騎士道精神を私相手に出すのは馬鹿げてる。相手は選びなよ」

「……」

馬鹿げた、と彼女はいうが、普通のまともな男なら出して当然だ。

「じゃあさくっとやろうか。どこからでもどうぞ？」

軽い笑みを浮かべ、リディはスヴェンから少し距離を取ってから、双剣を抜刀する。スヴェンは一瞬間を置き、それから腰の剣を抜いた。

磨きあげられた銀色の刃。まともに当たればどちらもただではすまない、そんな刃を互いに構えあい、出方を窺う。張り詰めた空気が辺り一帯を満たし、いつの間にか他の騎士達が響かせていた剣戟音も鳴り止み、痛いほどの静けさが下りていた。

スヴェンは眉をひそめ、僅かに剣先を右に向けた。流石に、向き合えばわかる。…この女、半端ではない。だが、負ける気もない。

悠然と、しかし隙無く立ち続ける姿を睨み、スヴェンは唐突に地を蹴った。鍛え上げた脚力で瞬間的にリディの間合いに踏み込む。この彼の初速についてこられる者は、シルグレイと騎士団団長・副団長を除けば存在しない。

その懐を切り上げるように手首を返し――だが、固い感触にあっさり阻まれ瞠目した。

「ふうん。ま、アルよりは上、って感じかな」

峰とはいえ、明らかに必殺の勢いを伴った斬撃をいともたやすく止めてみせたリディは、小首を傾げるようにして呟いた。

「……っ」

「どうしたの？まさかこれで終わり？」

揶揄するように唇を吊り上げた少女に思わずかっとなり、スヴェンは剣を弾くと共に、猛烈な勢いでもって打ちかかった。

「そうこなくっちゃねー」

対するリディは浮かべた笑みを消すこと無く、淡々とスヴェンの攻撃を捌いていく。はたから見れば防戦一方に思えるかもしれないが、当人達にしてみれば、リディが自分から攻撃には回らず、スヴェンの力を見ているのだということは火を見るより明らかだった。

「…のっ」

少女の右手を強引に外に逸らし、その間隙をついて鋭い突きを繰り出すも、それはまた、左手の剣の平で受け止められる。こちらは両手向こうは片手、しかも態勢の有利もあるにも関わらず、その刃はびくともしない。スヴェンの背に汗が流れた。試合前の、青年の言葉を思い出す。

『男だと思ってやっても足りねえからな』

――その通りだ。この女、並の男より余程力が強い。そして、まだ成長期を終えていない自分よりも。

フェイントをかけても、瞬時に反応される。ステップも追い付けない。

騎士団長か、それ以上の実力者。それを肌で感じて、スヴェンは知らない内に表情を浮かべていた。好戦的な、弾んだ笑みを。

それを視界に収めて、リディは目元を緩める。さて、と踵に力を込めた。

「…いい顔、出来るじゃん。でも」

甘いね。

その言葉と同時に、初めてリディが返す刃で突きを放った。唐突な攻勢にスヴェンは驚くも、そこは流石と言うべきか、すぐに態勢を立て直して迫る剣先を弾く。だが、リディの持ち味はその手数だ。

「……っ！？」

「反応速度も悪くない。でも君、自分より速い相手と試合したことないだろ？」

左右の剣から矢継ぎ早に繰り出される斬撃。右手の剣を弾いたと思えば、左手の剣が下段から蛇のように突き上げてくる。反撃などする暇もない。防御するので精一杯だ。

「あと一番大きいのは、実践経験のなさ」

合わさった刃が唐突に引かれる。たたらを踏みそうになって慌てて堪えたスヴェンの頭上に、白銀の刃が翳される。それをスヴェンは前に転がることで回避しようとした、が。

「――っぐぅ！？」

「だからこういう、変則的な攻撃に対応できない」

回避しようと丸めた頭が、突き出されていたリディの膝と激突した。顔面に激しい衝撃を受け、星が散る。スヴェンが反動で後ろにひっくり返り、仰向けに地面に倒れ込んだところで、彼の首の横に細いサーベルが突き立った。

弾んだ呼吸で揺れる視界に、サーベルの柄を握った黒い短髪の少年――ではなかった、少女が映る。彼女はにっこりと笑った。

「はい、おしまい。精進しなよ」

わっ、とざわめきが飛び交う。その中でリディは何を気にした風もなく剣を鞘に収め、スヴェンに手を貸して立たせた。

「お疲れ。なかなかやるな、スヴェン」

近づいてきたルイスが言った。リディも頷いて、

「私が十四の頃より強いよ。ていうか、旅に出る前だったら下手すると負けてたかもしれないね」

笑って評価する。それからふと訊いた。

「スヴェン、魔術属性、なに？」

「…、風と土、です」

息を整え、スヴェンは答えた。今更だが、リディに大した息の乱れはない。体力からして違うのか。

「武術大会って、魔術使用可？」

「団体戦は確か良かったはずだぜ。だよなスヴェン？」

「…大丈夫だと思います。役割分けてエントリーしてるチーム、多いし」

「役割ね。ま、二日あるし適当に考えるか」

そう呟きを落として、リディは急に振り向いた。ルイスは元よりその方向を向いている。

立っていたのは三十を幾らか越したくらいの年齢と思われる男。

短い茶色の髪に精悍な顔つきをしている。服装は簡易で、いかにも鍛練着といった風だが、その腰から下がる長剣の柄に豪華にあしらわれた紋章は、彼が騎士団長であることを示していた。
スヴェンがその名を呼ぶ。

「グナイゼナウ」
「お見それしましたよ、スヴェン様。少し見ない間にまた強くなられましたな」
「…負けたけど」
「それはまた違う話です」

男はスヴェンの頭をわしわしと撫でると、様子を見守っていたリディとルイスの方に向き直った。そのうち、ルイスを認めた暗緑色の眼がふと和らぐ。

「…お久しぶりですな、『ルイス様』。いやはや、これは陛下に言われなければ気づきそうにない。その髪はどうなさったのか」
「ま、色々あってちょっとな。それにしても随分と昇進したな、グナイゼナウ『団長』？」

含み笑いを浮かべ合う二人に、リディが「あれ、知り合い？」と目を丸めた。それを受け、男は右手を左胸に当て、軽く彼女に向かって会釈する。

「ディートリヒ・エメリッヒ・グナイゼナウと申す者です。先程の剣技、お見事でした」
「リディ・レリア。お褒めに預かり光栄だよ」
「グナイゼナウとは、魔術の修行でここに来てた時、剣でよく手合わせしてたんだよ」

軽い説明を添えたルイスに、リディは揶揄するように首を傾げる。

「じゃ、『君』を知ってるわけだ」

微妙に君、の部分を強調したリディに、ルイスは少し渋い顔になった。

「…そういうことになるな」

「ご安心を。他言無用とのことですし…元より、この髪色では誰も気付きますまい」

「成程。ならこの変色も結果オーライだったね。アズナに感謝しなくちゃ」

笑い混じりの会話をする三人に、スヴェンはついていけず頭を捻ったが、口を挟もうとは思わなかった。元より好奇心を余り持ち合わせているタイプではない。

だがルイスはその状況に気付いて、早々と話を切り上げた。積もる話は個人的にでもできる。

「まあともかく。スヴェン、賭けは俺の勝ちだ。約束、覚えてるな？」

「……はい」

正直、乗ると言った覚えはないが、リディと試合をしてしまった時点で了承したも同然だったな、とスヴェンはあっさり諦める。そしてそれだけでなく、スヴェンは自らも認識していないどこかで、わくわくした気持ちを覚えていた。この二人と一緒にいれば、失くした何かを、知らない何かを得られるような気がして。

ルイスとリディは一瞬互いの顔を見交わすと、高らかに笑ってスヴェンの両隣に回りその肩に腕を回した。

「！？」

びっくりして固まるスヴェンを他所に、ルイスが景気よく拳を上げる。

「そんじゃ早速夕飯でもに食いに行くとするか！」
「賛成ー。て言ってもルイス、君殆ど動いてないよね」
「いいだろ、減ったもんは減ったんだ。さあスヴェン、行くぞ」
「！？ちょっ…」
「待ったなし。グナイゼナウ、後の諸々のフォローは頼む」
「承りました」

鍛練場中のこれでもかという視線を全く気にせず、寧ろスヴェンに刺さろうとするそれを端から弾き返して去っていく三人組に、グナイゼナウは笑みを隠しきれなかった。

グナイゼナウが半ば年の離れた弟のように感じているスヴェン。彼が周囲に心を閉ざしていくのを歯痒く思っていたのはクリスティアーナ達だけではない。

「頼みます、ルイシアス殿下、リディ殿」

他の誰にも聞かれないようにひっそりと呟き、グナイゼナウは未だ散らぬ群衆を散らすべく、声を張り上げた。

第十話　安寧への撃鉄　（3）（後書き）

話が進まない…だからこの章は長いのか…すみません…

第十話　安寧への撃鉄　（4）（前書き）

長いです。

第十話　安寧への撃鉄　（４）

第十話　安寧への撃鉄　（４）

翌日、ハイレイン市内。武術大会開催中の為、人通りはいつもほど多くない大通りをゆく三人（十一匹）は、心なしかげっそりした顔をしていた。

「…良かったのかなほんとにこれ。額半端じゃないよ。普通の家が五年は暮らせるよ」

「ぽんと渡す額じゃねえだろ。スヴェン、あいつらあんなに金銭感覚おかしいのかいつも」

「…ぴゃ」

「…いえ、財政事業は結構容赦無く無駄を切ってます」

昨日の夜は、街の、シルグレイオススメの食事処で夕飯を取ったあと、城に戻って武術大会での役割やコンビネーションなどの確認、打ち合わせを行った。スヴェンは呑み込みがよく、昨日でおおよそのチーム戦というものを理解したらしかった。

そして今日、やっぱり狩人協会が開いていないので、仕方なく彼らはシルグレイにお金を貸してくれるように頼んだ。当初目を点にしていたシルグレイは、話を聞き終えるなりため息をついて、侍従に託けて持ってこさせた袋を三人に投げ渡し、貸すも何もくれてやる、と言ったのだ。その袋は重く、嫌な予感がして開けてみれば、案の定金貨がたくさん詰まっていた。明らかに言った額より多いそ

れに目を剥いて、受け取れないと言い張れば、

『今回のことのお前達への依頼料だ。装備を替え直すならそれくらいは要る。とっとと行け、日が暮れるぞ』

とにべもなく一蹴され、今に至る。

「…まあ、今回はしっかり装備万端にしていった方がいいとは思うから、有難いけど」

これだけあれば最高品質のものが揃えられるだろう。肌着なども北国のものに替えた方がどうも良さそうだし、なんだかんだ言ってシルグレイの見積もりは高すぎないと言えるかもしれない。

「じゃあ裏道案内は頼んだよ、ルイス」

「任せとけ」

リディがルイスの肩を叩き、ルイスがにやりと頷く。スヴェンが裏道…？と首を傾げれば、ルイスが簡単な説明をくれた。

「表通りには所謂正規の店が多い。外れもないが大当たりも少ないし、あったとしても馬鹿高い。だが裏通りの…まあ、お前が行ったことのないような薄暗い店には、外れは多いが大当たりもあるんだ。表で買うより安く、な。特にこの国は魔術付加の装備が多いから、

その傾向は強い」
「魔術付加の装備って、ホント当たり外れあるからねー」

軽く交わされるその内容に、スヴェンは目を白黒させた。裏通りとか…間違っても安全ではない。子供一人で入るような場所ではなく、もちろんスヴェンも生まれてこのかた避けている。
するとそれを読み取ったかのように、リディが言った。

「大丈夫、私とルイスがいれば危険なんて無いも同然だから。こう見えて私は目も利くんだよ」
「こいつの目は信じていいぞ。俺もこいつと旅始めてから裏道使い始めたけど、未だハズレ引いたことはない。…けどお前なんで目利きなんて芸当持ってんだ?」
「ヘンド…いや、我が愛すべき幼馴染みのお陰でね。鍛えられたから」

ルイスは得心が言ったと手を打った。

「ああ、成程…あの方直伝か…」
「というわけでスヴェン行くよ!今まで君がしたことないような装備揃えてあげる」
「え、俺のも…!?」

スヴェンは再び驚いた。これはあくまで二人の買い物であり、自分はただの付き添いだと思っていたのだ。

「馬鹿、何言ってんの。身分はどうあれ君は今私達のパーティの一員なんだから当然だろ。ていうか、どうせ君、騎士団服か平民服か儀礼服しか持ってないんだろ?そんなもんで武術大会出る気?無理無理」

「しっかり狩人風にしてやるさ。クリスティアーナが喜ぶぜ」
「え、ちょっ…わ、っ…」
反論する間を許さず、スヴェンは満面の笑みを浮かべた狩人二人に引きずられ、二人が言うところの『裏通り』に足を踏み込まされたのであった。

「ふーっ、よく買った買った！思ってたより早く済んだね」
「でもその割にかなりの品質で揃えられたみたいだな。スヴェン、平気か？」
「……平気」
そんな言葉を発しながら、沢山の荷物を抱えた三人が街の表通りに再び戻ってきたのは、太陽が中天を過ぎた頃だった。朝よりは多少活気のある大通りに出ながら、リディは興味深げに元来た道を振り返る。
「…にしても、ホントに面白い街だな」
ルイスがこの街について軽くリディに語ったものは、なにひとつ嘘で無かった。裏通りを行きすがら、浮いている家や橋、乗った瞬

間人を何処かへ吹っ飛ばす妙な仕掛け、動き回る噴水、などなど。さながら妖精の国でも迷い込んだ気になった。

「ルイス、お金どれくらい残ってる？」

「まあ、あと必要な食料揃えて三日暮らせば終わりってとこだな。さて、これからどうするか…」

ルイスはちらりと周りを見回した。人通りから行って、恐らくまだ――。

「武術大会、見に行ってみる？今、個人戦の最後あたりだろ」

ルイスの提案を先読みし、リディが言った。ルイスは苦笑し、スヴェンは目を輝かす。

「そうだな。三日目の午ってことは、もう決勝だろ。参加申し込みもしなきゃならないし…行ってみるか。スヴェン、いいか？」

「はい。行きたい」

常に無く生き生きした答えに年長二人は顔を見合わせて笑い、そうと決まればとばかりにダッシュで城に戻って荷物とついでに剣も置くと、東地区の闘技施設へと向かったのだった。

「うっわあー…こんなに人集まるもんなんだ、武術大会って」

向かった先の、ハイレインの東地区にある巨大闘技施設。普段東地区は人が少なく、あまり活気があるとはいえない場所なのだが、今はそれが嘘のように人でごった返していた。

「個人戦に出る人間のがかなり多いからな。今までの二日で負けたやつとか野次馬とか、まあ武術に携わる人間が結集してるといっても過言じゃないだろ」

「両方出る人もいるの？」

「団体戦を掛け持ちしてる奴はそこそこいるはずだぜ。なあ、スヴェン？」

「…うん。でもそこまで数は多くない、らしい。コンディションとか、そういうので。貴族もいるし」

この大会は貴族の、腕に覚えのある若年層にとってはかっこうの舞台でもある。

その理由のひとつに、殆ど大怪我をしないシステムが出来ているというのがある。試合前に出場者には個人単位で簡易な結界が張られた上、常時アーヴァリアンの優秀な魔術師達が、万一の時止めるために配置についている。ただしこれは予選までの話だ。

個人戦にしても団体戦にしても、大会は予選の先に本選が待っている。といっても本選に進めるのは四人、もしくは四組だけで、例年大概がトップクラスの狩人であることが多い。そしてこの大会、『十強』の参加も認められていることから、貴族の子弟は大抵予選までで脱落する。

そして本選に出場出来る腕前の者は、皆限度というのをわきまえており、殺し殺されまで及ばさない。また、一度礼を失した人間がそういったことに及ぼうとした時には時のアーヴァリアン王が問答

無用で場外から手を下したという。それ以来、愚かな行動を起こした者は一人もいない。

もうひとつの理由としては、やはり王族主催の大会であり、予選からですら国王が見物しているというのがある。つまり実力を王の前で示せば、名誉ある騎士団に取り立てて貰えるかもしれない、という魂胆があるわけだ。

そうこうする内に一行は闘技施設に着いた。ただ闘技場があるだけでなく、円形のそれを囲うように建物が建てられ、入ってみれば中には受付だけではなく、食事処やらカジノやら煩雑な店群やらがあり、さらには金を払えば個人で貸し切りにできる観戦スペースもあるらしい。主に使うのは貴族だが。

「闘技場っていうよりは遊技場だね、これは」

思わずといった調子のリディに、ルイスとスヴェンは顔を見合わせて苦笑した。だが次の台詞にルイスは顔をひきつらせる。

「空いた時間にカジノでも行くかなー」

貯金はあるけど増やしといて損はないしな、というリディの肩をはっしと掴みルイスは首を振る。

「やめろ。ここ王族直営だし、金に余裕はある」
「ええ、でも今回はシルグレイがくれたからいいけどまた装備換えすることになったら、やっぱりあった方がいいだろ、お金」
「それはそうだけど！万一バレたらシルグレイにまで…」
「馬っ鹿。私がそんなヘマすると思うわけ、ルイス？」

…思いません。

満面の笑み、だがしかし確実に人を慄かせる笑みにルイスは敢えなく敗北した。
哀愁を漂わせる彼に、白みの強い銀髪を後ろで軽く縛ったスヴェンが訊ねた。

「…どうしたんですか？」
「…いや。あとでヤケ食い付き合え、スヴェン」
「？はい」
「えっと参加者は…うん、なんか多すぎないかこれ」

受付横の壁には、黒い壁面に白い文字で数多の名前が書かれている。団体戦の方がやはり少なく、三対三と五対五を合わせても精々五十組程だが、個人戦はざっと見ても百人は軽くいる。ひょっとすると二百に及ぶかもしれない。
その名前の多くには、やはり白い線で消線とおぼしきものが引かれている。消されていない名前は、反対側の壁に描かれた巨大なトーナメント表にも記されているから、恐らくは予選通過者だろう。

「これ、多すぎない？どう捌いたの？」
「個人戦は最初に何グループかに分けて模擬戦やってるんだよ。まああれだ、致命判定の攻撃受けたと結界張ってる魔術師が認識したら、そいつは退場。予選に残れるのは六十四人だったかな？」

「うっわ、魔術師大変そ…」
「だいじょうぶ、魔術国家の名は伊達じゃない、です」
ルイスも頷き、彼はそのまま受付の男に声をかけた。
「すいません、団体戦に申込したいんですけど」
「はい。では、代表者のお名前をいただきます」
三人は顔を見合わせ、ルイスが訊ねた。
「代表者だけですか？」
「はい。その方が処理も楽ですから」
あっけらかんと答えるあたり、そうとう根性がいい。
ルイスは眉を寄せ、ぶつぶつと呟いた。
「陛下の手前、代表者はスヴェンにするしかないが…いいのか？俺達この髪のままで」
「なんか問題あるの？」
「ある。…俺達が『誰』だかわからない状態で参加して、あとでばれたら、賭ける客達から顰蹙を買う」
「ああ、なるほど…」
こういった催し事に、賭けごとはつきものだ。誰が勝つか、一試合もしくは全試合を通して賭けが生じる。しかもこの武術大会は、かなりの大金も動くと言われている。
そんな中で、『ヘキサ』と名乗らぬまま参戦し、賭けをひっくり返すような真似をすればだ。どうなるかは想像に難くない。
――勝つ気満々でいる二人に、スヴェンはあえてつっこまなかった。

「もし不都合なのであれば、賭けごと対象外者のお申し込みをされますか？」

にこにこと笑顔のまま受付の男がかけた言葉に、「そんなのあるのか？」とルイス。

「ええ。もちろん非公式のものまで取り締まることはできませんが、公式のもので貴方がたに賭けることは出来なくなります。基本的にこの申し込みをされる方は、失礼ながら実力のない方が多いので、非公式のものでも賭けられることはほぼありません。ですが偶に覆面で出られる方もいらっしゃるので、ゼロが百か、客にとっては非常にギャンブル性の高い対象とも言えますね」

爽やかな笑みを浮かべる男はどこまでわかっているのか。ルイスは少々うすら寒い思いを味わいながらも、「じゃあそれで」と申し込みを決めた。前例があるのなら、まあなんとかなるだろう。

「承りました。では、代表者は『スヴェン・アイヒホルン』様ですね。明朝対戦表が発表されますので、忘れずにご確認をお願いいたします」

「了解した」

「では、ご健闘をお祈りしております」

終始笑顔のまま頭を下げた男に背を向け、三人は観客席に行くべく道を探す。順路を見つけ、歩き出しながら、リディがふと首をかしげた。

「そういえば、今何回戦なんだろ？」

そして彼らは、受付の上部の壁に燦然と記されている文句を見た。

『只今の試合――個人戦決勝戦、アハト・ライハラ対クラウディオ・ガウス』

「……」

「……誰だっけ」

「……？」

ルイスが絶句、リディは引っ掛かりかけた記憶に眉間を押さえ、スヴェンは疑問符を浮かべた。次の瞬間、ルイスはリディとスヴェンの襟首をひっつかみ、猛然と駆け出した。人のまばらな通路を抜け、円形闘技場の観客席へと通じる道を爆走する。

リディ達が息苦しさに気絶する寸前、ルイスは観客席最上階、立ち見もいっぱいのそこに辿り着いた。

「…っ、ぶはっ！ルイス、何すっ…！」

「静かにしてろ！黙って見てろ」

誰のせいだ、とリディは喚きたくなったが、ルイスの眼は怖い程真剣だ。周りの観客席の雰囲気も異様なくらい静まり返り、視線はある一点に集中している。

スヴェンも喉を押さえて必死に酸素を取り込んでいたが、やがて気付いて空いているスペースから下を覗き込んだ。

中央の広い円形の地面を囲い見下ろすように設計された階段状の観客席。その最下層、つまり円形の地面に今、二人の男が向かい合っていた。

二人の男は、片や肉厚の剣、片や長槍を構えたまま睨み合い、微動だにしない。

「……っ」

この距離からでもわかる強烈な殺気に、スヴェンは息を呑んだ。研ぎ澄まされた、一切の不純物のない鋼鉄のような気迫。武術を嗜む者でなければ相対しただけで気絶を余儀なくされるだろう。寒気が背筋を走る。

と、唐突に眼下で二人が動いた。ルイスやスヴェンを足してもなお足りないような筋骨隆々の巨駆同士が、凄まじい速度でぶつかり合う。轟音といっても差し支えないような金属音が響き渡った。それに畏怖すら感じながら、リディはようやく名前の意味を思い出した。

アハト・ライハラ、クラウディオ・ガウス。

前者は『十強』がひとつ、『テトラル』のリーダー。第二のオーギーンとも称される程の豪腕の剣士。

後者はやはり『十強』がひとつ――しかも序列二位、『ジィ』のリーダーにして、二つ名『神槍クラウディオ』を持つ、間違いなく大陸五指に入る槍の使い手だ。

「こんなカード、滅多に見られるもんじゃねえだろ」

食い入るように試合を見つめるルイスに、振り返らぬまま頷いた。眼下の戦いは激化している。金属音は殆ど絶え間なく、ちかちかと光が舞っているようにすら見える。生半可な者では一撃で腕が折れてしまいそうな攻撃が、数十合を重ねていく。

観客は固唾を呑んで見守り、風さえもその働きを忘れたかのように止まっている。

息が詰まるような時が永遠に続くかと思われた時、それはついに終わりを迎えた。

「ちぃっ…！」

剣士――アハトがクラウディオの槍に額を掠められ、舌打ちして横にステップを踏む。それを追いたてるように、クラウディオが猛攻に出た。

『神槍』の名に相応しく、神がかっているとしか思えない速度、鋭さ、重さの突き。それにアハトが対処しようとして――しかし今まで出来ていたそれは、直前に額に付けられた傷から流れ落ちた血によって数瞬、ぶれを余儀なくされる。そしてその数瞬でクラウディオには充分だった。

「はあああああッ…！」

鋭い気合いと共に、一際重い突きがアハトの剣の縁に命中し――内側から弾き飛ばした。

アハトの手から離れた肉厚の刃は地面と垂直に数回回転し、地にガランッ、という鈍い音を立てて転がっていく。

それに観客の目が吸い寄せられた間にもクラウディオの槍は彼の手により側面で円を描き、返す刀でアハトの首筋に突きつけられていた。

アハトは苦笑し、両手を上げる。

「…参ったなぁ。降参だぜ…。あんた、強ぇなぁ」
「…そっちこそ。いい試合が出来た」
「へっ」

クラウディオは槍を下ろし、握っていない方の手をアハトに差し出す。アハトはそれを取り、力強く握り締めた。

一瞬の空白の後、割れんばかりの歓声と怒涛の拍手が闘技場を席巻した。

「…いや、凄い試合だった」

喧騒の包む施設内の喫茶店で、ルイスは未だ身を奮わせていた。

「クリスティアーナ陛下も絶賛してたしね。…あの戦力は欲しいな」

試合を見守っていたクリスティアーナは、拍手が治まったのを見計らって二人を褒め称えた。美人の国王に手放しで絶賛され、アハトもクラウディオも満更ではなかったように見えた。

「戦力って…？」

スヴェンが遠慮がちに訊ねる。

「ああ、話してなかったか…まあ、狩人の仕事でな。ちょっと人数集めなきゃならないんだよ。それも実力者の」

「狩人の、仕事…？」

スヴェンがそれ以上を訊こうかどうしようかを迷っていた時、不意に近くから嘲るような声がかかった。

「おや？そこにいるのはスヴェン・アイヒホルン殿か？」

さっとスヴェンの顔が強張り、ルイスとリディがん？と目線をやる。

喫茶店の丸テーブルに座る三人の側に立っていたのは、スヴェンより二、三年上――リディと同じか少し下位の年齢の少年達だった。貴族的なある程度整った顔立ちに特有の高慢な表情を浮かべ、蔑むようにこちらを見ている。

「…なんの用」

応じるスヴェンの声は、顔と同じく硬い。それに対し、恐らく先程の台詞を放った金髪の少年はふんと鼻で笑う。

「試合にも出ず高みの見物かい？いいご身分だねえ」

「まあ、君の場合は何もせずとも陛下のご贔屓に預かっているし？全く羨ましいことだなぁ」

「……」

スヴェンは何も言わない。少年達はそれをいいことに更に言葉を重ねる。

「魔力の量と剣の腕だけで、たかが下流のくせに城に出入り出来るんだ。陛下のお力は偉大だね」

「親の脛かじりならぬ従姉の脛かじりか？とんだ恥さらしだ」

あははは、と少年達の意地の悪い笑い声が響く。その頃には周囲も騒ぎに気づき、遠巻きに野次馬の壁が出来ていた。金髪の少年はルイスとリディに目を向ける。

「なのに、なんだいそいつらは。傭兵か？稀代の神童、スヴェン・アイヒホルンともあろうお方が、下賤な平民共とつるんでいるのか？情けないな」

いつもなら黙って彼らの嫌味を受け続けるスヴェンは、しかしこの時初めて反駁した。

「訂正しろ」

「は？」

端正な顔に明らかな怒気を浮かべ、菫色の瞳が少年達を射抜いた。

「訂正しろ。このひと達は下賤でもなんでもない」

黙って茶を飲みながら静観していたリディ達は、僅かな口の端に笑みを作る。馬鹿のたわ言などどうでもいいが、こういう言葉は嬉しいものだ。特に、この他人に心を許さない少年からは。

「なにを…」
「身分だけでひとを見下すおまえ達の方が、余程下賤だ。だいたい、親の脛をかじっているのはおまえ達だろう」
ひゅう、とルイスが口笛を吹いた。よく言った。
少年達は言われたことを呑み込むなり顔を真っ赤に染め、腰の剣に手をかけた。
「貴様っ、僕達を愚弄したな…！」
「事実だろう」
一方スヴェンも引く気はなく、立ち上がる。一触即発の空気は、しかし新たな闖入者によって破られた。
「おいおい坊っちゃん方、こんなとこで騒ぐなよ。騎士団呼ぶ気かあ？」
軽い、おちゃらけた声に野次馬を含めたその場の視線が一斉に一方向に向き――一瞬でざわめきに取って変わった。
少年達もさっと顔色を青く変じ、スヴェンも怒気を引っ込め、ルイスとリディは瞠目した。
先程の声の主――茶髪の一部を赤く染め、長髪を一房だけくくり、短弓を背負った青年が三白眼を細めた。
「んな怯えんなよ。なあ、クラウディオ？」
水を向けられたのは、二メートルに及ぶのではないかという巨駆に、普通のものよりかなり長く、太い槍を背に吊り下げた男――ク

ラウディオ・ガウス。厳つい顔は無表情だが、何もせずとも険しく見えてしまう。更にもう三人、後ろに従えている。

「っ、『ジィ』…！」

誰かが畏怖の籠った声でその名を口にした。

幾十もの視線を集めながらしかしものともせず、彼らは（・・）は悠然と立ち、貴族の少年達に視線をくれる。

クラウディオの後ろにいた、ウェットに整えられた短い黒髪の女がくすりと笑った。垂れ目の縁に泣きボクロがあり、肉感的な唇と相俟って妖艶な色気を放っている。野次馬の誰かが、「ツェツィリア・クロノヴァだ…」と呟いた。

「子供の喧嘩に口を出す気はないけれど。下賤呼ばわりは面白くないわね？」

少年達は動転して反論も出来ないらしく、あわあわとその場でまごついていたが、やがて我に返った金髪の少年が、「アイヒホルン、この借りはあとで返して貰うよ！」というなんとも三流悪役な台詞を吐いてさっと逃げたので、慌てて他の取り巻きも後を追って消えた。勿論、スヴェンを睨むことだけは忘れずに。

「…根性ねぇお坊ちゃん共だなぁ」

茶髪の男が肩を竦め、スヴェンを振り返る。

「スヴェン・アイヒホルンっていや聞いたことあんぜ。クリスティアーナ陛下の従弟で、百年に一度の神童。ふーん、おつむだけじゃなくてカオもいーじゃねーの」

値踏みするような視線に晒され、本能的にスヴェンは少し後ずさった。茶髪の男の後ろから呆れた声が飛ぶ。

「テディー。そんな小さな子脅かしてどうするのヨ」

一同は目を疑った。明らかな女口調、しかも女声は、しかしクラウディオと張る筋肉を持つ髭男から発されていた。

「脅してねーよ。つーかテメーはその気持ち悪ぃ喋りか方ヤメロ、テルセロ。皆ヒいてんじゃねーか。ホラ、テメーもなんかいってやれよ、ルネ」

「……」

話を振られたのは残りの一人だったが、黒いマントをすっぽり頭から被った彼は何も言わずに沈黙していた。そもそも男なのかすらわからない。

（（（（つうか、『ジィ』…濃っ！））））

その場の大半の意見が一致した瞬間だった。

「ていうかスヴェン、オマエ個人戦にゃ出てなかったよな。観戦だけか？」

早速呼び捨てか！？とは一同の心の声。スヴェンはもう二、三歩後退りながら辿々しく答えた。

「きょ、今日は観戦…です」

「ん？今日はってこた、もしかして団体戦は出んのか？へェ。ダレと？騎士団？」

「えっ、と…」

テディーに矢継ぎ早に詰め寄られ、スヴェンは困り果てて思わずルイス達を振り返る。…先程から何のアクションも見せない二人は果たして、…茶を飲んでいた。

「…ん？あれ、もしかしてソイツら？」

なんだか力が抜けてしまったスヴェンの視線を追ったテディーの台詞に、半ば忘れ去られていた二人にその場の注意が集まった。

ルイスとリディはその目敏さに内心舌打ちしながらも、表面には出さずにカップの残りを飲み干し、立ち上がった。

「スヴェン、帰るぞ。殿下が待ってる」

「明日の最後の打ち合わせもしないといけないからね」

「う、うん」

満場の視線を一顧だにしない二人に、スヴェンは狩人ってみんなこうなのか、という畏れを抱きながら走り寄る。

ルイスとリディは、自分達を興味深げに眺める『ジィ』につと目を合わせ、頭を下げた。

「喧嘩の仲裁をしてくれてありがとう」

「迷惑をかけてすまなかった」

きっちり謝罪だけして去ろうとする二人に、「待て」とこの場ではおおよそ初めてのバリトンが響く。

些か緊張を走らせて足を止め、振り返った二人に『神槍』クラウディオは淡々と訊ねた。

「お前達は、明日の試合に出るのか」

一瞬目線で会話し、ルイスが頷いた。

「ああ。出る」

「…そうか。ならいい。引き留めてすまなかった。健闘を祈る」

その言葉に軽く会釈し、ルイスとリディ、スヴェンは連れだって闘技施設をあとにする。その背を大勢の野次馬と、『ジィ』が見送った。

第十話　安寧への撃鉄　（4）（後書き）

賭け事が許可されてる世界です。
イメージとしてはコロッセオ。

第十話　安寧への撃鉄　（5）

第十話　安寧への撃鉄　（5）

夜。

クリスティアーナに、武術大会に申し込んだことを伝えるべく、三人は女王の執務室に向かった。しかし、扉の前に立った時に中から聞こえた人の声に足を止める。男の声が聞こえてきた。

「…ですから、わたくしは何度も…！」

「ここに橋をかけることに何の意味が？平民の通る道ではないはずです」

男の声に応じるクリスティアーナの声は、冷たい。ルイス達は顔を見合わせ、その場から立ち去るべきか悩んだが、室内の声は止まらず続いていた。

「ここは、軍の移動に最適です！商人も…」

「軍の移動箇所は別に定めてあります。商人の通商も、デーリア橋があるでしょう。不要なものをつくるために、国民から税をとりたてる気ですか」

「っ、わたくしは不要などと…」

「不要です。シルグレイから一度説明をされたはずですよ、ガルイ

ード。なぜそのように固執するのですか。お前らしくもない」
「陛下っ…」
「下がりなさい。頭をよく冷やして、自分の主張が正しいのかどうか、よくよく考えることです」
数拍の沈黙のあと、踵を返して扉に足音荒く近づく気配がし、同時に扉が開く。中から出てきた男は、三人の若者と顔をつき合わせ目を見開いた。扉を閉め、ついで唇を歪める。
「…、あなた達がスヴェン様と武術大会に出場なさる方々ですか。平民風情が陛下の執務室を訪れるなぞ、いいご身分ですね」
「……」
ルイスとリディはなにも言わなかった。スヴェンも黙って彼を睨み付けた。
「まったく、陛下は…」
その後も数言ぶつぶつと呟いてから、ふと男はルイスを凝視した。
「…貴殿、前にこの城を訪れたことがあるか？」
リディはぎくりとしたが、ルイスは平然と「いいえ」と答えた。
「アーヴァリアンには何度か来たことがありますが、本来は城に参上出来るような身分ではございませんので」
リディはその如才のなさに感嘆すると同時に、やはりルイスはエーデルシアスの王子なのだ、と内心で苦笑いする。

水を呑むように嘘を吐ける。それは政争を生き抜くための術だ。

ルイスだけではない。馬鹿王子（ヴィンセント）だって、兄達だって、両親達やヘンドリックでさえ、表情ひとつ変えずに情報を取捨選択し、必要であれば嘘を辞さない。

嘘をつくのは良いことではないが、必要があれば悪いことではない。それくらいの理解と価値観はリディとて持っている。ただ、自分には出来ないだろうな、という諦観を抱いた。

「…そうですか。では、気のせいだったようです。――わたくしはこれで。むやみやたらと城内を歩かないでいただきたいとだけ、ご忠告させて頂きますよ」

最後に嫌味を付け加えて、男は立ち去った。その後ろ姿をスヴェンとふたり睨んでいたリディは、ふとルイスが眉を寄せているに気づく。

「…どうかした？」

「いや…。スヴェン、ガルイードは昔からあんな風だったか？」

唐突な質問にスヴェンは目を丸くしたが、律義に答えを探した。

「…昔は、違ったかも、しれない。でも、ここ最近は、あんな感じ。しつこく予算を土木に回そうとしてて、鬱陶しい、って、陛下が言ってた」

「ルイス、あのオヤジ知ってるの？」

スヴェンの言葉に、顎に手を当てて思索を巡らせていたルイスは、ん、と曖昧に頷いた。

「名前はガルイード。俺がここに最初に来たときは、まだヒラの官僚やってたやつだ。来る度に地位が上がってて、シルグレイの父親が優秀だって誉めてた記憶がある。…昔はあんな、ギラついた目はしてなかった気がするけどな」
「…そう、なんですか」
「ま、歳月は人を変えるってことなんじゃないの」
「…かもな」

ルイスは苦笑いを返すと、金色の髪をつまむ。

「しかし、アズナに感謝だな。元の髪色のままじゃ危なかったな」
「一週間だっけ？期限。その前にこの城出ないとヤバいね」
「もとの髪色、ちがうの…？」
「――そこの三人」

はっ、と三人は固まった。いつの間にか目の前の扉があいて、怖いくらいにこやかな笑みが彼らにぴたりと向けられていた。

「立ち話もけっこうですが…ひとをいつまで待たせるおつもりですか？」
「「「――っすみませんでしたっ！！！」」」

そして翌日――武術大会四日目、団体戦予選。伝えられた集合時間に念の為かなりの余裕を持って、ルイス、リディ、スヴェンの三人は会場に到着した。まだ余り人の気はなく、出場者も殆ど集まっていない。

闘技施設に入ると、リディは真っ先にトーナメント表を見に行った。昨日の個人戦のものが綺麗に消され、団体戦用のそれが書いてあるところから、スヴェンの名前を探す。

何故かと言えば、団体戦は代表者一名の名前を登録し、それが一種のチーム名を示すからだ。

「あった。えっと一、二…第五試合…相手は『ジーン・キャンベル』」

「…聞いたこと、あるようなないような」

「ルイスが覚えてないってことは、大したことないね。…ん？どしたのスヴェン」

二人とは別に、スヴェンは全く違う場所を見て呆然としていた。

ルイスとリディは怪訝そうに焦点をそこに合わせ――即ち絶句した。

ずらりと横一列に並ぶ三十二組の、右から三番目――つまり第十五試合。

「嘘だろ…？」

『クラウディオ・ガウス』

見間違いでもなんでもなく、そこにはしっかりとそう刻まれていた。

「……ルイス、スヴェン」
「……なんだ」
「私、すっごい嫌な予感するわ。そっちは」
「奇遇だな。俺もだ」
「…僕も、です」

あははー、と乾いた笑い声が三人の喉から漏れる。それを目にしたかのようなタイミングで、後ろから誰かがスヴェンの名を呼んだ。

「スヴェン・アイヒホルン！」

当たって欲しくない予想通りの声。ギギギギギ、と錆び付いた歯車のごとく鈍い動作で三人は振り向き、そこに黒髪黒服の女を見つける。――ツェツィリア・クロノヴァ。

「トーナメント表、見たみたいね？」

彼女はルイス達に近寄るなりにっこり笑い、当たってほしくなかった事実を突きつける。

「あたし達、あなた達に興味出ちゃったのよ。稀代の神童クンもそうだけど…そっちのやたら美形クン達にも」
「……」

この際リディが完全に男認識されているのはおいておく。

「なにより、ディオが一番気にしてるから。じゃあ、決勝でまた会いましょう」

ひらひらと手を振り、颯爽と去るツェツィリアを見送り、リディがため息を吐いた。

「…とんだことになっちゃったな」

ルイスとスヴェンには返す言葉がなかった。

三人がツェツィリアの襲来後、気分を切り替える為に喫茶店でしばし和むことにしたあと、観客席には徐々に人が集まり始めていた。そして彼らはやはり、一つの噂で持ちきりだった。

「『ジィ』が出てるって!?」

「ジィっていやあ、昨日個人戦優勝した奴がリーダーやってるとこだろ?凄ぇ奴らが出てきたな!」

「でも、なんでそんな奴らがわざわざ出てくんだ?狩人のＮＯ．２なんて、格違うじゃねえか」

「単に気がノッたんじゃないか。別に出ちゃいけない決まりはないし」

一人の狩人がため息をついた。

「しかしこれで賭けはつまんなくなったな。他『十強』はいねえんだろ？」
「個人戦にゃ『テトラル』と『ノナ』もいたけどな。団体戦に『十強』が出るこたあんまねえし」
「あ？」
「いた。『アインス・ザレッタ』――『オクタ』だ」
「いんのかよ！」
「でも、序列二位と八位じゃ…」
「やっぱ、レベル違うよな」
「騎士とか傭兵にはいねーのかよ、強い奴」

誰かの言に、出場者控えを見た別の誰かが首を振った。

「有名所はいねえな。ていうか有名な傭兵はだいたいザイフィリア・フェルミアに呼ばれちまってるし。そもそも騎士なんて団体戦する人間じゃねーし…」

言いかけた台詞が途切れる。それをまた別の人間が次いだ。

「一人いるな。ほら、アーヴァリアンの神童って奴だろ、こいつ」
「神童ぉ？んだそれ」
「確か、若干十四歳で騎士団を軒並み破り、魔術もかなり出来る、女王陛下のお気に入りだろ」

誰かが鼻で笑った。

「アーヴァリアンの騎士団はよわっちいだろ。なんせ『魔術国家』なんだから」
「だよなあ。てことは駄目か。つか、こいつ賭け対象外申し込みし

てら。自信ねえのか、よーするに。あーっ、つまんねえ」
「つーかどうせ表(公式)の優勝は『ジィ』一択で面白くねえから、裏(非公式)の内容『誰が決勝まで行くか』にしようぜ。勿論『ジィ』は抜きで」
「お、いいなそれ！…え、でもそれ『オクタ』じゃね？やっぱ」
「『十強』っつっても、下位はそこまで化物じみた強さってわけじゃねえよ。ほら、こいつ…『ラファエル・エルナデス』って確かフリーの傭兵でかなり有名な類だろ。案外いい試合になるかもしれねーぜ」
「…だな。よし、じゃーこの設定広めるぞ！」

余談だが…この話を小耳に挟んだシルグレイは、こともなげに侍従に「お前の名前で『スヴェン・アイヒホルン』に千エル賭けてこい」と言付けた、という。

アーヴァリアンで、本格的な冬の始まりを告げる行事、武術大会。
その四日目。
前日の個人戦ではクラウディオ・ガウスが優勝を飾り、今日からは団体戦が始まる。
そして太陽が昇って数刻後――火蓋は切って落とされた。

『さあさあ早くも第五試合！向かい合うは、『十強』に追随すると

云われている狩人、ジーン・キャンベルと、我がアーヴァリアンが誇る百年に一度の神童、スヴェン・アイヒホルン！』

わあああ、という歓声が地響きのように鳴り渡る。闘技場（フィールド）の土を踏んだリディは、その騒音に顔をしかめた。

「…うるさ…ていうか、これどうやってるの？明らかに人間の声量じゃないだろ」

「ああ、割りと簡単な仕組みだぜ？あの解説者がなんか筒みたいの持ってるだろ。あれ、あっちの大きな箱にパイプで繋がってんだ。そんでパイプ構造に色々細工施して、反響で音量拡大してるんだ」

「要するに、あれ。拡声器（メガホン）みたいなもの」

「…へえ。なんとなくわかった、…気がする」

ルイスとスヴェンの説明を受け、リディは取りあえず頷く。いまいち分からないが、まあ気にすることでもないだろう。

『アイヒホルンはこういった場に出てきたことは未だかつてありません！歴戦の勇士を相手に、無名の仲間を連れ果たしてどこまで力を発揮できるのか！』

「…完っ全噛ませ犬扱いだな」

少々むっとしたルイスは、司会者の方を一瞬睨んだ。全く、所詮子供だからと好き放題言ってくれる。

「はん。初戦の相手はこんなひょろっこい小僧三人かよ」

反対側のからフィールドに入ってきた男達は、三人を見下ろしてつまらなそうに鼻を鳴らした。

「ひょろっこくて悪かったね」

リディは目を細めた。…十強に追随する実力とか言われていたが…かつてビグナリオンで共に戦った狩人、ヘンリーの方が遥かに強い。立ち姿からそれがわかる。

「おーかたそこの坊っちゃんが適当に引っ張ってきただけのガキだろ。棄権した方が痛い目見なくて済むぜ？」

揶揄するような笑いに、しかしルイス達は内心の嘲笑せざるを得なかった。

見た目で勝手にひとを判断し、ハナから舐めてかかっているようでは――お話にならない。

「その言葉そっくり返すよ。独活の大木」

ピキ、と男達のこめかみがひきつった。各々武器に手をかけ、剣呑な表情でリディを睨む。

「…てめえ、後悔してもしらねえぜ」

「安心しなよ。私は君達に後悔させる余裕も持たせてやらないから」

対するリディは表情ひとつ変えず、外套の下で一本だけ剣を掴んだ。

端で傍観していたルイスは空を仰いだ。

「…挑発スキルこんな高かったか、こいつ」

「…まあ、…悪いことじゃない、よ。使う相手、間違ってないし」

スヴェンは苦笑いしながら、剣の柄に手を添える。にわかに緊迫

感が増し、会場中が司会者の試合開始の宣言を待つ。司会者が咳払いした。

『では――』

『ノナ』リーダー、ジョン・イーデルが団体戦を観戦しにきたのは、たまたま気が向いたからだった。自身は前日までの個人戦に参戦し敗退し、団体戦には特に出る気もなく、街を出てしまってもいいくらいに考えていた。事実、『テトラル』の連中は早朝のうちにハイレインを出ていった。

しかし魔術士であるヨセフ、治療術士であるマシューは、大陸にその名を轟かせる魔術国家自体によっぽど興味が大有りらしく、リーダーである自分の試合すらほっぽって街の図書館だかなんだかに籠っている。

「結構賑わってるもんだなぁ」

ただ一人自分につきあってくれている弓士、エドガーが団体戦の

様子を観て感嘆した風に言った。それを聞き付けた、何やら噂好きそうなカオをしている男が振り返って言った。

「そりゃそうさ！今回はなんたって、『ジィ』が出てるんだぜ！」

「……マジか？」

二秒ほど自分の耳を疑った。『ジィ』といえば、昨日アハトに勝った『神槍クラウディオ』のパーティだ。団体戦に『十強』がいること事態稀なのに、しかも序列二位が、だと？

「ほれ、見ろよ」

男が親切にもトーナメント表を見せてくれる。――確かに第十五試合に『クラウディオ・ガウス』の名が記載されていた。

「…なんでまた。相手になる奴いねえだろ」

『十強』の中でも、序列というものはかなり大きい。というか五位――『ペンタ』から先の格が違う。『ジィ』である奴らに立ち向かうには、『ペンタ』以上――つまり『ペンタ』『テトラル』『トリル』じゃなきゃ事実上不可能だ。勿論九位である自分達など論外。

あえて付け加えるなら、更に『モノ』は別格だが。

（――いや）

五位以内ではないが、あいつらなら不可能ではないかもしれない。既に恐ろしいほどの力を持つ癖に、まだまだ伸び代を持っていそうな、あの二人の男女（きかくがい）。旅の途中で、死んだ――とかいう噂を聞いたが、ジョン達は全くこれっぽっちも微塵たりとも信じていなかった。あの二人なら中位竜を当てたって死なないに決まってる。

「まあ、そうだよな。よくわかんねーけど…個人戦優勝したから団体戦も、って思ったんじゃねえか」

男は興味なさそうに言ったが、それこそ疑問だ。ジョンの記憶では、『ジィ』はそんなものに執着するような面子ではなかったはず――。

「――……」

思い出してしまって胃痛がした。横でエドガーも微妙な顔をしている。…奴らは濃い。ていうか、基本濃い『十強』の面子の中でも異彩を放っている。

「『オクタ』とかもいるにはいるけど、まあ勝てねえだろ。だから決勝に誰がいくかで賭けになったんだけど――お、第五試合か」

前半部分非常に気になることを言った気がしたが、場の歓声と男の視線につられ、ジョンとエドガーもフィールドを見下ろした。

「…ガキ？」

眼下にいるのは、どう見ても十代後半前後の三人組だった。しかも頭髪は金、黒、銀と鮮やかで、この場にあまり似つかわしくない。

「ああ、アレはアーヴァリアン王家の隠し玉って奴。なんでも百年に一度の天才らしいぜ」

男が指差したのは銀髪の少年だった。多分あの中で一番年齢が低い。へえ、とエドガーが口笛を吹いた。

「確かになかなかの魔力量だな。…て、あれ?」

何か引っかかる、といった顔でエドガーはフィールドを眺め、首を傾げる。

「…でも所詮、まだガキだろ」

ジョンは彼らの相手を眺めた。強くはなさそうだが、少なくとも実践経験は王家のお坊ちゃんより遥かに上だろう。一緒にいる少年の仲間二人も、大して強そうには見えな――

「…あれ?」

ジョンも首を捻った。おかしい。なんだかあの二人、どっかで見たような――。

と、眼下で狩人の男達が武器に手をやった。視線の先的に、どうやら黒髪が挑発しているらしい。無謀な行動を――

「……」

おかしい。あの黒髪の構え、どこかで見たことある。それにその後ろで、達観したように空を仰ぐ金髪も――

――――――――――!!!!!!!!

次の瞬間のジョン・イーデルの行動は迅速だった。

「さっき賭けしてるっていったな！？」

説明してくれた男はジョンの形相にかなり吃驚したようだが、律義に返答してくれた。

「あ、ああ…誰が決勝に進むか、で。因みに俺も集金人のひとり――」

「エドガー、今幾ら持ってる！？」

「――１０００エルちょいだ。悪い」

エドガーも流石だった。言いながら瞬時にジョンに金を渡す。因みに百エルが庶民の一日の労働賃金だから、それでも充分だ。

「俺はさっき下ろしたから十万エル持ってる！おいアンタ、あそこで戦いおっぱじめようとしてるガキ共のチームにジョン・イーデルの名前で十万と千エル！」

ばんと叩きつけるように男に金を渡せば、男は目を丸くして、疑うようにジョン達を見た。

「これくらいの金額なら賭けてる奴多いから、そのへんはいいが…あんたら正気か？あいつらに？あいつら、表じゃ賭け対象外申し込みしてるぜ」

「ああ。全額」

迷い無く頷けば、懐疑的な顔をしながらも男は袋に金を入れ、手帳に『ジョン・イーデル』と書き込む。その間に、拡大された司会者の声が響いた。

『それでは――始め！』

闘技場はしんと静まり返っていた。誰もが予想した光景――アーヴァリアンの神童が、経験の無さゆえに狩人に下される――とは、全く逆の光景に、誰も反応出来ないのだ。

「…よっわ。それでよく『十強』に追随するとか言えるね」

既に剣を鞘に収めたリディが、地面に這いつくばる三人の男を見下ろして鼻で笑った。ちなみに反応はない。無論、気絶しているからである。

「スヴェン、いい動きだったぞ。思ってたより固さもないし」

ルイスは試合前から変わらず腕を組んでいた。ちなみに一度も解いていない。なぜなら剣を抜く必要性がなかったからだ。

「…ふたりに稽古、つけて貰ったおかげです」

スヴェンは照れ臭そうに笑いながら、剣を収めた。

試合開始二分でケリはついていた。試合開始宣言と共に得物を抜いた双方――ただしルイスを除く――は、魔術師が向こうにいなかった為に完全な肉弾戦となり――あえなく二人はリディにぺしゃっ

と潰され、一人はスヴェンと数合切り結んだ後鳩尾への一撃で終わった。

「そこの似非司会者！」

リディが観客席を見上げ、司会者を見据える。呆然としていた司会者は、慌てて我に返ったようだ。

「試合。終わりでいいんだろ？」

誰が見ても明らかな事象に、否定要素もなにもない。司会者はまだ動転の抜けない声のまま、終了を告げた。

『だ、第五試合――スヴェン・アイヒホルンの勝利！』

第十話　安寧への撃鉄　（5）（後書き）

狩人は基本『人ならざるもの』を相手に戦いますが、傭兵は基本対人専門です。主軸をどちらに置いているかで一応呼び名をわけてはいますが、同じものと考えても支障はあまりないです。
ただ絶対数は、狩人の方がかなり多いです。

第十話　安寧への撃鉄　（6）

第十話　安寧への撃鉄　（6）

「予想以上に弱かったね。口ほどにもないっていうか」

試合の後昼食を取ってから、三人は観客席に回っていた。先程の試合の経過のせいか、周辺から視線や囁き声が向けられたが、スヴェンも、ルイスやリディもいたって平然としていた。

「いや、実際俺達も強くなってるんだと思うぜ。ま、そうじゃなきゃ困るけど」

「だよね。あれだけ鍛錬重ねて成長ゼロだったら泣けてくる」

「伸び代はお前が一番多いから、スヴェン、鍛錬怠るなよ」

「うん」

眼下では既に第十三試合が始まっている。初戦は力量差が空いた者同士の戦いが多いようで、割りとあっさりと決着がついていた。

「まあ、そうじゃないと面白くないんだろうね」

下位で強者同士がぶつかり潰しあった結果、決勝があっさり終了とか失望にも程がある。

「次、誰？」

「さっきの試合の勝者だから――『ロビン・エンデル』だな。確か魔術師もいたはず」

ふうん、とリディは頷いた。

「じゃ、ルイスも魔術師ってことで」

「…え」

「だって私とスヴェンはさっき剣で戦っちゃったし。次からは相手も舐めてかかってきてはくれないだろうからさ」

確かに実力差はあったが、対戦相手が完全にこちらを舐めきっていたことと、直前のリディの挑発もあの一瞬の決着には大いに作用しているだろう。

だが勝ち進んだ以上、次からはそうはいかない。三人全員戦わなければ負ける可能性も高くなるだろう。

…だが魔術を全く使わずに魔術師と対抗するには、三人とも魔術に慣れすぎている。要するに、魔術には魔術で対抗することが定石であり、剣一本で立ち向かうのは辛いのだ。

普通の相手ならまだしも、ここは大会――しかも次からは戦いを勝ち抜いた強者同士の争いになる。舐めたら痛い目にあうのは自分達で実証済みだ。

かといって三人ともが魔術を併用すれば…色々と後が面倒くさい。決勝に上がってしまってからはともかく、出来るだけ穏便に行きたい。

「…わかったよ」

その辺りを勿論ルイスは理解していたが、剣を振るえないのは残念の一言に尽きる。けれど仕方ない、と了承のため息をついた。

「…あ。『ジィだ』」
「お。…て、試合進行早くないか？」
いつの間に二試合終わったのか。半ば呆れながらも、三人は会話をやめ眼下に視線を向けた。会場の雰囲気が俄に緊迫感を帯び、満場の視線がフィールドに集まった。
フィールド上には、『ジィ』の三人――クラウディオ・ガウス、ツェツィリア・クロノヴァ、ルネ・フォーレ…槍士、剣士、魔術師の組み合わせ。対する相手はまだ若い、剣士二人、魔術師の三人組だった。
『第十五試合、『クラウディオ・ガウス』対『ハワード・ロードル』。…ええと、開始』
司会者の声がしぼんでしまったのも無理はない。ハワード・ロードル組は明らかに駆け出しの狩人で――まあ見かけで判断するのはいけないと第五試合で学んだものの――まず『ジィ』相手に対抗出来るとは思えない。それ以前に、『ジィ』相手にこの大会に集った面子が対抗出来るとも思えないのだが。
「…悪いが、退く気はないぞ」
クラウディオがぽつりとハワード達に言った。彼なりに場違いだという自覚はあるらしい。

対して、ハワード達三人は苦笑してみせた。

「わかってますよ。何の理由か知りませんけど、出てきた以上負ける気はないんでしょう」

「…ああ」

「かといって私達もこのまますいません降参ですってのは情けないからヤなのよね。初戦で『ジィ』と当たるほどついてないとは思わなかったけどさー。あーあ、エイトの不幸体質」

魔術師の少女が言えば、その隣の、背に大剣を帯びた少年が泣きそうな顔で言った。

「俺のせいなの!?そりゃ不幸体質は認めるけどさ!」

「――今回ばかりは不幸とは言わないよ」

ハワードがすらりと腰から細剣を抜き、腰に下げていた小型の円い盾を構える。優しげな顔に、不敵な笑みが浮かんだ。

「僕達狩人の憧れ――それも『十強』の中でも序列二位の『ジィ』と戦える機会なんて、そうそうない。胸を貸して貰おうじゃないか？」

「…全く」

肩を竦めた少女が数歩下がり、その際にもう一人の少年の足をげしっと蹴った。

「いった！」

「我らがリーダーがやる気になってるんだからしゃきっとしなさい。行くわよ」

少女の掌に魔力が集まり始める。エイトという少年も大きく呼吸すると、大剣を背の鞘から抜いて構えた。

それら一部始終を見守っていた『ジィ』は、内心感じていた優しい感情を敢えてしまいこみ、それぞれ武器を構えた。

「手加減は要りません。こっちは全力で行きます」

「…ああ。来い」

「――では」

ハワード、エイトは思い切り良く地を蹴った。

――――――――――――――――――――――――

「…うん、いい試合だったわ」

第十五試合が終わり、控室にいったツェツィリアは笑った。

「ああ。連携も上手かったし、技術も結構高い。なにより…まだまだ伸びそうだ」

クラウディオも微かに笑う。

自分に突進してきたハワードは、彼の突きをクラウディオがかわし、返す刀で片をつけようとした攻撃をかわしてみせた。多少手加減していたにしろ、相応の速度をもった自分の槍を、反射神経と素早い読みで避けてみせ、あまつさえ反撃すらしてきたのだ。そんな技術の持ち主、あの年ではなかなかいない。

ツェツィリアの方も、身の丈ほどの大剣に振り回されずに扱いこなすエイトに驚嘆した。彼の場合読みはあまり上手くなかったが、それを補う反射神経は見事なものだった。

「……」

ルネも、自分と相対した少女を思い返す。まだ十代半ばだろうに、その判断力と対応力はかなり高かった。惜しむらくは、魔力量が恐らくではあるが少ないことだ。

「若い世代が育っているのはいいことだわ」

狩人の現役は、精々四十過ぎが限界だ。中には五十まで前線を突っ走りまくった例外もあるが、普通はそうはいかない。とすれば、平均年齢三十前後の『ジィ』も寿命は長くないだろう。

「若い世代っつーなら、『ヘキサ』が筆頭だと思ってたんだけどなァ」

割り入った声はテディーのもので、やる気なさげにお疲れ、と拍手した。

『ヘキサ』――『自由時間（フリータイム）』。途中多少人数の増減を経験したよ

うだが、基本的に男女二人で旅をしている異例のパーティ。剣を使う上魔術も治療術も扱うふざけた連中らしいが――ここ三月弱、ぱったりと足取りが途絶えているらしい。もし本当に命を落としたのであれば、惜しいことだ。

「けどあのコ達。予想以上じゃない」

テディーと共に入ってきていたマルセロが頬に手を当てて言った。ん、とテディーが頷く。

「まァ相手が油断しまくってたってぇのもあるけどな。にしたって、金髪は攻撃すらしなかった。魔術士か、ルネ？」

こく、とルネは頷いた。彼からはかなりの力を感じる。ただ――感じている力が限界には思えない。それに…他の二人からも魔力を感じる。

だがルネは、それを口にしなかった。『ジィ』である自分達が気にするほど重要なことに思えなかったからだ。

だが、その慢心とも言える考えに直にルネは青ざめることとなる。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ルイス達の二試合目はつつがなく終了した。剣士二人、魔術士一人のオーソドックスな編成にルイス達も合わせ、適度な強さを見せ

つけつつ相手を下し、駒を進める。

「スヴェン、いい経験になるだろ」

控室で水分を採りながら、リディがスヴェンにいえば、スヴェンは頷いた。

「型が読みにくくて、大変だけど…面白い」

「俺も昔は完全型に嵌まってたからな。あれ、知ってると読みやすいんだよな」

騎士の使う型は技量が上がれば上がるほど鋭さは増すが、基本から詰んでいける凡用性の高いものでもある。型を極めた者ほど、手を読みやすくなるという難点もあるのだ。騎士にとっては、型にそいつつもどれだけ自分のものにし、相手に読ませないようにするかが技術向上の基本でもある。

「私は母上に教わったからなあ。あんまり型には沿ってない。父上が嘆いてたけど、二刀流だしね」

リディの剣術は母親から受け継がれたものだ。母親が正当剣術でない理由はよく知らないが、習ったのが凄腕の流れ者からだったからだとか。

補給を終え、観客席への道を歩く。誰も廊下にはいなかったが、遠くから地響きのような歓声が聞こえる。

「でお前と剣合わせてる内に、自然と型に固執しなくなってたんだよな。やっぱ何事も経験だ」

「狩人や傭兵の中にはもう完全我流の奴とかいるし。わかるだろ？」

「うん。色んなひとがいる」

観客席につくと、遠くからでも聞こえた歓声が耳を直撃し、思わず顔をしかめ――それからフィールドを見た。
フィールドに立っているのは三人。全員女だ。揃いの黒ずくめの装備を身にまとい、そっくりの髪型――極め付きは、そっくり同じ顔。彼女達の武器は見る限り腰に佩いた短剣のみで、誰からも魔力を感じない。

「三つ子…？」

思わず、という感じでリディが呟いた。

対して、倒れ伏しているのは三人。二人は屈強な体躯を持っている男達であり、一人は魔術士らしき姿をしている。

「あれをあの女達が倒したのか？」

ルイスが驚きを隠せずに言った。相手には魔術士がいるのに、明らかに近接戦闘タイプの三人組で打ち倒したというのか。

「…何者？」

応えは三人の背後からもたらされた。

「旧名『トリニティ』、現『オクタ』。俺らと同じ『十強』だ」

ばっと振り向いたルイス達の目に、ひとりの浅く刈った濃茶の髪の男が映る。一拍のち、ルイスとリディが声を揃えて驚愕した。

「ジョン！？」

ビグナリオン、ラーシャアルドに続いて三度目の邂逅となる男――『ノナ』のジョン・イーデルは相変わらず裏のない顔でにやっと笑った。

「お久しぶりだな、ルイス、リディ。元気そうじゃねーか」

「しかしどうしたんだその髪。一瞬わかんなかったぜ」

ジョン、それに合流したエドガーと並んで観客席に座り、ルイス達は久々の再会を祝っていた。眼下では一回戦とは数段違った戦いが繰り広げられ、会話の傍ら五人は観戦している。

「ああ、それは…」

ざっとルイスが説明すると、ジョンは納得がいったという風に頷く。

「へぇ。相変わらずトラブルメーカーだな」

「いや、あれは巻き込まれただけ…。ていうかジョン、もしかして個人戦に？」

「ああ。まあ本選の一回戦でアハトに負けちまったけどな」

苦笑するジョンに、しかしやはりこの男は相応の実力者なのだと思い知らされる。団体戦より量も質も高いだろう個人戦で本選に行くのだから。

「そこの坊主が『スヴェン・アイヒホルン』だよな。なんだって団体戦なんか出てんだ？わざわざ神童を引っ張りだして」

エドガーが身を乗り出してスヴェンを見、首をかしげた。

「まあ、ちょっとね。ジョン、このあと…大会が終わったあと、どこかに行かなきゃならないとかある？」

お茶を濁し、リディは遠回しに探りを入れた。ジョンはちらっとエドガーと目を見交わし、いや、と首を振る。

「特に決まった予定はない。それがどうかしたか？」

「…そう。わかった」

質問には答えず、何やら真剣な顔で頷くリディに、これは答える気ナシと見てジョンはひとまず話題を換えた。少し気になっていたことがあった。

「リディ、お前その剣誰に習った？」

リディはきょとんとした。偶然にもさっきその話題が出たばかりだが、どうかしたのだろうか。

「誰にって…母親にだけど。それがどうかした？」

「いや……」

ジョンはお茶を濁し、眉間をもんだ。

（リディのお袋さんてことは、とーぜん貴族だろ。…気のせいか…）

訝しげなリディ達と、彼らがリーダーを見比べ、エドガーが強引に再度話を変えた。

「それはそうと、『ヘキサ』昇格おめでとさん。死亡疑惑は全く信じちゃいなかったけど、顔見たら安心したぜーやっぱ」

「うわ、本当はそれ最初に言うべきだよな」

ルイスが苦笑する。

「まあ、ちょっとごたごたがあってな。狩人協会に連絡する暇も無かったんだよ」

それにしてもそれ以上話すつもりはないらしい。どこもかしこも地雷源ばかりな気がして、ジョンは言葉を詰まらせた。

その時、スヴェンから驚きに満ちた質問が発される。

「ルイスとリディは…『十強』なの？」

痛い沈黙が下りた。

「…話してなかったのか？」

とエドガー。

「…うん」

とリディ。

「忘れてたな」

とルイス。

最後のジョンはにんまりと笑ってスヴェンに言った。

「おうよ。こいつらは狩人になって一年で『十強』になった超注目株だぜ？おまけに二人パーティだわ、規格外の能力持ってるわ、この通り美形だわ」

「最後は関係ない」

律義にリディは反論し、スヴェンに向かって掌を立てて謝った。

「ごめん。実はそうなんだ。まだあんまり実感ないんだけどさ」

「…ううん。…だから二人は、名乗らないようにしてるんだ、ね」

色々注目の的らしいふたり。しかも何らかの理由で一時行方不明となり、死亡説が流れ…その中で、この大会に出場していると知れたら、大騒ぎになるな違いない。

「そういうこと。あとで適当に狩人協会には報告入れるさ」

「それはそうと。ジョン、さっきの三人組『オクタ』って本当か？」

皆半ば忘れかけていたことをルイスはきっちり覚えていた。あっさり忘れていたジョンとエドガーがぽんと手を叩く。

「ああ、本当。あっちも異例だから、お前らが知らないのが意外だけどな。――初めてとは言わないが、異例の三つ子姉妹による三人パーティ。全員が近接戦闘タイプで、魔術士治療術士は連れていない。あんまり魔物退治とかはしない、対人戦闘の専門家（スペシャリスト）だ」
「それ傭兵向きじゃない？」

リディが突っ込む。狩人の基本は魔物を初めとする『人ならざるもの』を狩ることだ。対人戦闘を主にしているなら普通傭兵のはずだ。

「だからそういった意味でも『異例』。何考えて狩人になったのかとか聞くなよ。俺達も知らないんだから。…でも対人戦闘が中心ったって、魔物の上位種も狩れる力は余裕で持ってるからな。強いぞ」
「三つ子ってことは、コンビネーションが厄介なわけか？」

エドガーが頷く。

「位置の入れ換えを利用した、短剣と暗器を使った速い攻撃が持ち味だ。あのソックリな見た目もあいまって、混乱しちまうらしいぜ」
「暗器、ねぇ。…諜報部隊みたいなもんか」

後半は誰にも聞こえないように呟き、ルイスはわかった、と頭を下げた。

「情報ありがとな。対策がたてられそうだ」
「情報料頂こうか？」

ジョンの茶化しに、ルイスははんと鼻で笑う。

「その温まってる懐は誰のお陰だ、ジョン？」

「すいませんでした調子に乗りました許してください」

掌を返したようにジョンが深々と頭を下げる。首を捻るスヴェンに、リディが苦笑いを浮かべながら説明する。

「こういう大会ってのはさ、多かれ少なかれ賭けの対象になるんだよ。それこそかなりの額のね。で、この男は自分達しか私達の正体知らないのをいいことに、絶賛ボロ儲け中って訳。私達、賭け対象外申請もしたから、大穴もいいとこだろうし。こういうの、勝てば勝つ程割り当て上がるしね」

「やたら詳しいなお前…まさにその通りなんだけどさ」

賭けやったことあんのか?とエドガーが言えば、リディはにっこり笑った。

「ご想像にお任せするよ」

ぞっ、と四人の背筋を寒気が駆け抜けた。ルイスは最早諦め顔であった。

第十話　安寧への撃鉄　（7）

第十話　安寧への撃鉄　（7）

その後二回戦の四試合が終わり、三回戦――予選決勝が始まる頃には空は赤みを帯びはじめていた。

「あ。決まった」

リディの視線の先で、明るい茶髪の男の剣が相手――灰色の髪の男の盾を掻い潜り、その胸に吸い込まれた。実際にはその寸前で結界が効果を発揮し、灰色の髪の男は大した怪我は負っていないはずだが、勿論戦闘不能の判定が下される。

二人の剣士の他に立っている者はなく、必然勝負の決着と同義となり、

『勝者、ラファエル・エルナデス！』

司会者の叫び、観客の歓声がわっと上がった。リディ達の横を魔術士達が走っていき、倒れた者達に駆け寄る。五分後にはフィールドには誰もいなくなり、次なる試合への期待が観衆の間で高まっていく中、司会者が朗々と呼ばわった。

『では三回戦第二試合――『アインス・ザレッタ』対『スヴェン・アイヒホルン』』

控室にいたルイスら三人は一瞬目を見交わすと、フィールドに出ていく。途端、歓声が耳を突き刺した。

「どうにかなんないのかな、これ…」

リディが再び呻きながらも、反対側を見やる。反対側の控室からは黒ずくめの女性三人が姿を現していた。

『ご存知の方も多いかと思いますが、このザレッタ三姉妹は狩人の頂点のひとつ、『オクタ』でもあります！これまでの試合でも見せた、圧倒的な速度とコンビネーションと攻撃力は、再び我々を魅せてくれるのか！』

ルイスはちらりと貴賓席を見上げた。クリスティアーナ、シルグレイの両名共がこちらを見下ろしている。ルイスは小さく口の端を吊り上げ、手の甲を彼らに見せるように僅かに上げた。

『対するは、未だ十四歳の神童スヴェン・アイヒホルンを軸とする謎の若者達！二試合を経てただ者ではないことは充分に証明されましたが、果たして『オクタ』を相手にどうやって戦うのか！』

「相変わらず負けると決めてかかってんなあのクソ司会者…」

チッとリディが舌打ちする。スヴェンは従姉達を見つけて一気に感じた口の中の渇きをルイスの水魔術で解消しようかどうかわりと真剣に悩んでいた。

「お互い、健闘。」

そっくりな女性三人の内、真ん中に立つ人がそう言って微かに会

釈した。ルイスが軽くそれに応じ、リディとスヴェンと目線で意志を交換し後ろに下がる。
その彼を庇うようにリディ、スヴェンが位置取り、それぞれ剣を抜く。リディは相変わらず一本だけだ。

「ツヴァイ、ドライ。いつもの通り。」

『オクタ』も均等――扇状に散開する。準備が整ったと見た司会者が、声を張り上げた。

『勝者は本選！では、開始！』

その瞬間、『オクタ』三人の内二人が掻き消えた。

「……っ！」

否――正しくは『掻き消えて見えた』。凄まじい速さで間合いを詰め迫る短剣を、しかししっかりとその目で捉えたリディとスヴェンは怯まず迎え撃つ。キン、と高い金属音が木霊した。

「「…やる。」」

女性達の言葉を信じればツヴァイとドライが同時に呟き、同調した動きで連撃を仕掛ける。スヴェンは目を細め、その一つ一つを丁寧に弾き返した。――が次の瞬間翻った相手の繊手から飛んだ銀色の針に頬を掠られる。

（！暗器っ…）

けれどわじわとした痛みを無視し、スヴェンは思い切り右足を跳

ね上げる。微かな手応えと共に、ドライが飛び離れた。

「……」

「……」

共に無言で睨み合う。他の四人のことを意識から追い出し、スヴェンは目の前の敵だけ見据えて突進した。

（圧倒的なコンビネーションが持ち味…なら、）

力を込めて剣を一閃する。ドライは空中に跳躍して避け、更に空から降らせてきた暗器を転がって避ける。

（簡単な話――三人を固まらせなければいい！）

リディは横目でスヴェンの方を確認し、ふっと笑った。やはり子供は柔軟だ。昨日教えたことがしっかり身についている。

「余所見、禁止。」

ツヴァイ（？）が短剣を喉めがけて振るってくる。リディはそれを一歩後退して避け、左手の五指を揃えて突き出した。危うく顔に突き刺さるそれを、ツヴァイがギリギリで避ける。

「油断、大敵。」

ふっと背後から影が差し、アインスの短剣が迫る。しかしそれを、突如発生した突風が防いだ。

「俺を忘れるなよ？」

不敵に笑うルイスが、中位に封印した精霊に指示を下し、『オクタ』のコンビネーションを阻害する。外套の下の剣を抜きたいところだが、それは諦める。

「あなた、邪魔。」

苛立ったようにアインスが飛ばしてきた針をひょいと避け、ルイスは苦笑する。

「邪魔してなんぼなんでね」

「余所見駄目ってさっきそっちが言ってなかった？」

リディが挑発的に言って、ふっとアインスの懐に入り込み、腹部に肘打ちを放った。

「ぐっ…！」

「アインス！」

アインスが吹っ飛ぶ。叫んだツヴァイはそれを追った。

「三人コンビネーションって言うけどさ」

それを見送り、リディとルイスは揃って片頬を上げた。

「こっちだって伊達にパーティ組んでないんだぜ。本気出さずに勝てると思うなよ、『三位一体（トリニティ）』」
「……！」
「ドライ！戻って。」
「スヴェン！」

双方の声に、未だ剣戟を繰り広げていた二人はお互いの武器を弾き、それぞれの仲間のもとに後退する。少し息を弾ませているスヴェンに、リディが短く大丈夫？と訊ねた。

「…大丈夫。まだ、これからだよね」
「うん。次からは多分本気で来るよ」

視線の先で何事か囁きあっていた『オクタ』がリディ達に向き直る。

「正直、舐めていた。」

一人――もう誰だか解らない――が言った。

「認める。お前達は、強い。」
「だから、本気でいく」

淡々と繋がる三つの声。リディ達も応じて身構え――次の瞬間、目を見開いた。

「うわっ！？」

横合いから強い衝撃を食らい、スヴェンが吹っ飛ぶ。

「っ！」

左右同時に柴電一閃仕掛けられた攻撃を、すんでの所でリディは防いだ。反射的にルイスが剣を抜きかけたのを視線で抑え、右手で握った剣を振って思い切り弾き返す。しかし次の瞬間背筋をぞっと襲った寒気に、脊髄反射のレベルで外套の下に隠していたもう一振りのサーベルを抜いて背後に振った。ガチッ、と硬い感触をに顔を歪め、瞬時に身を地に伏せて二つの短剣をやり過ごし――完全にはやり過ごせず右肩と左頬に傷を食らった――倒立の要領で二人を狙う。それを避けられた隙をついて、連続でバク転し、ルイスの前まで飛びずさった。

「大丈夫か」

観客席からの「二刀流!?」だの「今まで本気じゃなかったってことか!?馬鹿な!」「ホントにナニモノ!?」とかいう声を無視し、ルイスがリディに声をかける。

リディはこめかみを伝って唇まで降りてきた汗を舐め、唇を歪めた。

「三対一どころか、二対一でも私じゃキツい。今のでやられてても全然おかしくなかった。…『三位一体（トリニティ）』の名前は伊達じゃない」

「そうか。スヴェン！一旦戻れ！」

張り上げられた声に、フィールド上で九十度程移動した場所で転がっていたスヴェンがむくりと身を起こし、猛然と走り出した。

「させない。」

『オクタ』の内二人が跳躍し、一体どこに仕込んでいるのかという量の暗器をスヴェン目掛けて擲つ。

「俺がそれを防げないわけないだろッ！」

ルイスが素早くウェーディを喚び、大量の暗器を吹き飛ばす。リディも牽制でナイフを投げ、その隙にスヴェンは二人の足元に転がり込んだ。

「怪我はないか」

「大、丈夫。すみません」

「気にするな。正直俺も舐めてた」

「さて、どうしようね」

一人『オクタ』から視線を外さず、リディが言った。頬から首に伝った血を、無造作に拭う。

「一対一ならともかく、三人まとめてこられちゃ私達三人で迎え撃っても無理だろ。なんとか分断しないと」

「そうだな」

ルイスは数秒、思索を巡らせ――よし、と頷いた。

「二人共、いいか――」

何やら作戦会議をしているらしい少年達を見て、『オクタ』は薄く笑った。恐らくこちらをどうにか分断してコンビネーションを崩そうというのだろうが、そんなあからさまな弱点をこちらが改善していないとでも思うのだろうか。だいたい、よしんば分断されたとしても、あの黒髪の少年にあたれば二人がかりで負ける可能性もなくはないが、銀髪の少年にはサシで負ける気もしない。

魔術士など懐に入れば一発だし、最後に黒髪の少年に三人でかかれば問題ない。

そんな思考を共有していると、相手に動きがあった。――やはり、剣士の二人が飛び出してくる。

「ツヴァイ、ドライは黒髪。銀髪は私がいく。」

「「了解。」」

フィールドの丁度中央で五人が激突する。アインスは銀髪の少年と刃を交え、その少年の強張った顔にくすりと笑った。…それが、いけなかったのかもしれない。

ドッ、と隣から鈍い音がして、思わずそちらに目を向け――驚愕した。

黒髪の少年が、ツヴァイに蹴り飛ばされてこちらに吹っ飛んできていた。その向こうで、ツヴァイとドライも唖然としている。多分牽制のつもりだったのだろう。…なのに彼が吹っ飛んでくる、それはつまり。

「今頃気づいても、遅いよ」

銀髪が微かに笑う。次の瞬間、アインスの躰は鈍い衝撃と共に黒髪に巻き込まれ、フィールドの東側に吹っ飛んだ。

「スヴェン！」

「はい！アーシェッ…！」

ゴゴゴゴゴ、という地鳴りが辺りを震わせる。俄に闘技場中が騒然とする中、フィールドの中央に馬鹿高い壁がせり上がる。

「なっ…！」

咄嗟にツヴァイが動こうとする時には、土の壁は到底人には飛び越えられない高さまで到達していた。

壁より東側で、起き上がった黒髪――リディは、敢えてまともに攻撃を受けたせいで痛む腹を抑えながらも、アインスに向かってにやっと笑った。

壁より西側で、壁を作ったスヴェンを後方に下がらせたルイスが、ゆっくりと自らの方に向き直る二人に向けて不敵に笑った。

「「さあ、さっさとケリをつけようか」」

―――――――――――――――――――――

「隣、失礼する」

ルイス達と『オクタ』の試合を、わくわくしながら観客席の最後列で観戦していたジョンは、出し抜けに横合いからかけられた声の主に目を向け――ぎょっと目を見開いた。

「デ、ディオさんっ！？」

それでも周りの注意を惹かないように小声に抑えたのは流石といえる。クラウディオは軽く会釈し、ジョンの隣に腰を下ろす。

「どうかしたんですか？俺に何か用でも？」

内心なにを吹っ掛けられるのかびくびくさていたジョンは（何しろ同じ『十強』と言っても格が違う）、強面に戦闘中のような鋭い光が灯っているのを見、眉をひそめた。

「ジョン。お前、あいつらの知り合いか」

あいつら？と、クラウディオの視線を追ってたどり着いた人物に、この状況じゃそりゃそうかと一人苦笑いして、何でもない風に頷いた。

「ええ。前一緒に仕事しましてね」
「何者だ。狩人か？」
「ええ。最初見た時は呆れたもんです」

視線の先で、姉妹の攻撃を上手く利用して一人を巻き込み黒髪の少年が吹っ飛んでいった。あれが実は少女だと知ったら、この会場はどんな反応を示すのだろうか。

「…ただ者ではないだろう」

遠回しな探りに、ジョンはしかし苦笑するだけに留めた。勝手にバラしたと知れたら何をされるかわからない。むろん自分が。

そのとき一際大きなざわめきが起こり、ジョンとクラウディオは同時にフィールドを見、前者はひゅうと口笛を吹き、後者は瞠目した。

「おお。ついに抜いたか」

今まで魔術士役に徹していた金髪の青年。彼が、銀髪の少年と役割を交換したかのごとく外套の下から長剣を抜き放った。

「ディオさん。よく見てるといいですよ」

ジョンは唇を持ち上げる。

「あの中じゃあいつが一番、強いんですから」

「は……？」

クラウディオが眉を寄せた、その後ろから。

「その話、詳しく聞かせてもらえますか…？」

どす黒く染まって響いた低い声に、一拍後、それぞれ《十強》のリーダーを務める二人の男は恐怖にひきつった面持ちでもって振り返った。

「多分このまま出し惜しみしてたら負けると思う」

数分前――作戦を伝えながらルイスは言った。

「あの三人相手にお前ら二人は正直荷が重い。だから悪いがスヴェン、お前は魔術使ってくれ」

「はい」

迷わずスヴェンは頷いた。自分では彼女達に対抗出来ないのは明白だ。

「まずスヴェン、リディで突っ込む。多分スヴェンに一人、リディに二人で来る。攻めずに防戦に徹して、機を見てリディ、スヴェンと戦ってる奴に向けて飛ばされろ。で巻き込んで引き離せ」

「…それ、つまり攻撃食らえってこと？」

「そ。ま、腹あたりが妥当だな。腹筋で踏ん張れ」

「簡単に言うね…まあ、やるしかないか」

そうして彼らの作戦は成功し――今に至る。

「あの子、剣も使えたの。」

向かい合う女の訊ねにリディは肩を竦めた。
リディから見て左手は馬鹿高い壁がそびえ立ち、向こう側の様子は一切窺えない。コンビネーション分断は上手く行った。

「どっちかっていうと剣のが本業。あいつは強いよ？」
「…あなたも、強い。」
「それはどうも。まあ日も暮れてきてるし、後続の為にもさっさと終わらせようか」

しゅっと逆手に持っていた剣を回転させ、片方を正眼に、片方を躰の横に構える。『オクタ』の一人も、短剣を構えた。

「……っ！」

数秒にらみ合い、ほぼ同時に地面を蹴る。キィン、と甲高い金属音が木霊した。

「っ、く」

『オクタ』の裏拳が肩を捉え、リディは顔を歪める。

速さは『オクタ』に分がある。リディも速度と手数重視のタイプだが、特化した彼女程ではない。
ただリディには、“王族”であるがゆえの身体能力と、速度で勝る自分の技量の上をいくルイスの戦い方を見てきた経験があった。
首の皮を掠め、脇腹を掠る刃を無視し、身を屈めて間合いを詰める。左肩から突っ込むようにして仕掛け、力を込めて左の剣を振り抜いた。

「っつ！」

剣先は『オクタ』の籠手を擦り、彼女は痛みに顔をしかめた。

（あの細い躰で、この力っ…！）

いつもならそのまま第二撃に移る所を身を引いて、リディは瞬間飛んできた針をさっとかわした。そして足元を一瞥し、にやっと笑う。

「使わせてもらうよ！」

リディが足元から引き抜いたそれに、アインスはぎょっとする。それは先程からの攻防であちこちに突き刺さっている、彼女達の暗器。

「やっ！」

鋭い気合いと共に擲たれる銀の針。それは初心者とは思えない速さと正確さで飛来し、驚愕した為に反応の遅れたアインスは紙一重で転がってそれを避ける。そして素早く起き上がった彼女の視界に、黒髪の少年はいなかった。

「なっ、どこにっ…」

前は勿論左右にも後ろにもいない。狼狽した彼女の耳に、「ここだよ」という軽快な声音が届いた――上から。

上方――アインスの真上から、黒髪の少年が落ちてくる。否、跳躍を終えて向かってくる。

「ありがとう、楽しかったよ」

幼さの少し残る顔でにこりと笑い、少年は咄嗟にアインスが構えた短剣ごと、アインスに剣を振り下ろした。

一方――。

「ま、こんなもんだろ」

ルイスは肩に剣を担ぎ、息を吐いた。左手は途中で攻撃を食らった為にぶらりと下がっているが、細かな傷を除けばそれ以外はほぼ無傷に近い。

左右少し離れた所には『オクタ』の二人が倒れている。

（す…凄い…）

それら一部始終を目に収めたスヴェンは、ごくりと唾を呑んだ。鍛錬の時などから強いのはわかってはいたが――。

リディが相手の力を利用する柔の剣だとするなら、ルイスは剛の剣だ。かといって力任せな訳ではなく、相手の剣筋の先の先まで読む思考力と冷静さ、それを踏まえた最適な道を見つける早さ。何より、単に力任せにせずとも、もともと充分の力強さ。氷のように鋭く在りながら、岩のように重い。そんな剣だ。

ツヴァイ、ドライの神速のコンビネーション攻撃を落ち着いて捌き、強打によって作った隙を突いて迎撃。リディはどちらかというと攻撃特化タイプだが、ルイスは違う。守りにも攻めにも強い。でなければ、あの凄まじい応酬を防ぎきった上での反撃など、出来はしない。

「スヴェン、壁戻していいぞ」
「あ、うん」

はっと我に返り、慌てて土精霊に命じて壁を崩させる。みるみる内に視界が晴れ、その向こうからリディの姿が見えた。

「怪我ないー？」

手を振ってやってきたリディは、真っ先にそう言った。ルイスがひらひらと手を振る。

「ま、打撲と擦り傷程度だな。そっちは？」
「私もそんな感じ。あでもちょっと脇腹痛いかも…。さて…」

揃って観客席を見上げる。今や怒号の飛んでいるそれは、多分『オクタ』に賭けていた人数を物語っている。ジョンの高笑いが目に浮かぶようだ。

『しょ、勝者スヴェン・アイヒホルン！い、いったい…』

司会者も困惑を隠しきれない。

狩人最高戦力がひとつ、『オクタ』が名も知れぬ若造に敗れたの

だ。この場の誰もが予想し得なかった事態に動転するなという方が無理だろう。

「…うーん、やり過ぎたか」

しまった、と剣を納めたルイスが頭をかく。つい熱くなってしまったが…自分達の目的は、違う場所にあったのではなかったか。

「ここまで来たらいっそバラした方がいい気もするんだけど」

耳を塞ぎながらリディが言った。下手に痛い腹を探られては困るのだ。

このまま控室に下がるのもどうかと思い、どうするか、と考えあぐねていた時。

「ルイス・キリグ！リディ・レリア！君達は何をやっているんですか！？」

数千の観衆の喧騒を貫き、一つの凛とした声が場を打った。

「げ。名前…」

リディが顔をひきつらせるのを余所に、ルイスは声の主を探す。程なく、観客席の最上階に男――何故か項垂れているジョンとクラウディオを従えている――が仁王立ちしていた。黒髪を七三分けにし、眼鏡をかけた上にシワひとつなさそうな礼服を着て、パッと見城の文官のようだ。が、その印象は本人が否定した。

「わたしはハイレイン狩人協会支部長、ジークリード・クラインで

す！そこの現『ヘキサ』、旧『自由時間（フリータイム）』、ルイス・キリグとリディ・レリア！君達は三ヶ月の間報告をすっぽかした挙句、何故そんなところにいるんですか！」

あ、終わった。

ルイスとリディは同時に思った。どうしようか悩む必要などなかったのだ。ここまで徹底的に暴露された上で取り繕うことなど不可能だ。

勇気ある司会者が、怒り心頭といったご様子のジークリードに恐る恐る声をかけた。

『あ、あの、ハイレイン狩人協会支部長殿…その、彼らが『ヘキサ』というのは…』

「部外者は黙っていなさい！」

『はいいいっ！』

が、凄まじい一喝に悲鳴をあげてすっこんだ。…あの剣幕相手だ、無理もない。観衆も一様にビビっていた。

だがこの状況、試合の進行に多大な悪影響となっていることは間違いない。まだ二試合残っている訳だし、せめて場を変えなければならない。

そんなルイスの焦りに助け船を出したのはシルグレイだった。

「ジークリード、ここではなんだから場所を替えてくれ。次の試合が出来ん。一室用意するから話はそこで」

「…そうですね。わたしとしたことが頭に血が昇っていたようです。…そこの三人、聞いていましたね？さっさと部屋にくるように」

「…了解」
「…スヴェンもかよ。…ごめんスヴェン」
「いい、ですよ。僕も今は貴方達のパーティ、ですから」

ルイスら三人は満場の視線を浴びながら、控室の方に戻っていく。
その頃になってようやく治療術士達がフィールドに入り、『オクタ』に駆け寄ったことで、試合は終わりを迎えた。
こうして三回戦第二試合は、波乱の内に幕を下ろしたのだった。

第十話　安寧への撃鉄　（8）

第十話　安寧への撃鉄　（8）

「ですから、狩人には報告義務があり…！」

場所は変わって、闘技場内のとある一室。ルイス、リディは床に正座をさせられガミガミと説教を食らっていた。スヴェンはそれをおろおろと見ている。

「ましてや死亡の噂が流れていると知りながら、生存報告もせずに正体を明かさず大会に出るなど、言語道断です！」

その通りすぎて、リディはともかくルイスも言い返せなかった。

確かに最初協会を訪れた際彼は留守だったが、日を改めれば会えたはずである。それを怠った手前、反論する術がなかった。

「でもまあ、一先ず報告を聞きましょうか。椅子に座りなさい」

一通り説教すると、ジークリードはため息をついて三人にそう促した。ルイス達は顔を見合わせ、おずおずと備え付けのソファに腰を下ろした。

この部屋に案内してくれたスタッフが淹れた、すっかり冷めてし

まった紅茶を不味そうに飲みながらジークリードは淡々と言う。

「君達がシュリアグランデの事件を解決したのは知っています。その直後姿が消えたともアリステア殿から聞きました。また、君達の魔力押印を持った人間が荷物を引き取りにきたとも。ですがそこから先約三カ月の間、君達を見た者はいません。何があったのですか」

ルイスとリディはちらりと互いの目を見交わし、ルイスが口を開いた。

「報告を怠ったことについては謝罪します。しかし、何があったのか――ということに関しては、申し訳ありませんがお話しできません」

ジークリードの灰色の目が鋭く光る。

「どういうことですか？」

「ご存知かと思いますが、俺達は貴族出身です。そのことで少々ごたごたがあったと申し上げる他ありません」

「…つまり、御貴族様の事情には首を突っ込むなと？」

冷たい口調に、ルイスは首を振った。

「そういう意味ではありません。ただこの件をお話ししてしまえば俺達以外にも害が及びます。あとは…知ってほしくない、という俺達の個人的な願いです」

「…前半はともかく、後半は身勝手にしか聞こえませんが？」

「そうですね。でも、秘密のひとつやふたつ、誰しも持っているものじゃありませんか？」

ジークリードは目を眇め、ルイスを突き刺すような目線で見る。
ルイスは黙ってそれを見返した。息詰まるような沈黙を、しかし別の声が遮った。

「どうしても納得出来ないなら、アリエルの狩人協会支部長に訊いてみたらいい」
「…は？」

リディは金色の目で真っ直ぐジークリードを見据えていた。どこまでも強いそれに、ジークリードは少したじろぐ。

「あなたが本当に信用出来る相手なら、マスターは話すよ。あのひとの判断なら私は従う」
「ちょ、リディ…ていうかあのひと、俺達の素性なんて知ってるのか？」

幾分慌てているルイスに、リディは片目を瞑った。

「前私がアイルで、君すら知らなかった情報を持ってたことがあったろ？」
「あ、ああ」
「あれね、所謂裏社会の情報網使ったんだよ。教えてくれたのが、マスター」
「……」
「あれ以来使わないようにしてるんだけどね。下手に流れても困るしさ」

裏社会の情報網は、表とは比べ物にならない程広く、細かい。取り扱いには細心の注意が必要だがその分有益なのは確かだ。
そしてそこなら、彼らふたりの情報があってもおかしくない。

あのひと本気でナニモノなんだ、いや元『十強』か、とルイスが悶々としていると、向かい側から大きなため息がつかれた。

「…わかりました。これ以上の下手な詮索はしません。少々出過ぎた問いをしたことを謝ります」

ルイスもリディも、そして半ば以上蚊帳の外に置かれていたスヴェンも目を瞠った。

ジークリードが眼鏡をを人差し指で押し上げながらだいたい、と愚痴る。

「アリエルのあの方を出されてそれ以上口を出せる者などいますか。たいがい君も人が悪いですね」

「え、あ、はい？ええと、別に私は一番信頼している狩人協会支部長を上げただけで…もしかしてあの人有名なの？」

これにはジークリードが絶句した。信じられないものを見るような目でリディ達を凝視すると、まさか、と前置いて言った。

「…もしや君達に、あの方は名乗られていないのですか？」

「え？んなバカな。名前くらい…」

言いかけてリディは言葉をなくした。真ん丸く見開いた目をルイスと交わす。

「…知らないや」

「…知らねえな」

聞いていたスヴェンはガクッと滑った。

（いいの!?それでいいの狩人って!?）

一方ジークリードは再び大きなため息をついた。一気に疲労の溜まったような表情で首を振る。

「…そうですか。ではわたしも申し上げません。あの方なりの考えがあって名乗っていないのでしょうから」

「…なんかそれ余計気になるんだけど」

「諦めなさい。…それより、まだ話は終わっていません」

一息で弛緩しかけた空気を拭い、ジークリードは再び姿勢をただしてルイス達と向かい合う。

「君達の口振りからすると、目立つのにメリットはないのでしょう。では何故、大会に出場しているのです?」

それに対してルイスが口を開く前に、がちゃりと扉が開いた。

「それに関しては私達がお答えしましょう」

室内に入ってきたのは、この国の最高権力者の二人だった。ジークリードが目を瞠り、ルイス、リディ、スヴェンがさっと立ち上がって席を譲る。それに軽く微笑んでから、クリスティアーナはジークリードに向かって優雅にお辞儀をした。

「昨日ぶりですね、ジークリード。この度は混乱させてしまって申し訳なく思います」

「いえ、女王陛下」

ジークリードもすっと立ち上がり、胸に手を当て丁寧に腰を折る。

「ご機嫌麗しく、女王陛下並びに王弟殿下。…単刀直入にお訊きしますが、どういったご関係で？」
「友人兼、依頼人だ」

シルグレイが答え、空けられたソファまでクリスティアーナをエスコートしてから自身はその斜め後ろに立った。ルイス達三人は既に壁際まで退いている。

「依頼人…ですか」
「ええ。貴方も聞き及んでいることでしょう――イグナディアの現状を」

ぴくりとジークリードが身じろぎする。スヴェンは少し眉を寄せた。それらを確認しながら、クリスティアーナは続けた。

「かの国とはこの凡そ二月半程、連絡が取れていません。…かの国側から強力な結界が張られているから、というのは既にお伝えしましたわね」
「はい。入ることも出来ず、恐らくは出ることも出来ない――異常なものだと」
「あれは実は、人の手によるものではありません。魔族の手によるものです」

ジークリードの顔が、驚きと畏れで強張った。数秒のち、自分を落ち着ける為か、敢えて感情を窺わせない声音で訊ねる。

「魔族――とは、なぜ」
「わかりません。ただ約三カ月前、ちょうどイグナディアが閉ざされる少し前、エーデルシアスの式典があったことを覚えていますか」

無言の首肯に、替わってシルグレイが後を引き継いだ。

「これは箝口令が敷かれているが、…許可もあるし特別にお話しする。その場に、魔族が現れた」

「……！」

横目でルイスの頷きを得ながら、シルグレイは言葉を慎重に選んで紡ぐ。

「子細は話せん。だが、魔族は数名を殺し、我々に言った。『イグナディアに来い』と」

「……」

「だがその場にいた者達は、殆どが国の大貴族、つまりは重鎮だ。そうそう国を離れられる者はなく――かろうじてこの二人くらいが、身を空けられかつ魔族にも対抗できる実力を持つという条件を満たしていた。…まあ、それまでの実績もあったがな」

暗にそれまでの狩人生活を示す言葉にジークリードは呆れた。

（つまり先程の『実家のごたごた』はそれですか。そんな高い立場にいる癖になぜ狩人などやっているのでしょう、この二人は）

一方ルイスとリディは冷や汗ものだった。

合っているのはそもそも基盤だけだ。色々ツッコミ所がありすぎて笑えない。

「イグナディアが閉ざされて一番被害を受けているのはアーヴァリアンだ。そこで私と姉上はこの二人に依頼して、イグナディアに乗り込ませることにした」

「ですが、たった二人では死にに行くようなものです。ですから私が彼らに大会に出るように指示し、実力者を見定めるように言ったのです」

スヴェンはそうだったのか…と一人唖然としていた。ルイスやリディが貴族だろうとは所作から解ってはいたが、王族に連なる者だったとは思わなかった。だが、逆説的になるがそれならばあの強さも納得がいく。

「そして、彼らが協力を頼みたいと言ったパーティに、私の方から狩人協会を通じて依頼の形を取るつもりでいました。少々予定が狂いましたが」

「……」

ジークリードは少しの間考えに耽っていたが、不意にルイスとリディを見た。

「具体的に君達は誰に頼もうと思っているんですか？聞くまでもないかもしれないけれど」

「『ジィ』と『ノナ』、『テトラル』。『オクタ』も考えましたが、彼女達は魔術が使えない。相手に魔術を使わせずに倒すと言っても、それはあくまで人間相手です。人間より遥かに強い魔族や大量の魔物を相手に、魔術師がいないパーティは不適です」

「成程。それだけで相手の危険度がわかりました。…私は魔族というものに遇ったことがありませんので、今ひとつぴんときませんが…そこまで強いのですか？」

「相手は違うけど具体的に言えば、私達二人と『大刀のオーギーン』でかかっていっていいように遊ばれたね」

淡々とリディが言えば、ジークリードは絶句する。

現在の『神槍クラウディオ』がそうであるように、『二つ名持ち』は、狩人ヒエラルキーのトップに十強が君臨するのであるとすれば、十強ヒエラルキーのトップに位置している。その中のひとりとこの『ヘキサ』でかかっていって遊ばれた、とは冗談ではないのか。

「残念だけど冗談じゃない。…魔族についてはわかってないことも多いけど、相対した人間から言わせて貰えば――常軌を逸してる。上位竜ですら敵うかどうか。…まあ、魔族の中でも王様みたいだったけどね、あいつ」

リディの台詞にようやく思考が追いつき、彼は唸った。

「セティスゲルダ、ですか。…式典に現れたのは奴ではないのですか？」

「違います。エカテリーナ、とか名乗っていました」

「…少なくともここ二百年ほどの歴史では初めて聞く名ですね。…わかりました。そのように手配します…と申し上げたいのですが、ひとつ…『テトラル』は既にこの街を去りました」

少なくない驚きがジークリード以外の五人に下りる。数秒のち、残念、とリディが呟いた。

「じゃあ『オクタ』を…」

「申し訳ありませんが、それも出来ません。…このような大会はともかく、一つの国に『十強』が五つも集まるのは大陸全体から見て危険です」

「五つ？」

胡乱な声に、ジークリードは頷く。

「あなた方『ヘキサ』、『ノナ』、『ジィ』、『オクタ』。そして二ヶ月半前にイグナディアの国内から本部に報告が届いたきり――『ペンタ』とは連絡が取れません」

息を呑む音があちこちの喉から発された。敢えて淡々と彼は進める。

「通常『十強』は大陸各地に分散し、一般狩人には手出しできないような事例が出た場合に担う責があります。ですから、このような短い大会期間中はともかく、いつまでかかるかわからない今回の件に半分を配すことは出来ません」

四つと五つ。数の差は小さいようで大きい。

「しかも今、フェルミナ・ザイフィリア間での戦争が悪化しています。あちら側にも、昨日向かった『テトラル』、及び『トリル』がいます。あちらはあちらで何やら手に負えない事件が起きているそうですが…本部は、これ以上の戦力の一極化を避けたいそうです。何やらきな臭い雰囲気も漂い始めていますし」

「…わかりました」

応えたのはルイスだった。クリスティアーナ達の視線を受けながら、蒼い目に静けさを浮かべてジークリードを見つめる。

「この大会が終わり次第、俺達は『ジィ』『ノナ』と共にイグナディアに向かい、『ペンタ』と合流して早急に事態の打開に当たります。それでよろしいでしょうか」

ジークリードは隣の少女とは対照的に感情の読みにくい瞳を見返

し、深々と頭を下げた。

「…ええ。頼みます。では陛下、」

「はい。報酬はアーヴァリアン王家が言い値を払いましょう。――スヴェン。貴方はどうしますか？」

それまでぼんやりと次第を眺めていた少年は、不意の従姉の言葉にびくりと目を見開く。リディが眉を寄せた。

「クリスティアーナ様、それは…」

「今この子は貴方達のパーティの一員なのでしょう？ですから訊いているのです。この国に残るか、それとも死地かもしれぬかの国へ向かうか」

「クリスティアーナ様！」

非難の籠ったリディの叫びを、しかしクリスティアーナは無視してスヴェンだけを見据え続けた。

スヴェンは戸惑ったように従姉を見返し、次いで黙って見守る従兄を見、狩人協会の人間を見――最後に少しだけ年上のふたりを見た。

色の違う二対の瞳。金は従姉への憤りと心配を浮かべ、蒼は黙って静観している。

スヴェンは束の間、この三日を思い出した。剣の勝負から始まり、寝食から鍛錬、そして試合も全て共に過ごしたこと。そこで得た、温かさ。優しさ。そして――毅さ。

それに対して自分は何かを返せるのだろうか。

（僕じゃこのふたりの盾にはなれない。僕は、ふたりより弱い。――でも）

スヴェンはすっとクリスティアーナと目を合わせた。

「――行きます」

（ほんの一瞬くらいの、足止めくらいならなれるから）

――――――――――――――――――――――――

「本当に馬鹿！死ぬかもしれないんだよ！なんで来るなんて言った！？」

あのあと、スヴェンの返答を聞いたクリスティアーナは顔色を変えたリディの抗議を聞かず、一瞬だけ寂しそうに笑うとあっさり頷き、ジークリードに処々の手続きを伝えるとさっさと城に戻ってしまった。…ちなみに、試合自体は二人がジークリードに説教を食らっている間に終わっていたらしい。

そして今、やはり城に戻ってきたスヴェンは、ルイスと彼とで寝泊まりしている一室で、リディから激しい叱責を浴びていた。

「私達は義務もある『狩人』だ。だけど君は私達の仲間というだけで『狩人』じゃない。だから君が来る必要はない、スヴェン！」

この三日、ルイスと口喧嘩をすることはあっても怒りなど見せたことのなかった彼女。それが今、真っ正面からスヴェンに叩きつけられている。殺気に似たそれは正直言うと怖かったが、スヴェンはそれを押し流す。

「わかってる。でも、決めたんだ。…アーヴァリアンの、依頼なんだから、アーヴァリアンの人間が、いた方がいい、でしょう」
「そういう問題じゃない！そんなものはどうにでもなる！万が一死んだらどうする気！？あのね…！」
「まあ待て、リディ」

と、それまで沈黙を守っていたルイスがリディを羽交い締めにした。放せ！と暴れるリディを抑え、ルイスは感情を窺わせない瞳でスヴェンを見下ろした。

「スヴェン。本当に死ぬかもしれないぞ。待っているのは本気の殺し合いだ。その覚悟がお前にあるのか？」

静かな問いに、スヴェンは微笑する。

もう決めたのだ。死を恐れ怯えるくらいなら、一矢でも報いて死ぬ、と。

その微笑に、ルイスは全てを読み取ったらしかった。ため息をつき、苦笑を返す。

「解ったよ。俺はお前の意志を歓迎しよう」

「ルイスっ！」

途端に非難の声を上げたリディをルイスが宥める前に、スヴェンは小首を傾げて訊ねた。上目遣いの菫色の瞳が、哀しそうな色を帯びる。

「リディは、僕がいると邪魔？」

「……っ！？」

リディは暴れるのも忘れて絶句、ルイスもぽかーんと顎を落とした。

ややあってルイスがリディを放し、その場で腹を抱えて爆笑し出す。

「え？」

スヴェンは何か問題なことを言ったか？と困惑した。単に思ったことを言ったまでなのだが。

「…これはっ…くくっ、将来が楽しみになってきたっ…」

途切れ途切れに笑いの間から言葉を漏らすルイス。それを苦虫を噛み潰したような目で睨むと、リディは頭をがしがしとかきむしって呻いた。

「～ッ、邪魔な訳ない！くそっ、そんなこと言われたら怒れないだろ、馬鹿！」

乱暴に言い捨てると、リディは足音も荒く部屋を出ていく。困惑したまま追うべきかと悩んだスヴェンを、未だ笑い止まないルイス

が止める。

「いい、ほっとけ…照れてんだよ。しかしお前天然タラシときたか。うん、面白い」

肩を揺らすルイスと、訳が分からず首を捻るスヴェン。

武術大会の本選を控えた夜は、静かに更けていった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

『さあ、皆さんお待ちかね！いよいよ武術大会も最終日！団体戦も本選を迎えました！』

わあああああ、という歓声。耳をつんざくそれに、しかしいい加減慣れたのかリディは反応を示さなかった。ただ腰に下げた剣を確かめ、鬱陶しげに髪を払う。

正体を隠していたことで一騒動あるかと思っていたが、賭け対象外申請をしていたことで色々手が回ったらしい。野次や罵声は聞こえる限り飛んでこなかった。

『本選第一試合！役者は無名の新人かと思いきや、巷で噂の異例の二人パーティ、『ヘキサ』を従えたアーヴァリアンの神童、スヴェン・アイヒホルン！対しては傭兵の中でもトップクラスと云われ、

仕事に失敗したことがないという凄腕、ラファエル・エルナデス！
さて、どのような勝負を見せてくれるのか！』

「あんたら『ヘキサ』なんだってな。『オクタ』と相手しなくていいと思ったら序列上がくるとは。ついてないな」

司会者の声を背景に、明るい茶髪に緑の眼の男はそう言って笑った。

「それは悪かったな。だが譲る気もないぜ」
「別に譲れとは言ってないさ」

不敵に笑う男。その後ろでは、魔術師らしき男と鎖を腰に下げた男がこちらを黙って観察している。
リディとスヴェンは目を見交わして互いの担当を決めた。
司会者が観客を煽るのを止め、こちらの動きを伺っているのを悟り、男はルイスに片目を瞑ってみせた。

「そんじゃ、観客待たせんのも悪いしとっとと始めるか？」
「俺に依存はないな」

二人は腰からそれぞれ得物を手に取る。それを見て、後方にいる計四人も戦闘態勢に入った。

『――はじめっ！』

高揚からかやたらと大音量の合図と共に、ルイス、ラファエルは地を蹴った。

中央部で剣がぶつかり合うのを横目に、リディは素早く聖属性結

界を構成する。一息で三つを作り上げ、ひとつを自ら、残りの二つを横の少年と金髪の青年向けて放った。
自分の身が強い結界に覆われるのを感じて、スヴェンもまた地を蹴りつける。ゆったりしたローブを羽織った男目掛けて剣を振りかざし――直後横合いから足を取られて地面に引き倒された。

「っ！？」

咄嗟に最低限の受け身をとって衝撃を緩和してから痛みを堪え、何が起きたのかを確認する。答えはすぐに出た。

（鎖っ…！）

右足の茶色のブーツに、鈍い光沢を持つ分銅がついた鎖が巻き付いていた。

「スヴェン！」

遠くからの警告。はっと顔を上げたスヴェンの目に、大きな火の玉が映った。
ここで退場か、と彼が歯噛みした時、彼の前に細い躰が飛び出す。黒髪が炎に照らされ赤く染まる。そして掲げられた手の寸前で、火球はぴたりと停止した。

「この私相手に火なんて、いい度胸じゃない？」

少女の目の前で燃え盛る炎。唖然とする周囲を余所にリディは嫣然と笑うと、「フレイア」と己の精霊の名を喚んだ。呼応して火球が小さくなり――だが、その色は赤から青へと変わっていく。
それにつられるように青ざめた相手の男達目掛けて、にっこり笑

みを浮かべたままリディは今や掌大に凝縮された青い玉を打ち出した。

凄まじい速度で吹っ飛んでいく青い火。それをすんでのところで魔術師と鎖を操る男は避けた。彼らが寸前までいたところに火球は着弾し、轟音と共に大穴を開ける。

「……」

「中位程度の火じゃ私には通用しない。…スヴェン、立てる？」

「え、あ、うん」

スヴェンは慌てて立ち上がる。右足を捕らえていた鎖はいつの間にか解けていた。

「…冗談きついな、おい。吸収して跳ね返してくるなんて聞いたことないぞ」

魔術師がひきつった声で言った。リディは首を傾げる。

「そう？別に少なくないと思うけど」

「基準おかしいぞそれ」

「君が弱いんじゃなくて？」

「失礼な！そんなわけないだろう！」

「まあ私もこれできるのは炎だけだけど」

肩を竦め、リディは剣を構える。スヴェンもその後ろでそれに倣った。

「エザク、防御は任せろ。魔術を攻撃主体にするぞ」

鎖を回しながら男が魔術師に言い、エザクと呼ばれた魔術師は頷いた。

「――行くぞ！」

「あっちは派手にやってるなあ」

「魔術戦だしな」

一方、ラファエルとルイスはひたすら打ち合っていた。隣から爆音が聞こえようが悲鳴がしようか、二人の剣は止まらない。それはお互い、自分の仲間を信じているからだ。

「しっかしお前やるなあ。いくつ？」

「二十歳」

「げ。俺より六も年下？負けらんねーなおい」

「体力は俺の方がある。だから負けろ」

「やだ」

子供のような返事をして、ラファエルは薙ぐと見せ掛けた剣筋を斜めに変えて切り上げる。ルイスは髪数本を犠牲にそれを避け、お返しとばかりに足を跳ね上げた。

「うお、あぶねっ」

間一髪で避け、転がる男。それは追わず、ルイスは息を整える。

（強い、こいつ…）

飄々とした、を体現するような戦い方。変幻自在で先が読みにくく速い攻撃は、一瞬でも油断したらやられそうだ。

ちら、とルイスは斜め背後を見る。リディとスヴェンは攻守を変えながら善戦している。上位程度に封印しているとはいえ、魔術も用いているリディがいるならまず大丈夫だろう。

「問題は、俺か」

目にかかる、切り忘れて伸びてしまった前髪を払い、数歩離れた位置にいる男を見据える。彼は不敵に笑い、ルイスを見ていた。

「――ま、ここまで来たら負けたくないしな」

ふっと唇の端を持ち上げ、ルイスは何度目かの攻撃に飛び込んでいった。

「うーん、埒があかない」

炎と風を操りながらリディがぼやいた。その時は剣で鎖を弾き返していたスヴェンは、振り向かぬまま「なに、が？」と訊ねた。

「お互い決定打がないんだよ。鎖の方は言うに及ばず、あっちの魔術師も専念してからの防御力は感嘆もの…まず破れない。私が全力出したならともかく、そんなことしたら闘技場ごと吹っ飛ぶし」

「……」

「まあ消耗戦になっても魔力量じゃ負ける気しないけど、それも微妙だろ。あの結界どうにかして片つけたい」

「…結界解読、は？」

「あれ一応極秘技術。それに時間もかかるんだよ。その間に魔術食らってやられる。あれ、設置型の結界には使えるけど対個人に使うにはちょっと重い」

「…じゃあ」

「やっぱり力押ししかないよね」

愉しそうなリディにスヴェンはげんなりした。その間も飛んできた小さな火炎弾を水結界で相殺する。

「…闘技場、吹っ飛ばさないで。修繕費、馬鹿にならない」

「…真面目な意見だね…でも集束させれば多分平気だ」

「…集束？でも、火じゃ…」

魔術を発現するのは精霊だが、その発現形状、こめる魔力を調整するのは魔術師だ。集束とはそのまま、力を小さく凝縮して威力を尖鋭化させる、言わば槍の穂先を極限まで研ぎ澄ませるような形状指定のことだ。

しかし火と、もうひとつ風はその性質上、威力は大きいが一ヶ所

に集束しにくい。それは先程のリディが打ち返した火球からも解る。どれだけ凝縮しても、やはり火や風は基本周囲に力を分散させながら相手を砕く攻撃方法だ。つまり集束には向いていない。

細かい調整に向いているのは雷、水である。

そしてスヴェンはまだ穂の先だけを鋭く研ぎ上げる技術は持っていない。

どうするつもりか、とリディを見上げれば、彼女は悪戯っぽく片目を瞑った。

「切札っていうのは残しておくものだよ？」

「キリがないな…」

同じ頃、対峙する魔術師達もリディ達と同じような台詞を吐いていた。こちらは元々攻撃の主体はラファエルで、少年達のように全員が攻守を担当できるわけではない。男は完全に補助だし、魔術師にしても防御の方が得意だ。

だがあの黒髪にしても、火魔術の威力はいっそ異常だが、他を使ってこないのを見ると一属性なのだろう。そして劣るとはいえこちらも火属性なのだから、致命的なダメージを負うことはない。

「ラファエルが来るまで保たせよう」
「だな」

金髪の青年と戦う彼らがリーダー。彼が負けるとは二人とも思っていない。そして彼が加わりさえすれば打破できる。
今勝負がつかないなら拮抗状態を保ち続ければよい――しかしその目論見は、突如浮かび上がった巨大な土塊に遮られた。

「そのまま叩きつけて」
「はい」

スヴェンの手の動きに沿って、浮遊していた土塊が二人の男目掛けて墜ちる。しかし寸前で強化された結界がそれを砕き、バラバラに砕けた欠片や砂塵がその場の人間達を打ち、視界を塞ぐ。

「あ、危なかった…」

魔術師は若干青ざめながら結界を見上げ、鎖を扱う男も冷や汗をかいていた。
この視界ではこちらも向こうも何も出来ない。結界を緩めぬまま、徐々に晴れていった視界に、少年達の姿はなかった。

「なっ!?」

素早く背中合わせになるも、左右前後に姿はない。だが二人はは

っと上を見た。

「いた…！」

昨日の試合。あの黒髪は、尋常でない跳躍力を発揮して空中から『オクタ』を破ったのだ。今日は銀髪の風魔術を使っているようだが。

読みがあたり、喜色を浮かべながら魔力を練ろうとした魔術師は、しかし不意に顔をひきつらせた。

「どうした？」

仲間の声に応えられない。宙に浮かび、こちらを見下ろしている黒髪――その手に集束しているのは、火ではない。

「うそ、だろ…」

黒の指貫き手袋から覗く白い手に、白い光がまとわりついている。掌でパチパチと音を立てているそれは、――雷。

「おい、結界…！」

「わ、わかってる！」

魔術師が魔力を追加し、結界強度を上げる。

同時に掌に魔力を集束させきったリディは、それを地面めがけて打ち出した。

「わあああっ！！」

上がる轟音。五本に分けられたそれは、魔術師の張った結界を貫

いて、二人を取り囲むように地面に穴と焦げ目を作っていた。

「ちょっと痛いけど、悪いね」

穴の開いた結界が霧散していくのを呆然と見ている敵の魔術師にっこり笑って手を振り、リディは精霊に最後の命令を下した。

「解放していいよ、サンディルナ」

――五つの穴。強烈な雷によって空けられたそこにはまだ、魔力によって留められた雷が残っている。傭兵二人を囲むそれらは、リディの言葉によって解き放たれ――放電した。

「「うぎゃあああああ！！」」

響き渡る絶叫、静電気を拡大化したような音響。

それが終わった時には、地面にはぷすぷすと体から煙を上げた男が二人、気絶していた。

別に行われていた戦闘、その結果にラファエルは一瞬自失した。

「なっ…」

「…派手にやりやがったなアイツ」

舌打ちしてルイスは剣を振るう。剣先は反応の遅れたラファエルの目尻の下を擦り、彼は悪態をついて後退する。

「お前の仲間二人ともやられたし、降伏する気ないか？」

ルイスは剣を構えながらそんなことを訊ねた。ラファエルはその間に自分を立て直し、諦観の漂う笑みを浮かべる。

「まさかやられるとは思ってなかった。――だがこうなったら、俺だけでもやられる訳にはいかねーよ」

リディとスヴェンは地面に降り、自分達が倒した相手の様子を見ている。一瞬こちらを見たリディと目線を交換してから、ルイスは笑みを返し、「そうくると思った」と地面を蹴った。

薙いだ剣先はかわされ、代わりに地面と水平に剣が振るわれる。ルイスはそれをしゃがみこんで避け、足払いをかけた。が、空ぶった。

「っと！」

態勢を立て直し、一合、二合と剣戟を重ねる。十数合目で、ラファエルはルイスが肩に振りかぶった剣目掛けて突きを放とうとした。剣を落としてしまえばそれまでだ。魔術を使えるのはわかっているが、その前に決めてしまえばいい。

その目論見を元にルイスの剣の平を正確に捉え――あっさりとそれが吹っ飛んでいったことに驚愕する。

「な――」

剣を攻撃に合わせて手放したルイスは瞬時に身を丸めると、一瞬たわめた膝のバネを使って思いっきり肩から相手の腹に突進した。

「…いっ」

「がぁっ…！」

予想以上に固かった腹筋にルイスが顔をしかめ、その場で前のめりになる一方、ラファエルは背中から吹っ飛んでいく。

それでもなんとか倒れまいと地面につけた足は、だがしかし土ではない感触に滑る。

「え」

傾く視界に剣を交えていた青年が映る。彼は倒れながらも手を前に突き出し、こちらを見て苦笑していた。

背中が地面に打ち付けられる。一瞬神経に走った嫌な痛みを堪え、跳ね起きようとしたラファエルに、しかし鼻先に真上から剣が突きつけられた。

「はい。終わりでいい？」

にっこり笑って自らを見下ろす黒髪の少年――いや、少女にラファエルは大勢を悟り、剣を手放して起こしかけた背中を地面につけ、両手を頭の横に上げた。

「ああ。降参だな」

一瞬の沈黙、のち大歓声が沸き起こった。

第十話　安寧への撃鉄　（8）（後書き）

次で終わる、かな…？（汗

第十話　安寧への撃鉄　（9）

第十話　安寧への撃鉄　（9）

「坊っちゃん――いや、嬢ちゃん。いつからあいつと手際を決めてたんだ？」

蜂の巣をつついたような騒ぎの中、束の間敵であった少女に手をとって助け起こされながら、ラファエルはリディに訊ねた。

最後の、彼が足を滑らせた原因。それはルイスが作った氷のせいだ。そして自らが転んでからそこまでしたのは、彼女が確実に止めを刺す為。だがそれを打ち合わせたのは、一体いつだ？

リディは少し目を丸くしてから、

「合図あったし。ほら、最後の打ち合い始まる直前」

とあっさり応えた。スヴェンは半ば呆然と首を振る。

合図といっても、せいぜい目配せ程度だ。なんであれで読み取れるのだろうか。

ラファエルも唖然としていたが、やがて肩をくつくつと震わせ、ついには腹を抱えて笑い始めた。

「くくっ、そりゃあ敵わねえや…ははははっ」

いきなり笑い出したラファエルにリディは若干引いたが、その肩を剣を回収してきたルイスが叩く。

「お疲れ。派手にやったな。スヴェンも」
「そっちこそ。怪我平気？」
「あーまあ、すぐ治せる程度ではあるだろ」

苦笑するルイスは、リディやスヴェンより遥かに汚れ、あちこち裂傷や擦過傷がある。だが、リディは彼が右肩を動かさないようにしているのに目敏く気付いた。

「肩。痛めてない？」
「……だから治るって」
「早く言え」

リディはつと彼に手を伸ばし、魔力を込めようとする。だがそれをルイスは止めた。

「なんだよ」
「こんな人目のあるとこでそれ使うな。だいたい自分でも治せる」

ルイスは左手を軽く振り、リディから離れる。それからラファエルを見上げて首を傾げた。

「肋、平気か？」

ラファエルは唇を歪める。

「…いい根性してんなぁお前。一本くらい折れてっかもな。ま、治

療術士に治させるさ。…それより」

一端言葉を切って、彼は客席の一ヶ所を一瞥する。つられて視線を向けたルイスは、そこに『ジィ』を見つけて表情を差し替えた。ラファエルは意地悪く笑う。

「勝算は？」
「…高く見積もって二割だな」
「あり。じゃ、賭けねえ方がいいか」
「やめといてくれ。責任取れない」
「真面目だねぇ。まあ、俺でもそう言っただろうがな。健闘を祈っててやるよ」

軽く手を振り、彼は呻きながら起き上がった仲間の元へ歩いていく。

「ルイス、スヴェン、行こう」
「ああ」

リディの声に肩を竦め、ルイスはスヴェンを伴って控室に退いた。

「さて、いよいよ次は決勝戦なわけだが。どうする？」

各々怪我を治し、本選第二試合の喧騒を背景に三人は額を寄せ合っていた。

「『ジィ』だろ。もう当たって砕けろ戦法で行くしかないんじゃ」
「基本はそうだけどな。誰が誰を相手取るかだ」
「槍士と、剣士と、魔術士…」

スヴェンの呟きにルイスは頷き、控室から闘技場へ続く通路を見やる。

「神槍クラウディオとツェツィリア・クロノヴァの力はこれまでの試合で凡そ解った。ま、超強い。…だが、あの魔術師…どうも不気味なんだよな」
「…ルネ・フォーレ？」
「そうだね。なんか、得体が知れない。勘だけど」

スヴェンは今まで見た『ジィ』の戦いを思い出す。…基本、槍士と剣士で三人を撃破し、魔術士は精々が補助だった。だが、確かに言われてみれば――それだけではない何かを、持っている気がしてならない気もする。

「教えてやろうか？」

不意に、三人ではない声がした。スヴェンははっと振り向いたが、ルイスとリディは軽く片手を上げてその主に挨拶する。

「久しぶりだな、ヨセフ」

『ノナ』魔術師――ヨセフ・フィッシャーは、軽く手を挙げ返し

てそれに応える。

「よう。なんか女がいなくなってるけど元気そうだな」

「悪かったね女に見えなくて。…それより、何を教えてくれるって？」

壁に寄りかかった青年は、その質問ににっと笑った。

「ルネ・フォーレ。ザイフィリア出身、職業魔術士。年齢は恐らく二十前後、性別不明。六年前に『ジィ』に加入、以後パーティの万能魔術士として力を発揮。属性、推定不能」

「――は？」

立て板に水のように渡された情報に唖然としながらも、最後の単語を聞き逃さなかった三人は目を丸くした。

「属性不明？どういうこと？」

「ん。簡単に言うと、目撃者によって見た属性が違う」

彼の説明を要約するとこうだ。

『ジィ』と共に何らかの仕事をこなしたことがある狩人達。しかし彼らは、パーティによってルネの属性について違うことを言うのだという。

ある者は火と風だと言い、

ある者は雷と土だと言い、

ある者は土と水だと言った。

「…が、これを鵜呑みにしたら五属性持ちってことになるだろ？それは有り得ないから、よって属性不明」

「……」

リディとルイスは沈黙した。有り得ない、と言われた存在が実はいるということを彼らは知っている。

「俺が伝えられるのはこれだけだ。じゃな、頑張れよ」

アイルでは見せなかったシニカルな笑みを浮かべ、さっさとヨセフは踵を返す。その足音が聞こえなくなってから三人は額を寄せあった。

「…どう思う？」

「…どうもこうも。それが全てなんだろ、多分」

「？」

リディは深くため息をつくと、スヴェンに向かって言った。

「スヴェン、君、結界解読使えるよね？」

「？い、一応…陛下みたくは、できないけど」

「ならやっぱりスヴェンがルネなんとかだ。ルイスはまだ習得しきってないし、かと言ってツェツィリア・クロノヴァを相手にするには君には荷が重い」

「…うん」

ひとしきり考えを巡らせてから、ルイスは二人に告げた。蒼い瞳が好戦的に眇められた。

「それで行こう。…最初はリディ、お前も加わって魔術戦しろ。『神槍』は俺が引き受ける。で、魔術士が援護だけじゃなく結界張ったら分断。ツェツィリア・クロノヴァはお前が倒せ」

昼下がりの日の光の許、六人の人間達が闘技場のフィールドに居並んだ。

『さあ――いよいよ、いよいよ武術大会も大詰め！大トリ！本選――決勝です！一方は『ジィ』――言わずと知れた大陸屈指の実力者！他方は『ヘキサ』――まだまだ未知数の若手有望株ＮＯ．１っ！』

わあああ、と耳をつんざく歓声。その中心で、二組は対峙する。

「随分持ち上げられもんだな」

「それはまあ決勝戦だから」

ルイスとリディは軽口を叩きあい、そして『ジィ』を見据えた。一方の『ジィ』は意味深げな表情で彼らを見下ろす。クラウディオが口を開いた。

「まさかかの『ヘキサ』だったとは思わなかった。生きていてよかった」

「死亡説流されてるとはこっちも思ってなかったからな。余計な目

に遇ったぜ」

ツェツィリアはリディに向かって妖艶に笑んだ。

「アナタ、女の子だったのね。驚いたわ」

「ちょっと手違いでね。髪色変わるだけで性別間違われるなら便利だよ」

一方、スヴェンはじっとりと汗を掻いていた。

「……」

無言で向かい合う黒いマントの魔術師。フードの中身は窺えず、何より魔力が底知れない。

（封印、してたのかも。僕たちと、同じように）

スヴェン達は皆、この試合に当たって精霊の封印を解いている。だから魔術士には、彼らの使役精霊がどれも最上位だとわかるはずだ。それでも――目の前の魔術師からは、更に圧倒的な気配を感じるのだ。

「スヴェン、気楽に行こう」

それを見越したのか、ルイスは軽い口調でスヴェンの肩を叩いた。それを境にして、二つのパーティは互いに距離を取る。

「お手並み拝見、ね」

ツェツィリアの笑みにリディは楽しげに笑みを返した。

「お手柔らかにお願いするよ」

会場は今や緊張に静まり返り、司会者が息を吸う音がやたらと大きく響く。

『では――両者健闘を！始めっ！！』

最初に動いたのは、ルイス達三人だった。というのも『ジィ』はこちらの様子見をしたいのだというのが初めの数秒の対峙で解ったため、それならばと作戦を多少追加する。

「総力戦といこうじゃねえか。――アイシィ」

「フレイア」

「…スティミア！」

三人それぞれの傍らに精霊が現れる。本人しか不可視のそれは、しかし明らかな力を伴ってその場を威圧する。

命令は同時だった。

「「「遠慮なくやれ」」」

次の瞬間フィールドと観客席を隔てた結界を構築した、アーヴァ

リアンの魔術士の判断は見事だった。そうでなくば少なくとも軽傷者くらいは出ていただろう。

「あほか、あいつら…」

シルグレイがそう呻くくらい、魔術攻勢は凄まじかった。既に視界が利かないほどの粉塵が舞い上がる中に、容赦ない青い炎弾、鋭い氷刃、風刃。普通のパーティなら間違いなく命を落としている。だが。

「…来るよ」

リディが目を細めて呟いた。ルイスとスヴェンは目を見交わし、それぞれ位置を調整する。そして三人同時に、意図的に攻撃を止めた瞬間。

「やってくれるなっ…！」

粉塵から飛び出してくる二つの人影。鋭く光る得物を構えた彼らを、待ち構えていたルイスとリディは完全に同期した動きで別々の方向に蹴り飛ばした。

「ぐっ…！？」
「きゃっ！」

不意を突かれた為にまともに食らい、そのまま吹っ飛んでいくのを追って、ルイスとリディが地を蹴る。

「スヴェン、頼むよっ！」
「気を付けろよ！」

去り際にそう声をかけられたのに頷きを返し、スヴェンもまた真っ直ぐに走り出した。

「…始めから分断が目的だったのか」

対峙した時には既に態勢を整えていたクラウディオは、ルイスに向かってそう呟いた。

「ああ。あんたのとこの魔術士は厄介そうだからな。それにあんたとツェツィリア・クロノヴァのコンビネーションが怖い。以上、分断の理由だ」

「単騎なら勝てると？」

「さあな？」

不敵に笑う。音が遠退く。――今感覚が捉えるのは、目の前の相手だけでいい。

一瞬の静けさ。そして次の瞬間、それが嘘であったかのような甲高い金属音が木霊した。

「分断されちゃったわね」

ツェツィリアはフィールド全体を見渡してそう言った。東ではクラウディオと金髪の青年が向かい合い、中央では少年がルネに向かって疾駆している。

たがさして気にした風もなく、ツェツィリアはぺろりとぽってりした唇を舐めた。

「まあいいか。あたし、貴女と戦ってみたかったのよね。同じ女剣士として」

「光栄だね。当代髄一の実力者に目をつけられたなんて」

リディは目を細めた。

（…魔力がある。魔術付加使ってきそうだな）

久しく使っていない技術。実は余り得意ではないのだが、それを言っていられる場合ではなさそうだ。

「じゃあ、さっさと戦りましょう。お互い、余り気が長い質ではないようだから」

「奇遇だね。私もそう思ってた」

早くも東から聞こえ始める剣戟の音。それに続くように、リディは二振りの剣を振りかざしてツェツィリアに突っ込んだ。

（やっぱり、多属性結界）

スヴェンは粉塵の奥に見える、何色ともつかない結界に覆われた黒いマントの魔術師を見据えてひたすら駆ける。途中、飛んできた炎をかわし、時に剣で弾きながら距離を詰めた。

フードに隠された顔は、何を考えているかなどちっとも読み取れない。

（多属性結界を構築出来るのは、理論上、聖魔力も合わせて五つ以上ない、といけない。だからこのひと、は少なくとも四属性を持ってる。でも、今使ってくるのは炎だけ。ぎりぎりまで、引き付けられるまで、こっちの目論見が悟られなければいい、けど）

左右では既に二組の激突が始まっている。クラウディオ・ガウス

やツェツィリア・クロノヴァに対して援護をされては困るのだ。
スヴェンは短く精霊の名を呼び、風刃を放った。それは予想通り、一瞬だけ煌めいた相手の結界に弾かれる。直後、左右から炎と氷の攻撃が飛んできた。ルイスとリディが、合間を縫って放ってくれたらしい。それはやはり弾かれたが、地面を抉って二度目の砂塵を巻き起こす。

（相手は、魔術師。視界が利かなきゃ、力は半減する！）

スヴェンは躊躇なく視界を塞ぐ砂塵に飛び込み、魔力の気配と己の勘を頼りに走った。途中、予めリディが仕掛けておいてくれた聖属性結界に魔力を追加し、発現と同時に強化する。
その時ゴッ、という圧力を伴った強い風が吹き、一気に砂塵を吹き飛ばした。

（風魔術…！）

一気に晴れる視界。ついでにスヴェンをも吹っ飛ばそうとする風に耐え、残り僅かな魔術師との距離を縮める。

「――っあああッ！」

戸惑ったように再度魔術を行使しようと、魔術師が手を上げる前に、スヴェンは聖、風、土の三つを集めた掌を相手の結界に押し付けた。

「世界は広いな、って、つくづく思うよ」

リディはツェツィリアの剣を打ち返しながらおもむろに呟いた。
ツェツィリアは面白そうに眉を上げる。

「どういう意味かしら？」
「門外不出の、あいつだけの技術だと思ってたらさ。実は使う奴はたくさんいた。つくづく、自分は井の中の蛙だなって思う」

ツェツィリアの使う匕首と、リディの使う少しだけ反った刃が交差する。お互い力技の技術ではない為に、それは交差しては離れ、また交差して、凄まじい速さで金属音を立てていた。

「聞いていい？」
「なにかしら？」

会話しながらも隙を見せることはない。呼吸と精神をすり合わせ、間合いを詰める。

「あの、ルネって魔術士。五属性持ってるんだろ。…にしては魔力少ないみたいだけど」

しかし、これにはツェツィリアも驚いた。予想外のことを言われたために呼吸が狂い、剣先がぶれる。それを見逃さなかったリディ

は、ひゅっと身を低めるとすれすれでツェツィリアの鋒をかわし、右手を思いきり突きだした。

「っ…！」

リディの剣先は、咄嗟に身を右に傾けたツェツィリアの二の腕を掠め、黒い革の服を切り裂いて赤い血を散らす。

舌打ちしたツェツィリアは傾けた身をそのままに、右手を地について回し蹴りをリディに向け放つ。それを避ける為にリディは数歩飛びずさり、ツェツィリアもまた飛び退いて距離を取った。

「…避けられるとは思ってなかった」

憮然とした調子でリディは剣を構え直す。ツェツィリアは彼女に真っ向から訊いた。

「さっきの、どういう意味かしら」

きょとんとしたリディは、ついでああ、と頷く。

「あの多属性結界張れるのは理論上計五属性以上持つ奴だけだ。仮に聖属性持ちでも、四属性っていうのは体内バランスの問題で生き延びるのは無理。はい、証明終了」

「…あなた、あの結界の原理を」

「知ってるよ？ていうか言っただろ。案外使う奴は多かったってさ。――それに」

肩を竦めてリディは言う。ツェツィリアが嫌な予感に眉を寄せた時、少し離れたところから細い悲鳴がフィールドを打つ。

ばっと振り返ろうとするツェツィリアに容赦なく狙いを定め、リ

ディは地を蹴りながら笑った。

「作り方があるなら、解き方もあると思わなかった？」

ルネ・フォーレは驚愕していた。

自分目掛けて一直線に走ってきた少年。魔術による攻撃をされながらも、ルネには自分の結界が破れないとわかっていたから焦らなかった。そういう結界なのだ。

生まれたときから持っていたこの異常性――五属性の魔術と、それにしては少なめな魔力（といっても、一属性魔術士の五倍以上はあるけれど）。それを使いこなそうと必死になる内に編み出した術。滅多に人前で使ったことなどない。竜や上位の魔物相手に、しかも切羽詰まった時に使うくらいだ。

なのに、あんな容赦ない魔術の嵐に晒されれば使わざるを得なかった。それだけでも完全に想定外。それなのに。

（なんでっ……！）

今銀髪の少年は、ルネの作った多属性結界に触れている。否――

手を突っ込んでいる。普通なら、結界表面で混ざっている各魔術の反発を受けて、とてもそんなことは出来ない。けれど彼は触れ――なおかつそこを起点にして、徐々に結界が解かれていくのをルネは感じ取っていた。

「はなっ、はなれてっ…！」

半ば恐慌状態に陥ったルネは、少年目掛けて魔術を乱発した。至近距離からの火魔術、水魔術。まともに食らえばただでは済まないそれを、しかしスヴェンはその身に張った聖結界でなんとか凌ぐ。とはいえこの距離。かなりの衝撃と苦痛が躰を苛み、噛み締めたスヴェンの唇から血が零れた。

（き、きつっ…！）

それでも、諦めるわけにはいかない。降り注ぐ魔術を意識の外においやり、スヴェンは掌に集中した。

（雷…集束、下段、火…中段）

ゆっくりと、だが着実に解いていく。そしてあと一息、という時だった。

「っう……っ！」

度重なる攻撃に、結界が耐えきれなかったらしい。破れはしないまでも亀裂が走り、更にスヴェンの躰を強烈な魔術が襲う。ミシッ、という音と共に、躰の何処かで骨が折れたのがわかった。

しかしスヴェンは歯を食い縛り、一気に遠ざかる集中力を必死にかき集め、最後の魔力を手に注ぐ。

（痛みなんて…しるかっ！）

解読しきった結界構成。それに寸分なく魔力を注ぎ――ルネの悲鳴を伴って、結界は砕け散った。

「よしっ…」

「そんな、うそっ…！」

ルネは有り得ない、信じられない、という混乱した思考のまま、半ば反射的に風魔術で空に逃れた。否、正しくは逃れようとした。

「逃がさないっ…！」

躰のあちこちで、嫌な軋みがするのを無視してスヴェンも地を蹴り、まだ結界を構築出来ていないルネに向かって躰を捻った。

「ひ――」

「――観念しろっ！」

体重を乗せた肘鉄は、空中でガンッ、と鈍い音を立てて　ルネの腹部を直撃した。

「ぐぅっ」

後方支援特化の魔術士であるルネが、直接攻撃に耐えられる訳がない。衝撃で体がくの字に曲がり、そのまま地面に叩きつけられた。

「ぁあっ…」

ルネは一瞬だけ目を見開き、そのまま力なくフィールドに横たわった。気絶したのだ。

スヴェンも、途端に襲ってきたとてつもない苦痛や疲労に半ば意識を奪われ、空中でぐらりと姿勢を崩す。そのまま落下する直前、スヴェンはふと地面に仰向けに倒れるルネの姿を捉えた。叩きつけられた衝撃からか、深く被っていた黒いフードが外れ、中が露になっている。その顔は――

（お、んな…？）

線の細い顔。華奢な骨格。まだ若い、儚げな顔つき。なにより――有り得ないような、桃色の長い髪。

驚愕しながらもスヴェンの意識は容赦なく奪われていき、急速に地面は近づく。

（女の子に、あの肘鉄は…悪いこと、した、な…）

そんな思考を最後に、スヴェンは激しい衝撃を感じると共に意識を手放した。

第十話　安寧への撃鉄　（１０）（前書き）

残酷描写（当社比）があります。苦手な方はご注意ください。

第十話　安寧への撃鉄（１０）

第十話　安寧への撃鉄（１０）

「――ルネ？」

悲鳴に、信じられないといった顔でクラウディオが振り返ろうとする。だがそれを、ルイスは深い踏み込みで阻止した。

「余所見すんなよ？俺はそこまで弱いつもりはないぜ」

「――お前が弱いなどという可能性は最初の一合で捨てている」

低めに放たれた斬撃を槍の柄で受け流し、クラウディオは横合いから蹴撃をかける。

「うぁっと！」

些か間抜けな悲鳴を上げて飛び退いたルイスは、そのまま数歩離れて汗を拭った。

（大口叩いてはみてるが…強い。勝てる気がしない）

『神槍』の名に相応しい、神速の刺突。重さと鋭さを極めたそれを、見切って受けるので精一杯で、反撃にしても力が乗らない。

（反撃出来るだけ、成長は出来てるんだろうが）

一年前なら反撃出来ずに潰れていたと確信できる。

ルイスがかかってこないのを見計らいながら、クラウディオはちらっとフィールド中央を一瞥した。地に伏せているのは二人。彼の仲間である魔術士と、向かい合う青年の仲間である少年だ。相討ちしたらしい。

フィールドの反対側では、ツェツィリアと黒髪の少年――訂正、少女が激しく交戦している。どうやらツェツィリアは若干頭に血が昇っているらしい。

（あいつはルネに甘いからな…）

嘆息して、クラウディオは視線を戻した。視線が外れていても意識が逸れてはいないことがわかっていたのか、ルイスは黙ってクラウディオを窺っているようだった。クラウディオは僅かに微笑む。

「この試合が終わったなら、お前達の話を聞かせてもらおう」

「……」

この男はどこまでわかっているのだろうか。

ちらっとそんなことを考え、ルイスは思考を振り払う。今余計なことを考えている余裕はない。

「だが、今は試合だ。――悪く思うな」

ふっ、とクラウディオの体が沈んだ、と思った瞬間。

「がっ――」

ひゅ、と凄まじい速度で肉薄した巨体が手元に引き寄せた槍が回転し、ルイスの剣の下をすり抜けて石突きが腹に直撃する。
瞬間意識が掻き消されるような衝撃、胃液を溢しながらルイスは後ろに吹っ飛ぶ。しかも、

「いだっ！」
「つぅっ…」

背中に何かが激突して、後ろへのベクトルが相殺され、その何かと共にその場でルイスは地面に落ちる。起き上がろうとして腹部の痛みに失敗し、治癒をかけながらルイスは体を折って丸まった。
一方、ルイスに背中合わせで激突したリディは、背骨に異常がないことを確かめながら跳ね起きた。だがしかしその頬は無惨に腫れ上がっている。

「いたた…ってルイス!?君も吹っ飛ばされた…って、」

常ならぬ様子で丸まるルイスにリディは顔を険しくし、彼の背中に手を当てた。…肋が数本折れている。

「……」

足元にルイスを庇うようにしてリディは立ち上がり、左右方面に立つ二人の同業者を睥睨した。

「あなた、骨も折れてないの?顔はともかく、胸は結構な勢いで蹴ったのに」

呆れた口調で言ったのはツェツィリアだ。クラウディオがお前…

という眼差しで見やるのに対し、リディは肩を竦める。

「君、蹴りに魔術使っただろ？その威力を相殺して、自分で後ろに跳んだだけだ。距離とりたかったし。まさか後ろからルイスが飛んでくるとは予想外だったけど」

なんでもないことのように言っているが、攻撃に付加された魔術を相殺するなど並みの技術ではない。

「…あなた、宮廷魔術士でもやってけるわよ、それ」

ツェツィリアの台詞にリディは皮肉っぽく笑う。

「どうも」

クラウディオは槍を構えた。

「お喋りはここまでにしよう。…二人がかりは気が引けるが、仕方ない」

リディはつ、と冷や汗が流れるのを感じながら剣を双方に向けた。背筋を寒気が襲う。勝てる訳がない。――ひとりなら。

「覚悟！」

ダン、と同時に二人が突進してくる。それをギリギリまでひきつけ――直前でリディはツェツィリアだけに体を回転させ、それに不意を突かれたツェツィリアの頬を、思いっきりぶん殴った。

「きゃっ…！」

ツェツィリアは数メートル吹っ飛んでいったが、リディの背後にはクラウディオの槍が間近に迫っていた。彼女が身を返すのを許さず、その首筋に穂が突きつけられようとするその瞬間、地面から伸びた刃がそれを跳ね上げる。目を剥くクラウディオを冷静な蒼い瞳が見据え、ついで渾身の蹴りがクラウディオの腹に決まる。

「ぐ――」

体重の分、吹っ飛ぶまではいかずとも後方に後退を余儀なくされたクラウディオは、信じられないようなものを見る顔つきで、地面に血の混じった痰を吐き出しながら立ち上がった青年を見た。

「大丈夫？」
「応急措置だけだ。あとでちゃんとくっつけないとな」

リディと背中合わせに立ちながら、ルイスは苦笑いした。本音をいえば痛い。だが、ここで倒れるということは即ちリディをひとりで戦わせることになる。――絶対に倒れるわけにはいかない。

「嘘でしょ…短時間でそのレベルの治癒も使えるの？」

頬を腫らしたツェツィリアが、呆然としながら立ち上がる。

「得意分野じゃないけどな」
「どこまで規格外だ…」

こいつらが大成した時が恐ろしい。と心底クラウディオは思った。

ルイスはそれを見ながら、小さな声でリディに言った。

「…ところでリディ。お前こそ大丈夫か？」

答えがくるまで一拍あった。

「…なにが？」

「とぼけるなよ。左肩」

「……。やっぱ誤魔化せないか…。悪くて骨折してる。けど応急措置して痛覚消したし、まだやれるよ」

「…わかった。無理するなよ」

「うん」

頷き合い――同時に走り出す。再度、二手にわかれ、リディはツェツィリア、ルイスはクラウディオへ。

「ぁあああっ！」

先程よりは至近距離で金属音が弥する。

「あんた達、どんだけよっ…！それだけ剣が使えて、魔術が使えて、おまけにそのレベルの治癒ですって！？人生舐めてない！？」

リディの剣を受け流し、自身の剣で懐を狙いながらツェツィリアが叫ぶ。

「舐めてなんかない！私もルイスも、この力のせいで苦しんだ！――でもそれを選んだのは、今でも自分の道をいくのは、私達自身だっ！」

先程より威力の増した交戦。見る者が皆固唾を飲む中、彼女達の応酬は続く。

ツェツィリアの剣先がリディの肩を狙う。リディはそれを避けな

かった。鋭い刃が、彼女の左肩に突き刺さる。

「なっ…！？」

ツェツィリアの驚愕。今までの攻防からいって、避けられない剣筋ではなかったからだ。

想定外の展開に一瞬ツェツィリアの手が止まる。それを見逃さず、リディは激痛に顔を歪めながらも横に引きつけていた剣を、完全に虚を突かれたツェツィリアの胴目掛けて振り抜いた。

肉を斬らせて骨を断つ。峰を向けたとはいえ、食らえばただではすまない威力を伴った攻撃は、――空を切った。

「…え？」

呆けたように、リディは目の前の空間を凝視する。

（なんで、何もない？確かにそこにいたはず――）

リディの思考は、突如首筋に走った軽い衝撃によって刈り取られる。

「…見事だったわ」

ぐらり、と傾ぐリディの躰。その背後に立ったツェツィリア・クロノヴァは苦い顔つきで手刀を見せていた。

どっ、と倒れる音に、槍を弾きながらルイスは視線を向け――ぎょっと目を見開いた。

「リディッ！――っ」

が、危うく手首を刺されそうになり慌てて体をひねる。無理な態勢のまま崩れそうになるのをあえて堪えず、地面を転がって距離を取った。クラウディオにとって追ってケリをつけるのは簡単だったが、それはせずに決着の着いた二人の女の方をみやった。

地面に伏す短い黒髪の少女。その後ろのツェツィリアの様子からして、延髄に一撃を入れたのだろう。だが、その苦い顔が不可解だ。だが、クラウディオはぴんときた。

（…まさか、使ったのか？）

もしもの時の最終手段。雷属性持ちの最後の切り札。風以外の属性を持っていることを明かしていなかったツェツィリアにとっては、最後の最後の一手を。

「…まさか、こんな若い娘相手に肉体活性使わされるとは思ってなかったわ」

手を下ろしツェツィリアが溜め息を吐いたことからそれは確信に

変わった。
肉体活性。電気刺激によって瞬間的に体の限界点を引き上げ、超常の身体能力を発揮する。使用後に使った時間に比例して反動がくるのが難だが、戦闘中にはこれ以上ない切り札となる。

「…あんた、雷属性も持ってたのか」

苦々しげにルイスは吐き捨てた。

知っていたら同じ雷属性持ち、リディがそうおめおめとしてやられることはなかったものを。…たが現実として、リディは倒されている。

（…勝負あったな、これは）

クラウディオひとり相手に防戦で精一杯なのだ。もう一人手練れを加えて勝てると思うほどルイスは自意識過剰ではない。

（まあ、だからと言って降参はしないけどな）

最後まで諦めずに足掻く。みっともなくともしがみつく。それが苦難を乗り越えてきた彼の、彼らの信条だ。
さっぱりとした覚悟を浮かべて剣を握る青年に、クラウディオもツェツィリアも内心で感嘆しながら、でも敬意を表すべく二人で向かうことを決める。同時攻撃するにはクラウディオから離れすぎているツェツィリアは、それを詰めようと足を踏み出した。――が。

くんっ、とブーツの金輪が引かれた。

「!?な…っ」

ツェツィリアは愕然として、背後を見るべく体をひねる。彼女の黒い目が捉えたのは、苦痛に顔を歪めていても全く戦意を失っていない、爛々と光る金色の眼。先程気絶させたはずの少女が、地面に這いつくばりながら手を伸ばし、ツェツィリアのブーツの金輪に指を引っかけていた。

「私、ね。タダで負けるの、嫌いなんだ」

途切れ途切れにそう言って、にっこり笑い。リディはツェツィリアが逃れようとするより早く、精霊の名を言の葉に乗せた。

「サンディルナ」

やれ、と。明確な表現すらせず、リディは自らの掌に、魔力を叩き込んだ。

「――――――ッッ！！！」

ツェツィリアの躰を、雷属性を持っているだけでは到底耐えきれないレベルの電撃が走る。悲鳴を上げることすらままならず、ツェツィリアはその場に膝をつき、倒れた。

リディもまた、ツェツィリアが倒れたのを見ると同時に糸が切れたように頭を落とした。

「……」

「…うわあ」

前者がクラウディオ、後者がルイスである。

あそこで意識を取り戻したのは執念以外のなにものでもない。根性の相討ちといえた。

「さて、まあ予想外ではあったが…我々も終わらせるべきだろう」

少々呆気に取られていた状態から気を取り直し、クラウディオは改めて槍を構える。ルイスも一度深呼吸し、正眼に剣を据えた。

空気が張り詰める一瞬。数拍のみを置いて、二人の男は互いに向かって駆け出す。

甲高い音と共に交差し、離れていくかと思われた男達は、しかし中点でぶつかりあったまま止まる。その理由はすぐに知れた。

「……」

「…くそ」

無言のクラウディオと、そんな呻き声を漏らしたルイス。その手から剣が滑り落ち、からんと乾いた音が鳴った。

「…あんた…やっぱ強い…な…」

あの一瞬の交差。クラウディオはルイスの渾身の突きを紙一重で受け流し、手の中で滑らせ回転させた槍の石突でルイスの腹を突いていた。

ルイスは倒れながら苦く笑う。

突きはカウンターを受けやすい。それがわかっていて、また相手の小手先を使いにくい槍という武器を考えての選択だった。だが、あの勢いの突きを掠り傷ひとつで受け流し、滑らかとしか言えない動きで、不利なはずの距離をいとも簡単に処理してみせたクラウディオ――。

（完敗だ）

世界は広いな――とらしくもない感想を抱き、ルイスは意識を手放した。

『勝者、クラウディオ・ガウス！』

わあっという歓声、驚嘆の喋り声がわきあがる。司会者も興奮したように言葉を連ねた。

『しかし、誰がこの展開を予測したでしょう！女性剣士として当代三指と言われるツェツィリア・クロノヴァが倒れ！今まで攻撃を受けすらしなかったルネ・フォーレが屈し！今立っているのが『神槍』ただひとりとは！いや、素晴らしい！倒れたとはいえ期待を遥かに超える力を見せてくれました！！』

クラウディオは無表情の中に苦笑を浮かべ、ぶんと槍を振ってから背に負い直す。と、観客席の方からなにか白いかたまりがぽてっと落ちてきて、とててと走り寄ってきた。

「…ピュルマ？」

なんでこんなところに、と思うすがら、ピュルマはクラウディオをスルーして、倒れている金髪の青年の頭の横で停止した。気絶しているルイスの頬を小さな舌でぺろぺろと舐める。

「…こいつらのペットか？」

クラウディオの疑問に、ピュルマはちらっとその夜明け色の瞳を彼に向けた。そこに、無邪気なだけの小動物ではない何かを感じて彼は眉を寄せた。

「…おまえ」

その時不意に観客席が静まり、視線が一点に集中した。貴賓席から、女王クリスティアーナが立ち上がったのだ。

「両者とも、見事でした」

端麗な顔に、穏やかな笑みを浮かべてクリスティアーナは声を発した。

「近年稀に見る名勝負でした。『十強』の実力、しかと目に焼き付けさせて頂きましたわ。美辞麗句を連ねたいところなのですけれど、それは私以外誰も面白いとは思わないのでしょうね」

どっと笑い声が上がる。女王陛下のお言葉ならいくらでも、という酔狂な声もあった。クリスティアーナ女王はこの国では余程人気があるらしい。

クリスティアーナはにっこり笑って軽くお辞儀し、続けた。

「つきましては、治療の後、表彰式を…」

そのあとの光景を、後にその場にいたある人間はこう評した。――悪夢だった、と。

ひゅう、と空を何かが切る音。次いでどっ、と何かに何かが突き刺さる音。その意味を誰もが視覚でもって知り、誰もが頭でもって理解出来ないでいた。

「…、な…？」

視線を集めていた一人の女。その胸に――

「…あら？」

それが第３６８代女王、クリスティアーナ・リィ・ヴィルニア・アーヴァリアンの最期の言葉となった。

胸に矢を突き立てたまま、クリスティアーナの体がぐらりと傾ぐ。そしてそのまま、貴賓席から乗り出し――地上に落下した。

ぐしゃっ、と耳も目も塞ぎたくなるような鈍音。そこでようやく、シルグレイが息を吹き返した。

「姉上！？」

未だ現状を把握できないまま、咄嗟にシルグレイは貴賓席の手摺に手をかけて飛び降りようとした、が。

「どうぞ動かれませんよう、シルグレイ殿下――いや、陛下」

しんと恐ろしい程に静まり返った場に、愉悦を含んだ声が響き渡った。シルグレイはばっと振り返り――目を見開いた。

「ガルイード…？」

そこには、ガルイード財務大臣がたっていた。後ろには、弓をつがえた男が控えている。

ガルイードは深々とお辞儀する。

「クリスティアーナ陛下はご逝去されました。従って、貴方がアーヴァリアン国王でございます」

シルグレイは混乱したまま、ガルイードを見、ついで姉であった遺体を見――奇妙な顔になった。何かを怒鳴ろうとしてそれをやめ、不意に肩を揺らし始めた。

「成程…」

ぞっとするような暗い声音を、しかしガルイードは平然と受け流す。その時やっと現状を認識したクリスティアーナの護衛騎士が、激昂してガルイードに向かって剣を抜き放った。

「貴様っ、よくもクリスティアーナ陛下をっ…！！」

しかし彼は幾ばくも歩かぬ内に胸と背に矢を受け、その場に倒れ伏した。その光景に、観客席の人々から遅すぎる悲鳴が上がる。

「きゃあああああ！！」

「ク、クーデターだ!!」

阿鼻叫喚と成り果てかけたその場に、唐突に魔術による破裂音が鳴り響く。ぎょっと動きを止めた人々に向かって、ガルイードは言った。

「動かれませんよう。我々は無辜の民を傷つける心算はございません。なにもなさらなければ、すぐにお帰り頂けることをお約束します」

シルグレイは鼻で笑った。抑えきれない怒りが滲んではいるものの、表面上は淡々としている。

「貴様、何が目的だ?」

「クリスティアーナ陛下にこれ以上玉座を守られるわけにはいかないのです」

眉をひそめたシルグレイだったが、すぐに思い至ったらしい。忌々しげに舌打ちする。

「…ピレニー大橋か。ならば何故私を生かした?あの案件は…ああ、成程。王家直系が山と握っているだろう秘密を知らぬまま殺すにはいかないわけか」

ガルイードは笑って答えない。その笑みは、かつての彼を知る者ならば信じられないほど、昏い愉悦に塗れていた。

「腐れたものだ。私が貴様などに話すと思うか?姉上を弑した者に」

「貴方には捨てられぬものがございましょう」

ガルイードは視線をフィールドに落とす。その意味するところに、シルグレイは内心で一気に青ざめた。

スヴェンは呆然としていた。身体中に負った傷に蹴飛ばされるように意識を浮上させ、痛みを堪えながら身を起こした彼の視界に映ったのは、変わり果てた従姉の姿だった。

「あ、ねう、え…？」

その美しい銀糸の髪は間違えようもない。だがその半分以上が真っ赤な血に染まり、美しかった美貌は見る影もなくひしゃげている。血の海に投げ出された手足はおかしな方向に曲がり、ところどころ白い骨が――

「従姉（あね）上――ッ！！」

絶叫し、躰の痛みも忘れて駆け出す。赤い池に膝をつき、理解したくもない赤黒い断片の散る中、震える手で従姉の髪を掻き分ける。現れた目からは血が流れ、紫の瞳に光はなかった。

「――っあ、」

「落ち着きなさい、スヴェン」

恐慌に陥りかけたスヴェンを、ひとつの凛とした声がひっぱたいた。客席の最前列に、ひとりの銀髪の女が凛然と立ち、スヴェンを見据えていた。

「ははう、」

「落ち着きなさい。自分をしっかり持ちなさい。あなたは王族の端くれです。こんなときこそ周りを見なさい」

冷たいとすら言える女の言葉。しかしそれは、スヴェンの頭をすうと冷やした。震えが止まり、世界に正常な輪郭が戻ってくる。

「…叔母上」

シルグレイが小さく呟く。彼の叔母でありスヴェンの母親である女は、彼を見上げて小さくお辞儀をした。

「…いっそ狂ってしまった方が楽ではあったのですが。まあいいでしょう。…いかがなさいますか？陛下。あなた次第ですよ」

シルグレイは視線を動かした。四方八方から矢がスヴェンに向けられている。…防ぎきることは不可能だろう。

しかし、まだ声変わりを迎えていない少年の声が沈黙を突き破る。

「…舐めるな。おれも王族だ」

スヴェンが怒りに燃える眼差しで、ガルイードを睨んでいた。

「従兄上の足手まといになるくらいなら、自分で死んでやる。それが出来ない程おれは腰抜けじゃない！」

激昂。そしてその眼が、今の言葉が全く偽りでないことを示している。それだけではない。発した言葉、それ自体が人をひれ伏せさせる威を孕んでいる。弓を構える者達に動揺が走る。ガルイードは内心眉を寄せた。このようにはっきりと意思表示をする子供とは思っていなかった。

シルグレイが溜め息をつく。

（全く、姉上の目論見は大成功というわけだ）

この三日でスヴェンは見違えるように成長した。でなくばあの台詞は出まい。

「早まるな、スヴェン。お前をここで死なせる訳にはいかん。ただの犬死にだ」

淡々とした調子を崩さずにシルグレイは言った。会場は最早固唾をのんで事態を窺っている。

「簡単に死を選ぶな。今はその時ではない」

数秒後、スヴェンは頷いた。ガルイードが微かに嘲りを見せる。

「随分と余裕ですな。我々が警告として彼を殺すとは考えないのですか？」

「ならばさっさと撃っていたはずだ。スヴェンは人質として価値があるのだろう」

「そのことだがな、シルグレイ殿下」

唐突に低い声が割り入った。それまで黙って様子を傍観していたクラウディオだ。

「貴殿が逃がせと言うならそいつを連れていくぞ。『ヘキサ』に意識があるならそういうはずだ」
「二人だけで、怪我人を抱えてこの包囲から連れ出せると仰るか？」
不可解そうなガルイードの声に、クラウディオに代わって観客席から傍に飛び降りたテディーが鼻で笑った。
「誰にモノ言ってんだ？俺達は大陸で二番目に強い狩人パーティだぜ。やろうと思やあテメーの手勢くらい簡単だぜ」
「この魔術士達を見てもそう言えますかな？」
ガルイードの手振りを受けて、あちこちから何人もの黒いマントを被った人間達が立ち上がった。テディーは舌打ちする。この集中攻撃には持ってこいの位置ではあの数の魔術士は厳しい。
「数は増やせるぞ？」
その時軽快な音を立てて飛び降りてきたのは、ジョンを始めとする『ノナ』、『ジィ』の治療術士、そして『オクタ』だった。
居並ぶトップクラスの狩人達に、会場が息を呑む。
「俺達はお国の争いなんてもんには手をださないけどね。攻撃されちゃ別だぜ？」
ヨセフが魔力を油断なく溜めながら唇をつりあげた。
張り詰める一触即発の雰囲気に、しかし落ち着いた声が水を差した。
「やめてください」

スヴェンは静かにそういうと、自らを守るように立ち塞がっていたクラウディオとテディーの間をすり抜け、数歩狩人達から離れてから振り返った。

「おれは残ります。おれだからこそ出来ることが、ここにはあると思うから」

静かな菫色の瞳に浮かぶ決意に、一拍おいて狩人達は武器を下ろした。ジョンが言う。

「お前さんがそう決めたなら、それを尊重するさ。…でもいいのか？こいつら、絶対怒るぞ」

ジョンが手振りで示したのは、エドガーとマルセロがそれぞれ抱え上げたルイスとリディ。スヴェンは苦笑する。

「おれからだって伝えてください。…ごめんなさい、ありがとう、と」

最後に一つ頭を下げて前を向くと、スヴェンはもう振り返らなかった。狩人達が歩き出したその背を視線だけで追っていると、別のところから声が降ってくる。

「そこの寝てる金髪頭に伝えろ」

狩人達は視線をシルグレイに移す。濃紫の目は、何かを孕んでいるようでそれが何かはわからない。

「“決して手を出すな”と」

それだけ言い置くとシルグレイは身を翻し、ガルイードに従う騎士達に随従していった。

狩人達は黙って顔を見合わせると、静かにフィールドに背を向け、立ち去っていった。

――――――――――――――――――――――――

「…おや、まあ」

ふわふわと闘技場の上空を浮いていた彼は、眼下の騒ぎに目を細めた。

「アーヴァリアンが堕ちちゃったかあ。テーリアは世代交代後だから不換算、と」

呑気な声に、重みは感じられない。魔術によって周囲から身を隠している彼は、闘技場を出ていく狩人達を見下ろしてふうん、と呟く。

「あれが『黒』と『紅』ね。結局僕とフィオレンティアの末か。まだ随分未熟だけど、大丈夫なのマルブレヒト」

いつのまにか隣に顕れていた銀髪の老婆に、彼は視線も向けず問いを投げる。老婆は重々しく頷いた。

「あれらの可能性はそなた達の方がよくわかっておろう、オージディス」
「まあねー。潜在能力は僕でも怖い」
くすくすと笑って、彼はついと東を振り返った。
「で、あれは？」
「…ついに来た、ということじゃよ」
「なんだ、駆け足だなあ。あの子たちの為にも、もう少し遅らせられなかったの」
「…限界じゃよ」
「ふうん。だから、イグナディアに行かせるんだ？」
答えは無言の首肯で、彼は鼻を鳴らす。気の毒なことだ。
「…そなたに頼みがある、オージディス」
「ザイフィリア（あっち）に行けってんでしょ？いいよ、言われなくても行くつもり。どうせアルトゥールにも行けって言われるだろうしさー」
「話が早うて助かる。じきにアズリシューラも向かわせるつもりじゃ」
「はいはい。じゃあ少ない残り時間、精一杯がんばろーっと」
完全な棒読み口調で嘯き、次の瞬間彼は消え去った。
一人残った老婆は東を眺め、次いで西を見遣る。
暗く淀んだ地。自分が薄汚い魔族を殺すことなど簡単だが、それでは意味がない。
「…呑まれるなよ」

小さくつぶやいて。
老婆もまた、姿を消した。

後に『終焉期（ラグナレク）』と呼ばれる一年。その始まりは、このアーヴァリアンの内乱だと言われている。
女王クリスティアーナ・リィ・ヴィルニア・アーヴァリアンは臣下、アウロス・ロスデルネ・ガルイードの裏切りに遭い、三十二歳の身空で死亡。
次代、第３６９代国王にはシルグレイ・イドリナ・ロウ・ヴィルニア・アーヴァリアンが擁立。
殆どの諸国はこれに対し、驚きと共に様子見を選択することとなった。

一方、エーデルシアスとオルディアンはアーヴァリアンに対し不快感を表明。クリスティアーナに哀悼の意を告げると共に、裏切り者ガルイードと、その傀儡と成り果てたシルグレイに決別を告げた。
新王シルグレイは黙ってこれを受け止め、こののち苦しい茨の道を歩んでいくこととなる。

第十話　安寧への撃鉄　（１０）（後書き）

諸々の都合で早めの更新です。
タイトルの意味は、最後の出来事を想起してつけました。この作品のメインキャラの死亡は彼女が最初ですね。
当初クリスティアーナを殺す気は全くなかったのですが、少々シナリオの改変を行うと同時に、物語自体の流れも重くしました。ごめんなさいクリスティアーナ。もっと出したかった…。

物語はここから割と暗くなっていきます。ベースの雰囲気は勿論変わりません（と思います）が、少しずつ風呂敷を畳みつつ、ゲームの終盤戦にありがちなようにどんより気味になっていくかと。

あと申し訳ないのですが、一か月ほど準備期間を置かせてください。私事が忙しいのもあるのですが、ストックも僅かになってしまったので…。
お詫びに後日談を明日か明後日には上げるつもりです（…お詫び？）受験前にあと一話は上げきりたいところ。…次も長いんですよ！一話の分量が初期と比べて雲泥の差なんですがごめんなさい！

もうしばらく、拙作にお付き合い頂けると嬉しいです。
では。

第十話　後日談

第十話　後日談

エーデルシアス王都、グリアン。国の象徴ともいえる、その堅固かつ美麗な意匠の城の一室で、王太子シルファーレイ・エーデルシアスはいつものように書類仕事をしていた。無心に字を追っていた眼がふと止まり、机横の水盆に移る。水盆は淡い光を帯び、水面が揺らめく。程なくして、眠たげな声が聞こえた。

『レイ～』

「…あなたですか」

シルファーレイは溜め息をつき、椅子を動かして水盆を覗き込む。そこには、旧知の仲である隣国の王太子の顔が映っていた。

話の内容は言われずとも解っていたので、シルファーレイは単刀直入に切り込む。

「そちらのあの宣言から言って、リディエーリア姫から報告が？」

『ご明察。多分そっちと同じくらいだと思うよ。でもきっと、書いたのはルイス君だね。エリアの字じゃなかったから』

「…そうですか。今回の件…例の影響だと思いますか？」

『だろうねえ』

ヴィンセントは薄く微笑む。

『ガルイード、だっけ？僕の記憶が正しければ、有能だけど野心はなかったはずだ。奴が有能じゃなきゃクリスティアーナが簡単に殺られるわけがない。元々野心があればクリスティアーナが気づかないわけがない。――導けばひとつだよ』

「同感です」

沈黙が部屋に落ちる。しばらく考えを巡らせていたシルファーレイは、ひとつ息をついてペンを取った。

「そちらの軍の再編と各地の強化は？」

『抜かりないよ。…あー、魔騎士団はちょっと欠けてるけど』

「…前々から思っていたんですが、国家機密を簡単僕に漏らすのはいかがなものかと…って、欠けてる？」

『そーなんだよ～。ちょっと聴いてくれない？』

以下、ヴィンセントの回想による。

「なんですって…？」

わなわなと目の前で震える三人の騎士に、ヴィンセントは気の毒そうな目を向けた。

「だから、入れ違い。リディ、五日前までここにいたんだよ。そうだね、二ヶ月くらいはいたかな？でもそのあと隣国の王子様と一緒にどろん」

「お、うじ…？」

「あれ、聞いてない？エーデルシアス第二王子、ルイシアス殿下。『氷の軍神』だよ」

沈黙を挟んでの反応は、三者三様だった。

「やりましたわねリディ様！嫁の貰い手が出来ましたわ！！」

三人組の紅一点、マリアは目を輝かせて叫び、

「おと…こ？マジで？あの姫様に？え？節穴？」

呆然としたまま自分が何を言っているが気づかずに暴言を発したのはボケ担当クリス、

「明日の天気は槍ですかね」

彼らのリーダーのキースは真顔でそう言ってのけた。ヴィンセントは堪えきれず爆笑する。

「君らっ…エリアが聞いたら殺されるよっ…」

しばらく笑いにのたうってから、彼は滲んだ涙を拭き拭き今更な質問をした。

「ていうか、君らなんで帰ってくるまでこんなにかかったのかい？死んだかと思ってた」
「ひどっ！」
「いつものことですよぅ。迷ったんです。キースの方向音痴のせいで。ジルフェイにリディ様が向かったって情報自体仕入れが遅かったんですけどー。おまけに着いたら着いたでもうオルディアンに戻られたっていうし。散々ですよぅ」
「貴様ら人を方向音痴というなら自分で道を探せ！！」
「…よく生き延びたねえ…主に」

ジルフェイ山地自体踏破するのは相当苦難だが、さらに迷ったとなると生き延びたのは奇跡に近い。…まあ、普通の人間なら、だが。

「食糧面で」
「ホントですよ！マリアと野宿の苦しさったら…！こいつ一回狩った猪五分の四一人で食ったんすよ！有り得ねえ！」
「クリス、慎め。殿下の前だ」
「今更だよ、キース。いやはや、ホントに大食らいたね、マリアは」
「誉めてもなにも出ませんよぅ」

別に誉めたつもりはなかったが、いちいち気にしていたら王太子は務まらない。

笑いながら、そろそろかなーとヴィンセントが思ったちょうどその時、冷たくすら聞こえる声音がほのぼのした空気を斬って捨てる。

「殿下。世間話はそのへんになさってください」

そんな軌道修正をかけたのは勿論キース。銀縁の眼鏡（伊達）を

くいっと上げて、詰問する。

「リディ様はどこに行かれたんですか？」

ヴィンセントは淡く微笑う。

「今回は僕は追えと言うつもりはないよ。――それを知った上で、訊いてどうするの？」

「決まっています。――追います」

毅然と言い切ったキースの姿に、マリアとクリスも自然と背筋を伸ばして王太子に向き直った。コントはここまでのようだ。

「我々はリディ様の護衛騎士です。守るべき主を欠いて、騎士を名乗ることは出来ますまい」

「忘れているようだけど、キース。君達は、僕が『彼女』を監視する為にエリア付きにしたんだよ？本来なら君達は、オルディアンのトップエリートにして最終戦力、魔騎士団に所属しているはずだ。つまり、主は僕だよ？」

マリアとクリスの顔が強ばる。それは確かな真実で、でも今となっては事実ではない。キースは躊躇いもなく言い切った。

「かつてはそうでした。今は違います」

「……」

「貴方がお仕えすべき王であることは間違いありません。しかし、我らの主はもうリディ様です。剣は主の元に在ってこそ剣です」

「そのために魔騎士団を追放されてもかい？」

「ええ。リディ様は我らを解雇なさったりはなさらないでしょうから。もし貴方が我々を手打ちにしようとなされば、リディ様は貴方

に炎を向けるでしょう」
「…随分な自信だ」
言いながら、ヴィンセントはあながち間違いではないとわかっていた。常日頃自らの護衛騎士を鬱陶しがるような様でいて、その実リディは彼らにとても信を置いている。リディが彼らを信頼し、彼らがリディに心からの忠誠を誓うようになる年月は、確かに流れた。十中八九、キースの言う通りになるはずだ。
ヴィンセントはちらっとキース以外の二人に眼を移した。――彼らもまた、キースと同様に迷いのない眼をしていた。
「わかった。僕の敗けだよ」
軽く手を上げて降参の意を示し、ヴィンセントは続ける。
「行き先はイグナディアだ」
三人が息を呑む。かの国の情況は、多かれ少なかれ耳にしているのだろう。
「でも君達は多分――て、あれ」
ヴィンセントの言葉を待たず、三人の騎士は身を翻していた。扉の前で一旦立ち止まり、振り返る。
「着いたら知らせます」
もはや無礼も何もあったものではない。
短く言って一礼し、そのまま彼らは出ていった。あとにはぽかん

となったヴィンセントのみが残ったのである。

―――――――――――――――――――――――――

『ってワケでー。僕の貴重な戦力はエリアに持ってかれたの』
「……。そうですか」

いつしか止まっていた手からペンを離し、シルファーレイはこめかみを掻いた。

「行ったところで入国出来ないでしょうに」
『だよねえ。そう思って国境の街に速馬は送ったんだけど…まあ、なるようになるよ、きっと』

ふわあ、とひとつ大きな欠伸をして、ヴィンセントは手を振った。

『それじゃ、僕も会議あるから失礼するよ。…身の回りには気を付けてね』

最後に素っ気なく言って、ヴィンセントの写し身は水面の揺らめきと共に消える。
来た時と同じように、唐突に静けさの戻った部屋で、シルファーレイは一人苦笑した。

「…わざわざ長話をせずとも、貴方の言いたいことくらいわかってましたよ」

クリスティアーナの死。それが彼にとって、自分にとってと同じように、衝撃だったのは想像に難くない。

「…世界と弟の行く末を見届ける前に、死ぬわけにはいきませんからね」

束の間、ついと上げた視線で虚空を睨み。

シルファーレイは再び、書類の山に埋もれていった。

第十話　後日談（後書き）

これにて第十話は終了です。もうずいぶん前に思える三人組のようやくの再登場でした笑

第十一話　崩壊の鏑矢　（1）

第十一話　崩壊の鏑矢　（1）

アーヴァリアンの街の一つ、ジフレスト。王都ハイレインから二十キロ程西に位置するその街の一角の宿屋で、唐突に殴打音が響いた。

「なんでだよ！」

震えるほどに握り締めた拳を振り抜いた姿勢のまま、簡易な綿製の寝着代わりの服を纏った黒い髪の少女――リディ・レリアは自らが殴り倒した男を見下ろし、激昂した。

「なんでっ、君はっ…！それだけの力を持ってるのに、反逆者のいうことなんて聞いたっ！？なんで、みすみすスヴェンを行かせた！！」

彼ら一行が貸し切った宿屋には、今殆ど人気がない。食事の場所である食堂に、買い出しに行かなかった狩人数名が佇み、宿屋の職員が恐々と事態を見守っているのみだ。

殴られた頬を押さえながら、クラウディオは黙って身を起こし、黙然とリディを見上げた。

「スヴェン・アイヒホルン自身の望みだ」
「それを何故聞いたと訊いてる！死にに行ったようなもんだろ！」
「そうではないと判断した。それに、本人が決めたことは尊重すべきだ」
「あいつはまだ十四だよ！」

クラウディオは、落ち着き払った眼でリディを見やる。

「お前だって、俺から見れば同じくらいの子供に見えるが。…だが、お前も自分の意志で行動しているように、スヴェンにも意志がある。それにお前の願いを押しつけるのは、ただのエゴではないのか」
「っ……！」

カッと頭に血が上り、感情のままに再び振り上げられたリディの拳を、しかし背後から伸びた手が止めた。金髪の青年――ルイス・キリグである。

ルイスはリディと対照的に、クラウディオやジョンから事態経過を聞いている時も聞き終わってからも、冷静な様子を崩さなかった。現に今も、瞳から感情を伺わせていない。

「やめろ、リディ。八つ当たりしてなんになる」
「でも、ルイスっ…」
「いいから落ち着け。――クラウディオ、シルグレイは俺に何か言っていたか？」

不意に振られた問いにクラウディオは目を瞬かせ、頷いた。

「ああ。――『決して手を出すな』と」
「――」

ルイスの蒼い眼に、その時初めて忌々しげな色が浮かぶ。声に出さず、口許だけが「あの野郎」と動いた。

「…ならやっぱり手を出すべきじゃないな。あいつらが決めたことだ。あいつらの国はあいつらのものだ」

「ルイスはそれでいいの！？」

リディがルイスから手を振り払い、金の眼を怒りに燃やして怒鳴る。

「クリスティアーナは殺されたんだ！シルグレイだってスヴェンだって、いつ殺されるかっ…！なのに、何もしないなんて」

「いいわけないだろう」

言い返したルイスの声に、リディだけでなく全員が本能的に身を竦ませる。一見平坦な調子のそれは、底に怒りや悲しみなどという言葉では済まない、様々な強い負の感情が押し込められていた。

「だがあいつは『手を出すな』と言った。俺達にじゃない――『私達』にだ」

その微妙な言い回しを、リディは少しおいて理解した。しかし、その場でのそれ以上の問答をルイスは避け、リディの頭を軽く叩く。声の調子は元に戻っていた。

「今、俺達のすべきことは他にあるだろう。取り敢えずお前は着替えてこい」

「…わかった」

リディは唇を噛み、身を翻す。その際、既に立ち上がっていたクラウディオに「殴ってごめん」と小さく謝ってから、食堂を出ていった。

ルイスはクラウディオに向き直り、苦笑して頭を下げる。

「悪いな。あいつ、怒ると見境ないから」

「気にしていない。――それに、親しい者が死んだとあれば、当然だろう」

「……」

「その点、お前は冷静だ。腹の底は煮えくり返っていても」

ルイスはやはり苦笑して、髪をかきあげた。

「俺は自分の感情をある程度コントロール出来るからな。ついこの間まで忘れてたが」

半ば自嘲するように言うと、「少し寝る」と言い置いて、姿を消した。

「…ってか、あいつら何者なんだよ。王族を呼び捨てかよ」

黙って推移を見ていたヨセフは、ルイスの気配が消えるのを待ってそう呟いた。

「まあ、これからのことについては全員揃ってから今夜話すさ。その頃にはリディの頭も冷えてるだろう」

ジョンは頭をぼりぼりかきながらそう答え、昨日のことを思い返した。

闘技場をあとにした狩人達を迎えたのは、ハイレイン狩人協会支部長のジークリードだった。彼はひとまず狩人達を協会の建物へ連れ戻り、簡単に任務の説明をした。

いわく、生前、つまり一昨日の時点でクリスティアーナは狩人協会に対して『イグナディア潜入』を依頼し、ジークリードはそれを受諾。金額は前払いで全額支払われたらしい。

その任務はかなりの危険を伴い、並みの狩人では務まらないこと、できれば『十強』の彼らに頼みたい旨とあり、詳しいことはそれをすでに受諾している『ヘキサ』が知っているという。

だが、その場に長居するには余りにハイレインの情勢が不安定であり、ジークリードは突っ込んだ内容を説明せず、用意していた幌馬車をジョン達に託し、ハイレインから発たせたのだ。

「イグナディア、ねえ」

噂には聞いている。約三ヶ月の間、一切国に立ち入れていないと。慌ただしくジークリードが話したところによると、結界が張られているらしい。しかし、それならどうやって踏み込むというのか。

「なんにせよ、夜になってからだな」

ジョンは呟いて、情報収集をするべく自らも街へ赴いたのだった。

リディは自室のベッドの上で、膝を丸めて抱えていた。脇では心配そうにネーヴェが彼女を見上げている。

「……ちくしょう」

噛み締めた歯から、呻き声が漏れる。

（何が『烈火の鬼姫』だ。何が最強の炎だ。私は、守りたいものも守れないっ…）

力不足ゆえに、ツェツィリアに負けた。その結果、クリスティアーナの死を見届けることすら出来なかった。スヴェン達を追い込むことになった。

（…いっそ）

ガルイードとかいう大臣を殺してしまおうか――そんな昏い考えが頭をもたげた時、軽いノックと共に「入るぞ」と声がして、ルイスがドアを開けた。目にしたリディの表情に眉をはねあげ、ルイスは静かに部屋に滑り込むとドアを閉める。

「…酷い顔だな」
「…悪かったね」

ルイスは机の前の椅子を引っ張ってくると、リディの正面に据え、どさりと座った。ネーヴェは二人を交互にみやり、きゅう、と鳴いた。

「お前――ガルイードを殺せばいい、とか考えてないだろうな？」
「……」

リディは答えなかったが、空気で察し、ルイスは溜め息を吐いた。

「図星か」
「駄目なの」
「駄目に決まってるだろう」
「なんで」
「あのな。先に言っとくが、ゼノの時とは違う」

リディはぴくりと肩を揺らした。ルイスは淡々と話す。

「あの時は、『お前』という理由があった。『お前』――『烈火の鬼姫』は、ゼノに対しての絶対的制裁権と介入権がある。俺はその連れという扱いだったしな。だけど今回はそうはいかない」

「内政干渉だって言うわけ!?なんでっ…!だって、ガルイードはクリスティアーナを殺したんだ!それに対して抗議して何が悪い!?」

「弑逆だろうが簒奪だろうが、それはあくまでその国の内部での出来事だ。別にガルイードはシルグレイを王に差し替えただけで、他国に戦争を売るような挙動はない。あくまで国の中の政策変更をしようとしてるだけだ。他国が介入すべきことじゃない。俺達がただの雇われで、シルグレイ側に依頼されてたならともかくな」

感情を乱す様子のないルイスに、リディはキレた。

「君はクリスティアーナと親しかったんじゃないの!?なんでそんなに冷たいことが言える!?敵を討ちたいとは思わなっ…!?」

しかし、彼女は途中で言葉を切った。突然、ルイスから恐ろしい殺気のようなものが噴出したからだ。

「…思わないわけないだろう」

低い声がリディの耳朶を打つ。殺気はリディではないところに向けられているものの、その強さは彼女の頭に冷や水を浴びせるに充分な効果を持っていた。

「俺だって、今すぐ駆け戻ってシルグレイとスヴェンを助けたい!!だけど、そういうわけにはいかないんだ!!」

階下に聞こえないように押し殺された激昂。それはリディだけを震わせ、宙に霧散していく。

「しかもあいつは俺に『手を出すな』と釘を刺した。――そのうえ

で、それを無視することは、俺達には、ルイシアスとリディエーリアには出来ない！俺達が、アーヴァリアンに干渉する術はないんだ！」

「…ごめん」

リディは俯いた。…自分のことばかり血が上って、全くルイスのことを考えられていなかったのだ。ルイスの方が、クリスティアーナ達と過ごした時間は遥かに多い。憤激も、リディの比ではないはずだ。だが、彼は今は持ち合わせていない本来の身分のことも考えて、冷静を貫いていたのだ。

それをぶち壊したのは、自分だ。

「クリスティアーナの敵を討ちたいかなんて、そんなの当たり前だ…！だけど、もし俺達の素性がバレた時…窮地に陥るのは父上達だ！そんなことは、出来ない…」

「ごめん」

リディは手を伸ばして、ルイスの頭を抱き寄せた。震える頭を抑えて、耳元で呟く。

「ごめん。私が考えなしだった。自分の立場、忘れてた。…ごめん」

何度も謝るリディに、ルイスは許す代わりに自分の腕を伸ばして細い躰を腕に閉じ込めた。痛い程の力で抱き締め、溢れる悲しみと怒りを内に抑え込む。

「……」

微かに震える腕を直に感じながら、リディはルイスの肩口に顔を埋めた。やるせなさと悔しさ、哀しみを自分の中に押し戻していく。

瞳から溢れた涙と喉から漏れた嗚咽は、ルイスの服に染み込んでいった。

「まず、詳しい事情も知らないまま俺達を守ってくれたことに礼を言う」

夜、夕食を終え、人払いもしてもらった食堂に集まった狩人達に、ルイスはそう言った。

ここに集まった狩人は総勢十九名。

「気にするな。同胞なのだから当然だ」

十強第二位、『ジィ』――五名。クラウディオ・ガウス、ツェツィリア・クロノヴァ、テディー・ピアース、マルセロ・ドーリアス、ルネ・フォーレ。

「気になったから、来た。それだけ。」

十強第八位、『オクタ』――三名。アインス・ザレッタ、ツヴァ

イ・ザレッタ、ドライ・ザレッタ。

「ま、知らん仲でもないし、依頼金もかなりよかったからな」

十強第九位、『ノナ』――四名。ジョン・イーデル、エドガー・ムーア、ヨセフ・フィッシャー、マシュー・アストン。

「僕らは、よくわからないままなんですが。クラウディオさんについてくるように言われて…でも、よろしくお願いします」

一般新人狩人、『シルバーダガー』――五名。ハワード・ロードル、エイト・ベル、リリア・メイス、カミラ・シンフィルド、ユーリス・ティレット。

そして、

「これから今回の任務を説明する。わからないことがあったら随時聞いてほしい」

十強第六位、『ヘキサ』――二名。ルイス・キリグ、リディ・レリア。

一組を除き、このそうそうたる顔触れを他の狩人が見たなら腰を抜かすこと安請け合いだ。それを見回して、ルイスは話し始めた。

「事の始まりは三ヶ月前。エーデルシアスの王女誕生式典だ。俺達の最初の依頼主は、そこに参加していた貴族のひとりだ」

ここの辺りは、予めジークリードやクリスティアーナ達と決めておいたことである。ルイスもリディも、自らが高位の貴族であることを明かすのを嫌ったためだ。

「ああ、エーデルシアスっていうと私達もいたわ。急に魔物が襲ってきたもんだから、びっくりしたわよ。撃退したけど」

リリア・メイスの言葉にルイスは思わず礼を言いそうになり、踏み留まった。

「……。ああ、それだ。あの時王宮側には、魔族が出現していたらしい」

「「「魔族！？」」」

何人もの声が揃った。一同驚愕の表情を浮かべ、ルイスを凝視する。

「俺もざっとしか聞いてないけどな。なんでも、その直前には賊が侵入して国王を脅してたそうなんだが、現れた魔族はそれを殺したとか」

「…はぁ？」

聞いていたリディはルイスの空っ惚けた話に呆れながらも、疑わしさを微塵も感じさせない話しぶりには感心していた。ちなみに彼女は自分が話すとボロが出るのが解っている為、ひとつだけやれと言われた役以外ルイスに丸投げしている。

ユーリス・ティレットが訊ねた。

「なんで魔族が人間を助けんの？」

「さぁ…でも助けた訳じゃないらしいぜ。その辺は言葉を濁されたから詳しいことはわからないが、その魔族はその場にいた奴らに、『イグナディアに来い』って言ったらしい」

「…？あなたはその場にいた人間ではない。」

ツヴァイ・ザレッタが首を傾げる。ルイスは頷き、懐から紙を取り出した。紙には、魔術士以外にも視認できる光で何やら文字が綴られている。

「これは俺達の依頼主の魔力押印だ。その場にいた貴族はみんな大貴族ばっかりで、そうそう動ける立場にない。だから、これで騙そうってわけだ――国境の結界を」

ルイスに目配せされ、リディは渋々口を開いた。嫌だと言ったのに、ボロが出たらルイスのせいだ。

「…推測だけど、アーヴァリアンの魔術士でも手が出なかったイグナディアの結界は、ある一定の波長を認識すると解けるんじゃないかって研究されたらしい。その一定の波長は、要するに魔族に名指しされた貴族のものだ。だからそれを利用する、らしい」

「…それで、狩人に丸投げかよ？ちぇー、たまには自分で動けってんだお貴族サマよぉ」

テディー・ピアースが不機嫌に言った。ルイスとリディは曖昧に笑い、話を続ける。

「ここからが本題なんだが、知っての通りそれから約三ヶ月の間、イグナディア内部とは連絡がついてない。だが直前の報告内容から、イグナディアには『ペンタ』がいると思われる」

「！！ゼーテ達か…」

エドガーが思わずと言った風に唸る。

「俺は『ペンタ』は知らないからなんともいえないけどな。それに

当たって、今回の件――『オクタ』は外れてもらう」

ルイスの言葉に、しかしさして衝撃を受けた様子もなく、アインス・ザレッタは訊いた。

「そう。一応、理由を聞く。」

「いくら異常事態とはいえ、一国に狩人最高戦力が半分も集まるのはまずい。だから『オクタ』には、今十強のいない大陸南部に向かってほしいそうだ」

「あ？南部にいないって…あー…ザイフィリアとフェルミアか」

「ああ。本来ならもっと減らすべきなんだろうが、魔族を相手にする以上、また『ペンタ』の生存も危ぶまれている以上、他のパーティには来てもらいたい。…『シルバーダガー』については、『ジィ』に一任したいと思う」

「了解した」

クラウディオが頷き、彼はハワード・ロードルを始めとする『シルバーダガー』に向き直った。皆リディと同じかそれより若いメンバーは、緊張した面持ちで姿勢を正す。

「お前達は、なぜ自分達がここにいるかはよく解っていないだろうから説明する。俺が、お前達は将来有望だと思ったからだ」

「…はあ」

ハワードが、喜んでいいのか疑問に思っていいのかわからないような微妙な顔をする。クラウディオはルイスとリディを顎でしゃくった。

「若手有望株一位は、間違いなくこいつらだ。だからこそ死んだと聞いた時は残念に思った。それだけに、お前達との戦いは嬉しかっ

た。こいつら以外にも有望株はいると知ったからだ」

ルイスとリディもまた、微妙な顔をした。ただし彼らの場合は、持っている素性の後ろめたさゆえだが。

「だが、俺達は死線をくぐることで成長する人種だ。中途半端に力があり、そこらの魔物を苦労せず狩る力を持っていると、そいつらは伸び悩む。命の心配はしなくてもいいかもしれないが、上を目指せなくなる。俺はそれを恐れた。だから、今回のような話は、お前達に持ってこいだと思った」

「…にしては重すぎると思うけどねぇ」

マルセロがぼそりとツッコミを入れるが、クラウディオはスルーした。真剣な顔つきで聞き入る少年達に、厳然と告げる。

「だが選ぶのはお前達次第だ。お前達の力量では、俺達がいるとてこの件を乗り切るのはギリギリだろう。命も格段な危険に晒されるのは間違いない。命有っての物種だ――それを厭って避けるも良し、己の向上に命を懸けるも良し。好きにするといい」

『シルバーダガー』は沈黙して、リーダーであるハワードを皆見やった。彼は渋面で俯いていたが、やがて顔を上げると、「一晩考えさせてください」と言った。

それに対し吠えたのは、パーティメンバーのエイト・ベルだったが、

「なんでだよ！ハワード、そんなの考えるまでもごふぅ！！」

言い終わる前にカミラ・シンフィルドに強烈な肘鉄を食らって悶

絶する。彼女は穏やかな茶色の瞳をエイトに向け、にっこり笑う。

「黙ってくださいな、エイトさん」

「ぐっふぅ…か、カミラ…」

「単細胞も大概にするといいですわ。これはあなたの頭みたいに単純な問題ではないんですのよ」

グッサグッサと刺さりまくる言葉群に、他の狩人達は顔をひきつらせる。エイトは既に虫の息だ。だが他の『シルバーダガー』メンバーは慣れたもので、それぞれ立ち上がると、一同に頭を下げた。

「話し合いをしたいので、部屋に戻ります。説明してくださって、ありがとうございました」

最後はルイスに向かって言うと、ぞろぞろと彼らは階上に消える。虫の息のエイトはハワードが引きずっていった。

「…私達も、どこに行くか、話し合う。失礼する。」

少し間を置いて、『オクタ』の三人も席を立ち、食堂を去っていった。

「で、どーするのよハワード」

一部屋に集まった『シルバーダガー』達は、円を作って床に座った。頬杖をついて、魔術士であるリリアが問えば、リーダーを務めるハワードはうん、と頷く。

「僕は受けたいなと思ってるよ。ただ、みんなの意見も聞きたいから」

「オレはッ」

「あー、君の言いたいことはよくわかるからエイトは黙って」

「ぐふっ」

発言する前にその権利を奪われた少年は、うめき声を立てて床に沈む。それを他の誰もが無視して、話し合いは続行された。

「あたしは正直、怖いなあ…。だってあたし達、狩人になってまだ三カ月くらいなのに…、魔族と戦うなんて、ムチャじゃない？」

「そうですかしら」

カミラが優雅に首をかしげる。

「『十強』が三組、ことによっては四組もいらっしゃるんですのよ？普通の狩り(しごと)より余程簡単ではありません？」

「僕も同感かな。いい経験になるとも思うけど」

カミラ、ユーリスの台詞に、リリアは渋面を作る。

「そーかもしれないけど…」

「大丈夫だよ、リリア」

ハワードが笑顔を向けた。

「僕達、新人にしては筋がいいって、『神槍』に褒められたんだ。やるだけやってみよう」

「……。ハワードが、そう言うなら」

ついに頷いたリリアに、立ち直ったエイトが拳を突きあげる。

「っしゃあ！そうと決まりゃあとはやるこた決まってる！オレは寝るぜ！体力いちばーん！」

ガタガタと騒がしく走っていったエイトを、残り四人は生温かい目で見送って、さて、とユーリスも立ち上がった。

「あいつは馬鹿だけど、言ってることは間違ってないね。僕も寝るよ。明日はどうせ早い」

「そうですわね。リリアさん、行きましょうか」

「…うん！」

リリアは笑顔になって、カミラの手を掴んで立ち上がり、そのまま抱きつく。ちょっとだけ目を見開いたカミラも、すぐにくすくす笑って歩き出した。

苦笑するユーリス、微笑ましそうなハワードに手を振って、リリアはうん、と頷いた。

（そう、大丈夫。あたしは弱いけど、みんながいるもの！）

第十一話　崩壊の鏑矢　（1）（後書き）

お待たせしました！
この話は比較的早いペースで掲載出来たらなと思っています。例によって長いですが、お付き合い頂けると幸いです。

第十一話　崩壊の鏑矢　（2）

第十一話　崩壊の鏑矢　（2）

――場所は移って、食堂。

「……」

人数の少なくなった部屋で、クラウディィオとジョンは数秒の間顔を見合わせ、何か無言のやり取りを交わす。のち、クラウディィオが立ち上がって、「俺達も準備をするぞ」と言って『ジィ』を引き連れ出ていく。元々の半分以下に人数の減った部屋で、さて、とジョンが口を開いた。

「マジなところを話してもらおうか？」

ヨセフいわく、その瞬間の二人の顔は見物だった。ルイスは苦虫を噛み潰したような、リディは言わんこっちゃない、というような感じだった。そしてお互いの顔を見、

「…なんでそんな分かりやすい顔してんだよ」

「だから私に喋らせない方がいいって言ったんだよ」

お互いに文句を言った。そのまま嫌そうな顔で黙った二人に、ジ

ョンは追い討ちをかけた。

「リディには確かに喋らせない方が良かったな。ルイスは上手く情報を取捨選択してたが、『魔族に名指しされた貴族』――これ、ルイスの説明と合ってねえ」

「…ゴメンナサイ」

リディは膨れっ面でネーヴェを抱き締める。ネーヴェは慰めるようにふわふわの尻尾でリディの頬を撫でた。

「…まあ端的に言えば、だ。依頼主なんていない」

諦めたルイスがさらっと答えを喋る。

「つまり――お前ら自身が名指しされたってことか？」

「まあ、そうだな」

「三ヶ月の音信不通は、お前らの身分によるものか？」

「そうだな」

ジョンの続けざまの質問にも、殆ど間を空けずにルイスは首肯していく。リディが完全に口をつぐんでいることを鑑みても、話す話さないの境界線は、ルイスの中にきっちりとあるようだ。

「相当の高位貴族ってわけだ？」

「…そうだな」

しかし今度ばかりは間があった答えることに、理性とは別に葛藤があるのだろう。しかし溜め息をついて、ルイスは続けた。

「自由を許されない程度には高位だ。俺はエーデルシアス内で運悪

く見つかって、その結果パーティーにひきずってかれた。リディはその巻き添えを食った。逃げるまでに二ヶ月ちょいかかった」
「リディは巻き添えだけなのか？」
「私の家はルイスの家ほど高位じゃないよ」
リディが肩を竦める。それに対して鼻を鳴らしたのはヨセフだった。
「何にしてもいいご身分だな。高位の貴族に生まれて、なんの不自由もない衣食住を手に入れていて、わざわざ狩人か？平民馬鹿にしてんのかよ」
刃のような言葉だった。マシューが咎めるように肩に手をかけたが、ヨセフはそれを振り払い、左手中指に嵌められた装飾つきの銀の指輪をいじりながら、剣呑な眼差しで二人を見据える。
「お前らが貴族なのは知ってた。でもそれは没落したのかとか思ってた。なのになんだ？なにが不満で安定した生活を蹴った？普通の平民が求めても手に入らないものを」
ジョンは微かに溜め息をつく。…ヨセフは過去の生い立ちもあり、貴族が嫌いだ。だが嫌いの根源には、その富に対する羨望がある。それを認めたくなくて更に憎む、という面もある。
どうルイスが答えるかと思った矢先、答えたのはルイスではなくリディだった。
「不自由ないっていうけどね」
金色の眼が危険に煌めく。どこかが逆鱗に触れたのか。

「肉体の自由と精神の自由は違う。貴族がみんなみんな、あのアホみたいな腹の探り合いを好んでいると思ったら大間違いだ。私はあの世界が大嫌いなんだよ」

「それは恵まれてるからこその台詞だ。平民にはそれを感じることすらできない」

間髪入れないヨセフの反論に若干詰まり、リディは低い声で言った。

「…そうだね。なに不自由なく健康に私を育ててくれた環境には感謝してる。私の今の行動が傲慢だってことも。…でもね」

思わず後退りしたくなるほどの炎が、上げられた彼女の瞳には灯っていた。

「私達には私達なりの苦悩がある。望みがある。嫌悪がある。それを知りもしようとしないで、外面だけ、擦りきれた正論だけ叩き付けられたって、不愉快なだけだ。君に私の何がわかる」

言い返す余地も、追い詰める隙も幾らでもあった。だが、ヨセフは言葉を飲み込んだ。それこそ、触れれば火傷をしそうな危うさを、彼女から感じたからだった。

「…勝手にしろよ」

吐き捨てて、彼は身を翻した。通り過ぎざま、エドガーに肩を軽く叩かれる。あからさまな舌打ちをして、ヨセフは部屋に戻った。

それを確認してから、ジョンは二人に頭を下げた。

「悪いな。…あいつ、貴族のご落胤ってやつなんだ、実は。でも母

親ごと捨てられたらしい。貴族嫌いは筋金入りだ」

リディは軽く目を見開いたが、ルイスはあっさり頷いた。

「だろうな。ていうかそんなの俺達に勝手に喋っていいのか？」

「まあ、隠すことでもねえし…ってなんで驚かねえんだテメーは！？」

エドガーがツッコミを入れる。確かにルイスの平静さは物申したい、とジョンも思った。

「なんで、って。あいつの指輪、サデリア家の紋章だろ。エーデルシアスの貴族のひとつだ」

なんでもないように答えたルイスに、リディ以外が唖然とする。ちなみにリディは呆れていた。

「よく覚えるよねそんなの」

「ま、仕事の内だ。…で、あんだけ平民平民連呼すれば、貴族出身て可能性は低い。それであの敵愾心、指輪とくれば答えは決まりだ」

ジョンは首を振る。もう余り深く考えないほうが良さそうだ。

「さよか…で、続きは？」

「ああ、それでまあ、魔族のご希望に沿うべくイグナディアに向かったんだが、途中で結界の噂を聞いてさ。ハイレインに取って返して王族に状況訊いたわけ。そしたら、行けば多分拓かれるって言われ、でも二人じゃ無謀だから武術大会に参加して仲間見つけろって言われた。で、このザマだ」

ルイスは天井を仰ぐ。…クリスティアーナの死に様を見なかったのは、ある意味幸運かもしれない。もし目にしていれば、自分はあの会場ごと犯人を潰していたかもしれないから。

「魔族に指名される心当たりはあるんですか？」

「「ある」」

マシューの問いに対する答えがハモる。

「なんなんだ？」

「んー…物は試しで訊いてみるけどさ、『原初の運命』って言葉の意味、わかる？」

「わからん。なんだそれ」

ジョン、エドガー、マシューが同時に首を振る。

「私達もわかんないんだけど。魔族がさ、何故か私達をその言葉で呼ぶんだよ。それで、イグナディアに来いって言われたらまあ――行くしかないよね」

「俺達もいい加減、意味を知りたいしな」

「ん。だいたい事情はわかった。この依頼、受けさせてもらうぜ。…ま、断るつもりは最初からなかったしな。友達のよしみだ」

ジョンの笑顔に、ルイスとリディは異口同音につっこんだ。

「「誰が友達だ」」

「ええ！？ひでえ！」

大袈裟でなくショックを受けたらしい彼に、しかし二人は照れ臭そうに笑う。

「冗談だよ」
「…ありがとな。頼む」

ジョン達三人は顔を見合わせ、拳を突き出した。それに二人の拳が合わさる。

「任せとけ」
「私達の手で、解決しましょう」
「魔族なんかぶっ飛ばそうぜ！」

楽しそうな笑い声を伴って、その夜は更けていった。

翌朝。

「僕達も行かせてください」

ハワード・ロードルは、一同が集まるなり、ルイスとクラウディオに頭を下げた。褐色の瞳は、決意を固めたさっぱりした色をしている。

「…いいのか？死ぬかもしれないぜ」

敢えてクラウディオの方を見ず、ルイスは言う。ハワードは頷いた。

「僕達は目的のために狩人になりました。でも狩人の現実は厳しい。だからといって、潰れていくのは嫌です。――狩人として生き残るために、僕達はこの山を越えたい」

リディは黙って後方から、同年代の五人の顔を観察する。皆、緊張していたりやる気に溢れていたりと違いはあるが、嫌嫌、渋々といった空気はない。大丈夫そうだ、と頷いたリディの横で、ネーヴェはなぜか喉の奥で唸った。探るように横目を向けたが、彼本人もいまいちわからないらしい。きゅう、ともう一度小さく唸ってリディの肩口に引っ込んでしまった。

「…覚悟あるみたいだし。平気じゃない？」

『シルバーダガー』は弾かれたようにリディを見たが、ルイスはあっさり頷いた。

「そういうことなら頼もう。あ、分前減るけどいいな？」

「構わない」

「別にいいぜー」

クラウディオは頷き、ジョンはひらひらと手を振った。

「そちらさんは行き先決まったかい？」

「決まった。ゼノに行く。」

話を振られたアインスは軽く頷いた。

「あそこ、戦争終わったと聞いた。上質のミスリルも出る、と。一度行ってみたかった。」

ルイスとリディは思わず微笑む。

「…ああ。いい国だ」

「まだ貧しい村は多いけど。将来が楽しみな国だよ」

ルイスはともかく、リディのその口振りが余りに優しげであることに、皆耳目を奪われる。一方ルイスは彼女の黒髪を無造作にかき混ぜた。

「いつかまた行こうぜ」

「…うん。アル…いや、あいつらの結婚式には少なくとも行かないと」

「何年先の話だ！」

「…お二人さん。話、進めていいかしら？」

逸れかけた会話に、ツェツィリアが口を挟んだ。二人ははたと我に返り、ルイスがふと真面目な顔になった。

「アインス、ちょっとひとつ頼んでいいか？あ、他のみんなは食べててくれ」

アインス以外は言われた通りに朝食を食べ始め、アインスは首を傾げた。

「なに？。」

「急いで手紙を書くから、それをゼノのある人に届けてほしい」

「お安い御用。」

「え？なんか書くの？」

首を傾げたリディに、ルイスは懐から取り出した封筒を渡す。

「それと同じもんを書いてやる」

手紙を開いて読み進めたリディは、次第にげっという表情になる。読み終えて丁寧に畳んでから、下手な笑顔を浮かべてルイスを見上げた。

「ルイス…」

「わかってるよ、それお前にやるから。俺の分は別にある」

「うわ、気利きすぎ！超ありがとう！」

「はいはい。なんか書くか？」

「書く書く。貸して」

嬉々として何かをリディは書き込み、ルイスに渡す。他の狩人達がそれとなく見守る横で、ルイスも迷う様子を見せずに文面を書きあげ、綺麗に封をした。

「じゃ、これを――ルドマン・ルーベンス伯爵に」

聞いていた内数名、各国情勢に明るい面々はぎょっとした。ルドマン・エールヒェン・ルーベンスといえば、新女王セレナエンデの重臣で、内乱の立役者のひとりではなかったか。

「顔、広いんですのね…」

カミラ・シンフィルドが呟いた。どういう交友関係をしているのか。他のメンツ、特にジョン達は最早諦めていた。

「じゃあ、気をつけて。」
「ああ。そっちもな」

数刻後、ジフレストの街の出口で、十六人と三人は向き合っていた。一方は南に、一方は西へと向かう。『オクタ』の三人心なしか軽装で荷物も少ないが、他はこれから未知の冬国へと向かう。それぞれ前日までに万全にした装備を身につけ、食糧などもしっかり馬車に詰め込んでいた。ルイスとリディも、ジークリードが放り込んでくれたらしい、ハイレインで購入した真新しい装備になった上、ようやく染め薬の効果が切れたらしく髪色が赤と黒に戻っていた。

「でも、いいのか？。私達が運ぶのでは、鷹文より遥かに遅い。」

先程、ルイスは書いた二通の手紙を、街の役場に持っていって、高い金を支払って鷹に持たせて飛ばしてもらった。費用は高いが、この大陸では最速の通信手段だ。

それなのに、あえて一通だけ人の足に任せたことに疑問を浮かべるアインスに、ルイスは肩を竦めた。

「いいんだ。そっちは単なるよしみだからな」

「?」

理解不能の顔にルイスは応えることなく、ジョンに合図する。彼も心得たもので、それじゃ、と声を張り上げた。

「行くぞ。アインス、ツヴァイ、ドライ、また会おうな」

「…ああ。」

「じゃあね、ツヴァイ」

「…ツェツィリアも、気をつけて。」

「ドライ〜、元気でいろよ〜」

「……」

がらがらと音を立てながら遠ざかる二台の幌馬車と、周りを歩く六頭の単騎。それが小さくなり、やがて見えなくなるまでそこに佇んでいた三人の女は、顔を見合わせると、迷いのない足取りで、南への街道を歩き始めたのだった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「高価(たか)いだけあって、やっぱり頑丈そうないい馬ね!」

幌馬車の中から、馬車を引く大きな馬を見下ろしてリリアは満足げに笑った。全体的な体のサイズ自体が大きく、足も太い。走るの

は遅いかもしれないが、重い荷物がたくさん積み込まれたこの馬車をぐいぐい引いていることからわかるとおり、力が相当強いのだろう。

「そりゃあ、ルイスさんにいい馬買ってもらっちゃったからね。感謝しないとね」

「そうですわね。わたくし達じゃお金、足りませんでしたものね」

今この幌の中にいるのは、リリア、カミラ、ユーリスの魔術士三人組だ。手綱を操っているのがエイトで、ハワードは騎馬で周辺にいるはずだ。

ガタゴトと揺れながら移動していく景色を眩しそうにみていたリリアは、ふいと視界に入った赤い髪の少女を見つけて、ぱっと顔を輝かせ声をかけた。

「ねーねーリディさん！リディさんって、魔術も使えるってホント？」

赤い髪の少女――リディ・レリアは少し驚いたように彼女を見ると、器用に手綱を繰って彼らに近づき、歩調を馬車に合わせながら頷いた。

「一応ね。魔術付加はあんまり得意じゃないんだけど」

「一応ってレベルじゃないよね。それに魔術付加っていえば、決勝でツェツィリア・クロノヴァが使ってたね。風だった？ああ、でも最後の奴は違ったかな」

ユーリスが後ろから口を挟んだ。リディは決まり悪そうに頭をかく。

「風が基本だけど、最後に雷使われた…って、見てたんだ？」
「僕とハワードだけ。他は馬鹿だから街巡りしてた。特にエイトとか」
「馬鹿ってなんだよユーリス！」
騒がしい声が御者台から上がる。よく聞こえたものだ。
「相変わらず自分に関しては地獄耳よね」
「リディさん、おいくつですの？私達とあまり変わらないようにお見受けしますけれど」
カミラが、風に靡く黒髪を押さえながら問えば、少し考えたあとリディは答えた。
「そういえば、ついこの間十八になった。カミラ達は？」
リリアは驚いた。もう少し上かと思っていた。だが、言われてみれば顔立ちにはまだ幼さが残っているし、溌剌きっぱりとした言動も、二十代のものではないだろう。
一方、カミラはにこにこと笑ったまま続けていた。
「同じですわ。リリアさんとエイトさんはひとつ下ですけれど」
「そう。…ねえ、聞いていいかな」
リディが向けてきた遠慮がちな視線に、三人は首をかしげる。
「君達が命を危険に晒してまで強くなりたい理由って、なに？」
カミラが虚を突かれたように黙りこんだ。ユーリスも目を丸くして口を閉じている。珍しいな、と思いながら、あたしはね、とリリ

アは声をあげた。

「あたしはね、孤児院の出なの」

内容に対してか、リディが軽く眉を寄せたのを見て、リリアは軽く手を振った。

「ザイフィリアとフェルミナの戦争でさ。あたしみたいな子供、結構いるの。でもエーデルシアスが近いおかげで、エーデルシアス側の孤児院に引き取ってもらえたのよ。エイトもおんなじ」

リリアはくすんだ空を見た。故郷はもうはるか遠くだ。

「エーデルシアスは結構予算割いてくれてはいるんだけど。限界ってあるわよね。あんまり生活は楽じゃなかったわ。それでも一生懸命あたし達を養ってくれた施設のひと達に恩返ししたいって気持ちは、小さいときからあったわ。運良く、あたし達の街には、お金のない子供に気軽に勉強とか剣とか魔術とか教えちゃう変わった軍の隊が赴任してたから、そのひと達に戦うすべを教えてもらったの。それで、狩人になった」

リディはちらりとどこかに視線を向けた。リリアがその先を突き止める前にリディは彼女に視線を戻し、無言で続きを促す。

「…それで、少しでも多く稼いで、あたし達の孤児院だけじゃなく、同じようなところを支援出来るように。あたしの、強くなりたい理由はそれよ」

「そうなんだ。…つよいね」

リディは呟いて、視線を落とした。その眼がつらそうに歪んでい

るように見えて、リリアは首をかしげる。

「リディはなんで強くなったの？そんなに強くなったのは、どうして？」

「……。贖罪、かな」

「……贖罪？」

リディは自らの手元を見つめ、緩く息を吐いた。気配が自嘲に染まったのは、決してリリアの気のせいではないだろう。

「私は昔、取り返しのつかないことをした。その時奪ったものに対して、のうのうと生きるのは失礼だと思った」

淡々と、薄い唇からこぼれおちる言葉の意味は良くわからない。金の眼は伏せられ、横顔からは先程感じた幼さなど、どこかに行ってしまったように思えた。

「強くなることで、普通の日常を捨てることで――少しでも赦されたかったんだ、多分。馬鹿だよね。それは、逃げでしかなかったってことは、今思えばよくわかる」

やりきれなそうな笑みを溢すリディを、三人は言葉を飲み込んで見つめた。金の眼には、同年代とは思えぬ影がある。だがそれに気付いたらしいリディは、それをさらりと消して笑った。

「でも、後悔はしてない。強いことで損をした記憶はないし。人生は広がったね。…それに」

「――リディ！」

その時、遠くからルイス・キリグが彼女の名を呼んだ。なに、と

リディが声を張り上げれば、黒髪の青年は手招きをする。

「ちょっと来い！進路の確認する！」

「わかった、今行く！」

リディは叫び返して、三人に向かって首を傾けた。そこに先程までの暗さはない。

「それに、あいつに会えた」

絶句する一同に気付いた様子もなく、リディは彼らに挨拶した。

「また喋らせて。同年代の狩人って、あんまりいないから楽しかったよ」

「う、うん…」

「も、もちろんですわ。また」

馬首を返して去っていくリディを目で追ってから、若い三人は何とも言えない表情で顔を見合わせた。無自覚に垂れ流された関係性に、言葉ではなく、乾いた笑みが漏れた。

「なんつーか…」

「うん」

「ははは…」

そこに、馬を寄せたハワードが怪訝そうな目を向けた。

「…なに笑ってるんだい、みんな」

「いや、あの二人、面白いよねって話」

「……」

ユーリスの台詞に、ハワードは鳶色の眼を細めて、何事か話し合う馬上の二人を見つめた。
その瞳によぎったものが何かを知る者は、彼以外にない。

リディが、リリアとエイトの話だけを耳にし、他の三人の話を聞いていなかったと思いだすのは、ずっとあとになってから――全てが終わってからの事だった。

ジフレストから、アーヴァリアン西端、つまりイグナディアと国境を接する街、ケイトスに至るまではおよそ三日を要した。雪の舞う中、辿り着いた街は閑散としていて、冬の静けさでは収まらない空しさを感じさせた。

「今日の昼にはイグナディアに入るぞ。出来る限りの食糧の補充しとけ。弓士は矢もな」

最後の安全な寝床となった宿屋の食堂で、ジョンが一同に告げる。年齢と人望からか、彼はいつの間にかこの連中のリーダーみたいなものをやらされていた。

「ルイス、リディ。結界の解除はお前らに任せるぞ」
「あー了解。まあ、行ってみねえとわかんないけどな」

軽い口調のルイスの頭を、ぺしりとネーヴェが尻尾で叩く。下手にうろつくと女性陣の餌食になるため、もっぱら最近のネーヴェはルイスの肩に収まっていた。

「ジフレストで各自準備したとは思うが、かなりの寒さが予想される。防寒対策はしっかりな」

見回した一同がそれぞれ頷いたのを確認し、ジョンは言った。

「最後の安全地帯だ。今の内に覚悟作っとけよ」

唱和された応答は、既に揺るぎないものだった。

第十一話　崩壊の鏑矢　（2）（後書き）

手紙、は十話後日談につながるものです。

第十一話　崩壊の鏑矢　（3）

第十一話　崩壊の鏑矢　（3）

「…うわ」

山と山の間、谷間の隘路に作られた国境門の前に立った瞬間、魔術士、治療術士一同はそんな声を上げた。

「なにこれ。誰が作ったの」
「つうか人間業じゃねーだろこれ」
「……」
「見たことないわよ、こんなの」
「うーわ…」
「想像以上だなこれは…」

魔力を操ることで結界を可視化できる面々は反応を示せるが、他はわけがわからない。

「ん？なにかあんのか？」
「なんも見えねーけどなあ」
「…見えんな」
「わかりやすく言うと。ルネの結界が子供の落書きに見えるくらい、緻密かつ複雑な結界が張られてるのよ」

ツェツィリアは溜め息をついた。五属性だけではない。――闇も含まれている。

「これだけのもの作るには…」

「何人、亡くなったのでしょうね…」

魔族とはいえ、これだけ複雑なもので国を覆いつくすのは不可能だ。魔物が使わないはずの五属性魔術が編み込まれていることを考えても、多数の魔力を持つ命が使われたとみて間違いないだろう。

そんな中、リディは一人だけ落ち着いていた。ゆっくりと視界の範囲の結界を見納め、止めていた馬を再び歩かせながら呟く。

「…ラグのよりマシか。でもこじ開けるのは面倒だね」

「…は？」

聞き咎めた面々が間抜けな声を上げるのを余所に、無人の門のギリギリに立ち、叫んだ。

「約束通り、私達は来た！とっとと開けろ、エカテリーナ！」

ぐわん、と結界がたわんだのを、魔術士達は目にする。次の瞬間、彼らの頭上に、ひとりの女の姿が現れる。

「ようやく来たのね。待ちくたびれるところだったわ」

美しい姿でころころと笑う魔族の女に、馬車にいた狩人達も残らず飛び出し、戦闘態勢に入る。寄せられる殺気に、しかしエカテリーナは気にも留めなかった。

「でも、仲間を集めてくるとは思わなかったわ。少しは賢くなったのかしら？」
「ひとに言われてな。だが、虫けらが増えたところでお前にとっては関係ないんだろう？」
挑発的なルイスの台詞に、エカテリーナは笑みを崩さない。
「そうね。足掻く人間が多いほど楽しめるもの」
こいつ最低、とリリアが呟いた。
「イグナディアの民を何人殺したんですか？」
マシューが厳しい声で問う。エカテリーナは首を傾げた。
「さあ？知らないわ」
「命をなんだと思って…！」
「貴方達だって、踏み潰した蟻の数なんて数えないでしょう？それと同じことよ」
くすくす笑うエカテリーナの顔には、いっそ恐ろしいほど邪気がない。――本当に、なんとも思っていないのだ。
「やめろ、マシュー。問うだけ無駄だ」
ヨセフが低く制す。唇を強く噛み締め、マシューは拳を握った。
「さて、じゃあ…山越えは大変でしょうし、そこまで連れていってあげるわ。でもそこからどうもがくかは貴方達次第ね」

すっ、とエカテリーナが手を上げる。狩人達が咄嗟に武器を抜きかけ――次の瞬間、

「……え……？」

彼らは、雪原に立ち尽くしていた。

「なに…、今の」

呆然としたまま、びょうびょうと吹き付ける吹雪の中で、リリアが言った。

馬も、馬車も。その場にいた全てが、ここに移されている。いないのは、あの魔族だけだ。

「転移…魔術…？」

普段喋らないルネも、驚きの余りかそんな呟きを漏らした。

一方、ルイスとリディは忌々しげに舌打ちする。

「魔術陣が敷かれてたのか」

「やられたね。まあ、楽っちゃ楽か」

「ちょと待てそこ。何故転移魔術を普通に看過してんだ」

エドガーがツッコミを入れた。そして、その応えに一同唖然とする。

「見たことあるし」

「三回目か？」

「ううん、四回目」

「あー、そういえばセティスゲルダもやってたな。てことは五回目か」

「…何にどこから突っ込めばいいんでしょうか…」

「あー、いい。取り敢えず火魔術使えるやつ、結界張ってくれ。寒い」

既に二人については諦めているジョンは、手を上げてそう頼む。一拍おいて、リリアが火の結界を彼ら全体を包み込むように張った。遮られた極寒の風と冷たい雪に、全員ほっと息をつく。

「ていうか、有り得なくナイ？いくらなんでもこの吹雪、おかしいわヨ。イグナディアっていったって、真冬まではまだ日があるはずヨ」

ごつい図体に女言葉のマルセロがが薄ら寒そうに、暗い空を見上げる。クラウディオも顔をしかめた。

「そうだな。…前来たときは、これほどではなかったはずだ」

見渡す限り、雪、雪、雪。背後に聳え立つ山は真っ白で、木も半ば以上埋まっている有り様だ。

「ていうか、どこに飛ばされたんでしょう？」

呟いたハワードの眼前に、突如紙切れが現れる。反射的に手にとって眺め、彼は顔をしかめた。

「見てください。地図です」

紙切れには、簡略化されたイグナディア国内の地図が描かれていた。いくつかの大きい街の名と街道、湖が描かれ、そして右端の方に×がつけられている。恐らく現在地だろう。

「おーおー、親切なことで」

ヨセフが皮肉げに吐き捨てた。ジョンが良し、と頷く。

「気に食わないが、現在地がわかったことはありがたい。馬車組は中に入れ。出発するぞ。街道に出る」

数分後、一行は雪景色の中をゆっくりと歩み出した。

進み出して数十分後、ハワードから受け取った地図を眺めつつ先頭を歩いていたジョンは、チッと舌打ちして手綱を引いた。

「駄目だ。視界が悪すぎて道がわからん」

馬車と、騎馬組も足を止める。そして幌馬車のひとつから、顔色を悪くしたリリアが頭を出した。

「ごめん…そろそろ、誰か結界替わってくれない？魔力が…」

「…そうね。ごめんなさい、無理させて…ルネ、替わってあげて」

黒いフードを被ったまま、『ジィ』の幌馬車からルネが顔を出すと同時に、リリアの結界が消失した。ふるっと身を震わせたルネは、手を広げて小さな声で呟く。すぐに暖かい膜が一行を覆った。

「ありがとう、ございます」

ふらふらと引っ込んだリリアは、やはり魔力量が少ないようだ。ツェツィリアは頷き、ルネにも「きつくなったらいいなさい」と告げた。

「あー、ルネ・フォーレ？ものは試しで頼んでみるが、前方の雪、溶かせたりしないか？」

ジョンの台詞に、しかし御者台のテディーが即座に首を振った。

「無理だ。ルネの魔力は多くない」

「あー…、どうすっかなー…」

頭を抱えたジョンに、呆れた声がかかる。

「あのさ。君、私を忘れてない？」

「「あ」」

ジョンとエドガーの声がハモる。リディが呆れた目付きでこちら

を見ていた。

「いや正直剣士換算してた。そーだよなお前がいたよな」
「やってくれもういっそ進路だけじゃなくやってくれ」
「無茶言うなよ」

リディは馬を繰り、一端結界の外に出る。他人の結界の有効下での魔術の行使はできない。

「うー、さぶ…フレイア」

体力に支障が出ないように魔力を調節し、練り上げる。

「溶かせ」

次の瞬間、炎の波が広がった。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……あれ？」

重い沈黙ののち、乾いたリディの声が上がる。

「おかしいなー、こんなに溶かす予定じゃなかったんだけど」

「……っ、誰が視界まっさらにしろって言ったあああああ！！」

ジョンの叫びが響き渡った。

リディを源として、百二十度程の視界に収まる範囲から。あれだけ積もっていた雪が、僅かな高さを残して消えていた。

「リディ、魔力量考えろ。核使ってないんだろ？ぶっ倒れるぞ」

ルイスの咎める言葉に、リディは困惑顔で振り返る。

「いや、残しとく魔力を決めてやったからそれは平気…でも、なにこれ。ラグじゃあるまいし、私こんな魔力ないんだけど」

何事かと馬車から降りてきた狩人達も絶句して立ち尽くしている。

「…どんな魔力量よ…」

「反則だワ」

「…あ、街道見っけ」

切り開かれた視界の先に、淡く光る聖結界に包まれた道を見つけたエドガーがそれをみんなに伝える。

「おし、なにはともあれ結果オーライ！取り敢えず街道に出る…」

ジョンの台詞は、途中で途切れた。同時に、金属が擦れる音が連

続し、狩人達が皆武器を抜く。その眼は鋭く、敏感に察知した殺気に対し、瞬時に意識を研ぎ澄ませる。

「どこからだぁ？」

即座に組まれた円陣の端で、矢をつがえたテディーが低く唸る。見渡す限り３６０度の視界に、敵影は見えない。

「てことは…」

エイト・ベルが呟く。ゴゴゴゴゴ、とどこからか重低音が響いてくる。地面が揺れる。空気が震える。

「「上（下）だっ！！」」

狩人達が飛び退くのと、遥か上空から魔物が飛来してくるのと、地中から魔物が現れてくるのが同時だった。

けたたましい啼き声を上げながら、馬が前足を振り上げる。危うくひっくり返りかけた馬車は、治療術士と魔術士が連携して素早く立て直した。

「馬お願い！」

リディも馬から飛び降り、手綱をマルセロに投げ渡す。受け取られたかの確認すらせず、魔術を行使して体を跳ね上げた。

くるりと体を回転させ、眼下を見下ろす。

「地這蟲（ワーム）かっ…！」

白い雪原に、毒々しい体色の長い躯が、無数の足を蠢かせていた。

しかも数は一匹や二匹ではない。

「リディ、上だっ！」

つい下に気を取られたリディに、ルイスの鋭い叫びが届く。空から滑空してきた巨鳥型の魔物が、鉤爪を剥き出しに彼女に迫っていたのだ。しかしリディが振り返る前に、その魔物の胸部に一本の矢が突き立った。しかも硬い鱗と鱗の間、ほんの僅かな隙間にだ。的確かつ容赦のない急所への攻撃に、鳥が甲高い啼き声を上げて落下する。

「余所見すんな、ボケ！」

地上から矢の主、テディーが怒鳴る。

「ありがとう、助かった！」

リディは叫び返しながら、意識を集中して魔力を引き出す。魔力を手から、更にその先の剣に集め――ミスリルのそれに馴染ませる。ぼっ、と熱が生まれたのを確認して、リディは空中を蹴る。

「――――っ！」

無音の気合いを奔らせ、リディは逆手に構えた右手の剣を、眼下で暴れる蟲の頭部に、突き立てた。

――ギイィィィィィィッ！！

硬いはずの甲殻を貫かれ、蟲が暴れる。それに巻き込まれる前にリディは剣を引き抜き、蟲の頭を蹴って飛び離れる。一瞬後、離れ

た所から飛来した火の玉が蟲の躯を瞬く間に覆い尽くした。見れば、黒いマント姿の小柄な影が手を突き出している。

（ルネ・フォーレか…）

クラウディオの指示が飛んできた。

「リディ・レリア！下はいい！上の鳥どもを頼む！」

「――了解」

短く答え、耳障りな奇声を上げて空を飛び交う巨鳥達を睨む。その内の一体に狙いを定めたところで、瞬間的にぞっと寒気を感じ、本能の部分で退避する。

次の瞬間、空の巨鳥達の多くを、氷の槍が貫いていた。

「…あれ？」

落ちる静寂、その中で先程のリディのものと酷似した間抜けな声が落ちる。出所はルイスだ。

「っなにしてくれてんのよ！殺す気！？」

リディと同様に巨鳥をターゲットしていたツェツィリアが、常の泰然さをかなぐり捨てて怒鳴る。

「ごめん！なんか上手く調節（コントロール）が出来なかった！」

「ごめんじゃないわよ！今度酒代持ちなさい！」

「あんたが大酒呑みじゃないならな！」

「なによケチくさいわね！」

「そこ無駄口叩いてる暇あったら手ぇ動かせ！」

「ジョン、右頼む！」
「マルセロ、魔術士達と馬ちゃんと守ってろよ！」

怒号が飛び交い、魔術が交錯し、縦横無尽に人間が走り回る。
そんな中、ひとつのパーティはきちんと陣形を組んで堅実な戦いを行なっていた。地這蟲の出す毒液が雪どころか地面すら溶かし、僅かに残った巨鳥から氷のように冷たい息を吐き出すのを避け、隙を狙って前衛組が上手く翻弄を交えながら攻撃を加え、後方から魔術による援護が飛ぶ。
速度は決して速くない、しかし確実に、『シルバーダガー』は魔物を仕留めていっていた。

「おいこら人外。あれがホントの狩人パーティの戦い方だぞ」

戦いの最中、たまたまずれ違ったジョンがルイスにそう囁く。ルイスはしなりながら迫ってきた蟲の尾を防ぎながら言い返した。

「人にいえたことじゃないだろ」

ジョン達『ノナ』だって、この乱戦の中バラバラに魔物と戦っているのだ。人のことを揶揄できる立場ではない。

「そりゃ、この程度の敵だからだ。もっと手強くなりゃ、俺達もああいう風に戦う」

ルイスは眉をひそめた。この魔物達は、少なくとも中位のものだ。それを『この程度』と言い切るか。

「だがお前らは違う。どんなに強い相手でも、二人だけで突っ込んでくだろ」

あらかた魔物も片付いてきた。傍観に身を休ませることにしたのか、ジョンは口を動かすのを止めなかった。

「お前らがとんでもない力を持ってるってのはわかってる。じゃなきゃ許可は下りない。でもな、お前らは――」

ジョンは言葉を切った。空の巨鳥を殲滅し終えたリディが傍に着地してきたのだ。

「普通に中位が出てくるとか、この国やっぱおかしくなってる…って、どうかした？」

ルイスはジョンを見、肩を竦められたとわかるといや、と首を振った。

「別に。地這蟲も、ほとんど他のパーティがやってくれたみたいだぜ」

「そうみたいだね。『シルバーダガー』の加勢した方がいいかな？」

リディの問いに、ルイスはかのパーティに目を向ける。先程と同じく、だが違う個体を相手に戦っているらしい彼らを、ついで手を止め傍観している他の狩人達を見回し、首を横に振る。

「あれならほっといても平気だ。実力も見ておきたい。リディは落ちてる核回収しといてくれ」

「了解」

軽い足取りで点々と散らばる核を拾いにリディがその場を離れるのを待って、ルイスは言った。

「で、俺達が、なんだ？」
「…いや。戯言だ。忘れろ」

視線を『シルバーダガー』に据えたままのジョンに、ルイスは眉を寄せはしたが問い詰めることはしなかった。その代わり、最後の一体に止めを刺そうとしている年下の少年達に目を細める。
細剣使いが攪乱して注意を引き付け、魔術士達が防御と援護をして剣士達を守る。そして魔物の意識外に出た大剣使いが、その凶悪な凶器でもって地這蟲の頭部を切り落とした。
新人とは思えぬ手際のよさだった。

「お見事」

ひゅ、とツェツィリアが口笛を吹く。テディーが気のない拍手を送った。

「…見ていたなら助けてくだされればよろしいのに」

薄く汗をかいたカミラの不満に、クラウディオが無表情に返す。

「お前達が無理なく処理できると判断した」
「いや、そうじゃなくてね…」

ユーリスが何かを言う前に、袋に回収した核を詰めたリディが戻ってくる。

「これどうする？パーティごとに割り勘しようか」
「全部でいくつある？」

ルイスの問いには、ややあって32、という答えが返ってきた。
エドガーが言う。
「それじゃ一人二つ配分でいいんじゃねーか？魔術士は魔力の補填がしたいなら、仲間内から分けて貰えばいい」
「それ、『ヘキサ』が不平等じゃないノ？」
マルセロが待ったをかけたが、当の『ヘキサ』がいや、と頷く。
「それでいいよ」
「ガス欠って程まで行ってないしな」
「あんだけやって余裕なのかよ…」
ヨセフが思わずと言った調子で呟いた。ルイスとリディは目を見合わせ、首を傾げる。つられてネーヴェがひっくり返った。
「なんだろうな。魔力、増えてる？」
「うん。――魔力増えるのって、十五歳くらいまでの筈なんだけどね」
ヒトは、初めから最終段階の魔力を持っているわけではない。赤子の頃から膨大な魔力があったのでは体が追いつかない。
個人によって、魔力の『器』がある。『器』の大きさによって、成長していくにつれ得られる魔力が変動する。その変動が終わるのが、だいたい十五歳くらいまでなのだ。
得られる、といっても外部から取り込むわけではない。潜在的に本人の魂が持つ力が、肉体という容れ物に馴染んでいくのだ。『器』は、潜在的な力の大きさに比例する。
精霊達が召喚の際見定めるのも、この潜在的な力だ。与えられる魔力を食糧のようにして主に使える精霊は、高位になる程必要量が

多い。必然、魔力の多さと精霊の高位さもまた、比例することになる。

「まあ、多いに越したことない」

「あんた達は多すぎよ」

ビシッとツェツィリアのツッコミが入る。他魔力持ちもうんうんと頷いた。

「…そろそろ街道に行かないか？」

クラウディオの言葉に、皆賛成する。万が一街道に着くまでにまた魔物に遭遇すると危ないので、補給を済ませておく。

幸いそれが必要になることはなく、一行は無事に結界の張られた街道に入った。

「はー、寒さまで和らいだ気がするわ～」

リリアが馬車の縁で伸びをしながら言う。かと言って、本当に火結界を解いてしまえば寒いこと確実だが。

「ルネ、代わろうか？」

馬上からリディが言った。魔力量がルネよりリディの方が多いらしいというのもあるが、なにより自分の限界点を知っておきたい。

それに対し、ルネは少し考えてこくりと頷いた。同時に結界が消失する。途端、びゅうびゅうと吹き荒ぶ極寒の風が、一行を襲った。

「ささささっぶー！！リディさーんっ、結界張ってくださいっ！」

「なぜ敬語…」

エイトの悲鳴に首を傾げながら、リディは手早く結界を構築する。ふわりと暖かな膜が狩人達を覆った。マルセロが感心した風に言う。

「構築速度も速いのネ。アナタ、なんで魔術士専攻にしなかったノ？してたら、大陸五指も夢じゃないワヨ？」

「身近にもっと凄いのがいたからね」

は？という視線が集まった。リディは苦笑してルネに笑いかける。

「ルネ、君と同じ、五属性を持つ魔術士だよ。もっとも、魔力量は君よりかなり多いけど…。常識知らずの青天井、って言葉はあいつにこそ相応しい」

ルイスは相応しすぎる形容詞に片頬をひきつらせる。まったくそんな感じた。ネーヴェも遠い目になっていた。

フードの外からでもわかる、驚きに固まっている様子のルネ。

「すぐそばにあんなのがいたんじゃ、魔術士の最高峰を目指す気にもなれない。だから、魔剣――違った、魔術士と剣士を両立しようと思ったんだよ」

リディはあっけらかんと言って、ついでのように付け加えた。

「ちなみにこれ、うちの国家機密だから。喋らないでね」

「「「……」」」

パカッパカッ、ガラゴロガラゴロと馬の蹄と馬車の車輪の音だけを響かせて、狩人達は街道を進んでいった。

第十一話　崩壊の鏑矢　（3）（後書き）

さくさく更新してる割には話が進んでいない…。

第十一話　崩壊の鏑矢　（４）

第十一話　崩壊の鏑矢　（４）

「前方に村が見えます。どうしますか？」

その夕暮れ、エドガーと交代して馬車の手綱を操っていたハワードが声を上げた。思い思いに思索に耽ったり、仮眠をとったり、話に興じながら歩いていた狩人達は、そろって言われた方向に目を凝らす。確かに街道沿いに、村の影らしきものが見えた。

「目、いいな」

感心したようにエドガーが言った。ハワードが「よく山で遊んでいましたから」とはにかむ。ルイスは隣をいくリディに囁いた。

「リリエンヌの側に山なんてないよな？」

「私のは生まれつき。――見たくないものまで細かに見える」

自嘲的に言ってから、すぐにリディは首を振った。

「いや、役に立つことのが多いな。特に狩人になってから」

「…そうだな。お前五感良いよな。獣じみて」

「誉めてる？貶してる？」

「誉めてる誉めてる」
「…怪しい」

ジョンの声が飛んでくる。

「おーい、そこ二人！あの村で今日は休むぞ、いいな？」

りょーかい、と声を返しかけて、リディは言葉を止めた。ルイスの肩に乗るネーヴェが、威嚇のような唸り声を上げたからだ。

「どうした、ネーヴェ？」

ルイスの訊ねに、ネーヴェは毛を逆立てて唸りながら、パシパシと尻尾を振る。

ルイスとリディは顔を見合わせ、リディが前方に向かって叫ぶ。

「ちょっと待って、ジョン！」

全員が振り向いた。怪訝そうな面持ちの面々に、リディは、

「ネーヴェの…ピュルマの様子が変。あの村…あんまり良くない、のかもしれない」
「ピュルマにそんなことがわかるのですか？」

ハワードが懐疑的な調子で言った。それにリディが言い返す前に、マシューが首を振る。

「動物は、我々人間よりそういう感覚に鋭いものです。馬も、先程の鎮静効果が続いてしまっているのでわかりにくいですが…あまり、落ち着かないように見えます」

「…全員、警戒を怠るな。様子を見ながら行くぞ」

馬上で剣を抜いたジョンに、全員が従う。魔術士達も、護身用の短剣を抜いた。

全員無言で馬を進め、村の入口に近い街道の端に止まる。馬がブルル、と落ちつかなげに嘶いた。

「…『シルバーダガー』と、マシュー、エドガー、ツェツィリア、ルネ、リディは残れ。残りで先に村の中を調べるぞ」

「私も行く」

「駄目だ。俺達に何かあった場合、主戦力が残らずいなくなったらヤバイ」

不満そうな顔をしていたリディは、それで渋々引き下がった。入れ替わるように馬を進めたルイスに、小さく「気を付けてよ」と囁く。ルイスは軽く肩を竦めて「任せろ」と応えた。

街道にリディ達を残し、ルイス達は慎重に村の中に足を進めた。幸い雪や風は弱まり、視界は先程よりかなり良い。

「…薄気味悪いな」

静まり返った村。時刻としては、天候のためわかりづらいが夕方を少し過ぎたくらいのはずだ。なのにこの静けさは――不気味すぎる。

「誰か、いないのか」

クラウディオがバリトンを張り上げる。だが、それに応じる声はない。

「…本当に誰もいねぇのか？」

ヨセフが呟いた直後、カタ…、という小さな音がやけに大きく響いた。

ばっ、と身構える狩人達。耳を澄まし、音の発生源を探る。

全神経を張り巡らせた一同の耳に、もう一度カタ、という音が届く。

「…あっちだ」

テディーが一方、村の中でも一番小さな家の方を指す。狩人達は視線をかわし、素早くそこに集まった。手振りで意図を示し合い、扉の横に三人が張り付く。

一瞬の空白の後、ルイスとジョンが扉を蹴破って突入し、即座に剣を向けた。

「誰かいるのか！」

怒鳴り声が、しんとした家屋に響く。油断なく辺りを睥睨した瞳が一点で止まった。

「…骸骨？」

ルイス達の背後で弓を構えているテディーが呟く。

奥の壁。入口から差し込む光に微かに照らされるだけのそこに、白い骸がもたれかかっている。衣服は村人らしい簡素な服だ。

「…おい」

「ああ。――おかしい」

死体が白骨化するには、環境にもよるが半年はかかる。この国が閉ざされたのは三ヶ月前。早すぎる。その時、

「離れなさイっ！！」

入口の方から鋭い声が飛んでくると同時。

目の前の骸骨が突如跳ね飛んだ。

「っ！？」

後ろ手に握られていたらしい包丁を咄嗟にジョンが防ぎ、テディーが何もない空間から光る矢を生み出すと同時に放つ。ルイスは転がって外に出た。

「生ける骸（アンデッド）だっ！」

ルイスの叫びが轟くと同時、村の各所から邪悪な気配が立ち上った。クラウディオが鋭く呼ぶ。

「マルセロ！」

「わかってるワ！」

マルセロがクラウディオの槍の穂に手を翳す。数秒後、穂に金色の光が生じた。

（属性添加…！）

ルイスは自らの刃に聖属性を付加しながら内心で驚嘆した。

属性添加とは、概念的には属性付加と同じだ。ただし属性付加が、

自らの魔力を自らの武器に付加するのに対し、属性添加は自らの魔力を他人の武器に付加することをいう。
自分の魔力を自分に馴染ませるのは、難しいが出来る者が稀というほどでもない。ただ、属性添加は自分の魔力を全く違う波長の他人の魔力と同調させなければならない為、難しいどころの話ではない。それこそ、出来るものは大陸で五十といないだろう。

（狩人第二位は、伊達じゃねえな…！）

ぶん、と属性付加した剣を振って、ルイスはわらわらと現れ出した骸骨達にうちかかっていく。基本的にアンデッドは動きが鈍い。対抗できる手段さえあれば、倒すのは難しくない。

「ちっ…！ヨセフ、リディとマシュー呼んでこい！お前の属性じゃ無理だ！」
「……！」

一方、ひとまずアンデッドを切り払ったジョンが、硬直していたヨセフに叫ぶ。ヨセフは強張った顔のまま頷き、踵を返して走り出した。
ジョンは、よろよろと立ち上がるアンデッドを見据え、激しく舌打ちする。
アンデッドを倒す方法は二つある。炎で焼き尽くすか、聖属性で浄化するかだ。裏を返せば、それ以外の方法では倒せない、ということでもある。
ジョン達のパーティの中では、アンデッドを倒せる人間はマシューしかいない。自分に出来るのはせいぜい時間稼ぎた。馬鹿げた能力を持つルイスとは違う。

「イーデル！こっちに来なサイ！」

その時、マルセロが鋭くジョンを呼んだ。同時にジョンと向き合っていたアンデッドは、飛来したテディーの光の矢に浄化される。

「聖属性を添加するワ！早く！」

呆気に取られるジョンの手から剣をひったくり、マルセロは素早く集中する。

波長を合わせ、魔力を添加。間もなく聖属性魔力の籠ったそれを渡されたジョンは、口をぽかーんと開けたまま呆けていた。

「何してるノ！早く殲滅しなサイッ！」

マルセロの怒号にようやくぎくしゃくと動きを取り戻し、ジョンはアンデッド達に向き直る。ルイスとクラウディオは既にバラバラに切り込み、テディーも矢継ぎ早に光の矢を放っていた。だがしかし、戦力は彼らだけではなかった。

「ふンッ！」

低い気合いと共に、ガタイのよい体が腕を突っ張り、間近に迫っていたアンデッドを吹っ飛ばす。聖魔力のこもった掌底に、呆気なくアンデッドはばらばらに崩れ去る。

「…マジで？」

アンデッドを切り飛ばす作業を思わずやめ、ルイスは固まった。彼の目は信じられない光景――マルセロが聖魔力をまとった素手でアンデッドを破壊している光景――を映していた。

盛り上がった筋肉は易々と骸骨をバラバラにし、正しく物言わぬ

骸を生産しまくっていた。
ルイスと、同じく唖然としていたジョンへ三たびの叱咤が飛ぶ。
「ルイス・キリグ、ジョン・イーデル！手を休めるな！」
クラウディオが、一気に三体程をばらしながら叫んだことで二人ははっとして、慌てて迫っていたアンデッドを蹴散らした。
「ルイス！」
凛とした声が響き、同時にルイスに迫ろうとしていたアンデッドに炎が飛来する。瞬く間にアンデッドは燃え落ち、遅れて次々に炎が着弾した。
「要を作ります！ジョン！」
リディの後ろから走ってきたマシューが、懐から小さな石を取り出して、ぶつぶつと呟き出した。追って、ジョンがその周りのアンデッドを一掃する。
「ルイス、リディ！加勢してくれ！」
「了解！」
「任せろ！」
村を囲むように走るマシューを護り、三人が並走する。村の東西南北に石が置かれると、次いで皆中央に駆け戻る。マシューが詠唱した。
「我が聖霊に命ず、護り石を要として邪悪なるものを清め、外敵より護れ…！」

アンデッドを蹴り飛ばしつつリディが狼狽えた。

「え、詠唱？」

「あの石に構築魔術が刻まれてんだよ。魔術媒介としての能率を上げんだ」

「…初めて聞いたぞそんなの」

「スーザン…『ペンタ』の魔術士から聞いたんだったか。強力だぞー」

そうこうする内に、マシューの詠唱が完成する。瞬間、さあ…と澄んだ空気が放射円状に拡がっていった気がした。

――アァアァァ…

遠い悲鳴を上げて、アンデッド達がばたばたと倒れていく。纏っていた邪気が消え、ただの骨へと還っていく。

「お見事」

ひゅー、とルイスが口笛を吹いた。先程とはまるで空気が一変している。清浄な、清閑な空気だ。

「しかし、なんだってんだぁ？なんでこんな村に、アンデッドが大量発生してやがんだよ」

テディーの疑問には、膝をついて近くの骨を調べていたクラウディオが答えた。

「恐らく、もとはこの村の村人だろう」

「なっ…」
「……」
「服が、このあたりの村人の着るものだ。異常な白骨化の速さといい、そう見て間違いない」
リディが困惑げに反論する。
「いや、そりゃ確かに異常だけど…アンデッドって、確か死後に長い間悪魔とか魔物の邪気を受け続けて出来るんだろ？こんな村の中で…」
「いや…魔族が関わっている以上、常識でものを考えすぎない方がいい。この異常な気象の原因の一環かもしれないな」
ルイスがクラウディオに同意し、ジョンは頷いて歩き出した。
「何にせよ、マシューが結界を張ったからにはここは安全だ。…外の奴ら呼んでくる」
村の外で待機していた面々を呼び入れ、村を隅々まで調べた結果、村には殆ど食糧は残っていなかった。薪や、馬の飼料、荷車といったものも存在せず、まるで家だけを残して人が移動したようだった。
「多分そうなんでしょう」

一番大きな家を借りて食糧を食卓に広げ、口にしながら、そう言ったのはハワードだ。

「首都に行けば、こちらよりは食糧も安全も手に入れやすい。そう考えて村を捨てていったと考えても不思議はありません」

「本当に手に入れやすい、のかしらね…」

ツェツィリアが呟く。集まった視線に、彼女は肩を竦めた。

「少なくとも、あたしがここにいた頃は、そんな考えはなかったわ。ここの王家は腐ってるもの」

「腐ってる？」

反応したのはルイスだ。

「ええ。まともな国が、国内の政治もまともにせずに、他国に戦争をしかけたりするかしら？」

ルイスは絶句した。数度口を開閉し、それから険しい目付きになって黙りこくる。

「まああそこは前からいい噂はきかないわよネ。ミスリルも関税ぼったくってるワ」

「そうだなー…」

「そうなんだ。あんまり聞くことなかったからな…」

リディは眉根を寄せ、ルイスも顔を顰めた。知らず重苦しげな空気をまとった二人に、ジョンが首をかしげたが、切り替えたリディが手をひらひらと振った。

「なんでもないよ。それより、今日はどうする？ここで休む？」
「ああ…まあ、もう夜だしな。そうすっか」
「ちょっと待ってよ、こんな死体ばっかの村で寝るの！？」
不満そうにリリアが言った。えー？と反論したのはエイトだ。
「いいじゃんか、ワクワクしてさ。だいたい浄化結界張ってあるんだからタダの骨だろ」
「気分の問題よっ！」
「はいはい、仲間割れしない。多数決取らない？イーデルさん」
ユーリスが仲裁し、ジョンも同意し、その結果休むのに賛成十五、反対一で泊まることになった。
「〜〜っ！」
「まあ、リリアさん落ち着いて。わたしも一緒に寝ますから、ね」
「リリアの怖がりも大概だよなあーでっ！」
「うっさい！よけーなこと言うなっ！」
ぎゃあぎゃあと喚く子供達を余所に、大人組は簡単に相談する。
「さっき見てきたけど、家具類はそのままだし、壊れてもないぜ。女と男分けてやりゃいーだろ」
「基本それで行こう。見張りは？」
「要りませんよ。なにかあれば私が感知しますし」
「では、マルセロとキリグ、レリアも構築部分に介入しておけ。なにかあったときアストンだけでは心もとない」
「了解。火結界どうする？寒いなら張ろうか」

それにはハワードが首を振った。

「いいえ。贅沢はしない方がいいです、今後の為に。多少なら薪もありますし」

「ロードルに同意ね。あんまり魔力の無駄遣いはしない方がいいわよ、リディ」

ツェツィリアにも諭され、リディはそれなら、と引いた。

「じゃあ、二軒隣に女組は行きましょうか。荷物持って」

ツェツィリアの音頭に、リディ、ルネ、リリア、カミラが従って家を出ていく。残った面子に、エドガーがぼそっと言った。

「…男だけ十一人って、すげー暑苦しいな」

反論は誰からも出なかった。

男組が微妙なむさ苦しさにやるせなさを覚えている頃、女組は寝床の相談をしていた。

「流石にベッドは残ってるし、毛布を重ねれば使えるわ。…四台し

かないけど」
「あ、じゃあ私は床でいいよ。多分この中で一番体力あるし」
真っ先に手を挙げたリディに、ツェツィリアが恨めしそうな目を向ける。
「それは若さを言いたいのかしら」
「いや、ほら私無駄に元気なんで！」
冷や汗が流れるのを感じながら支離滅裂に言い募っていると、カミラが心配そうに口を挟む。
「わたくしも別に床で平気ですわ？この中だとリディさんだけ馬車にお乗りじゃありませんし、ゆっくりお休みになってはいかがですか？」
「いい、いい！魔術士と剣士じゃ鍛え方が違うから気にしないで。無理して倒れられたら困るから」
なんとか言いくるめて、ツェツィリア以下四人を二階の寝室に送り出す。各部屋に点火型の魔術暖房器具があったのでそれを起動し、リディはひとり階下の居間で、控えめに灯した暖炉の前で毛布にくるまっていた。
（……）
家の中は、先程までは話し声が微かに聞こえてきていたが、日中の雪中行軍、魔物の群れとの遭遇で疲れたのだろう、寝静ったのか、しんとした静寂が降りている。
リディも疲れていないわけではないが、考え事がぐるぐると頭を回っているのもあり、気が昂って眠れそうになかった。

（僅かな間での白骨化。無人の村に、異常な積雪。…これが、全部魔族に繋がってる…？）

時折パチッと音を立てて揺れる暖炉の光を見つめつつ、情報を反芻する。

（あの結界を張るには確かにエネルギーが必要。だから大地のエネルギーを奪って、この土地が冷えきってる…ってのはわかる。でも、村にアンデッドが蔓延るのを、何故王家は看過してる？）

オルディアンでは、どんなに小さな村でも、結界石という岩が置かれ、万一魔物の襲撃があれば、その岩に魔術を込めた治療術士が感知し、近隣の大きな街から警備隊、もしくは依頼を受けた狩人が派遣される。エーデルシアス、アルフィーノもそうだし、イェーツのリックの村にも似たものはあった。

この村にもそれらしきものはある。しかし、機能が完全に失われているようなのだ。

（王家は腐敗してるって、ツェツィリアは言ってた…。でもならなんで、クリスティアーナは何も言わなかった？）

わからない。教育時代以来あまり酷使することのなかった頭は、早くも痛みを訴え始めている。ここのところ、頭を動かすのはルイスに丸投げしていた弊害か。

「…くそっ」

舌打ちして思考を止めて、投げやりに天井を見た。

そのまましばらく、煤けた天井をぼうと眺めていたリディの耳に、

キシリと床板が軋む音が届く。音の方角――階段の方を振り向けば、フードを下ろし、頼りなげな顔つきを晒したルネ・フォーレが、壁に手をつきながら佇んでいた。

「…眠れないの？」

儚げな、幼い顔に戸惑いを乗せている彼女に、リディは意識して柔らかな声をかける。ルネはゆるゆると首を縦に振った。

「…そこ、寒いだろ。おいでよ」

苦笑したリディに、ルネは数秒のまごつきを挟む、危なっかしい足取りで歩き出し――椅子に蹲いて、こけた。

「……」
「……」
「…大丈夫？」

涙目の彼女に慌てて近寄り、助け起こす。

（そういえばこの子、移動中にも何度かこけてたような…）
「…よく、転ぶの」

ぽつりと発された言葉は、風鈴のような微かで、しかし透き通った音。

「…ウィリア」

ふっ、と室内に風が巻き起こる。魔力の流れにリディが目を細めると、ルネの体がふわりと浮き上がり、すうと暖炉の前に移動する。

「魔術のほうが、楽」

リディの視線にそうはにかみ、ルネはおずおずと腰を下ろした。

リディも元いた場所に戻り、しばし沈黙が続く。リディが話題を振るべきなのか悩んでいると、ルネはぽつりと言った。

「昼間の」

「え？」

「昼間、あなた、言ってた、幼馴染み。わたしと同じ、って」

ああ、とリディは合点がいった。それが気になっていたのか。

「うん。君と同じで、五属性を持ってる。今十八」

「同い年…」

「え」

リディはぎょっとして、まじまじとルネの顔を見つめる。ルネは怯えたように身を引いた。

「え、十八歳？ほんとに？」

「う、うん…」

「…うわあ、ごめん。完全に年下だと思ってた」

乾いた笑いを見せるリディに、ルネは首を振る。常々仲間から童顔と言われている。

「…そういえばこの髪、地毛？」

ついとリディはルネの髪を一房手に取った。穏やかな春の色――薄い桃色。自然ではあり得ない色。

「…うん。生まれた、ときから」

ルネは淡い色の目に微かな思いを浮かべ、ぽつぽつと話し出した。

「生まれたときから、五属性魔力、持ってた。髪も、こんな色で、肌も、へんに白い。どこかの領主の家、生まれた。三歳のとき弟が出来て、捨てられた」

「……！」

リディは目を見開いた。

「わたし、生まれたとき、おかあさん、死んだ。わたしのせい、言ってた。弟、次のおかあさん、生んだ。けど、おとうさん、ずっとわたしのこと、嫌いだった、みたい」

たどたどしく話される内容に、リディは黙って耳を傾けることしか出来ない。

「でも、捨てられたとき、わたし、あんまり、悲しく、なかった。ついにこうなった、って思った。別に死んでもいい、って」

そこでルネの顔が綻ぶ。遠い追憶を、思い返すように。

「でも、そのとき、ツェツィーたち、拾われた。わたし、見て、すごい、怒って、食べ物、くれて、傷、治した。わたし、元気になった、魔術、使う、ために、精霊召喚、やってくれた。それから、わたし、ツェツィーたちの仲間」

一気に喋ってから、ルネは口をつぐんだ。喋るのに疲れたらしい。

「親って、不思議だよね」

唐突にリディは言った。ルネがきょとんと彼女を見る。リディはどこか遠くを見ながら、半ば独り言のように話し始める。

「うちの親みたいに、うざいくらいに私に構ってくる親もいれば、子供と対立して挙句、日の目をみることなくなった親もいるし、ただ見守ってるだけの親もいる。…君達の親みたいに、子供を憎む親もいる」

「……」

「魔力の少ない、もしくは殆どない人間が、凄い量の魔力を持つ子供を生むとき、死にやすいのは知ってる？」

こくりとルネは頷いた。そうやって親を喪った子供達が通う学校もあるのだと、旅に出てから知った。

「あいつもそう。お母さんは、魔術士にはなれないくらいの魔力量しかなくて――でも子供のあいつは、とんでもないどころか未曾有、人間なのが疑わしい位の魔力量を持って生まれた。――当然、母親は死んだ」

ゆら、と暖炉の炎が揺れる。リディは視線をそこに固定したまま話し続けた。

「父親はね。すっごく、妻のことが好きだったんだって。それで妻が死んで――狂った。実の息子を、忘れ形見を殺そうとした」

「……っ」

「でも、そうはならなかった。生まれたばっかりのあいつは、当然

魔力のコントロールなんか出来ない。魔力は暴発して、首を絞めてた父親を殺した」

その場にいた友人達が止める間もなかったらしい。生まれたてで泣き叫ぶ赤ん坊の側に転がる、親であった者達の死体。その醜悪さに人々は動けず、魔力の暴走を感知した宮廷魔術士達が駆けつけるまで、それは続いた。

「それからあいつは王宮に保護されて、十歳までそこで育った。ちょうど同時期、オルディアンの王宮には同じように馬鹿みたいな魔力を持つ子供入り浸っててね。問題児ふたり、まとめて魔術を教わった」

「その、子供…あなた？」

リディは目を丸くしてから苦笑し、それには答えなかった。代わりに話を続ける。

「あいつの魔術の才能は、それはもう凄まじかった。五歳の頃で既に、あいつに叶う宮廷魔術士は殆どいなくなってた。宮廷魔術士束にしても追いつかないような魔力量と、揺らがない精神力、卓越した制御力。…歴代髄一の魔術士と謳われる王太子が、早々に負けを認めた程のね」

「…あなた、も？」

「……。そうだね」

ちらりと笑みを刷き、リディは首肯した。

「でもその特異さ――異質さ故に、あいつは自由を奪われた。好きなだけの書物、好きなだけの研究費と屋敷を与えられ――代わりに、十五歳まで一切自由を許されなかった。常に護衛という名の監視が

つき、出国はおろか、外出も一人では出来ない。国家機密として、最終兵器として――外から遮断されたんだ」

ふっと苛立ちめいたものが彼女の目に走った。

「…あいつは頭はいい癖にのほほんとした薄ら天然ボケだから、それも粛々と受け入れたよ。或いは頭が良かったからこそ、かもね。好きに研究に没頭して、色んなものを創り出してる。…でも、私に言わせれば羽をもがれた鳥だ」

だから、と虚空を眺めて嗤う。

「だから散々連れ出してやったよ。監視の目を潜るのなんて慣れれば簡単だったから、色んなとこにね。森も、川も、街も。ただそれでさえ篭の中だったって気付いたのは、結構あとになってからだった」

結局――掌の内だったのだ、ヴィンセントの。烈火の鬼姫（リディ）と最終兵器（グ）が共に行動し、共に学ぶというなら、これ以上安全で効率的なことはない。『影』と呼ばれる特殊戦闘部隊に陰から護衛させながら、表向きの自由を楽しませ、成長させた。

（腹立つけど、それが王太子としてのあいつの選択）

ヴィンセントやシルファーレイ…そして恐らくルイスも、私情と公利を分けられる人間だ。彼らは、親しい人間の幸せを願う一方で、国のためになにが最善かを思考し、選ぶことができる。

（そして私も王族の人間。…あいつらのような判断力はなくても、黙って従う辺りは同じ穴の狢だ）

自嘲の笑みを浮かべてから、リディは戸惑った風のルネに視線を移した。金の目が温かい笑みと、微かな願いを込めて水色の目に合わさる。

「いつか、会ってやってよ、あいつに。同じ風景が見える、同胞としてさ」

第十一話　崩壊の鏑矢　（5）

第十一話　崩壊の鏑矢　（5）

リリアは暗闇の中で、じいっと丸まっていた。狭くはないが、広くもない部屋に響く規則正しい寝息は二つ。自分を除いて、あとひとり――ルネ・フォーレは、しばらく前に階下に降りて行ってしまっていた。

階下では極力音をたてないようにか、囁き声が交わされていたが、それも数分前に途切れていた。つまり、この家で今起きているのは、恐らくは自分だけだ。

（なんでみんな眠れるのよっ…！恐怖ってものはないのっ）

カミラはわかる。伊達に三カ月以上行動を共にしていない。彼女は良くも悪くも徹底したマイペースだ。

ツェツィリアは大人だ。怖がらなくても不思議ではない。だが、残りの二人。

（リディも、たぶんルネも、年変わらないのに、なんで怖くないのよっ！）

ルネに関しては四六時中フードをかぶっているから定かではないが、同年代という自分の感覚は間違ってはいないと思う。そしてた

いてい、自分のような年の女の子は、お化けに類するものは苦手だ、という経験認識もあった。なのに、この状況は何なのだろう。

（こんなとこで眠れなんて、無理よ…）

結界があるから、そんなもの出る訳ないと頭では分かっている。だが心は別なのだ。

ぎゅっと目をつぶって丸まった、だから突然かけられた声に心臓が冷えて変な声が出てしまったのは決して不自然ではないはずだ。

「リリア、眠れませんの？」

「ひぁっ！？」

甲高い、でもひきつっているせいで対して音量を伴わなかった悲鳴をあげて飛び起きたリリアは、隣のベッドにあきれ顔で身を起こしているカミラを見つけた。

「び、びっくりさせないでよ、カミラ…」

「すみません。…そんなに怖いんですの？」

リリアは唇を噛んだ。直接的な答えでなくても、それで十分察したカミラは、しばし虚空に視線を向けて黙考すると、おもむろにベッドから降りる。

「？カミラ……っ！？」

「はい。こうすれば少しは怖くありませんでしょう？」

怪訝そうに首を傾げたリリアは、ついでふわりと体に回された細い腕に再びびっくり仰天して硬直した。

リリアのベッドに横たわり、彼女をあやすように抱きしめたカミ

ラは悪戯っぽく笑う。

「もし何か出ても、わたくしが守ってあげますから、リリアは寝ているといいですわ。明日持ちませんわよ」

「……！、――」

硬直していたリリアは、声にならない音で抗議した。正確に察したカミラは意に介さず笑う。

「赤ちゃんに戻った気持ちでいればよろしいですわ。わたくしもなんだか母親になった気分です」

リリアは脱力した。そういう問題ではない気がするのだが…。

だが、一定のリズムで命を刻む音を聞いていると、不思議と安心感が身を包んだ。同時に、倦怠感にも似た眠気が襲ってくる。

ありがと、おやすみ、という微かな声はカミラに届いたのだろうか。それすら確認するのもままならない内に、リリアはすとんと眠りに落ちた。

カミラは、ほどなく眠りについた腕の中の少女を眺めて、くすりと笑んだ。その光景に対し、半ば呆れ、半ば微笑ましく思っているような声が飛んでくる。

「……仲、いいのねえ」

「ええ。羨ましいですか？」

ツェツィリアは、間髪いれず返ってきた答えに、別に、と肩を竦めた。

「そういうわけじゃないけど。可愛らしいと思うわ」
「ふふ。ありがとうございます」
「……あなた達、子供のころから一緒だったのだっけ？」
ツェツィリアの訊ねに、カミラはいいえ、と首を振る。
「違いますわ。わたくしとユーリスは昔馴染みですけど、ハワードはまだ浅いですわね。パーティを組んだ時に初めて会いましたから。リリアとエイトとは三か月前――エーデルシアスで出逢って、パーティを組みましたの」
「へえ…それにしては凄く仲がよく見えたわ」
「実際、いいですもの。リリアはいい子ですし、エイトはいじりがいがありますわ」
「アナタの性格の一端がよく見える台詞ね」
「ふふ」
「…さあ、あたし達も寝ましょうか。体が持たないわ」
「そうですわね。おやすみなさい」
すっと意識を落としたツェツィリアは、その端でカミラの囁きを耳にしたが、翌朝にはそれを忘れてしまっていた。
「…仲が良くなるなんて、最初は考えもしませんでしたのに、ね…」

―――

翌朝、肌を撫でる冷たさでルネは目を醒ました。寝ぼけ眼で辺りを見回し、そこが寝室でなく居間、暖炉の前であることを確認する。

（……）

いつ眠ったのか、覚えていない。

リディと話している内に、眠ってしまったらしい。

居間にリディの姿はなく、ルネの躯には毛布が余分にかかっている。リディのものだろう。

（…あの人は…身の裡（うち）に、いろんなものを隠してる）

見たところ、快活であけっぴろげな性格の少女だ。そしてそれは間違っていない。だか、それが彼女の全てではない。

（…でもそれは、大事なことじゃない。人に、秘密がないなんてこと、ない）

今は、戦うことのみを考える。自分と同じ特異な能力をもつという少年のことも、彼が自分より優れた素質を持っているらしいということも。

そのうち、答えは探していけばいい。自分の意味を。心の中で生まれた予感の。

すう、と冷えた空気を肺いっぱいに吸い込んだルネは、そこで外

から響く微かな音を耳に捉えた。

「……？」

少し警戒しながらゆっくり立ち上がり、風魔術でふわりと戸口まで移動する。外を覗けば、昨日よりは勢いの弱い雪が、まだ暗い景色の中、静かに村に降りしきっている。

恐る恐る外に出て、微かに聞こえる鈍音を頼りに視界を回す。そして見つけ、目を見開いた。

村の端、狩人達が泊まった家から極力離れたところで、白い景色を背に、黒と赤の色彩が踊っている。

黒と赤――ルイスとリディは、組手をしていた。付かず離れず、己の肉体のみを駆使して互いを打ち合う。最小限の動作で相手の攻撃をかわし、軽やかなステップで次の動作に繋げていく。

（…きれい）

側に剣が放ってあるのは、剣で稽古をすれば音が煩くなってしまうと思ったからだろう。

滑らかに四肢を操る二人の表情は真剣で、雪によって形成される静かな世界では、どこか透徹したものにすら見える。

その時、突っ立っていたルネの足元に、すりすりとすりよる白いもこもこの毛玉があった。突き出した長い耳とふわふわの尻尾――彼らの飼うピュルマだ。

「……」

ルネは一瞬躊躇い、それから恐る恐る抱き上げた。ピュルマは逆らわず、あまつさえルネの体に頬擦りをする。ルネが困惑して立ち

尽くしていると、後ろから雪を踏む足音が聞こえた。

「……」

少し離れたところで動こうとしない気配にちらりと振り返れば、ひとりの少年――ハワード・ロードルが立っていた。灰色の眼に複雑な色を浮かべて、食い入るようにふたりの組手を見つめている。

「……」

やはり無言のまま、ルネは視線を戻した。

ちょうど、リディの右手がルイスの肩を打つ。結構な勢いで打ち込まれたそれに、ルイスは小さく呻いたが、そこからの動きが乱れることはなかった。

踏み込んできていたリディの足を崩し、突き出されていた腕を掴む。

「げっ…！」

リディが慌てて飛び退くより早く、彼女の躯は浮き上がり、そして綺麗に宙を舞った。

ぼすんっ、と間抜けな音が、少し離れたところから届く。遅れて雪まみれになった赤い頭が、ふるふると左右に振られながら飛び出した。

「ったあ！綺麗に投げたな！」

「醜く投げたら痛いだろうが」

「そりゃ痛くないのはありがたいけどね！また負けた！」

ぶつぶつ言いながら、リディは差し伸べられた手に素直に掴まって立ち上がる。

（そっか。新雪…）

雪を払うリディに、どこも痛めた様子がないのを見て、ルネはそっと息をついた。

彼らが組手をしていた場所は、踏みしめられて固くなっている。落ちたら痛いだろう。だが、降り積もったふかふかの雪なら――。

（だから、そこまで投げ飛ばした）

「あ、ごめん。起こした？」

ぱんぱんと雪を払っていたリディが、ついと首をルネと、その後ろのハワードに向ける。ルネはふるふると首を左右に動かし、ハワードは短く、いえ、と答えた。

「早起きが習慣なもので。…でもまさか、先を越されているとは思いませんでした」

ハワードはそれから何故かじっとリディを見つめた。見つめられたリディは怪訝そうに伸びをしていた手を下ろし、見返す。が、ハワードは何も言わない。

落ちかけた沈黙を、ルイスの声が断ち切った。

「早起きは三文の得、って言うしな。早いうちから起きて、体を慣らしとくのはいいことだ」

「…いつ何が起こるかわかんないしね」

視線を外してリディは肩を竦め、昇ってきた朝日に眩しそうに目を細める。ルイスがさて、と言った。

「…そろそろ他の奴らも起きてくるだろ。準備するか」

イグナディアに入って一週間後。

「なんだ…これ…」

狩人の一行は首都ウァリエンの城壁を前にして、絶句して立ち尽くしていた。

「うっ――」

醜悪な光景に耐えきれず、リリアとユーリス、エイトが道端に走っていって嘔吐した。

他の面々も、顔を歪め、吐き気を堪えるように口元を拭った。ヨセフが灰色の壁を睨んで呻いた。

「何が、起こってるんだ、この国に…っ！」

ぐるりと街を囲むくすんだ灰色の城壁。そのきわには、夥しい屍が散らばっていた。

降り続く白い雪が、それを覆い隠そうとしても隠しきれない程。半ば腐り、半ば白骨化した肉体が、白の中で辛うじて色彩を示す襤褸布から突き出している。

街道だけを除くように埋もれる屍は、皆痩せ細り、骨すら細い。その中に、まだ幼い赤子の遺体を見つけ、もともとふらふらしていたルネが倒れた。

「…あたしが子供の時より、酷いわ」

ルネを抱き止めたツェツィリアが呟く。クラウディオも厳しい顔つきで唸った。

「……」

強ばった、を通り越し、ルイスの顔色は蒼白に近い。

「…行こうぜ。立ち尽くしてても、しょうがねえ」

ジョンが静かな声で促してようやく、皆のろのろと城壁に向かって歩き出した。

「止まれっ！」

城門に立つ衛兵二人は、一行を見て長槍を交差させた。尊大な顔つきで睥睨し、横柄に問うてくる。

「何者か。身分を証明せよ」
「ちょっと訊きたいんだけど」
ずっと黙りこくっていたリディが、不意に冷えきった声を発した。
「君達は、この光景を何とも思わないわけ？」
彼女を少しでも知る者なら、彼女が正しく、烈火のごとく激怒しているのを雰囲気から感じ取れただろう。しかし、残念ながら、衛兵達はそうではなかった。
「ああ、あの屍共のことか？」
ふんと鼻を鳴らし、衛兵はがちゃんと鎧を揺らして侮蔑の眼を外に向けた。
「片付けても片付けてもキリがない。全く、下賤の者が我らの手を煩わせるなぞ、もってのほか」
「やめろ、リディっ！」
次の瞬間、いくつかのことが同時に起きた。
剣を抜いて衛兵に斬りかかろうとしたリディをジョンが羽交い締めにしてやめさせ、殴りかかろうとしたエイトをカミラとハワードが殴り倒し、怒鳴り付けようとしたマシューをヨセフが口を塞いで止めた。
だが、誰も予想していなかった人物がキレたのは、誰も止められなかった。

「ルイス・キリグ！？」

蒼眼を凍りつかせた青年の剣は、目にも止まらぬ速さで鞘から走ると、愚かしい言葉を吐いていた衛兵の喉に吸い込まれ、皮一枚ほどで止められる。

「ひっ…！？」

「動くな」

凍てついた声。一瞬の忘我ののち、大声を出そうとしたもう一人の衛兵もまた、青年の左手から生じた氷の切っ先を喉に向けられ、意味をなさない呻き声すら呑み込む。

「呆れたな。お前達のような者が兵を務めるなど、確かにこの国は腐っているらしいな」

感情を抑え込んだ淡々とした口調は、しかしこの場にあっては男達の恐怖を助長させるにすぎなかった。がたがたと震えだした兵を冷やかに見据えてから、ルイスは剣を引き、氷を霧散させる。

「城へ案内しろ。…ああ、身分だったな。狩人協会、『ヘキサ』のルイス・キリグだ。狩人証の照合をするか？」

「貴様ぁっ、よくもぬけぬけとぉっ！ただで済むと思うなぁっ！」

へなへなと崩れ落ちた相方と対照的に、氷という凶器が消えたと見るや、もう一人の兵は目を血走らせて剣を抜き、ルイスに斬りかかった。が。

「黙れクズ」

呆気に取られていたジョンの腕から抜け出したリディが、手加減一切なしの蹴りを兵士の股間に食らわせた。その上、悶絶という言葉が生易しい程の痛みに絶叫しようとした兵士の口を塞ぐために、踵落としで頭を雪に沈める。この間一秒、結果男は何も出来ないまま地に転がった。

「「「……」」」

「相変わらず容赦ないな、リディ」

「甘いな。最初は首落としてやろうと思ってた」

「それじゃあとが困るだろ」

「だね。ジョンに止めて貰ってよかったよ」

物言いたげな同行者達をスルーし、ルイスとリディは残る一人を見下ろした。ひっと身を竦ませる男に、リディが酷薄に嗤う。

「殺されたくなければ案内して？」

ウァリエンの街の中は、街の外が嘘のように賑わっていた。街には品物が並び、人々は屈託なく笑う。しかしよく観察すれば、人は皆中流階級以上ばかり――つまり、どこの街にも必ず存在するはずの、下層の民の姿が一切見当たらないのがすぐにわかった。

どこか白々しくすら感じる風景の中を、青ざめた兵に先導されて歩きつつ、一行の最後尾の馬車の中でリリアが呟いた。馬車の中に

は、リリア、カミラ、ユーリスしかいない。

「…あのひとたち、怖いわ」

あのひとたち、とは無論、先頭を歩く二人の男女――『ヘキサ』のことだ。

「リディなんて――普通の女の子に見えたのに。なのに、全然――」

「そうでしたかしら」

わりと平然と返したのはカミラだ。

「わたくしはリディさんを最初に見た時から、普通だとは思いませんでしたわ。ルイスさんもです。――あの方達は、わたくし達とはまるで異なった価値観をお持ちのように思います」

「価値観？」

ユーリスが首を傾げた。カミラは言い淀む。

「正直なところ…、この国の状況は、わたくしにとってさして意外ではありませんでしたわ。噂には聞いていましたし…、海の向こうの大陸では珍しくないとも聞きます。むしろ、この大陸の国家の在り方こそ、どこか逸脱したもののように思いますの。ルイスさん達の考え方は、それに基盤を置くもののように感じますわ」

「…どういう意味？」

「そうですわね…一言で言えば、」

その時、がたんと大きく揺れると同時に、馬車が止まった。ばさりと幌布が上げられ、エイトの顔が覗く。あからさまに緊張している顔だ。

「着いたぜ」

三人は顔を見合わせて、馬車の外に出た。すると、厳しい顔をしたツェツィリアが、彼らを見て言った。

「『シルバーダガー』のハワード以外と、マシュー、エドガーは街で待っていなさい。何かあった時、全員一網打尽じゃ馬鹿みたいだわ」

「え、俺も？ツェツィリアさん」

「あんたとエイトで魔術士守ってやんなさい」

「へーい…」

エドガーの他に異存がある者はいなかったので、名指しされた者達は無言で、そして不安げに、場内に足を踏み入れていく者達を見送ったのだった。

空に刃を向けるような、いくつもの尖塔が目につく城内を歩いていく。

城の者達はみな、明らかに場違いの風体の狩人達を怪訝そうに見遣り、ついで向けられる冷やかな一瞥にぎょっと身を竦ませる。

先頭の二人が完全な視線による露払い役をこなしてくれているため、他多数は物珍しげに城内を見ながらついていくのみだ。

途中誰何しようとする者達すら威圧し、人垣を割らせながら強引に案内させていく。通常なら、とっくに叩き出されていておかしくない状況なのに、兵達は手を出せない。出せば最後、返り討ちになる図が無意識に見えてしまっているからかもしれない。

入口からほぼ一直線上にある謁見の間の前では、流石に止められた。何重にも並んだ兵達が強ばった顔で道を塞ぐのを見て、ルイスとリディが無言で剣に手をかける。それを見て慌てたのは他の狩人だった。

「ちょっと待てお前ら！これじゃどう考えても押し込み強盗――」

「「それがどうした」」

吐き捨てられた口調に、二人がかつてない程怒っていることを改めてジョンは実感する。代わりにツェツィリアが厳しい声で言った。

「あたしにはアナタ達がそこまで激怒してる理由がよくわからないけど、とにかく落ち着きなさい。このままじゃ犯罪者よ」

「……」

怒っているには変わりないが、犯罪者という響きに少し頭を冷やしたらしい。舌打ちした二人は、一応剣から手を離した。

その代わり、ルイスが固く閉ざされた扉に向かって大音声で怒鳴った。

「俺達はアーヴァリアン女王、クリスティアーナ・リィ・ヴィルニア・アーヴァリアン並びに王弟、シルグレイ・イドリナ・ロウ・ヴィルニア・アーヴァリアンの名代でやってきた！拝顔を申請する！」

ざわり、と空気が揺れる。狩人達ですら、その度胸というか無鉄砲さに息を詰まらせた。

「申請ってか要請だよねこれ」

リディの呟きに、ルイスは鼻で笑って応える。その通りだ。

周りでざわめいていた騎士達の内から、ひとりが緊張した面持ちで出てきた。怖れと警戒を同居させ、彼はルイスを真っ直ぐに見た。

「その言、証拠はございますかな」

ルイスは無言で懐から封の切られていない手紙を取り出して、騎士に向かって放った。慌てて受け取った騎士は、そこに王家しか使えない紋章の蝋印が捺されているのを見て、半ば卒倒しそうになる。あんなぞんざいに扱っていいものではない。

「しょ、少々お待ちを…」

「その必要はない」

声は、扉の奥から聞こえた。

重い音を立てて、重厚な鉄の扉が内側から開かれていく。赤い絨毯の先に、ある意味で見慣れた玉座と、それらに座す三つの影を見つけ、ルイスはすっと目をす眇めた。

「入られよ、使者殿とやら」

ざわざわと、群がっていた蟻が離れていくように騎士達が下がる。空けられた空間に、躊躇いなくルイス、そしてリディは踏み出した。一拍遅れて他の狩人も続く。

大臣とおぼしき者達が遠巻きに見ている中を突っ切り、狩人達は玉座の前までやってくる。立ち止まる彼らのあとから小走りでやってきた騎士から手紙を受け取り、玉座の主は肩を竦めた。

「確かにアーヴァリアンの紋章だな。して、何用だ？」

一同は王の顔を眺める。褪せた金髪に、灰色の眼。若い頃は精悍であっただろう顔は、しかし肉で弛み、貪欲そうな表情が台無しにしている。

「詳しいことは全てその手紙に書いてある。だが俺は今聞きたいのはそれじゃない」

「貴様、王になんという口の利き方を！」

老年の大臣の怒声を、王は軽く手を振って止めた。代わりに、その隣に立っていた男が口を開く。王と同じ色の髪に、褐色の瞳。整ってはいるものの野心が剥き出しの強欲そうな顔に、特に女性陣は唾棄すべきものを覚える。

「おれは第二王子のルドニスだ。なにが訊きたい？」

「決まってる。この街の外の有り様はなんだ！」

ああ、と男は嗤った。傲慢に見下ろす視線に、狩人達の苛立ちは否応なしに募った。

「あれか？あれはな、生きる価値もない人間だ。生きるだけでこの国の財を削り、その上金を寄越せと要請る、死んだ方が使い道のある者共よ」

この物言いには、さしものジョンやクラウディオも、怒りを抑えるのに必死の努力を要した。――この王子は、命を命と見ていない。

冷えた声音で、ルイスは言った。

「…貴様では話にならん。王太子を出せ」

話にならないと言われたことに、王子はむっとしたようだが、すぐに唇をつり上げる。

「それは出来ないな」

「何故だ」

「教えてさしあげるわ」

最後の一人、王子と王を挟んで反対側に座る女が笑った。

「ロドニスお兄様は亡くなったのよ。二ヶ月ほど前にね」

「なっ……」

一同、絶句した。そんな彼らに構わず、女は続ける。

「真夜中に賊に襲われて。お可哀想に、治療の甲斐なくお亡くなりになったわ」

――これは、なんだ。

とルイスは絶望的な心情で呻いた。

可哀想に、と言いながらなぜ笑っている。

なぜ息子が死んだというのに、せいせいした顔をしている。

なぜ、そんな喜びが隠せない顔をしている――！

「仕方ない、ならお前達に訊く」

拳を握り締めて立ち尽くしているルイスを押し退け、クラウディオが言った。

「この国に張り巡らされた結界はなんだ？」
「…そなたら、真にあれを破ってきたのか？」
「俺が訊いている」
既に不敬罪もなにもあったものではないが、誰も指摘しようとはしなかった。
「…まあよい。あれはな、偉大なる魔族殿が張ってくださったのだ」
「…魔族、殿…だと？」
一段低くなったクラウディオに気付かず、上機嫌に王は続けた。
「あのような結界、人の身にはどうもできないであろう。魔族殿のおかげでこの国の中は外界と接触できん。つまり、何をしようと外部に洩れる心配はない」
「どういう意味だ？」
エドガーの言葉に、王子が笑った。
「この隔絶された地で、我々は思う存分準備が出来る。――戦争のな」
「せんっ…！」
悲鳴を上げかけ、リディが口を押さえる。あまりの事に、頭が真っ白になる。
「着々と準備は進んでいる。戦争が終わる頃には、我々の国は数倍に拡がっているであろう。三大国家にのしあがるのも、夢ではあるまい」

何度目かの絶句をしている狩人達の中で、ひとりヨセフは冷静に考えていた。

悪くない策だ、と思う。それどころか、かなりの良策だ。

戦争において物を言うのは勿論兵力や作戦構成力だが、それらの先に立つのは情報収集力。作戦の立案など、相手方の情報があって初めて始まると言っても過言ではない。

その点、外部に一切の情報を漏らさないというこのイグナディアの作戦は、とても理にかなっている。他国はこの国が戦争に臨もうとしていることすら知らない、寧ろ無事なのか案じている。

この状況下、結界が解かれると同時にイグナディアが他国――この場合、まずはビグナリオンかアーヴァリアン――に攻め入れば、イグナディアの勝利は固い。特に今のアーヴァリアンは混乱の最中。なすすべないだろう。

しかし――しかしだ。

「そのためなら国民を犠牲にしてもいいのか!?なんとも思わないってのかよ!?」

叫んだテディーに意識を引き戻される。悲鳴のような声は、恐怖がありありと滲んでいる。だが、返された言葉には何もなかった。

「思わんな。寧ろ奴らも本望であろう。生きている間なんの価値もなかったのが、死ぬことによって我々の役に立つのだからな」

――狂ってる。

そう思った。

これが一国の上に立つ者なのか。
喪われる命になんの感銘も示さぬ者が。
当然のように命を搾取する者が――！

怒りを覚えるより先に、ヨセフは脱力してしまった。無性に苛立ち、それが諦感と共に霧散していく。それは先程まで怒りで震えていたテディーやマルセロ、ジョンやハワードも同じようだった。
虚無感に支配される中で、ひとり、静かに顔を上げた。

「この、恥知らずが」

氷のような声は、先程と同じもの。

「…ルイス」

だが、温度は――格段に低い。

「王族の意味を履き違えるな」

あえていうなら、絶対零度。
心なしか部屋自体の気温すら低下している。

「民の搾取が王族の任務とでも思っているのか？」

いや、気のせいではない。外気を持ち込んだかのような冷気が漂い、吐く息が白く染まる。リディが事態を忘れてげっと呻いた。

「ヤバい」

ヨセフが寒さにかじかみかけている手を揺らし、思わずリディを

振り向いた。

「え、これあいつの仕業なのかよ?何やってんのあいつ」

「多分。今は説明してる場合じゃない!ルイス!頭冷やせ!らしくないよ!」

肩を掴んだリディの手に、しかしルイスは毛ほどの注意も払わなかった。王族達を睨み据えながら、一歩踏み出す。

王達は流石に眉を寄せ、王子が尊大に言った。

「口が過ぎるぞ、使者の分際で。寛容に見てやれば、身の程知らずに付け上がるか」

「知ったことか。貴様らに王族を名乗る資格はない」

冷気が一段と強まる。リディがいよいよ青ざめ、かくなる上は実力行使で黙らすか、と拳を固めた時だった。

「あら、意外に早かったわね」

くすくすという笑い声と共に、ルイスの目の前にふわりと金色が踊った。

「!?」

続いて反応する間もなく、黒い靄がルイスを包み込み、数秒のち靄が晴れると同時にルイスが膝から崩れ落ちる。

「ルイス!」

リディがルイスに駆け寄ろうとするのをマルセロが抑えて、素早

く青年を抱えて下がり、様子を見る。――気絶しているだけのようだ。

「お前はっ…エカテリーナっ！」

「一週間ぶりね。元気そうでよかったわ」

くすくすと笑い続けるエカテリーナに、イグナディア王の声が飛んだ。

「魔族殿。言われた通り、多少の無礼な発言は見逃してやったが…少々腹に据えかねるのだがな」

「あら、肝の小さい男ね、王様。…でもまあいいわ、なら牢屋にでも移しましょうか？」

あっけらかんと言ったエカテリーナに、一瞬場は呆けかけ、すぐに狩人達は戦闘態勢をとり、王族達は戸惑いを滲ませながら頷いた。

「そうさせていただこう。衛兵！」

「へっ、俺達が簡単に捕まるとでも…」

テディーが不敵に笑った、しかしその瞬間。

ドンッ、という衝撃と共に、狩人達の体は床に叩きつけられるようにして倒れた。

「っぐ…！？」

「きゃっ」

「なっ…！？」

「これはっ…」

混乱の最中、魔術士達は床に描かれた魔術環に気づく。発動に伴って魔力を流されたそれは、黒く光って見えた。

「随分腕っぷしの強い子達を集めたみたいだから、ここの兵士程度じゃ敵わないと思って敷いておいたんだけど…正解だったみたいね」

「テメーッ…」

ふふ、と笑ったエカテリーナは、ついと指を振った。

「すこし、眠っていてもらいましょうか？」

そのたった一言で、狩人達の意識は刈り取られて落ちた。

第十一話　崩壊の鏑矢　（5）（後書き）

いけるとこまでさくさく進みたいです。
お化け怖い。
そして陰謀にならない残念さですごめんなさい。

第十一話　崩壊の鏑矢　（6）（前書き）

深夜に更新したものと差し替えです。すみません。

第十一話　崩壊の鏑矢　（6）

第十一話　崩壊の鏑矢　（6）

肌に触れるひんやりとした感触に、リディは瞼を上げた。

「痛…」

関節の痛みを解しながら体を起こせば、そこはさっきと一転、殺風景どころか陰湿な印象しか受け取れない、暗い石壁に包まれた場所だった。

何も敷かれていない、湿りを帯びた土の上に転がされていたようだ。背面を覆うごつごつとした石の壁は、ところどころ緑色の苔がむし、触れば水気を含んでいる。どこからかピチョン、と水滴の滴る微かな音がして、

（湿っぽいわけだ）

と納得した。

「みんなは…」

周りをよくよく見回せば、同じ牢の中にルネとツェツェリアが、反対側の牢にルイスとマルセロ、テディーが転がっていた。斜向かいにジョンとヨセフがいるあたり、ここにいくつかに分散させられて放り込まれたらしい。牢の鉄柵に触れて、リディは顔をしかめた。

（…ご丁寧に魔術無効化までされてるし）

どうするか、と腕を組んだリディに、唐突に聞き慣れない声がかけられた。

「起きたのか？」

前ぶれないそれに仰天して咄嗟に腰に手をやり、当然のように得物を奪われているのに気づいて苦虫を噛み潰し、ついで声の出所を探す。

「こっちだこっち」

もう一度の発声で、ようやくリディは主を見つけた。少し離れた向かい側の牢で、三十前後とおぼしき男がぶらぶらと手を振っている。

「…誰？」

「そりゃこっちもおんなじこと聞きてえな、嬢ちゃん。どうやったらいきなり十人も投獄されんだ」

飄々とした声の調子は軽く、囚人にしては邪気がない。かといって、城の人間にしては品がない。

「…いろいろあってね。ここはイグナディアの王城の地下牢、でい

いよね？」
「それ以外になんだっつんだ」
呆れた様子で男は肩を竦めた。
「ったく、王城ってならもっと立派な牢かとも思ったんだがな。山賊の根城と変わりゃしねえ」
「山賊みたいな物言いだね」
「昔の話だ」
（昔は山賊だったのか…）
無言で突っ込んだリディに気づいたのか気づかなかったのか、男はで？と話を換えた。
「どうせまだ喋くる以外にするこたねえんだ。名前と身の上くらい教えちゃくれねえか？俺はゼーテ・エリアソンってんだ」
ん？とリディは首を捻った。なんだか、どこかで聞いたような気がしないでもない名だ。
「ほれ、名乗れよ」
急かされてリディは口を開き、しかし向かいで上がった呻き声にはっとそちらを注視した。
「いっててて…んだあ、ここ？っあマルセロにキリグ！牢かここ？」
「テディー・ピアーズ！起きたの？」
「んあ？ああ、レリアか。みりゃわかんだろーが、つか起きてんの俺らだけ？」
「私達の中ではそうだけど、他に収監されつる人が…」

「テディー・ピアーズってぇいったか今?」

リディの発言を遮って、ゼーテが割って入る。テディーがん?と首を捻る。

「あ?誰だ?」

「だから、先に収監されてた人…」

「『ジィ』の弓士の、か?」

畳み掛けられた問いに、二人の顔つきが変わる。

「おっさん、誰だ?」

いくらトップ10と言えど、リーダーならともかく一構成員の名前まで知っている人間は限られる。

「俺は、」

その時、いささか大きい呻き声が、リディの斜向かいから響いた。

「ううぃってー…頭ぐらぐらする…つかここドコ…って、あ」

三人目の起床者はまたも盛大に話をぶったぎったが、同時に話を収束させた。彼――ヨセフは軽く頭を振って、鉄柵の仕切りの向こう側にいる男を見つけ、叫んだ。

「あ…?ゼーテ!?あんたなにやってんのこんなとこで」

リディはぽんと手を叩いた。思い出した。

（ゼーテ・エリアソン。『ペンタ』のリーダー！）

ゼーテは目を丸くして言った。

「ヨセフ…？」

その声の大きさに、あちこちの狩人達が頭蓋を刺激されたらしい、随所で呻き声が発生した、が、当人達はお互い唖然としていてそれどころではなかった。

「連絡つかねえと思ったらやっぱこの国にいたのかあんた達。つかなんで捕まってんだ？」

「…そりゃこっちの台詞だ。おいコラ、そっちに転がってる野郎はもしかしなくてもクラウディオとジョンかよ？」

むっくりと端の方で大柄な体が起きる。クラウディオだ。

「…起きた」

そしてもう一人、テディーと同じ牢で男が首をさすりながら文句を言い、

「うるせえよヨセフ、今何時だと思って…ってここドコ！？つかなぜゼーテ！？」

やっぱり叫び、まだ眠っていた人間を容赦なく叩き起こしたのであった。

「…なるほど？今この状況を作り出してるのはエカテリーナって魔族で、てめーらはそれを狩りにきたと。間違いねえか？」
「実に簡潔なまとめをありがとう」
その後数十分かけてこれまでの経緯を説明した一行は、皆いちように状況に溜め息を吐いた。
「っつか、さっきのは何の魔術だ？息苦しいと思ったらすぐオチたんだが」
ジョンの疑問に、ヨセフが多分、と答えた。
「風魔術系で空気の供給を遮断したんじゃないか。所謂窒息だ」
「…それ、危うく死ぬとこじゃねェか」
テディーのツッコミに、全員苦虫を噛み潰したようになった。
「腹立つわネ。余裕綽々で見下されてる感じがして」
ぼやいたのはマルセロで、それは限りなく真実に近いのだろう。
「ていうか、これからどうするのよ？リディ、ルイス」
「…脱獄したいけどどうするかな」

ルイスは牢獄を見渡した。それぞれ頑丈な鉄格子に囲まれている上に、かなり強力な結界で封じられている。

「武器も取られてしまいましたしね。リリア達、大丈夫かな…」

ハワードが心許なさそうに呟いた。常時周囲を警戒する必要のある状況の中で、身の傍に使いなれた武器がないのは辛い。それに置いてきた仲間達が心配だった。

「そのことだけどな」

ゼーテが何か言いかけ、すぐに口をつぐんだ。

「なんだ？」

怪訝そうに疑問の声を上げたヨセフに、しっとツェツィリアが唇に人差し指を当ててみせた。

「誰か来るわ」

静まり返った空間に、コツン、コツンと靴音が反響する。ルイスの肩でネーヴェが唸った。息の詰まる空気の中に現れたのは、誰あろうエカテリーナだった。

「みんな起きたのね。ご機嫌麗しく？」

「最悪だよ」

誰かが罵る前に、リディが吐き捨てた。

「何が目的だよ、君は」

「貴女達を殺すこと」

あっさりと答えたエカテリーナに、一同は一拍おいて目を剥いた。

「…殺したら面白くないとか言ってなかったか、お前」

ルイスが少々呆気に取られた風に訊けば、エカテリーナは不機嫌そうに答えた。

「嘘に決まってるじゃない。あの場で殺そうとしたら、あの忌々しい蜥蜴に邪魔されてたからよ」

「…蜥蜴？」

「そうよ」

エカテリーナはルイスの肩にいるネーヴェを見遣り、鼻で笑った。ネーヴェはますます威嚇して唸り、ルイスはそれを宥めざるをえなくなる。

「なぜ、魔族がこいつらを殺そうとする？」

ジョンの疑問にあっさりとエカテリーナは「邪魔だからよ」と吐き捨てた。

「私達（魔の者）にとって、一番邪魔なのよ、貴方達。私達の太古からの悲願を阻もうとする貴方達が。でもそれすら私達は知らなかった。貴方達という存在を、あの方が洩らすまでは、誰も知らなかったのよ」

「ちょっと、なに言ってんのかが」

「なぜあの方が貴方達を生かしているのか理解出来ないわ。興味がある、なんて…あの方の興味を虫けらごときが奪うなんて、許せな

いわ！」

まるで支離滅裂になってきた、半ば独り言のような科白が全く理解出来ず、ルイスとリディは固まっていた。

その彼らに、異様に光る翠の眼を向けてエカテリーナは言い放った。

「明日の正午に殺してやるわ。バラバラに切り刻んで、王族や蜥蜴共の前に放り出してやる。それで貴方達の希望は全て消える、始まる前に私達の勝ちは決まるのよ！」

地上でみた余裕たっぷりの仕草など幻だったかのように、エカテリーナは息も荒くそう宣言すると、靴音を鳴らして地下牢から出ていく。その間際、不意に振り返り、ゼーテを見据えて笑った。

「あなたが成功していれば話は違ったかもしれないわね。でも残念、あなたも明日には物言わぬ骸と化すのよ」

響く靴音が遠くなり、完全に消えてもなお。

微妙な静寂が地下牢に下りていた。

「…キリグ、」

「悪い、俺にも全っ然訳がわからない」

「私も。てか、キャラ違くない？」

「…あんた達にわかんないんじゃ、誰にもわかんないわよネ」

うーん、とリディが首を捻る。

「あの方、ってのはセティスゲルダだと思うんだ。でもそれが何の…」

「恋する女の方の暴走にしちゃぁ、なにやら行き過ぎな感もするよなァ」

テディーの言葉に、皆頷いた。それだけにしては、根も謎も深そうだ。

「…というか、それ以前に、俺達どうすんだ？このままじゃ死ぬぜ」

ヨセフがぽつりと言い、ツェツィリアは鉄柵を睨んだ。

「この結界、並みじゃないわ。とてもあたし程度じゃ破れないわよ」

「私だって無理無理」

リディも同意し、力業も駄目だったしなあとルイスがぼやいた。

クラウディオが険しい目になった。

「このまま死ぬわけにもいくまい。なにか考えるぞ」

「あ、ちょい待ち」

唐突に、ゼーテが場に似つかわしくない軽い調子で手を上げた。

「あ？」

「ちょいと待ってな。そろそろ来るはずだぜ」

「は？」

一同眉をひそめ、何を言い出すのかとゼーテを見つめる。そのことで落ちた沈黙の中で、不意にリディの耳が何かを捉えた。

「…音？」

全員の視線が今度はリディに集中し、ルネがリディに物問いたげに首を傾げる。リディは黙って、と言ったきり目を閉じ、耳を澄ませる。そのうち、他の狩人達も気付きだした。
ザクザクというリズムを刻む音が、次第に近づいてくる。

「…下から?」

ツェツィリアが呟いた。ゼーテがおう、と笑う。

「来たか、スーザン」

ボコンッ、と牢と牢の間の通路に、人ひとりが通れそうな穴が開いた。次いで、土で汚れた手が生え、すぐに黒っぽく煤けた頭が現れた。煤けた顔の持ち主は恐らく女で、彼女はぐるりと首を回すなり呼ばわった。

「ゼーテ、いる?」
「あァ、サンキュなスーザン、助かるぜ」
「全く、大変だったんだからねぇ、ここまで掘るの」
「悪ィ悪ィ。ここ開けてくれ」

女はぶつくさ文句を言いながら這い上がり、歩きかけてそこで始めて自分を唖然と見つめる一同に気付いた。

「…アレ?なんでジョン達までいるの」
「…諸事情あってな。悪いがスーザン、俺達も助けてくれると嬉しい」
「いいよー」

と言いながら彼女はまずゼーテの牢に近づき、どこからともなく

取り出したピンを鍵穴に突っ込み、ものの三秒で解錠した。

「「……」」

「お、鍵は魔術いらねぇのか」

「多分、兵士でも開けられるようにじゃないかなぁ」

スーザンは危なげなく穴を乗り越えると、リディ達の牢に近づき、首を傾げた。

「こっちはどちら様？」

「『ジィ』のツェツィリア・クロノヴァとルネ・フォーレ、『ヘキサ』のリディ・レリアよ」

一拍おいて、スーザンの目が見開かれた。

「『ジィ』？それにあの『ヘキサ』？なんでまたこんなとこに？」

「それは押っつけ説明するからよ、スーザン」

ゼーテも手際よく鍵を解錠しながら言った。

「さっさと全員解放して逃げっぞ」

「りょうかーい」

――数分後、全ての牢は開け放たれた。

「んーと、この中で土属性の魔術使える人いる？」

穴の周りに集まった面々に、スーザンが訊ねた。ルイス、ヨセフ、

ルネが手を上げる。

「その中で一番強い人はー？」

無言で全員がルイスに視線を向けた。ルイス自身は肩を竦める。

「穴塞いでけばいいのか？」

「あったまいー、話早くて助かるよ。こんだけ大人数になると、うちは先導しなきゃなんないからさぁ。追っ手が来ないように、なるべく固く塞いじゃって欲しいんだ。…あそうだ、水使える人いる？…え、キミ水も使えるの？でも二属性同時行使は厳しいかなあ…え、できる？…それじゃあ、それでお願いするかなぁ」

かくしてスーザンを先頭に、ぞろぞろと一行が入り込んだ穴は、人ふたりは余裕を持って歩けそうな空間だった。

「これをずっと掘ってきたノ？」

マルセロが呆れ半分、感嘆半分で呟いた。

「そうだよ。さすがに途中で魔力足りなくなるから、余裕を見て一週間くらいで掘ったかなあ。からっけつまで使いきればもっと早く済んだんだけど。て、魔力足りる？黒い髪の子！」

「長さによるな…」

「足りなくなったら私が渡すからいいよ」

最終手段には耳飾りもある。

「オッケ、じゃあ行くよー」

彼女が持ち込んだカンテラにルネが火を灯して、更には後方ではリディも火魔術を使って足元を明るくし、総勢十二名の狩人達はイグナディアの城から脱獄を開始したのだった。

数十メートル程トンネルを進んだところで、最後尾を歩くルイスは立ち止まって振り向き、距離を確認するように首を巡らした。つられてネーヴェがふらつくのを苦笑してリディが受けとった。

「アイシィ、アースエイシア」

ルイスの声に精霊達が応え、辺りの水を含んだ壁が隆起する。そして、進んできた道を瞬く間に覆った。

「強度はこんなもんで平気か？」
「充分だろよ」

リディの前に歩いていたゼーテがひきつった声で突っ込んだ。

「噂にゃ聞いてたが、成程ぶっ飛んでやがんなテメエら。坊主、それで魔術士本職じゃねぇんだろ？」

二十歳越えての坊主呼ばわりにルイスは憮然としたが、まあ、と

頷く。

「魔術士の自覚はあるけど、剣のが好きだなやっぱり」
「嬢ちゃんも男顔負けなんだろ？」
「ゼーテ、それは火を見るより明らかよ」

ツェツィリアの笑みを含んだ科白に、さよか、とゼーテは鼻白んだ。

「こういう時代にはやっぱ出るもんなんかね。天才って奴ァ」
「こういう時代？」

おおよ、とゼーテは歩きながら嘆いた。

「オレがガキの頃ぁ、こんな魔物やらなんやらたくさんいなかったぜ。近頃じゃ竜の悪竜化まで頻繁に聞くようになった。前なら考えらんねぇぜ」
「わかるワ。最近じゃ協会への魔物退治依頼も増えてるもノ」

マルセロも頷く。そして付け加えた。

「知り合いが言ってたワ。まるで、大陸が闇に取り憑かれたみたいだって」

体内感覚で、半日程歩き続けただろうか。狩人一行は、白んできた夜空の下に戻ってくることが出来た。

「はー、一時は人生終わったかもとか思ったぜェ」

こきこきと首を鳴らすテディーに、クラウディオが僅かに苦笑を滲ませて同意した。

「あとはこれを埋めればいいな」

流石に疲れを見せるルイスは億劫そうに手を動かし、トンネルの出口に積み上げてあった土の山を利用して手早く塞ぎ、仕上げに手近にあった大きな岩を転がして完全に封じた。

「…疲れた」
「魔力いる？」
「…ちょっと待てば、なんとかなる、と思う」

がっくりと地面に座り込むルイスの肩を、リディは気遣うように叩いた。

「スーザン、ここぁどこだ？」
「ウァリエンの北五キロってとこ。てゆーかホントに魔力足りたねキミ、どんなキャパしてんのさ…」
「俺にも、わかんねえ、よ」

五キロの距離を塞ぎ続けるだけの魔力など、以前の自分ならあり

得ないと一蹴していた気がする。なにがどうなっているのか。

「ゼーテ！！」

朝靄の向こうから、複数の足音と声が届いた。すぐに、三人の男が現れる。

「おうおめーら、無事だったか」

「ったりめーだ、つか自分の心配しやがれ…って、マジでいやがった！おいガキども！」

男達の後から走ってきたのは、エイト、リリア、カミラ、ユーリス、マシュー、エドガーだった。みんな血相を変えて走り寄り、仲間達に怪我がないかを確かめる。

「よかったっ…！宿をとってたら、急に兵士が来て…。追い払ったけど、ハワードたち帰ってこないし心配で心配で…」

「うん、ごめんね。心配掛けた」

「でも、なんで『ペンタ』と一緒にいるの？」

「ほれ、話は後だ後」

ゼーテはパンパンと手を叩いて注目を集め、スーザンに目を遣る。ジョンが口を開いた。

「で、拠点はどこだ？」

スーザンはん、と頷き更に北を指差した。

「ここから五十キロくらい先にある、カルライカって街」

「反乱軍？」

馬は五頭しかいなかったため、必然足の弱い魔術士と、その付き添いという形で十人のみが馬に乗り、他は歩いてカルライカを目指しながら、狩人達はゼーテの仲間に現状を聞いていた。

「あぁ。一部の大臣やら領主やら騎士やらが、第三王子だかなんだか担ぎ出してカルライカに集結した」

ルイスとリディは目を見交わした。――ゼノの時と似たような状況になりつつあるのは気のせいか。

「あ？なんで音沙汰ねぇんだよ、それで」

「くだんねぇことにな、バラッバラなんだよ、奴ら」

いわく、集まった人間は向いている方向がバラバラ、更には旗頭である第三王子がやる気皆無、全く集団としての結束を発揮していないらしい。

「多分王宮も大した害なしって判断したんやろな。俺が見ててほんまアホやと思たくらいやから」

「お前にアホと思われるなんぞ末期に違ぇねぇな」

――訂正。ゼノの時より状況は悪いらしい。
その上何気なくゼーテが言った言葉に、全員ぶっ飛んだ。

「で、なんで俺があそこにいたかっつーとだ。暗殺依頼された」
「「暗殺依頼！！？？」」
「…馬鹿なのか？アホなのか？」
「どっちもやな」

こともなげに男が答える。いわく、五日ほど前、反乱軍の一部の層から、手っ取り早くクーデターを成立させるために、王と第二王子を殺してほしいと依頼されたらしい。ゼーテは話を聞いた時点で失敗するだろこれと即解ったが、この国に閉じ込められている中、何も出来ないことに鬱屈していたその憂さ晴らしに王城に潜入、そしてエカテリーナにとっ捕まったという顛末らしかった。ちなみに予測していたために、スーザンにはあらかじめ潜入してから三日後に迎えに来るように指示していたそうだ。

憂さ晴らしという理由で王城に乗りこんだゼーテもさることながら、王女を残して王と王子だけを殺してほしいと依頼した人間もどうなのか。そうなれば、王女は報復を理由にいよいよ内戦が始まるということをなぜ考えないのか。大方、政略の道具にでも王城を使う心づもりだったのだろうが…馬鹿だ。
ルイスは遠い目になって呟いた。

「それであの科白か…」
「で、どうすんだテメエらは？」

今度はゼーテがルイス達を振り向いた。一様に、場の視線も彼らに集まる。

「…ぶっちゃけていえば、俺達に国家のごたごたは関係ないんだよな」
「いや、ぶっちゃけなくてもそうでしょう。僕達は狩人ですし」
ハワードの刺を含んだツッコミに頷きつつ、けどな、と頭を掻く。
「依頼内容は実質、魔族の殲滅だ。さっきの通り、あの魔族は国に食い込んでる。元々王族に問題はあるんだろうが、あの魔族がいることで民が疲弊し、蝕まれている状況だ。しかも、放置したら他国に戦争を仕掛けるとまできてる」
クラウディオ、ジョンを始めとする大人組が黙って聞き入り、ヨセフやシルバーダガーは不満を浮かべながら続きを促した。もっとも、ヨセフは貴族嫌いからくるものだろうが。
「国の反乱だかなんだかは、本職に任せればいい。俺はそれを利用しながら、魔族を叩きたい」
「そんな、あんな狂った奴に…」
「ロードル」
反駁しようとしたハワードに、鋭い声が飛んだ。リディだ。
「君、覚悟はあると思ってたけど。私の見込み違いだったかな」
『シルバーダガー』は一斉に刺された顔になった。特にハワードは、見ている方が痛いくらいの顔だ。
きっついわねこの子、とツェツィリアは舌を巻きながら、フォローのようでそうではない言葉をかける。

「怖いし、腰が引けるのはわかるわ。貴方達まだ新人だもの、当然よね。でも、ディオが最初に言ったはずよ？死ぬかもしれないけどそれでも来るかって」
「……」
「貴方達は壁を越えたいと言った、だからここまで来たのだと思ったけど。違うなら、私達が終わらせるまでどこかに隠れていなさい。それも一つの選択よ」
「ツェツィリアさん、それは…」
マシューが仲裁しようとしたが、その前にばっとハワードが頭を下げた。
「すみませんでした」
遅れて、他の『シルバーダガー』のメンバーもばらばらに頭を下げる。
「自分達が言ったことを愚かにも忘れようとしていました。狩人としてあるまじき言動でした。申し訳ありませんでした」
黙って集められる視線の中で、ハワードは謝罪を繰り返した。
「どうか僕達をもう一度加えさせてください。邪魔はしません。お願いします」
どうする、と一同がリディを見遣る。リディはルイスを見、彼が肩を竦めると、リディも肩を竦めた。
「自分の命は自分で守りなよ」

それきり、すたすたと彼らの脇を通り過ぎて、少し先で待っているゼーテ達の方に歩きいていったリディを、ルイス、『ノナ』、『ジィ』が追い、最後にクラウディオが淡々と声をかけた。

「あいつらは、お前達の何倍も、ひょっとしたら何十倍も修羅場をくぐっている。追い付きたいのなら、狩人として生きていくなら、怖れを忘れろとは言わん。乗り越えろ。強さを得ることそれは、己に勝つことだ」

言うだけ言ってザクザクとクラウディオが通り過ぎてから、ようやく彼らは顔を上げ、それぞれ決意の表情になると、先を歩く人々の背を追って走り出した。

二日程、体力と相談しながら歩き続けて、一行はカルライカに到着した。

イグナディアでは三番目に大きいという街は、かつて見たように死骸が転がっているということはなかったものの、人々の表情は暗く、殺伐とした雰囲気が漂っていた。

「ほな、俺らは反乱軍にゼーテが来たゆうてくるわ。あんたらはどないする？俺の名前出せば、宿代わりになっとる屋敷に泊まらせて貰えるで。そん屋敷はこの通りの先や」

『ペンタ』のメンバーのひとり、ラッセル・ドルクの問いかけに、ルイスはすぐに言った。

「俺もその反乱軍のところに連れてってくれないか」

「ああ、いいけど」

「あ、俺も行く」

「…じゃあ俺も行こう」

「僕も行きます」

ジョン、クラウディオ、ハワードが同意し、結局狩人パーティリーダーが皆反乱軍の本部に向かい、他は適当に好きにしろということになった。

「お前は行かなくていいのか？」

ルイスの訊ねに、リディは「うんちょっと」と返してツェツィリアの袖を引っ張った。

「ツェツィリアさん。あの…」

「え？……」

何やらこそこそと囁き交わしたかと思うと、ツェツィリアは満面の笑みになった。

「いいわね！私もどうにかしたいと思ってたのよ」

「は？」

他の狩人達の怪訝な眼差しを余所に、ツェツィリアとリディは頷き合うと、相変わらずの黒ローブのルネを、両脇からがっしりと掴

んだ。

「…え？」

「ちょっと街見てくる。後で経過聞かせてね」

「夕方には帰るわ。リリア、カミラ、あんた達もおいで」

話を振られたリリアは瞬き、カミラはにっこり笑った。

「え？」

「喜んで。リリア、行きましょう」

「…なにあれ」

「…さあ」

なにやら楽しそうに商店街の方に歩いていった女性陣を、残された男性陣は半ば呆気に取られて見送った。

女性陣と分かれ、本拠地となっているらしい街一番の屋敷に向かったルイス達は、着くなり元大臣という人間の部屋へ案内された。

喜色を浮かべて彼は手を叩いた。

「なんと、これは有難い！『十強』の方々が四方もいらっしゃるとは…！これほど心強いことはありますまい」

どうやら、一応彼が指揮系統のトップにあたるらしいが、同じ部

屋に居合わせた、恐らく騎士と思われる人間は、冷ややかに様子を伺い、文官らしき人間は完全に傍観している。

（成る程、バラバラ…。暗殺依頼したのは騎士かな）

ルイスは内心で溜め息を吐き、それはジョンやクラウディオ、ゼーテにしても同じだったようだ。

「で、具体的な計画は立ってるのか？」

そんなジョンの科白に、目に見えて元大臣は動揺する。いや、とかその、とか口ごもる彼に、ゼーテはやれやれと首を振った。

「話になんねえな。お国のお偉いさんが雁首揃ってなにも決められんねえとはよ」

明らかな侮蔑混じりのそれに、室内がざわつく。騎士が冷ややかに反論した。

「ことは重大だ。あんた達の行動理由みたいに、単純なものではない。そうそう決められるものではないだろう」

「んだと、」

「ゼーテ」

低く唸って凄もうとしたゼーテをルイスは止める。彼は室内を軽く見回して一人一人の顔を見ると、淡々と言った。

「時間はあるとでも思ってるのか？」

言葉は返されなかったが、空気の揺らぎを感じ取ってルイスは続

ける。

「あんた達は、この国の現状をどうにかしようと思って立ち上がったんじゃないのか」

「……」

「それぞれの立ち位置、終わってからの政の体制、始まる前からの権力闘争…それらを今話すことに、価値があるとでも？」

何人かの顔が、気まずげに俯く。ルイスは特に感情をこめずに刺した。

「こうしてる間にも、民は死ぬ」

先程ゼーテに反論した騎士が、恥じ入ったように目を伏せた。

「国とは、民がいて始めて成り立つものだ。お前達は、民の存在しない、空虚な城だけの土地を作りたいのか？――違うだろう。野心ある者も、税を納めてくれる民なしには何も出来ない。それを考えた上で、今自分達が騒いでいることは意味があるのか考えろ」

最早ほぼ全員が消沈して俯いている部屋から踵を返しながら、ふと思いついたようにルイスは付け加えた。

「ゼノは少なくとも、このように無様ではなかったな」

はっ、と人々が顔を上げる。だがその頃にはもう、黒髪の青年の姿は見えなくなっていた。

「お前、ゼノの内乱にも居合わせてたのか？」

廊下を歩いていたルイスに追い付いて、ジョンは訊ねた。

「まあな」

「どんだけトラブルに巻き込まれてだよお前さんらは」

「好きで巻き込まれてる訳じゃねえよ」

肩を竦めたルイスに、しかしよ、とゼーテが言う。

「あんな科白、普通出ねーぜ。出たとしても、例えばジョンなんかが言ったって奴らぁ反発しただけだぜ。あの馬鹿ども一発で納得させるだけと迫力がテメエにはあった。坊主テメエ、なにもんだ？」

ルイスはふっと口の端を緩める。それから後ろの四人を振り返って、綺麗に笑った。

「今は、ただの狩人だよ」

第十一話　崩壊の鏑矢　（6）（後書き）

朝になって見直したら、校正前のをあげていたことに気付きました。
エピソードも抜けていました…。失礼しました。

第十一話　崩壊の鏑矢　（7）

第十一話　崩壊の鏑矢　（7）

女性陣が帰ってきたのは、宣言通り夕方だった。なにやら上機嫌の彼女達は、夕食の時も楽しそうで、男性陣の胡乱な目付きを誘った。

その後、そのまま食堂で喋ったりゲームに興じたりしていると、元大臣と騎士、文官が揃い踏んで訪ねてきた。

「先程は見苦しいところをお見せいたした」

女性陣はきょとんとしたが、男性陣が無言で頷くのを見て、ツェツィリアとカミラはおおよその所を察する。

「で、方針は決まったのか？」

「ええ。…ですが、肝心の殿下が…」

ああ、と一同は原点を思い出した。第三王子、だったか。

「殿下は、我々の話を聞こうともなさらない。殿下がいらっしゃるのといらっしゃらないのでは、士気がまるで違ってくるのだが…」

「ほっときゃいーのに、そんな自分勝手な王子サマなんて」

リリアのぼやきに、騎士が険しい顔を向けかけ、文官がそれを止めた。

「いえ。…殿下を頑なにさせたのは、我々なのです」

「……？」

「少し、昔話をさせて頂けますかな」

狩人達に断って大臣は椅子に腰掛け、遠くを見つめるようにして話し出した。

「殿下は…アドニス様は、庶出であらせられます。陛下のお手つきになった下女を母に持たれ、王宮の隅でお育ちになりました。上の殿下達は、母は違えど皆身分ある側室の方からお生まれになりましたから、随分とお育ちになった環境も違われました」

思うところのあるヨセフの唇が微妙に歪んだ。

「アドニス様は、…その、あまり顧みられぬお立場からか、よく街へお出かけになり、街の者達と交流を重ねておいででした。そして、齢七を数える頃には、この国の歪みに気づいていらした。上流階級の者ばかりが贅沢な暮らしをし、民の多くが生きることすらに困窮していることを。たびたび戦争が引き起こされるたびに、それは酷くなっていくことを」

元大臣の声色は暗く沈み、ただ懺悔のみが刻まれている。ツェツィリアは内心で苦笑した。

そんなことは分別のあるものなら誰でも知っている。知っていても、なんとも思わないだけだ。民がいくら死のうと、貴族様にはどうでもいいのだ。

「アドニス様は、たびたび陛下に直訴していらっしゃいました。戦争などせずに、民が少しでも良い暮らしが出来るように、尽力すべきだと。――陛下が頷かれることはありませんでしたが」

「殿下は我々にもおっしゃった。なぜ誰も陛下に進言しないのか、と。なぜ民を顧みないのだ、とも詰られた。けれど我々がそれに応えることは…なかったのだ。己が身を怖れ、誰一人として殿下の肩を持つものはいなかった」

騎士の回顧に、駄目じゃん、とリディは思った。オルディアンとはまるで違う。彼女の国は臣下が王族を蹴飛ばしていることすらある。

「殿下は我々に失望なさった。当然ですが…。そんな折、いつものように街に降りられた殿下は、金に目の眩んだ悪漢に誘拐されかけたのです。しかし陛下は、身代金の要求に応じようとはされず…殿下は命からがら、ご自分の魔術でもって生き延びられ、生還なされました。それ以来です…殿下が離宮に移られ、何人にも心を開かれなくなったのは」

幼い王子にとって、親身に思っていた街の者に裏切られ、更には実の親に呆気なく切り捨てられたことは、大きすぎる傷だった。彼がほんの少しだけ心を開くのは、離宮の傍の村にいた子供達だけだったという。大人には、いっさい表情すら見せなくなった。

「しかし、その村も…此度の魔族の仕業により、滅び…。それすら終わってから、ようやく動き出した我らに、アドニス様が心を寄せられるはずもありません。全ては、自分の身可愛さにアドニス様を見棄てた我々に非があります。アドニス様を、どうか悪く仰らないでください」

沈痛な声が、静まり返った部屋に落ちた。

その翌日。ルイスとリディは屋敷の外壁に背をつけ、周りを気にしながら話をしていた。なぜこんなところかといえば、屋敷の中だとどこに耳があるかわからないからだった。

「どうするの、私達。口出すの？」

リディは腕を組んで空を見上げ、ルイスは溜め息を地に落とした。

「出さないで済むに越したことはないんだけどな。狩人の仕事は、人ならざるものの排除だ。狩人の一人としてここにいる以上、政に影響するところに口を出すべきじゃない」

「でもこのままだと潰れるよ、この組織。昨日何言ったか知らないけど、少しはまとまったかもしれないけど、ここに襲撃きたら終わりだね」

空気に敏感な彼女は、深い事情は知らずとも漂う緊迫感にはちゃんと気づいていた。

「ゼノの時とはメンツの質が違いすぎるしなあ。ああ、いかにルーベンス伯が有能だったかわかるぜ…」

ゼノは、もともとは王が有能であったからこそ、人材もあったのだろう。だがこの国は――。

「多分優秀なひとは早いうちに殺されちゃったんだろうね…」

リディは憂鬱そうにマフラーを弄くり、それからん?と塀を振り向いた。

「どうかしたか?」

「いや、なんか騒がしいような…」

その時、どたん、ばたん、ぱきーんという騒々しい音、女性の悲鳴、男性の焦った声、最後に聞き知った叫び声が連続して聞こえてきた。

「あっこらテメ…違った、王子!待てこの…じゃない、待ってください!」

エイトの噛み噛みの科白に二人が吹き出しかけると同時、彼らの頭上にふっと影が差す。

見上げた高い壁の上に、小柄な人影があった。曇った雪空を背景に、一瞬、薄氷の瞳と目が合う。

しかし小柄な影はすぐに塀を蹴ると、瞬く間に近くの民家の屋根に乗り移った。

ルイスとリディがぱちくりと目を見合わせる前に、塀の向こうからバタバタと走ってくる音が響き、ついで門からジョンが飛び出してくる。彼はルイスとリディを見つけるなり、懇願混じりの怒声を

上げた。

「ルイス、リディっ！！すぐさまあのガ…違った王子追えっ！お前さんらしか多分無理だっ！」

「王子？」

ルイスとリディははてと首を傾げ、あ、と思い至った。視線の先で少年がちらりとこちらを振り返ってから、屋根の上を走り出す。

「あれか」

「あれだね」

「のんびり見てないで早くっ…でっ」

「それ持ってて。ルイス、私は上からいく」

「俺のも。俺は下からだな。追い込もう」

ジョンの顔面に、着ていたコートを投げつけ様、リディはその場から跳躍、ルイスはそのまま走り出した。

風の力を借りて屋根に飛び乗ったリディは、前方を小柄な背中が軽快に跳んでいくのを見つける。その速さはかなり速く、運動神経と魔術制御に長けていることが窺える。

「…やるじゃん」

ま、負けないけど。

リディは慣れた様子で屋根を蹴った。

後ろをちらりと振り向いた少年は、自分より幾らか年上に見える赤い髪の人間が追ってくるのを見て、直ぐ様前を向いた。持てる風魔術を駆使して屋根を駆けていく彼に、しかし追っ手の少女（多分）は遅れずについてくる。

（昨日来たとかいう、狩人か）

そうでもなければ、この陣にあの年頃の人間はいない。

（追えるものなら、追ってみろ）

少年は目をすがめて、ぐんと速度を上げた。

（速いな）

リディは感心半分、面倒半分で舌打ちした。

風魔術による跳躍、飛行は、実はかなりの鍛練と経験を積まねば実用には程遠いところで終わってしまう。一定以上の狩人達は皆その規準を満たしているが、あの年頃で自在に、しかも今の自分が距離を詰めきれない程に熟達している者は、そうそういないだろう。スヴェンでさえ、浮かび、歩く程度の速さで移動するので精一杯のはずだ。

「神童ってのは結構いるものだね」

ゼーテいわく、それが時代、らしいが。

『リディ』

不意に、耳元のピアスからルイスの声が届く。

『今どこだ？』

「えっと…」

リディは足元を過ぎ去る風景の中に、卓越した動体視力で看板を見出だして読み取る。

「ドールストリート。南に向かってるかな」

『了解。通り越す毎に言ってくれ、体力絞ったら袋小路に詰める』

「地図わかってんの？」

『昨日おおよそは頭に入れた』

「さいですか」

相変わらず頭のいいヤツ、と内心でぼやいたリディは再度距離を詰めるべく速度を上げた。

走り続けて一刻以上。少年は息が切れ始めていた。

（体力、違いすぎるっ…！）

正直、舐めていた。自分の速さで撒けないわけがないと。だがどうだ。追い付きはしないが、決して離されることなく後ろから狩人は追ってくる。魔物相手に死闘を繰り広げる狩人と自分とでは、基礎体力が違うのは自明だ。

（こうなったら…！）

狭い道に下りてかわす！と決めた彼は、記憶と経験に基づき、入り組んだ路地に飛び降り、しかしぎょっと目を見開く。まるで待ち構えていたかのように、ひょいと横あいから現れた青年が道を塞いだのだ。滑らかな黒髪に、貴族的な顔立ちをしたその男が肩を竦めてみせる。

「悪いな、こっちは通行止めだぜ」

「っ！」

直ぐ様踵を返した彼、しかしその眼前に屋根から少年が飛び降りてくる。しかもよくよく見れば少女だった。

少女は猫のような金色の眼を意地悪げに笑ませて、「つーかまえた！」と楽しそうに言い放った。

「そういやなんにも訊かずに追いかけちゃったけど。君、なんで脱走したの？」

路地の奥の少し開けた空間で、積み上げられた木箱の上で林檎をかじりながらリディは一段下にいる少年――イグナディア第三王子アドニスに訊ねた。ちなみに林檎は途中でルイスが調達しておいたものだ。

「なんであんたらに話さなきゃならない」

仏頂面でアドニスは返す。差し出された林檎を受け取ろうともしない。

「まあ大方、あの屋敷にいても旗頭になれなれいわれるばっかで嫌気が差し、日が暮れるまで適当に時間潰そうってとこだろ」

早くも一個の林檎を平らげ終えたルイスの科白に、アドニスはぎょっと木箱の上からルイスを見下ろした。図星らしい。

「ちょっと考えりゃわかる。街の外に出ちまうほど分別がないわけじゃないだろうしな」

「……」

「自己紹介が遅れたな。俺はルイス・キリグ。狩人だ」

「同じく、リディ・レリア。こっちはピュルマのネーヴェ」

「ぴゃっ」

「ピュルマ…？」

リディの懐からぴょんと顔を出したピュルマに、アドニスは興味を引かれたらしく仏頂面を崩す。リディはにこっと笑ってネーヴェを彼の膝に放り投げた。

「わっ！？」
「み〝ゃっ」

投げられたネーヴェは抗議の鳴き声を上げたが、リディは我関せずといった風に林檎をかじった。

「……」

アドニスは無言でじっとネーヴェを見つめ、ルイスとリディも黙したまま林檎をかじり続ける。決して居心地は悪くない沈黙のあと、あんた達は、とアドニスが呟くように言った。

「言わないのか。僕に軍を率いろって」
「……。やる気のない人間に空の言葉を重ねたところで意味はないからな」

アドニスは刺された顔つきで黙り込む。数秒の沈黙を挟み、ルイスはリディ、と呼ばわった。

「悪いけど、飲み物買ってきてくれないか。喉が渇いた」

リディは眉を上げ、しかし大人しく立ち上がるとネーヴェの首根っこを掴んで木箱から飛び降りる。そのまま、唯一この空間に繋がる路地へと出ていった。
アドニスは眉を寄せる。喉が渇いた、と言っても、今の今まで彼は林檎を食べていた。

「少し世間話をしようか」

物問いたげな視線を無視し、ルイスは唐突に話し出した。

「ある国に十四歳になる女がいた。名前は、セレナエンデ・ゼノ」

「……っ？」

「彼女は心優しい姫君で、十年前の報復にオルディアンを攻めようとしていた父王に対し、徒に民を苦しめるだけだといって刃を向けた」

こいつもか、とアドニスは唇を噛む。たかが狩人ですら、同じことを言うのか、と。

ゼノの内乱の話は聞いている。自分と変わらない年の王女が、反乱軍を率いて王を誅したと。それから先は言葉にされないが、言われなくてもわかる。あなたも同じことをしてくれないか、と。無言の中に意がこめられているのだ。

しかし、そこからルイスの話の矛先は違う方向を向く。

「けれど彼女は苦しんでいた。父王を弑し、王位を奪うことに。まだ幼い自分が王位を継ぐことに怯え、恐れ、惑っていた。が、セレナには仲間がいた。彼女の重荷を一緒に持ってくれる、いい家臣と友人が。――彼らがいなければ、セレナは反乱を成就させることは叶わなかっただろう」

淡々と言うと、ルイスはふっとアドニスを仰いだ。

「大人は嫌いか、アドニス・イグナディア」

先程と変わらぬ声で、――しかし明らかに何かが違う声音で、青年が彼に訊ねた。

「あ、ああ…きらいだ」

思わず答えてしまってから、堰を切ったように言葉が溢れた。

「父上や兄上は、仕方ないんだ。僕は庶子だし、魔術以外にはなんの才能もない。僕の進言をお聞きにならないのも、それは父上達がお決めになった政治方針で、父上達はそれを覆されたことはない。受け入れられないけど、飲み込むことはできる」

ルイスは僅かに感心した。ただの癇癪な子供かと思っていたが、そうではないらしい。この年で、理不尽を一つの考え方として飲み込めている子供はそういない。

「――だけど、あいつらは…。僕がいくら訴えても曖昧に笑うだけで何もせず、国が傾いていくのを黙って見ていただけのくせに、いざ取り返しのつかないところまで来るかという時になってから、僕に旗頭になれと言ってきた！――い、まさらっ、なんだっていうんだ！」

微かに嗚咽が混じり始めた声を噛み締めて、それでもアドニスは続けた。止まらない。言葉が口を衝くように飛び出してくる。

「もっと、早く動いていればっ、マイクやサリファっ…みんなは死なないで済んだかも、しれないのにっ！僕から全てを奪ってから、力を貸せなんて、どんな面の皮をしている！それだけでも許せないのに、ここにきてもあいつらは、仲間内で争ってる！なにが、一番大切かもわからないくせにっ…」

「そうだな。――ここことゼノの違いは、そこにある」

ルイスはどんよりと白い空を仰ぐ。少し、雪がちらつき始めていた。

「長の独裁のせいで、この国には気骨のある臣がほとんど残っていない。声を上げるだけで殺されてきただろうからな。――それでも、本当に国を思わなければならないとき、立ち上がれただけ、救えると思うがな」

「…すくえ、る？」

「ああ。失敗すれば死ぬ、それがわかっていても、ない勇気を振り絞り、合わせる顔がないと思っていた第三王子（おまえ）に対して頭を下げた。お前からみれば、何を今更ふざけんなと言いたいのはよくわかる。けどな、…いつまで逃げるつもりだ？」

ひゅっとアドニスの喉が鳴る。

「に、逃げてなんか…」

「いるだろう。今お前が臍を曲げて拗ねているところで、何かが変わるのか？父親が哀れんでくれるとでも？」

「…っ、あんたになにがわかるっ！」

アドニスの激昂にも、しかしルイスは表情一つ変えなかった。

「わからないさ。諦めた奴の気持なんて」

「……っ、僕だって最初から諦めたワケじゃないっ！何度も、数えきれないくらい進言したさ！それでもなにも変わらなかった、誰も聞いちゃくれなかった！果てに、あいつらまでっ…！もう、無理なんだよ！所詮僕程度の力じゃ、なにも変えられないっ！」

「それを逃げだと言ってるんだ！」

突然、ルイスが怒鳴った。豹変に怯むアドニスの襟を掴んで引き摺り寄せ、ルイスは言葉を連ねる。

「確かにお前は辛かっただろう、無力さにうちひしがれたんだろう！だけど、前と今は状況が違うことに気づけ！今お前がなにかしなきゃ、この国は必ず滅びる！多くの命を犠牲にして！」

アーヴァリアンとビグナリオンは陥とせるかもしれない。だがそこから先は無理だ。そこまで国というものは、甘くない。

そこから先は、人が死ぬだけだ。

「お前は、お前の友人達のような人間を増やしたいのか！」

間近に映るアドニスの薄い色の瞳が、それとわかるほど見開かれた。そして、みるみるうちに水の膜が生まれ、雫となって頬に伝う。

「…ないよっ…もう、誰も死なせたくなんかないっ！」

「…最初からそういえ、馬鹿」

顔をくしゃくしゃに歪めたアドニスの襟を、ルイスはふいと離す。アドニスはぼろぼろと涙を流しながら、身を丸めてしゃくりあげた。嗚咽の合間に、声が漏れた。

「僕は…僕達は、どうすればいい…？」

ルイスはついと視線を動かしてから、立ち上がった。

「…それを決めるのは、俺達じゃない。あんた達だ、イグナディアの民」

ふ、と路地から人影が現れる。その顔を見て、アドニスは息を詰めた。

「ザイル大臣…」

路地から出てきたのは、例の大臣、文官、それに騎士数名だった。各々躊躇うように、しかし迷いはなくアドニスの前に歩み寄ると、彼らは一斉に膝をついた。

「――お許しください」

絞り出すように言ったのは大臣だった。

「散々貴方を苦しませた挙句、このような願いを押しつける我らを。しかし、」

リーダー格とおぼしき騎士がそのあとを引き取った。

「貴方様はお一人ではありません。我ら臣下一同うちそろいて、貴方様と共に参ります。どうか、そのご許可を頂きたい」

「――この国を救いましょう、殿下」

最後の文官の言葉に、アドニスは震えた。そして長い沈黙のあと、

「許す」と囁くように言ったのだった。

「君にしては随分と感情的になったね」

屋敷への帰り道、少し離れたところから王子達を見守りつつ、リディは隣を歩く相棒に水を向けてみた。ルイスはちらりと渋面になる。

「…まあ、思うところもあったしな。ていうかお前ら、どこからいたんだ」

「君があの子に、大人は嫌いか、って言ったあたりかな。近くをうろついててくれて助かったよ」

聞けば、騎士達も王子を探してうろうろしていたらしい。そこを、リディが捕まえたわけだ。

ふと、リディは真面目な顔つきになってルイスを見上げた。

「でもルイス、気を付けた方がいい。あんまりさっきみたいな顔を見せてると、勘のいい奴には気づかれるかもしれないよ」

――さっきみたいな顔とは、王子としての顔のことだろう。ルイスは肩を竦めた。

「もうやらないさ。あとは家臣達の仕事だしな」

屋敷を飛び出していった王子が、騎士や大臣に連れられて帰ってくるのが見える。その少し離れた後ろから、若い男女が歩いてくるのも。

「やめといた方がいいわよ」

窓際に立ってじっとその様を見下ろしていた彼は、後ろから聞こえた声に振り向く。

短くウェーブを打った黒髪の女――ツェツィリア・クロノヴァが、垂れ気味の目を読めない色に染めて、彼を見ていた。

「やめといた方がいい。あなたじゃ、万にひとつの勝ち目もないわ。短い付き合いのあたしでもわかる。あの二人の絆は、そこらへんの恋人達よりよっぽど強い」

ざっくりとした諫言に、しかし彼はゆっくりと笑みを見せる。

「――やってみなければ、わかりません」

ツェツィリアは溜め息をついた。

こういう時、若さは無謀だと思う反面、眩しくも感じる。もう自分にはないもの、出来ないもの。

「…なら、好きにしなさい」

「ええ」

薄暗い中で笑った彼は、どこか歪なものすら混じっているように、ツェツィリアには思えた。

第十一話　崩壊の鏑矢　（7）（後書き）

さくさく更新は前回で終了していました。
アドニス過去も最初はがりがり書いていましたが、思い直して削りました。なんか削りすぎて逆に味気なくなってしまったような…。

第十一話　崩壊の鏑矢　（8）

第十一話　崩壊の鏑矢　（8）

「しかしどーやってあの利かん坊納得させたの？僕らの話はてんで聞かなかったのに」

その夜、やっぱり何人かで一部屋でたむろっている中で、ユーリスがルイスとリディに訊ねた。

「え？あー…」

「簡単にいうと、逃げんなガキって説教しただけだ」

リディが詰まる傍ら、こともなげに応じたルイスは、奪われた愛剣の代用品として貸してもらった剣を研ぎ終え、「質悪…」とぼやく。

「俺達はゼノを直接見てきたからな。そこらへんも踏まえて、もう人を死なせたくないなら逃げんなって言ったんだよ。それが効くぐらいだからまだひねくれてない」

「うえー十四のガキんちょに言う科白かっつーのそれ…」

テディーが舌を出して非難したものの、クラウディオが「王族に年齢は関係ないだろう」と言った。ルイスとリディは何も言わなか

った。

「けど、ここの半分の家臣…救えねーよ」

不意にヨセフが吐き捨てた。

「今日一日見てたらわかるけどな、心底王子に従ってんのは半分だぜ。残り半分は、当座を利用することしか考えてねー。終わったら始末しようとか考えてるヤツもいるぜ」

「え、そうなの！？」

何人かが驚きを露にする。生まれの複雑さ故にヨセフは人の感情の機微を読むのがうまかった。

「ま、そんなもんだろーな」

ジョンも大きく溜め息をを吐いた。

「どっかにこんな言葉がある。『最も勇気のある者は、最も早く死ぬ』。今この国に残ってんのは、程度の差こそあれ、小粒だろうさ」

ひどい言われようである。

「…ルイス、救えるとか言ってなかったっけ」

「半分はな。全部とは言ってねえ」

ぼそっとしたリディの非難に、悪びれなくルイスは応じた。

「まあ、そういった佞臣をどう始末するかは、その国次第ってわけね」

ツェツィリアが髪を梳きながら肩を竦めた。エドガーがあくびをかます。

「そういうこったな」

「何にせよ、ワタシ達は戦うだけネ。狩人として、人ならざるものと」

「そーゆーこった」

ガチャ、と扉が開いて、入ってきたゼーテがマルセロの言葉に頷いてみせた。

「今しがた、テメエら達の処遇について言ってきたぜ。俺らぁ仕方ねえとして、テメエらはもともと人と戦り合うためにここに来たワケじゃぁねぇってな」

「あぁ、サンキュなゼーテ。…お前らは組み込まれそうなのか、軍の方に」

ジョンの問いかけに、彼は肩を竦める。

「確定じゃねぇが…多分な。詳しい作戦は明日立てるらしいぜ。王子デンカがやる気になったから、早いとこ始めよーってハラだ。ったく、ゲンキンだよな」

「国なんてそんなもんだろー」

エイトが言い捨て、俺は寝る、と言い置いて宛がわれた部屋に消えていった。ユーリスもそれに続き、なんとなく解散の雰囲気が漂う。

「あたし達も寝ましょうか」

ツェツィリアの音頭に女子軍が頷いて立ち上がり、他の面子も腰を上げた。ルイスも欠伸を噛み殺しながら立ち上がったが、後ろから呼び止められる。

「ルイス。ちょっと呑もうぜ」

振り向けば、ジョンが酒瓶を掲げていた。

「お前さんとこうやって呑むのは二回目だなあ」

「まだ会った回数自体片手で足りるだろ」

二人を残して誰もいなくなった部屋で、チンと硝子が音を鳴らす。一息に飲み干してから、ルイスは

（まあまあかな）

と感想を抱き、無言で次杯を注いだ。

「リディは相変わらず呑まねえのか？」

「あいつは酒乱だ。呑ませると暴走する」

ごくりとジョンは唾を飲んだ。

「…どんな感じに？」

「火の玉が浮遊し出す。静電気が出まくる。何もないのにグラスが飛んでく。手加減利いてない蹴りが飛んでくる」

「……」

だらだらと冷や汗が伝うのをジョンはしっかり自覚した。絶対リディには呑ませないようにしよう。

「つか、お前が呑ませたのか？」

「まさか。呑ませたのは通りすがりの酔っ払いだ」

「…止めなかったのかよ」

「どうなるか興味あったしな。本人のいう酒癖悪いがどの程度か知っときたかったし」

「…で、その酔っ払いは」

「全治二ヶ月。一週間で済むように治してやったけど。器物損壊で結構金も持ってかれたな」

ははは、と軽い調子でルイスは笑うが、笑い事ではない。断じて。

「…お前はそういうの、ないよな？」

「残念ながら俺はほぼザルだ。だから口が軽くなるかとかは、期待しない方がいいぜ？」

虚を突かれたような沈黙が落ちる。

「……。…お見通し、ってか」

「俺だけ酒に誘うなんて、なにか聞きたがってると疑えって言ってるようなもんだ」

「…ったく、可愛げねえガキだなお前さんは！」
「そんなもん、十代前半にはとっくにねえよ」

鼻で笑って見せたルイスは、なるほど酔った欠片もない。強いて言えば口調が軽くなっている程度たが、それにしたってアイルの時に戻ったような感じだ。

（本心を見せない――貴族の業か）
「…わぁったよ、遠回しはヤメだ。直球勝負で訊いてやる」

開き直ったジョンを、横目でルイスは見遣る。挑むような視線とぶつかった。

「誰にも言わない。だから教えろ。――お前は、エーデルシアスの、どこの貴族なんだ？」

ルイスはフッと笑った。口調ががらりと変わる。

「なぜそこまで知りたがる？ジョン・イーデル。狩人に過去をしつこく訊ねるのは、ご法度のはずだぞ」

背筋を氷塊が滑り落ちるような感覚。ジョンは内心で自嘲せざるをえなかった。

（この俺が…十も下の餓鬼に、畏れを抱くなんてな…）

「…そうだ。普通はな。だがお前らは、いくらなんでも謎が多すぎる。三属性の魔術、飛び抜けた戦闘技術、王族にまで及ぶ交友関係。今だから言うが、アイルの時俺達にはお前らの調査命令も下ってたんだぜ。…俺としても、浮かべたくない可能性を今、浮かべちまっ

てる」

それまでどこか余裕すら交えていたルイスが、ふと真剣な眼差しになった。ジョンがそれに気付いた瞬間、しかし読めない深さのものに取って代わる。

「……その浮かべたくない可能性が本当だったとしたら、お前の態度は変わるのか？」

その口調が、どこか寂しささえ含んでいるように聞こえて、ジョンは息を詰める。

もし、彼らがそうだとしたら。自分は何か変わるのだろうか。

「…わからん」

口を衝いて出たのは、そんな機転もへったくれもない言葉だった。

「何も変わらんというには、あの方達は異質すぎる。…いやでも、頭を垂れたくなるのさ。その存在に対してな」

「…お前、どこかの従臣でもしてたのか？」

ジョンは舌を巻いた。たった一言で核心を釣り上げられた。

「…昔の話だ。俺は負け犬さ。政争のな」

「……」

ルイスは目を細めた。

（ここ十数年で、政争があったところといえば…ラーシャアルド、アルフィーノ、ゼノ、ビグナリオン）

そういえば昔、ラーシャアルド出身だと言っていた記憶がある。

「だが、昔染み付いた固定観念ってのは消えるもんじゃねえ。気になって仕方ねえのさ…もしお前らがそうなら…ってな」

「…成程な」

ルイスは持っていた杯の残りを、一息にあおって干し、ガタンと立ち上がる。

「なら、俺はこう返すよ。…『ルイス・キリグ』と『リディ・レリア』は、そうじゃない。ここにいるのはただの狩人だ、ってな」

ひらひらと手を振って踵を返す青年の背を、ジョンは呆けたように見送る。バタンと扉が閉まってから、数十秒後。

「どっちだよ…」

空しく声が漏れた。

「ほい、ナイト獲った」
「あああっ、私の切り込み隊長をっ！」

翌日、庭の一角、四阿でルイスとリディはチェスをしていた。他の面々、イグナディアの人間達や狩人達の一部は作戦会議で室内に閉じ籠り、多くの他の狩人も街に出掛けている。警備も退かせた庭は、状況に似つかわしくなく穏やかだった。

「甘いんだよ、先読みが。もっと盤面全体を見ろ」
「〜〜だって、こっちのビショップ狙いだと思ったし」

ぶつぶつ言いながらリディは駒を動かす。狙いの透けて見えるそれの応手を、ルイスは苦笑しながら打った。

「……むぅ」

半ばむくれて盤面を睨み付け、長考に入ったリディから意識をずらし、傍らに置いた水盆に耳を澄ます。

『だから、この軍編成では…』
『しかし、これなら…』

先程と代わり映えのしない議論に微かに溜め息をついたルイスにリディは気づき、目線を動かさないまま訊いた。

「相変わらず？」
「あー。ひどいもんだ」

この国にゃ録な軍師もいねえのか、とぼやく彼に、リディは肩を竦める。

「いっそ君が口出せばいいじゃないか。得意なんだろ、戦略（こういうの）」

ルイスは渋い顔つきになる。

「…どうしようもなくなったら、な。とりあえずジョンもいるし、頓珍漢なことにはならないだろうさ」

「そういえば、ゼノでもそっち方面には口出ししてなかったよね」

「ま、あのときは必要なかったしな実際」

「ルーベンス伯とかいたしね」

リディがようやく駒を動かす。今のところ大勢に影響はない一手だが、何か意図が隠されているように思えてルイスは腕を組む。しばらく盤面を見渡して、ルイスは口の中で舌打ちした。

「…お前、誰にチェス（これ）習った？」

「ヴィンセント（馬鹿王子）」

「…成程」

恐らくだが、リディには本来軍師方面の才能はない。完全に有事の人材だ。だが、生来の勘の良さと、優れた能力を持つらしいオルディアン王太子の手解きによるものか、たまに巧妙な手を打ってくる。

（一度、ヴィンセント殿と手合わせしてみたいものだな）

ルイスは淡く笑むと、黒の女王（クイーン）を動かした。

――半刻のち、清々しくリディは大敗を喫した。

「いい加減機嫌治せって、リディ」

厨房から貰ってきた冷たい紅茶を、未だ盤の前でむくれているリディの前に置いてやりながら、ルイスは苦笑した。

「…我ながらいい手を何手が打ったのに、あっさり叩き潰されたのがムカつく…」

「諦めろ、お前とは年期も経験も違う」

「くー…」

苛立たしげに紅茶をあおり、リディはふと空を見た。

「…来ないね、エカテリーナ」

彼らが二人、こうして外にいるには訳がある。いつ魔族が来ても、対応できるようにだ。

彼らの予想では、すぐにでもエカテリーナが彼らを殺しにやってくるだろうと踏んでいた。だが、三日が経つ今もいっこうにその気配はない。

「…全面戦争を狙ってるのかもな」

ちらりと庭の隅、こちらからは死角になっている場所を見て、心なし大きくした声でルイスは言った。リディも一瞥し、小さく息を吐く。

「戦力差は甚大。ゼノのときと違って王が戦力を割いてないからね。しかも向こうには魔族。…さて、どうする？」
「魔族は俺達がやるとして、軍は…意表をつかなきゃ厳しいな」
「意表ってどんな？」

ルイスは肩を竦めて、終局したままの状態の盤面を、ちょこちょこと動かす。

「罠。…思いもしないところから現れたり、背後を突けたりしたら理想だな。あとは、こんなふうに――」

ガン、とルイスは盤面を叩いた。衝撃で駒がコロコロ跳ねる。

「反則技で、足止めするのも効果的だ」
「……はんそくわざ？」

リディははてと唸る。戦争には確かに奇策というべき記録はあるが、反則技とはいったい何を示しているのだろうか？

彼女をよそに、さて、とルイスは立ち上がった。

「そろそろ昼飯でも食べにいくか。ほらいくぞ」
「反則技、ねえ…」
「よし、二時間考えてわかんなかったら次の野宿の料理当番お前な」
「げっ」

軽口を叩き合いながら、四阿を去っていく二人。

完全に二人の気配が消えてから、すっと死角から人影が歩み出る。どこかバツの悪そうな顔の持ち主は、ジョンだった。

進まない会議に一時入れられた休止時間に、姿の見えないルイスとリディを探しに来たのだが――。

「ホント、可愛げねえな…あっさり俺の気配にも気づきやがって…」

ぶつぶつぼやきながら、彼は放置されたチェス盤を覗き込む。――まばらな黒と、それを挟むように位置する白。

先程の会話と照らし合わせ、なんとなく本髄を察したジョンは、やるせなく天を仰いだ。

（押し付けやがって、たく…）

「あ、ルイス、リディ！」

食事処を出て、何とはなしにルイスとリディが街を歩いていると、不意に誰かに呼び止められた。見れば、『シルバーダガー』ユーリスとハワードが走り寄ってきていた。

「ユーリス？なんかあった？」

「違うよ。ねえ、今暇？」

ルイスはリディと目線を交わし、頷いた。

「やることねえし、暇だな」
「じゃあ、魔術教えてくれないか？僕は水魔術士なんだ」
「教える？俺が？」

ルイスが目を丸くすると、ああとユーリスは首を振る。

「魔力量を脇に置いても、あんたのコントロール力と応用力は凄い。頼むよ」
「まあ、いいけど…」

若干照れたらしく鼻の頭を掻いたルイスは、リディを見下ろした。

「お前は？一緒にくるか？」

リディは少し悩んだあと、首を横に振った。

「私は遠慮するよ。街把握したいから」
「なら、僕もご一緒しましょう」

ハワードが口を挟んだ。優しげな顔に遠慮がちな笑顔を浮かべてリディに訊いた。

「いまいち方向感覚が鈍いもので。いいですか？」
「…いいけど」

リディは素っ気なく応じると、ルイスからネーヴェを受け取った。
ルイスは束の間探るような瞳でハワードを見、それじゃまた後で、と言ってユーリスと連れだって雑踏に消えていった。

「あの、すみませんでした。一昨日…」
「君の年なら怖じ気づいたってしょうがないよ。謝ることじゃない。謝るとすれば、私じゃなくてクラウディオに謝るべきだ」
歩き出しながら、ハワードが紡ぎだした言葉をリディはさっさと両断する。ハワードは眉を八の字に曲げた。
「あの…同い年ですよね？」
「君が18歳なら、そうだ。私は計算に入れない方がいい。規格外の自覚はある」
「確かに、反則業ですよ。並みの剣士より強いし、魔術士より魔術に長けてる。治療魔力も持ってるんですよね？」
「…まあ、生まれつきだからね。…ああ、反則技ってそういうことか」
「？」
「なんでもないよ」
ほぼ一方的にハワードが質問し、リディが簡潔に答えていく会話がしばらく続き、会話が途切れたところでリディは立ち止まる。
「大きな通りはだいたいわかった。私は帰る」
「え！？…あ、あの、じゃあその前に、ソレイユ通りに行きません

か？」

リディは通りの名と記憶を照らし合わせ、小雑貨が立ち並ぶ通りだと思い出す。――一人や、女性陣といくならともかく、この男と行っても面白いとは思えない。

一人で行けば、といいかけて、そういえば方向感覚が悪いと言ってたなとも思い出したリディは、溜め息をついて足をそちらに向けた。すみません、と後ろで謝ったハワードが、リディの隣に追いつく。

しばらくの無言の道行きの先に、ソレイユ通りに二人はたどり着く。閑散とした風景でも、若い女性が多いからだろうか。街の他の場所よりだいぶ華やいで見える通りに、リディは目を細めた。

「リディさんは、その…お洒落とか、しないんですね」

なんとはなしに気を引かれて通りを歩き出したリディに、ハワードが並んで話しかける。

「女の狩人でじゃらじゃら着飾ってるひと、私は見たことないんだけど」

「そうじゃなくて…化粧とか、服とか。リリアみたいな興味をあんまり持ってないですよね」

「化粧は窮屈だしする意味はない。服は自分でもセンスの悪いものを買ってる気はない。だいたい私は結構装飾具（アクセサリー）付けてる方だと思うけど？」

リディは耳を示して見せ、肩を竦めた。とはいっても、どちらも魔術的な代物ではあるのだが。

「そう…ですね。そっちの髪留めって、ファーデリアの陶器細工で

すか？」

言われてようやくリディは髪留めの存在を思い出した。そういえば。

ほとんど自分の体の一部となって忘れていた。

「…そうだね」

そっと手で触れて、刻まれた模様を辿る。貰った次の日確かめてみたら、枝葉と花をモチーフにした、かなり繊細なものだった。

「それ、結構高いと思うんですけど…ご自分で買われたんですか？」

「いや、ルイスから貰った。…やっぱ高いんだ、これ」

無造作に髪に挿されたから安物かとも思ったが、鍛えられた目利きの感覚は高いと告げていた。無論、一般的な金銭感覚上では、だ。

（あいつ、実は金銭感覚浮いてるからなー…）

同じような身の上であっても、暇があれば屋敷を脱走して色々な街を商人顔負けに巡っていたリディと、なんだかんだいって真面目に城で政務をこなしていたルイスとでは、その辺の感覚に隔たりがある。最もこの一年でだいぶ、ルイスも普通の金銭感覚がわかってきたようではあるが。旅が始まったばかりの頃は、鍛冶屋にすらぼったくられていた。

思い出し笑いをしていたリディは、ハワードが俯いて、傍の露店に視線を移したのに気づかなかった。

「あれ？あれ、ハワードじゃない？」

若い女性に人気という通りをカミラと連れ立って歩いていたリリアは、一方向を見とがめて声をあげた。その視線を負ったカミラは軽く目を瞠る。

「あら、隣にいらっしゃるのは…リディさんですわね」

「…なんであの組み合わせ？」

どこかふくれっ面を浮かべるリリアの頭を、宥めるようにカミラはなでた。

「一昨日の事、ハワード気にしてましたもの。きっとそのことですわ」

「…ふーん」

おもしろくなさそうに唇を尖らせる彼女の前で、何やら言葉を交わしたハワードと赤い髪の少女は、雑踏の中にあっという間に紛れ込んで行く。

（なによ、いままで女の子に興味あるそぶりなんて見せなかったのに…）

まだ自分も出逢って三カ月程度の間柄なのはそっちのけで、リリアは不機嫌に顔を背けた。

「……」

一方で、一瞬だけその後ろ姿を口角をあげて見送ったカミラは、すぐに表情を常の穏やかなものに戻してリリアの手を引いた。

「ほら、あちらにかわいらしい髪留めがありますわ。見に行きましょう？」

第十一話　崩壊の鏑矢　（8）（後書き）

風邪ひきました。
ルイスは軍略に長ける設定ですが、私に軍師の才能はゼロ以下ですので、ごめんなさい悪しからず。

第十一話　崩壊の鏑矢　（9）

第十一話　崩壊の鏑矢　（9）

夕方、ルイスとユーリスが屋敷に帰ると、既にジョン、クラウディオ、ゼーテ、スーザン、ヨセフ、マシュー、リディ、ハワード、ツェツィリアが集まって、なにやら真剣な顔で相談していた。

「なんか進展あったか？」

外套を脱ぎながらルイスが訊ねれば、ジョンの首肯が返ってくる。

「ウァリエンのスパイからも連絡があった。五日後、国軍が攻めてくる」

一瞬、沈黙が落ちた。ルイスはただ、「そうか」と頷いた。

「で、作戦は立ったんだろうな？」

「…お陰様でな。今話そうとしてたとこだ」

じとっとしたジョンの目線をかわし、ルイスはリディの隣に腰を下ろす。狩人達が囲むテーブルの上には、ここ一帯の地図が広げられている。

そこに書き込まれた印群を見、ルイスは口角を上げる。――期待

しておいて正解だった。
その表情を横目で見ていたゼーテが大きく舌打ちした。

「…一瞬で理解しやがった野郎はおいといて、説明始めんぜ。他のメンツには各パーティできっちり伝えろよ」
「わかりました」
「じゃいくぞ。まず――」

ゆるりとした緊迫感が沈殿しはじめた空気の中、夜は更けていった。

四日後。戦を目前に控える中、リディとルネとルイス、ヨセフ、スーザンは、猛吹雪の中、カルライカ南の凍りついた湖、リッジ湖の湖畔に立っていた。
カルライカに向かった時と変わらず、分厚く張った氷の上に、それまた分厚く雪が積もっているそこは、一見湖とは判別できない。

「これ、地面と変わんねーぞ」

ヨセフが軽くその場で跳ねて、感触を確かめる。スーザンはそだねえと頷く。

「この雪じゃねえ。リディちゃんだいじょぶ？」
「平気だよ」

結界を張って冷たい雪を防ぐリディは平然と答え、懐から取り出した小さな石を指で弄んだ。ルネはそれを見ると、ふわりと浮き上がって彼方を見やる。同時に彼女の周りに、炎の結界が展開した。

「さて、さっさと始めようぜ」

ルイスも同様に石を取り出して、リディがルネ以外の三人に個別に炎の結界を張る。

「じゃ、きっちり三百秒後。外すなよ――三、二、一、――ゼロ！」

ルイスの科白が終わると同時、ルネを除いた四人は一斉に駆け出した。

「軍編はどうだ、マシュー」

一方カルライカ、翌日の戦闘に向けてほとんどの人間が出払う中、王子アドニスは、たまたま廊下で出くわした狩人に声をかけた。マシューは振り返り様礼をとり、微笑む。

「順調ですよ。騎士団の方々が統率していらっしゃいますから、混乱も少ないようです。もともと五日前の時点で最低限の準備は終わっていたようですし」
「ならいいんだ。大臣達は、僕にあまり宮廷の混迷を見せたくないようだからな」

わからぬわけがないだろうに、と溜め息をつく少年を、束の間マシューは同情を持って見下ろした。

（年端もいかぬ内から、聡明であれ、大人であれと求められるのが王族ならば、これほど難儀な身分はありませんね…）

その上この少年は、様々な義務の代わりに得られるはずの恩恵を得ていない。

「そういえば、あの者はどうしている？」

沈みかけた思考を呼び戻され、マシューは瞬きをした。

「あの者、とは？」

アドニスはしばし沈黙し、ゆっくりと単語を引き出す。

「…『ヘキサ』だったか。黒髪の若い男だ」
「ああ…彼ならば今、作戦の要を作りに出かけていますよ」
「…そうか。では、手間をかけるが、今夜夕食の後、西の四阿に来てほしいと伝えてくれるか」
「承りました。必ずお伝えしましょう」
「助かる。ああ、それと――」

軽く謝意を示して歩き出したアドニスは数歩で立ち止まると、マシューの眼を見据えた。

「皆、死ぬなよ。――他国の下らない争いに巻き込まれた挙句命を落とすくらいなら、その前に逃げろ。この国のことは、この国の民が片をつけるべきだからな」

確かな威を伴った薄氷の瞳に、マシューは息を呑む。

――王族とは、皆こうなのか。ほんの五日前までは、現状に倦み、ただ子供らしい苛立ちを見せていたのに。自覚と、義務とが生まれるだけで――。

「ではな」

背筋をしゃんと伸ばして今度こそ去っていく少年を、マシューは黙って見送ったのだった。

翌、早朝――。

武器以外は万全の装備を調えた狩人達は、白んだ空の下、カルライカの城壁に集まり始めていた。

街の外、眼前には軍が列を作り、ざわざわとした雑音を生み出している。

それらを眺めて、歩いていたツェツィリアは細く息をついた。――何度見ても、戦の風景はよいものではない。これから故郷を蹂躙するというのでは、尚更――。

「……」

ぽん、と彼女の頭に、武骨な大きな手が乗った。クラウディオが、彼女を見ぬままわしゃわしゃと髪をかき回す。

「…ちょっと、ディオ」

髪が乱れるわ、と訴えれば、彼はあっさりと手を離した。彼女を振り向かない横顔は、いつもと変わらず揺るぎない。

「……フッ」

ざわついていた心が、いつの間にか凪いでいる。視界がクリアになる。

（そう――私は狩人。『十強』の一員）

やるべきことを、なすのみ。

城門をくぐった彼女の眼は、ただ白い空を見据えていた。

明け始めた白い空。しかしその色彩はここ数日より明るく、重苦しく国を鎖していた雪は、それまでが嘘のように、止んでいる。

「…魔力の流れが止まってるさ」

スーザンが地面に触れながら呟いた。

「その意は？」

「国全体に生気を奪い、結界維持の為に魔術環に流してた魔力を全部回収、こっから南東三キロのとこに一極集中。…本気だねぇ、あの魔族サン」

「だから雪も止んだんか」

「そ。戦闘面では有難いんだけど…」

「前段階が面倒だな」

「…ま、あのガキどもがなんとかすんだろ」

ゼーテが頭の後ろで手を組んで、大あくびをかます。剣士の男がにやりと笑った。

「ゼーテにしちゃぁ随分入れこんでんなぁ。気に入ったんか？」

ゼーテは答えず、鼻を鳴らすに留めた。スーザンが明るく言う。

「あたしたちは魔族担当じゃないじゃないさ。魔族はあっちに任して、こっちもやることやろうよ」

「そやな」

「だな」

「やるだけやろうや」

背後の仲間達の会話を聞きながら、ゼーテは軽い郷愁を思い出す。

――いつの頃からか、人をも手にかけるのを躊躇わなくなった。狩人になる前から――大人になる前から。

ふっと息を溢して、止めていた歩みを再開する。…そんな郷愁に、今更意味はない。魔族討伐を掲げてこの国に特攻してきた狩人達一人ひとりの顔を思い出す。

（俺達は必ず生き残る。そっちも死ぬんじゃねえぞ――）

「すげえ不安。なにこのちゃちな剣」

城門前に座り込んだジョンは、手にした剣に嘆いていた。彼の没収された愛剣の代わりは、余りにも貧弱に見えた。

「折れたらどうしよ」

「そのためにマルセロさんと私が武器運んでるんじゃないですか」

苦笑したのはマシューだ。一般的な治療術士として、戦闘能力を持たない彼は、武器の補充と結界維持担当を仰せつかっている。治

療は、マルセロの方が身動きが取れ、大雑把と引き換えに速度が早いため、彼が担当する。他、カミラも基本結界維持だ。

「ヨセフー、なにそんな難しい顔してんだ？」

エドガーの問いかけに、ややあってヨセフは先のスーザンと同じことを述べる。エドガーは肩を竦めた。

「んなこと言っても、やるっきゃねーよ。対抗出来んの俺達しかいねーし」

「…そうなんだけど、な」

どうにも嫌な予感がするのだ。国中に充満していた吐き気を催す黒い魔力がなくなり、少しだけ鋭敏さを取り戻した感覚が、…警報を鳴らしている。鳴らしているのに、それが何かがわからない。

だがそれらをヨセフは呑み込んだ。

やるしかない。それだけは確かなのだ。

「始まるぞ」

彼らがリーダーの声を受けて、大きく深呼吸してヨセフは立ち上がった。

「なんかウソみてーだなぁ。俺達がこんな、国の戦に関わるなんてさぁ」

エイトはずらりと整列した軍を眺めて、隣に立つリリアに声をかけた。だが、いっこうに反応がないのを訝しく思って、身を屈めて小柄な彼女の顔を覗き込む。

「リリア？」

はっと前を食い入るように見ていたリリアの亜麻色の眼が我に返ったように瞬き、ついでごく至近距離に映った顔に、半ば条件反射でアッパーを入れた。

「ぐっふぅ！！」

腕力のない少女からとはいえ、急所をつく攻撃にエイトは否応なく顎を押さえて蹲る。

「り、リリアひどいぞ…」
「そんな近くにいるのが悪いのよ」
「俺のせいかよ！？俺はお前がぼーっとしてたから…って、そういやなんでぼーっとしてたんだ？」

リリアはひゅっと息を呑み、数秒迷った後、なんか、と呟くように言った。

「なんか、変じゃない？ハワードとカミラとユーリス」
「へン？」

先程のリリアの視線の方向には、確かに彼らの仲間である若者達が佇んでいる。別になんの差異もないように見え――しかし、微かなものが引っかかった。

「ヘンよ。口数も少ないし、雰囲気怖いし、それに…」

言いかけて、リリアは言葉を呑み込んだ。

「それに、なんだよ？」
「…いい。アンタにいってもわかんないわ」
「なんだよそれ！？俺がバカってことか！？」
「そっちにいっちゃうあたりがバカたる所以よね」
「がーっ！！」

喚くエイトを余所に、リリアはハワードをじっと見つめた。なにか言葉を交わしていた彼は、最後にこの場に現れた『ヘキサ』の二人を見るなり、足早にそちらへ向かっていく。

（なにも、ないわよね、ハワード…？）

「リディさん」

集合場所に着くなり声をかけられ、リディは少し驚いた。声をかけてきたのはハワードだった。

「なに？」

「これ」

礼儀としてか少し距離を取って眺めてくるルイスを横目に、リディは促されて指貫きの手袋に覆われた掌を差し出す。そこに、鈍い銀色を示す首飾りが落とされた。

「…なに」

「差し上げます。それ、スーザンさんに教わって、防御魔術を織ってみたんです。ユーリスに魔力借りて」

「なら、自分で持っといたら？君魔術に対する防御策もってないだろ」

聞き耳を立てていたテディーは、あまりといえばあまりの鈍さに肩を落とした。いくらなんでも酷すぎる。

だが、ハワードは微笑んだ。

「僕は補助ですが、貴女は直接魔族と対峙するんでしょう。ならば、必要性が誰にあるかは、自明ではないですか」

リディはふむと考えた。確かに一理ある。まあ別に、受け取ってはいけない理由もない。

「じゃ、貰うよ。君も気をつけて」

「ええ」

ハワードに背を向け、首に鎖をかけた瞬間、――ほんの一瞬肌が

総毛立った感覚を覚えたが、他人の魔力だからかな、と気にも留めなかった。

「ルイス、クラウディオとツェツィリアまだ？…ってどしたの」

「……」

ルイスは不機嫌そうな顔で、ハワードの後頭部を睨み付けていた。

「ねえってば」

「…別に」

ふいとルイスは顔を背けると、立ち上がったジョン達の方に歩いていく。残されてたリディは不可解ここに極めりといった表情で立ち尽くす。

「…なんだっての？」

「オレはお前の鈍さがなんだっての？だぜ、リディ・レリア」

すり抜け様テディーが肩を叩いていき、マルセロも意味深な笑みを残していく。ルネが無言でリディの袖を引いた。

「……なんなんだよ」

リディは首を傾げながらも、ひとところに集まる狩人達に合流すべく、ルネと一緒に歩いていった。

「…揃ったな」

集った狩人達ひとりひとりの顔を見渡し、ジョンは口火を切った。

「――予定通りに行けば二刻後、開始だ。でも予定ってのは崩れるもんだから、ズレが生じるのは覚悟しといてくれ」

各々が了承の反応を見せるのに頷きを返し、彼はルイスを見る。

「わかってると思うが、一番危険な役回りはお前らだ。――任せるぞ」

「誰に言ってる」

不敵にルイスは笑って、ヨセフ、ルネ、テディー――最後にリディに視線を移した。

「やるべきことはもうやってある。あとは手筈通りに進めるだけだ。…全員、調整は済んでるか？」

「当然だ」

「……」

「大丈夫」

それぞれ肯定を返してきた三人に頷いて、ルイスはジョンに言った。

「オーケーだ」

「…よし。じゃ、最後にひとつ」

彼は順繰りに狩人達の眼を見ていき、あらゆる何かを込めたような低音で、言った。

「――死ぬなよ！」

一瞬の沈黙の後、切れのよい応答が一斉に響き、それに地を蹴る音、馬に跨って疾駆し始める音が続いて、１６人の狩人達は己の役割を果たすべく駆けていった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――イグナディア国軍。

副司令官を任じられたエイブラハム・ジードスは難しい顔で、立ち込める霧の中、前方を進軍する自軍を眺めていた。

「ジードス様」

「なんだ」

「もう間もなく、リッジ湖に着きます。湖を超え次第三隊に分かれ、天幕を張りますので、総司令官と共にご待機をお願いいたします」

「わかった」

総司令官は、今は軍の先頭を歩いている。自軍の士気を高めるた

めだとかなんとか言っていたが、エイブラハムは彼が単に威を見せつけたいのだと知っていた。

（…全く）

国王も、なにを考えているのか。

ここから先の街に潜伏しているという、第三王子を核とした逆軍の兵力は、今進軍している彼らの三分の一に満たない。しかも、相手は寄せ集めで、統率もなにもあったものではないという。

しかも、だ。

エイブラハムはちらりと上空を見上げた。

辛うじて視認できる高度に浮く、異形の影。常ならば即時戦闘態勢並びに殲滅作戦に至る相手であるはずの魔物が、悠々と自軍と共に飛んでいる。

小規模ながら、常人でもそれとわかる禍々しい気を振り撒いて飛行する魔物達のうち、一体の背には、更に忌避すべき存在――魔族が乗っている。なんでも、カルライカの狩人を屠るためらしい。

エイブラハムはかの魔族を数度、城内で見かけたことがあった。正に人外の美貌を見せつけて歩くその姿に、エイブラハムは惚けるより先にぞっとしたのを覚えている。まるであれは、蜜の代わりに毒を滴らせる、忌まわしい食虫花だ、と。

王が恐怖政治を敷いているのは今に始まったことではないが、あの魔族が現れてから三ヶ月は、箍が外れたようですらあった。王は、ワンマンではあるが馬鹿ではない。かつてなら、二国同時に攻め込んだ上更にその先まで侵攻、など狂気じみたことは言わなかったはずだ。

（あの魔族の目的は、なんなのだ）

この国のため、ではない。絶対にない。しかしならば、他国から隔離するような結界を敷いてまで、協力をする――？

答の出ない問いに、エイブラハムが眉間に皺を寄せた時だった。傍をゆく魔術士が声をかけてきた。

「間もなくリッジ湖にさしかかります。罠の可能性もありますので、結界を張りますが、ジードス様もご油断なきよう」

つまり先頭は既に、この広大なリッジ湖を半ば以上横断しているということだろう。

「――うむ」

エイブラハムは拡散する思考を振り払い、馬上から前方を見据えた。

――と。

「――む」

「霧が晴れた…？」

視界を覆っていた白。ただでさえ凍りつくような寒さの中なのに、さらにひんやりとした感覚を伴って辺りに立ち込めていたそれが、急に退いたことにエイブラハムは眉を寄せた。

「霧が斯様にすぐに晴れるものか？」

ざわざわと軍全体からもざわめきが生じ、それを叱る声もどこか浮わついている。魔術士が呟いた。

「…不審ですね。しかし、罠と考えるには、規模が広すぎ…」

しかし、その言葉は、途中でビシビシという異様な音に遮られる。エイブラハムは剣に手をかけて辺りを見回し、直後はっとしたように馬の足元を凝視した。

足元の、固く分厚い筈の氷に亀裂が走っていく。同時に気付いた魔術士が呻くような声を漏らした。

「ま、まさか…」

次の瞬間、轟音と共に、湖に張った氷が割れ砕けた。

「お見事、テディー」

「…簡単に言うなっつーの」

湖の中央部の上空に、彼らは立っていた。眼下の霧はすっかり晴れ、氷の割れた湖は、阿鼻叫喚の様相を呈している。

「ヨセフ、リディ、温度は」

「平気。風邪は引くかもだけど、泳げさえすれば死なないだろ」

彼らの計画はこうだった。

まず昨日、分厚く氷の張った湖全体に、魔力だけで魔術環を描く。数ヶ所に要を設置し、特定の手順を踏まなければ壊れないようにした。

そして今日、五千近くの兵騎馬が氷上を進軍するという、超規模の負荷が氷にかかった時を狙い、仕組んだ魔術環を発動。狩人の中でも上位に位置する四名の魔術士と核の力によってもたらされた膨大な魔力、そしてテディーによって、とどめともいえる中央の要への射撃が行われ、呆気なく氷は砕けたのだ。

また、湖の温度も同時に上昇させてある。せいぜい、夏の湖くらいの温度にはなっているはずだから、武器鎧を諦めさえすれば、湖の多い国の兵士のこと。反乱軍の兵達も、一定の時間を置いて救助に回る予定であるし、助かるだろう。

（それでも百単位で死ぬだろうけど、な）

当初反乱軍の騎士をはじめ、リディや『ジィ』といった面々は、そんな面倒な救命措置を取らず、まとめて殺してしまえばいいと主張した。それを止めたのはアドニスや文官達だ。

今は敵とはいえ、自国の兵である。それを失ってしまうには余りに数が多すぎる。生温いと言われるのを覚悟してそう主張したアドニスに、騎士団は黙って引き下がり、リディ達も肩を竦めて引いた。

「ルイス！」

その時、回想していたルイスの耳に、リディの鋭い警告の声が届いた。

声と同時に反転したルイスは抜いた剣で、飛来した魔力の塊を弾く。

嘲り声が響く。

「よく逃げずに来たわね」

「どこに逃げる理由があるのかお聞かせ願いたいね」

ルイスの隣ですらりと剣を抜いたリディは、眼前の、空を飛ぶ魔物の背に立つエカテリーナに切っ先を向けた。随伴する三体の魔物が、毒々しい体表を見せつけるように威嚇してくる。

「…人間ごときが、私に勝てるとでも？」

「それがオレ達の仕事なんでね」

ゆらりと大気が動く。四人分の魔力と、人ならざるものが発する邪悪な力が空中でぶつかり合った。ルネがテディーの腕を掴んだ。

エカテリーナが怒りて歪んだ笑みを浮かべ、掌に怖毛をもたらす程の魔力が凝縮する。

「…いい度胸に敬意を表してすぐには殺さないであげるわ。精神が狂うほど苦しんで絶望して後悔しながら逝きなさい！！」

怒声と共に、一直線に打ち出された闇魔力。ルイスが聖魔力を纏わせた剣でそれを叩きききると同時に、ヨセフ放った水の塊を一瞬でリディが炎で蒸発させ、更に雷魔術を打ち込む。

盛大な爆発音と同時に、爆煙が立ち上って視界を覆う。ルイスが叫んだ。

「行くぞ！」

狩人達が空を蹴る。唯一風魔力を持たないテディーは、ルネとの長年のチームワークで身を翻していた。

背を向けた煙の中からどす黒く染まった声が追いかけてくる。

「…逃げるつもり？逃がすものですか！」

それを横目で振り返り、足を緩めずヨセフは小声で傍らの二人に言った。

「リディ、ルイス、予定通り迎撃は任せるからな」

同じく速度は緩めぬまま、二人の若者は不敵に笑う。

「任された。道間違うなよ、ヨセフ」

大空を、再度爆発音が揺るがした。

「そろそろかしらね」

クラウディオ、ハワードと共に木の陰に身を潜めているツェツィリアは、中天を見上げて呟いた。

戦闘開始から凡そ二刻。予定通りなら、そろそろこちらに仲間達が魔族を引きずって現れるはずだ。

「……」

クラウディオは無言でひたすらじっとしている。姿は見えないが他の狩人達も同様にしているはずだ。その時、

「……。――！」

はっとツェツィリアは目を見開いた。伝わる波動。魔力持ちにしかわからぬ巨大な振動が、肌の産毛を総毛立たせた。

「ディオ、ハワード」

「……」

クラウディオからは無言の頷き、背後のハワードからは剣を鞘から抜く音が返ってくる。

「移動が始まったわ。あと五分…」

「なら、こちらもそろそろ始めましょうか」

虚空に響いた、空間に不釣り合いな楽しそうな声。
それに一瞬思考を止め、ばっと振り返ったツェツィリアの眼が映したのは、鈍く輝きながら降り下ろされる、鉛色の切っ先だった。

第十一話　崩壊の鏑矢　（9）（後書き）

用兵に問題点が山積してるのは自覚してますが、どうかお見逃しを…。

怪しさを指摘されてた彼らについての詳しくは次回。

次話はなるべく早く更新しますね。

第十一話　崩壊の鏑矢　（１０）

第十一話　崩壊の鏑矢　（１０）

ぱっ、と白の世界に赤が散った。

「痛っ……！」

咄嗟に飛び退いたジョンは、切り裂かれた肩口を押さえ、痛みに顔を歪めながら片手で剣を構えた。

「ジョン！」

悲鳴を上げて駆け寄るマシューを目で制し、ジョンは低く問いただした。

「これはどういうことだ？――ユーリス」

「どうもこうも、こういうこと」

右手を染める血を舐めながらユーリスは嗤う。嗤ったその貌は、血とあいまって覆しようもなく異形じみている。

別の場所から同様に血を落としながら、エドガーが飛び出してくる。その後ろから、カミラも姿を現した。返り血を散らしながらにこやかに笑むその姿は、どうしたっておぞましさを喚起させる。

「残念ですけれど、わたくし達、人間ではありませんの。あなた方の分類でいえば、上位魔物――というところになりますわね。ただし」

「――ディオ！！」

甲高い女の悲鳴が場を打った。

「そんなっ、ディオっ…！」

「ツェツィー、ディオ！」

身を潜めていたマルセロが飛び出し、クラウディオ達が潜んでいた方向に走っていく。そのあとには、愕然と眼を見開いているエイトとリリアがいた。カミラが嗤う。

「――エイトさんとリリアさんは、違いますけれど」

「カミラ…？」

驚愕と恐怖。否定と疑い。それら様々な感情に顔を占められたリリアが、震える声を上げる。

「うそ、でしょ…？カミラ、ユーリス、」

「嘘じゃないよ、リリア」

いつの間に、背後に移動していたのか。手に提げた鉛色の剣に鮮血を纏いつかせて、ハワードが彼女を見下ろしていた。

壊れた人形のようにぎこちない動きで彼を見上げてくる少女に、ハワードはそれまでと変わらぬ――それでいて何かが決定的に違う優しい笑みを向けた。ゆらりと剣先が持ち上がる。

「ハワー…」

漏れた囁きを待たず降り下ろされる鈍い輝き。少女の頭をかちわろうとしたそれを、すんでのところで広い刃が防いだ。

「おや、エイト」

「…ハワードッ…！！」

ギリギリと迫る剣を押し返しながら、エイトは呻いた。茶色い瞳に縋るような色が込められる。

「嘘だろ…嘘だって、いってくれよ！」

「嘘じゃないって言ったはずだよ、エイト」

低い金属音と共に、合わさった剣が外れる。同時に、エイトの頭上高くを宙返りしてすとんと白の大地に降り立つ。――高度、身のこなしからですら、人間でないことをまざまざと突きつけられ、エイトは顔を歪めた。それからはっとする。

「ていうか、お前、その血っ…！」

「いや、さすが十強だよね」

肩を竦め、ハワードは視線を移す。思わずそれを追って、エイトは愕然と眼を見開いた。

「クラウ、ディオさんっ…！？」

筋肉質の治療術士に支えられて片膝をついている男。――あるべきところ、肘から先に、左腕がない。

あれでは、もう――…

「大したものですよ、クラウディオ・ガウス。魔族の僕の不意打ちを、しかもツェツィリア・クロノヴァの首を落とすべく狙った一撃を左腕一本で防ぎ、僕に掠り傷とはいえ傷を負わせるなんて」

よくよくみれば、ハワードの頬に一筋の赤い傷が走っている。

しかし、それよりも――。

「魔族、だと…」

潰れたような呻き声が、ジョンの喉から漏れる。

ユーリスが愉快そうに肯定した。

「ハワードが魔族だから、僕らも魔力を隠し通せたのさ。でももう、いいよね」

ぶわりと溢れた魔力。カミラとユーリスは姿形こそ変わらなかったものの、どうしたって拭えない禍々しさが身を包み、ハワードに至っては様変わりした。

全体の容貌こそ変化はないものの、眼からは白眼が消え、深い赤が面積を占める。顔立ちはベースを残しつつも空恐ろしいほどの美貌に作り変わり、肌は色が抜け落ちたように白くなった。そして血にまみれた剣をぽいと捨て、虚空に翳した手には、大鎌が生まれる。

彼の背丈ほどもあるそれを、ハワードは慣れた様子で繰り、悠然と狩人達に向けて構えた。エドガーが呻いた。

「魔族二体に上位魔物二体かよ…！冗談キツいぜ…」

「でも、やるしかないわ」

血と涙で顔を汚したツェツィリアは、しかし決然と立ち上がる。黒い眼には、紛れもない殺意が浮かんでいる。

「…そうさな」

ジョンも頷いた。

「それが俺らの仕事だ」

じり、と殺気で空気が焦げ付く一瞬。そして火蓋は、切って落とされた。

「――ッ！？」

「――なんだ、この気配！？」

空を疾るヨセフとルネは、目指す場所から伝播してきた波動に期せずして狼狽した。

「……？」

二人ほど鋭敏な魔力感知は出来ていないテディーですら、毛が逆立つような厭な気配に眉を寄せる。

「リディ、ルイス！なんか変だぞ！」
「わかって…るっ！」

ゴッ、と迫る闇の塊をルイスが結界でなんとか防ぎ、リディが蛇を模した火の魔術を放つ。それで飛びかかろうとしていた魔物を追い払うことに成功して、リディは後ろ飛びに速度をあげる。

「向こうがやなもんと遭遇したかな…！」
「やなもんてレベルじゃねーぞ、これ下手したら…！」
「哀れなものね」

不意に近くから響いた嘲り声。反射的にリディが向けた刃先に魔術が激突し、呆気なく砕け散る。

「げっ…」
「攻守交代だリディ！」

再度魔術が交差する。ひたすら疾るルネは、

（あとちょっと…！）

と速度を上げる。

待ち伏せ場所につきさえすれば、クラウディオ達がいる。あとはなんとかなる。

愉悦を交えた魔族の女の声が、彼女の背に追いついたのは、目的地の上空に一行が辿り着いた時だった。

「あなた達は信じるものを疑おうとしない。その愚かさで、希望は

容易く絶望に代わるのよ」

一瞬、何もかもが停止した。

「……え？」

呆然と、ルネの喉から音が漏れた。

なにが、起こっているのか。

なぜ、『シルバーダガー』と、ジョン達が戦っているのか。

なぜ、クラウディオが参戦していないのか。

なぜ、クラウディオの周りに赤い血が落ちているのか。

「――ッ！」

「クラウディオッ！」

吊り糸が切れたようにルネが急降下し、テディーも絶叫してそれに引っ張られていく。

「どういうこと！？」

混乱を隠せないリディの問いには、おかしくてたまらないといった様子のエカテリーナが答えた。

「あなた達が仲間と信じていたハワードは、私の同族よ。カミラも、

ユーリスも、吸血鬼（ヴァムピール）の中でも上位に位置する魔物」

音のない衝撃が上空の三人を襲う。立ち直りは、ルイスが一番早かった。首を振って状況を整理し、強引に平静さを取り戻して指示を下した。

「――仕方ない。ヨセフ、お前は下の援護にいけ。こいつは俺とリディで殺る」

「あ、ああ…」

「いいのかしら？」

くすくすと嗤いながら、エカテリーナは眼下に向かって何らかの仕草をした。その途端。

「ぁぐっ…！！」

リディが悲鳴を上げたかと思うと、魔力の制御を失ったのか、真っ逆さまに地上に向かって落ちていった。

「リディ！？」

驚愕したルイスが追うよりも早く、彼の胸元から小さな白い獣――ネーヴェが飛び出す。

風圧を無視しているとしか思えない速度で落下するリディに並んだネーヴェに、空恐ろしい程の魔力が収束し、次いで弾けたそれは、リディが地面に激突する寸前に受け止め、ふわりと地面に下ろした。

「え゛？」

場違いな声を上げたのはヨセフである。それもそうだ、彼はネー

ヴェをただの小動物だと信じているのだから。

「忌々しい、蜥蜴の子が…」

「ヨセフ、話はあとにしてくれ。あと悪いけどこっち付き合え」

エカテリーナの不機嫌な声を遮りルイスは言い、耳のピアスに意識を移してリディに呼び掛けた。かくいうルイスもかなり驚いてはいたが、今はそれどころではない。

「リディ、大丈夫か」

返答まで数秒間があった。

『な、んとか…』

応じた声は相当苦しそうで、ルイスは眉を寄せる。

「なんでそうなったか、わかるか?」

『た、ぶん…出掛けにハワードに渡された、首飾りに…なにか、仕込んであったんだ、と思う…体が重くて、動かな…』

「っ、あれかっ…」

ルイスは臍を噛む。干渉はよくないと思ってなにも口を出さなかったのが仇になったか。

「おいルイス、」

「ネーヴェ、リディを頼む。リディのフレイアが一番強いだろう、借りて結界張れ。――守ってくれ」

『ぴゃ!』

任せてくれ、というような威勢のよい返事、同時に眼下で炎が吹き上がり、上空を滞空していた魔物を一体消し炭にした。

「…さて」

深呼吸して、ルイスは剣を青眼に構える。物凄くもの問いたげだったヨセフも、一呼吸で意識を切り替え、精神をなだらかに、魔力を縒り合わせていく。

視線の先で、エカテリーナは相変わらず嗤っていた。

「わざわざ待ってくれてどうも。その余裕が命取りだがな、エカテリーナ」

「ほざきなさい。貴方達が終わったら、あの忌々しい蜥蜴の子共々、後を追わせてやるわ」

「できねーよ。俺達がさせねえからな」

冷たい汗を感じながらもヨセフは唇を吊り上げる。…当初の予定ならば、三パーティ総出で、安全を最優先に戦うはずだった。だが、まさかの魔族相手にたった二人。規格外（ルイス）がいるとはいえ、無謀にもほどがある。

けれど。

（ま、いいか）

ここでたとえ死んでも。悔いはない。ここでこの女を食い止めることで、ジョン達が生き延びる可能性が少しでも上がるなら。

「行くぜ、ルイス」

ちらりと横目で振り返ったルイスは、ぼそりと呟いた。

「…俺は諦める奴は嫌いだぞ、ヨセフ」

ぱちくりとヨセフは目を瞬き、次いで思わず吹き出す。

こいつは何も変わらない。貴族であっても、なくても。彼（ルイス）という一個人であることには、何ら変わりがないのだ。

「お前に好かれたいと思った覚えはねーぜ。――まぁ、」

悪くはないけどな、という呟きは押し込めて、ヨセフは空中に無数の氷刃を生んだ。

湾曲した刃が頬を掠め、ついでに髪の数本を奪っていく。残像が見えるようなそれにわき上がる怖気を振り払い、ジョンは踏み込むと幅広の剣を振った。

そこらの魔物なら即座に一刀両断せしめるその刃は、しかしあっさりと空を切る。更に後方から放たれた幾本もの矢、そして魔術をも、対峙する少年――ハワードであった魔族は、残らずかわしてみ

せた。

「――チッ」

「やりますね。流石は『十強』というところでしょうか」

応えず、ジョンは辺りを探った。彼の半歩後ろにはツェツィリアが油断なく構え、少し離れた後方には、エドガーとルネがそれぞれ弓を構え、魔術に備えている。

マルセロとテディーは、ユーリス、カミラであった魔物と戦っている。マシューはまだクラウディオの治療をしているようだ。

（後の三人は）

意識は向けられないが、恐らく空を翔けてエカテリーナと戦っているのだろう。たまに撃ち落とされた魔物の咆哮が聞こえてくる。

「お前はこの筋書きを最初から立ててたのか、ハワード？」

「ええ。いい能書きでしょう？」

微笑むハワードに、やりきれないものを覚えながら舌打ちする。趣味の悪さは魔族の仕様なのか。

「ジョン！」

ゆらりとハワードが姿勢を変えたのを見たエドガーの警告を聞くとほぼ同時に、ジョン、そしてツェツィリアは飛び出した。中途放たれた魔力の塊はルネに相殺させつつ、ジョンは大きく踏み込んで、鋭く突きを放った。しかしガキン、と弾かれ、逆に態勢を崩した。

「げっ」

そこを容赦なく鎌の刃が薙ごうとするが、寸前、頭上を飛び越えていったツェツィリアが背後から切りかかったことで未遂に終わる。
そのままツェツィリアと数合切り結び、再びジョンと刃が交わる。
間断無い二人からの挟撃に、ハワードは打ち据えられこそしないものの、反撃出来ずに防戦一方を余儀なくされる。

「……く」

不機嫌そうに顔を歪め、ハワードは魔力を放出し無理矢理距離を取った。

「おかしいねえ」

追撃をすることはせず、ジョンは皮肉っぽく揶揄する。

「ルイス達の話じゃ、魔族ってのはもっと人間をクズみたいにいたぶれるんだと思ってたがな」

致命傷を負わないようにルネの結界を身にまとい、深追いしないことで隙のないコンビネーションを保ち続ける相手に、ハワードは鼻を鳴らした。さすがに手練、狩人として長いだけはある。

「あの二人が戦ったのはセティスゲルダ様でしょう。あの方は我らとは違う」
「ほお？」
「あの方は我らとすら一線を画しています。遥か太古、それこそ人間達の王共より前、今を生きる竜達の多くよりも昔から、あの方はこの地を生きている。私達魔族の中でも、いや、人ならざるもの達の中でも、あの方のように原初から見ている者はいません。…あの

方と、竜の女王のみが、全ての始まりを、人の王族の血の因果を知っている」

「……はい？」

唐突な長口舌に目を点にしたジョンに、失礼、とハワードは笑った。

「あなた方に話しても仕方の無いことでしたね。要するに、同じ魔族とはいえ、僕とセティスゲルダ様とでは天と地ほどの差もあるということです。…まあだからといって、人間ごときにやられる道理は、ありませんがね」

後ろから、短い悲鳴が響いた。

「ルネ！？」

ツェツィリアがぎょっと声を上げ、思わずジョンも意識をずらしてしまう。それと、ルネの張った結界が消失するのは、同時だった。

はっとジョンが気付いた時には、間合いの内側にハワードの褐色の髪がひらめいていた。

「――さようなら」

雪原に赤が、散った。

「つ……せっ！」

飛来する闇の魔力の塊を、渾身の力で弾き返す。そのまま身を屈めれば、背に守っていたヨセフが氷の刃をエカテリーナ目掛けて打ち出した。

直進する刃は、しかしエカテリーナの再度の魔術によって砕かれる。が、ヨセフは魔力を操りながら叫んだ。

「まだだっ！」

砕かれた氷の砕片が、ゆらりと空を漂って散らばり、一瞬後エカテリーナに殺到する。

「小賢しいわね」

憎々しげに言った魔族は、手の一振りで黒い魔力を身に纏い、放たれた砕片を消失させる。が、それをすり抜けたいくつかの欠片が、細かい傷をその体につけた。エカテリーナの顔が歪む。

「…ただの人間ごときが！」

怒声と共にヨセフに殺到した闇魔術からは、ルイスがヨセフの襟首を掴んで空を翔ることで逃れた。

安全地帯まで逃れてから、ルイスはちらりとヨセフを見下ろす。

「腕上がったな」
「何様だ、お前」

吐き捨てるヨセフの顔は、かなり青白い。魔力の使いすぎだ。残っている魔力も、もう少ないに違いない。

（下がってろ、とは言えねえし）

この状況でそれは自殺行為だ、自分の。
しばし黙考したルイスは、溜め息をついて青玉の耳飾りを外し、ヨセフの手に落とした。

「…なんだ？」
「貸してやる。大事なもんだから、絶対返せよ」
「は？つかこれな、に…」

訊きかけたヨセフの声を尻目に、ルイスは空を蹴る。
ちらりと眼下を見れば、戦いを繰り広げているマルセロ達が視界に入る。

（…誰も、死ぬなよ）

唇を噛んで、彼は再び剣を振り翳した。

「ジョン――！！」

ぼたぼたと、赤黒い液体が白い大地を穢すがごとく、容赦なく流れ落ちる。

ジョンの、食い縛られた歯の間から、掠れ詰まった音が漏れる。

「こ、の…」

「おや…急所を外しましたか。さすがですね」

にこやかに笑ったハワードは、目の前の巨駆の下腹を貫いていた鎌を引き抜き、飛びずさり様大きく振る。エドガーが放った矢を叩き落とした軌跡が、雪原に歪な赤い模様を作り出した。

「ジョン！」

駆け寄ったエドガーに、ジョンは口元から血を流しながら呻くように訊いた。

「ル、ネ、は…」

「…無事だけど、気を失っちまってる。地中に魔物が潜んでたんだ」

「そう、か…」

無事ならば、いい。

ふうっと吐き出した息が、血を伴って空に散る。エドガーの悲鳴すら、どこか遠い。

（寒い、なぁ…）

痛いという感覚は、摩りきれたがごとくあまり感じない。だが、腹だけが熱く、他は凍えるように寒かった。目の前が暗くなっていく。

（死ぬ、のか…俺）

歪んだ視界に、たったひとりハワードに対峙するツェツィリアが映る。もう魔力も少ないだろう。

「エド、ガー…、俺は…いい。ツェ、ツィリアの、とこ、に…」

「ジョン！死ぬな！やめてくれ…ッ！」

もういい年のエドガーが、あんな声で叫ぶのを聞いたのは、いつぶりだろうか。

霞がかる脳裏に、そんな思考がふと浮かび、ジョンは苦笑した。全ての感覚が、光が遠ざかる。

それと反対に、今までの人生が、出会った人間の顔が、次々と浮かび上がっては消えていく。『十強』の面々、特に印象深い黒髪の青年と赤い髪の少女の飄々とした顔がはじけて消える。最後に、半生を共に生きた仲間達が浮かんだ。

手を伸ばし――ふ、と笑む。

（お前らは、生きろよ…）

とぷりと沈んでいく闇の中で、消えたはずの温かい光が、見えたような気がした。

第十一話　崩壊の鏑矢　（１０）（後書き）

少し蛇足な説明をば。

当初の下書きでは、シルバーダガーには殆ど焦点を当てていませんでした。当てていないのにこの展開を持ってきていたので、推敲段階でこの流れは面白くない、と思い、物語の端々にエピソードを加えました。それでもびっくり感を出せたかって言うと、ちょっと強調しすぎてさっさと見抜かれていた感が否めませんが…。力不足を痛く感じます。

エカテリーナがイグナディアに入り込んだのより少し前、ハワード達は狩人登録をしました。その頃から目論んでいた、という設定です。閉ざされた国でもなければ、例の人に邪魔されるので。

エイトとリリアは人間です。

気づけばこの話も十話目。どんどん一話あたりの話数が長くなっていくのに冷や汗を感じています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7086j/

Eudelcia -竜の棲む島-

2011年10月8日01時11分発行